

ろくでなし東方

ほろ酔いちやん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

所持金……マイナス一千万!!!

博打好きでその日暮らしの最悪な人生を送る不良妖怪退治屋の貴子。

怠惰で自堕落な彼女はある日、借金のツケで身売りに出されてしまった。

そして成り行きで悪魔の館だとか幽霊の屋敷だとかに厄介になり、そこで暮らす人妖達の面白かったり切なかったりの様々な苦悩と出会おう。

その悩みをどってん解決!!!出来るわけもなく、どちらかと言うと事を悪化させてしまう。

そんな人間なのだが、最後にはきつとバシツとキメてくれる……はず。

愉快で白熱の奇妙な人生譚

目次

第一章 紅魔郷編

こんな人生って幸せ? | 1

泣いちゃったぜ咲夜 | 50

こんな人生って幸せ! | 84

小話の紅魔 | 108

第二章 妖々夢編

話の長い閻魔様 | 121

黒歴史を掘り返す奴ら | 171

死んでからと言うものの | 199

春来 | 231

春過ぎて | 263

第三章 永夜抄編

大雨時行 | 285

無理が通れば | 319

傍迷惑 | 347

人間失格 | 379

妖怪失格 | 407

リザレクション | 437

カグヤ・マグラ | 472

月が落ちたら運の尽き | 509

月が太陽を照らす | 532

ロマンスの夜明け | 559

その日暮らしがなく頃に | 602

第四章 花映塚編

平和な空の下

657

告白と筋トレはサンセット

682

最後の最初

706

腕砲折

731

シケモク

756

ろくでなし

779

第一章 紅魔郷編

こんな人生って幸せ？

第一章 紅魔郷編

一人ひとりに天の使命があり、その天命を楽しんで生きることが、処世上の第一要件である……。

これは、外の世界で日本資本主義の父と呼ばれて崇め祭られている
渋沢栄一の言葉だ。

立派で有能な彼曰くこれが幸福の定義らしい。

詳しい意味はよくわからないが、なんでも自分の使命を楽しめって
ことだそうさ。

……やっぱりよくわからん。

兎も角こういった、幸せとは何たるかを説く名言ってのはこの銀河
の星の数にも負けぬほどに多い。

それだけ人は、皆誰しもが自分だけの幸福観を持っている。
だがしかし、だ。

私は今ひとつその現状に良い感情を抱くことが出来ない。

『幸せって一体全体何ですか？』という古来から続く未解決の問題。

その命題の解は上にあげたようなものが数多だが、どれも私にはあ
まり納得できないものがほとんどだ。

前述した渋沢栄一は、己の天命を楽しみながら全うすることこそが
幸福なのだと言ったが、それに則って考えると私にとって
の幸福は自殺という事になる。

何故か。

理由は単純だ。

道行く民衆にこう聞いたとする。

「私のことをどう思うか」と。

それを聞いた人間が千人いたら、千人ともが口を揃えて言うだろ
う。

アイツはだらしのない人間だ、立派とは真逆の低俗が服を着て歩いたような奴だと。

私は勤勉じゃないし、働き者でもない。

日々、少しの小銭を稼いではシヨボい博打に注ぎ込むだけのろくでなし。

勝てば良い気になって賭けが荒くなり、負けりや取り返そうと熱くなって賭けが大きくなる。

そうして一文無しになったら賭場に唾を吐きすてて、捨てるゴミすら無いような佻しい芒屋根の下に帰っていく。

皆は私をこう呼んだ。

オケラのクズ女と。

怠惰で自堕落な生活。

有るのはしよぼい酒としよぼい博打の毎日。

そんなダメ女にさて一体どんな天命が降りてこようか。

私が神なら即刻死を命じ雷を落とすし、閻魔なら無限地獄特別コースへご案内だ。

宗教には詳しくないが、きっと神も仏も仏陀もイエスもさぞお怒りのことだろう。

とどのつまり、死ぬ事がもつとも私の人生における幸福とされてしまふのだ。

なるほど、死ねば幸せになれるのか。

あえて言ってみよう。

ふざけんな。

幸せになるために死ねなんて倒錯的すぎる。

自殺で幸せになどなれるもんか。

死をもって人が幸せになれる事など何一つとしてないのだ。

畢竟するに宇宙が誕生してから、私が厠でやたらめつたら頑固な大便と格闘しているこの瞬間まで、私の捻くれた考えを唸らせ幸福へと導いてくれる方程式の解は証明されていない。

おそらくその答えは虚数解……即ち、 i (愛) なのだろう……。

閑話休題。

初めての主人公なので言ってみただけだ。

不可解なことといえども一つ、人はなぜ辛い時にどうでもいい事を考えてしまうのかって事がある。

その例の一つを私は今リアルタイムで現体験しているのだ。

私は今、手入れの行き届いていない薄汚い便器に跨りながら、赤子を生むときの様な切羽詰まった剣幕で必死にソフロロジー法を繰り返している。

そうしていると、耐え難い悪感の最中に渋谷栄一とかマザーテレサとかが有難くい説法をベラベラ語り出してくるのは何故なのだろうか。

当人たちも、糞をされながら思い出されては嫌に決まってるだろうに。

というか誰だつてウンコとは共演NGを出すのだ。

同じ事務所所属のオシッコだつて、何故かウンコと同時にには出てこない。

似た様なものなのに決まって出演時間をずらしてくるのは、きっとオシッコ側のチンケな自尊心の所為だろう。

あるいは周りのスタッフが気を遣っているのかもしれない。ダウ
ンタ○ンと、とんねる○のように。

もつとも、大と小が同時にでてしまったらそれはそれで気持ちが悪いが。

人間は基本的にシングルタスクなのだ。

不幸にも我々は個体と液体を同時に制御できるほどに、高度な進化をしていない。

一つに集中だ。

今で言うならば大きい方に全集中、ソフロロジーの呼吸、便秘でバリ硬である。

そうやってぐぬぬ、と長時間気張っていると、あの有名な雪だるまをつくる歌の気持ちがよくわかるような気がする。

今すぐにも「どうして、出てこないの」と歌い出したいくらいだ。
私の場合はアナルだが。

そんな一途で純情な私の気持ちに、この頑固で偏屈な大便はやつとこさ返事をしてくれた。

天岩戸に立て籠もった天照大神だって最後には祭りの喧騒に釣られて出てくるぐらいなんだから、下賤な私の糞がでない道理もないってことだ。

苦勞して産んだ我が子は可愛いというが、苦勞して出した糞もこれまた愛着が湧いてくるものなのかも知れない。

自分の鼻屑目も入っているだろうが、水飛沫を立てながら便器の水面に着水する様はさながらプールの飛び込み選手を感じさせるものだった。

私が審査員だったら文句なく零点を差し上げる程だ。

偏屈な雪の女王は、やつと私の元から旅立ってくれた。

やはり頑固な便秘にはソフロロジー法と、あなただけ見つめてると言いきれぬくらい大きな幼馴染ヒロイン並みの愛が不可欠である。

私が子供を産んだこともないし、どちらかと言えばオシッコ推しなのはここだけの秘密である。

いやはや、ここまで延々と講釈を垂れてしまった。

まるで下痢のように。

食事中の方、特に本日の献立がカレーだという方、毎週火曜日にカレーを食べなければいけない海兵の方には本当に申し訳ない。

下品で低俗な話から始めてしまった。

しかしトイレだけに水に流して欲しいものだ。

えっ？つまらない事を言うなって？

つまらない方が好都合ではないか。

だってトイレがつまったら困ってしまうでしょ？

くだらなくたっていいんだ。

腹が下ると辛いでしょ？

そういうことさ。

さて、尻を拭くためのちり紙は一回四寸までと決まっているので、なるべく綺麗に拭き取れるようにもつとも効率の良い吹き方を意識しないといけない。

廁の個室の壁に貼ってある忌々しい貼り紙。

『ちり紙は四寸まで』

これがまた厄介なのだ。

健康なバナナ型が出た時には無事に四寸で事足りるのだが、始末の悪いのは半分液体になっているのが出た時だ。

すべからくこの世界の資源不足を嘆くことになる。

幸いなことに今回は前者だったが、結構な割合でこのちり紙は四寸までという悪しき戒律を親の仇のごとく憎む事になってしまう。

私はソクラテスのように、無法も法だとは思えない。

したがって私は心の中で、いつかこの忌まわしい貼り紙で尻を拭いてやろうと決意している。

全くどこのどいつがこんな悪法を制定したのか。

煬帝もマリーアントワネットもビツクリの暴君だ。

??

ふう……。

廁から出ると、薄褐色の夕焼け空に燦然と輝く太陽が目刺さるようなほどに眩しかった。

便意に耐えかねてここに駆け込む前にも視界には入っていたはずなのに、何故か入る前よりも何倍も美しく感じる。

きっと、廁の積み重なってこびりついた悪臭と滝のような腹の痛み の両方から解放されたからだろう。

良い爽快感だ……。

新鮮な外の空気は吸うたびに幸せを感じられるし、何処となく心も踊る。

なんとも良い気分だ。んっん、一つ歌でも歌いたい気分だ。

ここは一つ、私の十八番の津軽海峡冬景色でも……。

「おいそこの姉ちゃん！ちいと面貸せやっ……！」

るーららー……：そーいや今日の晩ご飯は何にしようかな。

カレーは絶対に嫌だな。

視界の隅で強面のオッサンが何か叫んでいる。

どうせどこかの馬鹿が何かしたんだろう。

つくづくここらは騒ぎが絶えない。

「おい聞こえとるやろ!!お前やお前!!」

「まったく、やかましい。疲れてんだから静かにしてくれ……くわばらくわばら……。」

あ、今日は肉じゃがにしよう。

よし、そうと決まれば材料買って呑み屋へゴーだ。

自慢じゃないが私は全く自炊ができない。

だからいつも馴染みの酒屋へ行って材料を渡す。

そこで飯を作ってもらうのだ。

割高なのが玉に瑕だが、味は確かだ。

「おい!!聞こえてるやろ!!おい!!」

……マジでうるさい。

周りに私しかいないから良いもの……ん?

私だけ?

「……もしかして私に言ってます?」

「お前以外誰がおるんじゃ!」

うわマジか……私に言ってたのか。

こんな半グレヤー公の知り合いなんていないぞ。

「一体私に何の用ですか?」

「自分でわかつとるやろ!とぼけてんちやうぞコラ!」

「……貴方とはお付き合いできません!ごめんなさい」

「ちやうわ!誰があんなくっさいウンコした女に惚れるんじやボケ!

頭おかしいんとちやうか!」

「失礼な人……じゃあ何なんですか。私も忙しいんですけど!」

「どこがじゃ!……まあええわ、お前そんなアホな事言っつられる余裕ないぞ」

「……え?」

「え?やあらへんがな」

「……ぬ?」

「ぬ?ともちやうねん」

「じゃあなんですか!」

「何キレとんねんボケ。これやからフーテンは嫌いなんじや」

「むむ、これでも家はあるのに」

「あーそうけ。どうでもえーわ」

「ほいで、要件は」

「なんや偉そうやの。自分の立場分かつとんのか……まあええわ。なにも変な事とちやう。貸したもん返してもらいましょかつちゆう話や」

「……ゲームボーイ？」

「……もう無視することにするわ。わかるやろ？金や金、耳揃えて返して貰おか。」

「金ーああ、金ねー！わかりました……返しますとも。えー、いくらでしたっけ？」

「おおえらい物分かりええやないけ。人間、素直が肝心やな。せやなあ……とりあえず事務所来てもらおか」

「……そんなに寒いですか？今夏ですけど」

「大人が二人で立ち話。それが良くない。目立ちたないねん」

「ああなるほど。ええわかりました……返します。コツキリ返しますとも……また今度ー！」

「あっおいゴラアー！どこ行くんじやおおーい！」

私は逃げ出した！

……しかし回り込まれた！！

何処かへ連れて行かれた！！

私は目の前が真っ暗になった！！！！

??

「……いきなり逃げるってどういうつもりやねんええコラ！」

「本当にずびばべん……」

決死の逃亡も虚しくあつさりと確保された私は、裏路地にある怪しげな建物に連れてこられた。

その際にボコボコに殴られたのは言うまでもない。

私の住む里は人里に住めない溢れ者の寄り集まったスラムのようなどころゆえ、犯罪は横行する。

ここも外見こそ薄汚れた民家だが、内装から見るとこの金貸しヤクザどもの事務所だろう。

みるからに高級そうな革製のソファや南蛮陶器製の灰皿なんかの細かな備品から、高級感が漂ってくる。

貧乏素人の私の目からでもわかる程にはなかなかハイセンスな内装である。

目の前に深く眉間に青筋を立てたヤクザのオッサンがいなかったらの話だが。

強面のおっさんは部屋の内装のアクセントとしては強すぎる。

アクセントというか、悪セメントというか。

ドスの効いた喋り方からしてもう堅気じゃない。

何でこんなのが幅を利かせてるんだか。

全く、ヤクザは街のタンコブだ。

「確認や。名前は貴子、職業は妖怪退治屋、博打やら生活費やらのためにうちから金を借りたのがちょうど二年前。間違い無いな？」

「はい……間違いありません」

「これがお前の返済額の明細じゃ」

檜仕立ての高級そうな机に、不似合いな安っぽい一枚の紙が出される。

知らないうちに借金の額は、上質な着物を十着ほど仕立てられるくらいに膨れ上がっていたのであった。

金利もよく見ずに金を借りて、その事自体を忘れてほったらかしにしておく。

その結果、到底返せないような借金を背負う。

典型的な底辺債務者の陥る泥沼ではないか。

こうはならないでおこうと思っていたのに。

……しかし、目を逸らしてられる事態ではない。

状況は絶望的だ。

一月の金利だけでも私の一年の稼ぎをはるかに上回ってしまう。

そんな大金、明日の食い扶持さえ危うい私には絶対に返せない。

となると、やはりベタに内臓を売られるのか？それとも渴望入り混

じれる夜の世界に体を売られるのか？

どっちにせよ命はない。

「とはいえや、お前みたいなゴミクズにはこんな大金、三回死んでも払えへんやろ……？」

ドス黒い笑いを浮かべながらそう切り出すヤクザ。

ヤクザにゴミクズと言われるのは心外だが、その反抗心を言葉にして口には出すことはできない。

というかそれどころではない。

「こんな大金とでも……」

「お前がもつと小綺麗なんやったら、風俗に売り飛ばしとったんやけど……お前みたいな薄汚い女をもらってくれる店なんかあらへんねんわ」

安堵するべきか、それとも憤怒するべきか。

自分の容姿を貶されたものの、それによって純潔を守れたわけなので、二律背反の感情がメラメラ湧き上がる。

「あの……私、一体どうなるんでしょうか……」

……もしかしたら、いやもしかしなくとも命の保証すら危うい。

そこの所の答えを求めて恐る恐る聴く私は、客観的に見ても弱いのだなあと少し自嘲してしまふ。

そんな弱者に向けてヤクザは徐に三本の指を立てた。

天津飯に目潰しをする時はあの指の形なのだろうか、とカスみたいにどうでも良いことをこの期に及んで考えてしまふ自分が少し……いやかなり嫌いである。

「選択肢は三つある。一つは真面目に働いて少しずつ返済していく道。もう一つは内蔵やらを売る道」

「内臓……ですか」

「正直これら二つはお前には期待してへん。そもそも真面目に働くよいうな奴は借金すっぱかしたりなんかさせへんし。というよりお前の職業な、妖怪退治屋とか言ってるけどお前の元に依頼なんかあらへんやろ」

「そつすね……」

こう言った屑に向けての不満が溜まっているのか、それとも元々ある程度のセリフが決まっているのか、ヤクザはベラベラと捲し立てる。

「内臓を売るにしても、お前だけに限らずフーテンの奴らの内臓なんかゴミや。ろくにええもん食ってへんから大して値打ちがあらへん。無論それを買いたがる奴もおらん」

なるほど、ヤクザだけあってスジは通っている。

確かに私らの内臓は使い物にならないだろう。

酒や煙草で潰れているからな。

牛のホルモンの方が何倍も貴重だ。

働くのもダメ、内臓を売るのもダメ。

選択肢が消されていく。

「じゃあ、最後の一つっていうのは……？」

「……これがお互いにとって最善の選択肢や」

急に勿体ぶるように二の句を遅くした弁舌が焦った。

さっさと見えや。

「最善……というと？」

「お前も妖怪退治屋の端くれやったら、聞いたことがある名前や」

「名前……？」

「吸血鬼や」

ヤクザはタバコを取り出して煙を吐き出す。

名前を切り出すだけでもよほど勇気がいたのだろう。

吸血鬼か……。

その名を聞いたことこそあれど、退治したという話はただの一つも聞いたことがない。

仮に退治したと嘘を吐いても、有り得ない事だと茶化されてすぐにバレるからだ。

退治の噂すら立たぬ絶対的かつ圧倒的な強者。

その吸血鬼がどうかしたのだろうか。

「実はつい最近、とある吸血鬼の館から裏の業界に一通の手紙が届いた」

タバコの煙と共に吐き出されたその言葉を聞いて私は耳を疑った。
この世界にも吸血鬼がいたということ。

そして、その内容に。

「その内容は、人材募集……つまり求人や。なにやら自分の館に仕える従者を集うとの事で」

「吸血鬼の館……!?!」

私が驚くのも無理はない。

吸血鬼といえば殺戮の権化であり、人類永遠の畏怖の対象だ。

そんな怪物界の大御所が何のために人間を雇うのだろうか？

畜産するの間違いでは？

……私の脳裏に、裸の人間が血みどろの檻の中で餌を貪っている光景が浮かんだ。

「その募集要項がまさにおあつらえ向きやねん」

「……というと？」

「日本の文化と日本語に堪能であり、給仕が出来るものを求む。定員一名、報酬は相談にて確定……との事らしいんやわ」

「なるほど……わかりました。じゃあ行つてきます」

「まあな、お前が嫌がるのもわかる……ん？なんて？」

「じゃあ行つてきます！」

呆気に取られたという言葉を作った人は、多分こんな顔を見たんだろうと思う。

黄色い歯を見せてあんぐりと固まるヤクザ。

「……普通はもうちよい嫌がるもんやないんか？わかつてんのか？吸血鬼やぞ？」

確かに普通……大多数の一般論でいくと、正体もわからぬ、しかも吸血鬼の館に仕えるなど真冬の南極で全裸になるようなもんだ。

自殺行為。

愚行、軽挙妄動。

何があってもまずしない。

ただ、私には少しそうはいかない特殊事情がある。

つまり、普通じゃない理由。

それを聴いた人のほとんどが、口を閉められぬほど呆れるか笑うかのどちらかであろうが私にとつては人生を左右するほどの事柄だ。

それは後々明らかになるので今は置いておくが。

まあそもそも、嫌がつてやめさせてもらえるような甘い世界ではないだろう。

「具体的な段取りを教えてください」

「……ああ、この紙に書いてある」

「ありがとうございます」

「十時に来いって書いてあるけど、昼やなくて夜の十時らしいから注意する事」

「つまり二十二時ですか？何で夜に」

「吸血鬼は夜行性やろ」

「ああ、なるほど」

私が要項を上から下まで熟読していると、不意にヤクザが口を開けた。

頭をポリポリと搔いてバツが悪そうに。

「……ほんまは言うつもりなかったんやけどなあ」

「え？」

「募集要項の一番下見てみい」

「一番下？えーこの物語はフィクションであり」

「そんな事書いとらんわ。ここじゃここ」

んー？なにになに。

『重要 命を失っても構わないモノ』

………???

「見事に絶句しとるがな。呆気にとられてんで。綺麗に」

「どーゆーこつちや」

「そのまんまの意味やわな」

命を失っても構わないモノ？

それはつまり死を伴う仕事確定か？

……当然と言えば当然だが、文言に記されると俄然恐ろしい。

何で館仕事でオホーツクのマグロ漁船みたいな事言われなきやい

けないんだ。

蟹工船にでも乗せられるのか？

「これって一体……」

「俺も知らん。ほんまは黙っとくつもりやったけど乗り気の奴に黙っとくんは心の後味が悪いやろ」

心の後味ってあーたねえ。ヤのつく自由業向いてないよ。

ごくせんみたいに寺子屋の教師でも目指してみればどうだい……。

「止めはせん。そう言うわけやから、死んできな」

これは……マジに選択を誤ったのではないだろうか。

そう思ってももう遅いのであった。

??

あれが、紅魔館っ……！

濃紅一色に彩られた巨大な外壁……。

巖かに時を刻む剛大な時計塔……。

それは中世のヴェルサイユを思わせるものだった。

まるで私……いや、この世の全ての人間を拒むような邪悪と、誇り

高き栄光ある高貴を纏っている。

かなり離れたここから見てもなお言葉を飲むほどの圧倒的な存在

感だ。

やっと見つけることができた……。

杖をつきながら歩いてきたつてのに脚がガタガタ笑ってる。

今までならば、ただ凄いなあと畏怖で終わっていたのにもう他人事

では無くなった。

私はこれからあの悪魔の巣で働かなくてはいけない。

笑えもしない無様な借金のせいで。

……といつても、別に不本意では無かった。

頭がおかしくなったかと思われるだろうか。

私は妖怪退治屋だ。

頭では危険だって分かっているし、怖くないわけじゃない。

むしろ、次の一步を出すことすらすみそうになるくらい怖いさ。

でも、身を売り飛ばされてもいいかなって思ってた。

何故かって言われると、別に大した理由でも無いんだけどさ。

……私は退屈だった。

酔えもしない酒、うまくも無い飯、勝てない博打。

平穩とは無縁な、虐殺と危険に満ちた妖怪退治屋という生業……。

そんな退廃的な人生はもう味わい飽きた。

味のしないガムみたいな煩わしき。

そんなものに塗れて長生きするなら、誰にも出来なかった事をなし得て激しく華々しく散りたい。

それがたとえ切ない線香花火のようなものだとしても。

そう思ったからこそ、この仕事にも臆さず就けるのだ。

紅魔館には、それはそれはきつと退屈の対義語みたいな生活がまっ
ているんだろう。

たとえ死んだって、面白かったらそれでいい。

……この時私は、正直言っただけでいい。

退屈とは無縁な世界に胸を躍らせて、この世界に相応しい、まさに
幻想を抱いていたんだ。

結論から言おう。

私はこの物語の最後に死ぬ。

死にかけるとかじゃなく、確かに命を落とす。

けどもこの時は呑気に口笛なんか吹いていた。これから私に降り
かかる幾多の艱難辛苦を知る由もなく……。

湖上の紅魔館は夕日に照らされ、妖しく燦然とした輝きを放つ。

見つかったのは良いが、ちとまずいな……もう日が沈みかけてる。

面接は夜の十時からだそうで、夕方までには到着したかったのだが
……。

夜になったら人の時は終わりだ。妖の世界へと色を変えていつて
しまう。

無論、急がねば！

そう思って第一歩目を踏み締めた時に、後ろから間の抜けた声が飛
んでくる。

「ねーちよつと待ってー」

急に声をかけられ少々驚くが、こんなことは日常チャメシ事なので冷静に振り向く。

「……誰だアンタ」

「貴方は食べても良い人類？」

「ご生憎、食べて良いのはラーメン。私はただのか弱いウーメン」

「食べても良い麺類なのか」

「アンタ、アホだろ」

声が近づき辺りが急に暗くなったと思ったら、そこに赤いリボンをつけた少女がいた。

金髪で小柄……ツッパは私の胸元ぐらいしかない。

しかし、感じる。ゾクゾクと感じてしまう。

人ならざるものの殺気。妖気。

間違いない。こいつは妖怪だ。

話した感じは少し抜けてるようだが、口ぶりからして人喰い妖怪だろう。

よりもよつてこんな所で人喰い妖怪に出会うとは……。

緊張で、筋肉が強ばるのがわかる。

グツと拳を握り込む。

私は曲がりなりににも妖怪退治屋をやっていたわけで、妖怪との戦いにおいてのセオリーもある程度は知っている。

妖怪と対峙した時の人間側の鉄則、それは先手必勝、見敵必殺である。

「夜に出歩く馬鹿な人間は喰われてもしょうがないのさ」

「まだ夕方だ。それに私は喰われない」

「問答無用っ！」

グツと腰を落とし、半身に構えを取る。

飛びついてきたな。よほど肉に飢えていると見た。

飢えてる奴らはいの一番に頭を狙う。

そこを決して焦らず見定めなければならぬ。

——来た！

直線的な軌道。

ヨダレを垂らし牙をむき出しで飛来する物体。

大口を開けて飛びかかる様は獣以外のなんでもない。

こういった輩への護身に、有効な策が一つある。

お見せしよう。

「いただきまあ……ふがあー！」

「どうした？ さっさと喰えよ」

「ふ、ふひほははひほいへはほはー！」

妖怪は口を閉じれず、顔に驚愕の二文字を浮かべて遠のく。

「口の中に何を入れたのかーってか？ 大口開けてるから、鉄の棒を縦にぶち込んでつつかえにしたんだよ」

大口を開けて人を喰うような意地の汚い不屈者への対策は結構単純で、棒を突っ込んでやるだけだ。

簡単に言うが結構シビアで私は慣れたもんだからできたが、素人がやればまず失敗、即ち死ぬ。

使用した棒は、ここにくるまで付いていた杖の先端だ。

あの杖には護身用の意味もあった。

「ふ、ふひほはひへはひー！（口が閉じれない）」

「取れないだろ？ 先端が斜めになってね、取ろうとすると口をより開けなくてはいけないようになってる」

「ふ、ふー！」

「しかし運が良かったな。私はもう妖怪退治屋を引退したから無闇に妖怪を倒したりはしないよ」

「ほーはほはー！」

「ちようどいい。少し急いでるんだ。あそこの館まで運んでいってくれないか？」

「ふえ？」

「その棒、私なら簡単に取れるし、連れてつてくれたら取ってあげるわよ？」

「は、はへふはー！（な、舐めるなー！）」

飢えで頭が回らないのか妖怪としての本能か、爪を立てて殴りかかってきた。

これくらいは慣れっこなので軽〜くいなし、さらに棒を奥へと突っ込む。

顎が外れ、顎関節の軋む音と手応えがよ〜く伝わる。

「三度目は頼まないわよ?」

少女は涙目でコクリと頷いた。

……おー!流石に妖怪は早いなあ!

背中に乗せてもらってる感じは、上質な飛脚って感じか?

最初からその辺の雑魚妖怪をぶん殴って運ばせれば良かったな。

まあそんなのは気質に合わないのでやらないが。

グングンと館が大きくなってくるのは爽快だ。

もう着いたじゃないか!

よいしょつと……。

「ふー…ふー…」

少女が自分の口を指差して息巻く。

棒を取れつてことだろう。

「よしよし、そうそう慌てるな慌てるな、手元が狂う」

つとその前に……迂闊に取ったら喰われそうだし、一応両手を切り

落としておくか。

妖怪だし、ものの数時間で治るからな。

少し我慢しておくれよ。

……ザクつとな。

「ふっ…ふぎいっ!…ひぐう!!」

右腕はこれでよし、と。

返り血がつかないようにしないと……ふう。

次は左腕か。

切れ味の悪いノコギリだ。

横引きでやってんのかなかなかどうして切り落とせない。

すまんが我慢してくれよ。

ギコギコつとな。

「ぎゃあああああああ!!!」

よし、これで安心だ。

余談だが、了という漢字は子から腕を切り落とす様を書いてい
らしい。

妖怪とて腕がなければ何もできまい。

さっさも棒を取ってやろう。

「ほら、これで喋れるだろう？」

「痛い……うう……グスツ」

「今度人を食う時は、夜中にコソコソやってる奴を狙うといい」

「うう……」

「じゃあな。さいなら」

「グスツ……うう」

「……」

「う……うええええん」

「……だああ！いつまでも泣くな！罪悪感で死にそうだ！ほら、
ちゃんあげるから泣きやんで」

「う……うう……」

パクリと飴玉を啜えて、まだ少しぐずりながらその妖怪は飛び去っ
ていった。

妖怪退治つてのはこれだから嫌なんだ。

??

さてと……これが噂に名高い紅魔館か。

まさか私とその門を潜ることになるうとは、人生って奴は分からな
いもんだ。

紅魔館なんて、自分とは一生無縁のものだと思っていた。

……今だつてにわかには信じられない。

屋敷というものに触れることすら初めての経験だった。

何と言つてもクソでかい。

扉の果てが遠すぎて霞んでいる。

辺りの閑静な景色からとは異質の存在感だ。

その景観は禍々しいの一言に尽きる。

血で塗られたような濃紅の壁は、悪魔の館の名の通りの禍々しさ

だ。

静かな湖畔の雰囲気とは一線をかくしている。何とも近寄り難いが、ここが私の新しい働きどころになると思うと、不思議と足取りは弾み胸が躍るものだ。

新生活、初めの第一歩は静かに始まった。

門の前に誰かいる……おそらく門番だろう。

館の名前にふさわしく、深紅の髪をたなびながら俯いている。

立ち振る舞いでわかる……この門番は武人だ。

それも、格違いに腕の立つ。

見た目こそ筋の通った顔をした美しい女だが、悪魔の館に仕えるのだ。

人間などいとも簡単に殺めてみせるのだろう。

私の心の危険を知らせるブザーは……もう壊れてるから鳴っててもわからないな。

とりあえず少し間合いを取って話しかけよう。

荒気を立てないように、慎重に……。

「あのー、すみません」

「……グウー」

「あのー？」

「……は！寝てません！寝てませんよ！」

「はい？」

「……え？」

「……」

新生活に、少し暗雲が立ち込めた。

「あの、私この紙をもらって……」

「ああ！なるほど！働きに来たんですね？」

「あ、そうです」

「名乗り遅れました、紅魔館の門番をやっている紅美鈴と言うものです」

「あ、私は貴子って言います」

「貴子さんですね。それでは身体検査をするので、あちらの方へどうぞ」

ぞ」

美鈴は館の右の隅に立っている、少し安っぽい掘立て小屋を指さした。

「身体検査？」

「銀製のナイフとか、そういう類のものを持っていないかの検査です。知つての通りお嬢様は吸血鬼ゆえに、弱点も多いので……」

「ああ、なるほど。あそこですね？」

「あ、ちよつと待つてください！」

美鈴が急に大きな声をあげる。

腹から出るのがよくわかるいい声だ。

「なんですか？」

「……煙草、持ってませんか？」

「え？煙草はダメなんですか？」

「いえ、少し頂けないですか？」

「ああ、どうぞ。安物ですけど」

「ありがとうございます！」

「案内ありがとうございます」

「いえいえ」

軽く会釈をして美鈴の後を去る。

真っ赤で長い髪がとても艶やかだった。

妖怪ならば少なからず妖気が出ているもんだが、美鈴は恐ろしいほど妖気を抑えていた。

それはただ闇雲に妖気をばらまくよりも何倍も難しい。

その一事を取つてもかなりの手練れであることは明らかだ。

ゾツと背筋に冷たいものが走る。

怖さもあるが、魅力もある。

悪魔の館の門番にしては少し……いやかなり容姿が整っていた。

人当たりの良い妖怪だったな……。

門番は、社交的な性格が向いてるのだろうか。

美鈴と喋った感じでは、この館はそれほどおどおどしなくても大丈夫かもしれない。

……つと、身体検査はここか。
ノックしてみよう。

「すいませーん」

ドアが空いた。

そこにいたのは――。

「……どちら様ですか？」

「あ、この紙を見て、それで身体検査をしにきました」

「ああ、就職希望者ですね」

「はい、そうです」

「お名前は？」

「貴子って言います」

「貴子さんですね。私は小悪魔って言います。よろしくお願ひします」

美鈴とはうってかわって、小悪魔からは落ち着いた印象を受けた。

悪魔ならばやはり人を破滅に導くのだろうが、目の前の存在からは微塵も悪意を感じない。

それは悪魔としてどうなのだろうかとも思うが。

「小悪魔さんですね。よろしくお願ひします」

「さんなんて付けなくても良いですよー。それじゃ身体検査させてもらいますね」

「お願ひします」

「はい、それじゃとりあえず鞆をおいて、服を全部脱いでください」

「はいわかりました。えつと、鞆をおいて、服を全部脱いで……ええ!?!」

「どうかしましたか？」

「服を脱ぐんですか!?!」

「あー、大丈夫ですよ、あっち向いときますから」

「そう言う問題ですかね……」

「すぐ終わりますから、ほらほら。凶器を体に隠している可能性もありますので」

「うう……」

小悪魔が少し事務的に私のいない方を向く。
見られてようがなかろうが関係なく、裸になることに羞恥心がある。

とりあえず全部脱いだが……このまま食べられたりしないよな？

「鞆の方には特に問題無いようですね……それじゃあ体の方は……」

「ヒイ!? ちょっと小悪魔さん!? なんか手つきがいやらしいんですけど!?」

「小悪魔でいいですつてば。すぐ終わりますから我慢してください」
「ちよつとそこは……いやあ!」

♡♡♡♡

「……体の方も問題は無しつと」
うつつ……もうお嫁に行けない……。

悪魔じゃなくて、淫魔に改名しろ……。

「それでは館の中にいる、メイド長の十六夜咲夜の元へ行ってください。面接やらは彼女がやってくれるので」

「え、面接あるんですか？」

「形だけの物なので肩肘張らなくて大丈夫ですよ」

面接か……。

何も意識せず喋るなら良いんだけど、そういう上手に喋る事を求められるのは少し苦手なんだよな。

「上手いこと喋れるかなあ」

「頑張ってください。応援してますよ」

「ありがとうございます」

「多分今の時間なら咲夜さんは厨房にいると思います。もし中でわからないことがあったら、遠慮なく周りにいる者に聞いてくださいいね」

「わかりました。ご丁寧にありますありがとうございます……」

「いえいえ、それでは」

「失礼します……」

なにか、身体検査なのに人間としての尊厳を無くした気がする。

小悪魔さんか。

悪魔っていう割にはえらく親切な人だ。
……それとえらくテクニシャンだった。

??

さてと、咲夜って人の元に向かえばいいんだな。
中に入ろう。

巨人でも入れそうな門を開け、ズカズカと中へ入る。

その瞬間、全身の毛がよだち汗が滲む。

奥歯の方がガタガタ震えて、止められない。

これが、強者のプレッシャーなのかっ……。

思わずゴクリと固唾を飲み込む。

しかしここで足は止められない。

半分ヤケクソで、臆せず中へ突っ込んでいった。

中也広いなあ……。

玄関の高さが、私が住んでいた家の屋根より高いってのは少し……

いや結構悲しいもんだ。

さて、咲夜さんは厨房にいるとのことだ。

あ、肝心の厨房の場所を聞き忘れた……。

しまったなあ。

周りを飛んでいる従業員らしき妖精は来客にも慣れているのか、私を意に介さずあーだこーだと言っていて何やら忙しそうだし、わざわざ呼び止めるのも悪いだらう。

どうしたものか……。

私が居心地悪く彷徨っていると、目の前に暇そうな薄紫色の髪の毛の少女がいた。

ああ、丁度いい。

厨房の場所を教えてください。

「あの一……すいません」

「……っ？」

少女は困惑と懐疑を混ぜたような顔をしていた。

子供の姿をしているが、間違いなく人間ではあるまいし、言葉は話せると思うのだが……。

そう思っていたら、少女はゆつくりと口を開いた。

「……Tu chi sei?」

「……へ?」

これは想定外だ。

??

「あー……ドゥーユースピークジャパニーズ?」

これは昔、ドブ川の高架下に住む薄汚いオヤジに聞いた、西国の言葉。

飲んだくれのだからしねえ奴だったが、私は不思議とそのおっさんが嫌いになれなかった。

そのオヤジに、言葉が通じない時はこれを言えと教わったんだ。

いつの世も、教養は身を助けるのだ。

……しかし少女はなんのこっちゃと言った感じで、首を捻った。教養は身を助けてはくれなかった。

あのクソオヤジは役立たずだった。

そういえば、盗みを働いたかで捕まってたなあ、あのオヤジ。

信じた私が馬鹿だった。

とはいえまさか日本語が通じないようなところだとは。

首を捻りたいのは私も一緒だ。

そうだ、美鈴や小悪魔同様に、あの人員募集の用紙を見せればわかってくれるかもしれない。

「……?」

「私……という者です」

通じてない日本語を話しながら紙を渡す。

「……iTu es un serviteur!」

何かをわかってくれたそうだ。

その少女は徐に腕を上げて、小さな手の可愛い指で指パッチンを鳴らした。

……いや、厳密に言うとは鳴らそうとしたが、掠ったような乾いた音がただけであった。

何に対して指を鳴らしたのだろうかと思った瞬間……文字通り、そ

の瞬間に目の前に銀髪の女が現れた。

そのメイド服を着た女……おそらく私より年下であろう女の子が言う。

「Voulez-vous m'appeler?」

「Donnez-moi une interview!」

少女が指さした先にいた私を、少し怪訝な目でメイドが見た。

人を指さすのは異国だとOKなのだろうか。

薄紫の髪の少女は何かはしゃいでいたが、その横の銀髪メイドは少し険しい顔をしていた。

どこことなく、歓迎されてない雰囲気を感じたのは気のせいではないと思う。

「Ah……コホン、あなたは奉公人ですか?」

銀髪のメイドが、聴き慣れた言語で喋ってくれた。

少し発音が拙いが、聞き取りに不自由はしない。

「はい。訳あってここで働く事になりました」

「わたしについてきてください」

返事も待たずに歩き出すメイド。

頭に地図でも入っているのか、だだっ広い館を迷いもせず歩いていく。

五分程度歩いただろうか。

ついたのは、少し小さめの部屋であった。

内装から見るに従業員の部屋であろう。

メイドは椅子を指さしたので、少し会釈して腰掛ける。

「えー、それじゃ面接を始めます。申し遅れました。私の名前は十六夜咲夜と言います。私の役職はメイド長です」

「貴子って言います。炊事と洗濯くらいならできます」

「貴子さんですね。前は仕事なにをしていましたか」

「一応、妖怪退治屋をやっていました。ほぼ依頼無かったですけど」

「わかりました……それでは労働に当たってのいくつかの規則を説明します……」

私は無事採用となった。

二、三問の質問で面接は終わり、直ぐに働きについての説明へと変わった。

小悪魔の言う通り、本当に形だけの面接だ。
人材に困っているのかも知れない。

その後いくつかの説明を少し早口で聞かされた。

咲夜さん曰く、この館にはいくつかの決まりがあるそうだ。

例えば目上の人に会ったら挨拶とか起床時間とか、たまに開かれる朝礼の絶対参加とか、まあ特筆すべき物があるわけでもない。

どこにでもある程度だ。

次に、服を渡された。

白と黒を基調としたフリル付きのエドワードイアン……要するにメイド服だ。

……私も若くないから、少しこれを着るのは気後れするが、まあそのうち慣れるだろう。

その他生活をする部屋とか、絶対に入ってはいけない部屋とかの説明をされた。

ちなみに私が最初に声をかけた小さな女の子は、なんとこの館の主人だったそうだ。

そのことを少し嫌味風に咲夜に指摘された。

どうやら、いきなりにも命の危機MAXだったそうだ。

機嫌の良い時で幸いだった。

「何か質問は？」

「一つだけいいですか？」

「どうぞ」

「咲夜さんは……というか、この館の人は日本語を喋らないんですか？」

「私たちはまだこつちにきてはやく、日本語は得意ではないです」

「じゃあ、求人票に書いてあった日本文化に堪能な奴ってのは……」

「この館の者に日本文化について教えること、それが当面のあなたの仕事です」

「日本文化……？」

紙にも書いてあった事だ。

おおよそ予想はつく。

日本語を喋れないような者が日本の文化なんて知ってるわけがない。
い。

けどわからないのは……。

「なぜ、日本のことを知る必要があるのですか？」

「……すぐにわかることです。半分は暇つぶしですけど」

「暇つぶし……ですか」

すぐにわかる……今言う必要がないのか、それとも今は言えないのか。

少なくとも、それを知る術を私が持ち得ていないことは確かであった。

当面のところは、何も聞かず言う通りにしよう。

現在の時刻は夜の十一時。

人間の私には寝る時間だが、この妖怪館はこれから賑わっていく。

「明日の七時に朝礼がありますので、それまではこの館を見るなりしていてください」

そう言つて咲夜は去つていった。

現れる時はまるで最初からそこにいたように、目の前の空間に急に現れた咲夜だが、出て行く時はノソノソと足を引きずった。

その小さな背中が、どことなく哀愁に満ちていた。

疲れてるんだろう。

目の下に濃いクマがあつた。

咲夜は、どこか憂いを帯びた顔付きをしている。

少なくとも年頃の女子がしている顔じゃない。

人生の折り返しを迎え酸いも甘いも知った中年がする顔だ。

人間でありながら妖怪に仕える事の負担とストレスは並大抵の事ではないのだろうか。

まあ、私も同じ身空だが。

……ここが今日から私の部屋か。

デカイ。広い。

アンティーク調の洒落た部屋だ。

従業員用とは思えないふかふかベッドに遠慮なく体を沈めた。

ドツと体が重たくなる。

強張っていたのだろうか。

これだけ妖怪揃いの魔窟にいるんだから、体は反応してしまう。

でも心は別である。

やっぱりここが悪魔の館であり、人間はたちまちのうちに殺されてしまう場所だとは思えない。

まして、とても命を失う所には見えない。

時計を見れば、針は十一時を指していた。

明日の起床は七時らしいので、今夜はもう寝ることとする。

だらしなく全身を放り投げて、これからの事を考える。

しかし、横になってしまえば瞬く間に眠りに落ちる事は難くなかった……。

??

「……さて、それじゃ日本文化を教えろとの事だったので、ささつと始めましょうか」

「Mercii!」

この目の前で元気に挨拶をした少女はレミリア・スカーレットという名前で、この館の主人だそうだ。

咲夜曰く、早くに両親を亡くし、吸血鬼としては圧倒的に若い年齢にしてスカーレット家の当主の座についたらしい。

人間や悪魔、妖精など、さまざまな種族を垣根をつくらずに従えるそのカリスマは凄まじいそうだ。

また、力で従わされる者は少なく、あくまで絶大な崇信によって賊を統べているらしい。

若いのに立派な事だなあと感心したが、よく考えたら私の二十倍くらいの年は重ねているのだから、若いと言うには少し長生きすぎる気もする。

長生きはすれど、この近辺に越してきたのは最近のこと（といっても十年は立っているらしい）長く欧州生活をしていたから日本語な

んかはてんで話せないらしい。

メイド長こと咲夜は日常会話程度ならできるらしいが、それでもやっぱり拙い。

門番の紅美鈴さんが流暢に喋っていたのは、昔は日本に近い国に住む妖怪だったからだそうだ。

小悪魔さんは案外インテリらしく、日本語はもちろん日本の博打なんかも知っていた。

じゃあ小悪魔さんに教えて貰えば良かったのではとおもったが、悪魔の中のエリートである吸血鬼がただのペーパーの小悪魔に教える乞う事は考えられないらしい。

じゃあ人間は良いのかとツツコミたくなつたが、変なことを言うと言職と命を失いそうなので押し黙った。

理由はわからんが、妖怪も色々大変なんだろう。

そんなこんなで、日本語を喋れる暇な人間……つまり私が日本語教育係に任命された。

給料は一年働いて借金返済できるくらい。

まずまず良心的だろう。

……表向きは。

これは私の推測だが、借金持ちを雇ったのは殺しても文句を言わないからではないだろうか。

仕事を果たさない無能な人間だったなら殺して明日の夕食の献立に乗せられる。

その際に帰る家があり、待ち侘びる家族がいる人間では都合が悪い。

だから私は、命懸けの職場であることを念頭に置いて働くことにしている。

しかし、だからといって特段臆病にはなれない。

妖怪退治屋の時からそうだが、こう言った仕事をしている奴は大抵命など惜しくない。

ふらふらと流れに身を任せて、死ぬ時は死ぬさと諦めを伴った達観をしている。

死なないようには頑張るが、死にたくないと言う気持ちは弱い。だからこそ、天下の大妖怪の元で働けるのだ。

今日も、レミリアに日本語を教えることとしよう。

「それじゃまあ簡単なことからはじめますか」

「j e f e r a i d e m o n m i e u x」

日本語を理解できないって事は、多少言葉遣いが適当でもバレない。

上品でお淑やかな言葉など教えられない。

咲夜に汚い言葉は教えるなど釘を刺されたので、できる限り一般に近い会話感覚を教えられるようにしよう。

教え方にも色々だ。

カードに色々な絵を描いて、その裏に日本語を書いたり……。

例えば、赤い果実の絵のカードの裏には「リンゴ」と書いてある。物を教えることは簡単ではない。

だからそんな風にいろいろ工夫をしているのだ。

そして当然のことだが、私はフランス語など喋れない。

「それでは昨日の復習から……これは？」

「……a h ~、はなふだ、さいころ、おいちよかぶ？」

「だいぶ覚えられて来ましたね〜。じゃあこれは何でしようか？」

「……てほんびき？」

「そうですそうです！だいぶ覚えられて来ましたねー」

「ういふふ」

可愛い。

お持ち帰りしたくなるほどにはかあい。

名誉のために言っておくと私は同性愛者でも小児愛者でもない。

ただ、我が子の成長を見守る母親のような微笑ましい愛を感じているだけだ。

目の前で無邪気に喜んでいるレミリアという少女。

人は彼女を悪魔と呼ぶ。

前述した通り、カリスマと名高いその立ち振る舞いに心酔する者も多いと聞く。

だが、私の抱いた印象はむしろ正反対だった。
この館に住む悪魔は少々抜けている所があるというか、端的にいうと少し幼い。

寝る時は絵本を読んでもらったり、野菜を絶対に食べなかつたりエトセトラエトセトラ……。

カリスマってなんぞと少し悩んだ。

問題というか、不可解なのは咲夜達もそれらの行為を咎めるような心配がない事だ。

むしろ少し甘やかしすぎでは無いだろうかと心配になる。

メイドと言うよりかは保母さんのような印象を受ける。

要するに、レミリアのカリスマって……放つて置けない庇護欲を掻き立てるこの幼さの事だったのだろうか。

悪魔に見染められた眷属とは、幼児を愛でたい母性に溢れた奴らの事なのかもしれない。

なかなかやるな。五百歳児。

さて、日本語を教えるだけが仕事ではない。

メイド仕事もさせてもらおうと思つたのだが……。

これ以上先は、鍋の中に入っているドスの効いた紫色の料理もどきと、粉々に割れ散らかした夥しい皿の破片の数々を見て察していただきたい……。

いや、練習はしてるんだよ。

元々包丁なんざ、妖怪の皮剥とかでしか使つたことない女子力(笑)なのに。

進展だつてある。

妖精メイド達に笑われながらも必死に練習したお陰で、リングの皮むきはそこそこ出来るようになったし……指が三本ほど取れそうにはなつたけど。

洗濯も生乾きしないようになってきたし……レミリアのベベを色落ちさして真っ白のワンピースにしちゃつたけど。

掃除なんかは、一番熱心にやつてると自負してるし……油拭きを先にしたせいで床の埃がカチカチに固まつたけど。

つてきつきから心の中の私うるさい！

努力はしてるのだ。

ドゥーマイベスト、元々特別なオンリーワンだ。

そもそもこの館の仕事配分は、あまりにも歪だ。

詳しくは聞いてないが恐らく数百人はいるであろう妖精メイド。

しかし忙しそうにしているのは咲夜ただ一人であった。

メイド長という役職についている以上他の者とは違う働きをするのは分かるが、一人で何百枚の洗濯をして、何百人分の豪華な食事を作って、館中の掃除をして……。

やはりこんな館で仕事をする人間は命など惜しくないのだろうか。そこに少しの力助けもできない自分が全くもって恨めしい。

まあ、元々私の家事能力なんかに元々そこまで期待なんかしてなかっただろうし、気長に頑張っていこう。

??

あー……憂鬱だ。

今、やつと最近覚えたリンゴの皮むき技術を嫌と言うほど存分に発揮させられている。

リンゴの皮むきを五時間くらいぶっ通しでやらされると、リンゴと自分の手の境目がわからなくなってくるし、しかもブーツとしていたら絶対に指を切るから集中しないといけない。

大変だ ああ大変だ 大変だ

ところで諸君。

語学の教師は、その仕事柄最低でも二つの言語を会得している必要性があることは明白だ。

ところが、私がフランス語などズブのオケラであることもまた当然なのだ。

つまり、日本のことを教えろと言われてもそもそも私がフランス語を喋れないじゃねーかって言う問題があったのだが、これまた不思議な事というか、何というか。

聞くと、この館にはどうやらパチュリーという凄腕の魔法使いがいたそうで、その魔法使いが私に言語の壁を乗り越える魔法をかけてく

れたそうだ。

よつて、先ほどのレミリアの放った

「Mercii!」

という発言も私の耳では、

「よろしくお願いするわー!」

と聞こえているわけだ。

私は今バイリンガルどころか、ありとあらゆる言語を操ることができららしい。

呪文の効果範囲の関係上、館の中にいる時に限定されるが。

しかし流石は魔術というべきかその効果は絶大だ。

レミリアのフランス語だけでなく、試してみたところ美鈴の中国語や、なんと小悪魔の話す悪魔語なんてものも聞き取ることができた。

ドラえもんの翻訳こんにやくを食べたらこんな感じなんだろう。

他の言語で聴こえているはずなのに、脳がキチンと意味を理解してくれる。

話す時も、日本語のようにスラスラと喋れる。

そんな便利魔法があるなら、レミリアにもその魔法をかければ済むじやんとか思っちゃったその君。

残念だが明日にでも失恋するよ。

私達もそんな事は百も承知の上だ。

要は小悪魔の時と同様に、これまた友人の手を借りることはプライドなんかのお許しが出ないそうだ。

そもそも日本語を教わっている事すら、極秘裏に行われている事。だから私も表面上はただの役立たず人間穀潰しメイドだし、この裏プロジェクトの事情を知っているものは限定されている。

……と、レミリアや咲夜は思っているそうだが、この前ここでジャガイモの皮むきをしていたら妖精メイドにコソツと「私達にも日本の事教えてよ」と言われた。

思いつきりバレてるじやねえか。

ザクツ……。

あ、指が……いつでえええええ!

??

……ううん、今日はいい天気だ。

お日様はご機嫌だし、朗らかな日差しが優しく降り注ぐ。

こんな日にはやっぱりゆっくり居眠りでもしたいものですが、私の仕事はご存知の通り門番。

門を守るといふ重大なの仕事の中に居眠りなど、主人であるレミリア嬢への不忠義に他ならない。

だからこそバレないようにする必要はあるのですが、今日はその必要は無さそうです。

この前ウチに雇われた貴子という人間が後輩門番としてあてがわれましたから。

見た感じ弱そうってわけでもなさそうですし、門番としての仕事は彼女に任じて私はゆっくりと眠る事としましょう……。

しかしまあ、形上は仕事を押し付ける事にもなりますから、一声もかけずに詰所に戻るのには良くないですよ。

という事で軽く挨拶くらいはしておきますか。

「お疲れ様です。新人さん」

「お疲れ様です」

「貴子さん……でしたよね？」

「覚えてて頂いてるなんて恐縮です」

「そんな堅くならなくてもいいですよ。立場は同じなんですから」

「生意気な口を叩くと食べられそうです」

「そうですね……先月は三人くらいでしたか」

「私、結構味の評判いいもんですから」

「結構味にはうるさい方ですよ？私」

「美鈴さんにとっては吃でも私にとっては死ですから」

「なるほど。一本取られましたねえ」

へえ。そこそこ口の回る人間だ。

寝るのもいいが、たまには人間と話すのもいい暇つぶしかも知れませんがね。

なんで門番にまわされたかは知りませんが話は通じそうですし、退

屈しのぎにはなるでしょう。

ここに酒やツマミなんかがあってくれば最高なんですがねえ……。

「貴子さんはなんで紅魔館に来たんですか？」

「いやー、恥ずかしながら……借金の返済のためにです」

「借金ですか？」

「なにせ学も品もない薄汚れた女ですから、身売りをしても買い手がいるわけ無いそうで」

「それで悪魔の館に売られてしまったと」

「思ってたよりは良いところですよ。ここ」

「それはそうですけど……それに何故門番にまわされたんです？」

「それが……いわゆる魂の料理って奴を作ったら、咲夜さんが味見をした瞬間にぶっ倒れてしまって……」

「それで館の中から追い出されたと」

「そんなところですよ」

私はこの人間を……貴子を、口の周る人間だと今さつき評したが……実はただの馬鹿ではないだろうか。

この人間はここが悪魔の館だと本当に理解しているのか？

聞けばレミリア嬢に教えを垂れているのだ、メイド仕事で迷惑しかかけてないだの、妖精メイド達に博打を教えて風紀を乱しただの……噂に困らない人間だったか。

何も恐れず、堂々と、滑稽なほど自分らしく生きている。

もしかすると人間の持つ、命の惜しさを持ち合わせていないのかも知れない。

私はそうやって死んでいった者を数えきれぬほど見てきた。

そういう奴のことを、馬鹿っていうんだ。

けど、私はそう言った馬鹿が嫌いじゃない。

少なくとも、しばらくは退屈し無さそうだ。

「……暇ですねぇ」

貴子が飛車を進める。

「暇で何よりじゃないですか。門番が忙しい時なんてろくな時じゃないですよ」

私はそれを金で受けた。

「この館に攻めてくる馬鹿な妖怪なんているんですか？」

「そりやあたまーに居ますよ……年に一回くらい」

「年に一回!？」

「平和な時代ですよ。本当に平和な時代です」

「妖怪の時間感覚にはついていけません……あ、王手です」

「参りましたねえ」

「まだ詰んでないですよ?ほらここ」

「違いますよ……どうやら、今日は年に一回の日のようです」

この館に近づいてくる奴がいる。

気を張り巡らせているからわかる。

貴子も遅れながら気づいたそうで、顔が青ざめていた。

私からすれば所詮は雑魚の妖怪。

特別ヤバい奴が来たわけではない。

……問題はその数だ。

あまりにも多かった。

「敵襲です。敵は……二百ほど!」

「正確には、百九十六匹です」

どうやら徒党を組んで合戦を仕掛けるつもりらしい。

……面白い。

最近、運動不足で節々が硬くなってたところですからね。

「どうやら、大客御一行様ご来館です」

「……そうみたいです」

「私が迎え撃つので門の後ろに隠れてください」

「私も戦えますよ!」

「貴方は肩書きこそ門番ですが、本当の仕事はそうじゃないんですよ?」

「あの量を一人でなんて無茶ですよ!私も妖怪退治屋をやってたんで戦い方くらいは知ってます!」

「安心してください。私だけで十分ですから、それより『絶対に』門から出ないでください！」

「そんな……美鈴さん」

「これは指示です」

「……わかりました」

「いい子ですね」

貴子に門番の仕事をさせる事はできませんね……。

一匹一匹と比べれば、たしかに気の扱いからして貴子さんの方が上手です。

しかし、あの軍勢……せいぜい貴子一人で十匹が関の山か。

間違いなく骨も残さず喰らわれる。

けれど、それでもまだ危険とは言わないかもしれない。

貴子はなにやら、武器もたくさん仕込んでいるそうですから。

案外小細工なんかも含めれば、あの量でもいなすことぐらいならできるとも思いません。

あの雑魚妖怪達は危険には少し及ばない。

貴子さんを門のうちに入れた理由……。

本当に危険なのは……。

美鈴の戦闘は鬼気迫る物であった。

容赦や情けなど微塵もなし。

拳に当たる顔面の感触だけを楽しむ。

それは館の防衛よりも、大虐殺と言った方が正当かもしれない。

どちらが正義でどちらが悪かなど、そんなちっぽけな事は存在しない。

強い者が勝つ。

ただそれだけのごく自然な摂理がそこにあった。

全くもって、この館は奥が見えない。

すごいと思えばすごくないし、すごくないと思えばこうやって大妖怪の片鱗を垣間見せる。

人間の私にはわからない事だらけだが、たった一つ決めたことがある。

「ふう……一丁上がりですね」

「美鈴さん！」

「あ、ちょうど今終わりましたよ」

「美鈴さん！私に修行をつけてください！」

「……え？」

??

美鈴の修行は日の下らない内から始まった。

門番の命を受けてから、私は門脇の詰所で寝泊まりしていた。

そこには美鈴もおり、時間交代制で門を守る事になっていた。

今は二人だからいいが、美鈴一人の時は一体どうしていたのだろうか。

まさか、不眠不休……？

とか考えていたら、ドタバタと足音が聞こえてきた。

「貴子さん！いつまで寝てるんですか!!」

中華鍋とお玉をカンカン鳴らしながら美鈴が部屋に入ってきて、無理矢理私を起こす。

カン高い金属音が寝ぼけた私の視界を揺らした。

「おはようございます……ってまだ明るくないですか……」

「修行は早くからするのが相場ですよ！」

目を椎茸にしながらい息巻く美鈴。

修行をつけてくれと頼んだ時から少し思っていたが、弟子ができてテンションが上がりがりすぎてはいないだろうか。

私ももちろん遊びで言ったわけではないが、流石に妖怪と同じ修行をしたら死んでしまうのでは？

その答えはすぐにわかるだろう。

軽い朝食を済まし、門の前へと赴いた。

「おはようございますー！」

「……おはようございます」

「コラっ！シャキツとするー！」

背中に強い衝撃が走る。

美鈴が背を叩いたのだ。

そうするとどういいうわけか、背筋がピンと伸びた。

「はいもう一回！おはようございますー！」

「……おはようございますー！」

「よろしいー！」

……こんな事を言いたかないが、私は若くない。

外の世界で言うところ、アラサーとか言われる歳なんだとか。

自分的にはピチピチギャルだが、もう心身ともに着実に皺を刻んでいるのだ。

つまるところ……恥ずかしい！

早くから（紅魔館では昼夜逆転しているので昼の四時）起きて、大声で挨拶。

妖怪感覚で言うところ美鈴はまだまだ若い子娘なのだろうが私はとつくに……これ以上はよそう。辛い。

それに、恥は捨てると決めた。

ここは悪魔の館だ。

人間の感覚で生きていてもしょうがない。

「それじゃまずは、軽くランニングをしましょう」

「どれくらい走るんですか？」

「そうですねえ……ざっとこんなもんです」

美鈴がビシツと三本の指を立てる。

どうでも良いが、武闘家にしては綺麗な指だ。

「三……三里（約4.7 km）ですか？」

「零が一つ足りませんよ」

「さ……三十里……」

「目標は三十分切りですーさあ行きましょうー！」

嬉々として話すその眼に偽りは無いだろう。

だからこそ、性質が悪い……とほほほ……。

??

その後も数ヶ月に渡り美鈴の修行は続いた。

数ヶ月……本当によく死ななかつた。

艱難辛苦、悪辣地獄の内容。

美鈴を、武の妖怪たらしめたる所以が痛烈に滲みる。

体に紐を括られ、その紐を引っ張られて強制的に走らされたり……
ただっ広い館全ての窓拭き壁拭き床掃除もさせられた。

その際に着用する中華服はおっかなびっくりの超合金製でバチく
そこに重たい。

体の十倍くらいの重さを背負って生活している様は海王星での修
行さながらだ。

その後何度かの食事を挟みつつ瞑想、組み手、一万回の正拳突き
……。

瞑想は、一本の蠟燭を立てそこに火を灯しながら行った。

この蠟燭は、どういうわけか精神の集中が乱れると鎮火してしまう
代物らしい。

これをまず一時間灯すことから修行は始まった。

その瞑想を通じて私は東洋伝来の気を扱う技術……制気術を叩き
込まれた。

制気術の基本、それは大地に足を付けそこから全てを得ることだ。

周囲の状況を知ることができれば索敵は容易になり、相手の気を測
れば力量を知れ、気を巧く拳に乗せられれば……攻撃の破壊力は大地
を割る。

この制気術こそ美鈴の本尊……御金堂である。

以前の敵襲で美鈴が敵の数をぴたりと当てられたのも、この察気に
よるものらしい。

もつとも、この清流のように乱れやすい気というものを精巧に操る
のと言うまでもなく非常に難儀だ。

ましてや戦闘の最中に気を練るのは果たしてどれほどの修練によ
るものなのか……。

先は途方もなく長く険しい。

気を収めると間髪入れずに組み手が始まる。

当初に比べれば格段に動きは洗練され、美鈴の動きを目で追い始め
ては来たが、それでも遅い。

私が一撃仕掛ける間に向こうから三発の返し技が飛んでくる。

それらを全て受け流しさらに一步踏み込み間合いを狭めていく。近づけば近づくほどに攻撃を喰らい易くなる中でどこまで間合いを無くせるかという修行だ。

今の限界は腕半分程度まで。

ちなみに美鈴が攻撃を流す側をやると、唇を奪われそうな距離まで接近される。

この壁を打ち破るには度胸も必要なのだろうか。

その後は正拳突き。

重い中華服が振り切れそうになるまでひたすら打ち、打ち。打ち続ける。

この修行の辛いところは回数による肉体的な負担ではなく、精神的な負担であった。

美鈴は何発打つたら終わりにするかと言うことを私に告げない。

何時間も打った後急に終わりを告げるのだ。

この苦しさがいつまで続くのか分からない不安。

それに耐えることが最も辛かった。

心を無にして、目の前に全細胞を集中する技術をそこで身につけた。

正拳突きが終わるとほどなくして、中国茶を淹れる時間になる。

中国茶というのはその名の通り中国の伝統的なパフォーマンスで、その内容は細長い注ぎ口を持つティーカップを華麗に扱い茶を注ぐというものだ。

あの注ぎ口が長い独特のティーカップを、軽やかに動かすのだがこれがいぶん難しい。

中で茶葉が沈澱しないよう常に動かし続け、茶をこぼさぬよう繊細に扱う必要があるのだ。

その上で効率的に、かつ美しく……。

即ち、演舞に通じる物を学ばなければならない。

最初こそただのお湯になったり超特濃茶になったりと女子力皆無の己の不得手に苦労したが、最近では中々に腕前を上げたと思う。

まあ一日に千杯も二千杯も淹れてたらどんな俗物でも腕前を上げ

るだろう。

入れたお茶は全て私が飲まされるのだが、これも結構辛かった。締めくくりは柔軟。

美鈴な私の体を、バキバキという体の悲鳴を聴きながらあらゆる角度へと曲げていく。

筋肉が断絶する半歩手前だ。

いつそ切れてくれた方が楽かもしれない。

結果として体は軟体のようになってはくれたが、もう二度とあの柔軟だけはやりたくないと思っている。

そんなこんなで、私は修行に明け暮れた。

おお人間よ、生きてしまおうとは情けない。

私はギャグ小説の主人公だから死なないが、これがシリアスだったら間違いなくシャーロックホームズのお世話になり、館は密使殺人のトリックの現場とされていただろう。

門番として、たまに紛れ込む妖怪だの妖精だのをいなしながら心技体を磨き上げていったおかげで歪だった腹筋は割れて、しなやかかつ強靱な肉体を得た。

少なくとも数ヶ月前の私とは格違いだろう。

体に流れゆく小川のせせらぎのような気の流転を、ハッキリと聞き取れる。

傲慢にさえ聞こえるがあえて言おう。

私は……強くなった！

そしてついに今日……とうとう私は、美鈴の唇を奪えるほどの間合いに到達したのだった……。

「ダーズリンです。どうぞ」

「ああ、ありがとう……うん、美味しいわ。また一つ腕を上げたね」

「お褒め預かり恐悦至極です」

「ところで咲夜……彼奴らは一体何をしているのかしら？」

「最近、貴子が美鈴と修行を始めたそうです」

「仕事しなさいよ……咲夜、顔が赤いわよ？大丈夫？」

「心配なさらず」

??

「……いやはや恐れ入った！なかなか筋が良いですねえ。この短期間でここまで腕を上げるとはー」

「いやいや、美鈴さんの教えが良いんですよほほ」

「嬉しいことを言ってくれますねえへへ」

ニコニコと笑いながらお互いを褒め合う。

これは奇怪な儀式でも修行でもなく、ただの日常の一部だ。

私はここ数ヶ月の修行で美鈴とかなり打ち解けた。

弟子と師匠の壁を、門番という仕事を超えてくれたのだ。

共に汗を流したなら、もうそこに絆はある。

やっぱり美鈴に教えを乞うて正解だった。

実は、美鈴は教え方が上手いのだ。

メニューこそ殺人的だが、その計算された鍛錬で得られる効果は絶大すぎる。

本当に強くなったと力の昂りを何度も何度も感じる。

しかしそれと同時に、まだまだ未熟であることをよく理解できるようになった。

そしてこんな屑の私にも、もっと高みにいきたいという向上心が芽生えた。

暗い曇天に光明が刺してきたし、明日に希望が持ててきた。

己を鍛えることが、ここまで素晴らしいとは思わなんだ。

私はここで後の人生に繋がる教訓を得る。

それは、幸せな時に限って不幸はやってくると言うことだ。

「いやー、やっぱりこの時の構えがですね……」

詰所で、私の淹れた中国茶を嗜みながら乙女トークよろしく戦闘術について語っていたときに、一匹の妖精メイドが血相を変えて飛んできた。

「美鈴さん！大変です！来てくださいー！」

??

「本当に不甲斐ないわ……ゴホツゴホツ！」

咲夜はベッドに横たわっていた。
あまりにも顔色が悪い。

元々血色のいい顔では無かったが、それよりもはるかに酷かった。
まるで生気の欠片も無いような青白い顔で一点だけ、頬が紅潮して
いる。

妖精メイドがせつせと額の濡れたタオルを取り替えていた。

ここまで連れてきた妖精メイドが、泣きそうな声で病状を説明す
る。

「疲労から来る風邪を拗らせたみたいで……高熱があるんです……」

「少し失礼しますね」

そう言って美鈴が咲夜の手を優しく握った。

するとみるみるうちに、咲夜の顔から苦悶の色が薄まっていくな。

「気を整えましたから、少し安静にして休んでいればすぐに良くなり
ますよ。しばらくは養生してください」

「そもいかないわ……ゴホッ、私が抜けたら館の家事や洗濯はどう
するのよ……」

吐血しそうなほどに枯れて乾いた咳をしながら咲夜がいう。

よっぽど疲れていたのか拗らせてしまったのか、ただの風邪とは思
えない。

そんな状態で働く事は絶対に不可能だ。

下手をすれば命すら危ういだろう。

しかし、確かに咲夜がいなければこの館の生活は回らなくなってい
まう。

本当に、全て任せっきりだったのだ。

どうするべきか……。

私が館の運営について頭から煙が出そうなくらい悩んでいると、美
鈴が陰りもなく励ますように答えた。

「しばらくは、私が代理で指揮を取りますから、その点は安心してくだ
さい……まずは自分の身ですよ」

「ゴホッゴホッ……迷惑をかけるわ……」

「いえいえ」

「……というわけなので、少しの間メイド長の職を代行させて戴きます」

どこからかメイド服を持ってきてそれを小脇に抱えた美鈴は、主人レミリアと喋っていた。

「咲夜は大丈夫なの？」

真つ先に咲夜のことを聞くあたり、カリスマ（おじょう）が伺える。レミリアの声には心配の感情が多分に含まれていた。

咲夜のことをよつぽど気に病んでいるのだろう。なるほど、カリスマだ。

「ひとまずは大丈夫ですが、仕事の割り当てはもう少し変えたほうがいいかもしれません」

「……そうね。あの子には色々任せすぎたわ」

「あと、久しぶりのメイド仕事なんで、粗相は多めに見てくださいね」

「……貴方がその服を着るのはいつぶりかしら？」

「……美鈴」

「なんですか？お嬢様」

「……よろしく頼むわよ」

「なんなりと」

??

私は……何者なの？

人智を超えた能力を持っている。

妖怪に育てられた……けど、妖怪じゃない。

私は……一体。

物心がついた時には、既にこの館に居た。

それより前の事は知らないし、美鈴達に聞いてもいつも誤魔化して教えてくれない。

それが少しだけ引っかかるが、別に対して自分の出自など気にしないしどうでもいい。

どこで生まれたかよりも、どう生きてきたかが大事だと教えられたからだ。

私は人間だ。

たった一つの点以外において、私は人間だ。

たった一つの点……それは私の力。

『時間を操る程度の能力』

昔から、時計を眺めるが好きだった。

カチツカチツと、一定のリズムを乱す事なく刻む秒針の音がたまらなく好きだった。

ある日、私の身体にある異変が起きた。

体はおろか、心すら病んでいないのに。

いつも通りの時間に目覚めたと思ったら、時刻はまだ五時前を指していた。

きちんといつも通り寝たはずなのに……。

不思議に思いながら、また飽きもせず時計を眺めていた。

その時はまだ、違和感など無かった。

ただ、いつもより時計の針の進みが少しだけ遅く感じた。

その次の日、また私は早くに覚醒した。

いつも通りのはずなのに……なのに時計を見ると、針は四時前を指していた。

カチツツ……カチツツ……。

ようやく気づいた。

遅い……時の進みが、遅すぎた。

慌てて窓の外を見ると、鳥が、ゆつくりと……ゆつくりと羽ばたいて宙を舞っていた。

スローモーションに動く世界は、どうにも不気味だ。

私は恐怖した。

隠れるように布団にくるまり、皆が目覚める時間になるまで、ゆつくり……ゆつくりと流れる時間をすごした。

体感で十五時間くらい、そうしてくるまっていた。

私はすぐさま館の頭脳であるパチュリー様に、この奇怪な出来事の

一部始終を伝えた。

するとパチユリー様は少し驚いた後、大きめにため息をついて、「咲夜……貴方には力があるわ。人間とは思えないほどの、強大な力が。それを、人は……呪いともいうわ」と言った。

いつもは早口なパチユリー様が、その日はやたらと焦ったく喋っていた。

私の能力のせいだろう。

パチユリー様がいうには、私の中で目覚めた時間操作能力が暴走し、時間の流れを出鱈目にしてしまったそうだ。

それが深刻化すれば永遠に時が止まったり、あるいは加速度的に時が進み浦島効果に見舞われたりする恐れがあると。

私は当時メイド長をしていた美鈴に、修行を頼んだ。

お嬢様の意向とパチユリー様の口利きで、心身ともに鍛えれば能力を制御できるようになるとの事だった。

美鈴の修行はトンチキなものが多かった。

十秒きっかりで時計を止められるようにする修行とか、体内時計を正確にする訓練とか、その内容はどれも少しふざけているようで、どこか真面目な面もある。

まるで美鈴そのものようだった。

そんな鍛錬をこなし、私は時の歯車を少しづつ掴み始めていた。そしてある日、時と私が一つとなるのを感じた。

息を止めるように時を止め、歩みを進めるように時を進める。

それらがいとも容易く、まるで赤子の手を捻るように出来るようになった時、私は生まれて初めて笑った。

そして幾年か経ち、私はメイド長の座を頂いた。

いや、というよりなし崩しでその座になった。

美鈴が門番の仕事に行くと言ったのだ。

メイド長としての美鈴の働きは偉大で、従業員やお嬢様達からの信頼も厚かっただけにその引退発言は激震だった。

各々から惜しまれ、メイド長を続けて欲しいとの声が大多数だった。

た。

しかし何故か美鈴の決意は固く、結局はお嬢様が折れて美鈴は門番となった。

そして、二番目に仕事のできた私が繰り上がりでメイド長になったのであった。

メイド長としての日々は、とても辛いものだった。

美鈴の人徳によって言うことを聞いていた者も多く、若輩者の私の指示にしたがってくれる者は少なかつた。

頼んだ仕事をしてくれず、走り回ったり遊び回ったり。

私は苦悩した。

美鈴に相談しようかと、何度も思った。

けれど出来なかつた。

私を信頼し仕事を預けてくれた美鈴に無様な恰好は見せられなかつた。

頼まれた仕事を出来なかつたら、私の指示を聞かない妖精メイドと同じだとも思った。

だから私は、自分の能力を使って館の全ての仕事を自分でこなし

自分一人でやればいいだけのことなのだから。

言うことを聞いてくれなくなつて構わない。

そうやって、一日に七十二時間は働いていただろうか。

人間の体は軟弱だった。

私の身は次第に壊れていき、食欲は失せ、どんどんと痩身になつていった。

私はまた笑えなくなつていた。

でも全てが上手くいかない訳じゃ無かつた。

一人で働く私に心を開いてくれたのか、何人かの妖精メイドが私と働いてくれるようになった。

ある日、朝の洗濯をしようと洗濯場に向かつた時、何人かの妖精メイド達が仕事をしてくれていたのだ。

その時に見せられた笑顔は、私の心に巢食うドス黒い岩塊を簡単に

打ち砕いてくれた。

そうして、私は不恰好ながらもメイド長として仕事を全う出来ていた。

けれど、やはり無理をすれば身体に返ってくる。

結局、人間の体は軟弱だった。

幾年分の疲労が、私の体から立ち上がる力すらをも奪っていった。そうして、今高熱を出し寝込んでいるザマだ。

「……………!!」

なんて……………不甲斐ないのだろうか。

情けなすぎて、溢れる涙が止められない。

震える体を抑えられない。

私は何も出来なかった。

美鈴から受け継いだメイド仕事一つ満足にこなせない無能だ。

生きる価値のない化け物だ。

育ててもらった恩に報いることすら出来ない最低の生き物だ……………。

どうして、上手くいかないのだろうか。

しばらくの鳴咽。

そして、咲夜は思い悩む。

彼女の心に、得体の知れぬ黒い芽が出た……………。

泣いちやったぜ咲夜

「ジャガイモの芽は深いからしつかりとる！床は乾拭きを丁寧に！鍋の蓋は煮立ってからしか空けない！」

メイド長代理、先代大女中の紅美鈴の働きは凄まじいものであった。

何人もいる妖精メイド一人一人に、端的かつ的確な指示を繰り出し、その上自分自身も百人分くらいの働きのする。

気になったのは、誰一人としてその指示には反かず、むしろ指示をもらったことを誇りに立てるかのように意気揚々と仕事に向かうことだ。

それが、紅美鈴の長きにわたる従者経験によつて培われた仁徳によるものだろうか。

貴子はその目まぐるしい労働に助っ人として呼ばれ、久しぶりの激務に身を焦がしながら思った。

そもそも、妖精メイド達はこんなに熱心に仕事に取り組むような集団だっただろうか。

わたしの知る限りでは、サボり手抜き上等の職務怠慢天国だったんだが。

それ故に、咲夜は時を止める能力を多用し、肉体を酷使しつづけ過労でぶっ倒れたのだと考えていた。

しかし現状、あーも嬉しそうに窓を拭いたり野菜の皮を剥いたりしてるところを見るに、バリバリ働けるそうだ。

少なくとも私よりかは。

つまりは、長きにわたる信頼のある美鈴の言うことは聞くが、新参者の人間である咲夜が言ったことは聞かないって訳だろうか。

なるほどなあ……。

てか、こんな大人数でやっても目が回りそうなくらい忙しい忙しいと騒いでるような仕事量を、咲夜はほぼ一人でこなしていたのだろうか？

まず常人なら発狂する。

体を壊すどころじゃ無い。

一体一日何時間時を止め、何時間働いていたのだろうか。

そりゃ倒れもするし、下手すりゃ時間の止めすぎて早死してしまうだろう。

時を止めたまま能力使用者が死ねば、世界はどうなるのだろうか。

少し恐ろしくなる。

そして……美鈴は、あんなにも働けるのにどうしてメイド長の看板を下ろしてしまったのだろうか。

そもそもこの館に門番など必要だろうか？

この館の主人は天下の大妖怪、吸血鬼レミアスカーレットだ。

時折幼い言動こそあるが、その強大な力たるや、到底敵うものはいない。

門を守る必要などない。

それなら、メイド長を辞めず、もっと時間が経ち咲夜が館の信頼をさらに持っていれば、現状咲夜の仕事はもっと楽だった筈なんだが。

わからないことまみれだ。

その後も美鈴の激は飛び続け、館は大忙しであった。

その日の夕食は、中華料理であった。

天津飯に酢豚なんかだ。

「流石は元メイド長ねえ美鈴。時も止められないのに館の仕事は終わっている。門番には勿体なかったかしら」

そう零すレミア。

「意地悪言わないでくださいよーお嬢様」

美鈴は中国茶のパフォーマンスをしながら返す。

「わかっているわ。貴方の思いも。ただ……」

その言葉尻は歯切れが悪く、聞いてお互い美鈴もバツの悪そうな顔をする。

「……これは、私の課す最後の修行なんです」

その言葉を聞いたレミアが拳を机を叩きつけ、鈍い大音が部屋に響く。

「その修行で、あの子がどれほど……!!」

「お嬢様っ!!」

ピシヤリと制す美鈴。

「……あの子はもう気づいています。どうかご理解を」
諭すようにレミリアの前で頭を下げながら美鈴が言う。

「……悪かったわ。私も疲れてるのかしらね」

「いえ、声を荒げて申し訳ありません」

「……美鈴」

「……はい」

「あの子をよろしく頼んだわよ……」

——朝11時（人間で言う夜11時）

私と美鈴は、館の仕事がなんとか一段落ついたので、残った細かい仕事は妖精メイドにまかせ門番の仕事に戻っていた。

一日美鈴式で仕事をしていてわかったが、この館の仕事量は異常だ。

百人単位で女中がいるこの館が暇しないような仕事量だ。

そんな仕事を投げ出さない理由……。

「美鈴さん……咲夜さんってどうしてこの館に？」

「……どうしてでしたかねえ？忘れてしまいました」

「美鈴さんも気づいているんでしょう？」

私が問うと、美鈴は少し驚く。

「何がですか？」

「いつもはサボってばっかの妖精メイド達が、美鈴さんの言うことになると態度を変えることです」

「……………」

眉間に少し皺を寄せ、眉毛の角度が狭くなる美鈴。

しかし私は恐れず続ける。

「咲夜さんが疲労で倒れたのだから、極端に気力を使い過ぎていたからです。咲夜さんは……一人であの仕事の量を？」

「ええ。咲夜さんは毎日あの量をこなしていました。一人です。

……所で貴子さん。妖怪と人間の違いとは何かご存知ですか？」

「話を変えないでください」

「話は変わってません」

即答する美鈴。

私には話が掴めないが、素直に質問に答える。

「……妖怪は強く、人間は弱いつて事くらいしかわかりませんが……それが一体……?」

「そうです。人は弱いんです。脆いんです」

「……だったら尚の事、何故咲夜さんがあんな無茶をしているの知った上でほっておいたんですか!?!」

私はつい声を荒げてしまう。

その声は空にこだましていき消えていく。

荒げる私とは対照的に、美鈴は冷静に、穏やかに続ける。

「人は弱い……人は、決して一人では生きていけないんです」
「……………」

「私は咲夜さんに、仲間を頼ることの大切さを知ってほしかった。だから部下に無理を言って、わざと仕事をサボらせたんです」

「じゃあ、この館で咲夜さんのことを悪く思ってる者は……」

「そんなのいる訳ないじゃないですか! 咲夜さんが倒れた時、一番心配していたのは咲夜さんの言うことを無視していた連中です!」

「そうだったんですね……」

「咲夜さんの頑張りには、みんな分かっているんですよ」

「……っだそーですよ! 咲夜さん!」

「えっ?」

岩陰から……寝巻き姿の咲夜さんがふらふらとおぼつかない足取りで歩いてくる。

「美鈴……」

しゃがれた声で、涙混じりの言葉を発する。

その右手には……血のついたナイフが握られていた。

「な、咲夜さん!?! 何でここに!?! それにその右手のナイフは……」

あまりの急な事態に慌てる美鈴。

「聞かしてもらってたの……」

「き、聞いてたんですか?」

少し気恥ずかしそうにする美鈴。

「ええ。全部ね。お陰で踏みとどまれたわ」

「踏みとどまれたって?」

「私はごくりと唾を喉に降ろし、伝えたくない事実を伝えた。」

「咲夜さんは……自殺しようとしていたんですよ」

事の発端は数刻前……私が大量のジャガイモの皮むきを終えて、一息ついていた時のことだ。

美鈴との修行の成果で、気を悟れる私は、ある一つの邪気を感じた。気の源流は咲夜さん部屋の隣の部屋。

私は全速力で駆け上がり、15秒程度でその部屋についた。

ドアに鍵がついていたので、意を決し、そのドアをこじ開けたら、そこにいたのは……ナイフで自分の喉を突き刺そうとした咲夜さんでした。

「何してるんですか咲夜さん!!」

「もう……放つといってくれないかしら……」

「……咲夜さん」

咲夜さんから発せられる気は、まるで枯れかけの老木のようなものでした。

それは精神的にも肉体的にも、疲労困憊し、何をする意欲も湧かず永遠のような抑うつ感に苛まれる……。

咲夜さんは……鬱病だったんです。

「……………」

口を半分開け絶句する美鈴。

その顔は呆然の中に後悔を滲ませた暗い顔だった。

咲夜は、何も言わずにいつものような暗い目をしながら、少し焦点の合わない目で美鈴を見つめていた。

「私は咲夜さんを無理矢理引き止め、この話を告げました。気を覚られぬよう、私の気でカモフラージュしながら聞いてもらったんです。美鈴さんの本音を」

美鈴は少し長めの息を吐いて門の壁にもたれかかった。

そして、空に問いかけるように……自嘲気味に呟いた。

「私は……私は間違っていたんでしょか」

その問いに貴子は答えることなど出来なかった。

答えなど分からないし、分かったとしてもそれを答えるのは咲夜だからだ。

その思いを知ってか知らずか、答えるべき人間である咲夜はこう答えた。

「……間違つてなんかいないわ。美鈴」

「咲夜さん……」

咲夜は美鈴に一步近寄り、二歩よろけて、三步駆けた。

「私は……貴方になりたかった。何よりも強くて、優しく……でも私は貴方にはなれなかった」

必死に紡ぐように言葉を編んでいく。

声は震え、咲夜の頬には透き通る二本の道が流れた。

少しの嗚咽……しゃくりあげそうになりながら続く咲夜の言葉。

「一人で何もかもを背負うなんて……私には無理だったわ。私は弱かった。誰かを頼る強さを持っていなかった……!」

咲夜の曝け出しの本心と静かな歎歎。

「私も……本当は気づいていたわ。美鈴のようにではなく、皆を頼るのが私のやり方だ……」

でも、と接続語を発し、逆説の言葉を繰り出す。

「私は……貴方のようになりたかったのよ……だって貴方は……私の、憧れなんだから……」

咲夜はそう言いきって、疲れたように息を切らす。

美鈴はそれを受け……3秒考えて返答する。

「咲夜さん……」

その返答とはすなわち、目の前の憂愁に満ちた少女を……ただ黙って抱擁することであった。

美鈴は咲夜を優しく抱きしめて、後頭部を柔らかくさする。

少しの間、咲夜は美鈴の胸の中で泣いた。

美鈴も、咲夜を抱えながら泣いた。

二人の間に言葉は無かったが、お互いに許し合い、求め合い、愛し合う確かな声があった。

心から心へと伝わる想いがそこにはあった。

しばらくして、咲夜はメイド長として館の仕事に復帰した。

皆も事情は深かれ浅かれ分かっていたそうで、咲夜のことを悪く思うものなどいるはずもなかった。

そしてまた、前と変わらない日々に戻っていく。

私と美鈴は館の門番として毎日のように厳しい鍛錬（将棋麻雀囲碁オセロ）を積んでいるし、咲夜は今日も忙しそうだ。

変わったことと言えば咲夜の仕事のスタイルだろう。

以前と比べて、明らかに周りの者に仕事を託す事が増えた。

周囲の人間を信じて頼るという、人間の強さを、温かみを始めて持てたのかも知れない。

その顔からは憂いが消えていき、目のクマは薄くなり、年相応の美しい少女へとかわっていった。

美鈴はと言えば、

「私も親バカつてもんですねえ。子供心親知らずとは言ったもんです」

とだって笑っていた。

美鈴と咲夜は、お互いを思うあまりお互いに間違えあい、傷ついていた。

これから、一歩づつやり直していくのだろう。

ゆっくり、長い時間をかけて……。

「ねえパチエ……私の影薄すぎない？」

「ゴホッ……そうね。私に関しては台詞もなかったわ」

どうも、紅魔館の雇われ雑用係こと貴子だ。

この前、咲夜さんと美鈴さんのちよつとしたすれ違いの解決の立役者として関わって久しい。

私は自分でも何故か分からないが、何かと問題を起こしてよく怒られている方だ。

しかし、ここまで怒られた事は一度もなかった。

以前、咲夜さんのブラジャー（分厚いパッド入り）をうっかり何処かへ風に乗せて飛ばしてしまった時も、こっそり美鈴さんと煙草を嗜んでいた時も、レミリア嬢にさりげなくセクハラをした時でさえお説教で済んでいた。

最後のに関しては正座で5時間くらい怒られたが。

しかし今回はよっぽどの事をしでかしたらしく、私は紅魔館の地下にある懲罰房のような所に入れられていた。

一体何に使っていたのか、この懲罰房には拷問器具やら血痕やらが散漫していて、連れてこられた時には流石に肝っ玉を冷やした。

しかし、しばらくそこで大人しくしておけると言われただけで特段肉体的な制裁を下される事は無かった。

まあつまるところ謹慎ってことだね。

さて、じゃあ気になるのは私は一体何をしでかしたのかだ。

その事について3時間ほど前からずっと考えているのだが……まいったなあ。

昨日の記憶が……全く無い。

確か、昨日は何やら月一か何かやる飲み会的な奴があつたんだ。

そこでは上品に酒を嗜む場だったはずなのだが……。

まあ私がかいらない事をしたのだろうな。

覚えているというか、推測したと言うか……目覚めた時から今までめちやくちやに倦怠感と頭痛が続いていたので、おそらく昨日酒を飲みすぎたのだろう。

とはいえ、記憶もない以上反省しようにもできなかつたりするので休暇を貰えたと思つてのんびりしていよう。

それにしてもここ……狭いし暗いなあ……。

——博麗神社

「これは……」

博麗霊夢は悩んでいた。

彼女の身に起きた異常事態について。

「ここ、幻想郷では非日常など日常的なものだが、今回の「コレ」は何かが違う……。」

天賦の直感を持つ巫女、霊夢はそう思わずにはいられなかった。

そんな事を神社の茶を啜りながら考えている時は、大抵彼女の知り合いである魔女が飛んでくる。

「おーい！霊夢うー!!」

箒に跨り古典的魔女服を着込みながら飛んでくるのは、魔法使い、霧雨魔理沙であった。

「何よ。騒がしいわね」

「騒がしくもなるだろー！一体何が起きてやがるんだ!？」

霧雨魔理沙は、騒々しくがなり立てる。

彼女の熱い眼差しと、霊夢の冷めた視線を足して二で割ったとしても熱い眼差しになるくらいには情熱的だ。

「何が起きているのかしらね……ただ、これは間違いなく異変よ」

「そりゃ分かかってるんだが……それにしたってこれは一体……」

「あら、アンタにも『出た』の?」

「ああ……他にも何人かいる……」

「そう……」

霊夢は渋茶を啜りながら少し考えるように黙り込む。

「せっかち者の魔理沙はその少しの間も待つてられないようで、せかせかと返答を急かす。」

「なあ霊夢！これは一体何なんだぜ!？」

「分からないわ……とてつもなく強い霊力を持っていると言うことしか」

「私のは銀色の甲冑を纏った人型だ……霊夢、お前のは?」

「私のは……あれよ」

「あれ?」

霊夢が指さしたのは襖……の奥の神社の境内であった。

魔理沙が戸を開け、その指さした先を目を凝らしよく見てみると、半透明な水色の、人の形をした物体が何やら箒とちりとりで落ち葉掃

除をしていた。

いや、させられていたのかも知れない。

「あれが私のよ」

「お前コレを掃き掃除に使ってんのかよ……相変わらず呑気なヤツ……」

魔理沙は呆れ口調で溜息を吐く。

「まあいいけどさ、アレとかコレとかじゃ言いにくいから名前だけでもつけとこーぜ」

魔理沙は元気を取り戻し霊夢に提案する。

「そう？私は不便しないけど」

「これからするさ。これはれっきとした異変だぜ」

「ほんと……面倒くさいわね」

「そうだなあ……決めたぜ！こいつらの事は蕎麦と呼ぶ事にしよう！」

「……変なネーミングねえ……理由は？」

「私のは、蕎麦屋で飯を食ってたら急に現れたからな。蕎麦屋に現れ立つと言う事で蕎麦だ！」

思わぬネーミングに霊夢は半目で魔理沙を見る。

そんな視線など気にも留めず魔理沙は自慢げである。

「ねえ魔理沙……アンタのセンスには口出ししないけど、もう少しいいのではないの？」

「んーそうか？うーん……それならスタンド……とでも呼んどくか？」

「あら、いいじゃない。一応聞いとくけど理由は？」

「その蕎麦屋、立ち食いだったんだよ。だからスタンド」

「……………」

霊夢は絶句した。

少しの居心地の悪い沈黙がぬるりと通り抜ける。

「あとは個人個人のスタンドの名前だな……よし霊夢！こうしよう！」

魔理沙の提案はお互いのスタンドに、お互いで名前を付け合う、と

言う旨のものだった。

霊夢もまあ暇つぶしにはなるだろうと思ってそれに興じた。
しばしの時が立つ。

「……よしーできたぜー!」

手を墨で少し汚している魔理沙。

墨汁に和紙というのは慣れていなかったのかも知れない。

「……私もできたわ。こんなもんでしょ」

霊夢の手は全く汚れていない。手慣れたものなのだろう。

「それじゃあ一緒に出すぞ!セーの!」

スターブラチナ
『星之白銀』

シルバーチャリオッツ
『銀之戦車』

「あら、なかなかいいじゃない。魔理沙のことだから次はうどん屋とでも言うのかと思ったのに」

「それでも良かったんだがな……カッコ良さ重視だ」

「そう、まあ何でもいいのだけれど」

「私のは銀之戦車か……まあいいぜ」

「何よ。不満なの?直感でつけたんだけど」

「いや、大満足さ。というより、もっと大事な事があるんだ」

魔理沙は仕切り直すようにそう言つて、居住まいを直す。

「何よ。このスタンドとやらの事できたんじゃないの?」

「ああ……霊夢、お前は今日一度でも外に出たか?」

魔理沙の思わぬ質問に霊夢は言い淀む。

「……いや、出てないわね。朝の祈儀はまだだし、境内の掃除はアレに任せてたし……」

そんなだらしない巫女の話に魔理沙は特になんとも思わず、話を続ける。

「そうか。なら見たほうが早いな」

そう言つて、魔理沙が戸を勢いよく開ける。

そこにあった風景……それは、幻想郷が深紅の霧で満たされているものだった。

「……何よあれ。赤い……霧?」

「知らないぜ……これをしでかした奴はとんでもない野郎って事しかな」

霊夢はしばし黙り込む。

流石の魔理沙もその沈黙の意図を察したようで、何も言うことなく待っていた。

少しした後、霊夢は思いっきり溜息を吐いて気怠そうに立ち上がる。

「ほんと……面倒事ってのは纏めて来るものね……」

「そんなお前に一ついい情報をくれてやるぜ」

「なによ。いい情報って。もう蕎麦の話は良いわよ？」

「そうじゃない。この異変についてだ……」

——懲罰房

あー、暇だ……。

一体私は何をしでかしたのだろう……かれこれ3日くらいここにぶち込まれている。

もしかして……もうここからは二度と出してもらえなかつたりするのだろうか？

え、私そんなに酒癖悪かったっけ？

レミリア嬢に勢い余ってズキユンしたとか無いよな……？

……うん。大丈夫だ。私は少なくともキス魔では無かった……はずだ。

それに、妖精メイドが飯は持ってきてくれるし、殺されるわけではないと思う。

というより、上の階でドタドタバンバンと騒がしくやってる音が聞こえて来るからには、いつものように忙しく働いているのだろう。

暇すぎる……せめて、美鈴さんみたいに遊び相手が一人でも居ればなあ……。

あれからも往生際悪く、何度も何度も自分の過ちを思い返してはいるのだが全く記憶に浮かんでこない。

そんなしこたま酒飲んだのか？

いや、たしかにこの館の酒はどれも秘蔵の銘酒と名高い高級ワイン

とやらだそうだが、全く記憶に残らないなんてバカ飲みすぎじゃない？私。

不幸な事に隠し持っていた煙草も没収されていて、ニコチン不足でイライラしてきた。

早く出してくれ……。

「ねえ貴方だあれ？」

ん？今背中から声が聞こえたような……。

え、タバコの禁断症状って幻聴まで聞こえるようになるの？

結構鮮明に聞こえたんだけど。

「ねえ？聞こえてるでしょ？」

いや、これ居るな。

幻聴にしては声が反響しすぎている。

何処となくレミリア嬢に声質が似ている気もするが、親族がいるなんて聞いたこともないし……。

じゃあ誰か。

……誰だ。

はあ、なんかこの声に呼ばれて振り返ると良い事が全く起こらない予感がするんだけど……まあしようがないよね。

無視って一番嫌いだし。

「ねえ……聞こえてないの……？」

「聞こえてるよ」

振り返ったら、そこにいたのは小さな……本当に小さな女の子であつた。

金髪で……レミリア嬢にめっさ似ている。

アンルイスと半ライスぐらい似てる。

なんか翼がえらい事になってるけど、遠目で見ればほとんどレミリア嬢だ。

唯一違う点……それは彼女から発せられる気の流れがあまりにも歪であつたことぐらいか。

何もんだ？

「聞こえてるなら返事してよー！」

「ちよつと考え事してたから」

「ふーん？ところで貴方だあれ？」

「嬢ちゃん。良い事を教えてあげるわ。人に名前を聞く時はね」

「自分が先に名乗れ……でしょ？私の名前はフランドールよ！」

「あ、ご丁寧にどうも」

「それで、貴方の名前は？」

「お初にかかります。ここの館で働いている貴子って言うものです」

「聞いてないわよ！」

「ええ……」

今めちやくちや聞いてたやん……。

それにしてもフランドールか……。

喜怒哀楽というか、情緒の動きが激しすぎるな。

そのペースで感情切り替わってたら感動する小説とか読めないだろうに。

そんな君には、ろくでなし東方という小説をお勧めする。

間違はなく感情は動かない。

てか、レミリアにそっくりなんだけど、レミリアの従姉妹か何か？

もしかして私が謹慎してる間にレミリアの叔父さんでも来てたの？

そうだとしたら不味い！

危うい！

主にレミリア嬢の貞操が！

「貴子、今めちやくちやバカな事考えてる」

「何を失礼な」

「どうせ、私をお姉様の従姉妹とでも思ってたんでしょ？」

「お姉様……ってことはレミリア嬢の妹さん？」

「うん！そうだよ。まあ知らなくても無理は無いけどね」

マジか……めちやくちや大御所じゃないすか。

今までなんで会ったことないんだろうか？

てか妹なのにこんなどこで何してるのよ？

暗くて狭いところが好きな根暗系なのか？

「貴子のせいで今大変なのよ？」

「えっ！私は何をしたか知ってるんですか!？」

「うん。知ってるわ！でも教えてあげない！」

「なっ!？」

「それを教えたらここから出て行っちゃうもん！」

「出て行くって……そんな大層な事なの？」

「私は面白いけど咲夜はまた倒れそうになってたよ」

おい私……真剣に何をしたんだ!？」

それを知ったらここから出るって……ならもうこんな懲罰房でじっとしてられない！

「すいません、ちよつと用事ができたので」

「ここから出て行っちゃうの？やめといた方がいいと思うよ？」

「何があったのかは知りませんが、私に関係するのは確かなんです」

そう意気込んで、牢の出口に手をかけた瞬間、取手から火花が散り私は吹き飛ばされた。

痛っ!!

これは……魔法？

「ほら！ここから出るならあれを突破しないとダメ！」

「……パチュリー様の仕業ですかね」

「ううん！違うよ！私がやったの！」

「私を閉じ込めておくように頼まれたのですか？」

「お姉様とか美鈴ばかり遊んでズルい！私も貴方で！遊びたいの！」

そんな駄々っ子みたいに暴れても私は聞き逃さなかった。

今、私「で」遊ぶとフランドールは言い放った。

え、この館が悪魔の館と言われる由来の方ですか？

しかも、ここから出してくれないと言う意地悪。

しかし困ったぞ……外の事が気になるってのに、このおてんばちゃんワガママを聞かねばならない。

てか私の命の危険センサーの針が振り切れて折れてる。

レミリア嬢は分別があつたからこそ人間の私でもある種の安全感は確保されていた。

目の前のこの子にもそれがあると言う保証は……ない。

元妖怪退治屋の知恵其の二だ。

絶対に勝てない相手と出会い、なおかつ逃げれない時は気を逸らす事を試してみる。

「私で遊びたいですか……けれど、ここには遊び道具なんて無いですよ?」

「貴方がいるわ!」

「私では妹様には少々退屈だと思えますよ」

「うーん? そうかな。じゃあさ! お話ししよう!」

「それなら、お茶でもお淹れいたしますね」

「私ダージン!」

——博麗神社

「さてと……鍵は閉めたし……火は消したし……うん、大丈夫ね」

博麗霊夢は、この異変の解決は夜に出むくのが良いと考えた。

昼では妖怪が活発でなく、スペルカードルールの練習ができないからだ。

もともと天賦の才を持っている霊夢にそんなもの必要ないが、異変解決には案外プロ意識が高いのかも知れない。

そう、言わずもがなこの赤い霧は、スペルカードルール発祥から初めて起こった異変なのだ。

その博麗霊夢のデビュー戦。

記念すべき第一陣を飾ったのは宵闇の妖怪、ルーミアであつた。

「邪魔よ。退きなさい」

「貴方は食べてもいい人類?」

「ダメっていったら?」

「前会った妖怪退治屋が、夜にコソコソしてる人間は食べてもいいって言ったのか?」

「誰よ……その無責任なモグリは」

——懲罰房

「ハックシヨオオラア!!!」

「どうしたの貴子？オジサンみたいなくしゃみして」

「誰かが私のことを噂してるんですよ……モテる女は辛いですね」

——境内上空

「まあいいわ、肩慣らしに退治してあげる」

「かかってこいなのかー!」

……ボコッグシャッオラア!!

「……口ほどにもないわね」

血塗れになったルーミアを一瞥もせず、霊夢は吐き捨てた。

すぐさま霊夢はより妖気の強い方へと飛んでいった……。

魔理沙から聞いた情報を元に目的地へと進んでいく。

「……こんな感じではよかったのかー?」

血みどろにやられたルーミアは、さっと起き上がってあっけらかんと言う。

ルーミアの周りには何もいない。

……そのルーミアの目の前の空間に奇妙な亀裂が入る。

その亀裂から、一人の女性顔を出して言った。

「ええ……上々の出来ね……これは約束の品よ」

そう言って女は隙間から何かを取り出す。

「待ってましたなのかー」

それは、人間の腕であった。

——魔法の森

「さて、どこからあたろうか」

白黒の服を着込んだ普通の魔法使いは、愛用の箒に跨って何処かへ飛んでいく。

彼女にはこの異変の心当たりがいくつかあった。

その一つが、彼女が今向かっている館だ。

最近、湖に巨大な洋館が現れたとの情報が入った。

その外壁は赤く塗られ、いかにもって感じの建物だそうだ。

「霊夢の奴に先は越させないぜー!」

魔理沙はそう息巻き、より一層飛行速度を上げてフルスロットルで湖の方へ向かっていく。

そして、湖であった氷精1匹を容易く仕留めた後、赤く血塗られた魔館……紅魔館の門前へとたどり着いたのであった。

紅魔館にはどうやら高度の結界が仕掛けられており、外から中へ近づく事ができないようになっていた。

よって、その中へと入るためには正門を堂々と通らなければならぬ。

故に、その守りをしている紅美鈴との衝突は不可避だ。

魔理沙と美鈴はお互いに目を飛ばし合う。

「あーどうも」

「よつす」

魔理沙と美鈴の間に交わされた言葉はそれだけであった。

まるで、旧年の友のように軽く、短く。

それだけの言葉を交わせば、彼女たちにはわかるのだ。

戦鬪の合図。

魔理沙と美鈴の戦鬪は前置きもなく始まった。

美鈴は軽く構えを取り、魔理沙も右手にミニ八卦炉、左手で箒を持つと言う特有のフォームを取る。

事前に枚数を宣言し、それらをぶつけ合う。

ガチンコではない。

命と命をぶつけ合うものでもない。

あくまでそれらは優雅で、厳美な遊戯。

そして、数刻も経たぬうちに呆気なく戦いは終わった。

傷ひとつなく勝利し地に足をつけたのは、魔理沙であった。

「門番がこれじゃあ中の野郎も知れたもんだな」

「面目ありませんお嬢様……一人ならず二人までも」

「…今二人って言ったか？もしかして私より先に紅白の巫女が来たのか!？」

「ええ、二人も通してしまおうとは……本当に不覚だわ」

美鈴の返事を最後までろくに聞くこともなく魔理沙は飛んでいっ

てしまった。

「くそっ！先を取られた！」

「……どうしてあんなに手加減をしたの？紅魔館の門番……紅美鈴でよかったかしら？」

空間に亀裂が入り、その亀裂からまたもや金髪の女が顔を覗かして言う。

道士風の服を着た妖しい女だ。

「なんのことだかわかりませんねえ……それと、今は館内終日面会拒否です。申し訳ありませんがお引き取り願います」

美鈴はそう言って魔理沙が開けっ放しにしていた門を見せつけるようにわざと大袈裟に音を立てて閉じる。

「すぐに終わる話ですの」

そう言って歩みを止める事なくその胡散臭い女は近づいてくる。

そうして美鈴の横を通り過ぎようとしたところを美鈴が拳を握った腕を出して止める。

「ここは通らせないって言ってるんですよ」

「……動けなくなる術を貼ったはずなのだけれど、思ったよりはやるのね」

「お引き取りください」

「あら、なら私も貴方に勝って通らせてもらいますわ」

そう言って、金髪の女が大きく二回手を叩くと、空中にできた隙間から、誰かが出てきた。

これまた黄金色の髪を耳のようなものが付いた帽子の中に押し込んだ端正な顔立ちをした絶世美人が出てきた。

その背中には、9本の尾が生えている。

九尾の妖獣……それは、目の前の女が空前絶後の大妖怪である事を意味している。

そしてその比率の整った顔立ち。

美鈴が暖かい美人だとすれば、目の前の妖獣は冷たい美人とでも言うのだろうか。

その色合いや顔立ち……対面する二者はあまりにも対照的な気を纏っていた。

「手短に頼むわよお藍」

隙間から顔を出してそう言う女。

藍と呼ばれた妖獣は抑揚のない声で返事をする。

「承知しました」

美鈴は武の達人だ。

その構えには無論隙はなく、黄金比のように究極的に完成されている。

対して、藍の構えは独特である。

自然体のようにするりと立ち、両袖を合わしその中に手を仕舞い込んでいる。

次の瞬間、美鈴の右の回し蹴りと、藍の左足から放たれた後ろ回し蹴りが交差し火花を散らす。

恐ろしいまでの轟音が、その攻撃の威力を物語っていた。

——廊下

うーん……ここ、こんなに広がったっけ？

門番を倒して中に入ったはいいいけど、なかなか元凶に会えないわ。

向かってくるのは雑魚の妖精メイドだけだし。

さっさと元凶をぶちのめして帰りたいのに。

……あのドアの先に、何かいるわね……。

今までの雑魚とは違う何か。

ちようどいいわ。

私のスタンドのスタープラチナの力を試せるかも知れない。

何この部屋汚ったないわねえ……。

宴会でもしてたのかしら。

ちゃんと掃除しなさいよ。

「あー、お掃除が進まない！ お嬢様に怒られるじゃない!!」

「あなた……は、ここの主人じゃなさそうね」
っ危ない！

スタープラチナ!!

「危ないわねえ!ここの館のメイドはいきなりナイフを投げるよう駈けられているの?」

「貴方……あなたも『それ』を持っているのね。私のザ・ワールドの前では無意味な『それ』を」

「どうやら勘は鈍っていないようね。」

ザ・ワールド……。

私のスタープラチナの力を試すに相応しいわ。

私のスタンドは力と精密性に優れている。

メイドが急に飛ばしてきたナイフを弾き飛ばしたのもお手の物だ。

「向かってくるのね……逃げずにこの私に近づいてくるのね」

「近づかなきゃアンタをぶちのめせないからね……」

「なら十分近づくがいいわ」

歩み寄る咲夜と霊夢。

ぶつかり合う互いの気迫。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!!

先手を打ったのは霊夢のスタープラチナであった。

放たれた神速の拳を蹴りで迎え撃つ。

「のろいのろい。ザ・ワールドは最強のスタンド。能力を使わずともスピードとパワーとて貴方のスタープラチナより上なのよ」

ザ・ワールドの金色の姿を晒し、咲夜は不敵に笑う。

「ザ・ワールドの力を試してみたかったのだけれど、試す必要もなかったわね」

「試すっていうのはキズにもならない撫でるだけのことを言うの?せっかく着てきた巫女服は破れたけど」

「どうしてこう博麗家というのは負けず嫌いなのかしら?まあいいわ。その下らない挑発にのつてもうすこしだけ試してやるわ」

今度はザ・ワールドの拳が放たれる。

その拳を少しずつ押されながらも弾き、逆に拳を返す。

スタープラチナは目にも止まらぬ速さで乱打した。

残像で拳がまるで数十本もあるように見える。

「突きの速さ比べか……」

霊夢と咲夜

スタープラチナとザ・ワールド

その激烈の拳が金属音のような音を立てて何発も何十発もぶつかり合う。

火花を散らしぶつかり合う拳。

両者は、その喧騒による血の沸りを抑えられずに思わず叫んでいた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!!」

——大図書館

「ここは……図書館か？後でさつくり頂いておこう」

霧雨魔理沙はそんな邪な考えをしながらふわりと飛んでいた。

そこに今にも倒れそうな痩せ細った少女が飛んでくる。

「その黒白！」

その声は細く小さい。

耳のいい魔理沙でなければこの広い図書館では聞き逃していたかもしれない。

「お？やっど手応えのありそうな奴が現れたぜ」

「私からすれば有象無象よ」

そう言っつて勝負を始める。

無駄な言葉は交わさない。

それが、普段嘘つきで多弁な魔理沙の勝負の美学であった。が、パチュリーは純正の魔法使い。

魔法のぶつけ合いとなつてしまえば勝負は明白である。

それは魔理沙も重々承知していて、それをカバーすべく細かく動いてパチュリーを錯乱していた。

「小賢しいわね。まるで小虫だわ」

「お前がとろいんだぜ！」

魔理沙は自身のスタンド、シルバーチャリオッツの剣捌きを活か

し、圧倒的とも言えるパチュリーとの魔法の技術の差を埋める。
スピードで翻弄し、スタンドで魔法を捌く。

その隙に攻撃を返す。
なかなかできた動きではあるが、パチュリーの守りは硬く決定打には至らない。

その攻防は長く続き、場は煮詰まっていた。

「ゲホツゲホツ…」

パチュリーが咳き込み、魔法弾の射撃が止まる。

その隙を見逃せるほどの余裕は魔理沙にはなかった。

「喰らえ！マスタースパーク！」

「つくー！」

パチュリーは右手をかざし一筋の赤い光を放つ。

その光はマスタースパークとぶつかり、目を開けていられないほどの強い劇光を放った。

「くっ眩しいー！」

魔理沙は思わず目を閉じたが、同時にパチュリーに勝つ算段を思いついていた。

——懲罰房

「それで、そのおじんに言ってやったんですよー！」

「なんてなんて？」

「仏だけに、ほっとけって」

「……貴子、ダジャレばっかりでつまんなーい」

「なっ、バカ受け必至のこの鉄板トークがつまんないとは……フラン
ドール様のギャグセンス……恐ろしい」

「誰も笑わないよそんな話！ってか、私のことはフランで良いってば」

「そんな、レミリア嬢様の妹様をそのようには呼べませんよ」

「私が呼んで欲しいんだから呼んで！フランちゃんでも良いよー！」

「善処いたします」

「それよりもっと面白い話してよー」

「それじゃあ、これは3年前の話なんですけど……」

——レミリアの部屋

「うー……頭痛い……」

レミリアは激しい頭痛に悩んでいた。

誇り高き吸血鬼が二日酔いなどありえない話だが、酒が入ると貴子の話はいい肴となりいつもよりも激しめに飲んでしまっていた。

これから博麗の巫女が来るといいうのに万全とは言えない。

レミリアは貴子の迷惑加減に結構大きめな溜息を吐いた。

——中央ホール

「フッフ……やはり私のザ・ワールドの方がパワー精密さともに上よ！」

「くっ……!!」

咲夜と霊夢、その突きの速さ比べは咲夜が制した。

瞬きすらも及ばぬ短い時に生まれた隙。

その隙を咲夜がついたのであった。

「ここらで遊びのサービス時間は終わりよ……霊夢、一気にとどめを刺してあげるわ」

睨み合う咲夜と霊夢。

牽制し合うスタンド。

霊夢は咆哮した。

「うおおおおおおお!!!」

「とどめを刺すのはやはりザ・ワールドの真の能力ッ！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「ザ・ワールド!!!時よ止まれ!!!」

霊夢へと歩み寄る咲夜。

その右手には銀星のナイフが握りしめられている。

「これでとどめよ……!」

そう思い、右手を振り上げた時、微かに霊夢の指が動いた。

「っなー!」

一瞬にして飛び退き距離を取る咲夜。

「今、動いたわ！ま、まさか！」

咲夜の脳裏にはある会話が浮かんでいた。

『同じタイプの……スタンド！』

『同じ』『能力』

「……つく！見えているのか!?それとも意識せず動かせたただけか？

………ツチ！時間切れね………」

「……オラオラア!!!」

霊夢は瞬間移動のように一瞬にして居場所を変えた咲夜を見やる。

「見えているの?……見えているのかと聞いているのよ!」

激昂する咲夜に対し、霊夢はお得意のクールな顔で返す。

「さあ?なんのこと?わからないわ」

そう言つて仲を舞い三度の拳のぶつけ合いが始まる。

「貴方のスタープラチナの力を見せてもらおうわ!ザ・ワールド!止まれ!時よ!」

咲夜が近づくとまたしても霊夢の指が動く。

しかし、咲夜は何か気づいた。

咲夜は右手を霊夢に近づける。

するとまた霊夢の指が痙攣する。

「……フフフフ……ハハハハハ!!!」

咲夜は自身の右手に貼り付けられた何かの紙の切れ端を霊夢へと放る。

それは霊夢の手へと飛んでいき、そこにあつたお札の端っこへとくつついた。

そして一枚のお札へと元通りになった。

「お札をつけていたのね。恐らくは千切れると元に戻ろうとするものを。さっきの力比べの時につけていたというわけね。フンつまんまど騙されたわ」

咲夜はやれやれと肩をすくめる。

そして今度はザ・ワールドを出現させ、大きくその拳を振り上げた。「そんなイカサマのトリックは止まった時の中を動けないことの証明

「！寿命がほんの数秒伸びたに過ぎないわ！」

振り下ろされる拳。

「今度こそ！死ねい！霊夢！」

ザ・ワールドの拳が霊夢の眼前僅か数ミリへ迫ったところで、霊夢のスタープラチナの右拳は咲夜のザ・ワールドの腹を貫いていた。

「つな!!なに!!」

「……………」

「本当は動ける！お札のトリックは動けないと思わせて私を惹きつけるためのトリック！つく！」

時が動き出す。

吹っ飛ぶ咲夜。

拳を戻す霊夢。

「動けるところを動けないと見せかけるお札のトリックでぶっ放したは良かったけれど、それじゃ足りないみたいね……………」

「つくーなら、こうするまでよ!!」

咲夜の手にはいくつもナイフが握られていた。

「何秒動けようと関係ない処刑を思いついたわ！」

「それは！」

「青ざめたわね…………勘のいい貴方は自分の末路を悟ったようね」

「なんて事をおもいつくのよ…………これはヤバいわ」

素早く距離を取る霊夢。

「逃れることは出来ないわ！貴方はチェスや将棋でいうつチエックメイトみにハマったのよ！ザ・ワールド！」

またしても時が止まる。

そして、霊夢の周囲には何本も何十本も、あるいは何百本もの鋭利なナイフが止まっていた。

咲夜のザ・ワールドがナイフを投げ続ける。

「今のうちに減らしておかないと後で苦労するわよ」

悪い笑みを浮かべながらそういう咲夜。

「…………つオラァ！」

一瞬だけ動くもすぐに止まる霊夢。

「動けるのはそれだけのようね」

宙に静止する霊夢。

その近辺に漂う夥しい数のナイフ。

咲夜は懐中時計を懐へしまった。

「時は動き出す」

「つオラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

スタープラチナも捌ききれぬほどのナイフ。

「つぐぐう!!」

それらは全て博麗霊夢を襲った。

深くめり込み肉を裂くナイフ。

「終わったわね」

博麗霊夢は地へ落ちていき、そこに勢いよく倒れた。

——門

時刻は夜。月光すら届かないような深淵の中に明るく輝くように場所があつた。

打撃と打撃の強烈な当たり合いによって舞い散る火花。

虹色に輝く妖気と藍色に蠢く妖気。

その衝突と混ざりあいには強い光を放ち、まるで周囲は昼間のように明るくなつていた。

それらの元凶は紅魔館の門番である紅美鈴と九尾の大妖怪、八雲藍。

藍は驚いていた。

美鈴の強さにだ。

そもそも、同じ力量同士なら両手両足、せいぜい頭突きぐらいしか出来ない美鈴に、9本の尻尾を持つ自分とでは勝負にならないと思つていた。

手数が違う。

一本一本が強力な力を持っているのにそれを9本束ねてもなお弾き、いなし、返し技を打ってくる。

その事に驚いていた。

「……何故9本の尾に対応できる」

「手なんて、何本あったって一緒です」

「何をっ……それは私の攻撃が鈍いという意味か？」

「違いますよ。貴方は一人で、背中に尻尾が付いている」

「だから、正面をとっていればいなすのは容易いと」

「ええ、昔ヤンチャな時に喧嘩した千手観音とか阿修羅とかが教えてくれました」

「お前は……一体」

そして、二者の攻防は今まさに決着しようとしていた。

右手と左手、右足と左足がぶつかり合う。

武を極めた者同士の組合はまるで、鏡のように左右対称である。

攻撃と防御の表裏一体の流動。

そして攻撃を止めないように美鈴は掌底、手刀、構えを落とし後ろ回し蹴りを繰り出す。

その蹴りに右足で合わせんと足を振り上げる藍。

しかし、次の瞬間藍の鋭い右足は音を立てて空を切るだけであった。

間合いをしくじるなんてへまは絶対にしない。

しかし足は何ともぶつからなかった。

ぶつかったのは、美鈴の右拳と藍の顔面であった。

地面と並行になるくらいにけぞった藍。

尻尾を使いなんとか持ち堪えるも、その隙はこの勝負の間に置いてあまりにも大きすぎた。

美鈴の足が天を衝くように振り上がる。

そして、虹色の光を放ちながら、藍の顔面に踵落としが刺さった。

しばしの残心……そして藍の纏っていた気が緩んだのを見て、構えを解いた。

「お前……」

「ああビックリした。まだ喋れるんですか」

「何をした……どうして右の蹴りがこない……」

地面に寝ながら息も絶え絶えにいう。

「確か130発目くらいでしょうか。私は貴方にある法則を見つけました」

「法則つ……?」

「単純ですが、同じ角度、スピード、威力の攻撃を、貴方は全く同じ動きで返すんです。寸分の狂いもなく」

「……だからか。精密に言えば、132発目の右正拳突きだな」

「……ええ。そしてもつとも返しの際が大きかった右足の蹴りを誘うことで、やつと右の正拳が届きました……最後の正拳は全ての気を纏わせた究極の一打です。だから、その攻撃を受けられてしまえば私の体には気が残っていない故、即死です。それは賭けでした」

「……なるほどな。完敗だ……もう一ついいか?」

「死人に口なしですよ?」

「冥土の土産だ。お前の正体はもしかして……」

「私の正体なんて、しがない門番……ただそれだけですよ」

その返事を聞いて、フツと口角を上げて意識を飛ばす藍。

その寝顔をみて、美鈴はほつとため息をつく。

紙一重の戦いを制して、落ち着いたのだろうが、彼女は身に纏っている剛気を収めることはなかった。

「あら、そんなに敵意を向けられると困りますわ」

「今日の所はお引き取り願います。これが最後の忠告です」

「ええ、そうさせて貰いますわ。まさか藍が負けるとは……帰ってお仕置きね」

扇子をパタンつと閉じる。

「いや、この子は少し貸してもらいます」

藍を起こして肩を貸すように組みながらそう言う美鈴。

その頬は紅潮し、にへらにへらと笑っている。

「どうしてかしら。その子は貸し出しなどしていいのだけれど」

返すその目に光は灯っていない。

「この子……可愛いですよねえ……」

締めりのない顔をしながらそう言う美鈴の瞳にはハートがあるように見えたとか見えなかったとか。

「……優れた武人の中には、組み手が終わるとその極度の緊張からの開放による反動で発情してしまう者がいたそうだけど……貴方」

「明日には返しますので……それでは」

そう言っただけかへ……門番の詰所へ飛んでいく美鈴。

お姫様抱っこのように藍を抱えながら軽々と飛んでいく。

「……頑張れ！藍」

紅魔館門前での戦い

勝者 紅美鈴（八雲藍をお持ち帰り）

——大図書館

「お前のスペルを見ているとお勉強してる気分になるぜ」

「貴方には高度すぎるかしら？」

赤青黄緑……さまざま属性の魔法を放つパチュリー。

その一つ一つの術式が模範的で無駄がなく、戦いながら魔理沙は感心していた。

対して魔理沙は一本気に火力を出す。

持ち前の機動力で流しながらも、少しずつ追い詰められていく感覚を理解していた。

「逃げてても無駄よ！私の上に飛んだって変わらないわ」

「いや変わるぜ！煮詰まっていた場がな！」

パチュリーの撃った魔砲は天井に当たり揺らす。

それによりかなりの量の埃が舞い散ってしまった。

「つゴホツゴホツ……!!」

喘息持ちのパチュリーがそれに耐えられるわけもなく、案の定激しく咳き込む。

「それを待っていたぜ！マスターパーク!!!」

「っ！」

魔理沙のマスターパークを迎え撃つために右腕から再度光線を放つ。

強大な質量のぶつかり合いにより激しく発光する。

それにより少し目を瞑った。

そしてマスタースパークが止んだ。

空からは、魔理沙のかぶっていた帽子と箒がヒラヒラと舞い落ちてくる。

「まだ！終わってないぜ!!」

「っ!」

振り返りながら魔法を詠唱するパチュリー。

しかし魔理沙の投げた『何か』によってそれは防がれた。

「喰らえっ！コショウだ!!」

「うハックシユン！っハックシユン!」

くしゃみが止まらないパチュリー。

当然詠唱はできない。

「これで！私の勝ちだぜ!」

そう高らかに言い放つ魔理沙の手には特大ハリセンが握られていた。

しかし、その素材は鉄のため、殺傷能力は折り紙付きである。

「…参ったわ。なるほど。盲点ね」

「私とお前の攻撃がぶつかった時のあの発光。あの隙にお前にこのシルバーチャリオツツで近づいたってわけだ。本当は魔法で決着をつけたかったんだがな」

「困ってわけね」

「陽動ともいうぜ」

「ええ……本当に参ったわ」

「なんだ？命乞いか？」

「私たちも陽動をしていたからよ」

「っ!」

後ろから何者かに羽交い締めにされる魔理沙。

そして驚くほどの手際でロープでぐるぐる巻きにされる。

「おいっ！卑怯だぞ!」

「まあ落ち着きなさい。私がなんのためにあんな初級魔法ばっか使ったと思ってるの?」

「それしか使えないからじゃあないのか?」

ため息をつく。

「貴方、魔法使いを目指すなら今から今からという話を頭に入れなさい」
そういつて、小悪魔に何やらホワイトボードも持たせてくる。
「うげ、まさか」

「ええ、そのままさかよ。今から授業をしてあげるわ」

大図書館の戦い

勝者 パチュリーノーレッジ（魔理沙に魔法の伝授）

——ホール

「博麗の巫女……貴方の命を早めに断ててホッとしているわ」
「……………待ちな……さい……………」

立ち上がる霊夢。

その体には何本もナイフが刺さっていて、床にできた血溜まりに霊夢が反射している。

「ほう、生きていたのね。それなら！正真正銘最後の攻撃よ！時よ止まれ!!!」

時が止まる。

動けなくなる霊夢。

「フフ……1秒経過……2秒経過……」

咲夜は、時を止めたままなぜゆえか姿を消した。

しかし霊夢は、考えるのをやめた……………。

咲夜が何をしてこようと……咲夜が静止した時の中で二秒間だけ動くことのできる霊夢をどんな方法で攻撃してこようと……。

『もらった2秒という時間だけスタープラチナをブチかますだけよ』
（私が思う確かなことは咲夜！あんたの面を次見た瞬間多分：私はプツンするだろうと言うことだけよ）

「6秒経過……7秒経過……!!」

霊夢に巨大な影がかかる。

上に何か巨大な物があるのだ！

（きな……さい、咲夜!!!）

「っ!!!」

「お嬢様の銅像だああああっ!!!」

「オラオラオラオラオラオラ!!」

「もう遅い! 脱出不可能よ! 無駄無駄無駄無駄無駄!!」

「オラオラオラオラオラオラ!!」

「8秒経過! ぶつつぶれなさい!!!」

「オラア!!」

巨大な銅像が、見た目通りの巨大な音を立てて地面に落下する。

「勝った……博麗の巫女に勝った!! やはりザ・ワールドこそ最強のスタンドよ! さて、死体も増えたし、お掃除しなきゃ。跡形が残っていればの話だけど……」

そう言つて銅像から降りようとする咲夜。

そこである違和感に気づく。

「な、なに? 体の動きが…鈍い? ……いや違う……動けない! 馬鹿な! まったく体が動かない!」

「11秒経過よ。動けるのはそこまでのようね……咲夜!!」

「っ!!!」

「私が時を止めた……9秒の時点だね……そして脱出できた……やれやれだわ……」

咲夜の後ろに、霊夢が立っていた。

血みどろで、ズタボロで、そしていつものように鉄仮面を被っている。

「これからっ! アンタをやるのに! 1秒もかからないわっ!」

「れっ……霊夢!!!」

大きく息を吸う霊夢。

「ツオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア!!!」

スター! プラチナの白銀の拳が、無数の礫となって、まるで流星群のように降り注いだ。

咲夜は気を失い、ぶつ倒れた。

「……やれやれだわ。あんたの敗因はたった一つよ。咲夜。たった一つの単純な答え。」

「アンタは私を怒らせた」

ホールでのスタンドバトル

勝者 博麗霊夢 瀟洒 十六夜咲夜

こんな人生って幸せ！

——懲罰房

「ふう……なんか本当に上が騒がしいですねえ……ねえフラン様」
貴子は自前のタバコをふかしながら壁にもたれている。

「……………」

その膝に、貴子と向かい合うように座っているフラン。

貴子は人に、特に子供に取り入るのが上手なのかもしれない。

子供自体は苦手だが。

「……フランちゃん」

「なあに？ 貴子」

ちゃん付けて呼ばないと反応をしてくれない。

そんな幼稚な戯れに少しだけやれやれと思う。

「気の流れを悟れなくする束縛魔法だけでも良いので解除してくださいませんか？ 上で何が起きていますかだけでもいいので」

貴子は、上で何が起きているかを知らない。

呑気に煙草を蒸して、適当な話をフランに吹き込んでいる。

フランも、それをなんとなしに聞き流している。

貴子の出すやさぐれた雰囲気、この空間を旧知の中に変えてしまった。

「うーん……貴子多分意識を失っちゃおうよ？」

「ま、覚悟の上です」

限界まで吸い切ったタバコを灰皿に押しつけて背を起こす。

「それじゃ、まあ良いよ。それぐらいなら。はい」

「ありがとうございます」

美鈴から叩き込まれた悟気術。

気を察知するのなんてお手の物だったが、上で起きた事を知ると案の定、強烈な立ちくらみに絶倒した。

——レミリアの部屋

「貴方が博麗の巫女？」

「あんたが親玉ね。迷惑よ。死になさい」

傷など気にもせず、また目の前の怪物など少しも恐れず。

その暴力的とすら言える飄々とした態度。

それを受けたレミリアの返答は大妖怪にあるまじきものだった。

「ええ、そうさせて貰うわ」

「……何を言っているの？自殺をする妖怪なんて聞いたことが無いわ」

「自殺させかけた妖怪は知ってるけど。そうじゃない。霧を止めるって言ってるのよ」

「……えらくあつさりじゃない。あのメイドがそんなに心配？」

「ええ、そうね。今すぐ看病しに行きたいぐらいだわ」

何かを思うように下唇を噛んで、鋭い牙が見え隠れするレミリア。

威風堂々やカリスマとはまた違う、己の従者を愛する主としての側面であった。

その瞳には、レミリアの能力

『運命を操る程度の能力』

による運命視で見えた世界が映っているのかもしれない。

霊夢を見ながらも、何か違う何かを見つめているような感じであった。

「……気に入らないわ。やっぱり死になさい」

「死にそうなのは貴方じゃない。私は、見逃してあげると言っているのよ」

「違うわ。私が見逃さないとっているの」

「そう……なら死ぬしかないわね」

「ええ、あんたがね！」

吸血鬼と人間の拳が混じり合った。

——医務室

「いたたた……あの巫女やってくれるわね……」

過酸化水素水で全身の傷を消毒しながら咲夜は毒づく。

それが、真剣勝負の結果であり、口を出すことは野暮である事を重々承知しながらも、口を動かさずにはられない。

以前の陰鬱とした咲夜では考えられないほどにその精神は高揚していた。

何故かしらと不審に思うも、聡明な咲夜は何無くその溢れ出て止まないアドレナリンの原因の一つを特定した。

咲夜が生涯を共にするであろう存在……それは孤独。

その孤独感の根底にある咲夜の奇特な力。

それをいとも容易く打ち破り、馴染みの喫茶店のドアを開けるように止まった時の世界は入門してきたあの人間の存在。

まるで、終わりの見えない曇天の空が澄み渡っていくような爽快感。

こつぴどく負けた筈なのに、咲夜は痛む体も無視して今すぐ飛んでいきたい気分であつた。

はやる気持ち無理にでも抑えながら、咲夜は包帯にキツく巻く。戦うことは無理でも、まだできることはある。

咲夜の心にはもはや何一つの迷いも不安もなかった。

澄み渡る空のように若い光が痛いほど刺してきている。

そしてその光明を刺すきつかけとなつたのは……。

咲夜が思い浮かべたのは、懲罰房で反省中の情けない女であつた。

——大図書館

「……これは……まずい事になつたわね」

早口で喋っていたのを急に止め、紫色の眉毛をキツイ逆向きのハの字にする。

「なにっ？ どうしたんだよ」

魔理沙は何が起こっているのかわからず探りを入れる。

パチュリーは、魔理沙を椅子に縛り付けて魔法の授業を（無理やり）教えていた。

形式こそ不本意であつたが、魔理沙にとつても純正の大魔法使いに直接的に魔法を教える事はその身にとつて果てしなく得難い僥倖である。

最初こそ文句を垂れていたが数十分も経てば無駄口も叩かず集中して話にのめり込んでいた。

「……あなた、まだ動けるかしら？」

「……このロープさえ解いてくれりやあな」

「本当……はあ……面倒くさい事になったわ」

「何がなんだよ。ため息ばかりついてもわからないぜ」

皮肉めいた魔理沙の軽口も意に介さず、二日酔いの目覚めのような拙い顔をする。

「ウチの馬鹿がまた問題を起こしたのよ……」

「馬鹿つてのはこんな霧を出したやつか？」

「いや、もつと馬鹿なやつよ……」

渋々といった顔で魔導書をパタリと閉じ、ノソノソと腰を上げる。

「ほら、ロープ解いてあげるからじっとしなさい」

「早くしてくれ」

「……えらく小悪魔の奴硬く結んだわね……ふんす！」

パチュリーは思いつきりロープを引っ張る。

実際は非力なので大した力が出ていないが。

「痛い！痛いぜ！それは締める方向だ！」

「……困ったわね」

悪いタイプの沈黙がぬるりと通り抜ける。

パチュリーの額にはこれまた嫌な予感のする汗が流れていた。

人はよくその汗を冷や汗と呼ぶ。

「まさか……」

「ええ……そのままかよ」

「なんで解けないような結び方したんだよ！」

「……こういう時、外の世界でなんていうか教えてあげるわ」

「んだよ」

「……てへぺろ？」

魔理沙はパチュリーを思いつきり蹴り飛ばした。

——懲罰房

「……っはー！」

「お目覚めー？」

貴子は自分が冷たい床に寝そべっている事に気づいた。

美鈴からの気は日常的に飛んでくる。

二人だけの暗号として、タバコやらなんやらの受け渡しなど聞かなくては困る内容を気の色で飛ばし合う習慣があったのだ。

そして今美鈴から飛んできた気の色は赤であった。

「ならでれば？ 出れるものならね」

「ええ、出させてもらいます」

貴子はドアに向かった。

そこにはフランによる高度の封印魔法がかかっており、それに触るなんて生身で高圧電流の流れる鉄骨に触れるようなものだ。

下手をすれば、いや下手をしなくとも十分死に至るような危険な代物だ。

けれどもそれを立ち止まる理由になど出来無くなってしまった。

本当に緊急事態の時だけ発せられる気。

それが美鈴から発せられた。

それは明らかに貴子に向けられたものであり、明確なSOSでもあった。

貴子は奥歯を噛み締めてそっと手すりに手を触れる。

しかしその瞬間、つんざくような閃光と高音が発せられ、手を弾かれてしまった。

「……っ！」

「さわれやしないわ！」

目を釣り上げ、弾かれた手を見つめながら深呼吸をする。

……そして、ゆっくりと息を吐いて覚悟を決める。

貴子は、両手で勢いよく格子を握りしめた。

けたたましい音。

金属を研磨した時のような火花が手から散る。

「ぐううわああああああああああ!!」

——大図書館

「おいパチュリーー！まだ解けないのか！」

「うるさいわね！アンタが暴れるからでしょ！」

魔理沙とパチュリーは、なかなか解けないロープに苛立ちやいのやいのと喧嘩していた。

その内容は、魔法使いがするようなものとは思えない幼稚な内容で、それを聞いていた関係者曰く馬鹿だのアホだのの連呼だったとか。

「もういい！パチュリー！一応聞くが回復魔法は使えるな!？」

「当然よ！動けない貴方がいったい何をする気?」

「そこに落ちてる道具をとってくれ」

魔理沙の視線の先には、魔理沙から押収した様々な品がまとめられていた。

抵抗できないように魔理沙から没収したのだ。

その量は、一体華奢な魔理沙のどこにしまわれていたのかわからないほど多かった。

「どれよ！多すぎてわからないわ」

「一番魔力の強い奴だ」

「……これかしら」

「ちげーよ馬鹿！お前が持つてるのはどう見てもただの箒だろうが！」

「うっさいわね！アンタこそ馬鹿みたいに持つてくるからでしょ!」

「迷惑な霧を出した奴をぶちのめすために手加減するわきやないだろ！」

「こっちの都合も知らないであーだこーだ言わないで！」

「知りたくも無いぜそんなもん!……それだ！今手に持つてる奴！」

「これ?……アンタこんなガラクタ使つてどうするつもり?」

「それはガラクタなんかじゃない!……ミニ八卦炉っつー私の宝物だぜ」

「蓼食う虫も好き好きかしらね……はい。怒鳴りすぎてしんどくなってきたから少し休むわ……」

「これさえありや……」

魔理沙は後ろ手に縛られた状態で、器用にミニ八卦炉を持ち、そこからライターのような火力でチリチリとロープを焼き切った。

「……ふうー。最初からこうすりやよかつたぜ。パチユリー、頼んだ」
そう言つて魔理沙は手を差し出す。
先程の火で火傷してしまっている。

「……なるほど。だから回復魔法ね……はい」
パチユリーが右手をかざすとあつという間に傷が治癒される。

魔理沙は箒を右手に持ち、帽子を深々とかぶる。

「さてと……それじゃあ行くか」

「ええ……それより貴方……」

「ん？どうかしたか？」

「髪の毛焦げてるわよ」

「えっ？げーやっちゃまったか!？」

——紅魔館上空

「人間にしてはなかなかやるじゃない」

霊夢に対峙するレミリア。

レミリアを退治する霊夢。

紅霧漂う幻想郷の赤い月の元で、可憐な弾幕が交差する。

吸血鬼に、人間が互角に渡り合う。

それは異常な事であり、向こう100年語り継がれるような武勇伝である。

だが、霊夢の心境は焦りが生まれていた。

自慢のスタープラチナが効かない。

というより、射程距離に入らない。

スタープラチナの射程は短く、レミリアは決してその間合いに入つてこない。

それゆえ、霊夢は自身の霊力で戦いを挑んでいた。

無論負ける訳はないという確固たる自信こそあれど、なかなかレミリアはしぶとく、霊夢は終わらぬ戦いに業を煮詰めていた。

音がなるほどに歯を食いしばる。

霊夢には、ある勝ち筋が見えていた。

しかし、それは霊夢の矜持に反し、決してやりたくない勝ち筋でも

あつた。

だが……霊夢にはもう時間はない。

ある巨大な悪意が、魔理沙に近づく気配を感じてしまったからだ。「時を止めなさい。スタープラチナ」

咲夜との戦いで目覚めた時を止める力。

世界が停止する。

遠くにいた咲夜だけが、その一瞬の世界の静止を悟った。

「……………」

霊夢は懐に忍ばせておいた『ある物』を取り出し、レミリアに向けて投げる。

それは停止したレミリアの喉元寸前で止まり、月光の反射でキラリと輝く。

「…時は動き出す」

「……………つなーがああつー！」

「アンタ、自身のメイドに武器を持たすのはいいけど、それを銀製にしたのはどうしてかしら？」

「どうして……貴方がこれをつー！」

「私にぶっ刺さったナイフを一本くすねといたのよ……使いたくはなかつたけどね」

霊夢が投げたのは、純銀のナイフであつた。

祈りを込めた銀の一閃。

吸血鬼に対するシルバーバレット。

喉元に刃渡りの長い劇物をぶっ刺されたレミリアは、たまらず地面に落下していった。

それを見て霊夢も、周囲に飛ばしていた陰陽玉をしまう。

レミリアの喉元からは、真っ赤な血が流れ出ていた……。

「……………魔理沙が危ないわー！」

紅魔館上空での決戦

勝者 博麗の巫女 紅霧異変 決着

——美鈴の詰所

「美鈴さん！」

貴子は、美鈴仕込みの人間離れた健脚であつという間に美鈴の詰所についた。

焦る気持ちを抑えることもなく、勢いよく戸を開く。

「貴子さん！」

そこにいたのはもちろん美鈴である。

しかし、その状況はあまりにも異様で貴子は目を疑い、そして瞳に誠正直の真実が写っている事を悟ると、美鈴の倫理観を疑った。

「……どういう状況ですか？」

「いや……まあ……それより！」

「説明してくださいよ！」

「どこから説明すべきでしょうか……」

美鈴はうーんと考え込む。

脳内で色々と説明の算段を立てているようだ。

思いついたことから喋ったりしないのは、美鈴なりの頭の良さだ。

しかし貴子にはその間は長く、自らが質問を飛ばした。

「まずなんで裸なんですか！そしてそこに寝ている裸の女は誰ですか！なんか尻尾生えてるし！」

「この人は……藍さんです。というより、そこは問題じゃないんです」

「大問題な気がするんですけど。とりあえず服を来てください」

美鈴はその豊満な乳房をキツキツにサラシで縛りながら説明を続ける。

「……貴子さんには見えてないんですか？」

「何がですか？」

「私の後ろにいる……これです」

「美鈴さんの後ろには藍さんとかいう妖怪の裸体しか見えません」

「そうですか……なら、これを見てください」

美鈴がそつと右手を差し出す。

「……なんですか？これは。石ころ？」

「貴子さん、手を出してください」

「えっ手ですか？」

「はい」

美鈴も何やら急いでいるらしくせかせかと貴子を催促する。

貴子はバツが悪そうに渋々と両手を差し出す。

「……どうぞ」

「なっ！これは……」

美鈴は絶句した。

貴子の手を見て。

「牢屋から出るときに無茶しちゃって……」

貴子の手には、皮がなかった、

焦がした焼き肉のように、炭のような黒焦げになっていた。

そこからは、ポタポタと勢いよく血が滴り落ちている。

「……とりあえずパチュリー様の所へ向かいましょう」

「そうですね……あの人なら回復魔法くらい余裕でしょうし」

「貴子さん、足出してください」

「えっ？どうぞ」

貴子が訝しげに足を差し出すと、美鈴は持っていた石ころのようなものを押し当てる。

その石は刃のように鋭く、足が簡単に切れてしまった。

「いつっ！なにするんですか!?!さっきから美鈴さんちよつと変ですよ！」

「貴子さん……何かに気づきませんか？」

「えっ？……な、これは!?!」

——ホール

「レミィー！」

パチュリーの悲痛な声が反響する。

空中戦に敗れた吸血鬼が勢いよく宙から落ちてきた。

その心臓部には深く銀のナイフが突き刺さっている。

「パチエ……ぐっ！」

レミリアが口から勢いよく血を吐き出す。

「喋らないで。すぐに直すわ」

そう言つて呪文の詠唱を始めようとしたパチュリーをレミリアが手で制止する。

「いや、いけない。まだ、終わっていないんだ」

「貴方……」

「パチエ……もうすぐフランがここに来る……頼んだぞ……」

そう言いおえると、糸の切れた操り人形のようにかくんと床に突っ伏した。

「……バカ」

「おい、御涙頂戴の演劇やってるとこ悪いが、説明しろ。何がどうなつてる。そいつは誰だ」

空気を読まないというよりはなから読む気すらない魔理沙がズケズケと聞く。

その不躰な質問に若干の苛立ちを見せながらも答える。

「レミリアアスカーレット……この異変の、元凶つてどこかしら」

「……なら、霊夢は勝ったんだな」

魔理沙は思うところがあるのか、遠い目で答える。

異変の元凶が倒れたことなど大して興味もない。

また……また霊夢に先を越された。

その事が一番魔理沙の心に残った。

「レミィ……」

全く予期していない親友の敗北、そしてその意図を汲み取ったパチュリーは行動を始める。

魔理沙の肩を掴んで。

「ほら、行くわよ」

「どこにだよー」

「あそこよ……」

——詰所

「これは……一体？」

貴子は目の前に現れた超常現象に六分の興味と四分の恐怖で息を荒くする。

「おそらくは精神の力が具現化したものでしょう。この鋭い何かの切先のような物に触れると発現するようです」

「私の精神の具現化……」

人の形をし、強烈な衝撃を見たものに与える大胆なハートマーク。

「こいつは……なんとなく、クレイジーダイヤモンドって呼ぶのがいい気がします」

「なるほど……」

「美鈴さんのは？」

「私のはこの拳銃のようなものです」

「そうですか……」

「……っ！」

二人が同時にある気を察知した。

そして言葉もなく飛び出していく。

一言交わす間さえ惜しい。

ドス黒い、怨嗟に満ち溢れた気。

悲しみと怒りと絶望。

それらが合わさった気。

まさに、狂気。

特に巨大なそれが、発現した。

その元はもうわかつている。

フランダ。

——ホール

とうとう、一同が一つの場所に集まった。

運命が彼女たちを引き寄せたのか。

彼女たちが運命を掴んだのか。

銀のナイフを刺されて落下してきたレミリア。

その意図を知ってか知らずか治療魔法を行使しないパチュリィ。

その隣で深く帽子を被りながら黙りこくる魔理沙。

上からフワフワと降りてくる満身創痕の霊夢。

遅れてきた美鈴と貴子。

その肩に担がれている傷だらけの咲夜。
そして、そこにフランがやってくる。

「お姉様にのは誰?！」

フランが激昂しながら降りてくる。

あまりにも多くの弾幕を纏って。

「フラン……」

レミリアが苦しそうにその名を呼ぶ声にすら気づかないほどに怒り、悪魔的な威力の弾幕を宙に漂わせて今まさに皆殺しにせんとした勢いで全員を睨んでいる。

「そいつをやったのは私だぜ」

名乗りを上げたのは魔理沙であった。

「魔理沙……あんた」

「黙ってな」

心配そうに声をかけるパチュリーと、何も言わずにただ見つめてくる霊夢の両方を一言で黙らす。

もちろん魔理沙はパチュリーに囚われていたのでレミリアのことなど知りもしない。

ただ、隣で血を流しながら肩で息をする相棒に少しでも時間を稼いでやろうと言う気になったし、それよりも、レミリアを倒したのが霊夢なら、自分はその妹だけでも倒しておかないと格好がつかないと言う焦りのようなものがあった。

「違う……貴方じゃない……どいて!!」

しかし勇気も虚しくフランの叫びで魔理沙は吹き飛ばされてしまった。

フランは何もしていない。

凄みで吹き飛ばされてしまったのだ。

圧倒的強者のプレッシャー。

吹き飛ばされた帽子を再度深くかぶる事すらも手が震えてしまうほどの。

怖じけている自分に気づいてグツと歯を食いしばった。

「いや私だね」

「どいてっ!!」

フランが再度凄むが、今度は魔理沙も怯まない。懐に忍ばせたミニ八卦炉と箒を強く握り締めながら空へと舞っていく。

「てめーはこの私が直々にブチのめす…!」

そう言つてスペルカードを宣言しようとした瞬間に魔理沙は違和感に気づいた。

先程まで持っていたミニ八卦炉が懐から消えている。

まるで、時を止めた隙に奪われたように忽然と。

その後ろに、霊夢がいつのまにか飛んでいた。

「当て身」

「なっ……」

急所への一撃の元に眠らされた魔理沙は落ちていき、咲夜に受け止められる。

咲夜の右手には、魔理沙のミニ八卦炉が握られていた。

「きつと文句を言うわ」

そうパチュリーが溢す。

「宛先はあの巫女ですわ」

咲夜が返す。

「私のスタンド、クレイジーダイヤモンドの能力……」

貴子は己から発せられた幽体のような物を凝視する。

「まるで異質ね。破壊に優れた物がほとんどなのに、治すスタンドなんて」

「今日はよく喋りますねパチュリー様」

「うるさいわね。アンタのザ・ワールドなんて意味ないじゃない。元から時を止められるんだから」

「戦闘に関してはザ・ワールドの時間停止の方が良いのです」

「どうしてよ」

「それはまたおいおい」

「つくー!」

フランと霊夢の死闘。

一度触ればそこには何も残らないような、そして見るもの全てを釘付けにしてしまうような絢爛な弾幕を舞うように掻い潜っていく両者。

余裕そうに飛ぶも、霊夢は苦戦していた。

そもそも疲労が大きすぎる。

慣れないスタンドを三度に渡り酷使し、緊張と神経の摩耗で精神的な疲憊が大きい。

対するフランは姉を傷つけたものへの怒りで満ちている。

いかに最強の巫女とあれど苦戦を強いられる展開となった。

その時、急に霊夢の柱の横がとてつもない威力で大爆発を起こす。

「っー！」

咄嗟に回避するも爆風の熱で顔の半分が焼けてしまった。

肺も焼け、息ができない。

「あはー私にも出たわ！その人形！」

フランの後ろにいたのは耳のついたスタンド。

「さしづめこの子はキラークイーンってどこかしらね」

霊夢が余裕綽々といった表情だが、その眉間のは汗が流れていた。

「お前だけは……お姉様を傷つけた物だけは決して許さない！」

「許されないたって、髪を焦がすだけの事かしら？」

霊夢は懐からさらに多くのお札を取り出す。

銀星のナイフは当たらず、時間停止の隙すら与えない。

レミリアの戦い方は妖怪らしく傲慢であり好きだらけであった。

時間を止めるだけの隙など有り余っていたがフランは違う。

全身全霊で殺意を飛ばしてくる。

「潰れるー！」

フランが巨大な柱をぶん投げてきた。

「オラァー！」

それをスタープラチナが砕き割る。

否、砕き割ろうとした瞬間にその柱が木っ端微塵になった。

破片が飛びちり、視界が奪われる。

破片が体に突き刺さり痛みを伴う衝撃を起こす。

「……おやめください。フラン様」

「貴子！どいて！」

「もう、勝負は終わっているのです」

「何をっん!!」

貴子はフランに口づけをした。

おもむろに。

しかも舌を入れるタイプの。

フランはバタバタと手足を動かして暴れるが、貴子は何故か万力のような力で動かない。

怒り狂う吸血鬼の力を抑えるような力など持っていない。

人間の生存本能が限界を超越した。

しかしそれは長くは持たず、フランは両手で貴子の頭を無理矢理離し、顔を赤面させながら言う。

「何をっ——!!」

懲りない貴子は、再度熱い接吻を交わす。

粉塵で見えていないが、もしこれを館の誰かに見られていたら間違はなく首が飛んでいただろう。

解雇という意味ではない。

咲夜の手によって物理的に首を飛ばされていた。

しかし貴子はフランの口の中を圧倒的な技術で蹂躪する。

迫り来る貴子の愛撃にたまらず力が抜けていく。

そうして硬くフランを抱きしめて捕らえた状態で貴子は右手に隠し持っていた小石を殴る。

すると、後ろで巨大な物音がする。

貴子が持っていたのは、先程フランが破壊した巨大な柱の破片だった。

それが貴子のクレイジーダイヤモンドで元の形に戻る。

柱の破片達は加速し弾丸のような速度を持つ。

「んっ無駄よー！」

フランもまた、その力で柱を破壊する。

しかし、貴子の目的は柱をぶつける事じゃなかった。

「いい加減にして！殺すわよ！」

もう一度、唇を奪おうとした貴子に怒りの沸点は頂点と達しその眼光を向ける。

「いい加減にするのはアンタよ！」

「つな！」

「やつと射程範囲に入ったわ……フランドール！」

「つきゅつとして！」

「遅い！」

スタープラチナの重い鉄拳が、フランの眉間に叩き込まれる。

フランはたった一撃の元に沈み、舞い落ちていき地へと伏した。

「……恐ろしい能力だな」

「アンタも、ブツ飛ばされたいのかしら？」

「ノーと言つてもやるんだろ？それより博麗霊夢……アンタに頼みがあるんだ」

貴子は、己の望むところを何一つ包み隠さず赤裸々に語った。

「アンタ……馬鹿ね」

「ああ……よく言われる」

「……………」

「恩に着る」

貴子は霊夢に背を向ける。

霊夢もまた、振り返り貴子と背中を向け合うのであった。

一言も言葉を交わさずに離れゆく。

「……………さよなら」

そう言ったのは霊夢。

次の瞬間、貴子の体は粉々に砕け散った。

「やはり勝ったか。博麗の巫女！」

土煙から出てきた霊夢に向かって、傷の塞がってきたレミリアは声をかける。

負けたから恨むと言ったような辛気臭い考えは持っていない。

それも大妖怪のいいところではあるが、今の死闘を潜り抜けた霊夢

には鬱陶しいだけであつた。

「アンタの妹、よく躰けときなさい」

「ああ分かった………博麗よ」

「何よ」

「……いや、なんでもないさ」

「なら話すな!」

最初に異変に気づいたのは美鈴であつた。

ついで咲夜とパチュリーが同時に悟り、言葉を飲んだ。

そんな静かに慌てる彼女らに、霊夢は貴子からの伝言を預かる。

「あー、貴子………だったっけ?からの伝言よ」

「お世話になりましたってさ」

——異変後、紅魔館はまるで死んでいた。

言葉一つ飛んでいない。

活力もない。

重く、暗く、吸血鬼が暮らすにはぴつたりな雰囲気であり、レミリアを含めた全員がその雰囲気に憤りを感じていた。

貴子は、死んだのであつた。

異変解決後の紅魔館は、激戦に及ぶ激戦であちこちに軋みが入つてしまったので連日連夜の復旧作業。

咲夜の指示に逆らう者はもはやいなかったし、美鈴は今日も一人で門に立つ。

パチュリーは相変わらずヒツキーだが、最近は迷惑な来客に魔法の伝授をしているらしい。

フランは………また引きこもってしまった。

塞ぎ込み、よなよな呻き声が聞こえたり。

全員の顔に、深い影が刺していた。

あの迷惑で仕事のできない、人情深く世俗的な人間の女はそれほどまでに紅魔館の中で大きな部分を占めていた。

そんな静かな紅魔館に、当然ある一人の声が響き渡つた。

「聞いて下さい!!」

声の主は小悪魔であった。

少しざわめくも、それつきり。

まるで大声を出した事を責め立てるような冷たい沈黙にも負けず
二の句を繋ぐ。

「貴子さんは、残していたんです！」

貴子、と言う名に皆が少しだけ反応を示す。

小悪魔は涙を目に溜めつつ叫んだ。

「貴子さんは……遺書を……遺書を残していたんです!!」

皆は、もう仕事など出来るわけもなかった。

「拝啓 紅魔館諸君

この手紙が読まれているなら、まあそう言う事なんだろう。

どういう理由かは知らないけど、こう言う職場である以上そりや覚
悟はできてる。

対して言い残す事もないけどこういうのは大事だからね。

主君、レミアアスカーレット公。

身勝手にこの世を去った事、お許し頂きたい。

「……勝手に死ぬやつがいるもんか」

お世話になったみんな

役に立たない私に色々教えてくれてありがとう。

特にメイド長

色々お世話になりました。

人生の先輩として残すなら、甘えたって、泣いてもいいんだよって
事。

「余計なお世話よ……」

偉大なる師、紅美鈴さん

強さをくれてありがとうございます。

気さくに話しかけてくれたのが本当に嬉しかったです。

酒、煙草は、ほどほどに

「貴子さん……」

パチユリーさん

借りてた本にシミをつけた事を今更ながらお詫び申し上げます。

初めて私の料理を褒めてくれたのはパチュリーさんです。
実はあの後嬉しくて少し泣きそうだったんですよ？

「何よそれっ……」

そして……フランドール

私が死んだら、感情豊かな貴方はきつと悲しんでる事だと思う。

それが私のただの思い上がりだったら嬉しいんだけど、もしもこの予想が当たって君が悲しんでしまっているなら、私は幸せ者だったの
だろう。

そして、私は最後までダメな人間だった。

死んでもからも誰も笑顔にできていない。

だから、私からの最後のお願いです。

どうか、泣かないでください。

どうか、笑っていてください。

貴方の笑っている顔が、私は大好きです。

「……………っ！」

フランは、自室でうずくまりながら小悪魔の声に耳を貸す。

屋敷中の音を拾える地獄耳なのだ。

手紙の中からでしか言えなくてごめんね。

悲しんでくれて、ありがとう。

悲しませて、ごめんね。

さよならは、悲しい言葉じゃ無いから。

きつと、またいつか会えるから。

私のいた期間なんてすぐに忘れて、元気に暮らして行ってね。

それじゃあそろそろかな。

みんな、さよなら。

PS. ハンカチは右ポケット

「……………っ！」

皆が声を上げて泣いた。

鳴り止まぬ嗚咽、切ない気持ちに潰されるような歎歎。

レミリアも、咲夜も、美鈴も、パチュリーも。

妖精メイドたちも大声でわんわん泣いた。

そしてフランドールも、三日三晩大声で泣き続けた。

紅霧異変

概要

初夏、吸血鬼レミアアスカレットによる赤い霧の大量発生。
人体に影響なし。

博麗の巫女が迅速に解決。

備考

同時期に、謎の霊体（通称スタンド）が発生すると言う事態が起るも、何事もなくいつの間にか自然消滅。

原因不明

紅魔館の従者一人が死亡。

館全員で葬儀を執り行う。

吸血鬼が人間の葬儀をする事は極めて異例である。

「こんなもんでどうですか？紫様」

さつとその紙を手渡す藍。

「……………大切なのが抜けてるわよ、藍。ポンコツの狐が門番、紅美鈴に好き勝手に乱暴されたつてのが」

「ですからあれはっ…………」

藍が言い淀み、少し頬を赤くする。

「まあ、無事に帰ってこれたしいいけれど、それ。どうするつもりかしらっ？」

紫が藍の膝元を指さす。

そこには、真っ黒の毛並みの黒猫が丸まって寝ていた。

「……………是非に及ばず」

「及ぶわよ」

少しだけ、年日が流れた。

紅魔館の裏、少し開けた空間に墓跡が立っている。

フランドールは、そこに訪れた。

美鈴の庭から取ってきた一輪の花をたむけ、紅魔館の秘蔵の銘酒を

墓石にかけて、そしてゆっくり目をつぶる。

「……1ヶ月もたったんだって。早いね」

墓跡に向かってポツポツと話しかけるフラン。

秋風が優しく金の髪を揺らす。

「みんな忙しそうにして、墓参りもしないで酷いよね」

星が輝く。

フランの曇りなき瞳に反射して。

「貴子のおかげで、この館は変わったよ」

木の葉が舞い散り木の枝が少し揺れる。

「……おやすみ、貴子。ありがとう……」

大きな満月は、今日もその墓をふんわりと照らしている。

これからも、ずっとずっと照らし続けるのだろう。

貴子という人間の墓を。

紅魔郷編 完

小話の紅魔

― 異変の原因

「なーパチュリー」

「何よ」

ある昼下がりに。

いつものように魔理沙はパチュリーと魔法について話し合っていた。た。

もつとも、その話し合いの発言の九割はパチュリーからのものだったが。

しかし、今回は珍しく魔理沙からの話題定期であった。

たいてい、そういう時にされるのはくだらない雑談である事を理解しつつも、息抜きをしないとダメになるのが人間である。

「お前らって結局何のためにあんな迷惑な霧を出したんだ？」

「……秘密よ」

「なんでだよ」

「……どうしてもと言うのならレミイに聞きなさい」

「ちえっ。レミアにはお前に聞けって言われたよ。どいつもこいつもケチな野郎ばっかだぜ」

不服そうに口を尖らす魔理沙。

しかし、パチュリーもレミアも決して口を割らない。

各々から何度も同じ質問をされているが、絶対に話す事はないだろう。

死ぬまで黙っているつもりだ。

言えるはずもない。

紅霧異変の目的は、表向きは吸血鬼の弱点である日光を遮る事とされているが、本当は少し違う。

誰にも話せない秘密が増えたことにパチュリーはほとんど嫌気がさす。

(……宴会芸でやっちゃったなんて、言えないわよねえ……)

話は少し前に遡る。

異変の前、咲夜と美鈴のすれ違いが解決してすぐの事。
紅魔館では盛大なパーティーが行われていた。

そのきっかけは、単なるレミリアの暇つぶしであり、そんなのはいつもの事であった。

違う事と言えば、そのパーティーに貴子がいた事である。

そしてそれが全ての不幸の引き金であった。

というのも、最近のパーティーは少しマンネリ気味で、余興担当の美鈴もネタ切れに悩まされていて、咲夜の種無し手品もイマイチの反応であった。

そんなことでは幼稚なレミリアは退屈だとかつまらないだとかワガママを言う。

そんなマンネリ気味の空気を打破すべく、新しい風を吹かそうとパーティーの盛り上げ係に新人の貴子が任命されたのであった。

すると貴子はその巧みな宴会流の話術でバンバン盛り上げていき、久しぶりの面白いパーティーに皆の酒はつついついエスカレートしていつてしまった。

普段のパーティーは、静かに、厳かに上品にワインを嗜む瀟洒なものであったが、貧乏で育ちの悪い貴子の酒の飲み方は大声で笑いの絶えない、ある種の低俗さがつきものであった。

あの咲夜ですら貴子のペースに飲まれてしまい一瞬で酩酊状態にされた。

ちなみに、咲夜は泣き上戸なんだとか。

そうやって全員がへべレケになっていき判断能力が順調に鈍くなってきたところで悲劇は起こる。

原因はやっぱり貴子である。

「おじょうさまってえ……なにかおもしろいことできないんですかあ？」

顔を赤鬼のように真っ赤っかにして、からみ酒をする貴子。

それを聞いたガヤガヤがレミリアのやることに期待を寄せて囁し立てる。

「そうれすよおおじょうさまあ……たまにはなにかしてくらさいよお

！」

特段大きなガヤを飛ばす美鈴。

「酒好きなきな彼女は喧騒に飲まれ誰よりも早く酔い潰れていた。

「そうねえーヒックつーじゃああれーやっちやおうかしら？」

「おお！あれれすか？」

「そうあれよ！」

貴子の合いの手に上手く乗せられてしまう。

貴子は微塵もあれが何かなんて知らない。

酒に飲まれて何も考えずに喋っている。

レミリアは何やら右手に魔力を集める。

そしておもむろにその魔力を幻想郷中に解き放った。

「すっごくいれすおじようさまあ！」

そう言つて妖精メイドたちと一緒に煽てる貴子。

レミリアはとうとう有頂天になり、解き放ってしまったのだ。

あまりにも強大な魔力を。

翌朝、最初に目が覚めたのは咲夜であった。

強烈なアセトアルデヒドと倦怠感で最悪の気分であったが何とか起き上がって水を一杯飲む。

「少しづつ頭が冴えてきて、だんだんと目の前の惨状に意識が向いていった。」

「これは……酷いわね」

そこらかしこに散らばる空の酒瓶、酒を零したりツマミを落としたりで汚れまくった床。

涎を垂らして眠る面々。

一回洗面所について顔でも洗ってスッキリしようと思ったのに、なんと洗面所には大きなトラがいた。

紅魔館はトラなど飼っていないのに。

それよりも酷かったのは、いびきを立ててぐーぐー眠る美鈴。

大口を開けて寝ているが、ある違和感に気づく。

「美鈴……前歯が一本無いじゃない……」

一体どんな飲み方をしたのか。
昨晚の記憶が丸々抜けている。

「……飲み過ぎね」

とりあえず掃除はしよう。

どんな時でも仕事を欠かさないのが咲夜の流儀であり誇りである。
埃が止まらないように窓を開ける。

その時に目に入ったのはまさに最悪の光景であった。

幻想郷全体を覆うほどの紅霧。

そして、その元が自分の主人であること。

笑うことすらできなくなりそうだった。

―スタンドの秘密

幻想郷に起きた大異変といえば、人達は口を合わせてあの赤い霧だ
と言うだろう。

悪魔の館に住む絶対的君主、レミリア・スカーレットとそこに使え
る僕たち。

しかし、最近起きた異変について聞くと、ごく一部の者達は全く
違った返答をする。

紅い霧で世界が満たされた時、水面下でもう一つの異変が起きてい
た。

その名も幽波紋異変。

概要は、幻想郷に住む少女たちに、人や拳銃などのさまざまな形を
した霊力の塊が発現したというものである。

彼女たちはそれをスタンドと呼び、臆することはなかった。

あるものはそれで金を儲けようとしたり、あるものはそれで妖怪を
薙ぎ倒したりと大きな影響を与えたものの、紅霧が晴れて程なくして
自然消滅した。

その原因はいまだにわかっておらず、幻想郷の重鎮たちは原因解明
に追われている。

「結局、あれはなんだったんだろうなあ霊夢」

いつものように博麗神社に訪れて渋茶を啜っている魔理沙。

そんな凶々しい客人を剣呑に扱いながらもなんやかんやで仲のいい霊夢。

異変が終わろうが、幽波紋が消えようが二人は呑気である。

「スタープラチナ、便利だったのに」

「ありや最強だな」

「ほんとやんなるわ」

霊夢のスタンド、スタープラチナ。

最強の力、精密さ、速さ。

しかしその力は主の生活習慣によるものかあまり戦闘には活かせず、どちらかと言うと裁縫であったり、料理であったり、洗濯であったりと、霊夢の便利な召使い程度に扱われていた。

「そりやスタープラチナのセリフだぜ」

「なにがよ」

「嫌になるのはスタンドの方だな」

「そうかしら？」

「そりやお前、あんだだけ強いのに境内の掃除だの晩飯の準備だの洗濯だのぼつかやらされてたら嫌にもなるぜ」

「けっこう使えるのよ。スタンド」

「だけどなあ……焼肉の時は酷かったぜ」

「あれは……試しただけよ」

「焼いた肉の油はねを全て箸で受け止めさせる。無駄遣いにも程があるぜ」

「まあ、消えてしまった以上どうしようもないわ」

「それもそうだな……咲夜の野郎が羨ましいぜ。あいつは時を止めるのにスタンドなんかいらんからな」

「それは、もとから無駄だったんじゃないの」

そもそも、もともと異能力者の多い幻想郷においては、時間を止めることのできる咲夜にザ・ワールドが発現したりと、スタンドの能力が活かされなかったりする例も多く、スタンドが姿を消したのは彼らたちのストライキだったのかもしれない。

なお、この幽波紋異変の収束によってほっと胸を撫で下ろしている

妖怪がいた。

「そういえば、紅魔館の連中も寂しがってたぜ。幽波紋が消えて」

「咲夜の奴、ザ・ワールドのこと気に入ってたから相当ショックだったらしいわ」

「咲夜のザ・ワールド、美鈴のエンペラー、パチュリーのハーミットパープル……フランのキラークイーンなんてのもある。レミアアの奴はスタンドが出なかったのか？」

「知らないわ。よっぽど恥ずかしいスタンドでも出たんじゃない？」

「……はつくしゅ！……誰かが私のことを噂してるわね？あーやだやだ」

幼き紅魔館の主人は、優雅にダージリンを嗜んでいた。

名誉の負傷を労りながら、彼女は激動だったここ最近に想いを馳せる。

「……スタンド、ねえ。キラークイーンだとかクレイジーダイヤモンドだとか、そういうのが良かったのに……」

グツと拳を握るレミアア。

「なんで私のはこんなにちっさいのよー！」

レミアアのスタンドは小型軍隊スタンドのハーヴェストであった。

「こんなの恥ずかしくて出せないじゃない！貴子ですらあんなかつこいいのを出せてたのに……」

貴子、という名前でごと止まる。

「……やめましょ。今日は変な日ね……」

そして勢いよく咲夜の淹れたダージリンを思い切り飲み干した。

――藍の苦難

八雲藍は、優秀な式神であった。

幻想郷の管理者に仕え、その実力は計り知れない。

九尾の大妖怪にして、圧倒的な頭脳の持ち主。

その功績に、三途の川幅の方程式を導き出したとかその類のものは数えきれない。

そして今、彼女は苦悩していた。

「……本当にどうしようか」

博学才榮な彼女をもつてしても解けぬ難問。

その原因は、紅魔館の門番、紅美鈴である。

件の紅霧異変にて血の混じり合うような激闘を繰り広げ、彼女の精密さゆえの隙を突かれ敗北、その後……この後の事を彼女は語りたがらない。

ただ、彼女の主人に聞く所によると、住処の元に素っ裸で帰ってきたのだとか。

ナニがあつたのだろうか。

その迷惑な門番によつてできてしまった彼女を悩ましているもの。

それは彼女の家を今も元気に駆け回っている。

その姿を見て、複雑な気持ちに駆られている事を、彼女の主人だけが悟っていた。

紅の妖怪にやられた事を重く受け止めた彼女は一から鍛錬を積み直す決意を固め、今日も己を磨き上げる。

動きがパターン化されてしまっているならそのパターンを3倍にすればいい。

尻尾が効かないならもつと伸ばせばいい。

その一本槍な豪快さもまた、彼女の強みであり、弱みでもある。

そして家で茶を嗜んでいた彼女の主人は、自分の式神の苦悩しながらも答えを探そうとする姿を見て、微笑みながら内心で応援するのであつた。

余談だが、八雲藍を連れ込んだ事が何故か館の者にバレた美鈴は、主人レミリアスカーレットにこっぴどく叱られたのだとか。

— 遺書の秘密

「そういえば、貴子の遺書にフランの事書かれていたじゃない?」
パチュリーが小悪魔に問いかける。

「ええ、どうかなさいましたか?」

「あの遺書をいつ書いたのかは知らないけど、貴子がフランと出会ってから遺書を書く時間なんて無かつたと思うのだけれど」

「あー、それはですね……以前パチュリーがかけた魔法、覚えてますか？」

「……言語の壁を無くすやつかしら？」

少し顔を上げるパチュリー。

「ええ、それによつて貴子さんは私たちにしか使えない悪魔語を理解してましたよね？」

「ああ……そういうこと」

また顔を下げるパチュリー。

「ええ、説明させてくださいよー！」

両腕を上げて抗議する小悪魔。

「……つまり、あのホールにいた時、死ぬ間際に貴方に伝えていたんでしよう？ フランに向けた遺言を、悪魔語でね」

「ええ、その通りです。悪魔の言葉は人間のより万倍優れていますから、数秒あればあれくらいの内容なら余裕です」

「その時にはすでに死ぬ気だったのね。貴子は」

「……彼女はいつも死ぬ気でしたよ。そういう人でしたから」

「……それもそうね」

――フランの成長

フランドールスカーレットの日記から引用

今日、貴子とかいう女が来たの！ 見るからに賭け事の為に借金背負ったりしちゃうタイプね！ でもどうせすぐに怖気付いて逃げちゃうわ！ 逃げたら私が殺すけどね！

貴子、お姉様に何か教えてるわ。お姉様、楽しそう。

また、私だけが仲間外れ。私だけ。私。こんな、能力さえなければ。なければ。

美鈴に修行をしてもらってるみたい。美鈴、嬉しそう。私にはあんなことしてくれないのに。そんなにあの貴子なんていう人間がいの？

咲夜が倒れたわ。美鈴のせいね。馬鹿。コソコソ何かしようとしてたみたいけど、すぐに貴子が行動したみたい。つまらない。

宴会してる、貴子がまたみんなの中心にいるわ。貴子。あんな薄ら

悪そうな人間の何がいいのよ。みんなして。私はまた仲間外れ。

貴子が牢屋に入れられたわ！私と同じだ！私と同じだ！会おう！貴子に会おう！貴子！そして殺すわ！そうすればきつと戻ってくるのよ！

フランの日記はここで途絶えている。

―レミリアと賢者の会話

日が沈み、月光に照らされる紅魔館のテラス。

そこでレミリアは豪華な椅子に腰掛けワインを嗜んでいた。

「……隠れるな。うざったい」

レミリアは大きいため息をついた後、夜空の方へ虚空に向かって話す。

もちろんそんな奇行に勤しむほど彼女は馬鹿ではない。

「あら、気づいていらしたのね」

「露骨に結界を開いておいて何をいう」

「御挨拶をしておこうと思ひまして」

「貴様のいう通りにしたはずだ。もう用は無いだろう。お互いにな」

藍の主人が空中から上半身だけを出して語りかけてきた。

レミリアも取るに足らないと言った様子で微動だにしない。

牽制をぶつけ合う両者。

「予定よりも早く異変を起こされては困りますわ。どうしてかしら？」

「気分だよ。私たちにそれ以外があるのか？」

レミリアの返答をまるで赤子の戯言のように鼻で笑い飛ばす。

「あら、なら酒を断つ気分にはならないのかしら？」

「……知っているのなら言うな。契約は果たした。それが全てだ」

「従者の教育はしっかりと為すことね。これは警告よ」

「運命に教育なんてできないさ。それにお前も藍とやらを教育する事だな。主人に似てマヌケだ」

扇子で口元を隠す。

レミリアもギラリと牙を見せて笑う。

「あら、私が貴方に教えてさしあげましょうか？礼儀というものを」

「ちよつと前までは、私よりも無礼な奴なんていないと思っていたんだが、どうやらこの世界は広いようだ」

「……あの人間のことかしら？」

「魂に干渉したら貴様を殺す。これは警告だ」

「恐ろしいわね。ともあれ、契約の履行、感謝いたしますわ」

まさに取ってつけた、と言う表現が相応しいほど深みのない笑顔を見せる。

わざとなのかも知れない。

「さつさと往ね。気分が悪い」

「ありがたくそうさせてもらいますわ……ああ、失念していました」

「なんだ。話が長いと嫌われるぞ。いや、嫌われている、の間違いか」

「あの人間は……」

「皆まで言うな。知っているさ。私を舐めるなよ？」

「あら、そうでしたの。ならこれで失礼いたしますわ」

「さつさと死ね。老妖怪が」

「うふ、照れますわ」

「老いが進んで耳まで落ちたか」

その妖怪が消えた所に、レミリアは唾を吐きかけた。

——苦勞は絶えぬ

レミリアは傍若無人に振る舞っているように思われるが（実際そう）その個性の強い従者達にもつとも苦勞させられている者でもある。

「ねえ咲夜、ちよつと聞きたいんだけど」

「はい。どういたしましたか？」

紅霧異変後、少しずつ気持ちに整理のつけられてきた時期。

ある疑問をレミリアはぶつけた。

「貴方、博麗の巫女とは、あのホールで闘ったのよね？」

「ええ、その通りでございます」

「そこにあつた私の銅像が壊れているのは何故？」

「……………」

レミリアの質問に、咲夜は答えない。

いや、その額に流れる大粒の冷や汗が立派な返答である。

「ボコボコに殴られたような碎け方をしていたのは何故?」

「紅茶のおかわりを淹れましょうか?」

「質問を質問で返すなあー!」

また、このような事もあった。

「お嬢様、いかがなさいましたか?」

「美鈴……ちよつとそこに正座なさい」

右手をこめかみにあてて目頭をほぐすレミリア。

どことなく老人のような仕草である。

正座させられた美鈴も、心当たりしかないと云った表情である。

「なぜ自分が呼ばれたかわかるかしら?」

「お恥ずかしくも、全く……」

「八雲藍……と言えばわかるかしら」

ギクツ!と音がなりそうなほどに動揺する。

もつとも不味いものがバレている。

「咲夜が来てからは大人しくしていると思っていたのに、昔と変わらないじゃないの!」

「申し訳ありません……」

「その喧嘩したやつみんな友達(性的な意味)みたいな考え方どうにかならないの?」

「深く反省いたします……」

「責任とって、菓子折り持って謝ってきなさい。関わり持つと面倒なのよ!あいつらは!」

「承知しました!すぐに行ってまいります!」

美鈴は飛び立っていった。

一晩が過ぎ、美鈴が帰ってきた。

「ねえ美鈴……あんたもうそっちの仕事しなさい」

「……………」

今度はパチユリーも説教に参加している。

下を向いてバツの悪そうな顔をする美鈴。

「私の目を見なさい。そして自分が何をしたか言いなさい」

「……お嬢様に言われた通り、手土産を持って八雲家に行きました」

「それで？」

「……手土産を渡したら、藍さんにせっかくだから茶でも飲んでいけと言われて……お言葉に甘えて」

「そうね。そんなところだろうと思っただわ。それから？」

「……その、なんとというか……変な雰囲気になっちゃって……あの……」

「はつきり喋りなさい！」

「すいません！……あの、本当にキスだけなんです。それだけなんです！」

「……」

睨むような、そして呆れたような目で美鈴を見て青息吐息を吐くレミリア。

そして何も言わずにパチュリーに視線を飛ばし、それを受けたパチュリーも何も言わずに動く。

「ねえ、できれば正直に答えて欲しいのだけれど」

「……」

またしても俯く美鈴。

その紅い髪にレミリアとパチュリーの顔が映る。

厳しい顔である。

「いまパチエに嘘のつけなくなる魔法をかけさせたわ。もう一度だけ聞くわよ？ 貴方は何をしてきたのかしら？」

「……ベッドに向かいました」

「そして何をしたの？」

「……もう一度抱いてしまいました」

「どうして嘘をついたの？」

「藍さんのメンツもあるので……」

「……」

衝撃の自白にレミリアはもはや言葉を発せなかった。

「怒ればいいのか泣けばいいのか。」

ただわかることが一つ。

「美鈴……貴方も大概馬鹿なのね……」

今日もレミリアの気苦労は絶えない。

——ある小悪魔の語り

いやー、貴子さんが来てからはまるで毎日が台風でしたね。

ほんと、トラブルの神に愛されていると言うか、もはやトラブルの神そのものというか。

ですけど……一生懸命、生きようとしているというか……死ぬ気で生きようとするみたいなの、そういう泥臭さは好きでしたよ。

ともあれ、ご冥福をお祈りします。

ちなみに貴子さんは案外大きいんですよ……身体検査係の特権ですな。

まあ、紅霧異変はこれにておしまいですね。

次はちよつと話の作りが変わりますから。

それもお楽しみに。

それでは、終わらない冬にまた会いましょう。

第二章 妖々夢編 話の長い閻魔様

第二章 春雪異変

初夏、幻想郷を襲った赤い霧の異変が当代の博麗の巫女の手により解決してから早くも数ヶ月の時間が過ぎた。

異変が終わった後の紅魔館は、悪魔の館にふさわしく暗い雰囲気にならなれど、飲まれていたが、時間が経つにつれ少しずつ元気と活気を取り戻していった。

最近では異変の元凶ことレミリアが咲夜を引き連れて博麗神社に遊びに来たり、魔理沙がパチュリーとの勉強の修行の成果を試すべくフランに決闘を申し込んだりとなんだかんだで良好な関係である。

また、フランの精神的成長についてはめざましく、不安定であった情緒が少しずつ穏やかになってきているとパチュリーは結論つけた。積年の苦悩についた終止符、皆もその事については思うところがあるのだろう。

特に仕えの長い美鈴は、人知れず温い涙をこぼしたらしい。

咲夜やパチュリーはもちろんのこと、言葉こそ無いが妹の羽ばたきをもっとも嬉しく思っているのはレミリアであった。

本人は隠しているつもりだろうが、霊夢との会話の内容はあらかたフランや館の者の自慢話なのでバレバレである。

そんな尽きぬ自慢話を聞かされてうんざりしている霊夢は、ほんの少しの苦情として少しづつレミリアに出すお茶を渋くしていくのであった。

しかしレミリアは渋い顔をしながら、

「日本文化も侮れないわね」

と言つてその渋茶をすする。

霊夢もそれを見て渋い顔をするので、博麗神社には渋い顔が絶えな
い。

突如幻想郷に現れた謎の霊体スタンドも、これまた突如として消え

去った。

その裏には八雲やその他の幻想郷の賢者達の影が見え隠れしていたが、解決さえされたのならどうでもいいという呑気な考え方をする者がほとんどなので特に騒がれることはなかった。

一応天狗が新聞記事にしたようだが、不思議なことにスタンドは写真にも映らず、大体の者の目には映らないため人里の者からの反応も悪かったのだ。

そんなウケの悪い記事を天狗達もずっと書くわけがなく、すぐに他の物へと話題を変えたのであった。

最近のもっぱらの話題は、人里に現れる謎の少女だとか。

そういうわけで、暑かった夏も終わりを告げて幻想郷にはお待ちかねの白い冬がやってきていた……のだが。

「おい霊夢」

「魔理沙、貴方の言いたいことはわかるわ」

「なら速やかに改善を求むぜ」

「その発言はきつと私にされたがっているわよ」

「いくらなんでも一週間ずっと鍋はおかしいだろ！」

「一週間連続でご飯をたかりにくる奴に言われたくないわ」

「……あいこにしといてやるぜ」

「どうみても私の勝ちじゃないの」

ある冬の日のこと、今日も今日とて魔理沙は博麗神社に遊びにきていた。

最近はおからさまに夜ご飯の時間帯を狙ってやってくるので夕チが悪い。

さらに凶々しくも鍋の中の貴重な肉ばかりを突こうとする友人に、堪忍できぬと霊夢は待ったをかける。

「あんた最近紅魔館に入り浸ってるみたいじゃないの」

「ああ……パチュリーに用があつてな……おい、野菜ばっかよせるなよ」

「何よ、客のくせして肉を食べようとはおこがましいのよ」

「肉を持ってきたのは私だぜ……それに」

「それに？」

「この野菜……変な味しないか？」

「そう？私は何とも無いけど」

「そうか？……少しは肉よせてくれよ……」

「肉ばっか食べてたら馬鹿になるわよ」

「ネギを食ったら賢くなるとでも言いたいのか？」

「食べたらわかるわよ」

「ならお前に譲るぜ」

「私はもう賢いからいいのよ」

「賢いやつはな、安売りに釣られて足の速い野菜ばっか買っちゃまって鍋地獄に陥ったりはしないんだぜってあっつー！」

「あら、手が滑ったわ。ごめんなさいね」

魔理沙の膝下に熱々の鍋の出汁が飛び散った。

言うまでもなくわざとである。

これじゃあしみになっちゃうじゃねーかとブーブーと文句を言いながらも少しずつ鍋は減っていき少女二人の騒がしい晚餐は終わった。

「ふう、ごちそうさま。皿は洗つといてやるよ」

「ありがとう。助かるわ」

「風呂でも入ってきな。今晚はとくに冷えるぜ」

「えらく親切ね」

「もう鍋は嫌だからな」

「良かったわね。明日はつくねの鍋よ」

音を立てて食器が割れた。

魔理沙の手元から滑り落ちて。

「これはわざとではない。

「すまん……」

「だいじよぶ？」

「……それはお前の献立に言ってやれ」

天狗の書いた新聞紙やらを持ってきて手際良く粉々に割れた食器の処理を終え、魔理沙は皿洗いを再開し霊夢は言われた通り風呂場に

向かった。

博麗神社の風呂はかまどでお湯を炊く形式のため、暖かくするために一度外に出なければならぬ。

霊夢は草履を履いてイヤイヤながら引き戸を開ける。

外はあまりに寒く、吐く息がのきなみ白く凍っていった。

まるで魂が抜けていくように。

「ふう……ほんとやんなるわね。いつそ温泉でも湧かないかしら」

そんな独り言を呟きながらも薪を焼べる。

この焚き火の熱でさえこの寒さではありがたい。

手をかぎして少しだけ暖を取ると、じわじわと手のひらの毛細血管が広がっていく感覚がわかる。

ふと上を見やると、満点の星空。

冬の夜空は空気が澄んでいて星がとてもきらやかに映る。

また一つ大きな白い息を吐いて暖かい風呂へと向かうのであった。

〜少女脱衣中〜

「ふああああ……生き返るわあ……」

熱々の湯船に肩まで浸かって疲れを息と共に腹から出す。

風呂の湯気に撫でられて顔が温い。

最近、もっぱらこの瞬間が至福である。

あとは一人熱燗をこたつに入りながらちびちびやつてる時だろうか。

ここ最近はより一層冷え込んでいる気がする。

いや、間違いなく気温は下がって来ている。

雪も止んでいる時の方が珍しいくらいだ。

湯船の中で両足の脛の辺りをそつと撫でる。

「はあ……面倒ねえ」

狭い浴室に霊夢の声がこだました。

そして、風呂から上がって冷やしておいた牛乳を一气飲みしたときに、これも至福だったかと思いつく。

「魔理沙、アンタも入ってきなさいよ。良い湯加減よ」

「おお、助かるぜ！最近冷え込んで皿洗いなんかも辛いからな」

「着替え出しとくわね」

魔理沙は浴室に陽気な口笛を吹きながら向かう。

冬の乾気で唇が乾いているのか、吹き抜ける風の様な音だ。

しかし、ふとその口笛が鳴り止んだ。

「なあ霊夢、いい加減認めろよ」

「……別に認めてないわけじゃないわよ」

「ならどうして何もしない？これは間違いなく異変だぜ。人里でも怪しい奴の目撃情報が増えてきてるって話だ」

「まだ冬が長いだけかもしれないし……」

「もう5月だぜ！それにこのままだと里の農作物は大打撃を受けちゃう！ただでさえ紅魔館の馬鹿どもに日光を遮られたりして弱ってるのに」

「まあ、明日から頑張るわ」

「明日やろうは馬鹿野郎……なんだぜ。風呂、頂くな」

霊夢にそう言い放った最後のセリフはどちらかというところ、まるで自分に向かっていうような切なさを含んだ言い方だった。

そっぽを向いた霊夢に返事はなく、にべもなく魔理沙は湯ぶみにむかっていく。

「異変……ねえ」

そう呟きながら風呂の横の更衣室に魔理沙の為の着替えを置いておく。

風呂場からは魔理沙のご機嫌な鼻歌が聞こえてきた。

今度は唇が潤ったのか音色が良い。

「……呑気な奴」

「それはお前だぜー」

風呂場からの思わぬ返事にずっとこけた霊夢であった。

しばらくして、こたつに入りながら熱燗をちびちびやっていると、風呂の戸が軋む音が聞こえた。

魔理沙が風呂から上がったのだろう。

乙女に相応しく魔理沙は長風呂を堪能する。

その時間は、霊夢に酔いが回るのに十分であった。

魔理沙は長風呂の火照りで、霊夢は酒の酔いで頬を紅くしている。魔理沙がスタスタと居間へとやってきた。

タオルを首にかけ、艶やかな金髪を拭いている。

その顔は、あからさまに不服そうであった。

「なあ霊夢、私たちは今何歳だ？」

「さあ……覚えてないわよ」

「いくらなんでも、この服はちよつと……ナイんじゃないか？」

「何よ。文句言うなら脱ぎなさい」

「友人代表で言つといてやる。お前の寝巻きのセンスはださいぜ！」

魔理沙が来ていたのは、胸のところに大きく

『黄色ブドウ球菌！』

と書かれたシャツであった。

「なんだよこれ！このエンテロトキシンを産生しそうな文字列は！どう言う意図なんだぜ!？」

「私の私物にケチつけるっての？客のくせして」

「私物かよ！どこで買ったんだこんなの」

「ツタ○よ」

「……霊夢、頼むからこんな駄作でも原作の世界観だけは守ってくれだぜ……しかもそれはDVDを借りるところだ」

「ちよつと何言ってるかわかんない」

「分からなくていいぜ」

「変なやつね。ほら、そこに布団敷いたから早く寝なさい」

「ずりいぜ。私も呑む」

「残念。もう乾したわ」

「ちえつ。そう言うのは早いんだな」

「ほら、さっさと寝る」

「わかったよ……」

部屋の灯りを消して、寒さを紛らわす様に布団の奥深くまで潜り込む。

少女たちは騒がしい世界に別れを告げ、静かに微睡みへと落ちてゆくのであった。

その翌朝……

「うう……腹が痛いぜ……」

魔理沙は何故か朝一番から津波のような腹痛に襲われていた。

その痛みは尋常ではなく、押しでは引いてとっちらかせの痛みの揺れに息を漏らす。

痛みを極力抑えながらとぼとぼと慎重な足運びで廊下二つ渡ったところの厠へと向かった。

厠までやつとの思いで辿り着き、ドアの取手に手をかけたところで一つの違和感に気づく。

いや、気づいてしまった。

そういえば、朝から霊夢を見ていない……。

そして厠の戸はいつもは空いている……。

まさか！

「つなー！」

厠のドアは開かなかった！

「おい！変われ霊夢ううう！」

「無理……うっ！」

壊れそうなほどに強くドアを叩く魔理沙。

しかし、その反動は直で腸部にも伝わるため力を込めるとカウーンターも大きい。

「っ頼む！霊夢！」

「どうやら昨日の鍋の何かが腐ってたみたい……」

「そんなことどうでもいい……！早く開けろ！」

「私だって替わりたいわよ……っ！」

明朝七時、清々しい朝に神聖な神社の境内にて行われた少女二人の会話である。

聞くに耐えないその怒声のやり取りに、境内の鳥はすべて彼方へ飛び立っていつてしまった。

「頼む……！もう……私は……！あっ……」

そしてようやく、ドアが開かれた。

霊夢はとても爽快感に溢れた顔をしている。

かたや魔理沙は……。

「……はい魔理沙」

「いや……もういい。もういいぜ……こんなTシャツ着てるからだ……」

「えっ?……あんたまさか!」

「……もう黄色ブドウ球菌には懲り懲りだぜ」

その日から三日間ほど、霧雨魔理沙は何故かめちやくちやに落ち込んで誰とも会いたがらずにいたんだとか。

その真相は二人を除いて誰も知らない。

——紅魔館

「はつくしゅっ!!」

「*tes souhairs*」

「*merci*……」

ばばばーん!小悪魔解説ー!!

どうも呼ばれてないのに飛び出す小悪魔ちゃんです!

さつきお嬢様がくしやみを出された時にされた会話は、フランスでくしやみをした時にされるテンプレ文的なやつなんですわ!

あまり日本では見られない文化ですが、この様なくしやみをした時の定型分は多いそうです!

いきなり解説失礼いたしました!

それでは!

「なーんか寒いわね……」

「あら?風邪かしら?吸血鬼でも風邪をひくのね?」

くすくすと嘲るように笑うパチュリー。

レミリアは大図書館に遊びに来ていた。

その手に本は握られていない。

レミリアは昔、恋愛小説ばかり読んでいた所を

「吸血鬼も乙女なのね」

とパチュリーに馬鹿にされたつきりあまり本は読んでいないのだ。

ただ単に引きこもりがちな友人に話でもしてやろうと邪魔しに來ただけである。

「ふん、魔法使いのくせに喘息持ちの奴に言われたくはないね」

「あら、最近は良くなってきたよ？試してみる？」

「上等だ。かかってこい」

立ち上がり、レミリアは翼を広げてパチュリーは何やら魔法の詠唱を始めている。

二人の強者が殺意をぶつけあった波動で周囲の本棚が縦に揺れている。

あくまでもパチュリーの保護魔法をかけた上で、だ。

「お二人とも、喧嘩はお控えください」

そんな今にも喧嘩を始めそうな雰囲気二人の間に、瞬間移動のように咲夜が現れた。

お茶のおかわりを淹れにきたのだ。

現在の状況を危機と見たのか、後ろからレミリアを羽交い締めで抑えている。

「離しなさい咲夜！こっちは冬が長すぎてイライラしてるのよ！その紫もやしを殺さなきゃ気が済まないわ！」

咲夜の拘束を解こうとジタバタするレミリアだったが、暴れすぎると咲夜に怪我をさせてしまうのであまりジタバタできない。

その事を重々理解しているからこそその行動であった。

パチュリーはという何事もなかったかのように椅子に座り直し、本の続きを読み進めていた。

「何だってこんなに冬が長いのよ！四季が豊かな国じゃなかったの日本は!？」

「そうね。確かに冬のこの長さは異常だわ。美鈴の農園も大変だと言っていたし」

荒ぶるレミリアを片目につらつらと述べるパチュリー。

「急に冷静になるなよ。私が馬鹿みたいじゃないか」

「そうだわ。レミィ一つ提案があるのだけど」

レミリアはパチュリーの提案を聞いてやらんでもないと言った態度で翼を畳んで椅子に座り直し、咲夜が一瞬で入れ替えたお茶を啜る。

最近は霊夢に出してもらった緑茶が紅魔館のブームであった。といっても、かなりまろやかに味付けされているが。

「ええ!? 咲夜を異変解決に向かわせるう!？」

急に大声で立ち上がったため、近くを飛んでいた小悪魔が驚いて「キヤツ！」という声を出しながら本棚にぶつかった。

レミリアはとびつきりの訝しげな目線を送る。

この紫色は何を言っているのだと。

「どうかしら? そろそろウチだけに居させるのもどうかと思つてたのよ」

「どうもなにも、ダメに決まつてるでしょ」

「あら、どうして?」

「どうしてもよ! …… 咲夜に行かせるのは心配だわ」

咲夜に聞こえないように最後の方は声を潜めて本音を伝える。

それを聞いたパチュリーは、また同じように意地悪な笑みを浮かべる。

「あの子ももう子供じゃないのよ?」

「そうだけど……どこか抜けてる所があるじゃない? あの子」

「例えば?」

「未だに七夕の短冊にプ○キュアって書いてるのよ?」

「……それは深刻ね」

「そんな子を外に出したらどうなるか……」

パチュリーは本をパタリと閉じて軽く咳払いをする。

深めの瞬きをしてレミリアをじっと見つめる眼差しの奥には、どこか熱いものがあった。

「レミィ。貴方のその大切であればあるほど閉じ込めようとするのは悪い癖よ」

「え?」

急な進言に少し戸惑う。

パチュリーがこんな風に断言する様に言うのは珍しいからだ。

それだけこれから話す内容が真剣という事だ。

「フランだって、貴方が外に出したからないことを汲み取って家から出ないの。」

「フランは……」

「フランは何？あの子は馬鹿じゃないのよ。その上に咲夜まで閉じ込める気？」

「……だけど」

「レミィ……。あの子を信じてあげなさい。それが主人の務めでしょ？」

寡黙な友人の、風邪でも引いたのか疑うほどに似合わない情熱的な説得を受け、神妙な顔をして黙り込むレミリア。

そして久しぶりに長いセリフを喋ったため、ゼエゼエと軽く酸欠を起こしているパチュリー。

また別の日。

「咲夜さんを異変解決に向かわせるんですか？」

「いや、まだ考え中なの。美鈴はどう思う？」

「うーん、そうですね……」

門にもたれかかりながら、人里からこつそりと仕入れた七星のタバコにマッチを擦って火をつける。

ゆつくりとその火は進んでいき、煙は美鈴の肺へと入っていった。

それを深く味わいながら考えを蒸す。

このごろ、冬の寒さのせいで吐息が白くなるため、美鈴は白昼堂々と煙草を吸っていた。

煙草を吸おうがバレないのだ。

たとえ煙を吐いても遠目で見れば白い息を吐いてるようにはしか見えぬ。

といつても、主人を前にしてタバコを消さないのは失礼極まっているが、レミリアは今更そんなことを気にしない。

美鈴の愛煙を認めたのはレミリアなのだ。

今は、煙草うんぬんよりも美鈴の意見が欲しい。

「咲夜さんも、そろそろ外で色々見てこないといけないかもしれませんね」

「色々って何よ」

「そうですねえ……運命の相手、なんてのはどうです？」

「……貴子の冗談の方がまだ笑えたわ」

少し眉間に皺を寄せるレミリア。

それは怒りではなく、しかし怒りのような複雑な気持ちによるものであった。

その名前のわからない感情にレミリアはヤキモキしているのだ。

怒りとは違う。

焦りとも違う。

それは、言うなれば愛だろうか。

「お嬢様。咲夜さんが心配ですか？それなら尚更外に出したほうがいいですね」

「どうしてよ」

吸い殻の火を人差し指の先で消して、ぴゅつと放り投げる。

すると、瞬く間に湖を渡り遙か彼方へと消えていった。

「可愛い子には旅させよ……ではないですが、過剰な保護は毒になります。妖怪とは違い、人間は敗北も挫折も知って初めて一人前になるんですよ」

美鈴のその発言には、どこかに哀愁がある。

咲夜を死なせかけた事で、美鈴はいまだに自分で自分を許せていない。

「……貴方がそこまでいうのなら、そうなのかも知れないわね」

「恐縮です」

冬の寒さで、吐く息は真っ白に染まる。

まるで、私まで喫煙者みたいねと苦笑いしながらレミリアは館へと戻っていった。

「……きつと、これは私の自己満足なんですけどね」

誰にいうでもなく、そう言って美鈴はとびっきり白い息を吐いた。

次の日の紅魔館は異変以来の大盛り上がりであった。

「それでは行って参ります」

「着替えは持ちましたか？水筒は？お弁当も忘れてないですね？」

「もう、美鈴ったらその確認何度目よ」

「困ったらこの水晶を使うといいわ。小悪魔につながるようになってるから」

「ありがとうございます。パチュリー様」

紅魔館の玄関前。

咲夜を中心に館中の全員が円となって囲む。

やれアレは持ったかだの、やれコレは忘れるなだの。

遠足前のお母さんのような対応で見送られている咲夜であった。

「……結局、パチエも過保護じゃない」

「そうかしら？」

「あの水晶、えらく作るの苦労してたじゃない。あんなに簡単に渡しちやつていいのかしら？」

「一度作ったものを作るのは簡単なことだわ。それより貴方こそ声をかけて来るべきではないかしら？」

パチュリーにとんと背中を押されるレミリア。

実際は非力な為全く力は伝わっていなかったが。

周りのもの達がレミリアの為に道を開ける。

親友の想いに応援され、咲夜に近づいていく。

なんと声をかけようかと悩んでいると咲夜に先手を打たれてしまった。

「それでは行ってまいります。お嬢様」

「……………」

するとレミリアは険しい顔をしながら壁にもたれかかり、ぐつと腕をくんだ。

全員が息を呑む。

そして……右手の人差し指と中指を組んだ腕の中から立てる。

しばしの静寂。

それを見た咲夜は唇を上げてにこりと笑い、何も言わず飛び立っていく。

彼女が猛吹雪の中を飛び立っていったのを確認してゆっくりと大

扉が閉まるのであった。

「……………どやあ」

「ドヤアじゃないわよ！何あのポーズ！アンタはサイヤ人の王子か何かなの!？」

パチユリーの怒号が響き渡ったのはいうまでもなし。

咲夜が紅魔館を出発したのとほぼ同時刻、二人の人間の影が雪の舞い散る白い空へと飛び立っていった。

一人は博麗神社から。

一人は魔法の森から。

両者はそれぞれ全く違った方向へと飛んでいく。

「……………魔理沙の奴、まだ怒ってるかなあ」

こちらは、幻想郷の愉快的な巫女こと博麗霊夢である。

つい最近家で鍋を食べていたらあろうことか腹を下してしまい、巻き添えを食らった魔理沙と悶絶していた事が懐かしい。

その一件のせいで魔理沙に対してちよっぴり引け目を感じており、異変解決に向かわされる羽目になってしまった。

しかしどつちみち霊夢からすれば遅かれ早かれではあったのだが。

「うーん……………こっちねー」

霊夢の異変解決の仕方はシンプルである。

なんの手がかりを持たずともとにかく直感に身を委して進み、その先にいた者を叩きのめす。

たとえばそれが神であろうが閻魔であろうが。

そのスタンスは大部分が勘に委ねられているし、なによりそれでも特に差し支えない事が恐ろしい。

神々に愛された人間だからこそできる芸当である。

そして今もその直感に任せ、雲の上の上、遙か上空へと霊夢は飛び立っていくのであった。

長く厚い雪雲を最高速度で突き抜ける。

霊夢は特に垂直の飛行が得意で、わずか数秒もせずに分厚い雲を通

り抜けてしまった。

雲を抜けた先は太陽が近いが寒い。

霊夢は久しぶりの紫外線をしばし堪能するのであった。

すると、どこからか風に乗せられてうっすらと何かが聞こえてくる。

悲哀や哀惜といった情緒に満ちた旋律……それは音楽であった。

「ちよっと、チンドン屋に用はないの。どきなさい」

騒霊、プリズムリバー三姉妹が楽器を演奏しながら飛んで現れた。

空中で楽器を演奏するとは器用な奴等だとどうでも良いことを考える霊夢。

その調は急に悲しくなったりかと思えば明るくなったりと不規則だ。

上空には遮るものなどはもちろんないので音楽はよく響き、霊夢一人の声など簡単にかき消してしまう。

「うるさいって言うてんのよ!!」

かなりの音量で怒鳴るがそれも虚しく騒霊達には届かない。

プリズムリバー三姉妹は音楽を奏でる手を止めなかった。

霊夢の声が聞こえないのだから、そもそも止める理由もない。

痺れを知らした霊夢はお札を一枚ルナサの眉間目掛けて投げる。

がしかしそれは軽く避けられる。

「……っー」

霊夢は自分の心に起きたとある違和感に気づいた。

この音楽は、聴く者の精神をどんどん鬱や躁に傾けてしまうのだ。

現に今、霊夢の心の中では無気力感が急に湧き出て来た。

少しずつ鬱に吞まれているのだ。

このまま躁や鬱になってしまえば異変解決に支障をきたす。

もう、会話などしない。

言葉などかわさずにぶちのめしてやるだけである。

霊夢の弾幕が展開された。

一方その頃、魔法の森を飛び立った魔理沙はある一人の魔法使いと

対峙していた。

「何だか……居心地がいいぜ」

「こんな殺伐とした夜がいいのかしら?」

雪の降る夜空を舞う二人の少女。

両方ともに金髪で、かたや箒に跨り、かたや人形を漂わす。

冷たい風がさらさらの髪を揺らす。

二者の間を滑る独特の間合い。

啖呵を切れば皮肉で返す。

愉快な少女達なりの会話術であった。

「いいんだよ」

「所詮、あなたは野魔法使いね」

「温室魔法使いよりはよくないか?」

「都会派魔法使いよ」

「あー?、辺境にようこそだな」

「田舎の春は寒くて嫌ねえ」

魔理沙には帰る家など無いし、故郷愛なんかもそれほど持ち合わせていなかったが、アリスのあまりにもな一言に少し苛立ちを見せる。

「誰の所為で春なのにこんな吹雪にあってるんだよ」

「ちなみに、私の所為ではないわ」

「そうかい。でも、なけなしの春くらいは持つてそうだな」

その一言をぶつけてグツと帽子を深く被り直す。

魔理沙が気合を入れるときのいつの間にかの癖であった。

懐からミニ八卦炉を素早く取り出し、右手で箒、左手でミニ八卦炉といういつもの構えを取る。

「私も、あんたのなけなしの春くらいを頂こうかしら?」

対するアリスは、右手の指をわずかに動かした。

その動きに呼応して周囲の人形達が一斉にアリスの前行き魔理沙を睨む。

人形なのに睨むとはちゃんちゃらおかしい話だぜ、と心の中で毒づく魔理沙。

小さな人形達の持つ槍や剣などの切先に、雪夜の光が反射して鈍く

光る。

両者は大きく白い息を吐き、お互いに睨み合う。

次の瞬間に、勝負は始まった。

魔理沙の弾幕が暗い世界に輝きを放つ。

魔理沙とアリスの光弾が弾けあう数刻前、咲夜は吹雪に視界を取られて道に迷っていた。

「これは……大変だわ。道に迷ってしまったみたい。ここはどこ？」

「ここはマヨヒガだよ！」

「マヨヒガ？」

急に目の前に現れた謎の黒猫に、ナイフを取り出して臨戦体制を取る咲夜。

動物らしくもなく刃物に怯えず、堂々とした態度で黒猫は返事をする。

その声は少し高く、幼い印象であった。

「迷い家（まよいが、マヨイガ、マヨヒガ）とは、東北、関東地方に伝わる、訪れた者に富をもたらすとされる山中の幻の家、あるいはその家を訪れた者についての伝承の名である。（Wikipediaより引用）」

「何だつて？ういきぺでいあ？」

「こう言えって教わったの。アタシも意味は知らない」

「ふうん……そう。富をもたらすねえ」

咲夜は訝しげな表情をして、受けた説明を反芻する。

橙は、人間がこういう顔をする時は大抵馬鹿な事を考えているのだと短いネコ生の中で学んでいた。

「ところで橙とやら、この辺りで春を集めてる者を知らなくて？」

「……何でアタシの名前知ってるんだよ」

「え？上の文で言ってたじゃない。橙は、人間がうんたらこうたらつて」

「あれは地の文といってアタシたちには聞こえないの！そういうメタな発言すると話の品位が下がっちゃうからやめて！」

「品位なんて元からないと思うのだけれど」

「問答無用！いざ勝負！」

何やらよくわからない形で戦いは始まってしまった。

咲夜の時間停止と弾幕の連鎖がマヨヒガに舞う。

霊夢とプリズムリバー三姉妹

魔理沙とアリス

咲夜と橙

ほぼ同時刻に始まったそれぞれの戦い。

三者三様の表情を見せたそれぞれの激闘にて、第一着でのゴールを飾ったのは霊夢であった！

「つたく、手間かけさせんじやないわよ……」

演奏による鬱の影響か、気だるそうに文句を言う霊夢の後ろには白目を剥いて雲の中に落ちていくプリズムリバー。

彼女達の戦闘スタイルは音による弾幕と、叙情的すぎる旋律による、聞いたものの精神を狂わす音楽そのものであった。

しかし、一見強力に見えた能力であったものの、霊夢はその音色々による精神干渉の攻撃を、お札による耳栓という古典的対策で封じ込み、何ということもなく倒した。

本人は、これくらいの相手ごときに手間取つてられないと自省している。

「……あそこね。わざとらしく妖気まで残して……いや、これは妖気とはまた違う……とにかく急がないと」

そう言つて、空に漂っていた巨大な扉のようなものに向かい全速力で飛び抜ける。

結界の長いトンネルを抜けるとそこは冥界であった。

ついで、ほぼ同時刻に決着をつけたのは咲夜である。

……とはいっても、急に橙が、

「あ、もうこんな時間！行かなきゃ！」

といつてどこかに飛び去ってしまったので、咲夜の暫定勝利といつ

た形だ。

向こうから挑んできたのに向こうから去っていったその猫らしい自分勝手さに少し苦笑いするものの、気を取り直して飛び立って行く。

その行き先は、遥か上空彼方であった。

マヨヒガを抜けるとそこは空高い上空で、更にその遥か上に巨大な扉があったのだ。

なお、去り際に橙は、

「決着はまた今度ね！ばいばーい」

といっていたので、勝負は引き延ばしにされたと言った方が適切である。

咲夜と霊夢はほぼ同時刻に戦いを終えたが、魔理沙はアリスとの決着をつけかねていた。

「つちーしぶとい奴だぜー！」

「そういう貴方は全くしぶとく無いわね。もう残機は一しか残っていないじゃない」

「お前だって、残機は二つだ。そして今一つになった」

「なにをっ……！」

アリスに一筋の星が炸裂し、派手な音をかき鳴らす。

今の攻撃で両者ともにスペルカードは全て使い切り、ここからは単純な弾幕勝負である。

「これで一対一だ。それももうすぐに終わるがな」

「ふん。まぐれで当たったからって調子に乗らないことね。貴方はまだ私の人形の動きを見切れていない」

その指摘に言い返すことはできない。

アリスの言うことは的を得ているからだ。

魔理沙がもつとも苦戦しているのは、恐るべき技術で変幻自在に動く人形達であった。

隙あらば特攻自爆を仕掛けてくる命無き兵。

一瞬たりとも気が抜けない。

(不味いな……人形の動きが少しも読めないぜ……)

しかし、確かな勝ち筋もある。

黄金に輝く勝利への道。

アリスは、弾幕を避ける時にわざとストレスで避けたり、狭い方を通ったりする。

それは余裕の現れか、それとも挑発か。

その傲慢、驕りに付け入る隙はあるんだぜ、と魔理沙は猛った。

しかし、これから来るであろうその『一瞬』を逃すことはできない。

(あと少し……あと少しだぜ……)

緊張で手汗が滲む。

あらゆる角度方向に神経を尖らしていないといけな消費戦に疲労もあつた。

息を切らす魔理沙に追い討ちをかけるつもりか、アリスは弾幕ではなく言葉を発した。

「貴方のスペルカードは盗品ばかり。その術式から見るに紅魔館の魔女あたりかしら？」

そこまで見破られていたのかと一瞬動揺するが、それを悟られぬように笑ってみせる。

魔理沙のスペルカードはたしかにパクリやオマージュに満ち溢れているが、それはほぼ同意の元であつた。

パチュリーはあからさまに魔理沙でも使いやすいスペルカードばかり使っていたのだ。

これを参考にしろといわんばかりに。

しかし、そんなパチュリー仕込みのスペルカードを切らした今、魔理沙はかなり窮地に陥っているのだ。

長期戦を嫌い、常に高火力を出し続けたことが祟ってもうすぐ魔力が底をつく。

もとより人間の魔理沙は魔力の総保有量が少ない。

それに、回復自体も遅いので一度使った魔力は回復させるのが大変なのだ。

だからこそ燃料切れが一番まずい。

そうなつてしまえばもう魔法による攻撃をすることはできないからだ。

次の攻撃が最後の一撃になる。

そう覚悟し、ぬるい唾を飲み込んだ。

「魔法とは自分の力なのよ。そんな他人に依存した贋作ではだめだわ」

「けっ、私は何もかも全て自分の力だぜ」

「そんな事を言つて家に帰つた時恥ずかしくなつても知らないわよ？」

「……終わったぜ」

「あら、何がかしら？」

「この戦いだ！」

そう言つて魔理沙は、残つた魔力を全て惜しむことなく放出し星の弾幕を展開する。

一瞬のうちに、辺りが昼間の様に明るくなる。

「ふん、何とやらのひとつ覚えね。その攻撃はもう見飽きたわ」

「いやー！お前の負けだぜ！アリス！」

口を大きく開けて歯を見せ明るく笑い、勢いよくパチンと指を鳴らす。

その行為など全く意にも介さず、アリスはまた弾幕のスレスレを避けた。

いや、避けようとした。

次の瞬間、魔理沙が指を弾いた音に呼応してたつた今避けようとした弾が閃光を放ち爆発を起こした。

「つなー！」

予想外の一撃に思わず唸る。

爆発をモロに喰らつてしまい、少し吹き飛ばされた。

アリスは驚きを隠せない。

それは弾幕が爆発したことや、それによつて吹き飛ばされたからではない。

「被弾したな。残機はゼロだ。これで……私の勝ちだぜ！」

「貴方、これは！この魔法はっ！」

爆発の威力は少し弱く口元は元気であるが、動揺し上手く舌が働いてくれない。

そんなもどかしい喋り方のアリスを通訳する様に言う。

「ああ、お前が人形に仕掛けていた爆発の魔法、あれを『参考』にさせて貰ったぜ」

「っどういうことよー！」

「わからないか？弾幕に紛れさせて私はあるものをお前に向けて投げたんだ。誰だつて雪の日には作ったことあるだろう……こんなものをな」

魔理沙は懐からゴソゴソとある白い球体を取り出してアリスに見せる。

「それは……雪玉？」

「ああ、その通りだぜ。それに爆発魔法を掛け、お前がストレスで避けようとしたところで爆発させた」

「けれど……私の爆発魔法は簡単に解読できるものではないわ！あの術式は確かに私のもの！どうして貴方が！」

「ああ、確かにお前の魔法を解読するのはそりゃー苦労したぜ。しかしな、お前は気づかなかつたのか？」

挑発するように、もしくは見下すように笑う魔理沙。

それにより一層腹を立てるアリス。

「私が……私が何に気づかなかつたって言うのよー！」

「私のスペルにパチュリーの面影を感じたんなら、お前はこう考えるべきだったんだ。こいつは魔法を解読することが可能なんだ、とな」

「何を……！」

「読ませてもらったよ。今ここで読み上げる事だつてできるぜ」

「そんな……私の魔法を読んだというの？」

酷く落胆するアリスを下目に、ツラツラと講評を述べる魔理沙。

忤度なしのたった一言。

「確かに苦労こそしたが……パチュリーに比べりやお前の術式は単純だったぜ」

そのトドメとも言うべき一言に、アリスは肉が抉れるほど強く握っていた拳をより強く握る。

「お前は喋りすぎなんだよ。みすみす私に解読の時間を与えてくれたんだからな。それでも残機が残り一つになるまではかかっちゃまったがな」

「……そう」

「何とやらのひとつ覚え、とお前は言ったが私から言わせれば、言葉多しは品少なしってところだな」

「……うっさい」

「あー？聞こえなかったぜ？さっきまでの威勢まで爆破しちまったか？」

「うっさいー」

その返事には、声量こそあつてもまるで元氣や覇氣などなかった。自分が負けるはずなど絶対に有り得ないと思っていたのに。

こんな粗悪な魔法ばかり使う人間に……自慢の魔法まで見破られて、敗北……。

敗北。

その言葉を思い浮かべてしまったのに気づいて、ぶんぶんと頭を振ってその言葉を頭から追い出す。

「ふん。今日の所はこれくらいで勘弁しておいてあげるわ。あんな術式も読めないようでは困ると思っていたのよ」

「……ちっ。めんどくせー奴だぜ」

まさに負け惜しみとしか思えない発言を聞いて呆れる魔理沙であつたが、目の前の少女の目元を流れる一筋の涙に負けて、何も言い返すことができなかつた。

泣かれたらもう何もできない。

それは優しさかもしれないし、他の気持ちかもしれない。

腹いせに雪玉を地面に強く投げ捨てて、大きめのため息を吐くのであつた。

(賢者は黙して語らず……ってか)

魔理沙とアリスの決闘

勝者―魔理沙

冥界の入り口付近が何やら騒がしい。

その原因はもちろん霊夢達である。

「……どうしてあんたがここにいんのよ。とうとうくたばったの?」

冥界へと飛び込み、霊夢が最初に放った言葉はそれであった。

深い皺を眉間に寄せ、かなり不機嫌な声色で。

「あら、私がここにいてはいけないのかしら。別に生きてるわよ」

理不尽な絡みを受けた咲夜は、しやなりと音がなりそうなほどに手慣れた返しをする。

冥界の入り口付近で、二人は不幸にもかち合ってしまった。

両者の目線がぶつかり合ってバチバチの火花を散らす。

二人は特段犬猿の仲と言うわけではない。

むしろ、なんやかんやで縁もある。

しかし霊夢の異変解決中に出会ってしまったえば皆が敵というスタイルが、二人の間に一触即発の雰囲気を生んでしまった。

「前みたいに倒されたいの?」

「良いわね。ここで再戦とさせてもらおうかしら」

喧嘩を売るといふ満面の意思でお札を取り出した霊夢を受けて、上等だと言わんばかり……というか実際に言っただももからナイフを取り出す咲夜。

挟まれたら小動物くらいは軽く息絶えそうなほど睨み合う。

お互いに歩み寄り、息が掛かるほどに近づく。

走る電撃の様な緊張。

同時に二人の手が動こうとした瞬間、何者かが飛んできた。

かなりのスピードを伴い、無謀にも突っ込んできたのだ。

「だあああーどいてくれえ!!」

「魔理沙!」

あまりの不意打ちに、いくら避け上手と言えども避けきれず盛大な音を立てて三者は衝突してしまうのであった。

「いつつ……」

迷惑な暴走飛行の犯人は地面に勢いよく倒れ込み吹き飛んだ帽子

を被り直す。

「スピード出しすぎなのよ……まったく」

服についた土埃を手で払いながら恨めしそうに言う霊夢。

ここに、意思や理由は違えど異変解決を志した者達が集結した。その中で一番に行動したのは、もつとも新参者の魔理沙である。

「悪いな！抜かさせてもらうぜー！」

箒に跨り直しながらそう言う魔理沙。

あつという間に飛んでいってしまった。

「……あ、咲夜のやつ逃げたわね！」

魔理沙の喧騒に隠れていつのまにか咲夜は消えていた。

集結したのはわずか一瞬であった。

「まったく、魔理沙と霊夢の惚気に付き合っていたら溶けそうだわ……」
隙を見て霊夢から逃げ出した（本人が聞いたら否定しそうだが）咲夜。

プラプラと飛んでいると、一本の桜の木の前である一人の少女に出会う。

「……武士？」

その少女を見た第一声はそれであった。

神妙な顔で石畳の上に正座をしている。

その瞼は固く閉じられた真一文字。

傍らには鞘に収められた刀が二本。

舞い散る桜を背負って咲夜に挑みゆく。

「……きましたか」

白いボブカットの少女が口を開く。

その背後から、ぶよぶよとこれまた白い風船のような物が飛んで出てくる。

ゆっくりと目を開き、右足を先に上げて立ち上がる。

そして、2本の刀を腰に据えた。

「名は魂魄妖夢。主人、西行寺幽々子様への忠義のため、貴様の首を切る！」

「ご丁寧にごうもでござるってどこかしら？」

「名など聞かぬ……いぎ！」

次になったのは、妖夢の刀と咲夜のナイフが競り合う音であった。

「この屋敷……怪しいぜ！」

霊夢を置いてけぼりにして単独飛行に踏み切った魔理沙は、長い登り階段の果てにとある和風な屋敷を発見した。

塀は長く、桜の木が咲き乱れている。

「お邪魔するぜ」

「あら〜いらっしやい」

玄関を潜り抜けて敷地内に入った魔理沙を出迎えたのは桃色の髪の毛をした和服姿の女性であった。

「弾幕勝負よね？やるわよ〜」

「……なんか締まらないぜ」

どこことなく、想像していた感じと違って少し肩透かしを喰らう魔理沙であった。

声からして、おっとりとした穏やかな印象である。

しかし、そのような緩慢な認識は一発目の弾幕を見て甘い物であったと思ひ知らされる。

「っこれはー！」

魔理沙の紅い頬を1匹の黒い蝶が掠める。

そこからさつと血の気が引いていった。

まさに、死んだ様に。

その蝶はふわふわと飛んでいき、飛びついた先にあった一本の桜を見るうちに枯らせてしまった。

「言葉とは違つて……かなりマジのようだな！そうこなくちや困るぜ！」

帽子を深く被り直し、黒い蝶々の大群に勢いよく飛び込んでいく魔理沙であった。

「この屋敷……怪しいわね」

魔理沙について屋敷に到達した霊夢であったが、長い階段を登った先は裏門であった。

「誰もいないのかしら」

屋敷の中に入り込み、家宅搜索をしながらぼやく霊夢。

何故か誰もいない。

不審に思っただけの思いっきりの力で床を踏み鳴らす。

すると、ゴトつというなにかの物音がした。

それを聞き即座に効果の強いお札を取り出す。

「誰!?!」

すると、襖の影から両手を上げてとぼとぼと一人の人間が出てきた。

その濁りきった汚い瞳は、霊夢も見覚えのある物だった。

「あんたは……」

「久しぶりだな」

「貴子……だっけ」

無言でうなづき、加えていたタバコにマッチを擦って火をつける。

「博麗……死んだのか?」

「なんであんたがここにいるのよ」

「若い身空で死んじまったのか……」

「異変の元凶と関係あるのかしら?」

「みんなも悲しんだろうに」

「それとも今度はこここの召使い?」

二人は同時に黙り込む。

冥界は物音一つなく静かで、黙ると沈黙という名の音がなりそうなほどであった。

静かだからか、遠くから魔理沙の声が聞こえる。

それを聴いてふと我に帰った。

「おい、せめて会話にはしよう」

「そうね」

縁側に座り直し、霊夢に茶を差し出す。

そして、ここに来るまでの経緯を話し始めた……のだが、

「興味ないわ」

と一蹴されてしまった。

これだから最近の若いもんは……と野暮つたい老人のような事をタバコの煙と一緒に吐き出す。

「というより、アンタもこの異変に関与してるなら対峙するわよ？」

「……あんた、記憶を呼び戻す術はあるか？」

何を言い出すんだこいつは、という目で貴子を見つめる。

「まさかあんた」

「ああ。覚えてないんだ」

「そうなの。じゃあ退治するわ」

「死んじまうよ」

「もう死んでるじゃないの」

タバコの火を消して庭の適当な所へ捨てようとするものの、妖夢がこっぴどく怒るのを思い出して少し離れた灰皿に捨てる。

「アンタの邪魔はしないさ」

「ふうん……ま、アンタは一応知り合いだし見逃しといてあげるわ」

「そいつぁー感謝」

「そのお茶はいらないわ。アンタが飲みなさい」

ズカズカと立ち去っていく霊夢。

若いなあとしんみりしながら霊夢が手をつけなかったお茶を啜る貴子。

霊夢が貴子を見逃したのは、持ち前の超人的第六感であった。

それもそのはず。

貴子はこの異変への関与を疑われる余地もない。

なぜなら……

(しかし、どうしてこうなった?)

本人も覚えていないからだ。

貴子がここへ訪れたのはかなり前。

冬が訪れるよりも前、紅霧異変が終わった直後くらいだった。

死んですぐは、死後の世界が存在する事と幽霊になった自分に驚いた。

今も別に慣れてはいないが。

縁側に腰掛けて、自分の足を見るとうつすらと奥の景色が見える。最初は、やつぱり足は透けるんだなあと少し冷めた考え方をしていたが、それは自分の死の実感があまりにも伴わないからであった。

(そう思うと、色々あったなあ……)

出涸らしを使った渋いお茶を啜りながらしみじみとそう思う。

ここに来るまで本当に色々苦勞したものだ。

それはそれはとんでもなく災難を乗り越えた。

死んでからも、生きていても人は苦勞が絶えぬ。

ここ数ヶ月を振り返りながらそう思うのであった。

そうして、ここ最近何度も繰り返した、自分の行動を思い出すという作業に取り組むのであった。

発端は数ヶ月前だったかな……

確か賽の河原とかいう場所の近辺で目が覚めたんだ。

——数ヶ月前——

んん……ここは？

石の上に寝転がってるのか？

それに何か水の流れる音がする。

どこだここ。

……川？

待て待て、確か……そうだ、私死んだんだ。

体が粉々に爆散して……。

うん。

間違いなく死んだ。

今確信した。

だつてよく見たら足りないもん。

なんかふわふわしてるんだもん。

え、幽霊？

てかどこここ？

なんかめっちゃ花咲いてるし、目の前に川あるし。

アレ絶対三途の川だよなあ。

死後の世界……実在したのか。

と言うことはこれから私は輪廻転生ですかね。

もしくは地獄にでも落とされるのかな。

業の深さにかけては他人にも負けてないと思うぜ私。

「おおい、おまえ」

ん？

声が聞こえる、誰だ？

何かこうやって誰かから名前を呼ばれた時は大抵不幸な目に遭ってらんだよなあ。

名前を呼んだら死ぬというのはいるかもしれないが名前を呼ばれたら死ぬなんてのはただ可哀想なヤツだ。

しかしまあ返事をしない事には何も変わらない。

「なんででしょうか？」

「おまえだな。よし、ついてこい」

いきなりついて来いって関白宣言かお前は。

てかアンタ誰だよ？

なんかめっちゃ大きい鎌持ってるし。

「死神？」

「ああ。わかりやすいだろう？大鎌持ってる」と

「大きいっすね……色々と」

うん。大きい。

何がとは言わないけどひたすらに。

たった一つだけ言うとしたら……パフパフ！

「ほら、乗った乗った。あそこに見えんのがアタイの船だよ」

「え？」

「あー、説明いる？」

「いや大体はわかるけど」

どうせアレでしょ？

三途の川を渡るんでしょ？

「じゃあ大丈夫だよ。乗った乗った」

「あれ？」

「うん、少しボロいけどね」

いやだから少しどころのボロさじゃないってばよ。

ただの薄汚れた流木かと思ってたわ。

たしかに形は船を成しているかもしれないがこれを船と呼んでしまつては大工泣かせではないだろうか……。

軋みすぎなんだな。

「まあ遠慮せず乗りなよ」

「はあ……」

遠慮じゃなくて本当に嫌なんです。

この死神に連れられるがままに来たはいいけど……本当にボロすぎない？

近づけば近づくほどボロい。

これじゃあすぐ沈んでドボンだつて。

「案外丈夫だからさ。一步目を踏み出す勇氣だよ」

「そうですか……それ！」

「おお……おお？」

言う通り乗った感じはまあまあ大丈夫そうだ。

なんか乗った瞬間暗い顔された気がするけど。

気のせいだろう。

「……アンタ、人間？」

「え？」

「ああ、アタイは小野塚小町。小町でいいよ」

「ああ……貴子だ。貴い子って書いて貴子。どこからどう見ても人間だろ？」

「ふうん……」

え、何その反応。

私が人間に見えないってんならそりやヤバいよ。

死神にアンタ人間？って聞かれたとかどんな笑い話だよ。

もう誰かと話すこともないだろうけどさ。

「はあ……めんどくさ」

え、今めんどくさいって言った？

何がめんどくさいのよ。

まあどう考えても私をこの船に乗せていく事だろうな。

人生一回きりの三途の川横断なんだから楽しませて欲しいわ。

某テーマパークのサメに追われるアトラクションみたいにさ。

「言いたかないんだけど、アンタ向こう岸に連れてこうと思つたら50年かかるよ」

「……ええ?」

「言いたかないんだけど、アンタ向こう岸に連れてこうと思つたら50年かかるよ」

「……ええ?」

「言いたかないんだけど……って何回言わせるんだよ」

「50年?」

「50年」

「普通はどんくらい?」

「一週間」

「私は?」

「50年」

「なんでだよ」

おいおい、こいつあ飛んだジョークだぜ。

50年で、いやいやいやいや。

なんでそんなにかかるんだよ。

「よくある質問なんだけど、この川は渡る奴の業によつて長くなつたり短くなつたりするんだよ」

「ほおほお」

それについては何処かで聞いたことのある話だ。

だからこそ私はきつと渡るのに時間がかかるのだらうなと覚悟をしていたのに。

50年なんてどう考えても計算ミスだ。

「アンタ……人間?」

「どちらかと言うと」

「何したんだよ」

「……色々」

「例えば？」

「博打とか、借金とか」

「しょもな」

「ええ!？」

私の人生をしょもなの一言でまとめられたんすけど。

いや確かに面白くはないだろうけどさ。

でも結構業とか深くない？

「そんな人生なら向こう岸まで三十分でつくよ」

「はあ……」

「心当たりないかい？」

「いやあ全く」

私の人生30分。

それもなんだか癪だが、それよりも現状だ。

心当たりなど何一つとて……は嘘だがあまりない。

少なくとも50年なんて事になるとは。

「……とりあえず」

「はい」

「行こうか？」

「50年？」

「いや、もしかしたら延びるかもね」

「なんでですか？」

「私のモチベーション」

「いやそこは頑張りましょ」

50年も船の上とかまじで無理なんすけど。

「なんとかなりませんか？」

「うーん……見てみるかい？」

「見てみる？」

「そ、面倒だけど50年よりかはマシかな」

「何を見るんですか？」

「……アンタの生涯さ」

「見てどうなるんですか？」

「何も知らずに50年よりかはマシだろう？」

「見て短くなるとかは？」

「そんな都合のいいもんじゃないよ」

じゃあいらないなあ。

過去は振り返らない主義だから……とは建前で、本音の所は人生を思い返して仕舞えば、死んだ事を本気で後悔しそうだからだ。

ああ、人生オワタ？（＾〇＾）／。

いやもう終わってるんすけどね。

「50年も船漕いでたら、向こう着く頃には私の知り合いが先についてそうなんすけど」

「それは大丈夫だよ。50年つてのはあくまで船に乗ってる奴の体感時間さ」

「浦島効果的な？」

「そうそう、そんな感じ」

いや、そんな感じと軽々しく言われても。

50年体感時間で乗ってたらそりやもうアレだよ。

「もしかしてここって地獄ですか？」

「いや、まだここは彼岸だよ」

「嘘つけ鬼め」

「……おい、今ので51年になったぞ。どうしてくれるんだ」

「どうしてくれるんだ、はこっちのセリフだよ」

「まあうだうだいても仕方ない。いくしかないな」

そう言つて小町も船に乗り、船を岸から離れた。

小町が乗った瞬間少し船が揺れ、それに釣られて小町の大町が揺れていたのを私は見逃さなかった。

しかしそんな事はまったくもってどうでもいい。

50年か……いやいや。

あまりにも数字が大きすぎて、全く実感がわかない。

50年と言う事は、私の人生の2倍くらいの時を過ごすわけになる。

しかもこんな何もないただ揺れるだけの船の上で。

「はあ……」

「まあ、気長にいこう」

気長に気長にって言うけどなんでこいつはそんなに呑気なんだ。

50年と言う時間の長さをわかってるだろうに。

それともそう言う長さの奴は珍しくも無いのだろうか。

「50年って結構珍しいのか？」

「初めてだねえ……アンタ若いのに色々あつたんだな……」

あ、絶対不名誉な同情されてる。

というか初めてならもつとリアクション大きくても良いだろうに。

大きいのはπだけか？

それとも死神という奴らは、そんなに時間に無頓着なのか？

ずっとどこか遠い所を見やって。

何を見ているんだ？

「くそー、映姫様もひどいなあ。ちよつとサボってただけでこんな奴

担当させるんだから」

「……え、私罰ゲーム扱い？」

「そりやそうだよ。50年なんて誰もやりたがらないし。私だつてサ

ボリがばれてなきややってないよ」

渡る世間に鬼はなしと言うが、渡る三途には鬼しかいないんだな。

なんで死んでもそんな扱い受けなきやいけないんだよ。

酷すぎると思います。

そのでつかいソレを揉みしだいてやろうか。

……ぐへへ。

「いま失礼な事考えただろ」

「え!!」

「まあいいさ。アンタみたいなのには慣れつこだ」

意外と鋭い奴……。

勘のいいガキは嫌いだが、これから50年ともに過ごす仲なんだか

らこの子とは絶対に仲良くしていこう。

50年も気まずい空気に晒されてたらそれこそ死んだようなもん

だ。

せつかくの死後なんだから少しでも面白いものにしてやるからな。
これは私への挑戦状だ！

——しばらく経って

……長い。

どれくらい経ったんだろうか……。

一週間はたっただろう……。

漕げども漕げども流れる景色は変わらないし、川の底は真っ暗で何も見えない。

魚なんか泳いでるわけもないし、周囲には陸一つ見えない。

ひたすらに船に揺られるだけ。

体は元気なはずなのに少しも動こうと思えない……。

もう何日経ったんだ？

この世界は日が暮れないし、天道もないなら夜も朝もない。

長すぎる……。

なんだってこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

私の死は、人生は決して不幸なものではなかった筈だ。

誰かの為に生きてきた訳ではないが、自分のためだけに生きてきた訳でもない。

ない筈なんだ……。

「今……何日目だ……？」

「ああ、起きてたのか。今で三日目かな」

「三日目?!」

「そうだよ」

三日目ってのは、日が三回沈んだって事だよな。

こんだけ経って……三日目。

こんなに時間が過ぎるのは遅かったのか？

一週間は絶対に経ったと思っていたのに……その半分も経っていないなんてなあ……。

「まあ気長に行こう。焦ったってどうしようもないよ」

「そんな……」

気長に、地球何周分の気の長さがあれば足りるんだ……？

——そしてまた、長い時が流れた。

もう……何も考えれない。

頭を使うことさえ面倒くさい。

この船の上にいれば、疲れもしないし腹が減ったりもしない。

ちつとも眠くならないし、体は至って元気なのだ。

ああ。

空白の時間を過ごすことがこんなにも苦痛だとは。

船のへりに耳を当てて、川の水が流れる音をただ聴き続ける。

代わり映えのない日々。

死んだのか？私。

それともやっぱりここが地獄なのか？

「今で何日目だ……」

「2ヶ月だ。先は長いなあ」

……こいつも飽きないもんだ。

ずっと私の前に座っては、膝に肘をつけてどこかを見つめている。

その瞳は明るくも全く底が見えない……。

私のことを見ているかと思ったら右を見たり、左を見たり。

そもそもの話として退屈じゃないのか？

退屈を感じないほどに麻痺してるのか？

最初こそ話もしていたが、最近は何もないし、それは話す事

じやなく、話す気力がもうどこにもない事が原因だ。

どうしようもない沈黙とあてどない空虚の支配する世界。

つまりは、眠くもならないし頭も冴えてるのに、何も起きない。

起きていないような、覚醒していないような世界。

ああ……酔生夢死、とはよく言ったものだ。

まさに酔った様に生きて、悪夢を見ながら死んでいる。

——向こう岸まで、あと18、188日……

「小町は……50年もかかる奴に出会ったことはあるのか？」

「そうだねえ……アタイの見た中じやアンタが一番かもね」

そうやって問いかけたのは、本当になんでもない。

何も無い、無意味に終わるはずの有象無象相当の単純不必要な気まぐれであった。

しかし、ソレを思いとどまらずに口にしたのは私の中に何かひつかりの様なものがあつたからかも知れない。

「ずっと人生を思い返していたけど、やっぱり何も無い。30分で十分なくらいだ」

「ときたま居るんだよ……50年とは言わないけど。他の奴よりもとびつきり長い奴が」

「何が違うんだろうなあ」

「さあ……そう言う奴はみんな口を揃えて心当たりがないって言うんだ。アンタみたいにな」

「そっちの手違いってのは？」

「ありえないね。管理してるのはアタイの上司だけど、あの人に限つては大袈裟じゃなく秒単位で間違えなんて起こらないよ」

心当たり……、上司……、間違え……。

会話をしている間、何かの違和感が私にくすぐり続けていた。

それは、ズレや歪みとも言うべき何か。

圧倒的に見落としている様な圧倒的欠落。

その掛け違えたボタンの様な不気味さは少しづつ、勢いを増して大きくなっていく。

「小町の上司か……」

「公明正大な人だよ。なにせ閻魔大王ってんだから」

「ソレにしたってなあ」

公明正大ってんなら殊更におかしいと思えない。

何をもった基準で何を根拠にした数字なんだ？

明確かつ平等な審査基準の公表を求めたい。

「ああ……一人思い出したよ」

「え？」

そう言つて小町は肘を突いていた手を離して船のへりへと乗せた。

「一人だけ、長い時間かかることに納得していた奴がいたんだ」
「何だと？」

「そいつは確か……幼児淫行で村から追い出されて餓死したんだ。そうだそうだ」

「幼児淫行だ!？」

「そうなんだよ。はっはっはっ。自分より二回りも小さなガキに恋しちゃったんだよ。そいつは」

「……そいつは何年かかったんだ？」

「さあ……3年だったかなあ。何せ昔のことだ」

「3年!?なんでそんな奴が3年で私は50年なんだよ!」

「知らないね。アンタが嘘でもついてるんじゃないのかい？」

私は誠正直何一つ嘘なんてついていない!

おかしいじゃないかやっぱり!

幼児に手を出す様な変態が3年で……ん?

幼児に手を出す変態?

なんだ?

今猛烈に違和感がした……。

ここに何か……拭いきれない油汚れの様な何か引つかかる。それに少し、いやかなり嫌な予感がするぞ……。

「ああ、こんな奴もいたなあ。ガキを切り刻んで殺しちまった奴」

「……そんなクソ野郎も運ぶのか」

「仕事だからね」

「もしかして、借金を踏み倒した奴なんかもいたか？」

「ああ、居たね!なんでわかったんだ？」

「……よくわかったかもしれない」

もしかすると……。

不審そうな顔をする小町。

借金、幼女、淫行、切り刻み。

これは……今私の考えた仮説が正しいとすると……。

「小町や、聞いてくれ」

「おお、どうしたんだ改まって?」

「実は私な……お前のことが……」
「え？」

「初めて見た時からお前のことが……大好きだったんだ！」
「な、何を言い出すんだい！私には心に決めた人が……」

「……ダメか」

「ああ……アンタの気持ちには答えられないよ。すまない」

「いや、その事じゃない」

「……は？」

「あわよくば向こう岸までつけるかと思ったんだが、ダメだったか」

「……告白は？」

「ああ……ごめんな」

「いや、本当ずびばせん」

「……」

目をつぶってそっぽを向く小町。

いてて……こんなボコボコにしなくてもいいのに。

右目は開かないし。

この死神め、怒って船から振り落とすわ鎌で頭おもいつきりどつくわ、無茶苦茶な奴だな。

今も拗ねて目も合わせてくれない。

確かに実験で告白した私も悪かったけどさ。

いや、全面的に悪いな。

けど女から告白された時点で気付こうよ。

死神って奴は雌雄同体なのか？

しかし、これが失敗したのは痛い。

体的な意味でもかなり痛い。

下手をすると、もっと長い時間をかける事になるかもしれない……。

それでも進まなくちゃダメな時が今のはずだ。

ともかくプランBを実行しよう。

小町が怒りを収めてくれるといいんだが。

「すまなかつたよ……でも、お前のことが好きなのは本当なんだ」
「いいよもう……よくわかった」

「何がだよ」

「アンタは嘘つきってことだよ」

あ、これめっちゃ怒ってる。

今なんか本気で軽蔑された目を、向けられてしまった。

私が高架下のドブ親父を見てた時の目だアレは。

死神ってのはウソが好きになれないのだろうか。

しかし、そんな事で足踏みしてるほど余裕はない。

「ところで小町。お前の上司ってのは小柄か？」

「……」

今わかりやすく目が泳いだな。

なんて心の内が読みやすい奴なんだ……、

その反応は言外に問いかけはの肯定をしてる様なものだ。

「それに、正義感も強くて、サボりとか怠惰とかが絶対に許せないタイプで」

「……」

おうおう、泳いでる泳いでる。

河童と同じくらいの快泳してるよ。

てことはやつぱり……。

「身長は低めで、きつと可愛いんだろう」

「何を言い出すんだ。今度は映姫様に告白か？」

お、やつと口を開いたな。

いきなり目の前でこんな問答されたら黙ってる方が無理だろう。

特にこの江戸っ子気質には。

「私は年上好きだからわからないけど、きつと年下好きにはたまらないんだらうなあ」

「おい、私のことを馬鹿にするのは許しても、映姫様の事を弄ぶ様なら加減しないぞ」

「まあ聞けって。お前はどう思うんだ」

「何がだ」

「お前の上司だよ。映姫様……だったか？」

今度は私から全く目を離さずに姿勢を変えた。
警戒されているのだろう。

しかし、それでいい。

反応は上々だ。

「どんな人なんだ？」

「映姫様は……厳しい人だよ」

厳しい人か……。

そこは大体予想していた。

問題は、どう厳しいかという事に尽きる。

「厳しいのか？」

「ああ……絶対に融通が効かないんだ。元が地蔵だからか頭が堅いのかもね」

「頑固な上司なんだなあ」

うんうんとうなづく。

これは小町の語りモードに入ったな。

あとはこのレールに乗ったトロツコを脱線しない様に運ぶだけだ。

「それでも結構可愛いところもあるんだよ。カップラーメンも、後入れの粉を先に入れたらプンプン怒って」

「うんうん」

「他にもさ、ちよつとした書類の漢字の書き間違いなんかも絶対に許してくれないんだよ」

「厳しいんだな」

「その割には結構言い間違えなんかもするし」

「例えば？」

「この前の休みに映姫様と街に行ったらなんか迷彩服着てきてたんだよ」

「うん」

「それで理由きいたら真面目な顔して『市街戦対策です』ってさ」

「……それはなかなかだな」

「でも可愛いなのってさ、夜摩天様も一皮剥けば少女だね」

ぐぐぐ、なんだか惚気話に逸れてきたぞ。

それが元々の目的だが、なんとも無性にむず痒い。

というかそんな話聞いちゃったら会った時が怖いんですけど。

ん？……あ、あれは！

「向こう岸だ！おい小町！後ろを見ろ！」

「なんだって？……おお！なんだ！あと二日でつける距離まで縮まってるぞ！」

「もつとだ！褒めれば距離が縮まるぞ！他に何か可愛いところがあるだろ！」

「可愛いところ……そうだ！優しい！映姫様は優しい！」

いいぞ！

みるみる向こう岸が近づいてくる！

失敗か空回りするのがオチだと思っていたが予想外の効果が出た

！

これならあと一押しだ！

「あと16時間になった！」

「最後の一押しだ！トドメにとびっきりの可愛いところを言ってくれ！」

「とびっきりの……そうだ！」

「おお！なんだ！」

「映姫様のパンツ！イチゴ柄なのとっても可愛い!!!」

「そうだ可愛い……っっておおおい!!!」

岸がとんでもない速度で遠くなっていく！

待って！

せっかくここまでできたのに！

「……あとどんくらいになった」

「……千年かかる」

「アンタ立派な死神だよ」

——ううういいやっど……やっど着いたぞおお！

はあ……。

船から降りて地面に足をつけた瞬間に、ここしばらく分の疲れが一気に押し寄せた気がする。

ここが待ちに待った向こう岸か。

言うところの彼岸ってやつかな。

なんとなくあの世ってのは暗くて静かなのを想像していたんだけど。

ここめちやくちや明るいし賑やかじゃないすか。

なんだあれ？

出店が出てるのか？

まるで祭りみたいだなあ。

思っていたことは違うことは確かだ。

まあ私はこう言う方が好きだけどね。

「あ、映姫様！お出迎えくださるなんて珍しい」

映姫様だつて？

小町が頭を下げてるつて事は、この人が小町の上司か……。

そんなに畏まってもない感じからして、普段の関係性がうかがえる。

「まず小町、貴方には話があります……色々と」

「げ、」

「そして貴方。貴方にも話をしなければなりません」

「貴子って言います。あなたが映姫様ですね。お会いできて嬉しいです」

……小さい。

身長及びその他もろもろがすべて小さい……。

見た目だけでいったらかなり幼なげに見えるというか……。

犯罪の香りのドルチェ&ガッバーナを纏ってるよ。

「立話もなんですから、どこか入りませんか？」

「それはその通りですが、貴方の言う事ではありません」

「へいへい」

……もしかすると、私の50年はこの二人に多分に原因があるん

じゃないか？

渡り切ったから良しとするが。

「それにしてもここはいつ来ても騒がしいですねえ」

「死後が安らかなものになるなら安いものです」

「まあ渡り切った反動もあるんでしようけどね」

祭りの様な賑わいの通りをかき分けながら小町と映姫はたわいもない会話を交わす。

その内容は案外真面目なもので、仕事にまつわる事ばかりだった。

「あ、映姫様あそこにしましょう」

「喫茶店ですか……いいでしょう」

「あの世にも喫茶店つてあるんですね」

「舐められちゃあ困る。居酒屋だつてあるんだつてイタ！」

あ、小町が笏で頭叩かれた。

閻魔が暴力とは乱世乱世。

そんなことを考えながら私たち一行は喫茶店へと入っていく。

「さて、私の方から話すより前に、まずは貴方の話を聞かねばなりません」

「え？」

「何か、私達に言いたい事があるのでしょうか」

流星は閻魔様。

見抜かれてたのか。

そうだ、まずはその話をしておかないとダメだ。

何よりもあの50年の真相を聞かなければいけない。

「三途の川は渡るものによって長さが変わる……それは確かですね？」

「ええその通りです。川は魂の鏡。業を背負うものは長く、背負わざるものは短くなります」

「私は、50年と言われました」

「何も驚く事ではありません。自分の人生を顧みれば心当たりがあるはずですよ」

「その心当たりっていうのは、妖怪の腕を切り落としたり、吸血鬼と接

吻したり、借金を踏み倒したりやらの事ですか？」

「……それだけとは限りません」

閻魔は嘘はつかないが、誤魔化しはするんだな。

私の仮説が正しい事が証明された。

つまり、50年の謎はこの閻魔の裁量……それにある程度のマニユアルや規定があるのかは知らないが、決めたのはこの人だ。

妖怪退治屋時代から、その辺の野良妖怪を退治するときには結構グロテスクな事もしてたし……。

ルーミアに喰われない様に、腕を切り落したり……そう言うのが響いたか？

ともあれその事に気づいたのが幸이었다。

小町の無駄話が、この気づきを私に与えてくれたのだ。

川を渡る時間は延びることもある……小町はそれをモチベーションの問題だと言ったがおそらく違う……。

つまり、船に乗ってる時も判断の過程なのだ。

船上で悪を働こうものならそれ相応の裁きがかかる。

ということは、短くすることも不可能ではない筈だ。

最初に、小町に告白という事で意識を引き、そこから小町に褒め殺し攻撃をさせた。

これが私自身も予想外のズバリの中だった。

よつぽど堪えたのかあつという間に向こう岸までついた……一回蛇足な発言をして1000年なんてとこまで飛ばされたが、結果オーライだ。

ちなみにあの後、小町には三日間ぐらいぶっ通しで愛を囁いてもらった。

他人事の私でさえ背中中的痒くなる惚れさせ文句を3日も聞かされただんだからある意味地獄だったことは言うまでもない。

まああらかた、小町が仕事をサボってそれをキツカケに喧嘩して……その罰を与えるのに私の人生の罪が利用されたってところだろう。

50年の歳月を送らせてもいいような悪行をしたと言えはしたし。しかし喧嘩をしたのならば仲直りしてもらえればいいだけの話だ。

夜摩天という職業は、その性質上嘘偽りをする事など不可能だ。褒められて嬉しければそれを隠さず示さなければならぬ。

その真つ当、公明正大なあり方に救われたつてのが本音だ。

「さて……貴子さん。貴方の人生の最後についてお聞かせ願えますか？」

「ああ、吸血鬼と遊んでいたら間違えて手を滑らせてしまつて。それで死んでしまいました」

「なるほど……手を滑らせて……」

ぶつぶつとつぶやく映姫。

何やら手に持っていた笏に色々とメモをしている。

それを見た小町が顔を近づけてボソボソと呟いてきた。

……くそ、もう少しで谷間が見えたのに！

「ゴホン！」

……なんかめっちゃ映姫様に睨まれた気がする。

そんな事はつゆ知らず、小町は顔を近づけてボソボソと喋る。

「おい貴子……間違つても嘘はつくなよ？」

おう兄弟……もう間違つちまつたよ。

しかも取り返しのつかない類の間違いな気がするぜベイベ。

この感じは絶対に悪い事が起きるんだよ。

「貴子さん、浄瑠璃の鏡はご存知ですか？」

「……いや、あまり」

「これがそれなんです、死者の生前の行いを映してくれる物です」

「はあ」

「貴方の人生を包み隠さず見させて貰います」

「……ええ!!？」

「手を滑らせた……ですよね？」

あ、絶対この人知つた。

わざと知らないふりをして泳がしたんだ。

裁判長、これは嘘をつく様に仕組まれた誘導尋問です。

そして小町よ、大事な事は一番に言ってくれ……。

——ああ、死にたい……。

いや、消えてしまいたい。

タンスの裏の埃にでもなつてしまいたい。

「もう一度確認しますが、人生の最後についてお聞かせ願いますか？」

「……吸血鬼に破壊されました」

「その原因は？」

「……私の接吻です」

「なるほど……それでは書面に私の方で書いておきますね」

「ありがとうございます……」

書面なんて少しも聞かされていなかったんだが……。

どこからか紙を取り出して素早く何かを書き走る映姫。

……なんか段取り良すぎないか？

まるで最初からそれを書く事もその内容も決まってるかのように

……まさか。

「おい小町、内容を読み上げてくれ」

「貴子……死因、死を感じる際の生命の本能である極限の興奮状態が作用し、勢い余つて吸血鬼と接吻。その際に破壊能力を直に受けてしまい体が粉々になって死亡……だつてさ」

「つまり？」

「死にかけのエクスタシーでキスしてドカーン！つて事だね」

「内容の改善を願います」

「却下です」

その（不名誉な）書面は死人の行く末を決める是非曲直庁とやらの受理され、晴れて私は死後を楽しみに待つ幽霊となった。

のだが……

「8856402番、貴子様」

どんだけ待たせるんだよ。

三途の川やらなんやらからずっと思つてたんだが、どうにも死後の世界って奴はなんでもチンタラやってるらしい。

今番号を呼ばれるまでにもかれこれどんぐらいかかったのか覚えていない。

外にあるあの出店はこのあまりある待ち時間を楽しく過ごすためのものだったらしい。

自分として過ごす本当に最後の数瞬。

この辺りの酒は少し切ない味がする。

小町には酒の旨い店を何軒か教えてもらったけど、もう関係のない事だ。

来世でまた寄らせてもらおう。

ここだな……四季映姫様の部屋は。

ノックは4回。

死んだ者のマナーだそうだ。

「失礼します」

「どうぞ。お掛けください」

「もうかけてます」

「……………」

さて、汚職ストレスの仕組まれた書面発行だったが、とうとうわかるのか。

私のサンサーラは如何に。

「さてと、貴子さん」

「はい」

「貴方の来世について、お話しする事がかなり多数あります」

「……長くなりますか？」

「とても」

「……どんくらい？」

「少なくとも見積もって16時間です」

「……掻い摘んでお願いします」

寿命がないからって何でもかんでも時間かけすぎじゃあなかろうか。

そんなに喋るから待ち時間がとんでもない事になるんだよ。

「まず最初に……といっても之が殆どなんですが、貴子さん」

「うい」

「貴方に……来世はありません」

「……え？」

窓の外でカラスが何処かへと飛んでいった。

「どうにも貴方の魂は歪なんです」

「はあ」

「あなたの魂には未来への引つ掛かりがない……それでは来世へ繋げる事、つまり輪廻転生ができないのです」

「ひい」

「お恥ずかしい限りですが、我々にもその原因はわかりません」

「ふう」

「それが判明するまでは、冥界のこの者の所にお世話になってください。私の方で話をつけておきます」

「へえ」

……もう、なんかどうにでもなってくれ。

来世がない？

アムムノットハブ来世？

せつかくこの時のために温めておいた来世はくらいせつという究極のギャグが言えない……てか魂が歪だとか来世がないだとか、私に偉く風当たりが強くないか？

ただのパンピーだと自覚してるんだが。

この女郎、まさか汚職してるんじゃないだろうな？

……ないか。なんたって閻魔だもんな。

もうこれ以上何かの話を聞く気にはなれない……。

適当に切り上げて帰ろう。

「さて、次に聞かせていただきたいのは、船の上での発言の旨なんです
が……」

あ、無理だ。

多分3日くらい長くなる。

もう……この世界大っ嫌いだ！

黒歴史を掘り返す奴ら

あゝやんごとなしやんごとなし。

ちやつとのけちやつとのけ。

いやはやいやはや。

映姫様のそれはそれはありがたいがたくいご高説をあえて表現するならばの貧相な語彙ではこのような言葉しか思い浮かばない。

時間の単位がバカになりすぎてインスタント麺の3分に感動を覚えてしまった。

あのお喋り閻魔、舌引っこ抜いた方がいいんじゃないか。

もしくは歯無しにでもなった方がいい。

その長きにわたる語りの枕は、三途の川を渡る船の上での私の狼藉に対するもはや尋問の域に入っている質問であった。

小町に告白した下りあたりは、やってからかなり後悔してしまうほどの愚行だったので説明するのがなかなか辛かったが、ともあれ何一つ嘘偽りなく話したので大丈夫のはずだ。

二人の関係を利用した事で若干機嫌が悪くなったのは致し方ないだろう。

後は生前の行いへの弁解だった。

これもまた恥の多い生涯を送って来た身には酷な事だったが旅の恥はかき捨てというわけで武勇伝ふくめ人生について話した。

その中で特に、ルーミアを含めた妖怪たちの退治の仕方がすこしまずかつたらしく、若干顔を顰めていたが一応正当防衛として受理してもらったので大丈夫のはず。

他にも博打の事や借金の話をしたが、ぼろっと生まれの記憶がない事なんかを語ったのが最大の過ちだった。

そこからは完全に話が脱線していき、気づいたら映姫の生い立ちについて聞かされる羽目になっていたのだ。

閻魔になる前はただのそこらのお地蔵様だったけど汗水垂らして苦労を重ねて今の立場になってうんたらかんたら。

他人の苦労話など私の様な無関係なものからすればミジンコレベ

ルでどうでもいい。

しかし私の気持ちなど伝わるわけもなく映姫の喋りは加速していった。

闇魔室で座らされた椅子もなんか安っぽいのか古びたのか知らないが座り心地は悪いし。

というかぶっ続けでまるまる30時間くらいはお喋りしてたんじゃないか？

こつちに来てからもっとも驚いたのはその大きすぎる時間感覚のズレであつた。

中には一年以上裁きを待っている者もいるらしく、私は小町やらのツテで早めに見てもらつたに過ぎないそうだ。

どうにもこつちの時間とあつちの時間の流れはいくぶん違うよう

で。
つていけないいけない。

あの世の事をこつちなんて言い始めたら私もとうとうって感じだな。

さて、と。

そんなこんなで長話をしたくせに私の行く末についてはえらく短い結論が出されていた。

結果の書いてある書類を見た映姫が一番驚いていたが、私の判決は以下の通り。

輪廻転生不可。

しかも原因不明。

まさかの2行。

たかがそれだけの答えを出すためにえらく長い遠回りをしたものだ。

しかもその答えは到底納得できるものとは程遠い。

生まれ変わることすらできないし、その原因すらわからない。

若干魂が歪んでるからだの何だの言われてたけど、もうどうでもよくなつて聞いていかなかった。

話の長い者にいい仕事はできないと言うのが私の持論だ。

職人気質でも気取っているのかと嘲笑されそうだが、笑いたければ笑うがいい。

それでも本物って奴は言葉じゃなく結果で語る物だと思うし、そういう意味で言うなら私はまるっきりのアマチュア、偽物って奴である。

一応判決をだした映姫は、何かわかったら連絡するとは言っていたが正直今見た感じではあまり期待できそうにない。

いつだって私のような一般市民は不幸を被っても笑って切り替えるしか無いのだ。

要するに、映姫から告げられた死後の生活に想いを馳せなければならぬ。

映姫に渡されたこの紙に書かれた場所。

その場所の名は……冥界、白玉楼というところらしい。

うーん何とも物騒な予感がする。

そこでの暮らしの方が私は不安だ。

長居をするのも忍びないし、時期を見計らってまた別の行動を起こさなければいけない時がくる。

展望についての考えが纏まるまではこの辺りを見物しておこう。

何より、この辺りの酒が少し名残惜しい。

幾分切ない味だが、未練に溺れている死人の口にはそんなくらいで十分なのだ。

これは、小町から聞いた事だが彼岸には犬はいない。

犬は往ぬ、忌み言葉ってわけだ。

死んでから不吉な言葉もくそも無いとは思うんだが。

まあうだうだ言っても仕方がない。

しばらくはその白玉楼とやらでお世話になろう。

死人に朽ち無し。

時間は永遠にある。

おそらくはある程度長い間柄になる事だろうし、そうなる手ぶらで行くのは失礼な話だ。

手土産に何か買って持っていかなければいけないな。

そういえば映姫様がこの辺りに美味しい和菓子屋があると
言っていた。

ビタ一文持っていないが大丈夫だろうか。

一応、請求書の宛名はヤマザナドウにしておこう。

「おーい貴子」

「あ、小町」

大通りを歩いてしていると小町が大鎌を揺らしながら遠くから駆け寄ってきた。

揺れていたのは鎌だけではなかったが。

見立てでは20貫はあるはずなんだが、あんな物を背負いながらよく走れる物だ。

死神のバイタリテイ恐るべし。

しかし方角からするに酒でも煽ってサボってた所だろう。

「判決どうだった？」

「この紙に書いてある通りだよ」

「なになに……転生不可、原因不明……？」

「要はしばらく暇って事で」

「お、て事は？」

「飲みに行けるってことよ」

「そうこなくちゃ」

私たちはひやつほうと飛び跳ねながら肩を組んで駆け出していた。

ここにきてから何回目かの飲み会。

酒に溺れなきややつてられないんだ。

私も小町も。

とある西の外れの居酒屋にて、私たちは恒例の愚痴り大会を開催していた。

そのほぼほぼが小町から発せられた映姫に対するものであるが。

「そんなとき映姫様なんて言ったと思うよお」

店に入る前からへべれけだった小町の愚痴話も半分に、私はちびりと酒を飲む。

出汁の香りを含んだ湯気が顔を優しく撫でてくれる。近頃は冷え込んできてなんとなく熱燗が美味しい。

ここの酒を飲むのは何日目だろうか。

小町に連れられてはここでちびちびと呑んでいる私達だ。

外装自体は何処にでもある古き良きの大衆酒場って感じで、壁に手書きのメニューが貼ってあったりして何とも懐かしい感じが実に良い。

豚の生レバをつまんで、その強いクセ味を酒で流し込む。

……ああ、うまい。

死のうが生きようが酒はうまい。

ここの酒は本当に切ない味がする。

それは、あの騒がしい悪魔の館を思い出させるのに十分すぎた。

あいつら、元気にやってるだろうか……。

死なない程度に楽しくやってくればそれでいい……。

「いやー、わかるぞー！お嬢ちゃん！」

すっかりできあがった小町が、私とは逆隣に座っていた女の子にうんうんと大袈裟に相槌を打って背中を強く叩く。

……人が珍しくシリアスモード入ってんだから少しは静かにできんのか小町よ。

「ほんとにほんとに、ワガママな上司にいつも私たち部下は苦勞させられてるよー！」

「いや、私は苦勞させられてると言うわけでは……」

「その発言がもう苦勞の証だね！ほら献杯だ！献杯！」

どうでもいいが彼岸では乾杯ではなく献杯をする。

死んでるからね。

大きめのグラスに注がれた透明の酒を勢いよく飲み干す小町。

「つななつて頑固がいけないんだよあの人は！ちよつとくらいは頭を柔らかくした方がいいってんだ！だからいつまで経っても独り身で」

「小町」

さて、より顔を真っ赤にしているのは、酔っ払った勢いで静かに呑

んでいた女の子に迷惑な絡み方をする小町か、それともその後ろで笏を持ちながら仁王のような顔を浮かべている映姫様であろうか。

「小町」

「そうそうー…こんな感じでいっつも私の名前を読んでは説教ばっかで……え？」

口から情けなく酒を垂らして啞然とする小町に合掌。

「南無……」

私の念仏も虚しく響き、小町は店の前に強制連行され正座、譴責をうけるのであった。

うん、拳骨もくらってるな。

触らぬ神に祟り無し。

放っておくのが上策だと見た。

そもそもサボっていたのだから説教は至極当然、自業自得なのである。

ところで映姫様、閻魔仕事の方は大丈夫なのだろうか。

要らぬ心配な気は全くしないが、もしやまた誰かを何十時間も待たせているのか？

勝手な推測だとは分かっているがそれでもやれやれだという顔に思わずなってしまう。

ガミガミというよりはクドクドとした叱り方をしているあたり、今回も説教は長くなりそうだ。

こんなザマじゃ原因がわかるのは3世紀後の出来事だろうな。

そんな鬱憤をぶつける訳では無いが、私は喋るあても無くなったので、小町が絡んでいた少女にバトンを受け取って絡むことにした。

「ごめんね、ウチのツレが」

「いえ、お気になさらず」

「……何であんなに盛り上がったの？」

「私が大將と話をしていたら急に……」

ちらっとこの店の大將を見やると、朴訥な顔をしかめて苦笑いを返された。

よほど悪い絡み方をしたらしい。

南無南無。

「それは悪い事をした」

「いえいえ、慣れてますから」

ため息混じりな返答と、どこか遠いところを見つめる視線からは苦
労人であるという事がひしひしと伝わってくる。

「慣れてる？」

「ああいった人にです」

「そりやあ大変だな。上司に難ありってどこか？小町じゃないけど」

「ええ……少し玄妙な御方でして……今も難解な使いを命じられてい
るのです」

「お使い？偉いなあ」

「これです……この紙に書かれた内容の物を買ってくるまで帰って来
るなど仰られて……」

「それは酷いな」

少女は少しだけ腹立たしそうに、一枚の紙を死装束の懐から出して
机においた。

その紙に書かれた内容はこうだ。

先に言っておくが原文のままである。

『前略 憂き世の暇を明け、離せぬものあり。それが死。朽ちて各地、
智学口身を求め、彼岸の華も枯れる折、後ろの正面、貴方はだあれ？

草草』

「……アンタも大変だな」

「恥ずかしながらこの文の意味が少しも分からず、3日ほど途方に暮
れています……」

一体なんだこの呪いの手紙は。

うーん、さっきの件も含めて力になってあげたいが悔しくも私の教
養や洞察力なんかは人並みも怪しいくらいだからなあ……。

3日どころかいつまでも途方に暮れそうなほどだ。

そもそもこんな怪文書でお使いを頼むなんてどんな神経してるん
だよ。

答えどころか解決の糸口も見出せずに唸っている私たち。

その沈黙を破って口を開いたのは意外な人物だった。

「……手鏡だな」

「大将、今なんて？」

「……手鏡を買って帰るといい」

無口な大将が珍しく話したと思えば、何を言い出すんだ？

3日かけてもわからないこの文章の意味をたった一目で看破した
というのか？

そんな馬鹿な……。

いや、そんな怜悯な話があるだろうか。

このじいさん何者だ？

その根拠を聞きたいのは山々なんだが、こういった無口な人に説明
してもらうのは大抵要領を得ないし、大将の視線からは別の意図を感
じる。

ここはとにかくこの言葉を信じるしかなさそうだ。

まだ会って間もないがこの大将はそんなつまらない茶化しやホラ
をかますような半端者では決してないと断言できる。

それに、3日も悩んでいるのだったらその頑張りで十分ってことに
しても構わないだろう。

大将は言い終えるなり他の仕事に向かったので、その真意は私には
わからない。

答えは手鏡、それを処理するのが先決だ。

「だ、そうだ」

「手鏡、ですか」

「私も手鏡だと思うよ」

「この文の意味がわかるのですか？」

「有名なお話だよ……といっても古い話だから、若い人は知らないか
もね」

「私は若くないですよ」

「まあまあ聞きな」

真面目な面持ちで居住まいを正そうとする女の子に待ったをかけ
て、お猪口に酒を注いでやる。

私はポツケからタバコを取り出し火をつけた。

愛好している銘柄ではないがこの辺で売っていたものだ。

気楽に聞いてもらおう話しか持ち合わせていないのでそう真剣な態度でいられてはやりづらい。

煙を飲み込んで小町同様ひとまず献杯をし、とある話をする。

どうでもいいことだが、何かを語る時語り出しを大袈裟なくらい神妙にするとメリハリがつく。

私もその教えに則った。

「昔、とある小さな国にそれはそれは女が大の苦手な王様がいたんだ。巷じゃ女に会おうと泡を吹いて倒れるという噂で笑い物にされるぐらいな」

語り出しはそんな感じだったと思う。

私は楽に聞いてくれと言ったのに、根っからの気質なのかやたらと真剣な顔持ちで聞いてくれる。

そうも熱い目線で見つめられるとついつい話に熱がこもってしまふのだ。

一生治らない悪い癖だ。

「ある日その王様は、うっかり李下に冠を正してしまったんだ。

すると恐れ多くもその王様に文句を言ってくる者がいた。

王様はその時たまたま一人でいたから良かったものの、王の行いに口を出すなんて打首獄門、親類縁者皆同罪。

王とはそのくらいものだ。

しかし王は怒らなかつた。

文句を言ってきたのは、見る目を澄ますほどの美しい女だったんだ。

どうにも不思議なもので、女の苦手な王もその女の前では何ともない。

それを運命と感じたのか王は熱烈にアプローチし、もとより気立は良い男だったから二人はどんどん恋に落ちていく。

しかしそこからよくある悲劇の恋。

悲しくも二人は身分が違う。

恋は実らない、徒花だった。

咲かぬ花は、裂かれた二人。

それでも王は、諦めずその女の所に通い続けた。

すると、ある日その女は消えてしまったんだ。

ある一枚の置き手紙を残して。

その手紙の内容がまさにさっきの紙に書かれたものだった。

それを見た男は迷わず、その家にあつた紫色の手鏡を握りしめ、涙を堪えながら強く女との再会を念じた。

するとその手鏡は光だし、その光はある一つの方角を指し示したんだ。

男は無我夢中で駆け抜けてね、途中で何度も転んだし王様とは思えないほどみつともない姿になっていたと思うよ。

そして、とある山の奥の泉でとうとう女のもとにたどり着いた。

女は、男を見るなり一滴の涙をこぼして黄金白金の雨を降らし始めたんだ。

すると強い光が女を覆い、男は思わず目を瞬いた。

光が収まると、そこにいたのは羽衣を纏い、風のように揺蕩っている女であった。

女は、天女だった。

そして、身分という物に囚われなかった聡明な王の事を大器と認め、今度は自分が、天女という身分に囚われることなく下賤な人間との恋に落ちた。

そう、天女から人間に変わり、この地上という地獄へとへと落ちていったんだ。

そうして二人はいつまでも冷めぬ愛を育み合い、健やかな国を作り上げていったとき……めでたし、めでたし」

……うーんなかなかいい話じゃないか。

やっぱりいつの時代も身分の差を乗り越える恋には熱いものがあるんだなあ。

まあ全て今作った嘘なのだが。

肝心の手鏡を選んだ理由がないんだから、バレるかと思つたが純真

な娘で良かった。

ともあれこれで大将の意図は汲み取れた筈だ。

きつとあれは私に適当な説明をしろっっていう視線だったんだろう。

「……………つうう、ひっぐ……………」

……………え、マジ泣き!?

私の話で泣いてもらえるなんて何とも冥利に尽きるなあ。

じゃなくて!あの話にそこまで泣く要素あったか?

「いい話です……………ううっ……………そのような話を知らなかった自分が恥ずかしいっ……………うううっ……………」

目元を手拭いで押さええながら鼻を吸っている。

そんなに嗚咽されると、少し周りの視線が気になる。

こんな与太話で感涙できるなんて、純粋な子なのだろう。

この子の上司もあながち悪い教育はしていないのかもしれない。

「……………つず。大根の煮込みです……………」

「いやお前もか」

何で大将までキてるんだ。

……………しかしまあ、これで手鏡を買って帰ってくればそれに越したことはない。

「ぐ高説感謝します……………お名前をお伺いしても?」

「ああ、名乗ってなかったか。貴子っていうもんだ。アンタは……………妖夢ちゃんね」

「どうしてわかったんですか!?!」

「お財布に名前書いてたら誰だっってわかるよ」

「はっなるほど!」

キラキラとした眼差しで財布と私を何度も交互に見る妖夢。

ずっと思っていたのだが……………この子は少し純粋を通り越してアホなのかもしれない。

爪楊枝が跳ね上がる手品とかしたら本気で驚きそうだし。

そんなことを考えながら、私はふと小町に聞く予定であったある質問を、かわりに妖夢にすることにした。

小町(あのバカ)は表で正座させられてタンコブまみれになってい

るのだからしょうがない。

「ところで妖夢ちゃん。ここつてどう行くか知ってる？」

そういつて、いま玄関先で怒鳴り散らしてる人から貰った白玉楼という場所の住所が書いてある紙を見せる。

「……………」

「知ってる？なんか私ここに行かなきゃいけないらしくてさ」

本当困っちゃうよね、なんていう二の句を続けそうになったが、それよりも早く妖夢の返答が帰ってきた。

「…………知ってるも何も、私の仕えるお屋敷ですよ、そこ」

「え？」

タバコの灰がひらりひらりと床に落ちていく。

妖夢の思わぬ隠し球によって。

彼岸の是非曲直庁から西へ東へ4里ほど歩いたところに、その屋敷はあった。

静かな所にまさに佇むように、それでいて奥ゆかしさを持つ和の美。

昔、少しだけ土建屋として働いていた私は、その屋敷を建てた者の素晴らしき建築技術に思わず見惚れてしまう。

生きる者の世に建つ西洋風の暗い館であった紅魔館とは打って変わわり、彼岸にあつてなお東洋特有の鈍い光を灯した屋敷は、趣や風流という言葉がなによりも相応しい圧倒たる存在感であった。

「ここが西行寺幽々子様のお屋敷、白玉楼です」

ここまで案内してくれた妖夢が、仕上げに最後の説明をしてくれた。

死んでもなお迷惑者の私は、どういう訳か今日からこの巨大な屋敷で住むことになっている。

ここに来るまでの道中で何度も、ただ世話になるだけではあまりにも申し訳ないから住み込みで働くという形にさせてくれ、と妖夢にお願いしたのだが妖夢の返事は決まって、

「幽々子様と相談してください。私のお屋敷ではありませんから」

の一点張りであった。

實際役に立てるかといわれれば、別にそんなわけでも無いのだが、そこに居てもいいと言う理由があるか無いかでは大きな違いがあるのだ。

ともかく何か役割が欲しい。

人間とはそういう生き物なのかもしれない。

皿洗いぐらいなら出来るかなとか考えながら歩みを進めた。

妖夢が自分の身長的一半倍くらいはあろうかと言う大きな正門を器用に開ける。

まず私の目に入ったのは、野球ができそうなくらい巨大な庭であった。

屋敷は、近づけば近づくほどにその木目の光沢や瓦の調和がそそやかに目へ飛び込んでくるような気迫のようなものがある。

和風な屋敷もやっぱりいいもんだ。

大和撫子の私にはこの御国文化が心地よい。

きつと、田舎のお婆ちゃんの家に行った時はこのような気分になるのだろうか少ししみじみしてしまう。

私にはお婆ちゃんなどいた事がないが。

少し自嘲的になってしまったのに気づいて首を振る。

そして、庭を通り内側の玄関へと向かった。

そこにある枯山水や庭木は素人目に見ても整えられているのがひびしとわかる。

妖夢は庭師こそが自分の仕事だと言っていたが、まさかこれを仕立て上げたのだろうか。

死の国恐るべし。

そしてその裏に生えていたあまりにも巨大な、そして冷たく枯れた大木に、何となく私は寂しさを覚えたのだ。

「……想像はしていたがやはり大きな屋敷だ。この屋敷は一体誰が建てたんだ？」

「私の遠い先祖と聞いています。祖父妖忌の時には存在したと」

妖夢の祖父……ってことは結構年季いつてるんだな。

にしてはまるで新築のような様相だが。

「あの木は？」

「あれは西行妖という桜の木です。かなり曰く付きの……」
「曰く？」

「なにやら根元に何者かが封印されているとか……一度も満開になつたことがなく、世界の終わりの日に満開になるとか……」

「そんなのほぼ都市伝説の域だな」

「ま、幽々子様のお戯れでしょうけどね」

「だろうな」

口では滑稽を飛ばすものの、あの木……少しだけ嫌な予感がする。何かはわからないが。

そんな私を置いて妖夢は玄関を開け、疲れたように中へと入っていった。

私も置いていかれないよう後が続く。

「ただいま戻りました。さ、上がってください」

「お邪魔します……」

恐る恐るその玄関口へと足を上げ、そろりそろりゆつくりと足をつける。

すると、慎重すぎたのか指先が床を勢いよく滑り、足が勢いよく前後に開く。

そしてその勢いのまま全体重の負荷をかけられた後ろ足の方角に思い切り頭から後ろへ転んでしまった。

「いっつだあつ！」

「大丈夫ですか!？」

玄関は綺麗にせよとは言いがこれではあまりにも少し手入れが行き届きすぎている。

床が氷のようだ。

あまりに間抜けすぎる第一歩目に一瞬何が起こったのか理解できなかつたが、ジリジリと歩み寄ってくる鈍い痛みにより少しづつ状況を把握して行った。

痛みには主要動と初期微動があるような気がする。

強い痛みは後からゆっくりと私たち息の根を止めにやってくるのだ。

不意に来た鈍い痛みに耐えかねて頭を押さえながらうずくまっていると、妖夢がしゃがみこんで心配そうに覗き込んできてくれる。

こんな足のない幽霊のくせして思いつきり転ぶような鈍臭い私を笑ったりせず真剣に心配してくれているのだ。

何ていい子だろうか……！

と感動したいのは山々なのに、眼前で起きているとある事柄がそれを遮ってくる。

妖夢が、膝を立ててしゃがむ蹲踞の姿勢で私の顔の前にいるため、スカートの中があまりにもよく見えてしまうという事だ。

鼻先数尺の所に……妖夢のモノが。

そんなことは今はどうでもいいくらいに痛みが強いのだが……白色の無地か。

あ、やばい。

めっちゃ嫌な予感がする。

「あらあなんの音かしら？」

「あ、幽々子様！」

屋敷の奥から一つの気配が近寄ってきた。

幽々子……ってことは主人がきたのか。

この姿勢では顔を伺う事が出来ないが、笑顔を浮かべて笑いを堪えている所が想像できる。

もしくは驚くだろうか。

全くもって恥ずかしい初対面だ。

「……しばらく帰ってこないと思ったら、下着を見せるのが趣味になったの？妖夢」

「えっ……」

私と妖夢が同時に声を上げる。

お互いにその意味は違うが。

3秒、きっかりそれだけの間時が止まり……言葉の意味を理解してしまった妖夢が顔を真っ赤にして腰に挿している刀へと手をかけた。

嫌な予感、的中。

「変態！」

「違う違う！誤解だ！」

「問答無用！」

「頭を動かそうにも痛くて動かせなかつたんだよ！」

「さて、本当に誤解なのかしら……」

「やっぱり！」

「本当に誤解だよ！いや本当に！」

何で謝らなければ行けないのか少し不服だが、下手なことを言ってしまうば下半身とお別れしなければいけない可能性があるためぐつと口を閉じる。

まだまだ頭の打った所は痛い、それよりも妖夢の視線の方が痛い。

ゆっくりと起き上がり、膝についた埃を手で払ってから正面を向く。

そしてそこに立っていた者の顔を睨むようにして見た。

こいつが西行寺幽々子か……。

強い者の気配こそするがその気の流れはまるで穏やかで、まさしく死んだような静けさだ。

浮かべている笑顔は柔らかく、包み込まれるような感覚に陥る。

しかし、しかし私は依然として警戒態勢を解くことはないだろう。

その桃色の髪を揺らしてあざとく幽々子はお辞儀をした。

「貴方が例の者ね。よくいらしたわ。どうぞお上がり下しませ」

「ああ、お邪魔します」

わざとらしいくらい丁寧な言葉を使って催促をされる様には、慇懃無礼って言葉がよく似合う。

しかしまあこのアマ、本当にとんだ御局様らしい。

こんな事じゃ妖夢にあんな怪文書を解読させようとするのも納得だ。

私は紅魔館での経験も踏まえてある一つの答えを導く。

ここで住んでいくのならば、一挙一動に気をつけないと絶対にこの

女は嫌味つたらしく論つてくるという結論。

こういう人達はまるで息を吐くかのように意地の悪い行いができる人種なのだ。

それに、あれは下着を見せびらかした妖夢が悪い！

覗いた私は悪くない……いや、それは流石に開き直りか。

「妖夢。お客様を案内なさい」

「……かしこまりました」

幽々子はひどく穏やかかつ棘のない口調で言った。

指示を受けた妖夢は主人に逆らうわけにもいかず、不満ありげんと言った顔をしながら、不機嫌そうな顔で刀を納めた。

露骨なくらい金属のぶつかる音を立てて。

「……どうぞ」

気のせいかわからないが妖夢と目が合わなくなってしまった。

言葉もどこかよそよそしい。

若干の辛さを感じるが、時が解決してくれるだろう。

希望的観測が過ぎるかもしれないが。

案内されたのは手前から三番目の和室であった。

部屋の名は桐壺なり。

その部屋には机と座布団が用意されていた。

客間に案内されている途中でも、やはり建物の建築技術は素晴らしいと感服する。

縁側からは庭の鹿威しの音がせせらぎのように聞こえて来てなかなか風流だ。

幽々子は慣れたように遠慮なく歩くが、ここまで上物の畳だと上に乗ることさえ躊躇わせる。

貧乏な育ちを恨みながら、本能に抗って部屋へと入っていった。

「さて……と。妖夢、お茶をお願い」

妖夢をどこかに追いやるように用を言いつけたと思うと、私の対面に腰を降ろした幽々子は、急にじっと私を見つめて来た。

幽々子の黒い瞳は、まるで私ではなくその奥にある別の『何か』を見透かすようで、眺められ心地とでもいうのだろうか、それがずいぶ

ん悪かった。

その瞬間に、ゆつくりと舐めるような冷たい風が頬の横を吹き抜ける。

まるでかまいたちのように。

まだ何も会話を交わしていないのに、幽々子を中心に空気が一変していく。

……私は妖夢の呑気な振る舞いに油断していたことに今更気づいた。

いつもそうだ。

私は大事なことにギリギリまで悟れない。

そしてやつと嫌にでも理解させられる。

この世界でも五指の強者がたつた今私の目の前で座っているのだ。レミリアの持つ分かりやすい恐怖とは違う、死という概念が具現化したような曖昧で底知れない恐怖。

痛みを伴わない、純度の高い本能の恐れ。

ずっと昔に壊れたと思っていた私のヤバイ奴センサーが、今になって大車輪のように回転している。

これから始まるのは応接ではなく、尋問であるとナンバーバルに伝えていなのだ。

しかしあえて言おう。

ここで怯えてはいけない。

むしろ、この向かい風に乗って飛び立たねばならないのだ。

「貴子さん……よね?」

幽々子の先手。

さん付けでの名前の確認をされると、返答は敬語か否かと言ったようなさまざまな考慮をしなければいけない。

しかしここで下手に出るのは少し早い。

あくまでも堂々と。

「貴子でいいです。世話になる身ですし、幽々子さんとお呼びすればいいですか?」

「幽々子で構わないわ。敬語も結構よ」

「ああ……じゃあ楽にさせてもらおうよ」

ここは敬語は使わない事にした。

失礼の極みだが、私には曲がりなりにも閻魔の勅令というバックがあるからだ。

呼び名の整理を終え、ジャブ程度の挨拶が済んだところで本題を幽々子から告げられる。

恐れを乗り越えないとやっていけないとは分かっているようでも、体は交感神経が擦り切れそうなほどだ。

握り込んだ拳が汗でじんわり滲む。

「閻魔の方から、貴方について連絡が来たわ」

「そうか……幽々子から見た感じはどうなんだ？私はどこかおかしいのか？」

「そうねえ。閻魔じゃないからわからないけど、少し欲が深いってくらいじゃないかしら？」

「欲か……」

「お金とか性とか乱れてたんじゃないかしら？」

「全く心当たりないな」

先程の返答は心当たり（しか）無いの省略形である。

酒も性も金回りもって、私の体の九割を占めてるぞ。

そんなささやかで浅ましい嘘を見透かしたように幽々子は性根の腐ったような笑みを浮かべ、そして口元を扇子で隠す。

「私にはわからないわねえ。この目で見ないことには、貴方の特異性も全て嘘となるのだから」

……特異性？

何を言っているのか全くわからないのだが、それを言われてくれないう圧力があつた。

わざとだろう。

肌寒い雰囲気から一気に凍えるくらい氷点下の空気が充満する。

吐く息が白く凍りそうなくらいだ。

「そうね。ここに住むのは認めるわ。けれど、私が貴方のことを信頼するかどうかは全く別の問題」

「住ませてもらえるだけで感謝しきれない僥倖だ。急にこんな流れ者を信用しろなんて方が無理な話さ」

「そうねえ。まああの閻魔の事だから、少し長い付き合いになると思いうわ。楽になさい」

幽々子の一言で、居住権を正式に認められた気がして羽が生えたかのように体が軽くなる。

体を支配していた緊張という感覚が無くなり、安堵と疲労がシエイクされたような複雑な気持ちだ。

だが、まだ話は終わりじゃない。

件の事について、妖夢の言う通り主人に直接談判する必要があるのだ。

「恩に着る。しかしやはり付き合いは長くなると思う。ただで住むのは申し訳ない。できることは少ないが家賃程度には働かせてもらえないか?」

「あら、うちは妖夢がいるわ。気にしなくて結構よ」

「この広い屋敷だ。掃除なんかは大変だろう。それに時間の潰し方が見つからないんだ」

「そうねえ……なら、面接でもさせてもらおうかしら?」

「ああ。なんでも聞いてくれてかまわない」

居住まいを正して横座りから正座へと直す。

幽々子は顎に人差し指を当てて少し考えるような素振りをし、その口を開いた。

「それでは、質問ね」

「ああ。」

えらくら勿体ぶったかと思えば、藪から棒に幽々子の質問が飛んでくる。

「貴方は幼児愛着者、もしくは同性愛者なのかしら?」

「……ええ!」

あまりの突飛な質問に思い切り吹き出してしまう。

あの雰囲気はどうしてその質問が出るのか、それともその質問が故にわざとあんな雰囲気にしたのか。

私はペドフィリアでも何でもない。

道行く鼻水垂らしたジャリを見て己の女を感じたことなんて生涯を通して一度も無いんだ。

「どちらも違う!」

「それでは死因は?」

「吸血鬼と暮らしていたら不注意でだよ」

「なるほど……それじゃあ、見させてもらおうかしら」

「……え?」

幽々子はどこに隠していたのか少し大きめの水晶を机の上においた。

この展開、なにかデジャビュを感じる……。

それに、私のよく当たる嫌な予感が今回も絶好調だ。

水晶は中身が透き通っていて、中を覗くと奥側に屈折して少し膨らんだ幽々子の体があった。

「これは生前が映る水晶。そうねえ、閻魔が使う浄玻璃の鏡の様なものよ」

「……見たのか?」

「ええ、見たわ。私が聞きたい問題の場面は三つ」

幽々子が手を翳すと、水晶は煙が充満する様に曇っていった。

「この、金髪の小さな妖怪を切り刻んでいるのは何故かしら? しかも同じようなことを何度もやってるわね?」

「……妖怪退治屋をやってたんだ。下手に腕なんかを残すと喰われる。それにその妖怪は私のお得意様だ」

「……貴方、妖怪退治屋だったのね」

「ああ」

「そう……じゃあ二つ目、紅魔館に行った時この低級悪魔に胸を弄られているのは何かしら? しかも全裸で」

「ボディチェックだよ。吸血鬼つてのはなにぶん不便でね。ナイフ一つ持っちゃダメなんだよ」

「なるほど……」

二つの質問に対する答えを受けて、思いの外幽々子は驚きもなくむ

しろ予想通りという反応をする。

その反応に、かえって私は不安感を覚えた。

何だ？

違和感が大きい。

「なるほどねえ。それじゃあ、三つめ」

ここからが本題と言わんばかりに勿体ぶる。

よって貴子も肩が強張る。

「吸血鬼の唇を奪ったのは何故かしら？」

「……動きを封じるためだよ」

「あらあ、面接で嘘をついてもいいのかしら？」

神妙な顔は崩れて途端に、意地の悪い悪意のこもった笑みを浮かべ出す幽々子。

質問には答えにくく、ハッキリ言つて黙秘権を行使したい。

しかしそんなことを許してくれる存在ではないのが痛いほど伝わってくるのだ。

息遣いや目線、声の抑揚なんかから。

「その……極度の緊張の反動で……高揚してしまつて……」

「声が小さくて聞こえないわあ？それに言葉も分かりづらいわねえ？」

言葉がわかりづらいなら聞こえてるじゃないか、なんて言う真つ当な文句を飲み込む。

逆らえるわけがない。

機嫌ひとつ損ねれば何が起こるかわからないのだから。

ならば、少しもの抵抗として聞いた方が恥ずかしくなるくらいにヤケクソで言い放つてやる。

大きく肺に息を溜め込んで大声を出す準備をする。

そんな時に限つて先程一悶着あつた妖夢が、お茶菓子を持つてくるのだ。

「幽々子様、お茶をお持ちいたしま『だから！死にかけのエクスタシーでキスしてドカーン！つて事だ！』」

和菓子に乗せた小皿が勢いよく割れる。

妖夢が落としたのだ。

しかし幽々子はその粗相を咎めようともせず、最初からこれが狙いであったかのように満足そうな顔をしている。

「……変態―」

そう言つてどこかへ走り去っていく妖夢。

残されたのは、クスクスと笑う幽々子の隣で頭を真つ白にした私であつた。

「ところで」

ところで、で済まされるほどの事態でもない気がするが幽々子は話題を切り替えた。

その手には、帰り際に妖夢が買った綺麗な手鏡が握られている。

「この手鏡は何かしら？」

「……あの文言の答えだ」

「文言？」

「妖夢に渡してた奴だよ」

「ああ……アレがどうして手鏡に繋がるのかしら？」

「しらん。居酒屋で大将やってるオッサンに聞いてくれる」

「大将？」

「そのジジイが手鏡つて即答したんだよ」

そういうと、幽々子は初めて驚いたような顔をする。

些細な変化だが、薄寒い笑みをやめて目を見開いた。

「もしかすると、こんな感じの人かしら？」

そう言つて何やら上質そうな紙をどこからか持つてきて、その紙には白毛を蓄えた見るからに厳しそうな顔の老人が書かれていた。

しかし、大将の顔ではない。

「いや、違うな。もつとやさぐれた感じだ」

「そう……なら納得だわ」

「何がだ？」

「手鏡を買つてきた理由よ」

たまに、いや結構な割合で何を言っているのかわからないが、幽々

子は何かを懐かしむように手鏡をまじまじと見つめている。

「あの文の意味、教えてくれないか？」

「ああ、アレには意味なんてないわ。全部デタラメなもの」

「なんだって!？」

「まさか妖夢があんなに悩むなんて……あの子も本当に真面目ねえ」

その声から伝わってくるのは、純粋な妖夢を揶揄うというよりもむしろ心配している感情だった。

しかしデタラメで適当な文章渡しておつかいを頼むなんて戯れがすぎるんじゃないか？

「しかし、正解がないわけではないのよ。そうね、手鏡は正解と言えるわ」

「何故だ？」

「あら、変態に教えないといけないのかしら？」

「……なんなら幽々子だってイけるぞ」

そう言っただけで悲しい脅しを仕掛けた私に、幽々子は顔からすんと表情がなくなり、

「……すこし眠りなさい」

と喋って黒い蝶々のようなものが飛ばしてきた。

その顔や気配から本能でヤバいと悟るものの、慣れない長時間の正座で足が痺れてしまった私は咄嗟に避ける事ができず、その蝶々に被弾してしまう。

ここまで織り込み済みか……？

ぶつかった感触や衝撃は全くなかったが、意識は驚くほど刈り取られてしまう。

私の世界が消灯されていくのだった。

「変わらないわねえ……妖忌」

妖……忌？

誰の……話だ？

「……てください。貴子さん！起きてください！」

何者かが……といってもこの声は間違いなく妖夢だが、ゆさゆさと

肩を揺らしてくる。

二日酔いのような鋭い頭痛が走り、少し息が漏れた。

「ご飯ですよ。いつまで寝てるんですか」

「……いまは朝か？それとも夜か？」

「何寝ぼけてるんですか。もうお昼ですよ」

「時間で言うとうと？」

「ぴったり12時です。さ、ご飯召し上がってください」

「ああ……」

のそのそと起き上がって、初めて自分が温い布団の中に潜り込んでいた事に気づく。

この屋敷は布団一重にしたって上等でなにぶん寝心地が良すぎた。

……しかし、私は確か幽々子に眠らされたはず。

となると、妖夢が介抱してくれたのか？

……誤解が解けていることを切実に願うしかないな。

頭が冴えてくるとどこからかとても良い香りがしてきている事に気づいた。

これは……味噌汁か。

予想はしていたが外見に相応しくやはりここは和食派なのだろう。

さあ、何か手伝える事がないか聞きに行こうか。

ご飯なら皿洗いから始めよう。

そうやって立ち上がり、意気高らかに踏み出した右足の第一歩目は勢いよく渡り廊下の床板を踏み抜くのであった。

勢いよくめり込んでいく右足。

「つぎやあああああ!!!」

「あらあ何事？」

私のこだまするくらい張り上げた叫び声に呼ばれてか、幽々子がやってきた。

目覚めていきなり屋敷を破壊してしまったその狼藉についても謝罪したいが、動転してしまい言葉に詰まってしまう。

しかし、本当に言葉を失っていたのは私ではなく幽々子であった。

「今……床板を、踏み抜いたのかしら？」

「ああ、そうだ」

「まさか……ねえ」

「すまない……稚拙ではあるが修理はできる。他の場所も点検してお
くよ」

「いえ……その必要はないわ」

会話の全てが意味深な幽々子だが、事さらに意味深な顔をする。

というより、私のことなど眼中にないくらい考え込んでいる。

そんなはこの床板に思い入れでもあったのか？

「とりあえず、お昼をいただきましょう」

「あ、ああ」

幽々子の顔持ちから発せられた些かの違和感と謎を残して私たちはお昼ご飯へと向かった。

いや、昼ごはんという名の拷問か、はたまた戦場か。

「……ごちそうさま」

「え、もういららないんですか？」

「これ以上食ったら……死ぬ」

「もう死んでるじゃないですか」

「この下り何回やるんだよ」

文字通り死ぬ気で空にした茶碗に嬉々としておかわりをよそおうとする妖夢を静止する。

結構必死に。

「いつも昼飯はこの量なのか？」

「ええ……そうですけど」

何いってんだこいつみたいな目で見られていることに少しでも腹
が立つ。

昼飯に丼三杯食わそうとする奴がいてたまるか。

柔道強豪の合宿で食う飯じゃないか。

いつもその量を平らげているのかこの屋敷は……。

それにおかずだって昼の献立とは思えないくらい悪い意味で超豪
華だ。

唐揚げだのなんなの。
断言しておきたい。

絶対に太る！

いや、妖夢とか幽々子を見た感じではそうでもないのかもしれないけどそれでも精神的に太りそうだ。

白米を見るだけで吐く準備をする体になってしまう。

……妖夢が五杯目に入った。

なんとなく、映姫がにやけていた理由を悟った気がする。

何食わぬ顔で山盛り飯を食っている幽々子がその答えだ。

作法はお上品なのにスピードが早すぎてもう競技カルタでもしてるかのように思える。

私は……一杯でグロッキーだ。

もともとそんなに食べる方じゃないんだから。

よく頑張ったと褒めていただきたい。

……あ、今妖夢鼻で笑いやがった。

「さて、と」

「食器は置いといて構わないですよ」

「いや、持っていくよ。皿洗いしとく」

重くなった体に鞭打って調理場へと向かうために立ち上がる。

早くあの大量の食料から目を背けたかったからだ。

しかし、悪魔はそのわずかな隙さえ許してくれない。

私の肩を妖夢が結構な力で押さえ込む。

「お客様にそんなことさせられませんよ！」

「いや、客扱いしないでいいよ。とかしなくてくれ」

「甘味も用意してますので！それだけでも召し上がってください」

甘味……デザート？

この量食った後に……？

あれ、なんでだろう。

もう死んだはずなのに克明に走馬灯が見える。

そして無性に喉の奥が熱くなる。

これが本当の、吐く玉楼。

お後がよろしくないようぞ。

死んでからと言うものの

人生には絶対に負けられない戦いがある。

今も昔も、こういう戯事をまあ臆面もなく言ってしまうような馬鹿が後を絶たない。

そういう奴はどれだけ上っ面で大器を振る舞おうとも、大抵は負けた時の言い訳を無意識に考えている半端者、軟弱者なのだ。

だから、負けた時にペラペラと言い訳してしまう。

絶対に負けられないと言っておきながら、負けた時に言い訳をするという事がどれほど滑稽か。

絶対に負けられないという覚悟がどれほどの重みを、どれほどの意味を持つているかが理解できていないのだ。

絶対に負けられないなら勝つか負けるかではない。

勝つか、死ぬかだ。

それだけ勝負の世界は厳しく険しく、だからこそ魅力的なんだ。

……そして言おう。

私は今、絶対に負けられない勝負をしていると。

事の顛末は、あの思い出すだけで腹が膨れる昼ご飯を何とかデザート込みで食べ終え、取り止めもなくウダウダと時間を潰していた時から始まる。

規格外の摂取量に私の体の消化器系はズタズタな訳で、体を動かす気には全くならなかつた。

とはいうものの暇なものとはにかく暇で、なんとも無しにヒューヒューと乾いた口笛を吹いてみたり、眉毛を抜いてそれで文字を作ってみたりと、実に下らない事に結構真剣に取り組んでいた。

……のだが、眉毛で薔薇と書き上げるその少し手前で話は動いた。タイミンクの悪い事に定評のある幽々子からお呼びがかかってしまったのだ。

あと一本で完成と言うところなのに。

無視して完成させようかとも思ったが、普通に考えてみれば鼻毛を優先させることなどできないし、一応は屋敷に仕えているという立場

なので幽々子を優先する。

というより無視したら後が怖いし。

渡り廊下を向かって右、私は幽々子に呼ばれた方へと足を運んだ。部屋で待っていたその意地悪亡霊は、手に何かを持って私を手招きで誘う。

ちやぶ台を挟んで向かい合うように座布団が敷かれていたので、重い体を労りながら幽々子の対面に座った。

「暇していたのでしょうか？・貴方はこれ、出来るのかしら？」

そう言いながら幽々子は手から何枚かの札を表向きに並べる。

そこに描かれていたのは色とりどりの鶴の絵、梅の絵、赤い短冊の絵。

つまり……

「花札か」

「ええ。妖夢は弱くて。花札は好き？」

「わかって聞いてるんだろ？・おっかないぞ。地元じゃ負け知らずだ」

「あら、じゃあ何か賭けないと失礼かしら？」

「賭けなくても面白いが」

「賭けるともつと面白い……でしよう？」

「そうだ。だが残念な事に賭けるものがない」

「あら、ご冗談。あるじゃない。そこに立派な物が」

そういうと、突然幽々子が私の胸元を凝視してくる。

その視線の先には、別に全く立派でも豊満でもないものが映っているはずだが。

それに胸なんていったいどうやって賭けたら……なんてな。

どうせこんな変態みたいな発想はまた私の妄想か何かなんだろう。

テンプレート、デジャビュ。

いつものお決まりパターンだ。

立派なものなんて言い放って私の反応を愉しむのが幽々子の目的だろう。

残念だが思わせぶりには引つかからないし、その手には乗らない。

「立派な物？ 一体何を賭けるんだ？」

「負けた方が服を一枚脱いでいくというのはどうかしら」

「ああ……ああ?!」

まさかの本当に変態チックな事を考えてたパターン。

ああいいですねえ……とは絶対にならないだろう。

どうかしら？ じゃないだろう。

なにをお上品にそんな下品な宴会芸を提案してるんだ。

幽々子よ、そんなの私が若い頃に良くやってたような遊びだぞ。

ジャンケンで負けた方が一枚脱いでいく、いわゆる野球拳という奴の類。

てことは何だ……花札拳って奴か？

「……正気か？」

「こういう言葉をご存知？……狂気の沙汰ほど、面白い」

どこの闇に舞い降りた天才なんだよ。

そりやそんなインド人もびっくりのぶっ飛び発言かまされたら面は白くなるだろうさ。

それにやつと妖夢が軽便の視線ではなく普通の目で見てくれるようになってきたのにそんな事をしでかした日にはさよならバイバイだ。

よくて短冊切り、悪ければ千切りで今晚の食卓に並べられてしまう。

(負ければ……下手すりゃ裸)

……しかし、不幸なことに私に悪魔が舞い降りた。

よくある天使と悪魔……といっても私の天使はシエスタ中であるが、その囁きはまさに文字通り悪魔的であった。

(勝てば、幽々子を脱がせられる)

思えば、初対面の時から痴漢の冤罪をかけられるわ飯は死ぬほど食わされるわ勝手に過去をみられるわ気絶させられるわ……散々な目にして遭わされてないじゃないですか。

それに……なかなかご立派なものをオモチでいらっしやる。

いま幽々子が来ている桜色の着物、全部剥ぎ取れたらこれ以上の意

趣返しはないのでは？

伊達に博打打ちをやってんじやない。

ウン10年の含蓄と実績ありなんだ。

……勝てる！

そう。

勝負師という生き物はアテもない根拠のもとに勝機を見出し、勝てる勝負はやらずにいられない悲しい性を持っているのであった。

現に今も、博打の借金で身を売られた事など忘却の彼方へと追いやられていた。

「受けて立つ。こいこいでいいか？」

「ええ。そう言うと思っていたわ」

ででーん！

呼ばれて飛び出てみよみよみよーん！

どうも白玉楼の庭師、魂魄妖夢です。

小悪魔さんに引き続き今回は私が解説を務めさせていただきます。

至らぬところ多々あると思いますが、一生懸命頑張らせて……え？早く説明しろ、ですか？

……こほん。

こいこいというのは、花札を用いた遊びの中でも、最も有名な物の一つです。

まず全体として睦月から師走までの、季節の札がそれぞれ4枚ずつあります。

打ち手はお互い手札を8枚持ち、場に8枚の札をおいて勝負開始です。

お互いの手札の中で場の札と同じ月の札があればそれを取る、という事を交互に繰り返し、特定の札の組み合わせによってできる役というものを先に作った方の勝ちです。

勝負は一月、二月と進んでいき計12回繰り返します。

有名な役として、猪鹿蝶、花見で一杯などがあります。

こいこいとは運だけではなく、場の流れを読み切る勝負勘と度胸が必要とされる、伝統ある大衆遊楽なのです。

ご静聴ありがとうございます。

「……妖夢？」

「それじゃあ始めましょうか。先行は譲るわ」

「今妖夢が」

「服が脱ぎやすいように帯を緩めておくことをお勧めするわ」

「……………」

……そして冒頭に至る。

何度かに渡り死戦を繰り広げ、一進一退、押し引きならない状況だ。戦況は、私が上下ともに下着姿で、幽々子は何一つ服を脱いでいないというものだ。

……全然一進一退どころじゃない！

幽々子めっちゃ強い！

何一つ上がらせてくれないし、まだ勝負は3月なのにもうほぼR—18レベルまで脱がされてる！

テレビなら不自然に日光が刺してきて私の大切な所を隠しているし、漫画なら謎の黒い四角が登場だろう。

このままでは、梅雨も明けずに全裸にされてしまう。

ここからは絶対に、負けられない戦いだ。

あと一回負けたらもう乳房を晒すことに、もしくは……いや負けた時のことを考えるから負けるんだ。

勝つ。

幽々子は着物、一枚脱げば即致命傷なんだ。

一回でも勝てば、状況は……イーブン！

「4月、親は幽々子だな」

「降参するなら今のうちよ？」

「こっちの台詞だ」

「そんな下着で言われても怖くないわね」

そんな戯言も言わせない。

この手札で……絶対に勝つ。

と、思っていたのに……

「はい、私の上がり。手四よ」

「……な、な」

一枚も札を出すことなく、幽々子が手札を開けた。

手四……最初の時点で同じ季節を4枚持っている……そんな馬鹿な。

「イ……」

「イカサマ、なんてつまらないこと言わないわよねえ」

「ぐっ……」

ぐにやあ。

私を貫くその視線は……殺気のコもった目。

私を気絶させた時と同じ目。

……もう逃げられない。

この女……本気で脱がす気なんだ。

私のことを。

クソ……そつちがその気ならこつちだつて。

幽々子をひん剥くためなら乳房を見られたつて構わない。

例え全裸にされようとも……このままじゃ終われない！

私は晴天の下、死んで初めての胸を晒した。

幽々子を討つために。

「これで、あと一枚ねえ」

「配ってくれ。5月だ」

……幸いな事は、花見、月見を採用している事であった。

これらの役は2枚で成立する。

つまり……サマ師に愛されている役なのだ。

勝負はもうついている。

先程の手札から、2枚とつくに抜いておいたのだ。

この2枚、幽々子の目を盗み……すり替える！

「あらっ？」

っ！

バレたか？

「……この手札ならすぐに勝負がつきそうだわ」

……いや、バレていない。

幽々子は勝負を続行した。

私は2手で上がる。

すなわち負けはない。

「……月見で一杯だ」

「あら？初めて上がられてしまったわ」

「さ、脱いでもらおうか」

よっしゃ！

勝った！

勝ったぞ！

ぐへへへ。

安い悪役みたいな台詞が出てきてしまう。

苦労したんだ……その着物の下に隠された桜花卉、じっくりと見させてもらおうぞ。

「……………」

……ゴクリ。

思わずダンマリ、固唾を飲んでしまう。

年甲斐もなく釘付けにされてしまった。

帯を緩め、右肩からするりと撫で下ろすように着物を脱いでいく仕草に。

……つて！

ええ！

「さ、続けましょうか」

「続けましょうか、じゃない！」

私は思わず立ち上がってしまった。

幽々子は桜色の着物を脱いだ。

そこまでは、いいんだ。

問題は、その下から出てきたのが透き通るような白い肌……ではなく、糊の乗った白い着物であることだった。

「重ね着なんてマネをよくも！」

「さあ、続けましょうか？」

「ぐっ……」

その一言で空気を支配されてしまう。

圧倒的強者が本気になれば理不尽など無い。

こうなりやこつちも実力行使だ。

最初に札を配るのは親で、親になれるのは最後に上がったもの。

つまり私が親だ。

悪いがもう私は負けない。

「六月……私が親だな。手四だ」

「あらあお強い……はい、どうぞ」

白の着物の下からは水色の着物……。

おそらくその下には、紫、山吹と続いているんだろう。

私はあと何回勝ち続けなければいけないんだ……？

サマとバレずに勝ち続けなければ……脱がされる。

勝ち続けても終わりが見えない……ああ、最初からこうなる予定

だったのか幽々子。

12月まで凌ぎ切るのは……不可能だ。

今の手四だつてかなり危うい。

幽々子がわざと見逃してる可能性だつて大だ。

こうなりやこつちだつて！こつちだつて！

「きゃあああー！」

私の悲痛な叫びに、

「何事！」

妖夢、登場。

「幽々子様！」

「助けてくれ妖夢！」

「おのれ貴子！幽々子様になんて事を！」

「そうそう、なんて事を……えっ？」

……無事、輪切りで済みましたとさ。

「くつくつく……貴子、貴方なかなかやるわねえ？」

幽々子は縁側に腰掛け、抑えきれずに溢れるような笑い声を出した。

……そりや幽々子からすれば傑作だろうさ。

「まさか、あんなに綺麗に引つかかるなんてねえ？あんな幻術、子供騙しも良いところよ。ねえ妖夢？」

「幽々子様はお戯れが過ぎます！」

「妖夢は引つかかってくれなくなっちゃったから……こんなに愉快なのはいつぶりかしらねえ……うふふ」

今さつき私が見たのは、勝負に乗った所から妖夢に切られるところまで全部幽々子の幻術だったのだ。

そもそも服を脱ぐ勝負なんてこんな真つ昼間から素面でやる訳が無いのに。

それも全部幽々子の差金だ。

私に冷静な判断ができないように理性を奪った。

幽々子が服を脱いだように見えたのも幻覚、でも私がマップになったのは現実……死にたくない。

おそらく妖夢も昔は被害者だったのだろう。

どちらかという私より座っている気がする。

「そろそろ口を聞いてくれないかしら？」
「……………」

どうにも喋る気にもなれない。

そういう不公平とか騙し事は勝負においては嫌いだからだ。

「そうねえ……まるで猪鹿蝶のよう。そうは思わない？」

「どういう事ですか？」

「私は蝶々、正直な妖夢は猪、話をしてくれない貴子はそう……鹿ね」
「シカト……ですか？」

「ええ。ふふふ」

よっぽどお気に召したのか、くつくつと溢れるように笑う幽々子。

その顔青タンだらけにしてやりたいくらいだ。

猪鹿蝶なんて上等なもんじゃない。

このカスめ！

少しでも抵抗として、心の中でしかめいっばい毒づいておこう。

「でも、貴子も貴子よ？イカサマをしたんだもの」

「貴子さんはお客さまなんですから、あまりからかつちやダメですよ。それに、あんな傷だらけの札じゃ幽々子様だって立派なイカサマですよ」

傷だらけ……？

あの札、えらく年季が入っていたが……まさか覚えていたのか？

あの量を。

どつちにしろイカサマに変わりないが。

「妖夢は貴子を鼻肩するのねえ。自分も同じ目にあったかしら？」

「関係ありません！」

「あの時の妖夢も面白かったわあ。一糸纏わずに真面目な顔をして」

「ゆーゆーこーさーまー」

……どうにかして幽々子を脱がせられないだろうか。

もうここまでできたら本気で脱がしてやりたい。

すまない妖夢。

今から貴方の主人はその琥珀の肌を晒すかもしれない。

「幽々子」

「あら、ご機嫌は治ったかしら？」

「今からもう一勝負しないか？」

「うふふ、まだ脱ぎ足りないのかしら？」

「一勝負一枚じゃあちとヒリつかない。レートは五倍だ」

「……妖夢、花札を持ってきてちょうだい」

ですが幽々子様、と遮る妖夢を目で黙らせる幽々子。

妖夢もその迫力に倫理が負けたのか、そそくさと部屋に入っていた。

「……どうぞ」

「ありがとう。勝負はもっと簡単にしよう」

「というっ？」

「より大きい月の札を引いた方が勝ちってのはどうだ」
「構わないわ」

「もう一度確認する。負けた方が服を5枚脱ぐんだ」

「ええ。なんなら10枚でも良いのよ?」

「買ってきた手鏡を見てみればいい。負けるやつが写ってるさ」

微風が庭にある木の枝を揺らす。

勝負は、静かに始まった。

場の空気は重い沈黙と熱い熱に包まれていく。

ジャンケンで先行は幽々子となった。

前の戦いのようなイカサマを無くすため妖夢に審判を務めてもらう。

入念に札をシャッフルし、第二の勝負は始まった。

たった一枚で決する勝負が。

「先行は私ね?」

「ああ」

ゆつくりと、ゆつくりと手を伸ばす幽々子。

そして札を一枚掴み、一気にめくる。

その札の面に描かれていたのは……鳳凰。

「12月!」

妖夢だけが素っ頓狂な声をあげた。

その声が遠くの山に反響し帰ってきた。

無論私と幽々子にもその札は見えている。

幽々子は無言で勝ち誇る笑みを浮かべ、私はその逆だ。

よくて引き分け、ほとんどの確率で負けだ。

「さ、めくりなさいな」

「……幽々子」

「何かしら? 降参は無いわよ?」

私もゆつくりと札に手を伸ばした。

傷だらけの山札の中、たった一枚の『傷のついていない札』に。

「これが、勝負ってもんだ」
札をめくる。

そして幽々子達は目の当たりにする。

私の札……14月を。

「な、何ですかその札！」

「14月だ」

「14月!?!」

「曆に存在しない、幻の札。その名も蓮に龍」

目を月のように丸く見開く妖夢。

そしてその奥に、表情が変わり笑みを失った幽々子がいた。

「……龍が、鳳凰を獲った」

そう呟いたのは、幽々子であった。

反論や異議を訴えないと言う事は負けを認めたと言う事。

つまり……私の勝ちだ！

「さあ、幽々子」

「ええ。負けてしまったなら仕方がないわね」

そう言っつて帯を緩め、肩に手をかける幽々子。

今度は幻術でもイカサマでもない。

下に何も着ていなかったのだろうか、白い素肌がチラリと見えていく。

それがより一層目の前の光景のリアリティを強固なものにしていた。

「幽々子様！なりません！」

主君の軽拳妄動を止めようと慌てて妖夢が入ったが、一歩遅い。

幽々子はすでに服を着ていなかった。

「さあ、ごらんあそばせ。私の肉体……いえ、醜態を」

「幽々子様……」

念願かなって放たれた幽々子の肉体は、私の想像を遥かに裏切るものだった。

これは……たしかに本物だ。

ただし、私の思っていたものとは遥かに異なるが。

「……刺青か？」

「違うわ。これはね……呪いよ」

幽々子には、満開に咲き誇る桜の木が刺青のように彫られていたのだ。

右肩も、腰も。

巨大で、肌色の方が少ないほど。

おそらくは表側も同様だろう。

豊富な乳房や、透き通る白い肌なんかに見惚れていられるような余裕もない、何か鬼気迫るような力……それも超ド級に邪悪な力が満ち溢れていた。

「いつからだったかしらね。毎年春が近づくと私の体にこのアザが現れるようになったのは」

体を覆うようにして自分の肩を撫でる幽々子。

その声色は、僅かだが震えていた。

「このアザは、少しづつ大きくなってきて……今ではこんなにも……」

「理由は……わからないんだな？」

「ええ。ただ……分かってている事もあるの」

「なんだ？」

「私には死というものが見える。近々大きな事が起きるわ。そして

……その時に私は死ぬかもしれない」

「なんだって!？」

弱気な幽々子に苛立ったわけでは無いが思わず怒鳴ってしまう。

怒鳴らないとやってられない気がしたから。

やるせない気持ちが少しでも沸いてしまっっては嫌だから。

「滑稽な話よね……亡霊が死ぬなんて。私が一番そう思ってる」

「アンタはそうそうやられるタマじゃないように思えるが」

「そうね……でもこうして何かもわからない力に体を蝕まれているのも事実なの」

伏目がちに呟く幽々子。

そこには、花札や玄関先で見たような意地の悪さなど無かった。

ただ未知の力に恐怖する女性が一人いただけであった。

……私なんかが、何を言ってあげられるのだろうか。

幽々子の恐怖を少しでも取り除く事さえできない自分がただもど

かしい。

私にはそうやって自分の非力さを恨むことしか出来ないのだろうか。

「そして、もう一つわかる事があるわ」

今度は私の目を見て、そういった。

真つ暗闇の行き止まりに立つまた一つ輝く突破口を見つけた時のように一筋の希望を抱いた目だった。

「貴子……あなたはまだ死んでいない」

「……え？」

「死者にあるはずのモノがあなたには無い。そして、死者に無いはずのモノが、あなたの中で渾然と輝いているの」

「どう言う事だ？」

死者にあるはずのもので、私に無いものなんて……

そんなもの絶対に無い。

……多分。

「死者にしか無いものは未練よ。生前に未練を少しでも抱かない者などいないの。しかしあなたはまるで未練などない」

そして、と前置きをして幽々子は続ける。

「生者にしかない物……それは、勇気よ」

「勇気……？」

「私には勇気などない。だけどあなたは違う。私の脅しにだってまるで臆さなかったのがその証拠」

「そんなの……」

未練と勇気。

勇気……そんなもの私にはない。

私はただ浅はかで無謀なだけなんだ。

未練だって、数えればキリがないくらいある。

私が死んでいないなんてまるで買い被りだ。

生きている時すら、まるで死んでるような奴だったのに。

「……少し、考えさせてくれ」

……あまりにも色々な情報が急に押し詰めてきたせいで、思考の処

理装置は熱を噴いてバタンキューだ。

幽々子の体のアザも。

私の死も。

死んでいないなんて、ありえない。

私は今だつて鮮明に思い出せるんだ。

あの時の光景を。

自分の体に亀裂が入り、粉々に爆散していく光景を……。

死んだんだ、私は。

「私は……」

生きている？

じゃあ、あの苦勞した三途の川は？

小町は？

映姫は？

……転生不可能。

だからといって……なにができる？

幽々子の体のアザだつて……。

私なんかじゃ何一つ力にすらなれないんだ。

「幽々子……悪いが、私じゃ何の役にも立てない」

それが、私の悪い頭で捻り出した精一杯の言葉だった。

そこにあつたのは罪悪感と無力感だけだった。

そんなチンケな物を吹き飛ばすように、幽々子は笑った。

「もう十分よ」

「え？」

「このアザを消す方法がわかったの。そしてそれはあなた無しではあり得なかった」

「急に言われたつて、私は何もしていないぞ」

「春……貴方は少しだけの春を……決して私には見ることがなかった生きた春をもっていた」

「……すまない。やはり私はダメだ。まるで説法でも聞いているみたいな気分だ」

「わかりやすく言うなら……あなたは冥界に春を告げた。そして冥界

の時を進めたの。これから少し忙しくなるわ。これだけは言わせてちょうだい」

「なんだ？」

一泊置いた時の幽々子が浮かべた、ほんの少しだけの笑顔が、それは今こんな状況で言うのは間違っているかも知れないが、果てしなく綺麗であった。

そして、幽々子は言った。

「……ありがとう、貴子」

「……勇気なら幽々子だつて持っているさ」

「え？」

「そのアザを今来たばかりの私に見せるなんて、それこそ勇気がいる事だと思う」

「貴子……」

「だから……死ぬだなんて言うな！」

「……そうね。重ね重ね感謝するわ」

「ああ」

その言葉を最後に、着物を着直すためか私は部屋の外へと追い出された。

途端に、静寂が鳴り響く。

……幽々子、ありがとうはまだ早い。

そんな言葉、幽々子の体からあのアザが無くなった時に百回でも千回でも言ってくれれば良い。

けど……今じゃない。

今、私にその言葉を言われる資格なんて……。

私は、幽々子の言っていた次に訪れる大きな事に向けて、ある決意をしたのであった。

「幽々子は死なせない」

その為に私にできる事……。

「幽々子様を守るために修行をつけて欲しい？」

「ああ……微塵でも微塵なりの力になりたいんだ」

少しでも幽々子の力になる為と思って、私は妖夢の元へ訪れて
いた。

おそらく、妖夢の目に映る私の瞳はさぞ真つ直ぐだった事だろう。

しかし、妖夢の返答は意外にも肩透かしなものだった。

「すいませんが、私に教えられる事なんてありませんし、そもそも貴子
さんが戦う事ありませんよ」

……妖夢の言うことは一理あった。

そりやたしかに昨日今日の決意で踏み込める鉄火場じゃ無いだろ
う。

しかし、ここで引き下がれるほど安い気持ちで言ったわけじゃ無
い。

「妖夢は……幽々子の事について知っていたのか？」

「ええ、当然です」

「どうにかしたくはないのか？」

「どうにかしたいに決まってるじゃないですか。私だって……悩んで
るんです」

「一緒だよ。私だってどうにかしたい。だから悩むし、今こうして強
くなる事に答えを見出そうとしてるんだ」

そうだ。

どうにかしたく無いわけがないんだ。

困ってる奴がいたら助けたいんだ。

それが、自分の主人なら尚のこと。

それを問うのは野暮な事だっただろうか。

「貴子さんは……」

「なんだ？」

「貴子さんはこの屋敷に来たばかりのお客様です！この屋敷の厄介事
に手を貸してもらおう義理も道理ありません！」

妖夢は初めて声を荒げ、怒りや疲労の混ざったような声で言った。

それは、妖夢の本音だろうか。

でも、私だって食い下がれない。

「……体を震わして怯えていた奴に、ありがとうと言われて何もしな

「奴がいてたまるか！」

「貴子さんに何ができるんですか！私と幽々子様が何年も何十年も苦しんできたのに！パツと出てきた貴子さんに！」

「そんなの……私だって分かってるさ。」

「自分が、あのアザの一割すら消すことの叶わないゴミだっことは。」

「それでも……それでもやらなきゃいけない事があるんだ！」

「ああそうだ！私には何もできない！自分の非力さを恨みながら何もせずに諦めるなんていう簡単な事すらできないんだ！」

「私の叫びがこだまして帰ってくる。」

「妖夢も、私も息は絶え絶えでもはや言葉にすらできない思いをぶつけ合うだけだった。」

「何もできないから、何もしないなんて事はできない。」

「その思いが伝わったのか、深呼吸して酸素が頭に回ったのか、妖夢は少し落ち着きを取り戻してきた。」

「それでも私には、貴子さんに教える事はできません」

「……どうしてだ」

「無意味だからです」

「なんだと!?!」

「勘違いしないでください。私が言いたいのは教えても身につかないと言う意味ではなく、効率が悪いという話です」

「効率?」

「そりや確かに私は物覚えも悪いけどさ。」

「効率が悪いって事はつまり無駄な事って事じゃないのか？」

「そんなモノログなど聞こえるわけもなく妖夢は続けた。」

「貴子さんは、以前武術の達人に教えを受けていた事がありますね?」
「……ああ。以前の職場でな」

「例の女タラシ赤髪門番の元で主に気の操り方は教えてもらっていたが……それが何か問題なのか?」

「見たのか?あの嫌がらせ水晶で」

「いえ、見なくてもわかります。素人にしては気の流れが整いすぎて

いるからです」

「それがどうしてダメなんだ？」

「私のように剣を使う者は、その間合いの性質上気を扱ってはいけません。太刀筋を見切られてしまうんです。拳と拳なら大丈夫ですが、剣を使うなら別なんです」

剣と剣の間合い……。

しかし、気を扱わないと言う妖夢にはある違和感があった。

「……妖夢の気も乱れてはいないが？」

「納め方が違うんです」

「はあ」

「貴子さんのように、自分から発せられる気を制御するのではなく、周りの気の流れに自分を委ねることで気を整えます。そして、これの習得には途方もない時間がかかるんです」

「だから、今から教えるのは効率が悪い……と」

「ええ……御力添えになれずすみません」

「いや、いいさ。なら別の事を教えてもらうだけだ」

そうだ。

何も剣の振り方を教えて欲しかったわけじゃない。

私にできる事……少なからずあったはずだ。

「だから私に教えられる事は……」

「妖夢が修行に専念できるよう、私がこの屋敷の家事を請け負う」

この巨大な屋敷の家守を全て妖夢が担当しては、修行もイマイチ身が入らないだろう。

実際、妖夢は合間合間を縫ってでしか刀を触れていなかった。

「そんな、大変な事任せられません」

「大丈夫さ。でも教えてもらわなきゃできない事も多いだろう。だから……」

「だから？」

「飯の炊き方から教えてくれ……」

「ええ!？」

「あと火の起こし方も……」

「それも知らないんですか!？」

大口を叩いた私の予想外の低レベルさに、周囲と調和していた妖夢の気が少しだけ乱れたのであった。

そして後日に話は変わる。

「ですから、米を炊いているときは蓋を取るなど何度言ったらわかるんですか!？」

「すみません……」

屋敷の向かって右殿、調理場にて。

燻る白米の煙、響く怒鳴り声。

明る日、私は例の炊事洗濯ご飯炊きのやり方を教わっているところだった。

……のだが、これがどうにもこうにもややこしく、修行に専念させると豪語したくせして一日中つきつきりであーだこーだと怒鳴られている始末だ。

今も米の炊け具合を確認しようと釜の蓋を取ってしまい、妖夢をカンカンに怒らしているところだ。

曰く、蓋を取ってしまうと風味が全て消え去ってしまうんだとか。

赤子泣いても蓋取るなどは、そう言う意味らしい。

風味って奴が何者かすらわからない私には難解な話だが、これ以上怒らすと米とは別の者の頭まで炊いてしまいそうなのでさもわかったような顔をしておく。

なのに妖夢はさらに怒りを加速させていくのだ。

まな板の上に乗っかっていた野菜を見て妖夢は怒鳴る。

「野菜も切り方が雑すぎです……これじゃ味が中まで沁みません!」

米に野菜まで乗っかってしまった。

一生懸命にはやっているのだが、これでは一汁三菜全部怒られているのではないかと疑ってしまう。

全ては私が望んだ事なのだが、早くも泣きそうだ。

いやマジで。

「修行に行きたくてもこれじゃあ無理ですよ!早く覚えてください

！」

うつ、痛いところを突かれた。

たしかに、幽々子があんな風に縋ってくるせいで……それに加えて
ありがとうなんて言われたせいで少し感覚がおかしくなっていたの
は否めない。

飯炊は任せておけなんてセリフ、3年前なら絶対に言わなかった。
とはいえ言ってしまった以上、野菜の切り方でも何でも私が覚える
しかないのだ。

「もう一度だけやらせてくれ」

「……ちゃんとやってくださいね？」

「任せろ」

ええつと、確かこの場合の切り方は……あ、指切った。

「ちよつ、指！野菜に血がかかってますつて！早く水で濯いで！」

ああ、家を守るつてこんな大変なんだな。

育ててくれてありがとうよお母はん。

いつのまにか顔も名前も忘れてしまったけど。

ただ、母さんからもらった血はいま赤々と指先から噴射されてま
す。

……いてえ！

「……失礼ですけど貴子さん、おいくつでしたっけ？」

「歳を聞くんなんて本当に失礼な」

「そういう反応をする人は大抵おばさ……」

「言うな。言わないでくれ」

指の治療をしながら、心に指よりも痛い傷をつけられる。

そしてそこに塩を塗られる。

「……確か、結婚はなさつてませんでしたよね？」

「不思議な事にな」

「ご飯とかどうしてたんですか？」

「そりゃあ……なあ？」

「なあ？と言われましても……」

「夜中に隣の家に忍びこんで……飯の残りをいただきますするんだ

よ」

「……絶句」

「そんな口に出して言わなくても」

大きめのため息をわざとらしく声に出しているという妖夢。

「はあ……料理のさしすせそってわかりますか？」

「さすがに、しらないと思われるなんて、すごく、心外な、気分です……
だろ？」

「それは貴子さんの今の気持ちのさしすせそ……ていうかそれじゃ、
さしすしきじやないですか」

「冗談冗談。さとう、しょうゆ……す、す、」

「知らないんじゃないですか。しかも、しは塩です」

「さすがです」

「当然ですよ」

「知らなかった」

「覚えておいてください」

「すごい」

「……出来る女のさしすせそ言ってます？」

「センスある」

「やっぱり！真面目にやっってください！怒りますよ！」

「そうなんだ」

「……」

妖夢は何も言わずにチャキンと刀の刃を光らせる。

そして今私の脳裏に浮かんだのは、バラバラに切られている自分
だった。

確かあの切り方は確か賽の目切りだ。

物理的に習うより慣れるさされるのは嫌なので真剣にやろう。

刃物を持った女には逆らわない。

これがかしこいやり方だ。

「さあせん」

「死にたいんですか？」

「すごい嫌です」

「専念してください。料理に」

「そうします」

さらっとさしすせそで会話ができている事に少しだけ感動を覚えながら、作業を再開する。

サ行だけに。

「夜ご飯は任してくれ」

「大丈夫ですか？任せられなさすぎるんですけど」

「うまい飯をつくる」

「信憑性が皆無です」

「ムール貝」

「……貴子さん、私の名前であいうえお作文するのやめてもらえませんか？」

腹立たしげな妖夢。

誇らしげな私。

「よく気づいたな」

「違和感ありまくりじゃないですか」

「恨みをこめたんだけど」

「何で恨まれるんですか」

「むつつりスケベ」

「……またやってますよね。というか、むの部分もつと頑張ってくださいよ」

「あ、野菜焦げてる」

「だから！真面目にやってください！」

私が一端の生活力を養うのには気の流れがどうたらよりも遥かに途方もない時間がかかるかもしれない。

いや、かかるな。

主な原因は……『こん』なにも、『箔』が付いていないから。魂魄だけに。

「……なんか、今無性にイラツとしたんですけど」

「気のせいだろう」

「なんとなく貴子さんのせいな気がしますけど、まあ良いでしょう」

「感謝感謝」

「……私は庭に戻りますから、ご飯よろしく頼みますね」

そんなこんなで、私は妖夢から水回りの管理と言う重要な任務を託されたのであった。

無理矢理託させたんだろと言われても、反論はしない。

そしてそこからは特に語るべき事もない、平和で退屈な日々を過ごしただけであった。

今の今まで、特段何事もなかったはずなんだ。

最近ちよつと暖かいなあなんて他愛もないことを思いながらのんびりと死後を謳歌していただけだったのに。

だのに……何故こんな事になったんだっただけか？

「そして今に至る……か」

私の長い過去回想は以上を持って終わる。

白玉楼の庭にて、妖夢は己に向けられた夥しい量のナイフをたった一本の刀で捌き切っていた。

「……なんか果てしなく久しぶりに喋った気がするわ」

「いい加減近づいてきたらどうだ!?!このままじゃ拉致が開かないのはお互い様だぞ！」

「そうやって、自分の土俵に持ち込もうたつていかないわ」

啖呵を切る妖夢に相對するのは咲夜。

指の間にナイフを挟み、四方八方から飛んでくるナイフで妖夢を翻弄する。

だが、決め手にかけるのも否めず、二人はただ消耗していくだけであった。

「そんなヤワなモノじゃ、1000年やっただって私の首筋にすら届かないぞ」

「そうね、じゃあその台詞は1000年後にまた聞かろ」

またしても弾幕を展開する咲夜。

脱力し、刀を構える妖夢。

1秒後、金属のぶつかり合う音が響く。

終わりの見えない戦いがまたしても始まった。

「……しかし、拉致が開かないのも本当ね」

弾幕を展開しながら咲夜は考える。

距離を保ちつつ、妖夢にナイフを刺す方法を。

「量ではダメね。全て同時に投げたのも捌かれた」

宙を舞いながら、無意味と分かっている攻撃を続ける。

「消耗させようなんてのは時間がかかりすぎる。力みがゼロな所は流

石は達人と言った所ね」

初めから数えてもう何百本めになろうかというナイフを投げた後、

咲夜は動きを止めた。

「……やめたわ。やっぱり近づかないとどうしようもないわね」

そう言ったかと思えば一気に妖夢に近づくと咲夜。

そして喉元めがけて素早くナイフを突き出す。

軽くないなされると、二歩分距離をとりながら構える。

左手にナイフを持ち後ろ足に重心をかける構えは美鈴から叩き込

まれた物だ。

咲夜は左利きで、その構えは右足を前に出す。

「私、結構近接も得意なのよ？どっかの馬鹿門番のお陰で」

「何をペラペラと！」

「せっかく刀が2本あるのに、片方しか使わないのは何故？」

開けた二歩分の間合いを詰めながら咲夜に斬りかかる妖夢。

受ける咲夜は、妖夢の太刀筋を華麗にいなしていた。

しかし、無論妖夢に隙はなく反撃指す暇すらない。

「敵に語る理由など無い」

「そう。ならいいわ」

妖夢が横に刀を薙ぎ払う。

咲夜はそれを鼻先数センチで避けた。

そして右足の蹴りを出す。

避けきれず、顔にめり込む。

一撃必殺の妖夢に対して、堅実に返し技をつけていく咲夜。

両者の戦い方は対極的な物となっていく。

「そんな攻撃少しも痛く無い！」

「優れた武器は痛みすら与えないものよ」

「……な！」

驚く妖夢の右耳からたらりと血が落ちてくる。

血は地面に落ちて弾けた。

しかしそんなもの一瞥もせず、妖夢は返す。

「たしかに優れた武器は痛みすらない。その右足に痛みがないようにな」

「……やるわね」

咲夜は自身の着ている服の右足の太ももあたりが赤く染まっている事に気づいた。

「返していたのね。気づかなかったわ」

「この刀の切れ味は、死んだ事にすら気づけない」

「そうね。死なないよう能力を使わせて貰うわ」

咲夜が指を鳴らす。

止まった時の中で咲夜の右拳が鋭く妖夢の顔面目掛けて飛んだ。

しかし、その瞬間であった。

妖夢の刀が咲夜の鼻先をかすめる。

思わぬ反撃に少し大きめの距離を取る。

「……動いた？」

妖夢はピクリとも動かない。

桜花びらが宙で止まっている故に、時を止め損ねたわけではない。

ただ、妖夢の刀は振り下ろされていた。

「……そろそろね」

時が動き出す。

「……止まった時の中を動けるのかしら？」

「白刃を持つものは世界が止まるほどに緊張感を持ち、そこに神速の居合がある」

「……貴子に日本語教えて貰えばよかったかしら？」

咲夜が新たな攻撃を仕掛けようとする、妖夢はあろうことか刀を鞘に収め、居合の構えをとった。

鞘に手をかけ、目を瞑る。

吐息の音すら聞こえぬほど研磨された構えだ。

「時を止めたければ止めれば良い」

「ならお言葉に甘えるわ」

三度の時間停止。

舞っていた土埃が静止する。

一歩ずつゆつくりと、ゆつくりと妖夢の方へ歩んでいく咲夜。

その一瞬、妖夢の刀が鞘から抜かれた。

咲夜の目には、その動きを捉える事は叶わなかった。

「見事ね。一瞬だけとはいえ、止まった時の世界へ入門してくるなんて」

時が動き始める。

「惜しかったわね」

「っな!？」

「後ろ、気をつけた方が良いわよ」

「なにをつっ！」

妖夢の背中に、深く深く銀の彗星がめり込む。

「っうぐー！」

「ナイフ、飛んできてるから」

そのナイフは背中越しに体の中心を貫き、妖夢はパタリと地面に伏した。

それを見て、その場をさろうとする咲夜。

……だが。

「……つまさかー！」

咲夜の足が動かない。

右だけではなく、左も切られていたのだ。

一筋では無い。

何重にも切り傷がある。

歩く事はおろか立つこともできずに、咲夜は地面に倒れ込んだ。

「あの一瞬で……避けることを見越して、正面に刀は振らないと思っただけけれど……読み違えたわ」

「私の……ぐ……間合いに……切れぬものなど……あんまりない！」
「まだ喋れるのね……恐ろしい。あらかじめ……遠くからナイフを投
げておいて正解だったわね」

庭師対従者 勝者 咲夜（相打ち）

場面は変わって幽々子と魔理沙。

「……妖夢、お疲れ様」

「よそ見してる暇なんてないぜ」

魔理沙が箒に跨って突っ込む体制に入った。

さつきから繰り返している動きだ。

しかし……

「っ消えた!？」

「おやすみなさい」

魔理沙の背中に現れた幽々子。

そして、扇子でコツンとうなじをたたく。

触れるか触れないかほどの威力であったにもかかわらず、魔理沙は
だらりと項垂れる。

「さて……次ね」

魔理沙は、もはや生きていなかった。

あまりにもあっけない幕引き。

博麗霊夢がそれを黙って見ているはずなかった。

「待ちなさい」

「貴方……なかなか春人間ねえ」

「アンタは私がブチのめす」

霊夢の右拳が幽々子をかする。

避け切れず掠ったのではない。

スレスレで避けて霊夢を挑発しているのだ。

「この長い冬はあんたのせいね」

「決めつけるのはよくないわ」

「間違ってたらそんときよ」

霊夢が祝詞を詠み、それに呼応して弾幕が展開される。

それに幽々子が例の如く黒い蝶で相對しようとした時であった。

「……っ?」

最初に異常に気づいたのは、霊夢であった。
超人的な勘で身の危険を察知したのであろうか。

「なんの音?」

どこかから鳴り響く悲鳴のような音に、霊夢は何か鳥肌が立ってしまつた。

地面が揺れる。

そして、それが正しく悲鳴であつたことに霊夢は気づいた。

「後ろよ!」

幽々子が叫んでいる。

霊夢が振り返ると、目の前を埋め尽くすほどの……黒い蛾が飛んでいた。

「な!」

「危ないわ!」

膠着した霊夢を幽々子が突き飛ばす。

その瞬間に、霊夢がいた場所、そして幽々子が今いる場所へと大量の蛾が飛んできた。

百万匹の死そのものが、幽々子の体にまとわりつく。

「きやああああああ!!!」

「つアンタ、何してんのよ!」

霊夢が叫ぶ。

それもそのはず。

幽々子は、霊夢を突き飛ばし、あろうことかあの量の蛾を全て一身に受け止めてしまつたのだ。

「なにが起こっているの……あれは、桜?」

霊夢は、自身の背後で蠢く殺意の塊のような者に戦慄する。

それもそのはず、今さつきまで枯れていた西行妖が、唐突に花開いていきその幹から大量の蝶が放たれたのだ。

少しでも触れれば……語るも恐ろしい物が。

「アンタら……あんなの咲かせようとしたの!?馬鹿じゃない!」

霊夢はもはや耳すら聞こえないであろう幽々子に向かって叫んで

しまう。

それが無駄と分かっていても。

「あの桜……枯らせるわよ。文句はないわね」

苦しそうな顔で悶える幽々子と、横で倒れていた魔理沙を屋敷の縁側に寝かせる。

幽々子は、顔にまで例のアザが広がっていた。

そのアザはどんどんと色を増していき、そのたびに幽々子が呻き声をあげる。

「……馬鹿」

お札と針を握りしめて、霊夢は西行妖の元へと飛んでいった。

しかしその瞬間……地面から扇子一本ほど飛び立った瞬間に西行妖は縦に真つ二つに、切れた。

正に一刀両断されてしまったのだ。

「っなー」

とんでもない音を立てながら倒れていく西行妖。

花びらは散つていき、周囲を飛んでいた黒い蝶たちも消えていく。

「もう……何がどうなってるのよー」

その霊夢の叫びをかき消すように、屋敷の正門からカツン、カツンと石畳を下駄で蹴る音が響いた。

ひらひらと桜が舞い散る。

「まったく……なにをしとるんだか」

そこには白髪を纏め、刀を下げた壮年の男がいた。

幽々子がうつすらと目を覚ます。

「んー、妖……忌？」

「幽々子様、喋らんでください」

「遅いわよ……まったく」

縁側で苦しみながら、今にも消えそうな幽々子の元に妖忌は歩み寄った。

そして、幽々子の首筋に指を当てる。

「……馬鹿なことをしなすった」

「若気のいたりよ」

「もう若くもないでしょう。まったく、つくづく手が焼ける」
「感謝してるわ」

西行妖がぶった切られたかと思えば急に現れ、冷たい汗をかいている異変の元凶と親しく喋っている男に、警戒心を向ける霊夢。

「アンタ誰よ」

「とある酒屋のジジイじゃよ」

「……あつそ」

目の前の爺さんが真面目に答えないことと、今はそれどころではないことを理解し霊夢は黙る。

霊夢には今、一番何をすべきなのかを理解できる賢さがあるのだ。

「やて……」

幽々子の首筋から指を離して、妖忌は顎髭を撫でながら考える。

「困りましたなあ」

「大……丈夫よ」

「と言いますと?」

「この前……すごいのが……きたわ」

「ほほう……そのようすな」

「屋敷の……中にいるわ。好きに……使って」

幽々子が言い終えるよりも先に、妖忌は立ち上がった。

かと思えば瞬き一つする間に帰ってきた。

気絶した貴子を担いで。

「此奴……生命力の塊じゃな。こいつなら問題あるまい」

妖忌は、持っていた刀で幽々子の空を何度か切る。

そして、貴子の空を何度か切り、両手でそれぞれ貴子の首と幽々子の首に手を添えた。

目を瞑りながら、少しづつ息が安らかになっていく幽々子。

その体から、すつとアザが消えていく。

「……これで、ひとまずは大丈夫でしょう」

「……ふう」

「しばらくは養生し、件の始末をつけること。遠からずまた来ます」
「ゆつくりしてかないの?」

「今度の説教ん時で十分です」

「……妖夢が会いたがっていたわよ」

「儂にあつたつて為になりません」

「……頑固物」

「お嬢様！」

妖忌の迫力に押されたか、体の痛みが響いたか、幽々子は部屋へと戻っていった。

「お嬢ちゃんも、今日のところは見逃してやってくれねえか」

「できないわ。顕界に桜が咲くまでわね」

「なら帰りな。見てくればわかる」

「……またくるわ」

「金髪と銀髪、忘れちゃいかんぞ」

「どっちも他人よ」

そして……残されたのは、妖忌と幽々子だけだあつた。

春来

異変が、幕を閉じた。

数日後、白玉楼の厨房で貴子は、自身が作った味噌汁の味見をしていた。

「……うん。まあまあ美味しい」

鰹出汁に野菜や味噌を加えるだけの簡単なレシピだが、料理のいろはも知らない貴子にしてはかなり背伸びしたメニューだった。

それがなかなか上手にできたので、つつい頬が綻ぶ。

「あら、このお味噌汁なかなか美味ですわね」

「そうだろう。得意メニューなんだ」

「けれど少し野菜が大きいのではなくて？」

「幽々子はこんぐらいが好きなんだよ……って」

「初めまして」

「ぎゃあああ！」

厨房には誰もいなかったはずなのに、突然目の前に謎の女が現れた。

不意をつかれ、驚きのあまり飛び退いてしまう。

その勢いで背中が机にぶつかり、せつかく片付いていた台所が散らかってしまった。

「誰だ！」

最大限の頑張りで威勢を張るが膝が笑ってしまう。

その醜態を見て、目の前にいる不審者が不敵ににやけた。

「幻想郷の管理人よ……人ではないのだけれどね」

「誰だ！」

「八雲紫と言う者よ。聞き及んでないかしら？」

「誰だ！」

「……幽々子の友人よ」

「誰だ！」

「いい加減にしてくださいさる？」

紫とやらが私を少し睨むと周囲の空間に謎の……スキマのような

物が現れた。

やたらめつたら人の目みたいな物が浮いていて、人見知りで目を合わせられない私からすると結構嫌な代物だ。

若干キレられたので真面目にしよう。

「幽々子の友達？」

「ええ……とは言っても用があるのは貴方よ」

「え？」

「冬が開けたと思ったたら何やら騒がしくて……聞けば貴方、大変な事をしてくださったのね」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてない……と言いたい所だけれど、そうね。これは賞賛よ。もしくは感謝と言った類の物」

……なんか、回りくどい喋り方をするなあ。

幽々子の面影を感じるあたり、二人は良い友人なのだろう。

「で、何の用だ」

「説明しても、理解に苦しむと思うわ」

カツチーン。

馬鹿にしたな。今完全に。

「理解に苦しむような用事を持ってこないで欲しい」

「そうね。善処するわ」

「まあ聞いただけ聞かせてくれ」

「幽々子を助けてくれて、ありがとう」

「……は？」

幽々子を助けてくれて……？

何を言い出すんだ？

私、何にもしてないんですけど。

急に目の前が真っ暗になったと思ったら、木は折れてるわ幽々子は全身ボロボロだわ妖夢は傷だらけだわで今だってまだ困惑しているのに。

今私のご飯の支度をしてるのも、妖夢が負傷で動けない体だからだ。

ほぼ無関係なのに、急にありがどうなんて言われても困惑してしま
う。

「どういうことだ？」

「そう言っつて意図を聞きたかったのだが、

「……………いない」

紫と名乗る女は音もなくどこかへ消えていた。

……………と思つたら、紫は客間に腰を下ろして幽々子と和氣藹々とした
雰囲気でお喋りをしていた。

自分の用事だけ済ましてとんずらか。

調子の崩れる奴だ。

ま、幽々子の友達なんだからそう言う物なんだろうな。

変に肩肘張る方がかえつて疲れると言うことは、ここ最近の私の学
びだ。

ちなみに何故か大怪我をおつていた幽々子だが、どう言うわけか私
に詳しい話を教えてくれない。

多分それは意地悪ではなく他に事情があるのだろう。

単なる嫌がらせの可能性も否めないが。

客間の近くを通りかかると、楽しそうに話す二人の声が障子越しに
聞こえた。

そこにあつたのは、上品な声と奥ゆかしい笑い声だった。

「ほんと、幽々子つたら」

「本当に大変だったのよお？」

「自業自得よ」

「紫だつて早くアザが治るといいわねなんて言つてたじゃない」

「まさかあんな風になるなんてねえ。思いもよらなかつたわ」

「西行妖があんな大量の死を隠していたなんてねえ」

「せめて私が起きている時にやってくれたらこうはならなかつたの
に」

「起きてる時の貴方を捕まえたら、藍ちゃんがかわいそうじゃない？」

「藍く？アイツの事はいいのよ。信じられる？敵にやられた挙句に子
供まで作つて」

「最近見てないと思っただらそうだったの。お祝いしなくちゃ」

「それで名前は橙とか言っちゃって。自分の式神にしようとしてるのよ」

「良いじゃないの。藍ちゃんもお年頃でしょ？」

「簡単に子供つくって。あんなのろくでなしよ」

「そうかしらねえ」

……すい。

とても気品に溢れる声でとんでもなく年寄りめいた会話をしている。

もうババ……いや、下手な事を言うとか何されるか分からないから言わないでおこう。

ババくさいとか失礼だしね。

飴ちゃんくれそうとか吐かした日には右手と左手が逆にされたりしそうだし。

というか、そう言う事が言いたくて盗み聞きをしてるんじゃない。異変で、何が起きていたかを知るチャンスなんだ。

そうして障子越しに幽々子と紫の（ババくさい）会話は続く。

「とにかく、無事で良かったわね」

「……無事かしら？」

「最悪の事態を考えれば十分無事よ。幸運とも言えるわ」

「そうねえ。体からあのアザは消えたのは嬉しいけど……」

「妖忌にさんざん怒鳴られちゃったらしいわね。藍から聞いたわ」

「本当、久しぶりに受けたわ。妖忌の説教」

「いい薬ね」

「けど信じられる？妖忌ったら、妖夢に一声もかけずに帰っていったのよ」

「あら。どうして？」

「会えば妖夢の為になりませぬ故……とか言ってる」

「相変わらず頑固なのねえ」

「しかも聞いたら、貴子のことも知ってたのよ」

「あら、あの二人が？どこで知り合うのかしら」

「それがねえ、居酒屋だそうよ」

「……剣士たるもの酒を絶つてしかるべし、なんて昔説教こいてたのは誰かしらねえ」

「ほんと、信じられないわ」

……誰の話をしているんだ？

二人の会話に出てきた、妖忌なんて言う頑固ジジイは、私の知り合いいにはいないぞ？

……いや昔、どっかの居酒屋で相席したのなら別だけど、そんなの知り合いに含まれないだろう。

話を聞いている限りは、妖夢のお師匠様だと思うが。

名前からして親族だろうか。

それにしても、本当に熟れた会話をしている。

幽々子と紫の会話の内容は、声や抑揚が良いからさも貴婦人達がハーブティーを嗜みながらするような上品な会話に聞こえるが、内容だけを掻い摘んだらこう言う会話になる。

「ほんま幽々子お」

「ごつつ大変やってんで？」

「自業自得やないか」

「アンタかてはよアザ治つたらええなあゆうとつたやないか」

「まさかあんななるとはおもてへんかったわ」

「西行妖があんなぎようさん死いもつとつた思わんわ」

「せめてアタシが起きてる時にやってくれたらこうはならんかってんで？」

「起きてる時にアンタ取つたら藍ちゃん可哀想やんか」

「藍く？あのボケはええねんて。信じられへん。喧嘩負けたおもたら

赤ちゃんできとんねん」

「ええ！最近見いひんなあ思たらそやつたん」

「ほんで名前は橙ですうゆうて。ほんまにあのアホだけは」

「ええやんか。年頃やねんて。藍ちゃんも」

「簡単に子供作って。あんなろくでなしやで」

「そうかいな」

「とにかく無事でよかったやんか」

「無事ちやうわ」

「アンタ下手したら死んどったで？十分儲けもんや」

「せやけど。あのアザ無くなっただんはありがたいわあ」

「ほんで妖忌にガツツウいかれたんやろ？」

「ほんま久しぶりに聞いたわ。妖忌の説教」

「ええ薬やな」

「せやけど妖夢に声もかけんと帰りよってんで？」

「なんでや」

「妖夢の為なりません言うて」

「頑固やなあ相変わらず」

「ほいで聞いてみたら貴子も知ってますういうて」

「どこで知り合うねんちゆう話やな」

「それが居酒屋やって」

「酒飲むな言うてたんどこの誰やねんちゆう話やな」

「ほんまあのジジイ」

とまあこんな感じだろう。

……一氣に場末の居酒屋みたいな世界観へと変わってしまった。

まあ、特に聞いてて私に得な事は期待できないし、盗み聞きはやめてやるべき事をすまそう。

今私がやるべき事は、寝たきりの妖夢に雑炊を届けてやることだ。

冷めてしまったらいけないので私は少し急ぎめで妖夢の部屋へと向かった。

「……貴子が行ったわね」

「聞かれても困らないわよ？」

「呑気ね。言っとくけど聞きたい事は山ほどあるの」

「わかってるわ。異変の事については長くなるわよ」

「ええ。ゆっくり聴かせて頂戴な」

雑炊を持って、私は妖夢の部屋の前へと行った。

妖夢曰く、大した怪我じゃないしいくらでも動けるそうだが、背中

にまっすぐ切れ込みが入っているような人に働かれては気分が悪い。
そう言うわけで無理やり寝かしつけていると言うわけだ。

「妖夢。雑炊だ」

そう言いながら部屋の戸を開けると、そこには妖夢に加えてもう一人9本の尻尾を生やした、狐らしき者がいた。

妖夢の枕元で正座している狐の妖怪は、私の方を一瞥すると目線だけをこつちに向けたまま話しかけてきた。

「貴方が貴子さんか」

なんでどいつもコイツも私の名前を知ってるんだ？

結構有名人なのか？私は。

「……アンタは？」

「私は八雲紫の式神、八雲藍という者だ」

……藍？

なんか聞いたことある名前だな。

それにどこかで見えたことあるような。

確か紅魔館にいた頃に。

いつだったっけか？

「すまないが、どこかでお会いしたことがあったか？」

「えっ!?……こほん。お会いしたことは無いはずだが」

「そうか……気のせいかな」

本当に気のせいかな？

結構ハッキリとした見覚えがあるんだが……。

しかも結構衝撃的な……あ！

「まさか！あの時裸で寝ていた！」

「えー」

思い出した！

紅霧異変の時に、美鈴の後ろですっ裸で寝ていた奴だ！

「アンタ！あの時の！」

「貴子殿！」

「な、なんだなんだ」

焦った様子で部屋から連れ出される私。

耳元に手を当ててヒソヒソと囁かれる。
撫でるような息遣いがこしょばい。

「あの件は……妖夢には御内密に願いたい……」
「どうしてだ？」

「恥を忍んで言うなら、古き友人との約束の為だ」
「はあ」

「とにかく……雑炊は私が渡しておくから、持ち場に戻ってくれ」
「……わかりました」

雑炊を渡すと、藍はすぐさま妖夢の寝ている部屋へと戻っていった。

……気になる。

ついでに盗み聞きしてやろう。

特に恨みもつらみもないが。

「妖夢。雑炊をお食べ。食べさせてやるから」

「子供扱いしないでください。自分で食べられます」

「子供扱いでは無い。怪我人扱いだ」

「同じ事ですよ。怪我人でもありません」

「強がるな。歩きたびに顔が歪むのを隠せていないぞ」

「……靴擦れです」

「裸足だろう。大丈夫だ。遠慮はいらん」

「剣士たるもの、他人に助けは求めません」

「背中の傷は剣士の恥じゃないのか？」

「これは……不意打ちで」

「それを含めて見切れなかった妖夢の落ち度だ」

「それは……」

「ほら、こっちにおいで」

「そんな、体裁の悪い……」

「昔からやっていただろう」

「昔って……何百年前の話でしょう」

「面倒を見させてくれ。妖夢についた傷は私の傷でもあるんだぞ？」

「それは、おじい……師匠との約束でしょう？」

「それもあるな。妖夢の事は私が任された」

「私は頼んでません」

「でも私は頼まれた」

「そんな勝手な……」

「いいからいいから」

「あ！ちよつと尻尾は！卑怯ですよ！」

「ほら妖夢。あーん」

「もう……」

……なるほどなあ。

子供の頃から知ってる妖夢の前でいい格好をしただけだったか。

そりゃ裸で寝ていたなんていう痴態をバラされたくはないだろう。

なんだかそこに水を差すのも野暮つたいし、邪魔にならないうちに消えろとするか。

……別にどこにも居場所がなくて寂しいとかじゃ無いし！

幽々子は紫に、妖夢は藍にとられてしまい、話し相手のいない私は手持ち無沙汰となってしまった。

別に寂しいわけでは無いが、一人になったら色々と考えこんでしまう。

そうやって暗い気分になるのは嫌だったが、私に出来る事といえば宛もなくぶらぶらと屋敷の中を彷徨うことだけであった。

そういうわけで私は今、用もなく縁側を歩いている。

すると、一匹の黒猫が私の目の前を横切った。

……不吉だ。

いや、既に十分酷い目にあっているか。

後から告げるタイプの不吉だろうか。

……というか、よく考えてみればこの屋敷の敷地に野良猫など入って来れるわけがない。

おおかた、屋敷で飼ってる猫か紫のツレだろう。

トボトボと歩くその姿を見て、なんだか私と同じ境遇な気がした。膝を曲げてチヨイチヨイと呼びかける。

「おーよしよし。お前も一人か」

「……アンタ、貴子？」

「な！」

目の前を横切った一匹の黒猫は一人の少女へと姿を変え、あろうことか私に話しかけてきた。

もう初対面のやつに名前を知られていることには驚かなくなってしまう。

が、目の前で少女に変身したことはすこし面食らってしまう。

……恥ずかしい。

どうせ八雲一派の一人だろう。

「ああ、貴子だ。君は？」

「私はねー、橙っていうんだー」

「橙？」

さつき幽々子達が話していた奴か。

藍のせがれとか言う。

「そうそう。藍様の式神なんだ」

「ああ、そういう感じね」

ゆつくりと縁側に腰掛け、タバコを啜える。

もうこの猫に話でも聴かせてもらおうか。

とどのつまりは、暇なのだ。

「藍様が、アンタにはあまり近づくなかって言ってた」

「は？」

「教育に悪い！って」

「あいつ……」

言わせておけば。

自分こそ裸でオジャンパーのくせして。

「貴子は教育に悪いの？」

「そうだな。ノンタンぐらい教育に悪い」

「ノンタン？なにそれ？」

「げんきげんきな奴だ」

「そっかー」

今時の子はノンタンが通じないのか……。

ジエネレーションギャップだな。

いや、その言葉も通じないのか。

古い言葉ばかり使ってたら死語を慎めって怒られちゃうな。

「何してたんだ？そこで」

「ネズミ殺してた」

「へえ。そりやえらく躰の行き届いたことで」

「藍様も紫様もいなくて暇ー」

「そうか、良かったな。ここに貴子様はいる」

「教育に悪いのに？」

「藍様は教育にいいのか？」

「うーん……わかんない」

「私に言わせればあればクレヨンしんちゃんだな」

「どういう事？」

「教育にすこぶる悪い」

「そーなんだ。藍様は教育に悪い！」

「そーそー」

良かったな藍様。

ずいぶん教育の行き届いてるじゃないか。

私が教育を手伝ってやろう。

いろいろ、とな。

「それで、貴子は教育に良いの？」

「なんでも聞いてみな。そうすればわかるさ」

「じゃあねー、電気シナプスと化学シナプスの性質の違いと両者の発

生について教えてー」

「そりや……スタンブビューだな」

私の目に筆筒と屏風が映っていたのは言うまでもない。

今時の子どころか、今時のオヤジにも伝わらない落語の知識だな。

わからない人はおじいちゃんに、たらちねという落語について聞いて

てみよう。

「貴子は教育に悪いんだ」

「そうかもな」

「幽々子様を苦しめたって藍様が言ってたもん」

「ええ？」

「純粋な眼で私を見つめてくる橙。」

「私が幽々子を苦しめた？」

「苦しめられた記憶はあるが……。」

「私、何かしたか？」

「貴子が花札で幽々子様に意地悪したんだ！って藍様が」

「それは……」

「否定できない……いや、できるぞ。」

「イカサマをしたのはお互いサマだし、そもそも意地悪できるほど事態を飲み込めてなかった。」

「裸にされたのは私だし。」

「服を脱がされた繋がりで少しは擁護してくれても良かったんじゃないのか？ 藍様よ。」

「意地悪なんかして無いさ。されはしたけど」

「あと、幽々子様を助けたのは貴子だって紫様が言ってた」

「……そうだな」

「本当なの？」

「もちろん」

「もちろん知らない。」

「なんか冥界の時を進めただのなんだの言われて、ありがとうとは言われたが、私からすれば幽々子様を助けた記憶なんて毛頭無い。」

「というかそもそもここに來てから、やたら多い飯を食わされたくらいしか記憶自体がない。」

「なーんか、怪しいなあ」

「そもそも、異変についてどこまで知ってるんだ？」

「えーっとね、始まりは貴子と幽々子様が花札をした事から……」

「騒がしい冥界と同じくらい、その下の顕界も騒がしかった。」

「異変と呼ばれるほどに長かった冬が急転直下で幕を閉じ、春告精が」

イキイキと空を飛んでいる。

人々は環境の変化に困惑しつつも、待ち侘びた春の到来にそれはそれは大いに喜び、歌い、呑み、騒ぎ、人里は連日連夜大賑わいであった。

そこから少し離れた博麗神社では、人里の喧騒とは対照的に霊夢が一人ちびちび桜を見ながら酒を飲んでいた。

花見で一杯だ。

「……これにて一件落着つてとこね」

冬のこたつでチビチビやる熱燗も旨いが、やっぱり……

「花見しながら呑むのが、一番ね」

そう言つて勢いよく杯を干し、深々と酒臭い息を吐いた。

春の到来によつて花が芽吹きはじめた魔法の森。

そこでは二人の少女による会話……もとい喧嘩が繰り広げられていた。

「だーかーらー！家に来んなつて言つてるだろ！」

「あんなに卑怯な手で私に勝つたと思われるのは心外だわ」

「お前の魔法だつたらうが！」

声を荒げて凄む魔理沙に、アリスは静かに嫌味をぶつけた。

アリスは毎日のように魔理沙のところにやってきては、クドクドとやっかみをつけるのだった。

今日も家に来ていつものように嫌味を言ってくるその迷惑っぷりに魔理沙は心底怒った。

「ともかく、私は今忙しいんだ！」

「何が忙しいの？忙しいって言う字は心を亡くすと書くのよ？」

「だからなんだよ」

「忙しくは見えないって事よ」

「少なくとも、お前に構つてる暇はないぜ」

「必殺技の開発は大変ねえ」

「……なぜそれを知ってるんだ？」

「この付近、魔力で充満してるわよ。貴方の物でしょう？」

「……やな奴」

「照れるわ」

「とにかく、毎日毎日迷惑だ！早く帰れ！」

「せつかくクッキーも焼いてきたのよ？」

「そんなもんいらんないぜ！」

「……紅茶に合うわよ？」

「一人でやってろ！」

魔理沙の方向がこだまする。

少しの沈黙を挟んで、アリスは返した。

「……ふん！なら良いわよ！」

「な！ちよつ、待てよ！」

慌ててアリスを引き止める魔理沙。

魔理沙に負けた時もそうだが、この人形使いはとにかく涙がこぼれやすいのであった。

今も大粒の涙が目尻に溜まっている。

魔理沙はバツが悪そうに頭をポリポリと搔く。

「……クッキー、食べるぜ」

「何よ、いらんないって言ったじゃない！」

「あー、気が変わった。無性に食べたい。お茶淹れるから上がってけ」

「……ふん」

すぐに泣きそうになる魔法使いに、魔理沙は困ったようなため息を吐いた。

紅魔館も例の如く騒がしかった。

咲夜の帰還、そして春の到来。

ただでさえ出来事が多いのに、静か担当のパチュリーがここ最近はずしく動き回っているのだ。

静かになどなれるわけもない。

「1652番と582395番……それと368番もお願い」

「かしこまりました」

小悪魔が本棚を駆け回る。

大図書館には、パチュリーによって巨大な魔法陣が描かれていた。半径10メートルはあろうかと言う大きさだ。

その脇でイスに座っている者が二人。

そのうちの一人、せかせかと走り回る友人を傍目に見ながら、紅茶を嗜んでいたレミリアは言った。

「また、騒がしくなるわねえ」

向かい側に座って紅茶を飲み干した美鈴が返す。

「良い事じゃ無いですか。私はその方が好みです」

「案外、この春は予言しているのかもしれないわね」

「何をですか？」

「台風……かしら？」

「はははっ言えてますねえ」

「笑い事じゃあ……いや、笑い事ね。本当に滑稽な事だわ」

「ほんと、笑いが絶えませんねえ」

ケラケラと笑う美鈴の対面で、レミリアは少し憂鬱な表情を浮かべた。

若干眉間に皺を寄せて。

「それで……私が言いたいののは咲夜の事よ」

「ああ、やっぱりですか」

「どう責任を取ってくれるのかしら」

「無事に帰ってきたじゃないですか」

「咲夜は一度死んだのよ？」

「分かっています」

「パチエがいなかったら取り返しがつかなかったわ」

「一度だけ死を肩代わりしてくれる魔法の水晶……パチュリー様の魔力にはつくづく感嘆させられます」

「話を逸らさないでちょうだい」

美鈴を少し睨むレミリア。

しかし美鈴は話を止めない。

「あれを渡しておいて正解でした。まさか咲夜さんが死ぬとは」

「お前なら分かった事だろう？どうして咲夜を行かせた」

「お嬢様こそ、運命視で見えていたんでしよう？」

「だから私は止めた」

「無論、絶対に死なないという安全性は確保してました。聡明なお嬢様ならお分かりでしょう」

「頭と心は違うんだ。たとえ絶対に死なないとしても、心配しない奴がいてたまるか。いるんだったらそんな奴大っ嫌いだ」

「……申し訳ありません」

頭を下げる美鈴。

窓の外にある墓を見つめながら、レミリアは小さく零した。

「もう誰かが死ぬのは……イヤよ」

「……すいません」

「とはいえ……生きていたんだ。お前を責めようなんてつもりは無いさ。むしろ、期待以上のものを持って帰ってきたんだから褒めたいくらいだ」

「見に余るお言葉……ですが、褒めるのはあの子にしてやってください。私は何にもしてません」

「そう言うな美鈴。今回の件、誠にご苦労だったわ」

「お褒め預かり恐悦至極……ですが、まだ終わっていません。むしろここからが……」

「そうね……最後まで頼んだわよ。美鈴」

「勿論です」

場面は白玉楼に戻る。

橙が異変の顛末を語り終えた所だ。

「それで、紫様と藍様は慌ててここにきたんだよ」

「……そんな事が、あったんだな」

異変の内容はつまりこうだ。

顛界の春を使って西行妖を咲かせ、その下に眠る人物と酒を飲み交わす。

幽々子は封印を解けば呪いも解呪されるであろうと踏んで、妖夢を街へと走らせた。

……全ては、私が花札で幽々子を倒した時から始まったのだ。
幽々子は、ずっと探していたそうだ。
勇気ある死人を。

「私は……役に立てたのだろうか」

「えー？」

「いや、橙に聞いてもしょうがないことか」

「うーん、藍様は貴子に、余計な事をつて怒ってたなあ」

「そうだよな……事実幽々子は……」

幽々子は死に目にあつたそうだ。

実際、妖忌がここにやってきていなかったら幽々子は死んでいた。
やっぱり、私のせいなのだろうか。

「でもねー？」

尖った歯を見せながら笑う橙。

「紫様は、貴子のおかげって言ってたよ？」

「……そうか」

私のせい？

私のおかげ？

私は何にもしていない……いや、幽々子を誑かしたのか？
それとも、幽々子を導いたのか？

……私が幽々子を救ったなんてのは誰が聞いたって傲慢だ。

でも、少しでも力にはなれたと信じたい。

何かをしてやれたなんて思い上がりはしない。

だけど、あのありがとうに報えたと思いたいのだ。

たとえそれが贅沢を言っているとしても。

そうでなければ私は……。

「うーん、難しいことはわかんないけどさ、幽々子様は助かったわけだし、良いんじゃないの？」

「……そうかもな」

「そうですよ」

「っアంతは！」

貴子の嘆きに、橙ではない誰かが返事をした。

聞くもの皆シャキツとさせるような凜然とした声。
そこに、笏をもった閻魔が立っていた。

「お久しぶりですね」

「映姫……お前らの時間感覚でも久しぶりか？」

「色々ありましたから」

「なぜここに来た？」

「……敬語はやめたんですね」

「いまさら畏まったって何か得があるのか？」

「私の機嫌が良くなります」

「じゃあいいや」

「そういうと思いました……別にいいですけど」

「それで、何の用だ？」

「聞きたいですか？」

「……聞きたく無いと言ったらどうするんだ」

「無理矢理聞かせます」

「映姫のそう言うところ、好きじゃ無いぜ」

「それほどでも」

褒めてない。

どうせ聞かせるつもりなら最初から言うな。

「聞きたいから、早く言ってくれ」

「まあまあ、そう慌てずに。中で話しましょう」

「ああ、茶でも淹れるよ」

「お構いなく」

客間に上がる映姫と私。

向かい合って正座し、ゆっくりと私の淹れた茶を啜る。

鹿威しの音が遠くから聞こえた。

「……ふう」

「旨いだろ？」

「良いお手前で」

「それで、何しに来たんだ」

「節操が無いですねえ」

「……悪いが、一発殴って良いか？」

「できるものなら」

「よし乗った」

すぐさま拳を振り抜く私。

その目的地は映姫の顔面だ。

しかし、その拳は映姫の鼻先一寸で結界のようなものに弾かれた。

「私に暴力は振るえませんよ」

「……お強いことで」

「さてと……何から話しましょうかね」

「いくつもあるのか？」

「色々あるって言ったじゃ無いですか」

「いや、そんな事は言っただけじゃなかったぞ」

「まずは異変の事ですかね」

「短く頼む」

「……今回の異変、私の耳にも聞き及んでます」

「流石の地獄耳だな」

「前回に引き続き、今回も貴方が引き金だったそうじゃ無いですか」

「そうなのかなあ」

「そうなんです。異変が起きると、こちらでも色々処理するのが面倒な

ので控えてもらえますか？」

「好き好んでやってると思うか？」

「嫌い厭ってやったとしてもダメですよ」

「言つとくが私はどっちも巻き込まれた側だ」

いきなり説教をかまされて少し腹がたってきた。

久しぶりに会ったと思えばこれなんだから。

私の死についての謎が解明されたのかと期待したのに。

「ねえ、貴子この人だれ？」

一緒に客間に上がった橙が聞いてくる。

藍のツレなら映姫の事ぐらいは知ってても良さそうなものだが

……。

なんて説明しようか。

「うーん……教育に一番良い人ってどこだ」

「ふーん。じゃあこの人がノンタンか」

「そう言う事」

素っ頓狂な紹介と認識をされた映姫が首を傾げる。

「ノンタン?」

「そう、ノンタン」

「私は是非曲直断罪部転生課の……」

「はいはい、長くなるから」

「……映姫と申します」

映姫が橙に向かって頭を下げる。

「こう言うところは閻魔らしくちゃんとしてるんだな。」

「映姫ね! 私橙!」

「橙さんですか。お話は聞いてますよ」

「え、私の事知ってるの?」

「ええ、なんでも九尾の妖狐と悪魔の門番が異変の最中に……」

「あーあー! 橙、外に行け! ここからは大人の話だ!」

この頑固頭は……いたいけな少女にんの話聞かせるつもりだ。

そう言うところの匙加減を知らないのか。

それとも出来ないのか。

私の思案などつゆ知らず、蚊帳の外に出された橙がごねる。

「えー、聞きたいー!」

「藍に聞いてこい。きつと喜ぶ」

「……つまんないの」

「面白いってのもほどほどが大事だからな」

「お外で遊んでこよつと」

「そうしてくれ」

橙はまた猫の姿に戻って外へと駆け出していった。

部屋に残された私は、映姫を少し睨む。

「子供に何の話をするつもりだ」

「誕生の秘話ですけど」

「……あと3世紀早い」

「何故ですか？」

「ノンタンだから」

「……は？」

意味不明と言った顔をされる。

「こつちの方が意味不明なんだがな。」

「それで、話を戻そう」

「ああ、そうでした。もう異変は起こさないでくださいね」

「私じゃないって」

「さて、本題に入りましょうか」

「ああ、まだあるのか」

「異変の事はオマケみたいな物です」

「じゃあ本丸は？」

「端的に言いますと……貴子さん」

「ん？」

「貴方、生き返るかもしれません」

「……ええ!？」

紅魔館で、パチュリーが巨大な魔法陣を描き終えた。
額に流れる汗を小悪魔が拭う。

レミリアも、その完成を見届けていた。

「……ふう。やっぱり複雑ねえ。疲れたわ」

「ご苦労」

「本当、レミイの我儘も来るとこまで来たわねえ」

「一番率先して動いていたのはパチエ、お前じゃないか」

「死者の蘇生に興味があっただけよ」

「興味つてのは万能だな。動かない大図書館を三千里も歩かせた」

「そうね。尊大な吸血鬼が頭を下げるのだから。好奇心は偉大だわ」

「それで、あとどれくらいかかりそうなの？」

「こちら側の準備はほぼ完了。後は向こう側次第よ」

「じゃあもう完成ね」

「……そうかしら」

パチュリーは本に目を通しながら魔法陣の仕上げにかかる。
レミアも、パチュリーの近くへと寄った。

「貴子を生き返らそうなんて、聞いた時は笑いそうだったわ」

「笑ってたじゃないか。喘息持ちのくせに大声で」

「それだけ滑稽って事よ」

「興味深かっただろ？」

「そうね。前例が無いのだから」

「成功の報告を待っているぞ」

「ええ。段取りはわかっているわね？」

「ああ。あの水晶によって戻ってきた貴子の魂を肉体に入れて、私と契約させる、だな」

「体は作ってあるわ。欠片からの複製は大変だったけど」

「流石だな」

濁った咳をして、パチュリーは続けた。

その表情は明るくなく、どこか闇を落としたものだ。

「問題は、契約の方よ」

「何か気になるのか？」

「……レミイ、貴子を傀儡にしてまで生き返らせる覚悟はある？」

「ああ……私たちが奪った命だ。返さなければな。そのためには、悪魔との契約をさせなければならぬ」

「契約して仕舞えば、貴子はレミイの命令を無視できなくなる。それこそ、死ぬと言えば死ななきゃいけない体になるのよ？」

「わかっているさ」

「もう一度、その意味をよく考えなさい。私は仕上げに取り掛かるわ」
「……命令なんてしないさ。生き返った貴子はもうこの館の従者でも何でも無いんだからな」

白玉楼の客間で、貴子は腰を抜かしていた。

そして見事なほど呆気にとられていた。

映姫がとんでもないことを言い出したからだ。

私の復活があるかもしれないと。

「生き返るかもしれないって……どう言う事だ」

「貴方の名前が閻魔帳から消えかかっていたんです……ずいぶん慕われていたみたいですね」

閻魔帳……死者の名前と行いが載っていると言う物だ。

そこから名前が消えかかっているだって？

インクが掠れただけじゃ無いのか？

「何のことか全くわからない。もう少し易しく説明してくれ」

「つまり、顕界に貴子さんの事を生き返らせようとしてる者達がいるという事です」

「……誰だ？」

「わかりません。ただ、私達にも輪廻転生を管理すると言う役目があります。一度死んだ者が生き返るなど、ぜったいに許されることではありません」

「私に言われても困る」

「ええ……ですが」

すこし節目がちに映姫は言う。

いつも威風堂々とした態度の映姫にしては珍しい表情だった。

「何だ？」

「……貴方を保護させてもらいます」

「ええ？」

「不便はさせません」

「保護って……どう言う事だ？」

「是非曲直庁の管理下に置かせて頂きます」

「そんなの、監禁じゃないか」

「別に牢屋の中で鎖に繋げるわけではありません」

「……期間は何？」

映姫達に関わる時、一番嫌なのがその時間感覚の狂いだ。

平気な顔をして何年も待たせる。

ただでさえ退屈な死後なのに、映姫達の前で暮らすなんて、3日で限界だ。

「期間は120年です」

「ひゃっひゃく!?!」

想像以上の数字に、想像以上の感情が湧いてくる。

「120年……私達の元で過ごしてください」

「ちよつと……良い加減にしろよ!」

「な、なんですか?」

「ここに来たのだから元を辿ればそっちの都合だったじゃ無いか!」

「輪廻転生が不可能というのは前例が無く……」

「私は、そりゃ褒められた生き方はしてないけど、来世が無いなんて生き方はしてない!」

「落ち着いてください!」

「落ち着けるもんか!120年だぞ?!船に乗れば50年、やっとなと思つたら120年!良い加減にしてくれ!」

「我々は貴方の事を考えて……」

「私の事を考えて?全部自分らの面子の為だろ!」

「そんな事ありません!」

「私は120年も待たなきゃダメな悪人なのか?何で私だけ……」

感情の昂りにつられて、思わず涙が溢れてしまった。

何で私はいつともこんな目に遭わなきゃダメなんだ?

誰かの為になれるような人間になりたかつたのに。

いつも酷い目に遭つて、嫌な目に遭わせてる。

どうして……どうしていつも……。

「120年は、あまりにも酷ではなくて?」

「そうよお。少しそちらの都合を優先しすぎだわ」

「貴方たちは……」

私の嗚咽に呼応するように、気品のある声が何処からか聞こえた。障子がゆつくりと開けられる。

そこにいたのは、幽々子と紫であった。

その傍らに、藍と妖夢が控えている。

「お邪魔しています」

「ええ、本当に邪魔よ」

映姫の挨拶に、全く愛想のない対応で幽々子がピシヤリと返した。

「迷子霊の管理、感謝しています。本日から、少しこちらで預かせてもらう運びとなりました」

「丁重にお断りさせていただきますわ」

「これは決定事項です」

「知らないわ。紫、お願い」

「ええ」

紫が指を鳴らした。

映姫が顔を青くする。

そして細い眉を釣り上げた。

「何を！」

「恩返し……だそうよ」

呆然としていた私の足元に、大きく隙間が空き背中から落下した。

普段なら浮遊感のあまり驚いて叫びそうな物だが、不思議と今はどうでもよかった。

もうどうにでもなればいい。

私は闇へと消えた。

「どう言うつもりですか？死者を生き返らせる事がどう言うことかを理解していませんか!？」

「貴子はもとから死んで無いわ。だからあるべき場所に戻しただけよ」

「……ふざけたことを」

「あら、決闘を御所望かしら？」

スペルカードを懐から何枚か取り出す幽々子達。

映姫は尺を握りしめ、噛み殺すように言い捨てた。

「……この一件の落とし前は、いずれつけてもらいます」

「120年後かしら？」

「どれだけ抗おうと裁きは絶対です。努力忘れぬよう」

「くだい。消えなさい」

「貴方達は、間違っている」

そう言い残して、映姫は去っていった。

んーん？どこだここ？柔らかい。それにフカフカだ。
ということとはベッドか？

確か私は紫に……。

「おはよう。貴子」

この声は……

「……咲夜!？」

「久しぶりね……本当に久しぶり」

「な、なんで咲夜が……っここは!」

「そうよ。ここは紅魔館」

「……ということは」

「急な事でわからないかも知れないけれど、落ち着いて聞いて頂戴。

貴子……あなたは蘇ったのよ」

「……そうか」

「話したい事や聞きたい事は沢山あるけれど、まずは私についてきて」

「どこに行くんだ?」

「お嬢様のところよ」

お嬢様……紅霧異変以来だな。

そう思いながら立ち上がろうとすると、頭を中心にズキンと痛みが
走った。

思わず頭を押さえて、痛みを和らげる為に深呼吸をする。

「……貴子?」

「何だ?」

「貴方……どうして泣いているの?」

「え?」

左手の人差し指で目元を拭う。

すると、指先が少し濡れた。

そこで初めて、私は自分が涙をこぼしている事に気づいた。

「……久しぶりすぎて、眩しかったんだよ」

「そう……ほら、ハンカチは右ポケットよ」

「ああ」

ポケットの中に入っていたハンカチで涙を拭う。

目、赤くなってないだろうか。
「さ、行くわよ」

咲夜に導かれるまま、私たちは早足でレミアアの所へと向かった。
その道中で、久しぶりの顔ぶれに出会ったが皆驚きもせずただ会
釈をするだけであった。

もつとりアクションしてくれていいのに。

生き返った甲斐がないぞ。

そう心の中で腐りながら、レミアアの部屋へと到着した。

「久しぶりね」

「お久しぶりです」

「調子はどうだ？」

「まずまずです……私、どうしてここに？」

「私が生き返らせた」

やっぱりそうだったか。

すると、映姫の言っていた連中っていうのは、紅魔館の皆の事だっ
たんだな。

予想していなかった訳じゃない。

ただ、当たっていて欲しくなかった。

「さて、いきなりだが貴子」

「はい」

「私と契約しろ」

「契約？」

「生き返ったのはいいが、そのままでは3日ほどでお前はまた死ぬ。
魂の癒着が甘いからな。だから私と契約し、悪魔に魂を売れ。そうす
れば魂が固定されて死なずに済む」

「……悪魔との取引には、代償が付き物でしよう？」

「心配するな。代償が必要なのは私の方さ」

「え？」

「お前を復活させるには、お前の寿命を肩代わりしないとイケない。
だから私の寿命をくれてやる」

「そんな……」

「気にしないでいい。たった80年ぼっち、私たちからすれば些細な物だ」

「しかし私なんかのために……」

「……また、生きてくれ。貴子」

レミリアの命をもらって、生を受ける。

そんな事、許されるのか？

映姫じゃないけど、私は一回死んだんだ。

それを覆すなんて……。

「借金は返済した。お前を縛るものなどない。自由に生きてくれればいい」

「……私には、少し事情があるんです」

「事情？」

私は、映姫からされた話をした。

120年の事、春雪異変の事。

そして輪廻転生の事。

死んでからの事を全て。

しかしレミリアは足を組み、頬杖をつき鼻で笑った。

「ふん。なんだ、そんな事か」

「しかし、私を生き返らせればここにだって危害が……」

「私を誰だと思っている。死神なんぞ恐るるに足りないよ」

「そう言う事じゃなくて……いつか死んだ時に、死神に世話になります。そこに喧嘩を売るのは……」

「その頃には、お前の孫の孫だって死んでるさ。遠い先の事は考えたって無駄なのよ」

「遠い未来でも、私のせいで苦しんでほしくないんです……」

「120年、縛られたくないんだろ？」

「それは、私個人の都合です」

「なら、貴子を生き返らせるのは私の都合よ」

「……それは」

「私の我儘、か？ そうだ。私は自分勝手なんだ。悪魔だからな」

「だけど……」

そうやって、埒のあかない問答を繰り返していたら唐突にドアが空いた。

そこに立っていたのは、パチュリーであった。

やれやれといった顔をしながら首を横に振っている。

「貴方達、いつまで揉めてるのよ」

「色々してもらった手前悪いが、私は面倒をかけてまで生き返るなんてしたくない」

「そう。なら、これを読んでから考えなさい」

そう言つてパチュリーは一枚の紙を私に手渡す。

そこにあつたのは、格調高い金泥の罫線の上に書かれた美しい綺麗な字であつた。

見覚えのある紙質。

これは……

「これはなんですか？」

「手紙よ。差出人は白玉楼一同と書かれていたわ」

「……幽々子」

やっぱり、幽々子からか。

後ろめたさや、吐き気のような気持ちが混ぜられたような気分になりながらも、私は手紙を読んだ。

拝啓

あたたかい季節の訪れ、心よりめでたく存じます。

輪廻転生が不可能と言われ、白玉楼に訪れた時の事が遠い昔のように感じます。

頑張っている貴方の姿に我々一同、勇気をいただきました。

唐突な別れを惜しむ暇すらありませんでしたが、元気にやっていますか。

心悲しい気持ちではありますが、此処を持って、別離とさせていただきます。

敬具

白玉楼一同

貴子様

侍史

「……どうしたの？泣くほどの事があつたかしら？」

パチュリーが問いかけてくる。

「どうやら、私はまた泣いていたらしい。」

もう、涙なんてどうでもいい。

今はただ……。

「……契約、させてもらいます」

「え？」

「もう一度、私は生きたい」

「あ、ああ、良かったわ」

「契約、お願いします」

手紙を読んでいる間、難しそうな顔をして黙っていたレミリアに言う。

レミリアは、立ち上がりながら言う。

「ああ。契約成立だ」

レミリアがそういうと、赤い魔法陣が私を中心として現れ、強烈な閃光を放った。

少したつて光が収まり、力の抜けた私は膝から崩れた。

私に近づいてきたレミリアが、話しかけてきた。

「これで貴方は完全に復活よ。悪魔の眷属として、だけどね……聞いてるかしら？」

「……」

レミリアやパチュリーの声が、聞こえているのに理解できない。

目から溢れる涙で、視界がやたらぼやけてしょうがなかった。

拭っても拭っても止まらない。

気がつけば、ハンカチは水浸しであった。

「……咲夜、貴子を部屋まで運びなさい」

「かしこまりました」

話の間こえていない私は咲夜に運ばれ、部屋へと戻された。そして、目覚めた時と同じベッドの上で寝かせられる。

悲しみか、喜びか、それとも他の思いだったのか。

私は暴れる心に振り回されて疲労困憊し、眠りに落ちていくのだった。

「これで、良かったのよね。パチエ」

「そうね。ただ何故、あの手紙を読んであそこまで取り乱したのかしら」

「きつと、死んでから色々あったのよ」

「……そうかしらね」

部屋へと戻った私は、もう一度だけ起きて、また少しだけ泣いた。しばらくぶりに流していなかった熱い涙だった。

「幽々子……妖夢……」

あの手紙は、幽々子から贈られた最後の意地悪であったのだろう。

一見、別れを告げる内容であった。

それも伝えたい事だったのだろう。

私はもう白玉楼の人間ではない。

ただ、伝達はそれだけじゃなかった。

隠されたメッセージがあった。

手紙の各文の最初の一文を並べて読むと、

あ り が と う

になる。

ありがとう……か。

……幽々子、私は役に立てたんだな？

ご飯ひとつ満足に炊けない私だけど、力になれたんだよな？
だったら、私こそ言わせてほしい。

幽々子……本当にありがとう。

長い冬が終わり、幻想郷は満開の桜で満ちた。

その影に隠れて、一人の人間がこの世に帰ってきたそうさ。
桜は、いずれ散ってしまうだろう。

ただ、今だけは。

今この瞬間だけは、美しく咲き誇っていてほしいと、貴子は願うのであった。

妖々夢編 完

春過ぎで

——とある亡霊の愚痴

全裸になったのにまだ勝負をしようと言い出した時は、本当に可笑しくて仕方がなかったわ。

あんなに簡単な幻覚に引かかっておいて、もう一度やろうなんて普通は思えないはずよ。

そもそも私は一度蝶を見せているはずなのに、それでもやろうなんて言うんだから、まともではないわ。

ただ、それ以上に勇気があったわね。

……私がお風呂に入っている所を覗こうとした事は、勇気と言っては失礼かしらね。

震える心を押さえつけて14月の札を出してきた時はまさかと思っただけれど……貴子がこの屋敷に来て本当に良かったわ。

死んだ魂は皆どれも未練だらしくて、臆病で、つまらないものなのに、死んでもなお未練も無く勇敢な人が現れるなんて、これが運命なのかしら。

輪廻転生出来なかったのも、妖忌と知り合いだったのもきっと全て運命の巡り合わせね。

……この屋敷も、それを受け取ったのかしら。

白玉楼は決して朽ちることのない屋敷。

たとえ1000年経ったって今と変わらぬ姿を維持しているの。

なのに貴子ったら、来てものの数日で勢いよく床板を踏み抜いたのよ。

きつと、生きていたのね。

止まっていた時が動き出すようだったわ。

……だけれど、その白昼夢に当てられたのかしら。

急に放たれたとしても西行妖の弾幕なんて、私からしたら何ともないのだけれど、あの博麗の巫女は不意をつかれて避けきれなかったのね。

あれを見捨てていれば私はきつと無事だったでしょうけど。

それこそ、貴子の力を借りずにアザを消せていたかもしれないわ。けど貴子を見て、紫や藍ちゃんが大切に育てた子を見捨てるなんていう簡単な事が、出来なくなっちゃったのね。

本当、困った人だわ。

でも、手鏡を買ってきた時からきつと全部決まっていた事なのね。

あの暗号を、見抜いてしまうなんて本当に面白い人だわ。

妖夢に変な事さえ教えなければ、の話だけどね。

——とある庭師の回想

貴子さんが来た時は、まるで葵風が通り抜けたような感じでしたね。

最初、お酒屋さんで見た時には、やたらうるさい変な人だと思ったんですけど。

というか、実際変な人ですし。

でも、何て言えばいいか、貴子さんってとつくに死んでるのに、どこか死ぬ気なんですよね。

それくらい何事にも必死で、一生懸命で。

きつと頭の中では色々不安とか恐怖とかあるんでしょうけど、それを全部乗り越えて一歩踏み出してしまいう強さがあるんです。

だからこそ、幽々子様を救う事ができたんだと思います。

ところで、貴子さんの言っていた「くるみぼんちお」とは一体何のことなのでしょう。

幽々子様に聞いても困った顔をして黙ってしまおうし、藍さんに聞いても耳をピクツと立って怒っちゃったんですよ。

そんなに悪い言葉なのでしょう。

貴子さん曰く、大人に近づく為の言葉だそうなんです。

あの人は、私の方が遥かに年上である事をしばしば忘れたかのような物の言い方をします。

子供扱いはして欲しくないんですが。

こう見えてもお酒は結構飲めますし。

あと、平気で煙草の吸い殻を庭に捨てようとしたのも驚きました。

今までどんな環境で暮らしてたのか、少し不安になります。

もし、今度お家にお邪魔させてもらう機会があったら覚悟しておいで欲しいですね。

……もう会うことは無いんでしょうか。

今生の別れ……いや、もう生きてないから、今死の別れとでもいうんですかね。

一緒にいた時間は長くないですけど、居なくなったらなつたで少し寂しかったりもします。

まあ、幽々子様のお湯浴みを覗こうとする人がいなくなるのはいいことかもしれないですね。

——げんきげんきヤマタン

彼岸幽霊街極楽番地是非曲直庁断罪部転生課人間係所属四季映姫。

まるで説法でも綴られてるのかと思うような肩書きを映姫は持っていた。

彼岸 幽霊街 極楽番地

これは職場の所在地であり、

是非曲直庁 断罪部 転生課 人間係

これは映姫の所属と役職である。そして、

四季映姫。

これは映姫の名前である。

とかく目眩がしそうなほど漢字が多いその肩書きは、部下の死神から「思春期の少年がこういう詩を書きがち」と絶賛されていた。

そんな、筆と硯で書いていたら気が狂いそうなほどに長い役職名を持つ映姫には今、悩んでいる事柄があった。

原因は言うまでもなく貴子である。

貴子は一度死んで、映姫から来世の判決を受けた（転生不能という結果であったが）にも関わらず、あろう事か天下無法の蘇りを果たしてしまったのだ。

無論、死んだ者が生き返るなどという事があっては、死と生の調和が崩れ世界が崩壊するかも知れない。

まあ、それほどの危険度など、あの自堕落なだけの一般人にある訳もなく、今お上方が憂慮しているのは貴子を捕まえられなかったという面子の問題だが。

とはいえ、噂によれば紅魔館の連中によって貴子は復活したそう
だ。

紅魔館と白玉楼。

幻想郷でもかなりの力を持つ二つの派閥と関わりを持っている事から、もはやただの一般人とはいえないかも知れない。

ただ、覆水は盆に帰ってはいけない。

それと同じように、死人は盆にしか帰ってはいけないのだ。

ただ、映姫が悩んでいたのはその事ではなかった。

出会い頭に貴子がチラツと言った「映姫はノンタン」という台詞。

映姫は、それが気になって仕方がなかったのだった。

「……ノンタンって、知っていますか？」

「は？」

閻魔室に呼び出した小町に、前振りもなく問いかける。

昨日酒を呑み散らかしていた事のお説教かと覚悟していた小町は、
思わぬ質問に変な声が出てしまった。

「ノンタンとは、一体何者なんでしょう」

「……げんきげんきの奴ですか？」

「恐らく」

「それがどうかしたんですか？藪から棒に」

「どうやら、私はノンタンらしいんです」

「ええ……」

顔に手を当てて状況を理解しようとしたが、映姫の言っている事が
全くわからない小町。

二日酔いも相まって鈍い頭痛がした。

「何で映姫様がノンタンに？」

「この前白玉楼に行ったら貴子さんに言われました。その意味が分か
らず悩んでいます……」

「分からなくていいと思いますよ」

「なりません。閻魔たる者、無知を緩怠しておくなどあってはいけな
いのです」

厳粛な顔をして言い切る映姫。

ただならぬ物言いに、小町は少し姿勢を正して言った。
その凜然とした表情を見て小町もニヤつくのをやめる。

「……ノンタンっていうのは、子供向けの絵本の事です」

「え、絵本？」

厳粛な顔が壊れた。

小町は少々お待ちくださいと言って、どこかへと走って行く。

「何処へ行くのですか？」

「資料室です」

ほどなくして帰ってきた小町の腕の中には、一冊の本が抱えられて
いた。

映姫の机にそれを広げる。

「これがノンタンです」

「こ、これは……」

そこに描いてあったのは、悪戯好きの白猫が野原を駆け回るとい
う物だった。

映姫は絶句し、ペラペラと何ページかめくっている。

開くたびに現れる白猫の奔放な振る舞い。

小町は、さすがに怒るだろうかと思ひ少し肩をすくめた。

「これが、ノンタンですか……」

「ええ。全く貴子の奴……」

「す、素晴らしい！」

映姫は急に勢いよく席を立ち上がり、小町に向かって振り立てた。

「ノンタンがこんなに教育的な物だったとは！……このような道徳的な者
と称されるとは冥利に尽きます！」

「は、はあ」

目を輝かせながら力説し始める映姫。

予想外の反応に、小町は変な所が痛くなった。

「なるほど、なるほど」

「お気に召されましたか？」

「ええ、これは是非皆に広めるべきでしょう！」

「いや、それは……」

たしかに、映姫はノンタンかも知れないと思う小町であった。

「それでは、仕事がありますんでこれで」

「ちよっと待ちなさい」

部屋からこっそり出ようとした所で食い止められる小町。

「もう一つ話があります」

「な、なんでしよう」

「私の元に、酒屋からいくつか領収書が届きまして。宛名が私の物になっていました」

「……それは大変ですね」

「その金額分、来月の給料から減額しておきます」

「そ、そんなの酷い！」

「昨日お酒を呑んでいた罰です」

「やっぱりバレてたんですか……」

膝から崩れ落ちる小町。

映姫は、現金現金なノンタンなのであった。

——霧雨魔理沙の災難

紅魔館で、魔理沙はいつものようにパチュリーから魔法の指南を受けていた。

今はその休憩中、魔理沙の細やかな楽しみでもあるティータイムであった。

「やっぱりここの紅茶は美味しいぜ」

「紅茶好きな従者がいるのよ」

「そりやえらく殊勝なこった」

「ところで魔理沙、貴方最近アリスと仲が良いのね」

飲んでいた紅茶を少し吹き出して蒸せる魔理沙。

「アリスを知ってるのか？」

「ええ。少し付き合いがあるわ」

「なら仲が良いなんて言うなよ」

異変の時、雪に降られながら涙を流しているアリスの顔が魔理沙の頭に浮かんだ。

「あの子……少し変わってるところがあるのよね」

「ああ。少しどころじゃない」

「普段はいい子なんだけど……」

「毎日嫌味を言いに来る奴がか？」

「負けず嫌いなのよ」

「負けを認められないのは悪徳だぜ」

気を取り直して紅茶を飲むと魔理沙。

パチユリーは溜息をつく。

「悪い奴じゃ無いのは確かよ」

「迷惑な奴なのも間違い無いな」

「貴方も人の事言えるかしら？私の術式を勝手に引用したりしてるそうじゃない」

「参考にはしてるが引用なんてしてないぜ」

「同じことよ」

「……今は確かに受け売りだが、近々すごい技ができる」

「へえ。今度は誰の真似？」

「真似じゃない！私だけの魔法だ」

「あまり成果は芳しくないようね」

「そ、そんな事……」

「不完全燃焼の魔力が服に滲みてるのよ。魔法の失敗がありありと伝わってくるわ」

「アリスみたいな事を言うなよ」

「誰だって言うわ。優しさで」

「……未完成なだけだ。今に完成する」

「魔理沙、ずつと言ってるはずよ。貴方は火力を上げる事よりも魔力の制御に重きを置くべきと。それ以上出力を上げ続けられれば、いずれ人間を辞めなければいけないわよ？」

「聞きたかないぜ。そんなお説教」

そっぽを向いて口を尖らせる魔理沙。
聞く耳無しである。

「……あら、アリス。ご機嫌よう」
「なー」

すぐさま席を離れ、本棚の影に隠れようとする魔理沙。
パチュリーは黒い笑みを浮かべる。

「嘘よ」

「……何のつもりだ」

「よっぽどアリスが苦手なのね」

「苦手じゃないぜ。面倒なだけだ」

パチュリーの笑みが深くなる。

魔理沙は少し嫌な予感がした。

「面倒なのはお互い様ってことよ」

「お前も含めてな」

「魔女ってのは面倒な生き物なのよ」

「あーそうかい」

席に座って頬杖をつく魔理沙。

その顔は納得の色ではなかった。

「……魔理沙」

「なんだよ」

「あの子を、よろしく頼むわよ」

「なんだ急に。悪寒が走る」

「魔女っていうのはね、ガラスのようなモノなのよ。面倒だけど透き通っていて……そしてなによりも脆いわ」

「お前は曇ってるがな」

「ええ。でもあの子は透明なままなの。くれぐれも割らないでちょうだい」

「……お前さては私がアリスを泣かすとフォローが面倒なだけだろ？」

「……………」

「その反応！凶星だな！」

「さ、再開しましょうか。言つてたモノは持つてきたわね？」

「露骨に話を逸らすなよ」

「例のキノコは持つてきたのかしら？」

「……ああ。キノコなんていくらでもあるからな」

「それじゃあアグニシャインの式から……」

——暗号の真実

長閑な春のある日。

八雲紫は白玉楼にやつてきて緑茶を啜っていた。

そして湯呑みを机に置いた時、茶菓子のそばに置いてある紙に気づく。

その紙を手元に寄せて、そして少し吹き出した。

「あら、懐かしいわねえこれ」

「何？」

「この暗号よ」

「ああ、その事」

紙に書いてあつたのは、幽々子が妖夢に出題した怪文であつた。

その内容は、

『前略 憂き世の暇を明け、離せぬものあり。それが死。朽ちて各地、智学口身を求め、彼岸の華も枯れる折、後ろの正面、貴方はだあれ？』

草草』

というものだ。

紫は懐かしそうにその紙を何度も読み、幽々子は微笑んでいる。

「本当に懐かしいわねえ。これでお使いを頼むなんて本当に意地の悪いこと」

「簡単な掛け言葉よ？」

「簡単ねえ……」

「ええ。貴方もすぐ見破つてたじゃない」

「そうだったかしら？」

「それで妖忌に見せて、悩んでるのを見て笑つてたのよ」

「ああ、あの時は愉快だったわねえ」

紫は目を細めて遠い昔の思い出を懐かしむ。

あの時は、楽しかったものだ。

「それを妖夢にも出題したのよ」

「あら、可哀想な事をするのね」

「それが、たった3日で正解の手鏡を買ってきたのよ……貴子っていう付属品も込みだったけれど」

「そうなの。妖夢もやるわねえ。あの子には少し難解すぎない?」

「それはそれは自信満々な顔をしていたわ」

「そう。見破られたのね」

紙をもう一度見て、ほんの一瞬だけ黙る紫。

そして顔を上げる。

「要は『憂き世の暇を明け離せぬ物あり』って言うのは、離せぬは話せぬ。つまり死人に口無しって事よね?」

「ええそうよ」

「それが死は某、つまり自分。そして、その後続く文から『く』と『ち』を無くせば、手鏡って訳ね」

「よく覚えてるじゃない」

「今解いたのよ。こんなのよく妖夢が解けたわね」

「妖夢は解けてないわ」

「え?」

紫は不思議そうな顔をして幽々子を見つめる。

解いていないのに買ってこれる訳がない。

どういう事だろうか。

賢者は少し悩んだ。

「解けていないとはどういう事?」

「妖夢にこれの意味を聞いたら、急に意気揚々と語り始めたのよ」

「何を?」

「聞いたことも無い昔話。内容はとても陳腐だったわ。なのに妖夢つたら、語りながら泣き始めるのよ」

「……どういう事かしら?」

「おおかた、貴子が吹き込んだのでしょよね。妖夢に手鏡を買わせる

為に」

「あら、なら難問を解いたのは貴子？」

「貴子に解けると思う？」

「それもそうね。だとしたら誰が……」

「妖忌よ」

「え？」

聞き覚えのある名前が幽々子から聞こえた。

馴染みがあるのに、今その名前が出てくる事に違和感が拭えない。

なぜ妖忌が出てくるのだ？

「妖忌と出会ったの？」

「妖夢はね。顔を隠してたから気づいてないらしいけど。酒屋であったそうよ」

「あら、偶然の相席？」

「ええ。客と店としてね」

「……そう」

感動の再会は、利益関係としてだった。

不器用な関係性は相変わらずだ。

幽々子は滔滔と語り続ける。

「妖忌も、口ではなんだかんだ厳しい事を言っておきながら、結局妖夢が心配なのよ」

「……立派な孫煩惱よねえ」

「きつと、自分の時のように何か月も悩んで欲しくなかったのね」

「あの時、妖忌ったら悩んだ末に買ってきたのは赤ベコだったものね」

「妖忌も、あれで結局は妖夢の事が大好きなのよ」

「……あんなしみつたれた所で店なんかやってるのも妖夢の為かしら」

「本当、歳をとつても変わらないわねえ……そうだわ。今から行きましょう」

「何処へかしら？」

「決まってるじゃない！妖忌の店よ！」

立ち上がって幽々子の手を引く紫。

妖忌の店に、新しい女性の常連さんが増えるのは遠くない未来であつた。

——被害者と加害者

「貴子！貴子なの!？」

とある日の紅魔館にて、閑静な雰囲気を通り切れるかのようにフランの大声が響き渡つた。

音の出どころは一階右手にある大食堂。

貴子が昼飯の Pasta を食べているところであつた。

「ああ、ご挨拶が遅れまして申し訳ありません。恥ずかしながら、帰ってきました」

Pasta を巻いていたフォークを置き、汚れた口をナプキンで拭いてからフランに挨拶をする。

ここに戻ってきてからもまあ色々あり、フランとは顔を合わせれていなかったのだ。

フランはじつと貴子の顔を見つめて、そしていきなり大粒の涙を流した。

「貴子……つごめんね」

「え？」

そう呟く声は細く、肩は震えている。

スカートの裾をぎゅっと握りしめて、途切れ途切れながらフランは言った。

「私……貴子の事を……つ殺したの!」

「えっと……」

「それなのに、帰ってきて喜んでやうなんて……凶々しいよね……ごめんねっ……」

「……泣くのをおやめください。フラン様」

膝をかがめて顔の高さをフランと合わせる。

そして、頬を流れていた涙を人差し指で拭いた。

「私は、またフラン様にお会いできて本当に嬉しいです。フラン様は

「どうですか?」

「っ私も……私も嬉しいよ!」

「でしたら、もう泣くのはおやめください。泣くのは哀しい時だけにしましょう。嬉しい時には、大きく笑うのですよ」

「怒って……ないの?」

「怒ってません」

「私の事……嫌いじゃないの?」

「ずっと大好きのままですよ。フラン様」

「……また、フランちゃんって呼んでくれる?」

「ええ。また会えて本当に嬉しいです。フランちゃん!」

フランは貴子の胸へと飛び込み、ワンワンと声をあげて泣いた。

顔を擦り付けて、泣いた。

周りの妖精たちも最初こそ野次馬で見っていたが、フランの切ない涙を茶化すものなどいなかった。

貴子は、フランの頭を優しく撫でる。

「もう、どこにも行きません」

「うん……うん!」

周りで高みの見物を決めていた連中たちもおいおいと涙を流している。

遠くでスープを飲んでいた美鈴も声をあげて泣いていた。

貴子は、何故かいい匂いのするサラサラの髪の毛をゆつくりと撫でながら、ゆつくりと安堵の溜息を吐いた。

(……危うく咲夜さんに殺されるところだった)

実は、フランが泣き出した時に貴子は見てしまったのだ。

とんでもない表情でナイフを構えている咲夜を。

鋭い光を放っている銀の刃を。

咲夜との距離は遠く、詳しい会話までは聞こえていない。

つまり咲夜視点では、貴子がフランを泣かしているようにしか見えないだろう。

その危険を察知した貴子は、フランを泣き止ませるべく行動したのであった。

無論、泣き出したフランにかけた言葉は嘘ではない。
誠正直、本心からの想いである。

その動機が、咲夜のナイフであることを貴子は心にしまっておくのであった。

しばらくして、フランが落ち着いて泣き止んだ後、貴子は洗濯室へフランの涙やら鼻水やらがのついた服を着替えに行った。

古い方をカゴに入れて、いそいそと新しい方に着替えていると、

「フラン様を泣かすとはね」

という声が後ろから聞こえてきた。

「やっぱり見てたんですか？咲夜さん」

「見られてたら嫌なのかしら？」

「もうお説教は懲り懲りですから」

「お説教なんてしないわよ。貴方はお客様なの。従業員では無いわ」

「その割には結構働かされてますけどね」

「そのセリフは役に立ててから言ってみようかい」

「ところで……」

スカートのチャックを締め、咲夜の方を振り向きながら貴子は言う。
「その顔は珍しく真剣であった。」

「お嬢様はお風呂つて入りませんよね」

「……ええ。水が駄目なのは知ってるでしょう」

「とすると、フラン様も入ってませんよね」

「……そうね。それがどうかしたの？」

「……そうね。それがどうかしたの？」

咲夜の問いかけに、少しだけ間を置いて貴子は答えた。

重々しく、まるで世界の滅亡を告げるような雰囲気です。

「フラン様の髪の毛、なんであんないい匂いなんですか？」

「……はあ？」

「あんな芳醇な香りを……そうすると、もしかしてお嬢様も！」

そう言って勢いよく駆け出そうとした所を、咲夜に持っていたお盆で思いっきり叩かれた貴子であった。

「変態は死んでも治らないのね」

「橙！そこで右足を出してどうする！相手が右手でこう突いてくるだけだぞ！」

藍が橙の顔を目掛けて拳を撃ち放ち、わずか数センチの所で止める。

「常に相手から目を離すな。死にたいのか？」

「そんな事言ったって……拳での戦いは禁止されてるって藍さまが教えてくれたじゃないですかあ」

「馬鹿者！それは人間の話だ！我々妖怪は往々にして拳をぶつけ合う。弱い者が死ぬのが妖怪の世界だぞ！」

「そんなあ……」

「今のだつて実践なら殺されてる所だ」

「でもお……」

「口答えをするな！」

藍が橙の頭をゲンコツで殴る。

鈍い音が鳴り響き、橙はタンコブの出来た頭を押さえながら蹲つた。

「さあ、続きをするぞ」

「……もう藍様なんて嫌い！」

「あ！待て橙！どこへ行く！」

「べー！」

黒猫に化け、藍から逃げようとする橙。

しかし、藍から逃げ切れる訳もなく、逃亡虚しくあつという間に捕まってしまった。

首根つこを捕まえながら橙はプイツとそっぽを向く。

「この大馬鹿者！」

「橙馬鹿じゃないもん！」

「弱ければ馬鹿にされる。お前は強くならなければいけないんだ」

「馬鹿は藍様の方だ！」

「な、なな、なんだと!？」

「私、貴子から聞いたもん!」

貴子という名前に少し動揺する藍。

奴には自分の恥を知られているのだ。

まさか……よりもよつて橙に言ってしまったのか!

「藍様が美鈴っていう人に負けたって、貴子言ってたもん!」

「な!」

「弱い者が馬鹿にされるなら、藍様も美鈴って人に馬鹿にされちゃえば良いんだ!」

「……聞いたのはそれだけか?」

「え?」

「私が美鈴に負けたと……それだけ聞いたんだな?」

「そ、そうですけど」

よかった。

どうやら気を使われたらしい。

あのような人間に気を使われたなど恥の極地だが、どうあれ感謝せねばならない。

だが、私に不信感を持っていては橙も修行に身が入らないだろう。

「いいか橙。アイツは大嘘つきなんだ。私が美鈴とやらに負けるはず無いだろう」

「でも……」

「アイツは教育に悪い。あまり近寄るなど言っただろう」

「だけど、藍様の方が教育に悪いって……」

「そんな訳無いだろう。ついてきなさい」

両袖に手を入れて、藍は踵を返した。

橙も慌ててついていく。

その行き先は紅魔館であった。

「ああ……久しぶりですねえ。何の御用ですか?」

「貴様に決闘を申し込みにきた」

「……なるほど」

中華服のポケットに手をつ突っ込みながら、門の前に立つ美鈴。

早くも気を溜め始めている。
それを受けて藍も妖気を溜め始めた。
橙には、遠くから見させている。
今、復讐を果たす時が来たのだ。
消えぬ傷跡をつけられたコイツに。

「久しぶりに燃えてきましたよ」

美鈴はポケットから手を出して、武人の構えを取る。
風の向きが美鈴を中心に変わる。

にじりよる両者の間合い。

先手を打ったのは藍だった。

空気を鋭く切り裂く右手。

美鈴は髪の毛スレスレでそれを躲した。

グツと屈んで、素早く足払いを返す。

それを飛び上がったよけ、空中で四発蹴りを放つ藍。

目にも止まらぬ攻防……だが、三度目の藍の突きを、美鈴は顔面でモロに受けてしまった。

響き渡る骨が折れるような不快な音。

後ろに吹っ飛んで倒れる美鈴。

「ぐうあー」

悶絶する美鈴。

しかし、苦悶の表情を浮かべていたのは拳を放った藍の方であった。

倒れた美鈴に向かって問いかける。

「貴様……どうして手を抜く」

「ぐぐぐ……やられたあ」

「質問に答えろ！紅美鈴！」

声を荒げる藍。

今の拳は、明らかに避けられるものだった。

少なくとも一度目の決闘の時なら、あんな拳目を瞑ってでも避けられていたはずだ。

それに、返し技だつてどれも陳腐なものばかり。

空手を習い始めたばかりの白帯が出すような拳だった。

「……子供が見てるんでしょ？」

「だからわざと負けたとでも？ 舐めるな！ いらぬ氣遣いだ！」

美鈴の発言に激昂し、右手で顔を目掛けて突きを放つ藍。

先程の拳の数倍は鋭かった。

しかし美鈴は地面に座っつていながら楽々それをいなす。

「確かに、全力でやったって勝負は五分でしょう。でも、そんな血生臭い戦いなんて子供にはまだ早い」

「橙は子供ではない！ 立派な妖怪だ！」

「私も、親ですから」

立ち上がり、膝についた土埃を払いながら美鈴は言う。

「見せたくないものは見せない。それくらいはさせてください」

「見せなければならぬ事もある。橙の為だ」

「もう、見てませんよ。ほら」

美鈴が指さした先には、蝶々を追いかけている橙の姿があった。

フワフワと舞うモンシロチョウを必死に捕まえようと、草むらを駆け巡っている。

「っあの馬鹿！ あれほど見てろと……」

「子供というものは、親が何もかも決めちゃいけないですよ。自分で世界を見つめて、好奇心を持ち、学んでいく事事が大事。それは人も妖も変わらない事です」

「……貴様に何がわかる！」

「私も、人間を一人育てた事がありますから。時間を止められるなんていう困った子供を」

「……だから教育に口出しできると？」

「教えて育むと書いて教育です。そして、成るまで長いと書いて成長と読むんです。慌ててはいけません。妖怪なんだから、焦らなくて良いじゃないですか」

「知ったような口を……」

門にもたれかかり、タバコを啜えようとしたところで、

「ああ、子どもがいるんですね」と言っつて箱に戻す美鈴。

「とにかく、あまり厳しくしすぎないであげてください。押し付けた教育なんて辛いものですよ……親も子供も」

「……まるで覚えがあるような言い方だな」

「ええ。私も同じ過ちを犯しました。けれど、それではダメだと気づかされたんです。だから今、元気に育ってくれている事に感謝しています」

「……少々おてんばが過ぎるようだがな」

そう言つて藍が指さした先には、野原を駆け回る橙……の後ろから、虫取り網を持つて橙を追いかけ回している咲夜がいた。

四本足の橙と変わらない速度で駆け回っている。

「待て！化け猫！」

「待てば死ぬ！」

ぐるぐると円を描くように追いかけてつこを続ける二人。

最後は、諦めたのか咲夜が時間停止をしてどこかへ消えた。

「……とまあ、大らかに育ちました」

「ああ言うのを間抜けと呼ぶんだ。覚えておけ」

「魔が抜けてるなら喜ばしいことです」

「……蛙の子は蛙だな」

そう言つて、相手にならないとばかりに門を後にする藍。

その後ろから声がかけられる。

「決闘なら、いつでも歓迎です。ただ、今度は二人つきりでお願ひします」

「……ふん」

——逆さ水

「あら、花札なんか出して何をしてるの？妖夢」

「あ、幽々子様……実は」

妖夢は、貴子が出した14月の札が気になっていたのであった。

貴子が出した、蓮に龍。

それが、幽々子を討ち運命を変えたあの勝負以来、どこを探しても

見当たらないのだ。

貴子が寝泊まりしていた桐壺は掃除したし、ありそうな場所はあらかた探した。

それこそ、箆笥の隙間なんかも。

そこからは、貴子が持っていたサイコロなんかはゴロゴロと見つかるのに、虎の札だけがどこを探しても見当たらないのだ。

妖夢には、何故かそれが気になってしょうがなかった。

「幽々子様、ご存知ありませんか？」

「そうねえ……確かに言われてみればあの時、勝負が終わった後山札に戻っていたし、無くなるのも変ねえ」

「やっぱり、貴子さんがあつちに持っていったんでしうか」

「いや、それは無いわね。死人が此岸に持っていける物は限られているわ。逆はそうでもないのだけれど」

「そうなんですか……ならどこへ？」

「うーん……もしかすると」

幽々子は何か思い当たる物があるのか急に立ち上がって何処かへ行った。

妖夢も後に続く。

「……やっぱり」

幽々子は、屋敷を出てある一本の桜の木の下へと歩いて行った。件の、西行妖である。

その前で立ち止まり、笑ってるような驚いてるような顔をしていった。

「幽々子様く何かあったんですか？」

「妖夢。ご覧なさい」

「何が……これは！」

目に入るのはバツサリと切られた西行妖。

しかし、驚く事にその木の幹は、3日ほどでほとんど元通りになっていたのだ。

ただ、それは妖夢たちも知っていた事であった。

驚いたのはそこでは無い……。

「……14月の、札？」

「ええ……こんな所にあつたのねえ」

「貴子さんが置いたんでしょうか……何の為に？」

「さあ……」

幽々子がゆつくりと札を手にとった。

書いてあるのは、何の変哲もない龍の絵だ。

一度目にした事もある。

「特に変な所は……」

すると、妖夢が札を指さして声を上げた。

「あ、幽々子様！後ろに何かが！」

「え？」

ペラリと札を裏返した。

そこには、綺麗な若葉色に、すこし乱れた文字で何かが書いてある。

「……これは」

願はくは 花のもとにて 春死なむ

その如月の 望月のころ

何処からか、一片の桜の花びらがそよ風に乗って、貴子の手へと乗った。

麗かな沈黙。

ポタポタと、幽々子の顔から雫が溢れた。

「……幽々子様？」

「うふふ。まさか……貴子に、泣かされちゃうなんてねえ」

「もしや、不快な事が？」

「いいえ、逆よ。それはそれは愉快なこと」

『どうせ死ぬのなら、花の咲く春に死にたいものねえ』

遠い昔の、誰かが言った。

着物を着た、桃色の髪の女が。

「……ああ、懐かしいわねえ」

暖かい彼岸西風が、幽々子の髪を揺らすのであった。

第三章 永夜抄編

大雨時行

恥の多い生涯を送って来ました。

桜もぼろぼろと散ってきて、一抹の寂しさを覚え始めたところある日の事。

私は、鬱蒼とした森の中をただひたすらに歩いていた。

木漏れ日は時折私のことを照らし、明るいはずの光はより一層私の孤独を際立てた。

風が吹くたびに、樹木が揺れてわしゃわしゃと不安になる音を立てる。

道とも言えないような狭い木と木の隙間を縫うように足を動かすが、それもただただ虚しいだけだった。

なぜなら私は、目的地を持っていないからだ。

何処に行こうと言うわけでもなく、ただ屍のように、歩き、歩き、歩く。

何故私はこんな獣道を歩いているんだ？

事の発端は、レミリアから言われたある一言であった。

「貴子。貴方もう出て行っていいわよ」

何気なく、たわいもない会話のように放たれた言葉。

その言葉は別れを告げる発端。

終わりの始まり。

しばらくの間、私はどんなに間抜けな面をしてた事だろうか。

そうやって短く結論だけを言ったレミリアに、隣で座っていたパチュリーが補足をつけた。

「貴方は分かかってないだろうけれど、その肉体はまだまだ貴方に馴染んでいないの。長生きしたいなら館の中ばかりに居るのではなく、外に出て体を動かしてきなさい」

本を読む片手間に滔滔とパチュリーは述べた。

パチユリーもレミリアも悪意がある訳ではない。
私を厄介者として追い出そうとしてる訳では無いのだ。
むしろ、私の体の事を気遣ってくれているからこそその退館命令なの
だ。

それをわかっているからこそ、私には何も言い返す事が出来なかつた。

そこからの記憶は曖昧だ。

飲みすぎた次の日みたいに、景色が混乱している。

気がつけば、私は少ない荷物を纏めて、メイドやらから饞別の品をいくつかもらい、館を後にしていた。

去り際に咲夜が、

「今日までご苦労様」

と言ってくる。

本音を言えば。明日からもご苦労したかった。

いつまでも、覚めない夢を見ていたかった。

あろう事が美鈴まで、

「寂しくなりますねえ……」

と私の手を強く握りしめながら溢していたのだ。

そんな事を言われてはまるで今生の別れではないか。

もう帰ってこなくても良いと言う事を、理解させられる。

せめてもの救いは、美鈴が目には涙を浮かべていてくれた事だろうか。

そういう訳で、急遽館から外に出てきた。

無論、いく宛など無い。

元々住んでいた家に戻ろうにも、あの家は館に行く際にさっさと
売っ払ってしまったのだ。

勿論白玉楼には行けない。

幽々子は私を守る為にこの世へと戻したのだから。

そもそも行き方がわからないし。

現状、前方行き止まり後方行き止まり。

つまり八方塞がりなのだ。

パチユリーは、私の体が馴染んでいないと言っていたが、どうにも私にはまるでその感覚がない。

なんなら、死ぬ前よりもイキイキしてる気さえする。

どんなに飛び跳ねても、走り抜けても、体力は翳りを見せないのだ。どういうカラクリで木っ端微塵に爆散したこの体が復活したのかは分からないが、間違いなく死ぬ前より健康体で複製されている。

それなのに馴染んでいないとは、一体全体どう言う事だ。

馴染みまくっているではないか。

また、パチユリーは外に出れば馴染むとも言った。

日光の下で体を動かせと言う意味だろうか。

そうだとすると、館の中ですでに人間の域を超えて動いていたのだが。

少なくとも運動不足を責められるような生活はしていない。

日光、と言うのがキーワードなのか。

パチユリーは太陽に当たると言う事を強調していた。

もしかすると、日光から出る波長のような物を浴びないといけないのかも知れない。

……そうだとしても、出ていかなくたって――

そこまで考えて、私は自分がどうしようもない思考の袋小路に陥っている事を悟った。

いつかはこうなる。

いつか出て行かなければならない時が来ると言うのは、私だって理解していた事だ。

ただ、たった一つ。

最後の贅沢を言わせてもらえるなら、別れの理由は納得のいくものであつて欲しかった。

……フランも、少しぐらい止めてくれたって良かったのに。

去り際、あろうことか顔すら見せてくれなかった。

もしかして……私フランに嫌われちゃったのか。

確かに嫌われても……納得のいく行動はしたけど。

いや、そうなるとフランだけじゃない。

下手をすれば館の全員から総スカンを喰らっていたのかもしれない。

優しく振る舞ってくれた美鈴や咲夜がお人好しなだけで、内心は疎ましがられていたのかも知れない。

上手く馴染んで無いつてのはそう言う意味だったのか？

客観的に見れば私は周りと同じく馴染めて無かったのだろうか。

……そんな事を言っても、今更わかりようが無いんだよな。

ともかく、事実上私は本日限りでクビって事になる。

それだけがれっきとした確かな事。

あーだこーだと未練を垂れたって気分は良くなるらない。

別れ際に、湿っぽいのは慣れないからな。

さらだば、紅魔館。

……やっぱり一人はさみしい枯草。

そんな訳で、フラフラと行く宛もないのに歩き続けるのだ。

まるで鉛のように軋む体を、精一杯踏ん張って。

これからどうするか。

そのの一事が最も懸念すべき事柄だ。

歩いたって良い答えが出る訳でもないが、ともかく進む。

そうすると、森の中で少し開けた所に出た。

日光が遮られる事なく差し込んでいて、土ではなく柔らかい草の

カーペットが敷かれている。

久しぶりの直射日光が体に染み込んでいく。

同時に、どっと膝から疲れが噴き出してきた。

「一休みするか」

「一生休ませてやるわ！」

木に持たれて座ろうとしたら、後ろから喧しい声が飛んできた。

幼なげで、エネルギーに満ち溢れた声色。

「……妖精か」

「ここであつたが百年目！死ねい！」

振り返って声の出所を見やると、そこには妖精がいた。

見たまんま冷たい印象を感じる青を基調とした配色の妖精。

私の方を指差し大声で前口上を述べている。

「そして、もう一匹。」

緑の髪をぽつちりで止めている大人しそうな顔。

まるで鬼でも見たかのような必死の形相で青い方の服の裾を掴んでいる。

妖精は二匹いた。

これは……かなり面倒な事になった。

できれば軽くあしらいたい。

「人を殺すときは名を名乗れ」

「アタイの名前はチルノ！そして！」

「だ、大妖精です」

ハキハキと喋るうるさい方に、無理やり前に出されてオドオドと自己紹介を始める緑。

その一幕で、二匹の関係性が窺える。

普通は、これから殺す相手に名前など名乗らないが、そんな事に気づける奴はそもそも人を殺したりはしないだろう。

それに、チルノと大妖精か。

私もどこかで聞いた事がある名前だ。

確かこの前、咲夜が笑いながら対処法を教えてくれたような。

薄らとした記憶だが、咲夜曰くチルノって妖精は少し頭が足りていないようで、わざわざ相手取るまでも無いと。

そう言ってた気がする。

馬鹿は嫌いじゃないが、喧嘩を売られたら話は別だ。

「よしチルノ。私を殺したくばこの問題に答えろ」

「な、なんだって!?!」

「三尺の鎖に虎が繋がれていた。そいつは、一体どれだけの草を食える?」

「え、えーっと」

私に言われるなりすぐにうずくまって指で何かを計算し始めるチ

ルノ。

どうやら噂に違わず筋金入りのトンチキらしい。

かかったなアホが！

青い髪に、どんどん赤くなっていく顔。

計算ではこの問題の答えは出ないと言うのに。

一心不乱で計算に夢中となつているチルノ、その横で「頑張れチルノちゃん！」と応援している大妖精。

どうやら策はピタリと命中し、私から意識が外されたようなのでこの間にさよならさせてもらおう。

三十六計逃げるに如かずつてな。

そうしてまた馬鹿のひとつ覚えみたいに何処かへ向かい歩き続ける。

すると、ふと差し込んでいた日光が無いことに気がついた。

気がつかなかつたが、辺りが薄暗い。

まだ火が沈むには早い時間なはずなのだが。

空を見ると、薄灰色の雲が立ち込めていた。

もうじき、雨が降りそうだ。

どこか、雨宿りをする場所を探さない。

ずっと、歩き続けた果てに私はある平地に出た。

まるで境界が引かれているかのように、そこから先がまるで異世界であるかのようにくつきりと開けた場所だった。

超然とした空気が漂っている。

それまでの鬱蒼とした雰囲気、まるで干潮のように引いて行った。

穏やかな雰囲気の中をすうつと爽やかな風が吹き抜け、私の髪をふわりと揺らす。

その風に乗って、どこからか上品な花の香りが鼻先をくすぐった。ぼうつとしながら顔を向ける。

そこにあつたのは、辺り一面に咲く向日葵の花であつた。

花たちは、一つの方向をむきただひたすらに咲いている。

太陽の恵みをこれでもかと花に乗せて、この灰色の世界を彩っている。

燦然と輝く黄金色の大地に、私は目を奪われて動く事が出来なかった。

なんて、綺麗なのだろうか。

この汚れた世界にもって、なお見劣りしない鮮やかさ。

私はずっと苦痛だった歩きの疲れも全て忘れて、向日葵畑の方へと駆け出した。

無我夢中、そこに行かなければならないとまで思えるような、一種の使命感に乗せられていた。

あの花を、もつと近くで見たい。

目的はそれだけであった。

そうして広い平野をまっすぐ走り抜ける。

走ってみれば数秒もしないうちに、難なくそこまでたどり着いた。

もう手で触れられる距離に、黄金の花弁がある。

花なんぞ愛でる趣味は無かったはずなのに、その花を前にしてみると思わず温い唾を飲み込んでしまう。

もう少して、あと一寸で……。

しかし、その手を出す事が出来ない。

触れてはいけない。

この完成された黄金比には、一滴の泥水さえ溢す事は許されないのだ。

ましてや私など。

右手を差し出し、しかしそこから微塵も動けず、アホのような格好で止まる。

……思えば私の目的地は、この場所だったのかもしれない。

一心不乱に歩き続けて、その果てがここならもう一度三途の川を渡ったって良いかも知れない。

それを見た者たちに馬鹿だ恩知らずだと言われたとしても、私はあらゆる種の優越感さえ覚えるだろう。

私が此処へ近づけば近づくほどに、この花たちは私の事を誘惑し、

外道へと指を曲げる。

そして、此処へ近付けば近づくほどに、この完成された世界を壊したく無い、壊してはならないと言う思念が私にのしかかる。

私には、相反する二つの衝動をどうする事も出来ず、ただ茫然としてタバコを啜るのであった。

「ねえ」

火をつけて煙を吸ったその背中から、声がかけられた。

優しく問いかけるような声だった。

たった二文字、口にすれば一音のその言葉だけで、

……私はゲロを吐きそうになった。

上手く息が吸えない。

口からタバコを取れない。

屠殺される豚のように、私は恐る恐る振り返った。

「私の花たちに、何か御用かしら？」

決して怒鳴られた訳ではないのに、体は萎縮し、頭は真っ白に染められて行く。

死ぬ。

その言葉だけが脳幹を支配する。

そこにいたのは、一匹の妖怪であった。

赤色の日傘をさして、不思議そうに私の事を見つめている。

萎縮し、その存在から目を逸らそうとする本能に抗い、じっとその瞳を睨み返す。

赤色の、チエック柄が描かれた服。

緑色の、すこし癖のある肩ぐらいまで伸びた髪。

そして……恐ろしい程に整ったその顔立ち。

鼓動がテンポを上げる。

自分の頬を、汗が伝っているのが分かった。

妖怪から発せられているのは、隠す気もない殺気。

カリスマやミステリーなど一片も含まれない、純粹な暴力のみを成分とした恐怖。

レミリアのような憧憬もない。

幽々子のような未知もない。

生物に刻まれた本能からの恐怖。

今まで生きていて、一度死んだ事だつてあるのに……ここまで恐ろしい思いは無かった。

たった一つ確かな事があるとするのなら……私は殺される。

この妖怪の名は……

「風見幽香……」

「気安く名前を呼ぶな」

優しい声から、冷徹で抑揚のない音声に変わる

ひゆうつと冷たい風が吹いた。

かまいたちの様に、私の頬を切り裂く様な風。

気を失いそうな緊張に耐え、持てる限りの力で睨む。

風見幽香。

辞書でその言葉を引いても意味は出てこない。

その言葉の意味を知ったものは皆……殺されているから。

「ここは私の庭よ」

「……それは済まない事をした」

「ええ、もう済まないの」

そう言うと、あろう事かこの状況にもつとも遠い表情を妖怪は浮かべていた。

目を細め、口角を上げて。

花のように美しい満面の笑みが、そこに浮かんでいた。

次の瞬間、私の視界は唐突に暗転する。

顔に、硬い感触を感じ、痛烈な痛みが体を駆け巡る。

地面に顔を叩きつけられたのだ。

悲鳴をあげる間もなく、今度は後頭部を中心に全身に鈍い痛みが走った。

後ろから頭を蹴られたのだ。

揺れる視界は、赤い液体が飛び散っているのを捉える。

あれは……血？

体が宙を舞った。

骨が砕けたような痛みを伴って。

受け身も取れず、硬い地面に叩きつけられた。

抉る様に地面に3メートルほど滑り込む。

死ぬほど、痛い。

というより、死ぬ。

かなり吹っ飛ばされたはずなのに、何故か悪魔は近くに立っていた。

しゃがみ込み、私の髪の毛を鷲掴む。

髪の毛ごと、顔面をグイッと持ち上げられた。

その視界が捉えていたのは……鋭い目。

高い鼻。

そして……恍惚した頬。

三秒間、目があった。

私の殺し方を吟味しているような顔。

次の瞬間。

硬い地面に、勢いよく顔面が押し付けられる。

ズリズリと摺鉢で胡麻を擦るように前へ後ろへと擦られる。

顔の皮が剥がされて行くのを、薄皮一枚一枚克明に感じる。

地獄のような激痛。

パツと髪から手を離され、ドサリと地面に倒れた。

痙攣する私の体。

次の一撃は分かっている。

蹴りだ。

足を上げているのをハッキリと目で捉えた。

顔面を目掛けて放たれる殺人の蹴り。

圧倒的な威力に、鼻の骨が折られた。

何度も、何度も、何度も蹴られた。

顔、腹、指。

飽きもせず、懲りもせずに執拗に繰り返される拷問。

ぼやけて行く世界の中で、一発一発毎に体から吹き出す赤い鮮血が、やたら目に刺さった。

どれほど蹴られたか。

もう折れる骨が残って無いくらい、蹴られた。

この妖怪は……甚振っているのだ。

死なない程度に加減し、弱き物が悶え苦しむ様を堪能している。

翩り、甚振り、半殺しにする。

そして、最後には呆気なく殺すのだ。

目障りな蚊を叩き潰すように、戸惑いも罪悪感もなく。

「来世で覚えとくと良いわ。長生きしたいなら、私と出会わない方が
良いと言う事を」

「残……念だが……っ私に……来世は無いんだ」

顎の骨もヒビが入り、右頬は抉れている。

それでも無理矢理口を動かした。

そこで私は、自分の顔が濡れているのに気づく。

体も、痛みで感覚が鈍くなっていて分からなかったが、全身がび
しよ濡れた。

血とは違うサラリとした液体。

これは……水。

その正体に気づくと、耳がザアザアと言う音を捕らえた。

雨が、降っているのだ。

死に際に雨が降るなんて……いや。

そこまで考えて、自分を叱咤するように土を握りしめる。

せつかく貰った命。

こんな無駄な死に方を、してたまるか。

「つぐー」

「這いつくばるのね。まるでミミズの様」

はるか高みから、見下ろされる。

血塗れで雨に濡れている顔を目掛けて、ピツと唾を吐かれた。

そして這いつくばっている体に、ドスンと衝撃が走る。

いきなりすぎて、口から吐瀉物が溢れそうになった。

私の上で座っているのだ。

しかも、勢いをつけて。

グツと歯を食いしばる。

何か……何かを起こすんだ。

こんな無様な死に方じゃあ、誰にも見せる顔が無い。

何かを。

悪魔を殺しうる何か。

雨……暗雲……。

「さようなら」

ダメだ……何も浮かばない。

死ぬのか？レミアアの80年は？幽々子の想いは？

長生きする為と銘打ってここまで来たのに。

こんな理不尽な死に目を見るのか？

薄暗い曇天が空を覆っていた。

その下で、立ち上がった大妖怪は傘を天に突き上げ今にも空を貫かんとしている。

激しく打ちつける雨。

世界が、スローモーションになって行く。

悪魔のような笑みを浮かべて、私の首に傘を振り下ろしている幽香。

落ちてゆく雨の一粒一粒が、地面に当たって、ピチュンと弾けるのを、紙芝居の様にゆっくり、ゆっくりと見つめた。

ああ、死ぬんだな、私。

振り下ろされた傘。

メリメリと首を裂き、この日一番鋭い痛みが走った。

胴体と頭が離れて行く感覚。

皮が引き裂かれ、頸動脈に触れ、あと少しで骨が途絶える。

ゆっくりと、ゆっくりと流れる時間。

傘が今まさに私の首を切断しようとしたその瞬間。

その瞬間！

爆裂する閃光、轟く空の雄叫び。

空から、10億ボルトの怒りが降った。

一筋の稲光が、龍の咆哮が如く幽香に落ちた。

しばらくの反響。

より一層強く打ちつける大雨の滴。

生傷だらけの体。

傘が、止まった。

数秒経って、私はまだ繋がっている自分の首をさする。

文字通り、首の皮一枚繋がっていた。

そして立ったまま、微動だにしない幽香を見る。

「……生きてる」

私は、死ななかつた。

全く動かない幽香。

こびりついた恐怖は雨で洗い流され、無数の傷口に雨水が染みる。

ともかく溢れた言葉はそれだけであつた。

風見幽香は、唐突に目を覚ました。

そして、自分がベッドで横たわっている事に気づいた。

体にかけていた馴染みのある毛布は、そこが自分の家の中である事を示唆していた。

「これは……」

ゆっくりと体を起こすと、全身に纏わりついてくる違和感。

何かが、全身に巻かれていた。

これは……

「包帯？」

体に巻き付けられた白い布は、幽香の体を覆い薬品特有の強い匂いを放っている。

それを一枚、腕に巻かれていた所を剥がすと真っ黒に焦げた火傷の跡が映った。

空気に触れ、傷跡がヒリヒリと痛む。

その痛みから体を守るために、全身に包帯が巻かれているのだ。

誰がこんな事を。

幽香にはそれが気になった。

「っー」

立ち上がろうとしたらズキンと頭が痛んだ。
少しよろけそうになるも、ぐっと踏ん張って耐える。

頭痛など普段の幽香なら何とも無い。

たとえ腕を切られたって平気で立ち上がる妖怪なのだ。

ただ、火傷で炭になりかけている体では軽く風に触れるだけで顔を
顰めてしまう。

ドアを開け部屋を出ると、ふわっと何かの匂いがした。

いつもは花の香りで満たされているはずの家に、全く似合わない味
噌麴の匂い。

出どころは、階段を降りて右にある厨房。

階段を降り、そこに近づくと厨房からトントンと言う音が聞こえ
た。

幽香は知っている。

たまに料理もするから、その音に馴染みがあるのだ。

あの音は、包丁とまな板の……。

「私の家で何をやっているのかしらっ？」

「っ！」

目の前の人間は、私の声に気づくと動揺したのか包丁を手から滑ら
し、落ちた包丁が足に刺さりかけていた。

間一髪で回避し、間抜けな悲鳴をあげている。

わかりやすいくらい恐怖と動揺に満ちた顔をしていた。

眉間に皺がより、眉は吊り上がり、汗が滴っている。

どうやら、ご飯を作っていたらしい。

鍋に火がかけられていて、まな板では人参が歪に切られている。

ここが私の家だと言う事を、まさか知らない訳でも無いだろうと幽
香は思った。

貴子は、幽香の方から目を離さずにドギマギしながら落とした包丁
を拾う。

出された手には、幽香の倍以上分厚いの包帯が巻かれていた。

所々が血で滲み、赤く染まっている。

「何の真似？」

「……飯を作っている」

「見たらわかるわ。何故ここで作っているのかと聞いているの」

「……腹が減ったから」

「ここは私の家よ？」

「……お邪魔してます？」

言葉の端々を震わせながら会話をする人間。

小刻みに震えている様子はまるで小鹿の様だ。

その姿はどことなく滑稽で、殺伐とした雰囲気の中思わず少し笑ってしまった。

「逃げないの？」

「足が動かない」

「そう。残念ね」

ほんの少し間が空いて、貴子が言う。

「殺すのか？」

貴子の発言を聞いて、どうしようかしらと幽香は思慮する。

確かに今すぐ殺しても良いが、それにしても少し気になる事が多いのであった。

「そうねえ。ご飯を作ってからでいいわよ」

「……一緒に食うのか？」

「ええ」

幽香はそう言ってリビングにある椅子へと腰掛けた。

考えるのは、今日の前で起きている現象。

（不思議ね。今まで数知れない程の人間を殺してきたけど、逃げ出さうとしない者は……まして、私に包帯を巻きご飯を用意している者など一人もいなかった。

あれほど恐怖していたのに何故ここに居られるの？

殺す前に、その事だけを確かめたい……。

あと、少しお腹が空いたわね）

「味噌汁と、ご飯……あと野菜炒めだ」

しばらくして、人間はリビングへとご飯を運んできた。

キッチンと幽香の分も用意したようで、彼女の目の前にも幾つかの皿

が運ばれてくる。

カチャリカチャリと小気味良い音を立てながら並べられていく食器。

乱雑に見えて、箸の置き方や配膳の順番など、細かい作法はしっかりとっていた。

人間特有の習性だろうか。

配膳が終わり、二人は向かい合うように腰掛けた。

幽香は手を合わせ、小さくいただきますと呟く。

こう言う場では、作法に則るのが幽香のポリシーである。

片や人間は、何も言わずに食事を始めていたようでそそくさと味噌汁に口をつけていた。

「……………」

食事の間、二者に会話は交わされなかった。

しかしそれは当然の事である。

妖怪と人間。

殺そうとした者と殺されかけた者。

幽香と貴子。

それが同じテーブルで同じ飯を食うと言う事がそもそも考えられないイレギュラーなのだ。

目の前の人間は作法もなければ、全くもって行儀も悪い。

嫌い箸こそしないが、まるで乞食のようにご飯にありつく。

かきこむ、という表現がピッタリな食べ方であった。

だが、そんな一つ一つの挙動を幽香は何故か目から離せなかった。

味噌汁を啜って、ご飯をかきこみ、水をゴクゴクと飲む。

なんとも美味しそうに食べるものだ。

しばらくの間箸を止めて、貴子に釘付けになっていた幽香。

野菜炒めを食べようとしたところで幽香の視線に気づいたのか、貴子は眉を顰めて怪訝そうな顔をしながら幽香を睨む。

目があった幽香は、首をかしげ、優しく微笑んで返した。

その表情に面食らった貴子は、飯を喉に詰まらせたのか胸の辺りを手でドンドンと叩き、水を口一杯含んで飲みこむ。

水によつて溜飲が降り、大きな声で苦しそうに咳をする。全くもつて、一挙一動が騒がしい。

流れている雰囲気は秋空のように色を返る。

殺伐とした空気かと思えば呑気な雰囲気になって。

本当に不思議な事だ。

……あと、この人間の味噌汁はそこそこ美味しい。

野菜炒めも切り方こそアバウトだが、その味付けは中々繊細な物だ。

悪くない出来ね、と幽香は内心で評価するのであった。

食事を終え、自然な流れで食器を片付ける人間。

手慣れた所作で皿を重ね、よっこらせつと言いながら厨房に向かう。

見ていた幽香は辛抱たまらず、とうとう秘めたる疑問を口にしてしまった。

「貴方、正気？」

「え？」

急に話しかけられた事で驚いたのか、目を見開いて声を裏返す貴子。

先程のような体の震えは止まっている。

それどころか落ち着きすぎている程だった。

腹を括ったのだろうか。

正気の沙汰とは思えないが。

「殺すわよ？・私は貴方を」

「……」

意味深な沈黙。

呻き声も笑い声もあげない。

貴子は険しい顔だけを浮かべていた。

しばしの無言により、焦らされるような気持ちになる。

幽香は抱いたことのない様な歯痒さを感じた。

難しい顔をして、黙りこくる人間。

しばらくたって人間が返した返答は、これまた不思議な内容だつ

た。

「煙草、いいか？」

「……ええ、窓は開けて頂戴」

「ああ」

煙草が吸いたいのか。

死ぬ前に寿命を縮めておくとは、妖怪の幽香からすれば見苦しい事に思える。

貴子は厨房の窓を開け、ポケットから取り出した煙草に火をつけた。

ゆっくりと大きく吸って、深く長く吐いた。

「咲け……」

「……え？」

険しい顔が柔らかくなったのかと思えば、帰ってきたのは主語も目的語もない文であった。

急で曖昧な返答に、少し理解が及ばない。

困る幽香を、人間は追い討ちの様にさらに困らせる。

「私は咲けず木なんだ」

「咲けず木？……咲けないという事？」

「ああ……咲けない」

ますます理解不能だ。

咲くのは、花の仕事。

人間が咲くとは一体どう言う事なのだろうかと幽香は考える。

もしや、素っ頓狂な事を言って困らせるつもりなのだろうか。

しかし、嘘をつこうとしているというのにはあまりにも真っ直ぐな瞳だった。

何人も殺してきたから、嘘をついていないかどうかぐらい分かる。

三秒開けて、遺言を残すような口ぶりで貴子は言った。

「だから……最後の頼みだ」

「何かしら」

「咲いていなくても良い。刈ってきて欲しい」

言い切ると、人間は膝から崩れるように頭を下げた。

急所である頭を、今この場で下げる事がどれ程の意味を持つか。それほどまでに花を刈ってきて欲しいのか。

全く酔狂な人間だ。

妖怪に、死ぬ前のたむけとして花を頼むなんて。

そんな美しい死に際をお望みなのだろうか。

先程の食事のあり方との差が、どことなく愉快だった。

幽香は、少しだけ口角を上げて返す。

「……刈ってくる必要はないわ」

「え？」

そう言って幽香はパチンと指を鳴らす。

すると、どこからか辺りに無数の花びらが舞い、人間の頭にポンッと花を模した髪飾りがついた。

可愛らしく装飾されたひまわりのコサージュである。

「これで、いいのかしら」

「あ、ああ」

「最後に聞いわ。貴方、名前は？」

「……貴子。私の名前は貴子だ」

「っ！」

その名を聞いた瞬間に幽香は勢いよく吹き出した。

数秒呆気にとられて呆然としたのち、徐々に笑いが込み上げてきて、腹を抱え、涙を零しながら大笑いしている。

騒がしい夜明けであった。

全く、私は運が良いのか悪いのか。

歩き疲れて判断が鈍ったのか向日葵に気を取られ、あろう事か最悪の庭へと足を踏み入れてしまった。

そこからは不幸の連鎖。

縄張りを荒らされたと知った狂犬は、私の事を齧り、甚振り、そして弄ぶ。

殴られ、蹴られ、皮をズルズルと削られ、顔に唾を吐かれた。

私はあの世への片道切符を持って、快速特急へとご案内だ。

しかし、あの世の人とこの世の人、双方に手間暇かけてもらったのだ。

こうもすぐに逝ってしまつては面子が立たない。

その、死んではいけないと言う強い願いが成就したのか。

今まさに殺されようと言うところで、風見幽香が振り上げた傘が避雷針となりその身に雷が落ちたのだ。

聞こえたのは、雷の轟音か、それとも悪魔の悲鳴か。

幽香は気を失った。

恐ろしきは、気を失つてなお地面に臥さない有様。

立ったまま意識を絶たれていた。

かたや私は、辛うじて生き残つてしまった。

満身創痍で、血塗れで傷だらけで。

地面に伏して泥になりかけた雨水を舐めさせられている。

ズタボロながら生き残つた。

これは運が良いのか。

否、間違いなく悪い。

そもそも、フラフラと歩いてるだけの所を、全身ボコボコに殴られ蹴られ、骨も粉々にされているのだから。

よく、落雷の命中率は宝くじに当たるのと同じ確率だとか言う輩もいるが、それで生き残つたからラッキーとは思えない。

言うならば、運は悪いがやたらとしぶといて所だろうか。

ゴキブリのような有様だ。

もしくは、花に群がる害虫の類。

100歩譲つて仮に生き残つたのが僥倖だとしても、現状は不幸の極みだ。

せつかく死ななかつた体は、骨が折れ筋肉は絶たれ全く言う事を聞かない。

それはもう、反抗期の娘とか自我だけ肥えた年寄りぐらい私の声を受け入れない。

そうやって動けずに曝け出された無防備な肉体を、冷たい雨がドンと冷やしている。

それに緊張で麻痺していて気がつかなかったが、大量出血で頭もクラクラしてきた。

不味い。

このままではゆっくりと、しかし確実に緩慢に死んでいく。ともかく今は、この場から離れる事が最優先だろう。

しかしそうもいかない。

立ち上がろうとすると膝から血が噴き出る。

……足が、折られていたのだ。

これでは、遠くまでは逃げられないだろう。

せいぜい先程チルノと出会った場所くらいが関の山だ。

そうやって森の中へ私のような動けない者が入って仕舞えば……。

もしそれで何も起こらないのなら、私のような妖怪退治屋なんて仕事は無いらぬ。

今、この体で森の中へ入るのは自殺行為だ。

普段ならなんとも無い妖怪も今会えば死ぬのは私だろう。

それより、何処かで暖をとって手当を。

どこか屋根のある場所は無いだろうか。

這いつくばりながら、辺りを見回す。

何も無い平原を、静かな風がそよそよと吹いた。

思えばここは、風見幽香の庭。

そんな所に、民家などある訳が無い。

万事休すだ。

しかし、その予想はあらぬ方向で裏切られる事となる。

それは希望か絶望か。

向日葵畑の奥に、レンガで作られたお洒落な家が建っていたのだ。

アレは誰の家だ？

考えるまでも無い。

ひまわり畑に住める者など、この世に一人しか居ないのだから。

隣で気を失っている妖怪に、視界のピントが合う。

雨に濡れて服が透けそうになっている。

びしょ濡れなのは私も同じ。

手を打たないと、死ぬ。

しかしあの家は、危険すぎる。

……あそこに、入るのか？

今まさに私の命を絶とうとした者の住処に、自ら上がっていくと言
うのか？

そんな馬鹿な事を。

普段ならそうも言えただろうが、今は普段ではない。

血液も体温も、恐ろしいほどに失われている。

私の意識は死の淵をケンケンパしていた。

馬鹿な事をしないと、まもなくもってあの世行き。

「行くしか、ない」

勢いをつけて決心し、気持ち揺らいでしまう前に動く。

血塗れで傷だらけの体は、一寸動かすたびに悲鳴をあげる。

電撃が走るような痛みには耐えながら上体を起こしていき、なんとか
倒立二足歩行まで持っていった。

折られた足で、砕けた手で。

よろよると、曇天の下、目測200メートル先の幽香の家を目指す。

一歩踏みしめるごとに体は軋み、膝から血が吹き出す。

走る痛みは崩れる山のように。

土砂降りの中を、雨で滑って何度も転げながら進んだ。

ゆらゆらとナメクジのように進んでいく。

そして私を殺そうとした者とのすれ違い様にある事を懸念する。

……コイツも、連れて行くべきだろうか。

これは大問題であった。

仮にも家にかかるわけだから、目覚めて家に帰ったら私が居たので
はあまりに拙いか。

その場合、今度は生き残る事は叶わないだろう。

しかし……連れて行くこうとしても運んでいる時に目が覚めたら？
間違いなく殺される。

なら、今この場でトドメを刺すか？

……この妖怪を殺す手段など、この世に無い。

しかし連れて帰って、目を覚ました時、どうなる？

……わからない。

ただ私には連れて帰るのが、一番違和感のない行動のような気がした。

どっちみち殺されるなら……運ぶしか無いのか。

腹を括り、見た目相応に軽い風見幽香を背負って私は更に進む。

上にのし掛かられた時は巨人の足にでも踏み潰されたのかと思っただが、背負ってみればその体は小さく、儂く、柔らかい。

雨が私たちを不作法に叩いた。

衣服が雨水を吸ってどんどんと重くなっていき、体の傷跡は膿になりかけていた。

血の回らない頭で途絶え途絶えに考える。

……なんでコイツを助けなきゃいけないんだ。

今コイツが目覚めたら、頭が消し飛ぶ。

どうか目覚めないでくれよ。

雷に打たれたんだから、妖怪とて死んでもおかしくない。

なら、置いていっても良かったのでは？

そう思ったものの、私の足は最後の一步を踏んでいた。

家の前までついてしまった以上、あげるしかない。

外壁が赤いレンガで作られている、モダンとでもいうのか、そう言

う洋風な雰囲気の家であった。

恐る恐るドアを開ける。

軋むような音が鳴った。

中に誰もいないのを確認し、倒れるように中へと入る。

濡れたまま家にかかるのは気が引けたが、どうしようもない事だ。

床を濡らしつつ、洗面所らしき所から大きめのタオルを何枚か持ってきた。

幽香にはそれを巻いておき、私もそれを使って体を拭いた。

乾かす為に服を絞ると、赤色の液体がボトボトと溢れでる。

裸になった体は、ほぼハンバーグになりかけていた。

ここまで来れば、何周まわって笑えてくる。

そして唐突に虚しさと震えに襲われるのだ。
そうならないように無心で真っ白だったタオルを薄紅色に染めて、
体を拭いた。

幽香を引きずりながら部屋を進むと、暖炉のある部屋にたどり着いた。

火はパチパチと憩っており、ドアを開けた瞬間から熱風が体を包み込んだ。

血液が巡り、体温が上昇して行く。

暖かい。

近くにより、手のひらをかざして暖をとる。

冷たい体が解凍されていく。

どうやら体温は無事に回復しそうだ。

後は傷の手当て。

私は持っていたカバンから、包帯を何巻きも出す。

こういう時の為に咲夜がカバンに忍ばせてくれたのだろう。

備えあれば嬉しいなだ。

まずは足から。

腓骨が折れかけているので、添木をしてぐるぐると巻く。

生傷が腐らないように、簡易的な消毒もした。

カバンに入れていた酒でだ。

後でヤケ酒しようと思ってたのだが、思わぬ形で役に立った。

そこから同様に腕、首、胴体と包帯を巻いていく。

橈骨、上腕骨ともに、折れぬよう保護しておいた。

洗い治療だが、ともかくこれでひとまずと言った所か。

包帯を巻き終わり、ようやく生き残った実感が湧いてきたのか、大きなため息が出た。

はあ……。

「……コイツもか」

包帯でぐるぐる巻になった私の横で、タオルに包まれながら気を失っている幽香。

背負ってて分かったが、息が荒い。

意識が混迷している中、体が傷だらけなのは拙いだろう。

……コイツの治療もやっておくべきだろうか。

どうやって？何故？

私を殺そうとした奴。

人類の敵。

悪魔、サディスト、鬼畜。

助ける義理も道理もない。

放っておいたって死にはしないだろうし。

……どうせ死なぬなら、このまま置いておくのも精神衛生的に良くないか。

目覚めるのがいつかは知らないが、ずっとこんな傷だらけの者がいては心持ち悪い。

とはいえ。

どうやって処置を施す？

服を脱がす？

……ええい、ままよ！

勢いに任せて、巻いてあったタオルを剥ぎ、水で肌に張り付いた服を強引に脱がす。

現れるは、艶に濡れた豊満な肉体。

所々に火傷の跡が見られるが概ね健康体だ。

雷に打たれてダメージはたったのこれだけか。

妖怪とは、未恐ろしいものである。

背筋がゾクつとした。

……ただ、今私の目の前にいるのは、頬を赫らめて気を失っている冷たい顔をした絶世の美人なのだ。

まじまじとよく見れば、鋭い目、発色の良いポテつとした紅い唇。

少し苦しそうに聞こえる息遣い。

……優れた武人の中には、組み手が終わると極度の緊張からの反動で性に盛る者が居たそうだ。

私は優れた武人では無いが……思わず唾を飲んでしまう。

これは……。

治療の為、そう治療の為だ。

ちつとばかり、失敬して……。

そう自分に言い聞かせてさりげなくその乳房に触ろうとすると、気を失っているはずなのに幽香に睨まれた気がした。

……うん。やめておこう。

無心で包帯を巻き、二階にあったベッドへと寝かせておいた。

目を覚ました時に、何を思い、何を行動するかは不明だが、できれば殺さない方向であって欲しい。

だってここまで背負って包帯巻いて、超良い奴じゃん私。

……今思うと、自分の事を殺そうとした奴にここまで施しを与えるなんて、気が違ってるな。

血液不足で思考判断能力が鈍ったと思っておこう。

それに妖怪は気まぐれだ。

風見幽香はその最たる例と言って良い。

もしかすると、見逃してくれるかもしれない。

もしくは、私の足が治って逃げ出せるようになるまでは、ずっと気を失っていて欲しい。

こうして、人妖の奇妙な共同生活が始まった。

翌朝目が覚めると、ボヤけた意識の中で私は自分の腹が空いていることに気がついた。

気がついてしまうと厄介な腹の虫はぐうぐうと鳴き声をあげる。

……飯でも作るか。

暖炉の前で眠っていたらしく、体はぽかぽかしていた。

降りかかった暴力もポカポカぐらいで済めば良かったのだが。

厨房に向かい、包丁やまな板があるのを確認する。

一通りの材料もあったのでその中から野菜をいくつか拝借した。

もしここに材料がなければ、途端にこの出刃包丁は人殺しの道具へ早変わりだ。

人間を捌くなど想像したくもないが、あの女ならやりかね無い。

その不安は幸いにも外れ、どうやら普通に料理に使っていたらしいと言う事が発覚した。

熱した出汁に具を入れて、少しずつ味噌を溶かす。

この際、鍋の下の方で溶かしてはいけない。

米を炊き、野菜を炒める為に大まかに切る。

米を炊く時に蜂蜜をほんの僅かだけ入れておくと、ふっくらとした炊き上がりになる。

米が立つと言う表現がぴったりだ。

不器用で飯の炊き方も知らなかった私が、こうして料理を出来るようになったのは妖夢の熱心な指導のお陰だ。

ありがたやありがたや。

そう思うとなんだか楽しくなってきた、私は呑気にもふんふんと鼻歌を歌いながら人参を切っていた。

そう言うときに限って事は起こる。

「私の家で何をやっているのかしらっ？」
「っ！」

後ろから、冷たい、しかし色のある声。

もう目覚めたのか！

なんていう速さだ。

背後にいたのに全く気づかなかった。

驚きで包丁が手から滑り、自由落下のまま足に刺さりかけてしまった。

っ危ね！

金属音を立てながら地面を滑る包丁。

間一髪で折れた足を動かし、なんとか避けることができた。

その一連の間抜けな行いを、風見幽香は神妙な顔で見ている。

そう見つめないでくれよベイビー！

……本気で怖いから。

アホな事を考えながら包丁を拾おうとすると、まさかの声をかけられた。

問答無用で殺されるかとも思っていたから、意外な展開だ。

「何の真似？」

ええ。自分でもわからないです。

多分現在完了進行形で血迷って人生を棒に振ってると思います。表面上は、米を炊いているだけです。

「……飯を作っている」

「見たらわかるわ。何故ここで作っているのかと聞いているの」

「……お腹が空いたから」

「ここは、私の家よ?」

「……お邪魔してます?」

ああ、もう何が何だかわからない。

何を訊問されているんだ?

立ち止まって会話をしているはずなのに、一歩ずつ幽香に壁際へと追いやられているような幻覚に陥る。

そして、ずっと睨まれているのはよく分かる。

「逃げないの?」

「足が動かない」

お前のせいだな、と心の中で毒づく。

「そう。残念ね」

残念だと。

何がどう残念なんだ。

何一つ念が残っている事なんざ無いだろう。

一応問いたです。

「殺すのか?」

「そうねえ。ご飯を作ってからでいいわよ」

「……一緒に食うのか?」

「ええ」

……最悪の展開になってしまった。

最後の晚餐が、手作りの野菜炒めなのか。

いや、晚餐でもないから……最後の朝食?

レオナルドもセンスの無い題名にさぞお怒りだろう。

どっちにしろ、もっと豪勢に肉でもぶち込めておけば良かった。

朝から肉は辛いとか、枯れた年増の常套句みたいな事言わなきゃよかった。

というより、一緒に食べるのか？

この妖怪と？

……無理！

幽香は私の意見など聞くわけもなく言いたい事を言うだけ言っ
りビングへと向かっていった。

自己中の権化だな。

「味噌汁と、ご飯と……あと野菜炒めだ」

なるべく粗相のないように、ゆっくりと皿を差し出す。

下手して気を立てたら野菜炒めに人肉トッピングは免れ無い。

まずまずの出来栄えだが、これで大丈夫だろうか。

何せ、妖夢や幽々子以外にご飯を提供したことはあまり無い。

まして、殺害予告を受けた相手など。

とは言え自分用に作ったから見た目も悪いが、食わせてやってるの
はこっちなものだから。

文句があるなら食べなければ良い。

そう思いつつ妖夢に習った通りに皿を配膳した。

ご飯は左手、味噌汁は右手。

これだけの事を覚えるのに苦労したものだ。しみじみ。

配膳を終え、向かい合うように坐る私たち。

……気まずい。

居心地悪く、たまらず味噌汁に口をつけたら、妖怪は両手を合わせ
小さく「いただきます」と呟いていた。

そう言うことするタイプかよ。

とことん噛み合わない。

そこからは食器が立てるカチャカチャという音以外無音。

黙々と進む食事。

ある意味、死ぬより辛い。

もう、飯の味が一つもしない。

……なんかめっちゃ私の事見てるんだけど。

え、こわ。

何その表情。

やたら嫌な予感がして幽香の方を見たら、思わず目があつてしまつた。

心持ちは蛇に睨まれた蛙。

すると幽香は首を傾げ、愛嬌のある美しい笑顔を浮かべた。

それを見て、驚きで喉を詰まらせてしまう。

っ水！水！

ふう……ああ、もう生きてる心地がしない。

私が食べてるのは紙粘土か？

味付けはかなり気を使つたはずだが。

不幸は蜂蜜味というが、私の蜂は全員辛口の蜂蜜を出すそうだ。

ああ、早くこの場から逃げ出したい……。

そう思いながらもなんとか食事を終える事ができた。

食べ終わる時も、小さな声で「ごちそうさま」と呟っていたので、

こつちもこつそり「お粗末様」と言つといてやった。

食後、その場にいられず、逃げるように食器を片付けに行こうとし

たところで、とうとう幽香から声をかけられてしまった。

「貴方、正気？」

「え？」

そんなの当然だ。

正気な訳無い。

遠目に見ても気が狂つてる。

「殺すわよ？・私は貴方を」

「……」

……やっぱり、包帯巻いたぐらいじゃ気は変わらないよなあ。

断言されると、より一層恐ろしい。

今度は雷も嵐もない。

気まぐれは起きず。

悪魔は悪魔。

天使にはなれないのだ。

とうとう年貢の納め時……か。

覚悟は（無理矢理）していたが、死ぬ前つてのはどうも落ち着いて

しまうらしい。

何故か冷静になってきて、頭が回転を取り戻す。

死ぬ前に、やっておきたい事がいくつか。

一つ。

「煙草、いいか？」

「……ええ、窓は開けて頂戴」

「ああ」

良いのか。

ダメ元で聞いたんだが、喫煙OKなんだな。

今時珍しい。

世間はもつぱら禁煙ブームで嫌煙ラツシユ。

言われたように窓を開け、タバコにマツチで火をつけた。

溜息のように煙を吐くと、色々な事が頭をよぎる。

どうせ死ぬなら、最後まで楽しい死にたい。

フランの為に死んだ時とは違う。

あの時は言ってしまうえば頭がおかしくなっていたし、死ぬ事なんざ二の次三の次だった。

今は違う。

今は、死にたい訳でも何でもない。

生きたいという欲求が薄い性なのは事実だが、別に特別進んで死にたい訳ではない。

しかし……これは自然災害に見舞われたようなものだろうか。

死んでも良いと思えば生きて、生きたいと思えばこの様。

理不尽に、唐突に死神はやってくる。

今度死んだら、向こう側ではどんな扱いを受けるのだろうか。

……ああ。

今は、全て忘れて酔っ払いたい。

「酒……」

「……えっ？」

酒を飲みたい。

死ぬ前に、好きナだけ。

幽香は驚きと困惑の混ざった顔をしていた。
それもそうだろう。

説明が必要だ。

「私は酒好きなんだ」

「酒好き？……酒無いという事？」

「ああ……酒無い」

さつき気づいたがこの家には酒が無い。

味噌や米があつてどうして吟醸がどこにも無いのだ。

妖怪は、酔うかい？

あ、死にたい。

ともかく、酒が無いなら……。

全くもって間抜けで、トンチキな頼みだとは思うんだが一つだけ聞いてほしい。

「だから……最後の頼みだ」

「何かしら」

「最低無くても良い。買ってきて欲しい」

酒が無いのはそう言う家もあるのだろう。

しかし今から私を殺さんとする妖怪に、酒を買ってこいと命ずるなんてどこまでも不思議な話だ。

そんなのは全身全霊理解しながら、頭をさげ、哀れに懇願する。

へべレケに酔ってから死にたい。

ちっぽけな人間の最後の願いを、どうか聞き入れてはくれないか。

足が折れてるのだから逃げ出す余力なんて無い。

私はここから動けないのだから。

それすら疑うのなら、足の一本くらい折っていても構わない。

その辺の椅子に縛り付けていてくれるとも良い。

ともかく、酒を……。

するとしばらくして、幽香は不敵な笑みを浮かべた。

最初に見た時とは違う、意地の悪さがありありと伝わってくる悪どい微笑。

「……買ってくる必要はないわ」

「え？」

それはつまり酒なんか飲ませずに殺します、という事か。

……所詮、悪魔は悪魔だ。

妖怪は妖怪だ。

その気まぐれに願いを乞うなど、全くもって無理な話だったのだ……。

すまない。

レミリア、そして紅魔館のみんな。

幽々子、妖夢……。

馴染まない体に気を遣って暇を出してくれたのに、どうやらここまではらしい。

全く、恥の多い生涯であった。

涙がこぼれないよう覚悟を決めて幽香を見る。

覚悟を受け取ったのか幽香はにっこりと笑って指を鳴らした。

その瞬間、何処から出てきたのか辺りに大量の花びらが舞い散り、私の頭に違和感が乗っかる。

指で確かめると、何かが乗つけられていた。

これは……コサーージュ？

「これで、いいのかしら」

「あ、ああ」

何が良いのか分からない。

どう見てもこのブローチはノンアルコールだ。

何故酒を買ってきてと頼んでこれが頭につく？

わからない。

困った私に追い討ちのように幽香はたたみかけてくる。

「最期に聞いわ。貴方、名前は？」

「……貴子。私の名前は貴子だ」

最期、と言う言葉に引つ張られて気分が沈む。

名前か。

今世で覚えておくと良い。

私の名前……貴子という名前を。

私が名乗った瞬間、幽香は数秒呆然として、そして声高らかに笑い始めた。

悶えるように、見たことのないような可愛らしい笑顔で。

……私の名前、そんなに面白いか？

騒がしい夜明けであった。

無理が通れば

私、完全復活。

満身創痍は平穩無事に戻り、折れた腕も砕けた足もピンピン動く。インパルス走る。永久記憶不滅。

もつとも傷が深かった右足と鼻の包帯を取り、ようやく元の体へと元通りだ。

ヒーロー見参！

体が元気になった反動か、心が浮ついていつもより心の中の眩きが増える。

血が染み込んで鉄臭かった包帯ともおさらばだ。

ここは、かの風見幽香が住んでいる家。

あの、暴力が服着て歩く様な大妖怪にはてんで似合わぬ、窓際なんか小粋な花が飾ってある様な可愛げのある内装。

何も知らない人が見たらきつと可憐な少女を思い浮かべる事だろう。

どう言う訳か私はここに住み着いていた。

およそ二週間程、ここで寝食を共にしたと言うのだ。

どうしてこうなったんだろうか。

幽香が私の事を殺すと宣言したので、負けじと私も最期に名前を名乗ってやった。

すると何が面白かったのか悪魔は腹を抱えて笑い悶え、苦しそうに涙を零しながらこう言った。

「ふふふ……早く食器を洗ってきなさい」

言われた私はキョトンとしつつも流し台へと向かっていった。

そこからここまでのらりくらりと生き延びている。

どうやら私は生きて良いそうだ。

しばらくは、一度油断させて安堵した所を殺されるのではと気が気でなかったのだが、二週間も経てば少しは余裕も出てくる。

それはストックホルム症候群の末期症状だとやっかむ輩も居るだろう。

しかし、幽香は毎日私に夕食を作れ、朝食を食えと言ってくるのだ。それはそれは立派な閨白宣言である。

ごく自然な流れで夜は私、朝は幽香が作るということになっていった。

どういう風の吹き回しか、幽香は毎日私に一汁三菜揃った贅沢な朝食を用意してくれている。

目が覚めると美味しいご飯が用意されている訳だから心の警備員も仕事を辞めた。

幽香は洋食派なのか、主食はパンがほとんどだった。

ともかくその味は絶品で、生粋の和食派である私もついついその時間が密かに楽しみになりつつあった。

どうやら、小麦から作った自家製のパンらしい。

女子力の高い奴。

というより、女死力の高い奴か。

反対に夕食は私が作る事になってしまった。

まさか二週間かけて、妖夢に習った十四の秘伝レシピを全て披露する事になるとは。

それも、作り方を知っているだけであって、幽香のそれと比べればずいぶん粗末な味だ。

例えば炊き込みご飯は具が偏ったりおこげがつかなかったり。

優香と私、同じ材料とは思えないほど味が違った。

しかし幽香はそれを何も言わずに食べてくれる訳で、ついつい懐柔されそうになってしまう。

わかりやすく言えば、惚れてまうやろって奴だ。

よく、家庭内暴力の被害を受けている人が「それでも愛しているから」とか、「嫌いになれないから」という台詞を吐くが、あれも似たような気持ちだろうか。

殺されそうになったのに私は幽香に対して奇妙な感情を感じていた。

それは親愛とも違うし友情とも違うが、どうにもこのひまわりのブローチを外す気にならない。

初対面こそ最悪だったが、普段の幽香は別に極悪非道という訳でもない。

元々命なんて惜しくない性分だったからか、死んでないならば恨めないのかも知れない。

幽香は、とんでもなく口が悪い事を除けば、花を愛でて日中をのんびりと過ごすだけの存在だ。

つまり最悪な訳だ。

のんびりお茶を飲んでいたら、

「下衆が茶なんて飲むのね」

とか言っちゃう奴だ。

お茶くらい心置きなく飲ませて欲しい物だ。

しかしまあ、歌の下手なガキ大将が映画になるとやたら男前になるのと同じで、そういうギャップは人を惹きつけるのだろうか。

こと幽香に関しては、そういう奴らはすべからく花に誘われたハエの様に抹殺されている訳だが。

私はハエにならぬ様決して手の触れられる間合いに入れさせたりはしない。

だが一秒一時全部に気を張ってる訳でもないのだ。

ここ二週間はそう言う歪んだ生活だった。

が、それも今日までの話。

私はこの家から出なければいけない。

怪我さえ治ればここに居る理由など無いのだから。

二週間という短い付き合いだが、幽香についてわかる事もある。

私がここから出て行くと言えば、きつと「あつそう」とでも言っておしまいだろうという事だ。

出て行くならここで殺すとか、そういうメンヘラチックな事にはまらずならない。

という訳で、幽香とはサヨナラバイバイだ。

こんな危険な所、いつまでもいてたまるか。

気まぐれで殺されたら笑えないからな。

足も治ったし、帰る時が来たのだ。

私が育った、あの外れ街へと。
相変わらず少ない荷物をカバンにまとめて、ゆつくりと部屋を出る。

階段を降りる際に幽香の部屋をチラッと見たがそこには誰もいなかった。
時刻は昼前。

どうやら幽香は外にいるらしい。

大方、ひまわり畑で花と戯れていると言ったところだろう。

玄関を出て、幽香がいると思わしき場所へと向かう。

一応、挨拶ぐらいはしておかないと。

仮にも（色々な意味で）世話になった身ではある訳だし。

黙って行くとなんか悪い方向に進みそうな予感がビンビンするのだ。

私の予感は嫌な方向でよく当たる。

今も思ったとおり、幽香はひまわり畑の中心にいた。

偶然か嫌がらせか、ちょうど幽香と初めて出会い私が殺されそうになった場所に。

嫌な思い出がスツとよぎるが、頭を振って無理やり思考の外へと吐き出す。

どんな時でも挨拶は丁寧だ。

「世話になった。色々とな」

「……何処へ行くの？」

「帰ろうと思う。家こそ無いが育った里がある」

「あっそう」

「じゃあな」

「ええ、ごきげんよう」

私の方には一度も視線を向けず、早く行けと言わんばかりに幽香は言い捨てた。

まだちよつぴり心の中では殺されるかもと思っていたが幸いにも杞憂だったらしい。

これで思い残す事もなくなった。

それじゃあ、向かうかな。
私の故郷へ。

一つ自分語りをしようか。

私が育ったのは、外れ街という所だ。

そこは文字通り、人里からかなり距離のある場所に位置している。そして、妖怪に襲われないというセーフティエリアの境界線上にある。

人里に妖怪が襲ってくる事などまず無いが、外れ街は違う。

人里の外れにある上、安全区域の外側に寄っているから、一月に一回ぐらい腹を空かせた妖怪に襲われる事があるのだ。

無論、そんな危険な所に女子供はなかなか居ない。

そこに住んでいる奴らは皆、揃いも揃ってクズばかりである。

例えば人里で法度を犯したとか、貧乏で宿代が払えないとか。

中には妖怪との禁忌に触れた者もいる。

そういうなんらかの事情で里に住めない者たちばかり。

世界に対して斜に構え、毎日が無駄にしている様な連中。

当然治安も悪く、暴力も闇商売も絶えない。

人里でタブーとされている薬物なり刃物なりを真つ昼間から大路地で売つ払つても良いような所だ。

呪いの人形とか、博麗のお札のバツタモンも結構売っている。

外れ者の掃き溜め。

だから外れ街だと言う輩も居る。

とまあ散々な言い様だがかくいう私も、元を辿っていけばその住人であった訳で。

私の親は私がガキの頃には、とつくに死んでいたそうさ。

妖怪に食われたらしい。

だからといって私が妖怪退治屋をやったのは親の仇とか、そういう物の為ではない。

外れ街で食って行く為に、それしか仕事が無かったただけだ。

この世界はなんとも世知辛い。

塩は塩屋、餅は餅屋。

こんな所に住む私達が一から商売を始めたってうまくいかないのは分かりきっている事だ。

覇気のない物ばかり。

命を惜しまない馬鹿ばかり。

そんな死んでもいい様な屑の天職は、妖怪退治屋しか無かった。それだけだ。

債務者か、罪人か、妖怪退治屋か。

外れ街には、その三つがほとんどだ。

そして私の場合は三つとも当てはまっている。

ここは外れ街。

黄ばんだヤニと乾いた血の匂い。

普通なら気分が悪くなってしまいう薄汚れた世界。

そして愛すべき私の故郷。

「変わらないなあ」

あちこちに散乱するタバコの吸い殻。

死んでるのか寝てるのかもわからない道で寝ている様なジジイ。

ああ、久しぶりに帰ってきた。

懐かしいと思えるくらいには思い出があつたんだ。

爽やかな風。

いい天気だなあ。

「お前、生き取ったんか！」

……なんかうるさいなあ。

まあ、ここはいつもうるさかったしむしろ懐かしさが……

「おい、無視すな」

「……もしかして、私にいつてますっ？」

「お前以外誰がおるんじゃ」

「……あ、アンタは！」

炎天下の下なのに見るからに暑そうな黒づくめの服を着た強面の男。

髭がその凶悪さに一層拍車をかけている。

「こいつは……。」

「久しぶりやなあ。死んだ思ってたで」

「おかげさまで、ピンピンしてたよ」

「借金返済、ご苦労やったな」

私が借金地獄に陥り紅魔館へ行くきつかけとなった男。

やたら方便のキツイヤクザだ。

そういえばこいつもここの住人だったな。

「それで、今更何の用だ」

「用がなくてもええやないか。お客さんの機嫌とったらあかんのけ？」

「もう客じゃ無いからな」

「まあなんや……元気そうやんけ」

「お互いにね」

「あーそうや」

何かを思い出した様に、それともあらかじめ準備していたかの様に語るヤクザ。

「こう言う所は変わってないらしい。」

「なんだ」

「家、まだ売れてへんねん。せやししばらく住んでもかまへんで」

「……それにしてもお男前ですねえ！」

「露骨に機嫌とんなアホー！」

怒鳴られてしまった。

久しぶりに会ったクソツタレのヤー公。

思えば、私の人生が変わったのはコイツと出会ってからだ。

そう思うと、不思議な縁でもある。

それにどこで野宿しようかと思っていた矢先、住み慣れた家が戻ってきた。

今日は最高にツイてる！

「……ただいま」

弾む心を押さえつつ軋むドアを開け、いつぶりの帰宅。

月日にしてみれば一年も経っていないのに、なんだか何十年ぶりにも思えた。

やや低いボロボロの天井。

所々剥がれた土壁。

軋んだ柱につけた傷跡。

粗末な内装の一つ一つが私を歓迎していた。

ああ、帰ってきたんだなあ。

「……これから、どうしようかなあ」

玄関を進み、狭い居間へと入る。

私の家は六条一間の一軒家である。

ともかく狭いが、広かったら孤独と同居しなきゃいけない。

だからこれぐらいの狭さの方がちょうどいいのだ。

カバンを置いて、床に思いつき横たわった。

ああ、究極のリラックス。

心の心配が一つ一つ解けて行くような。

喉に詰まったモヤモヤが無くなっていく。

しかしまあ、売れてないってのは本当なんだな。

ほとんど家を出る前そのまま残されてる。

柱やら箆筒やらに酔った勢いでつけたキスマークが残っているのを見ると何だか本気で懐かしい。

そして……

「……寝るか」

日が沈みかけている事に気づいた。

くすんだ窓からオレンジ色の光がやんわり差し込んできていた。

それと同時にここ数日の疲れが、いつせいに主張し始めた。

「ふあああ」

大きいあくびが、涙を呼ぶ。

頭が停止していく。

なんだか、とても眠い。

休むには少し早い時間だが、どうせしばらくはやる事も無い。

明日の事は明日考えよう。

押し入れから布団を取り出す。

この薄っぺらい布団も、思えば少し恋しかった。

硬い枕に頭を乗せると、何故か涙さえ溢れそうだった。

帰ってきてからどンドンホームシックに襲われる感覚は案外悪くないものだ。

また、妖怪退治屋でも、始め……る……かな。

「……………zzz」

んー？なんだ、うるさい。

外か。

外で何かワイワイ言ってるやがる。

目覚めて外がうるさい時は、事件が起こってるもんだが。

ここは治安の悪い街。

どうせ、妖怪が出たとか誰々が死んだとかだろう。

私が行かなくなったらどうにかなる。

妖怪の一匹や二匹、なんとも無い連中だ。

腕つぶしに心配はあるまい。

それならもう一眠り……。

「いつまで眠ってるのかしら？それとも永遠に眠りたいの？」

「っー」

冷たい声に、考える前に脊髄反射で飛び起きた。

枕元に、緑色の髪をした妖怪。

「幽香!？」

「早く起きなさい。朝食よ」

「……………ここは私の家だぞ」

「家がないって言ってたじゃない」

「事情が変わったんだよ」

「そう。なんでも良いわ。早く顔を洗ってきなさい」

起きて早々布団をひっぺがされ、顔を洗えと急かされる。

オカンかお前は。

私の家は顔を洗うのもめんどくさいのだ。

なぜなら、水場所は玄関を出て右の井戸だからだ。
紅魔館とかは割と水道管の整備が進んでたから余計にめんどくさい。

まあ、とりあえず殺す意思はない様で安心。
と、油断もひとしお。

私は己の認識がどれほど甘かったのかを身をもって知ることとなる。

風見幽香が、妖怪たる所以。

「っこれは……！」

玄関の戸を開けて、外のざわめきが大きくなった。
そこで気づいた。

色の整った綺麗な街並み。

ここは外れ街じゃない。

そこには私を囲う様に、沢山の、人。

丁寧に染められた小綺麗な召し物を着た老若男女。

その中でも若い男達が、女子供を守る様に先頭に立って私を取り囲んでいる。

なんとびつくり、騒ぎの中心は私だった。

正面にいた青年と目が合う。

まるで妖怪でも見つめる様なのつぴきならない視線。

そこから醸しでている敵意。

私はパニックになり、何も言えず戸を閉めた。

「幽香……ここは……!?!」

「人里よ」

今日の天気は？——晴れよ。

それぐらいの熱量で返事をする幽香。

「……何の真似だ」

「早く顔を洗いなさい。スープが冷めちゃうわよ」

「私の家に洗面所は無いだよ！」

「あら、そうなの」

「何で寝て起きたら人里に家ごとお引越してらんだ」

「不思議な事もあるのね」

「その原因に会えて感激だよ」

と、ふざけた掛け合いをしている暇などない事に気づく。ともかく騒ぎはまずいのだ。

ここが人里で、私は風見という大妖怪と一つ屋根の下。

その事がもし博麗の巫女の耳に入りでもしたら……。

誤解を招く前に説明だ！

急いで戸を開けて外に出る。

「あー、おはようございます」

そう言って一歩進むと、周りが一歩退く。

若干悲しいが構わない。

とにかく説明だ。

「ええ、どうやら馬鹿な妖怪がイタズラをした様でして。お騒がせして申し訳ございません」

深々と頭を下げる。

人につむじを見せることなど慣れたものだ。

それはそれは腰から上がピンと一直線な、模範的な謝罪だったと思う。

ただ周囲の反応は芳しくなく、あちらこちらから「嘘つけ！」とか「妖怪が！」とかまあ酷い言われようだった。

どっかの馬鹿が投げたのか、大きめの石ころが顔の隣を掠めた所で、私は若干キレてしまった。

「おい！今この石を投げた野郎はどいつだ！」

凄む私に、周りは更に2歩下がって喧嘩の構えをとった。

緊張が走る……って違う！

これじゃそこらの妖怪畜生と変わらないじゃないか！

落ち着け……冷静に、温和に。

クールになれ貴子！

「すぐに出て行く。それでも風見幽香とお話ししたい奴がいるなら前に出てこい」

よし。

これなら皆んな、「この人も被害者なんだね！可哀想に！でも幽香怖いし！さよなら！」となるに違いない。

目が覚めたら人里にいて、しかも幽香が家にいる。

その上に騒ぎまで起こして博麗の巫女でも来たら目も当てられない。

この場で一番の被害者は私のはずだ。

私はシングルタスクなもんでね。

幽香だけで面倒なんだ。

「私が、話をさせてもらおう」

「……へ？」

色で言えば青色の、凜とした声。

見れば、旦那衆から一步前に出てきている女が一人。

私よりかは少し高い背丈で、胸を張り顎が引けている理想的な姿勢。

顔には凜々しい目鼻と蒼い髪。

真面目そうな雰囲気だが、これはこれで正統派の美人である。

惜しむらくは、これが普段ならじっくり見物でもしてただろうに、

今はそんな時じゃないという事。

私の家にかかるだと？

ばかもーん！

「上白沢慧音だ。上がらせて貰おうか」

「ちよちよちよ、ちよつと待て」

キリツとした顔で私の家にかかるとうとする慧音を無理矢理止める。

何で虎の穴に入り込もうとするんだバカタレ。

その時、手を前に差し出して止めるわけなんだが……。

これが何とも間の悪い。

想像して欲しい。

簡単な事だ。

私は前に手を伸ばしている。

慧音は私に近づいてきている。

その時手に触れるのはどこか？

体の中でもつとも前に出ている所だ。

「……………」

見つめ合う私と慧音。

弾力の塊に食い込む私の指先。

ゴム毬の様な弾みの良さと、大福の様な柔らかさ。

音で表すなら……モニユつとした感じだ。

ああ、これは……。

でっけーね。

「……………いつまで揉んでいる」

「はっー!」

慧音の声で我を取り戻して急いで手を離す。

どうやら夢中で揉みしだいていたらしい。

若干名残惜しいが、今ここで問題事を増やすのは賢い者の行いではない。

そう思い、焦ってすぐさま距離を取ろうとした。

だが、慧音に顔を両手でホールドされてピクリとも動けない。

前にも後ろにも、どこにも動かせなかった。

なんだろう。

とんでもなく酷い目に遭わされる気がする。

大きく頭を振りかぶった慧音。

私の額に、衝撃がつきやあああ!

「……………上がらせてもらおうぞ」

「っ待てっば!」

「何だ!くどいぞ!」

額からプスプスと煙を上げつつ私に怒鳴る慧音。

その目はバツチリ据わっている。

というか、怒りたいのは私も一緒だからな。

だが今は、もっと大事な事がある。

「……………死ぬなよ?」

「どういう意味だ」

「そのまんまだよ」

唐突な台詞に、訝しげに私のことを見てくる。

それも仕方のない事だが、ともかくこの場に死体が増えようもんならえらい事だ。

後ろの野次馬も口々に「やめとけ慧音さん！」とかいつて必死で止めようとしてるけど、どうやらこの人は（文字通り）頭の硬い頑固者らしい。

すでにズケズケと玄関へ入っている。

残された周囲の視線は私へと向き……そのうち何人かが指をポキポキ鳴らしている。

やる気かこんにやろう。

と、事を荒立てるのは駄目だって何度も言ってるだろうに。

私も家に戻ろう。

ちなみに去り際、誰ともなく「慧音さんの頭突きを食らって意識のある奴がいたんだなあ」と言われていた。

人を気絶させる様な頭突きを日常的にやってるのかよ。

「風見幽香だな？」

「そうよ。何か用かしら？」

「白々しい。何を企んでいるんだ」

眉を釣り上げ、問い詰める慧音。

しかし幽香はどこ吹く風といった態度だ。

現に、指で髪の毛をクルクルと巻いている。

「うふふ……お店を開くのよ」

「店？」

「こんな掃き溜めに、花屋の一つでもあれば素敵じゃない」

幽香の一言に、慧音は震えた。

それは間違いなく怒りを成分とする震えであった。

少し声を荒げた。

「……ここは掃き溜めでも、お前の庭でもない！」

「あら、酷い差別をするのね」

「ここは皆が安心して暮らす為の場所だ！」

「皆……ねえ」

幽香はチラリと私を見て、慧音に視線を戻す。

「そうね。もし私が人を殺したら、代わりにその人間を殺して良いわよ」

「……え？」

この「え？」は私の口から出たものだが、同じ様な反応を慧音もしていた。

いやいやいや、ちよつと待て！

何で私の命が担保にされてるんだ！

どういう話の進み方をしたんだよ。

人の命を何だと。

「あの人間とはどういう関係だ」

ナイス慧音！

その質問を待っていた。

ここでハッキリと無関係という事を説明しておこう。

そうすれば私の無罪は証明される。

強いて言えば被害者と加害者なんだから。

「優香と私は、全くの無関……」

「私の奴隷よ」

「……は？」

この「は？」は慧音の口から出たものだ。

オウマイゴード。

慧音さん。手で口を押さえてワナワナ震えてるよ。

そりや目の前でこんな事言われたらインド人もビックリだ。

というか、私はいつから幽香の奴隷になったんだ！

頼むから誤解を増やさないでくれ！

「勘違いするな！全部この妖怪の嘘だ！」

「証拠もあるわよ。ほら、頭」

「……え？」

幽香が私の頭を指さす。

恐る恐る前髪の右の方を手で触れた。

なにか禍々しいものが……。

「ゴサージュ……」

「それが私への忠誠の証よ」

「貴様！どこまで人を馬鹿にすれば気が済む！」

テールを勢いよく叩く慧音。

置いてあつた湯呑みが少し飛び跳ねた。

慧音は立ち上がり、幽香に啖呵を切った。

「この里で悪事を起こすのは私が許さん！」

「花屋を開けば悪なのかしら？」

うん。正論っぽく言ってるけど人の家を勝手に花屋にしてその家の家主を奴隷とか言うのはどう考えても極悪だぞ。

慧音、この悪魔を退治してくれ。頼む。

できる事ならこっぴどく。

「この里から出て行け。ここは『お前ら』の居ていい場所じゃない！」

ん……お前ら？

数えてみよう。

ひーふーみー。

うん。

この場には三人しかいない。

とすると、慧音以外の二人。

幽香と……私。

「なんで私!？」

「妖怪の味方をするなら同じ事だ」

「違うって！私は幽香の……っ痛！」

慌てて弁解をしようとしたら幽香に足の甲を思いつきり踏まれた。

う潰れる、潰れる！

「危害は加えないわ。それと一つ良いことを教えてあげる」

「何だ」

「私の花はね……エディブルフラワーにもなるのよ」

「貴様っ……」

「清貧がお好きなら勝手にしなさい。ただ、弱者の意地なんて滑稽以

外の何でもないわ」

「……………っ！」

サラリと言い放ち、置いてあつた湯飲みを手取る幽香。慧音は、拳を握りしめて強く歯を食いしばっている。

強い葛藤が滲み出てくるような表情だった。

眉間に皺を寄せ、黙りこくっている。

力関係が決まってしまったような気がしたので、それとなく幽香の見えない所からアツカンベーしといてやった。

なんか、幽香から殺気を感じたのは気のせいだろう。

「目的は、何だ」

「ずつと言ってるじゃない。お店を開くのよ」

「……………いい加減にしろ」

吐き捨てる様にそう言つて、席を立ち外へ出て行く慧音。

パタリと戸を閉め、しばしのざわめきの後外が静かになった。

慧音が去つていったなら、今度は私が尋問する番だ。

聞きたいことは両手じゃ数えきれない。

「……………おい幽香」

「いつからそんなに偉そうな口を聞ける様になったの？」

「何で私の家が此処にある」

「しつこいわね。動かしたのよ」

「……………は？」

動かした？家を？

その時、私の頭に家を丸ごと担いでいる幽香がボンヤリと浮かんだ。

昨日の夜、なんか揺れてるなと思つたら……………。

つていやいや。

「家ごと動かすなんて、お前は化物か？」

「あら、家は動かしていないわよ？」

「……………え？」

どう言う事だ。

家は動かしていない？

ならどうして人里に家が有る。

「私は、『家以外の全て』を動かしたの」

(^^)

私はこんな顔をしていた事だと思う。

きつと天動説と地動説がどうたらって言う話をしてた奴らもこんな感じだったんだらう。

この家以外の全て？

それを人は世界と呼ぶのでは？

「な、何のために」

「花屋を開くって言ってるじゃない。何回も言わせないでよ／＼／＼」

「何に照れてるんだよ！」

「さあ、明日から店開きね。忙しくなるわよ」

「ならないだろ。誰が来るんだよこんな怪しい店！」

「そうでもないと思うわよ？」

「少なくとも私は行かないぞ」

「明日になれば分かるわ」

「一人でやってろ」

もう付き合いきれない。

そもそも、奴隷呼ばわりされるのも不快だし。

私たちは奴隷を最も嫌うんだ。

その一線を越えたんなら遠慮はしまい。

いくら気まぐれの妖怪でも、人里にいる以上私の事を殺す事は出来ないだらう。

忌憚なく意見をぶつける。

「悪いが私は手伝わないぞ」

「そう。それでも良いけど、今頃あの人間はこう言ってるわよ？向日葵のコサージュを付けた人間には気をつける……って」

「なら外す」

「そう。お好きにどうぞ」

「悪かったな」

「ああ、そうそう」

そう言って、私にこの髪飾りをつけた時のように、パチンと指を鳴らす幽香。

するとその手のひらに、私が付けているものと同じようなコサージユが握られていた。

不思議に思っていると、それをポイッと窓から家の外目掛け、空高く投げる。

はるか上空へ投げられたコサージユ。

——何のつもりだ。

そう言おうとした口が塞がった。

遙か上空のコサージユが、大音量で爆発したのだ。

その振動で空気が揺れる。

数秒してパラパラとその破片が舞い散ってくる。

「さあ、外しなさい」

「……え？」

「どうしたの？」

「あの一、幽香さん」

「何かしら」

「もしかしてこのコサージユって……」

「ええ。無理に外したらああなるわよ」

脳裏に浮かぶのは、粉々に爆散する私の頭。

先程の爆発を受けて、不幸な近隣住民たちが何だ何だと表へ出てきている。

これは、詰みですね。

投了です。

どこぞの天才棋士もお手上げだ。

「ほらっ？外すんでしよう？早くなさい」

「いや、その」

「早くなさい？」

「……すみませんでした」

「分かればいいのよ」

次の日。

幽香が何故か開きたいと言って聞かなかった花屋がとうとう開店した。

場所は人里の、しかも中心部。

千客万来の往来に場違いな小汚い家が一軒。

言つとくがここは私の家だ。

今は、赤青黄色のカラフルな花が並んだ、いい香りのする木造建築に成り果てたが。

新装開店の風見フラワーショップ。

従業員一名、偉そうな奴一名で営業中。

誰がこんな所来るもんかと高を括っていたが、意外な事に開店して間もなく客は来た。

その記念すべきお客様第1号は、昨日言った通りやつて来た慧音であつた。

「本当に花屋なんだな」

戸を開けて店に入ってきたかと思えば、並べてある花をじつと眺めている。

元々は私が色々置いていた場所だったのに幽香に改造されてしまった。

壁やつつかけも全て取り外され、幽香が持ってきた花が並べてある。

慧音はそれを食い入る様に見ていた。

おおよそ、危険な物が無いかのチェックだろうか。

「一つ聞いてもいいか?」

「何だ」

相変わらず2メートルの距離越しで、私は慧音に話しかけた。

その頭には風見幽香特製の向日葵コサージュ。

なんと、服にも幾つかのアップリケがこさえてある。

昨日幽香に手渡された物だ。

私が椅子にもたれてウトウトしてたら、急にこれが投げつけられて来た。

言葉無く、これを着て仕事しろと言っているのだ。
どこまでも勝手な奴。

何ともババくさいデザインだが、無理に外すと文字通りクビが飛ぶので渋々着ている。

が、どうやら慧音は何とも思わないらしく特に反応はしていなかった。

変に説明するとまた話が拗れそうだったので、話がすんなり通って良かったとホツとする。

今聞きたいのは、昨日のあの発言についてだ。

「何で認めた？こんな危険度マックスの花屋を」

「……色々さ」

「色々？」

色々あれば良いのか？

無理が通れば道理が引つ込む。

幽香が通っても同じらしい。

慧音は続けた。

「今、この里は崖つぷちでな。みんな悲鳴を上げているんだ」

「崖つぷち？風見幽香あのカのせいかな」

「いや、もっと重大な事だ。下手をすれば、この里の全員が死ぬ」

「それって……」

「飢饉だよ」

腕を組んで遠い目をしながら、慧音は言った。

多分慧音もその被害に遭っている一員なのだろう。

途端に慧音の顔がやつれている様に見えた。

「例年は、皆で助け合いながら少ない蓄えを切り盛りしてなんとかやっていたんだがな……」

「すると今年是不作だったのか？」

「ああ」

飢饉。

過去には人が人を食う事さえ有ったと言われるものだ。

人間は悲しくも、腹が減るとこれまた道理が引つ込むらしい。

道理って奴は引つ込み思案が過ぎる。
疲れた様なため息を、慧音は吐いた。

「ここ最近で二度、異変が有ったのは知ってるな？」

「……異変？」

「何だ、知らないのか」

「まあ、色々と忙しくてな」

「紅霧と春雪。誰でも知ってる事だぞ」

「以後覚えておくよ」

「そうすると良い。それでだ」

一拍置いて続ける慧音。

「その異変で、農作物は甚大な被害を受けてしまった」

「被害？」

「赤い霧で日光が遮られれば畑は痛む。春が来なければ野菜の成長が遅れる。そのせいで今年は例年の半分すら収穫できていないんだよ」

「そうだったのか……え？」

何か引つかかる様な。

猛烈に身に覚えがある様な感じ。

紅い霧、長い冬。

……それってまさか。

「どうした？」

「もしかして、その異変の元凶って」

「ああ。紅魔館と白玉楼、だそうだ」

「やっぱりか……」

どうやらその異変、両方とも私も一枚噛んでいるんだそうです。
やっちまったなあ。

それぞれ、異変を起こしたのはレミリアや幽々子だ。

私はその側で見ていただけなんです。

無関係、そうだ無関係のはずだ。

……いや、そんな誤魔化しをしてどうなる。
ちゃんと認めろよ。

とんでもない事になってしまったんだ。

何処が無関係なんだよ。

レミリアも幽々子も、私が唆かしたんだろ？

そのせいで、人が死ぬ……しかも飢えで苦しみながら。

そんなの駄目だ。

駄目に決まってる。

「対策は打っているのか？」

「村の長者に蓄えを崩してもらったりしてたんだが……それも底をつきかけている」

そうか。

えらく困窮してたんだな。

とうとう打つ手も無くなって来たのだろう。

つというか、

「そんな時に……こんな店、邪魔じゃ無いか！」

「待て。そうでもないんだ」

「え？」

「私もその事を言いたくてな。その為に来たんだよ」

飢饉で苦しんでいる時に、こんな店がやってきて良い理由がどこにある。

慧音の言う色々って奴は本当にカラフルらしい。

腹が減るつてのがどれほど辛く悲しく、そして心細い物か。

私は知っている。

友を殺さねば飢え死にするからと、涙で濡れた親友の手を食った野郎を。

それが許されて良いのか。

「確かに、最初こそは業腹だったさ。だがな、どうやら幽香の言っていた事は本当らしい」

「……幽香が言っていた事？」

私が奴隷の件か？

それともコサージュの事か？

「この花たちを見てみる」

慧音が指し示した花に視線を向ける。

見ろつたつて、並べてあるのはどれも普通の花だ。
並べたのは私だからわかる。

ホウセンカ、キク、ビオラ。

目につく物はその辺りだ。

それが一体どうした。

「エディブルフラワーを、知っているか？」

「エディ……何だそれ」

聞いた事もない。

強いて言うなら昨日幽香がそんな単語を口にしていた様な気がせん事もない。

それが何だと言うのだ。

「わかりやすくいうなら……食用花だ」

「食用花……ってことは、食べるのか？」

並べてある色鮮やかな花たちを見る。

綺麗なのは間違いないが、美味しそうかと言えば……。

エディブルフラワー……。

花を食わねば死ぬと、そう言いたいのか。

「食わなければ死ぬからな」

「……慧音さん、だったっけ」

「慧音でいい」

「じゃあ慧音。一ついいか」

「何だ？」

「本当に……すまない！」

勢いよく膝と手をつき額を擦り付けた。

まさか、自分の行いが巡り巡ってこんなに大迷惑をかけているなんて。
て。

レミリアを唆したのも、幽々子を駆り立てたのも！

！
それにこの人里に幽香を入れたのだって、私が一枚噛んでいるんだ

い。
阿呆がよもや飢饉を引き起こしたなんて、死んだって……償えな

何もかも全部私が……。

花を食わねば死ぬ事態にまで追い詰めた。

「……頭を上げてくれ」

「出来ないっ……見せれる面がない！」

「お前が何をしたか詳しくは知らないが、私は感謝したいくらいさ」

空いていた2メートルの間合いをゆつくりと詰めて、優しく私の肩に手を当てる慧音。

諭す様な声で、ゆつくりと。

「何かをしてしまったのなら、それは反省しなければいけない」

けれど、と繋いで慧音は続ける。

「今度はその分だけ良い事をすればいいんだ。私には、お前が反省している事は十分伝わったさ」

「慧音っ……」

「きつとお前にしか出来ない事があるはずだ」

私にしか出来ない事……。

何もできないぞ。

力も弱い。

頭も悪い。

気も利かないし、面も汚い。

私は、どうしたって無力なんだっ……。

「お前は、無力なんかじゃない」

「え？」

慧音が私をさすりながらそう言う。

まるで私の心を包み込む様に優しく。

「お前に、救われた奴が居るはずだ」

「そんなの……」

いる訳ない。

そう言おうとしたが慧音に遮られる。

「居るんだ。しかも、一人や二人じゃない。そしてそれは、案外身近な奴さ」

「……みんな」

美鈴、咲夜、レミリア、パチュリー、そしてフラン。
それだけじゃない。

小町、映姫、妖夢、幽々子……。

私の事を受け入れてくれたおかしな奴ら。

何もできない私を、疎みもせず。

そんな奴らの……助けになれたなんて。

あんなに良い奴らの、力になれたなんて、思えない……。

思えないんだよ……。

「救われたのは……私の方だから」

「そうかもしれないな」

そして、と前置きして、慧音は言った。

「そう思えるから、皆を救えたんだ」

慧音の声は反響する。

まともに慧音の目を見ることすらできず、うずくまって少し泣く。

こぼれ落ちた雫が床に模様を作っていく。

しばらくの間、慧音は何も言わず私に寄り添っていてくれた。

一から十まで迷惑者の私に、優しい声が沁みる。

それから、私が落ち着くまで何分かかっただろうか。

私が落ち着いたのを見届けて慧音は去っていった。

私にできる事は、償う事だ。

そしてそれは、私がしなくちゃいけない事でもある。

もういつまでも無力な自分に縋ってちゃ駄目だ。

ケジメはつけなきゃならない。

だから私は行動した。

生まれて初めて、心いっぱい感情を込めて。

多分、これでよかったのだらうと思う。

人里が大飢饉から脱した事を、新聞が取り上げた。

一時はもう新聞でも食らってやろうかと言う声もあったのだから、
見違えたと言える。

人里は豊かになった。

お腹を空かして細い声でせせり無く子供も街からいなくなった。

新聞は飛ぶ様に売れた。

人里に出回ったのはエディブルフラワー……ではなく、普遍的なニンジンやキャベツなどの野菜であった。

ある日突然新鮮な野菜が大量に出回ったのだ。

今も人里の市場は大賑わいである。

野菜は、どれも知られている物とは少し違った。

微妙な違いだが食感や色合い、味なんかが、慣れ親しんだ物とは異なる物だった。

とある博識な妖怪が、こう言った。

「これは……西洋の物だわ」

野菜は東洋の物ではなかった。

何故、西洋の野菜が出回っているのか。

——とある館に、ワガママな吸血鬼が住んでいた。

その者は東洋に移り住んでからも、慣れ親しんだ味しか受け付けないと言って従者をさぞ困らせた。

いくらなんでも取り寄せるのは難しい。

頭を悩ます従者たちを見て、紅い髪をした一人の門番が言った。

無いなら育てれば良いんですよ、と。

それ以来その館では、自家農園で育てた野菜を主人に提供するのが慣わしとなった。

例えば、ジャガイモとか。

あるいはリンゴとか。

そして、こちらとはまた違った進化をした西洋の農作物たちは二度にわたる異変を経ても変わらず実り果てた。

貴子はその館の門番から野菜の種子をもらい、ひまわり畑の近くで丹念に育てた。

不思議なのはそこから。

収穫までしばらくかかると思った種子は、なんと3日で完全に育ちきってしまったのだ。

理屈はわからないが、さすがは悪魔の館と感服する貴子。それを見て、ふんと鼻を鳴らす幽香であった。

関係ない話だが、幽香は『花を操る程度の能力』を持っている。野菜を実らせる事など簡単な事だろう。

その事を貴子が知る由はない。

そうして大量の野菜は慧音へと渡り、貧富関係なく、不平等なく無事に行き渡った。

実は慧音は自分の分も皆に配ろうとしていたのだが、流石に止められた。

そんな自己犠牲的な態度もあってか、慧音は人里を飢饉から救ったとして、あちこちから称賛を受けている。

特にジジババからは、御仏様じやと拝まれている始末。

暗い雰囲気だった人里は明るい街へと戻っていった。

実は、町民の中にはある事に気付く者がいた。

飢饉が終わるその前。

野菜が出回るその直前に、この里にやってきては騒ぎを起こした奴がいるという事。

そいつは風見幽香と面識がある。

もしかして、この野菜は……。

そこまですり着き、そして辞めた。

例えそうだとしても慧音を褒めてた方が気持ちがいいからだ。

「これで、良いんだよな」

呟く貴子。

今日も店に客は来ない。

傍迷惑

「そろそろ起きたらどうだ」

「……慧音？」

何故お前がここに。

深酒をしてへべレケになった翌朝、深い眠りから私を起こしてくれたのは素敵な王子様なんかじゃなくただの慧音だった。

体を起こそうとすると鈍い頭痛がする。

いててて……。

ああ、また酷い飲み方をしたんだな。

布団の周りに一升瓶が何本も横たわっている。

気持ちが悪い。

吐き気もするし。

何でこんなに呑んだんだっけか……。

「おはよう」

「おはよう……って、なんで私の家に」

これは当たり前前の質問。

というかここ最近、枕元に誰かがいるっていう事が多すぎる。

幽香だったり慧音だったりさ。

心臓が悪いから是非ともやめてもらいたい。

「話がある」

私には無い。

言わせてもらうが、慧音には話が多過ぎるんじゃないだろうか。

私にも一つぐらいくれ。

というか、朝目が覚めてすぐしなきゃいけない話ってなんだよ。

昼からでもいいだろうに。

「とりあえず顔を洗ってくるといい」

「……ああ」

これはデジャビユ。

以前は顔を洗いに外に出て酷い目にあった。

まあ、この前と違って外はふんわりと静かだし、枕元にいるのは慧音だし。

心配は無かろう。

水を汲む場所も教えてもらった。

玄関を出て右に30メートルの所に井戸がある。

私はそこに向かい、二日酔いの倦怠感を落とすようにバシヤバシヤと顔を洗った。

水が程よく冷たくて気持ちいい。

空を見ると、日はまだ浅かった。

とても早起きをしてしまった。

どうりで眠い。

しかしまあ、静かな朝つてのもなんだか良いね。

「朝飯だ。大した物ではないが」

「……ほほう。これはなかなか」

家に戻ると、ちゃぶ台の上に食事が用意されていた。

しかも散らかっていた酒瓶やら布団やらは全部片付けられていた。

さては慧音、できる妻になれるな。

時刻はおよそ六時。

少し早めの朝ごはんだ。

「いただきまーす」

手を合わせてそう呟く。

献立は野菜の和物に味噌汁。

そこに三色の漬物が彩りを加える。

手始めに味噌汁を軽く啜ると、鼻の奥にフワツと出汁の香りが通る。

おお、うまい。

これは何ともあつさりしていて、実に二日酔いのくたびれた胃に優しい。

十分大した物だ。

「昨日は酒を呑んだのか」

「ああ」

「呑みすぎだ。あんなに散らかして……」

「ああ」

「そもそも人間の肝臓というのはだな」

「ああ」

「ご飯を頬張りながら適当に返事をする。

慧音の説教癖はかなりの物だからだ。

面倒見がいいと言えば聞こえはいいだろうか。

しかし、靴下の柄が揃ってないからって何十分と説教されてはたまらないだろう？

苦い思い出を消すために紫色の漬物を一つ齧った。

慧音は続ける。

「どうだ。花屋は順調か？」

「全く。客つ子一人こない」

理由は説明するまでも無い。

どうにもこの店の来客は慧音だけだ。

それと時折の子供たちか。

どういう神経をしているのか、子供らは何を買おうでもなく店の中で屯たむろしている。

くれぐれも幽香には近寄らないよう重々注意してるんだが、そもそも私に近づくなと言われているらしい。

当然納得はしていない。

「それで、本題だ」

佇まいを直して、慧音は言った。

正座で、手を膝にやって。

その口調はやけに重々しかった。

厳粛な雰囲気は、これから言わんとする事がいかに大事かという事を物語っている。

「貴子、寺子屋で教師をやってみないか？」

「……え？」

漬物が、ぽろりと箸から落ちた。

私のことを見つめる慧音の瞳はいつになく綺麗で、そして真っ直ぐ

だった。

唐突な申出。

なんの冗談だよ——そう言おうとして、ああそーいや慧音はそーいう冗談は絶対に言わないんだよな、と思いつ出した。

「どうだ？」

「どうだって言われても……」

「貴子なら向いてると思うぞ。喋るのも得意だろ？」

「どこが。私はな、子供が大の苦手なんだよ」

「子供たちはお前の事が大好きだぞ」

湯呑みに手をかけ、楽しそうに話す慧音。

何が面白いのか分からないが、多分私からすれば面白くないことだ。

教師……。

私の持論に過ぎないが、言わせてもらいたい。

寺子屋の教師なんていう立派なものは、立派な奴がやればいい。

私が人に物を教えられる立場か。

特に、子供相手に。

「お前に頼むものには訳がある」

「嫌だ」

「お前に教えて貰いたい事があるんだ」

「嫌だ」

「それは私じゃ教えられない」

「嫌だ」

嫌だ嫌だ攻撃を喰らって、不愉快そうに眉間に皺を寄せる慧音。

そこで私は、慧音がこういうおふざけをとことん嫌うのも思いつ出した。

諫めるような視線で私のことを見てくる。

これ以上は頭突きが飛んでくるので止めよう。

「お前は私が知らないことを沢山知っているだろ？」

「何のことだ。美味しい酒の飲み方か」

「それを知らないのはお前だ。そうじゃない」

「あのなあ、私は文字の読み書きすら怪しいんだぞ」
「そうか」

「そんな奴に出来ることがあるなら、それこそ教えてほしいくらいだ」
「大丈夫だ。文字は使わなくていい」

「それでも教えられることなんて無い」

私がそういうと、慧音は少し黙った。

少し俯きながら、唇を窄めている。

湯呑みをちやぶ台に置いて、慧音はさつきまでとは全く違う暗い顔をあげた。

しまった。要らぬ戸を引いたか。

「ここ最近、妖怪が人間を襲う事が減った」

「減った？いい事じゃないか」

だが、と前置きして慧音。

「子供が喰われる事が増えた」

「……それは、一体」

「スペルカードルールの制定による悲劇だな」

2回ほど乾いた咳払いをして、慧音はまたお茶を啜った。

フツと笑みを浮かべているが、その顔に楽しげな色は無い。

どんな馬鹿でも、慧音が心の底から湧き出る悲しい気持ちを堪えようとしてるのがわかる。

「お前に教えて欲しいのはな、貴子……妖怪から身を守る術だ」

「……それを子供に教えてどうなる」

「長生きできる」

淀みなくいつているが、その考えはどうだろうか。

こじつけでは無いか？

「妖怪に対する知識をこの里で一番知ってるのはお前なんだ」

「子供に何を叩き込んだって、妖怪に会えば死ぬだろ」

「そうだな」

「だから、それを教えてどうなるっていうんだよ！」

私は箸を置いて強めの口調で言った。

言ってしまった。

ほとほと嫌になる。

悪い癖だ。

反響音だけが私の耳を嫌味のように通り抜ける。

しかし案外慧音は落ち着いていた。

「知る事に、どれだけの価値があるのだろうか」

「知らん。だが、妖怪云々なんて里の外に出ないよう注意すれば済む話だろ」

「人里に妖怪を連れてきた張本人が言えた口か？」

「連れてこられたんだよ」

「同じ事だ」

「……ともかく、私はやらないぞ！」

「さあ皆席につけ。大事な話をするからよく聞くこと……さて、今日から一人、先生が増える事となりました」

寺子屋で、生徒たちは行儀良く慧音の話を聞いている。

皆の前で話す慧音は、絵に描いたような明朗快活だった。

「新任の、貴子先生でーす」

「……………」

慧音はパチパチと拍手をしながら貴子を呼んだ。

呼ばれた貴子は教室の入り口からゆつくりと中へ入った。

歓迎されるような雰囲気はまるで無かった。

「せっかくだし自己紹介してもらおうか。質問のある者は挙手を」

慧音がそういうと、何人かの、見るからにヤンチャそうな男子たちが手を挙げた。

他に手を挙げるものはおらず、そのうちの一人が慧音に指名された。

生徒は立ち上がり、貴子を指差しこう言った。

「なんで他所者がいるんですか、と。」

嫌味つたらしく。

それはそれは憎たらしく。

無礼な質問に、慧音が怒鳴る。

「こらー！何を言うか！」

「慧音」

「……貴子」

慧音の顔前にサツと手を出し黙らせる貴子。

何の考えがあるのか、その目には力があつた。

それを汲み取って、心配そうな顔をしながらも慧音は黙った。

大きな声で笑っているその男子に、歩いて近づく。

一歩二歩と間合いを詰め、その生徒が座っている席の正面に立つた。

「な、なんだよ」と、たじろぐ生徒。

貴子はニツコリと笑って――

恐ろしい強さのデコピンをした。

「ついつてえええー！」

風船を割った様な勢いのある音が鳴る。

貴子は鼻で笑ってタバコを啜え、その先つちよに勢いよく火をつけた。

「……ふう。貴子だ。今日からお前らの先生をやらしてもらおうがその前に一つ教えとくよ。妖怪とか関係なく、長生きするコツはたった一つだ。自分より強い奴を決して怒らせるな」

年甲斐もなく完全無欠のドヤ顔で、貴子は言った。

（決まった……ツカミは完璧だ。うんうん、ん？）

貴子は自己賞賛から現実に戻り、背後にある一つの気配に気づく。そこにいたのは勿論慧音である。

「貴子……」

「今日からよろしくお願いしますね。慧音先生」

「いきなり子供に手を出す馬鹿がいるか!!!」

「え？あつちよつまつ、ぎゃああああ!!!」

爆弾が炸裂した様な破壊力のある音が鳴った。

私の額から。

プスプスと煙を上げながらぶつ倒れた私は、身をもって『自分より

強い奴を怒らせるな』という教えを実証してしまったのであった。

「貴子には昼から授業をしてもらうから、午前は私の授業を見ていると良い」

朝礼が終わった後、慧音は私にそう言った。

生徒にデコピンして怒られた後「寺子屋でタバコを吸うな!」ともう一発頭突きを喰らったので、頭はボコボコに腫れている。

その一連を見て格下と判断したのか、何人かの生徒が私の方に寄ってきてはコケにしたような笑いを浮かべて去っていった。

腹立たしいことこの上なしだ。

今は慧音が国語の授業をしている所だった。

慧音の後に続き、生徒たちが声を合わせて何かの詩を音読している。

私はその最後列で、あぐらをかきながら壁にもたれていた。

なにせ呼んでいる内容はチンプンカンプンだ。

フランス語でも読んでるのか。

そんなチンプンカンプンな呪文を延々聞かされているわけで、まあとんでもなく眠い……。

こんな内容を今時の子供は身につけているのか。

『国破れて山河あり』だの『隴西の李徴は博学才穎』だの。

もっと楽しい事を勉強すればいいのに。

別に私がアンチエリート主義な訳じゃ無い。

ただ、小さい時から小難しい事を考えたって頭でっかちになるだけだろう。

知識ばっか蓄えたつまらない奴を私は何人も知ってるぞ。

そもそも子供っていうのはなあ……。

「先生、貴子が寝てまーす」

「何だって?」

「……zzz」

「全く……」

立ち上がり教室の後ろの方へ行く慧音。

生徒たちがクスクスと笑っている。

慧音は貴子の耳元に近づき、ボソツと囁いた。

「風見優香」

「つはあ！何処に！」

「おはよう」

「あ、慧音」

「『あ、慧音』じゃ無いだろ！」

ゴツン！という音。

本日三度目の頭突き。

二日酔いよりよっほど痛い。

教室に、大きな笑いが巻き起こった。

「全くお前という奴は……どうしてアードコーダ」

昼休み。

慧音含め二人の寺子屋で働く教師が使う部屋で、貴子はお説教されていた。

正座で三十分ほど、ガミガミクドクドと。

何処ぞの閻魔といい勝負だと、貴子は内心毒づいた。

「それで、授業のやり方はわかったのか？」

「まあ、だいたい」

「昼からはお前がやるんだぞ？大丈夫か」

「任しておくと、言っておく」

「言うだけならば容易きことを、だぞ」

「へいへい」

「……頼んだぞ。大事な事だ」

「分かってるさ。その代わり……」

「何だ？」

「あくまで私のやり方でやらせてもらう」

「……生徒に悪影響の無いなら構わないが」

「当たり前前田のクラッカー」

「なら、その右手を開いてみる」

「み、右手？」

「白々しいぞー！」

慧音がガシツと貴子の右手首を掴む。

勢いそのまま、貴子の手からポロツと何かが落ちた。

それは一冊の本であった。

タイトルは、『まいっちゃんぐマチコ先生』である。

「古いー！」

「な、なんだと!？」

「今時の子供がそんな漫画読むか！」

「この名作になんて事をー！」

そこからやいのやいのと騒ぎは広がり、生徒たちが見物しに来たところで、またまた貴子は頭突きを喰らうのであった。

「さてと……何から始めたもんか」

教師用の机に両手をつけて、貴子は言った。

記念すべき第一回の授業の、第一句だった。

「改めて自己紹介をしよう。妖怪について教える事となった、貴子だ」不思議なことに、教室は静かであった。

慧音が授業をしている時よりもだ。

「妖怪について教えると言ったが、まずは皆に質問だ。君たちは妖怪について、どれぐらい知ってる？」

最前列右手の、大人しそうな女子に応えさせた。

「……怖いモノです」と、細い声で女子は答えた。

「なるほど。確かに怖い。その丸坊主君は？」

体を反転させ、後ろの方に座っていた男子を指さした。

「近寄っちゃいけないモノ！」と元気よく男子は返した。

「そうだな。そりや近寄っちゃダメだなあ」

ウンウンと頷きながら、貴子はその言葉を何回か反芻した。

そして最後に、肩肘を着きながら話を聞いていた、教室の中で一番綺麗な服を着ていた男子を指さした。

「そのガキ。お前は？」

唐突な貴子の暴言に全員がギョツとする。

その男子は、午前に貴子からデコピンをされた者であり、また教室のカーストで中心的人物でもあったからだ。

貴子とその男子以外が狼狽えている。

指名され、まるで準備していたかのように、貴子を指差して男子はツラツラと答えた。

「お前のことだろ」

教室が、誰もいないかのように静かになる。

全員が貴子の返事を恐ろしく思った。

今朝の出来事からすれば、今度はタダじゃ済まないと思ったからだ。

しかし意外にも、貴子の反応は落ち着いていた。

「そうだな。全員正解だ。そして、全員不正解だ」

どよめく教室。

生徒たちが顔を見合わせて、何を言ってるんだコイツはという雰囲気
気を醸す。

そんな事は全く気にせず、貴子は続けた。

「妖怪に会えば君たちは殺される。それは間違いない。ただな……」

三泊置いて、世間話のようにアツサリと貴子は続けた。

「やろうと思えば私にだって殺せるぞ。全員をな」

教室がまたまた静かになった。

今度は、冷たい空気だった。

あくまでも教師、自分たちを守るはずの存在が、私たちを殺すと
宣のたまっているから。

そこで改めて思い出す。

コイツは風見幽香の縁者だった、と。

何人かの生徒は慧音を呼びに行こうかと考えた。

しかし、その勇気すら湧かなかった。

教壇から明確な、殺気を感じたから。

「……とまあ、こんな風に君達を怖がらすために来た訳じゃ無い。私

が言いたいのはな？」

殺気が無くなったのを受けて、強ばらせていた肩の力を抜く者が多数。

止まっていた呼吸を取り戻す者がチラホラ。

貴子のことを睨む者が一人。

「君たちは、生きる事を当たり前だと思いきすぎだ。自分が今日死ぬかも、なんて思っている奴がここにいたか？多分、明日も生きられるのが当たり前、何故なら自分は死なないから。そう思ってるんだ」

十人十色の反応を示していた全員が首を揃えて貴子の方を向き、ゴクリと息を呑んだ。

そうさせる不思議な圧力があつた。

「言つとくが死ぬぞ、ここにいる全員。どう死ぬかはわからんがな」

勢いよく貴子は立ち上がった。

語り口は熱を帯びていく。

「人里で飢饉が起きただろ？腹が空くのは辛いよな。美味しいものを食べるつてのは、そりや幸せな事だ。それは妖怪も一緒。君たちを食い殺して心の底から幸せを感じる」

一人一人の耳にねじ込むように、激しく語る貴子。

生徒の中には、気分を悪くして俯く者がいた。

しかし、何のことやらと平気な顔をしている者もいた。

「だから理解してくれ。人は死ぬんだ。他人事じゃ無い。死ぬつて事は身近なんだよ……それじゃあ、始めようか」

重い雰囲気のまま、授業は始まった。

「……頭突きはやめとくかな」

不穏な空気を察知し、教室のドアから中を除いていた慧音はそう言つて、どこかへ去っていった。

夕方、寺子屋初日の業務を乗り越えて貴子は帰路についていた。

ラスト一本のタバコを名残惜しく啜えながら、のそりのそりと歩いている。

貴子は町の往来を歩くのが嫌いだった。

「そんなに怖いかね。同じ人間だつてのに」

貴子が歩く道は、どこも静かだった。

別に裏路地を歩いている訳じゃない。

里の大通りだ。なのに人があまりにも少ない。

あからさまに賑やかさが失われている。

一番近い道がここじゃなければ、絶対にこんな所通らないのに。

「……嫌な気分だ」

そう呟く貴子の耳へ聞こえるのは、まるで罵倒してくるかのようなカラスの鳴き声と雪駄で歩く貴子の足音のみ。

白い煙を伴って吐き出された吐息が、やけに寂しい。

いつまでこんな所居なきやいけないんだ。

そういう気持ちになつてくると尚更、頭にのつかかっている忌々しいコサージュが重たかった。

風見幽香……。

アイツのせいだ。

しばらくは外れ街でゆっくり暮らそうと思つてたのに、アイツが家ごとこんな所に運んでくるから。

私を殺そうともしたし、命も危ぶんでいる。

私は人里には来たくなかった。

歓迎される訳ないから。

何処の店に寄つたつて、逆さ箒が壁に立てかけられている。

飯を頼めばお茶漬けが出てくる。

人里のいい所は、安全で飯が美味くて人が多いという事。

それが今はどうだ。

石ころは飛んでくるし、人里の飯は食えないし、人っ子一人いちやいない。

するつてえと、ここは地獄つて奴か？

ビツクリ、私は生き返つたはずなんだがな。

どういう訳か、死ぬ前よりも死にたいよ。

……逃げようか。

そう考えて、すぐに無理だとわかる。

風見幽香がいるのだから。

アイツがこの里に拘る理由は分からない。

生まれた町でもないだろうに、花屋を開くと言って聞かなかった。そんな幽香に振り回される私ができる事といえば、苦し紛れの溜息を吐くことくらいだろうか。

慧音は努めて私と仲良くしようとしてくれる。

本当は風見幽香を暴れさせない為だって事くらい、私にでも分かるのに。

「……これが、人里かい」

外れ町の方が、よっぽど良かった。

少なくともあそこには、差別や打算なんて無かった。

嫌いな奴を嫌いと言って、ぶん殴ったってよかつたさ。

私はここに住める人間じゃない。

寺子屋の教師なんてやったって、一体何が変わる。

長生きできる？

妖怪から身を守る？

そんなのは全部理想論だ。

夢物語ともいう。

私みたいな妖怪退治の専門家だって、気を抜けば木っ端妖怪に食われるのがザラなんだ。

それを子供がどう足掻いたって……。

いや、子供だけじゃない。

ここにいる大人だって、一度妖怪と出会えばそれで終わりだ。

抵抗の余地も甲斐も無い。

死ぬ。

たとえどんな事を企もうと死ぬ時は死ぬ。

だのに妖怪のことを学んだって結局無駄な事だろ？

やりたくもない教師なんてやらせないで、いつそ一人にしておいてくれ。

行き帰りの道が、どれだけ辛いかを分かってくれ。

見渡す限りの軒並みが全部戸に鍵を閉めてる辛さを、理解してくれ

……。

「……やっぱり辞めよう。寺子屋の教師なんて」

そうこう言っているうちに、輝く住宅の連なりで一軒だけポツンと浮いているボロ屋に着いた。

立て付けの悪い引き戸を開けると、畳を敷いてある居間で、こんな幽霊家屋にはまったく似合わぬ高貴な様で幽香が紅茶を飲んでいた。

「あら、遅かったわね」

「……待ち合わせなんてしてないだろ」

「夕食を作るのは貴方の役なのに帰ってこないから、妖怪にでも殺されたのかと思ったわ」

「予想的中だな。とある妖怪にジワジワと殺されてるんだよ」

「へえ。自覚はあったのね」

「今日気づいた」

「そう……それで、何が言いたいの」

「外れ街に帰してくれ」

そういうと、意外と言う顔でもなく案外普通の顔で幽香は返した。

「別に帰りたければ帰れば良いじゃない」

「ならこのコサージュを消してくれ」

「無理よ」

「何でだよ」

「だってそれは貴方の物だもの」

欲しいなんて一言も……いや、確かに酒をくれとは言った。

私が欲しいと言ったのは、酒。

そのはずだった。

なのにこんなもの渡されてるんだから溜まったものでは無い。

そもそもアルコール中毒者の末期に発した願いを叶えようと思っ
てこんなトンチキな爆弾をプレゼントするとは思わなかったし、今も
思っていない。

「残念ながら爆発物取扱の資格は持っていない。こんなモノもってら
れるか」

「その花が貴方を選んだのよ。私にはどうしようもないわ」

「花を操る妖怪がか」

「ええ。不思議」

「不思議なのはお前の頭の中だ」

「ムキー！」

「口で言うな口で……はあ。疲れてるんだ。ゆっくりさせてくれ……」

「早くご飯を食べましょう」

「作るのは私だろ？」

「私が作ったわ。反省しなさい」

「ああ、ありがとう」

台所から、食事がお盆に乗って運ばれてくる。

その光景に、違和感を持った。

「洋食派じゃなかったっけ」

「気分よ。悪いかしら」

「いや、珍しいなと思って」

「文句あるの？」

「作ってもらって有るとでも？」

「そう。ならいいわ」

並べられた食器。

同時のタイミングで合掌し、頂きますと行ってご飯に手をかけた。

器を先に持ち、後から箸。

最初は汁物。

この辺りは基本だ。

ゆっくりと味噌汁を啜っていると、幽香が声をかけてきた。

「寺子屋へ、何をしに行っていたの？」

「……仕事」

「貴方は花屋で働いているでしょう」

「慧音に頼まれたんだよ」

「それがどうして寺子屋に行く理由になるのかしら」

「どうしても、頼まれたらしようがないだろ」

「何故、あの人間とそれほど関わりを持つのかしら」

「全部原因はお前だ」

「え？」

「お前がこんな所に連れてくるから、お前がここにいるから。妖怪退治のやり方なんて教える事になったんだよ」

「なら、辞めなさい」

「なんでだよ」

「不要よ」

さらっとこういう事を言い放つところが、幽香の嫌な所だ。

何を理由に言っているのかハッキリしない。

嫌味なのか。

それとも他の何かか。

どちらにしろ、不快だ。

「最近子供が襲われる事が多いんだと」

「貴方は妖怪退治屋なんでしょう？」

「だからなんだよ」

「退治すれば済む話じゃない。その妖怪を」

「確かに……って待って待って。博麗の巫女も出動してるはずだ。私が動

いても何も変わらない」

「あら、何故かしら」

「博麗が倒せないなら私には無理だからな」

「言い切るのね」

「長生きのコツだ」

「……そう」

幽香はそう言ったつきり、不機嫌そうな顔をして黙った。

二人の間に会話はなかった。

翌日も、貴子は寺子屋に顔を出した。

慧音からは来れる日に来てくれれば良いと言われていたが、そもそも貴子に來れない日などない。

あの暴力花屋にまさか客が来るはずもないので、一応集金用の箱だけ置いて店を出てきたのだ。

タバコを吸いながら教員室に入ると、慧音がいた。

「貴子、話がある」

「またかよ」

「いや、大した話では無いんだがな」

ウンザリと言うのを隠す気もない貴子に目もくれず、生徒の答案用紙らしき物を素早く採点しつつ慧音は言った。

「それ、辞めないか？」

「……どれの事だ」

慧音は自分の口元をチョンチョンと指で示す。

貴子もその真似をして自分の口元をチョイチョイと弄り、ある物に触れる。

それは……

「煙草だよ」

「あ、この部屋禁煙か？」

「寺子屋は全て禁煙だ」

「ああ、なら外で……」

「外もダメだぞ」

「……え？」

一通り採点し終わったのか紙の束を机でトントンと揃えながら、慧音は続けた。

「今この里は健康志向でな。外で煙草を吸うのは禁止になった」

「っなー」

「知らなかったのか。伝えるのをすっかり忘れてしまっていてな。すまんすまん」

はっはっは笑う慧音。

貴子はワナワナと震えた。

「だ、誰が……そんな事を」

「村の自治会だ。反対意見は0だったよ」

「そんな！」

「まあまあ、これを機に辞めたらどうだ。金も貯まるし良い事づくめだぞ」

「反対意見を今から1にしてやる」

「却下だ」

「非民主主義すぎる!」

「喫煙を否定はしないがな、何処かれかまわずという訳にもいかないんだ」

「そ、そしたらコレはどうしてくれる」

そう言つて貴子はカバンを丸ごとひっくり返す。

大量の箱が、ドサドサと床に落ちた。

流石の慧音もこれには驚いた様子であつた。

「な、何だこれは!」

「この前まとめ買ひしたんだよ……幽香に内緒でな」

「軽く数えて20箱くらいあるぞ。お前1日何本吸つてるんだ」

「だいたい4箱くらいかな」

「よ、4箱?!」

思わず腰を抜かす慧音。

今度は貴子がケロツとしている。

「これでも頑張つて減らした方だ」

「どこが」

「昔は……二十歳になる前は凄かつたな」

「まさかもつと吸つてたのか?これよりも?」

「そうだなあ……一日6、7は吸つてたと思う」

「な、なんだと?7箱も吸つてたのか?」

「いや、7カートン」

慧音は白目を剥き、泡を拭きながら倒れそうになるのをグツと堪えた。

ニコチン中毒末期患者は追い討ちをかけていく。

「ガキの頃から吸つてたからなあ……もう吸わないなんて選択肢は消えたよ」

「そりや良かった」

「……何がだ」

慧音は、まるで優しさで世界を救うために生まれてきた聖母のよう

な柔らかい笑みを浮かべている。

その柔和な笑みを見て、なぜか私はとにかく嫌な汗をかいた。

「禁煙令はお前のような奴の為に出されたんだ。もう煙草は吸わさせん！」

「つな、何だつて!?!」

「子供に悪影響だ!もう堪忍できん!これも全部没収だ!」

「あつ、ちよつと!待ってくれ慧音え!」

貴子の情けない叫びは、3里離れた場所まで響きわたったと言う。

「全く酷い目にあつた……」

厠でこつそりタバコに火をつける。

咄嗟の反射反応で懷に、一箱隠しておいたのだ。

あらかた没収されてしまったが、とりあえず今日はこれで……。

「貴子?」

「っ慧音!」

「何をしている」

「ちが、誤解だ」

「馬鹿者!」

お決まり、慧音の頭突き。

頭蓋骨が砕けたのでは無いかと心配になるような鈍い音が鳴る。

「絶対に吸わせないと云つたはずだ」

「この鬼!悪魔!」

「そんな悪口で私が怒るとでも?」

「慧音の巨乳!」

「だから怒る訳……何だ?!許さん!」

「つぎやあああ!!」

一一発目。

褒めたのに……。

「くつそー!イライラする!」

午後、貴子が教える妖怪学の授業はこれで何度目か。

いつもは貴子の軽快な語り口が子供にウケたのかやたら賑やかなのだが、その日は殊更に荒れていた。

いつもは突っかかってくる気迫に押され問題児達も今日は大人しく授業を聞くことしか出来なかった。

生徒の一人が、隣に座っていた者に囁きかける。

「貴子先生なんで今日あんなに荒れてるの？生理？」

「禁煙中だつてさ。というか慧音先生に怒られるぞ」

「ああ、それで」

貴子は黒板に文字を書く。

殴り書きで誤字の目立つ粗悪な板書であった。

描き終わった文末をチョークでコンコンと叩きながら貴子は授業を続ける。

「妖怪のメンソールには規則性がある」

貴子のはつきりとそう言った。

生徒達が一斉に顔を上げる。

浮かべているのは困惑の表情だった。

「一定のタールをニコチンすればシケモクも吸える」

ツラツラと早口で言う。

生徒達はある種の恐怖を覚えた。

一人の生徒が呟く。

「貴子先生が、壊れた」

「何を言うか。頭のフィルターは——」

「何をやってる！」

慧音が教室の戸を勢いよく開く。

「ああマイセン」

「目を覚ませ馬鹿者！」

ガツンと脳天に衝撃が走る。

「っは！私は何を」

「全く……」

「慧音、大変だ」

「どうした」

「タバコが無い」

「……………」

慧音はニツコリと笑って。

その日最大出力の頭突きを出した。

「いてて……………」

慧音のやつ、しこたま頭突きしやがって。

今日なんか特に酷かった。

私が大切に持っていたコレクションを全て焼却するし。

そのせいで今日は一本も吸えてない。

ああ、禁断症状が。

タバコをやめて辛くなるのは3日目からだと聞くが……………うん、無理だな。

……………よし。

今なら誰も見ていない。

しかし鼻屑にしているタバコ屋は件の悪法に煽られて閉業してしまっただけ。

何処かでタバコを……………。

「うう……………」

「うわー！」

踏み出した足に何か引つかかる。

つまづきそうになって足元をみると、巨大なモノが一つ。

それは、人間の腕であった。

腕をたどりその細い腕の持ち主を見る。

不気味なほど白い髪を、お札のような者で束ねていた。

地面に突っ伏して何やら嬌声を上げている。

「ど、どうした！大丈夫か？」

肩を揺さぶって意識を確かめる。

頭を揺らすたびに、口から小さく呻き声が溢れた。

薄らと目を開き、私のことを見る。

「た……………」

「た？」

おぼつかない口元で、倒れていた少女はこう言った。

「タバコを……くれ」

糸の切れた操り人形のように、少女はカクンと力を失った。

「ふう。生き返った」

「全くだ」

私とその少女は、裏路地で喫煙した。

ゆーつくりと細胞を労るように、深く吸い込む。

まさしく至福の時である。

「息苦しい里になったなあ」

私がそう零すと、少女は何回もうなづく。

何度かそういう会話をした後、律儀に根元まで吸い尽くしたタバコを地面に捨てて、私は帰ることにした。

「それじゃ」

「ああ、もう行くのか。アンタ名前は？」

「貴子だ。アンタは？」

「妹紅……藤原妹紅だ」

少女は倒れていたとは思えないほど血色のいい顔で答えた。

何やら二本目に突入しているが、見ていると心がざわつくので足早に去ることにする。

「妹紅か。一つ言っておく。あまり私と会ったとは言わない方が良い」

「何でだ？」

「何でもだ。今日の事は忘れてくれ」

「そうか……アンタ、どこことなく私の知り合いに似てるよ」

「え？」

「その説教くさい所がさ」

「なっ！」

「まあ、言う通りにさせてもらうよ。アンタは何となく、ろくでもない気がするからさ」

「ひ、酷い！」

「冗談。それじゃあね」

そう言つて、ポケットに手を突っ込んで妹紅はどこかへ消えた。あつけらかなとしてゐるが、サラツと酷いことを言うタイプの人間だ。

そう言うところは私の知り合いに似ている。

諸悪の根源に。

嫌味っぽさは段違いだが。

「さて……私も帰るか」

次の日の朝、私はまたも誰かの声で目覚める。

「おはよう」

「……慧音？」

またお前か。

こここの所この展開ばつかな。

幽香は朝の七時くらいに来るから良いものの、二人が遭遇してしまつたら大変だ。

客は来ないが一応店番は幽香にやってもらふ事にした。

そのせいで客足が更に遠のいてゐる気がするが。

そして最悪な事に、この日は例外つてやつだった。

「あら、貴方が何故ここに居るのかしら？」

「ゆ、幽香!？」

寝てるだけで汗ばむようなクソ暑い夏だつてのに、私は血が凍りそうだった。

ただでさえ鈍い私の頭は、寝起きだつてのにオーバースロットルでキリキリと音を立ててゐる。

胃袋からも、そんな類の音が聞こえてきそうだ。

「何でこんな時間に……」

「それは私の台詞よ」

いつになく不機嫌な様子で幽香は言った。

腕まで組んでやがる。

こういう不機嫌を隠そうともしない奴は若干嫌いだ。

「この店が貴方の居場所でしょう？ 寺子屋なんかに行く暇は無いの」

「私が頼んだんだ。花屋なんぞに居るよりは、と思つてな」

慧音が食つてかかる。

その瞳には敵意と怒りしかない。

怯えなど、どこを探したつて見つからなかった。

それは珍しい表情であった。

優しさと厳しさを持つ慧音が、純度100%の敵対心で迎え撃っている。

しかし、幸運なことに幽香も事を荒立てる事にかけては随一であった。

「殺すわよ？」

「残念だったな。ここじゃそれは御法度だ」

「ふん。関係ないわ」

「人里は私たちのものだ。ここで決して人を殺させはしない！」

「人は殺さないわよ。殺すのは——」

幽香がそこまで言いかけた時であった。

静謐な朝に似つかわしくもない音が鳴ったのは。

「慧音え!!!」

玄関を足で蹴つ飛ばして何かを叫びながら入ってきた者が一人。

赤いモンペ、白い髪。

蹴り抜いた戸を勢いよく踏み倒して、そいつは口上を述べた。

「慧音に手を出したのは、どこのどいつだあ！」

「も、妹紅！」

慧音が何かを言おうとするも、そいつが行動を始める方が早かった。

「てめえかあ！」

右腕を構えながら駆け抜けてくる。

その行き先は私の元であった。

私の顔面が殴り飛ばされたのは言うまでもない。

「つて、お前は昨日の！」

「いててて……っあー！」

見覚えがある……しかも結構鮮明に。

その顔は、悪びれもなく口を開けているだけであった。

「いやあ、勘違いだったのか。すまんすまん」

はっはっはと笑う妹紅。

私もその顔は忘れてはいない。

何せ私たちは……。

「知り合いだっただのか」

「ああ、昨日一緒にタバコを吸った」

「ちよっ、違うって！」

ああ、そうだ。

私たちはアンチ禁煙を理念とする抵抗組織だった。

そして私たちにとつての最悪な独裁者が、ここにいた。

「あれだけ辞めろといったのに、また吸ったのか……」

「……あ」

妹紅がしまったと言う表情で私のことを見る。

もう遅いよ馬鹿！

「この馬鹿者！」

いつものように、慧音が頭突きの構えを取る。

避けられないし、避ける気もなかった。

しかし、今回は違う。

後頭部に猛烈な違和感。

「えっ幽香、何を！」

「お仕置きよ」

そう言つて幽香が私の後頭部を遠慮なく驚掴む。

時速700キロで繰り出される慧音の頭突き。

動かず食らつても死にそうなのに……。

幽香に後頭部をひっ掴まれて、思いつきり前に顔を突き出された。

相互作用で、痛みは平常時の二乗になる。

まるで地震でも起きたみたいなき音が鳴り響く。

「つぎやあああー！」

私は叫ぶ。

衝撃は想像を絶し、頭はヘタをすると凹型にへこんだかもしれない。

ただ、1番の問題はそこじゃなかった。

額につけていた向日葵のコサージュが、ホロリと取れてしまったのだ。

それは取ると爆発するシロモノ。

「……っ不味い！爆発するぞー！」

言ってから気づく。

あれ、これどうしようも無いぞ。

今から三秒ほっちで、何ができる。

そう思ったのだが、何かをできる者が一人いた。

「何だこれ」

妹紅がひよいとそれをつまみ上げる。

「離せ妹紅ー！」

私が叫ぶのも全く聞こえてなような素振りです、それを包み込むような体制でうずくまった。

「妹紅ー！」

空気の振動。

唸るような低音。

頬に何か当たる。

それは、妹紅の指であった。

「っ妹紅ー！」

妹紅が爆発した。

文字通り。

腹に爆弾を抱えて。

それなのに慧音も幽香もえらく静かで、まるで私だけがその事実を認識できているかのようだった。

「ああ、妹紅が……妹紅ー！」

気が動転するってのはこういう事を言うんだろうな。

粉々に散らばった妹紅の体を寄せ集めてさ。
指、足、髪の毛。

そんな事がどれほど無意味な事だと分かっているても。
しかし、異変は起きた。

寄せ集めて床に散らばった妹紅の残骸が、メラメラと燃え始めたのだ。

やがてそれは大きな紅炎となり、天井まで届こうかという大きな火柱を上げる。

その事でも声をあげているのは私一人で、慧音も幽香も、依然として驚きはなかった。

やがて火は収まり、その中から一人の少女が現れた。

まるで魔法のように。

「いてえなあったく……」

「……妹紅？」

「まったく、話に違わぬ馬鹿野郎だな。お前」

「な、なんで」

「見たまんまだ」

「それって……」

服についた埃やら燃えカスやらを手で払いながら妹紅はこう言った。
た。

もう百万遍も言わされたような、ウンザリとした口調で。

「私は死ねないんだ。蓬莱人ってやつさ」

何を言っているのか分からなかった。

一つ一つの単語の意味を知らないわけじゃ無い。

ただ、それでも理解できなかった。

するとずっと黙っていた慧音が横から口を開いた。

「妹紅はな……不老不死なんだ」

不味いコーヒーでも飲まされたみたい顔をして、妹紅も慧音も俯いた。
た。

それじゃ補足になってない——そういう事すらままならないくらい、気が滅入った。

幽香は相変わらず腕を組みながら私のことを睨んでいる。
私は、ヘナヘナと近くの椅子に腰掛けることしか出来なかった。
思えば、辛いことのきつかけつて奴は案外下らないことだったりする。

例えば、道で子猫を助けたとか。

ダイエットを始めたとか。

どうにも人生って奴は、そう言う当たり障りのない事から崩れていくらしい。

だから愉快だし、だから悲しい。

「はあ……」

長い沈黙は、私の溜息を持って幕を閉じた。

私と幽香が隣り合って座り、対面に妹紅と慧音が座している。

溜息は止まらない。

四人で、何回目か分からないほぼお湯のような出廻らしを黙々と啜りながら、まるで殴り合ってるような雰囲気だったから。

ほとほと嫌気がさした故だった。

「んで、何の話をしてたんだっけ」

そう問いかける。

幽香はずつと仏頂フェイスだし、慧音も眉が吊り上がってるし。

事情を掴み損ねている妹紅だけが呑気な顔をしてお茶を啜っていた。

コイツは私をぶん殴りに来ただけじゃなかった。

曰く、慧音が毎日何処かにコソコソと行くから、これは何やらよからぬ事が起きたに違いないと思っただけそうだ。

なるほど、ニコチンは頭を正常にバグらせていくらしい。

「人の従業員を勝手に連れ去らないで欲しいとお願いしに来たのよ」

幽香の牽制。

注釈しておく、私はコイツの従業員になった覚えなど無いし、そもそも幽香は人じゃ無い。

よって人の従業員、の部分は全て間違いである。

「同意の上だ。それにお前がこの里に入らなければわざわざ授業などしてもらわない。原因はお前にある」

慧音の鋭いカウンター。

まあ、同意したのはしたのかもな。

幽香をこの里に連れてきてしまったのは一応私の責任だし。

悪いのは全面的に幽香だけど。

「このクズが同意しても私はしてないわ。契約は不成立なのよ。残念ね」

このクズ、の部分でビシツと私のことを指差していた。

私には貴子という名前がある。

クズではありません。残念でした。

「……フン」

「痛！」

幽香に足で思いつきり爪先を踏まれた。

骨がペラッペラの二次元になりそうなくらいの強さだった。

いてて……心でも読んだのか？

いつの間に読心術を手に入れたんだ。

私も読心術では負けちゃいない。

読心術というより……辞めよう。

もし今心の中で独身術か、とか思った野郎は正直に出てきなさい。

私の前で嘘を吐いたって無駄だ。

今ここだけはハッキリと心が読める。

安心しろ。

私は慧音と違って優しいから頭突きなんてしない。

ただ最近、金目潰しに凝っている。

「……聞いているのか貴子」

「つえ?!聞いているよ!」

「お前はどなんんだ?」

不味い。

全く聞いてなかった。

「まあ、どちらかと言えば前者かな」

「そうか……聞いてなかったんだな」

「……はい」

肩をすくめる慧音。

心なしか溜息も吐いていた気がする。

「だからな、お前はとうしたんだ。私からすればお前は幽香を里に入れた悪人だし、また飢饉を脱してくれた英雄でもある。一体お前の目的は何だ？」

強めに詰問される。

妹紅も徐々に話を飲み込めてきたのか、慧音に同意するような面持ちでうなづいている。

なんか責められているような気分で心持ちが良く無いが、質問の答えについて考える。

私の目的……。

そんなの、一つだ。

「私は、あの街に帰りたい」

「街？」

「ここから西にある所さ」

「……外れ街か」

妹紅が初めて声を発した。

「知ってるのか？」

「まあ、な。しかし私の知ってる限りじゃあそこは好き好んで住むよ
うな所じゃないぞ」

「あの街には、何も無いんだよ。安全も、秩序もない。そして、差別も
偏見もない」

それが、全てだった。

ああ、口に出してみてもやっと分かった。

私は帰りたいんだ。

もともとこの里に住めるような人間では無いし。

里民も私も、無理やり同じ所に住んでたってストレスが溜まるだけ
だ。

こんな綺麗な里に、ルンペンもどきの浮浪者が居られるわけない。

……そうだ。

帰れるじゃ無いか。

私を閉じ込めていたコサージユはどうなった？

確かに爆発したよな。

……妹紅には悪いと思うけどね。

しかし、それなら何故いつまでもここにいる必要がある？

この家は名残惜しいが幽香にくれてやればいい。

花屋なんて一人でやってればいいんだ。

「帰るよ。あの街に」

「……貴子、お前」

「世話になったな。人里で喋ってくれたのは慧音と妹紅だけだった。

でも一緒にいちやダメなんだよ。ワインと泥水みたいなもんさ」

「そ、それを見てみる」

慧音が私の顔を……正確にいうと顔よりやや上の方。

つまり……

「頭？どうかしたのか」

嫌な予感はしなかった。

だからこそ、手のひらに触れるコットン生地は最悪の手触り

だった。

「これは……まさか」

「ええ、言ったでしょう？花が、貴方を選んだって」

幽香のその一言は、私を黙らせ、床にひれ伏せさせるのに十分すぎる

威力であった。

人間失格

暑いなあ。

本当に、灼熱地獄だ。

ああ、汗がやばい。

拭っても拭ってもどこからか湧き出てくるし。

ヘンゼルとグレーテルみたいに歩いて来た道にポタポタと跡がついてるんじゃないだろうか。

どうやら私の汗腺は、やたら熱心に仕事をしているんだろうな。

当の私はどうしようもないぐうたらだつてのに。

……私、汗臭く無いよな。

アポクリン汗腺は私に似て今もぐーすか冬眠中のはずだ。

良かった良かった。

さて……それじゃあもつと重大な事について、存分に悩むとするか。

「ここは、何処だ」

過熱でショート寸前の頭を無理くり回転させる。

思い出すのは、昨日妹紅と交わした会話。

確か……

「悪いんだけど、少し手伝って欲しくてさ」

「ああ、良いよ」

うん、こんな会話をした。

句読点の位置を変えるなら、うんこ、んな会話をした。

いや、何を考えてるんだ私は。

馬鹿なのか。

これも暑さのせいだろう。

それなら今、明らかに目の前でニョキニョキと伸びてるこの竹も幻覚か。

……間違いない。

これは現実だ。

ところがどっこい夢じゃありません。

朦朧とした意識の中で、ハッキリとわかる事が一つだけ有る。

私は、迷子だ。

こういう時、何と言えば良いかを私は知っている。

迷子になってしまった。

オウマイゴー。

……心なしか、周りに生えまくってる竹が揺れた気がする。

面白いジョークも言えだし、水筒の水を何口か飲んで思考も落ち着いてきた。

現状を整理しよう。

まず、私の現在地だ。

私はどうやら竹林の中にいるそうだ。

始末の悪い事にここは巷で迷いの竹林なんてケツタイな呼ばれ方をしている所らしい。

では何故こんな所にいるのか。

妹紅に連れられて来たのだ。

どうやら、竹炭を作るといふ仕事が妹紅にはあるらしい。

その材料を取りに来たのだ。

そしてその妹紅はと言うと。

どうやら逸れてしまったらしい。

つまり、遭難の名所として名高いこの場所で、あろう事か私も迷える子羊の一匹になってしまったって訳か。

しかし、何もかもを悲観する必要は無いらしい。

視界の果てに、ある物が見えたから。

それは……

「……家？」

やたらデカイ屋敷であった。

大きさなら白玉楼といい勝負だ。

向こうは書院造なんだが、こっちは寝殿造だろうか。

雰囲気はどうにも向こうと違う。

封鎖的、とでも言う感じか。

何であれ、渡に船だ。

助けてもらう以外に、選択肢は無い。

そう思つて、早速門の前に立った。

中の人を呼ぶ手段が見当たらなかつたので、無礼を承知で門を開け、中へと入る。

そこまでの記憶は確かだ。

それなのに、おかしい事が起きた。

さつきまでそこにあつた屋敷が、跡形も無く消えていた。

おかしい事を言つてるのは分かつてる。

でも今日の前で起きた現象を言葉にするには、この言い方しか無いのだ。

潜つたはずの門すら無い。

不審に思つて見渡すと辺りには竹が生えてるだけだった。

指先には、確かに門の冷たい手触りが残っている。

妖怪に化かされたか。

もしくはとうとう頭がおかしくなつたか。

どちらにせよ、妹紅と早く再開しなきゃ行けなくなつた。

さもなくば野垂れ死ぬか、それとも化かされ死ぬか。

汗の温度が冷たくなつたような気がした。

そこから、割と時間をかける事なく目的は達成された。

案外近い所に妹紅はいたのだ。

どう言う訳か血塗れで、四肢をもがれた状態で。

まあ、焦つたのは数秒だけで、すぐさま例の能力によって私の知つてる妹紅に戻つたけど。

とはいえ何かに襲われたのは事実なのだ。

しかも、とんでもなく兇悪な何かに。

「っちー！」

復活妹紅の第一声は、鋭い舌打ちだった。

地面を何度も蹴つて、ビシヤビシヤと土飛沫を立てている。

「何があつた！」

ただならぬ様子の妹紅に、私はそう聞いた。

すると、そこで初めて私がいいた事に気づいたような様子で妹紅は、

「……負けた」

と言った。

再開を喜ぶ事も忘れて何のことかピンと来ていない私に、妹紅はツラツラと続ける。

「また負けたーあのクソ野郎に」

それだけ言って、つつけんどんに妹紅は歩き始めた。

またはぐれたら今度こそヤバい気がしたので、私も後に続く。

そこから、会話は殆ど無かった。

無言で何本か質のいい竹を取って、私達は竹林から抜け出した。

帰路につき、妹紅の跡を追う形で私は細かく刻んだ竹が入った籠を背負って歩く。

脳内では、不思議な体験が未だに頭をよぎっていて思考がフワフワとしていた。

あの屋敷の事も、ボロボロになっていた妹紅のことも。

その事がどうにも気になってしょうがなかったので、私は今にも帰ろうとする妹紅の肩を掴んで引き止め、一緒に夜ご飯を食べようと提案した。

妹紅は一言も話さず、ただコクリと頷くだけであった。

同意を受け、今日は何処で食べようかと私がアレコレ考えていると意外にもさつきまで押し黙っていた妹紅が、

「良い店がある」

と言うので、大人しくついていく事とした。

時刻は夕方である。

「やってるっ。」

無言で妹紅についていくと、着いたのは小さな屋台であった。

竹林から少し離れた場所でこじんまりとやっている。

人里でもたまに見かける手押し車の奴だ。

暖簾越しに、何を焼いているのかは知らないがコクのある芳醇な香

りがプンプンしている。

どうやら妹紅の言う通り、アタリの店らしい。

妹紅が暖簾をくぐって席についたので、私もそれに倣って隣に座る。

背負っていた籠を地面に置き、楽になった体から溜息が漏れた。

「お任せで」

「ウチはコレしかやってないって」

奥にいた割烹着の店主が、生簀から何かを持ってくる。

それは、ヌルヌルとした活きの良いウナギであった。

店主が滑るであろうそれを上手に掴んで私たちに示す。

不意に私と目が合った。

「お連れさん？」

「手伝ってもらった」

「そう。こじんまりとしてるけど、ゆっくりして行ってね」

店主が私に向けてそう言うので、私も適当に相槌を打っておく。

ひとまず酒を注いでもらい、妹紅と小さく乾杯をした。

……うまい！

辛口な風味がすつと鼻から抜けていく。

ああ、これは中々だ。

元々はあの竹林の事について詳しくそうな妹紅に今日会った奇妙な出来事を話そうと思って企画したのだけど。

店主がウナギを焼き始めると、じゅうじゅうという音と共に香ばしい匂いがしてくる。

それを嗅いで、私は不意に気づいた。

いや、気付かされた。

お腹がペコペコだと言う事に。

そう自覚すると、体がやつと気づいたのかとでも言うようにお腹から大きな音を鳴らす。

情けない腹の音を聞いた店主が、ニコリと微笑みながら私にこう言った。

「あらあら、お疲れ？」

「美味しそうな匂いで我慢できなくて」

「うふ、この人と仕事をすると疲れるでしょう?」

妹紅を指差しながら、ケラケラと店主が笑う。

妹紅は依然として黙っている。

私はそんな事無いと否定したのだが無視された。

「なにせ何も言わないんだもの。愛想がないのよ。愛想が」

「私は気にならないよ」

「気を使わなくていいの。本当、そりやお腹も空いちやうわよね」

妹紅は全く気にせずチビチビと猪口を傾けている。

こういう絡みには慣れているのかも知れない。

私としても、別に疲れたわけではないし、一応のフォローはしておく。

「まあ、暇だったし。良い汗かけたよ」

「優しいわねえ。サービスしちやお」

そういうと私の方の猪口に酒を注いでくれる。

ラツキ。

「それで、話って?」

棚からぼた餅、と言うより店からタダ酒をチマチマ味わっていると妹紅が急にそう言った。

どうやら、ここに来てもらった目的を読み取ってくれたらしい。

話が早くて有難い。

余計な前置きなく聞きたかった事が聞ける。

「今日、何があった?」

「何が」

「ボロボロになって倒れてただろ? 負けたとか言ってたけど、何があったんだ?」

「……喧嘩」

「喧嘩? 誰とするんだよ。妖怪か?」

「……そんなとこ」

喧嘩か……。

それにしては度が過ぎてないか。

あの傷跡は、妹紅じゃなかったら間違ひなく死んでる。喧嘩ってのは命を奪う物ではないと思う。

「何で喧嘩なんかしたんだよ」

「別に何だって良いだろ」

「いや、こうなったら徹底的に聞かせてもらう」

「……ウザい」

グサッ！

会心の一撃。

一緒に洗濯物を回さないで！と一緒くらいのダメージあつたよ今。

「また輝夜と？」

心を痛めた私を見かねたのか店主が会話に参加してきた。

輝夜、と言う単語を聞いた瞬間妹紅の眉毛がピクリと跳ねた。

どうやら凶星らしい。

「それで、また負けたの」

「……」

「お連れさんも放つて何をしてるのよ」

「……うるさい」

「ま、これでも食べて元気だしなよ」

そういつて、目の前に串焼きのウナギが出された。

適度に焦げ目のついた光沢のある焼き上がりである。

焦らしに焦らされて空腹に苦しむ私は遠慮もなく思うままに貪りついた。

「美味しいー！」

「うふ。そうでしょう？」

焼きたてアツアツのウナギを、はふっはふつとリズム良く口に入れる。舌で潰せるほどフワフワの柔らかい身は濃厚で肉厚。

ゆっくり味わおうと思っていたのに、気がつくどあつという間に平らげてしまっていた。

「おかわり！」

「はいはい」

待つてましたと言わんばかりに、またウナギを焼き始める。
今度はタレを沢山かけている。

これも美味しそう……じゃなくて。

本題を忘れる所だった。

「輝夜って？」

「……クソ野郎だよ」

「何をされたんだよ」

「反吐が出る。まあ……平たくいえば親の仇って奴かな」

早酒で酔いが回って来たのか、妹紅は少しずつ饒舌になっていく。

私もそこまで深入りする気は無かったのだが、とことん聞くと言っ
た手前引き下がれはできまい。

嫌々といった感じながらも、妹紅はある昔話をしてくれた。

とある人間の話を。

私の親はさ、平安の貴族だったんだ。

名のある大名って訳でも無かったけどそこそこ名家で、娘の私も結
構良い暮らしをさせてもらってた。

そんなに傲慢でも無いし真面目な人だったから、周囲の信頼も厚
かったと思う。

私もよく家臣から名士だって聞かされてたよ。

幸せだったと思う。

平穏な日々ってのは、ああいう事を言うんだろかな。

ずっとこんな生活が続くと疑わなかった。

……私が幾つの時だったかな。

アイツが現れたのは。

突然現れたアイツに、有名どころのお偉いさん方は一人残らず心奪
われてさ。

本当不埒な輩ばかりだよ。

まあ昔なんてそう言う事ばかりだし、当時じゃ別に普通の事だ。

……ただ、私の親もその不埒な一人だった。

あんなに真面目で実直だった人がさ、突然何かに取り憑かれたように取り乱して。

アイツに向けた熱心なアプローチは長いこと続いた。

ああ、あの時止めておいたら、なんてね。

何通も恋文を送って。なんとか屋敷に入るまで漕ぎ着けた。

結果、結婚するならとある条件を出されたんだ。

その女から出された難題は、蓬萊の玉の枝を持ってこいって事らしい。

本当、とことん性根の腐った野郎だよ。

馬鹿な話だろ？

そんな条件を出されたら流石に諦めるだろうと思ってた。

結局私の親がどうしたかと言えば、自分の娘と同じ年くらいのガキの為に三年も何処かに閉じこもったのさ。

世間には蓬萊の玉の枝があるという所へ行くと吹聴したけどそんなのは嘘だった。

本当は家の宝物もあらかた売って、その金と一緒に何処かへ雲隠れしたんだ。

その中で職人たちをこき使って作らせてたんだとき。

私は家に置いてけぼりにされた。

簡単に言えば邪魔者……いや、どうでも良かったんだらうな。

三年かけて出来上がった物は、そりゃあ大層立派な偽物だったよ。

事実本物なんて有るかどうか判らないんだから、それが偽物なんて言われは無いだろ？

失敗なんて少しも考えなかったんだらうな。

それを持って、意気揚々とアイツの元に行った。

流石のアイツもその立派な贋作を前にまんまと騙されたらしい。

あれよあれよでとうとう婚姻の一步手前だ。

……そこで嫁に入ってたなら、どれだけ幸せだったらうな。

まあ、つまり。

上手くいかなかったって事だよ。

真面目な人だった。

約束を破ることも嘘をつく事も嫌いな。

謹厳実直で尊敬されるような。

そんな人が、立派な偽物をこさえたんだ。

ペラペラと嘘を捲し立てたんだ。

人を、騙したんだ。

どうしたって物事は上手くはいかないんだろうな。

成功と思われた謀略に想定外の出来事が起きた。

三年間働き通しで使われた職人たちが、面会中のアイツの屋敷に乗り込んできたんだよ。

何人いたかな。

10か20か。

曰く、三年分の給料を早く支払えつてさ。

それも勿論な言い分だし、別に払わぬつもりなど無かったはずだ。ただ、時と場面が悪かった。

父は三年を無駄にされて、謀りを水泡にされてカンカンに怒った。もつとも、手に入りかけた女を失ったからかもしれないけどさ。

その勢いと弾みでその中の一人をぶん殴ってしまった。

もう騒ぎも騒ぎ。

その後何が有ったかは知らないけど。

私が次に見た親の姿は、真つ白な骨死体だった。

執り行われた葬儀には、私以外誰一人として来なかった。

貴子ならどうしてた？

自分の親を殺されて、家が無茶苦茶にされて。

拳句ソイツは月に帰ると言い放った。

何が正しいかなんて分からないけど、私は許せなかった。

でも止められるわけもないし、止める気もない。

だから、ほんの悪戯心で。

私は裸足で富士の山を登った。

そこで、月に帰ったアイツの残した薬を呑んだのさ。

クソ程不味い薬だった。

その薬は、蓬萊の薬。

あんな物が薬なもんか。
最低な毒だ。

飲めば不思議なことに、山登りで擦りむけた足の痛みは無くなっちまった。

転んでできた顔のアザもスツと消えていった。

驚いて岩から落ちただけで、痛みはすぐに消えた。

どうやら、不老不死になったらしい。

永遠に生きる存在になったのか。

それとも……、死ぬ事を神様から取り上げられたのかな。

有り余る狼藉でお縄にかかった私はその場で打首。

縄で縛り付けられてさ。

今もはつきりと覚えてるよ。

自分の頭がメリメリと引き裂かれる感覚を。

どうなったと思う？

死ねなかつたんだ。

その後も指を折られたり川に沈められたりしたけどどれもこれもダメ。

私を殺すには至れない。

向こうも懲りないのか私は棒にくくりつけられ、毎日処刑をされ続けた。

水責め、焼き殺し、岩ですり潰す。

そんな物で死ぬるわけがない。

見かねたお国様は、私の肩に刺青を掘って、各地方方へお達しを出した。

この者 不死の妖怪 注意されたし
つてな。

そこからどうやって逃げたんだっけか。

棒にくくりつけられたから舌を噛み切って、そつから。

肩に叩かれた刺青を隠しながら私は故郷に戻った。

まあそこから2、3日でまた殺されるんだけどさ。

幼馴染だった奴に。

この化け物！つてさ
物凄い剣幕だった。

人は、いつか死なないとダメらしい。

私は死ねない。老いれない。

人間、失格。

どうやら私は完全に人間じゃなくなったらしい。

そこから多くの妖怪を殺して、人間も殺して。

……あんまり覚えてないや。

ただ、1000年経ってアイツと出会ったんだ。

私の家は無茶苦茶にしたアイツに。

何の因果か、アイツも私と同じ不老不死だった。

アイツを殺す事だけが望みだったのに、どんなに皮肉な事だろう
な。

結局、今も終わりのない殺し合いを続けてるんだよ。

ずっと、ずっとな。

……慧音と出会ったのはいつだったか。

これも覚えてないや。

気づいたら慧音は横にいた。

その頃の私は毎日の様にアイツと殺し合いをしててさ。

アイツを苦しめせしめる。

ただそれだけを考えていた。

最近はてんでダメだ。

昔は互角に戦えてたのに、今は少しも勝てなくなって来た。

勝ち負けすら無意味。

それはわかってる。

でもさ、頭でわかって大丈夫なら、そもそも不老不死になんてなっ

てないだろ？

家を失い、人間を辞め、復讐もできず。

そうして私が私である拠り所を全て失った。

私は……私って奴は一体何なんだろうな。

妹紅は、最後まで抑揚の無い淡々とした調子で語った。

私にはその平坦な声の奥から、諦めと悲しみが伝わってくるような気がしてならなかった

店主が焼く美味しそうなウナギの音が、今は何故か心地悪い。

他人事のように語る妹紅に何の返事もできず、静かなはずの妹紅に相槌を入れる事すら忘れそうだった。

……人間を辞めた、か。

「はあ……疲れた。久しぶりにこんな喋ったよ」

「妹紅……」

「何？同情なら要らないよ。もうされ飽きたからさ」

「人間って、死ななきゃダメか？」

「そりゃあ……そうだろう」

「私はそうは思わないぞ」

「へえ。それは取ってつけたような慰めか？」

「私も一度死んだからな。私の場合は人間卒業か？」

「……中退が良い所だな」

「そうかもな」

宵越しの酒は、良いコシのウナギによく合う。

何一つ気の利いた事なんて言えないから、私は努めて妹紅を笑わせる事にした。

妹紅は別に困って無いかもしれないけど。

それでも妹紅を救えるのは、あの人しか居ないだろう。

妹紅を人間にしてやってくれよ……慧音先生。

ああそれにしても、このウナギは美味い。

本当、嫌になるくらいに。

「それでさあ、慧音ってばさあ……ううっ……」

夜がふけ酔いが周り、程よく酩酊して来た頃。

私は妹紅の本性を知った。

そのつつけんどんな態度も、棘のある皮肉も、全ては隠れた本音の

裏返しなのか。

妹紅はボロボロと泣きながら慧音に対する愚痴のろけを延々吐き続けている。

やれ態度が冷たいだの、出会った時はもつとどうだっただの。

語っては呑み、語っては呑みするのにはほとほと恐れ入った。

まったく良くこんなに出てくる物だ。

私は対応に困り果て店主に助けを求めたが、

「いつもの事よ」

と一蹴されてしまった。

……いつもこんな感じなのか。

今、妹紅は覚えていないはずの慧音との馴れ初めについて語り始めている。

桜並木がどうたら部分しか聞き取れなかったが。

ちなみにこの話は今日で4回目だ。

下戸だったのか。

もはや何を言ってるか聞き取れない。

不老不死である妹紅の呂律が死んだ。

ああ、夜はまだまだ続く。

朝までコース……オーマイゴ―。

まったく、永い夜になりそうだ。

翌日、チュンチュンと言う小鳥の鳴き声と、風見幽香のやたら冷たい声で私は目覚める事となる。

「本当に寝るのが好きなのね。死体なんて似合うと思うわよ」

「っ起きてる起きてるー!」

飛び起きると掛け布団が無かったので、さては幽香、剥がしやがったのかと疑った。

よく見ると足元に丸まっていたので、真実は私が蹴っ飛ばしただけである。

「はこべいっど」

「おお、美味そうだ」

並べられる朝飯を、私はそつと一口頬張った。

性格に似合わず優しい味付けの料理は、二日酔いで焼けた舌の上をすつと蕩けていく。

「今日も暑いなあ」

「ええ、向日葵が元気だわ」

「そりやよかったな」

そんな会話をしながら食事を続ける。

ほのぼの、のっぺりとした時間。

私の経験則に則ると、こういう平和な時に限って何かは起きるのだ。

異変は、ご飯を食べ切った時に起きた。

「ご馳走様。美味しかったよ」

「何が？」

「え？……ああ、この野菜炒めが特に」

「そう」

「……あの、もうお腹一杯で」

「聞こえないわ」

幽香はどういうつもりか、空にしたお茶碗と皿にドツサリとおかわりを盛った。

私は美味しい美味しいと調子に乗って白飯炊き立て3杯食ったので、流石にもう満腹だ。

これ以上はちよつとキツイぞ。

そんな思いなぞ汲み取ってくれる訳もなく、幽香は大盛りのお茶碗を私の前に置く。

「はい」

「いや、私もう限界……」

「はい」

ギラギラした目線の奥から、食べなきや殺すぐらいは言っている。それくらいに圧力があつた。

眼圧だけで熊くらいなら簡単に殺せそうだ。

本当に、冗談ではなく。

差し出された皿の上ではおかずに光っている。

お天道様が霞むくらい眩しかった。

「朝ご飯よ。食べなさい」

「朝飯だよな。拷問じゃないよな？」

死ぬほど飯を食わされたのは白玉楼以来だ。

あの時は実際死んでいたからセーフ……でもないだろうが今回は訳が違う。

明確な悪意を感じるからだ。

「ちよ、待て幽香」

「食べないの？」

「食べたいのは山々なんだが、無理だ」

「寺子屋に行つてどれくらい経つたかしら？」

「……だいたい二週間くらいか」

「その間、あの人間と食べてたわね」

「そうだな」

「食べなさい」

どういう論理か知らないがご飯山盛りのお茶碗をより強く私に突き出してくる。

胃袋が拒否反応を起こして吐き気がしてきた。

「食べられないなら、私が食べさせてあげるわ」

「わーい。とはならないからな」

「ほら、冷めるわよ」

今度は私の口を目掛けてご飯を掴んだ箸が突き出された。

これは世の冴えない男性諸君が夢見るアーンという奴か。

良かったな。

ソイツはそれほど良いものでもないらしい……特に今は。

もう無理矢理口に押しつけられている。

「追いついて話し合おう」

「食べてからよ」

「それじゃ遅いんだよ。ああ、これが本当の吐くまいか」

「何を言っているの？つまらないわ」

「つまらなくて良いじゃ無いか。喉に詰まったら死ぬからさ……どこかで聞いた下りだな」

逃げようと思ったが顔を掴まれてしまった。

頬を掴まれこじ開けられた口に、白米の大群は押し寄せてくる。

唇が天下分け目の天目山だ。

「何のつもりだ」

「食べないと殺すわよ」

……結局、私は食べさせられた。

誰だつて殺されるのは嫌だからさ。

全く、食わなきゃ死ぬなんて野生動物だけだと思つてたよ。

飢饉に苦しんでた里でまさか満腹に苦痛を覚えるとは贅沢なことだ。

あれを形容するなら正しく拷問だった。

どんなに必死で食えども食えども幽香はおかわりを盛るのだ。

その凄まじさたるや、盛岡のわんこそばペースに負けずとも劣らず。

多分家に置いてある米を全部無くすくらいは食った。

大体、二週間分くらいか。

動こうとすると乗車率200%の胃袋が悲鳴をあげる。

幸いなのは、ケチケチせず美味い米を買っておいたことだ。

慧音が言っていたから何となく選んだのだが、ズバリ正解だったらしい。

ありがとう新潟県民。

しかしどうしても過剰摂取だ。

しばらくは飲まず食わずで良いな……。

そして賢明な私はここでも気づく。

不幸なことに、幽香の悪行は続くつて事を。

「それじゃ、寺子屋行ってくるぞ。遅刻してるから急がないと」

「今日は休みよ」

「え？……水曜は休みじゃないぞ」

「あの人間には言っておいたわ。今日は休むと」

「な、何を勝手に」

「だから今日は休みなのよ」

「お前なあ……まあ、いいか。たまにはな」

幽香の悪行を看過するのには理由がある。

実は慧音には申し訳ない話だが、昨日飲みすぎたせいで少々体調が悪かったのだ。

朝から白米大食い選手権に強制参加させられたお陰で尚更な。

という訳ですまないが今日は休ませてもらおう。

なに、明日いつもの二倍頑張ればいいだけだ。

「今日はゆっくりするか」

「しないわ。家にいるの」

「なら、暇だな」

「暇じゃないわ」

「私の一言一句を否定するな」

「今日はここにある花を世話しなさい」

ここにある花というのは、幽香が（無許可で）私の家に並べた売り物の事だ。

当たり前だが、店として開けてからちつともすつとも売れてない。

その顔ぶれは二週間前と大体同じだ。

具体的にいうならスイレンとか花菖蒲とか。

一応何本かだけ、慧音が寺子屋に飾ると言って買っていったが、本当にそれだけだ。

売れない理由は私の隣にいる緑へアーのフラワー野郎で十分だろうが、この店には他にも色々事情がある。

その一つがここにある花たちの少し奇妙な生態についてだ。

生けてある容器の水は毎日変えている。

しかし花というのは何日も置いていたら枯れるはずだ。

花の寿命は短い。

そう思っただけで枯れる前にどこかへ植え直そうとタイミングを伺っていたのだが……全く枯れる心配が無いのだ。

どういふ訳かいつまで経っても花たちは皆生き生きとしている。
多分慧音が買って寺子屋に置いてある奴よりもだ。

「この花は何故か元気だな」

「ええ。でも手入れは必要よ」

そんな訳で今日一日は店番をすることとなった。

花の手入れといつても水切りをしたり太陽に当てたりなので、ずっと動いていなきやダメな訳では無い。

むしろ、待ち時間の方が多い。

要するに、結局暇なのだ。

生憎タバコはどうとう幽香に捨てられてしまったので、店前を通りゆく人々をブーツと眺めるしかやる事がない。

窓から入ってくる日差しで暖をとりながらうつつらうつつと船を漕ぐ。

そんなのんびりした時間。

そういう平和なときに限って……これは二回目か。

またしても異変は起きた。

といつても今度はただの来客だが。

「アンタは……昨日の」

「ミスティアよ」

「昨日はウナギ、美味しかったよ……お代って払ったよな？」

「うん。ウチはツケはやってないからさ」

「良かった良かった。それで、花を見に来たの？」

「それもあるけど……今日は貴方に用事」

「私？」

「妹紅の事でね」

妹紅の事なら妹紅に話せば良さそうな物だが、そう簡単な話でも無いらしい。

何やら大切な話だそうなので、客間に上げ渋めの茶を出してやった。

くたびれた座布団の上に座って、妙に真剣な表情でミスティアは話を切り出した。

「昨日の話、覚えてる？」

「妹紅の生まれか？」

「うん。あれなんだけどさ……」

ミステイアは居心地悪そうに足をモジモジさせる。

言いにくい事なのだろうと推測するのは簡単だった。

「昨日の話ね、嘘……じゃないけど、完璧じゃないの。実は続きがあったさ……」

「ちよつと待て」

私は前に手のひらを出し待ったをかけた。

ミステイアも黙して私を見る。

「そりゃそんな気はしてたさ。でも、妹紅が話さなかった話を何でわざわざするんだ？」

「分からないわ。けどなんだか貴方にこの話をしておいた方がいい気がしたの。妖怪の勘って、よく当たるのよ」

理由はわからないけど予感がした。

それだけの理由で、本人が話したがいなかった過去を打ち明けようと言うのだ。

しかもかなり壮絶で、聞いてて良い気持ちになれないものを。

ふざけた話だが、私にはむしろ伊達や酔狂でないのが伝わってきた。

どうやら私は少し真剣にその話を聞かなきゃいけない。

そんな気がした。

これも、言わば予感だ。

「妹紅はさ、不老不死になった後故郷に帰ったって言ってたよね」

「ああ、そこで……幼馴染に殺されたってな」

「あれさ、実は結構事情があったの」

ここから長くて大事な話をするつもりなのだろう。

一息置いて熱いはずの茶を勢いよく啜っている。

一番茶を入れれば良かったかなあ。

故郷に帰った妹紅はさ、まあ大層な迫害を受けたの。

それは今と違って妖怪退治屋なんてのもそうそういないし、当然の反応なんだろうけど。

妄人になった父親の事もあって、仲の深かった家臣たちも総出で妹紅のことを痛めつけたらしいわ。

父親の恨みを無抵抗な娘で晴らそうって。

どうせ死なないのだから、何をしても良いって。

本当、切な話よ。

親を失った子が他に頼れる大人まで居なくなっちゃったんだから。私なら我慢できないわ。

妹紅はその時どうしたと思う？

……何もしなかったのよ。

後ろから石ころを投げられながら何も言わず、故郷を立ち去ったの。

その時のあの娘の気持ちを考えると……ね。

とはいえ里を出て行っても妹紅にいく宛なんてない。

近隣の里には……いや、国中にお達しが出てたからね。

結局、故郷の近くにあった山に住んだらしいわ。

それはもう長い事ね。

貴方の人生を三倍したくらいはあった。

何十年かしら。

その間、妹紅は飲まず食わずだったのよ。

餓死するまで絶食して、死んだらまた蘇って。

蘇るたびに、表情が薄くなっていた。

その繰り返しを何年も何年も……。

なんでそんな事をするのか分からないわ。

ただ、人は飢えと孤独が天敵なの。

妹紅はその両方に襲われていたわ。

空っぽなのは、お腹だけじゃない。

心も失っていったわ。

けど、ある日……本当に長い年月を過ぎたある日ね。

妹紅の幼馴染が、山へやって来たの。

本当に竹馬の友って言えるくらい仲が良かったんだって。

ただ、妹紅の知っていたそれとは全然違う姿をした。

髭を蓄えて、顔には何本も皺が走って、上等な着物をきて。

何もかもが昔とは違ってたの。

当然の事よ、何十年も経ったんだから。

その人の瞳に映る、ずっと少女のままの自分が異端なのだから。

その人はどこから聞きつけたか知らないけど、妹紅の居場所を知ってやってきた。

ずいぶん歳をとって老けたけど、一目でわかったそうよ。

やたら見た目を気にするのに見た目が変わっても分かるのだから、人間って不思議なものよね。

妹紅はもう何十年ぶりに人と会って喋り方も忘れてたから、無言で話を聞いたの。

その人が言うにはね、今度、自分の孫が結婚をするんだって。

その為にお金が必要なんだけど、今自分がやっている仕事はあまりうまく行ってなくて纏まった金をすぐに用意するのは難しい。

だから、この妖怪を倒してきてほしい。

そうすればお国から金を貰える。

そして……孫の結婚式に出てほしい。

自分は、お前の事をずっと友だと思っていた、ずっと探していた……と。

そう言って妹紅に妖怪のお達しを渡したらしいわ。

その時代、妖怪の首に懸賞金がかかる事なんて珍しく無い。

妖怪退治屋も、元を辿ればそれで稼ぎ始めた人が祖先だもの。

妹紅は、何も言わずその紙を受けとって森に消えた。

まあ、死なないんだから妖怪退治なんて訳ないのね。

三日もせずに捕まえてきたわ。

山のような身の丈でもあろうかという大妖怪をね。

その幼馴染に殺した妖怪を引き渡して、妹紅は約束通り結婚式への招待を受けた。

式は三日後に控えている。

とはいえこのままの見た目では絶対駄目。

飲まず食わずでも見た目は変わらないんだけど、何しろ風体が拙い。

服や髪は泥だらけだし、体にはノミが湧いていた。

すぐさま風呂に入って身なりを整え、事情を知らぬものなら目を引かれるぐらいには美少女になったわ。

まあ多分、結構浮かれてたんじゃないかな。

友達の孫が結婚つてのはめでたい以外のなんでも無いでしょ？

そして妖怪の首を持って役所に行った。

そりゃ数十年の寂しさを埋めるには頼りないだろうけど、知人と連れ歩く道中はさぞ楽しかっただろうね。

傍目で見れば孫と娘くらい背丈も違ったけど、口下手な妹紅が尽きない話をするなんて奇跡よ。

ああ、楽しいってのは辛い事のお通しなのかしら。

妖怪を引き渡すとお金をもらえるという役所について、急に妹紅は幼馴染から殴られたの。

痛みは無かったけど、呆気に取られた。

驚いたのは殴られた事じゃなくて、役所から男が何人も出てきた事。

何人もの男が手に刀やら鋸やら物騒なモノもって出てくれば誰だって恐怖する。

幼馴染は妹紅にこう言った。

お前を捕まえて金にする。

孫の結婚式は本当の話だ。

嘘だったのは、妹紅をそこに呼ぶという事。

ああ、妹紅は言いたがらないけどこうも言ったらしいわ。

妖怪を孫に近づけるわけないだろ。

思い上がるなこの外道が。

人間は皆残酷ね。

どうやら、倒した妖怪よりも何倍の懸賞金がかけられていたらしく

て。

裏切りで呆気にとられてたら不意に後ろから金槌で頭を潰された。家畜を殺すみたいに、解体作業のように。

憎しみも何も感じず首を刎ねる。

ただの屠殺だよあんなの。

トドメを指したのは……幼馴染だ。

どっから持ってきたのか出刃包丁で妹紅の胸を——グサツと。

まあ、貴方も知ってる通り妹紅は不老不死なの。

……不幸にもね。

立ち上がりそこにいた男衆を全員殺して……ああ、ソイツが持っていた道具を使ってね。

刀なら刀で。

金槌なら金槌で。

素手だったやつは……殴殺よ。

可哀想とはあまり思わないけど、あの人達も食うために仕事を全うしただけなのよね。

誰が悪いと言うわけでは無いわ。

ただ、同情するフリをして金の為に妹紅を裏切った人間なんかには私は哀れとも思えない。

気がつけば辺りは死屍累々。

幾つもの屍が転がり、血溜まりに眼球が転がっている。ただ、一人だけ生きている者がいた。

妹紅の幼馴染よ。

ソイツは顔を真っ青にして妹紅にこう頼んだの。許してくれ、殺さないでくれ。

妹紅は何も言わなかった。

何も言わず、涙すら流さなかった。

そして妹紅は……幼馴染を食べたわ。

皮を剥ぎ腑をとりだしてその原型すら残らない肉片を貪り続けた。髪の毛一本、血一滴残さずにね。

それがどんなに悲しい気持ちだったかは分からないわ。

私は妖怪だから。

貴方は人間なら妹紅の気持ちかわかるわよね。

家を、家族を、人としての存在すら失って、最後の頼りである友を失った辛さ。

その全てに裏切られているあの娘の業。

そして、妹紅はソイツが左手薬指にはめていた指輪を遺族に返しく宛の無い旅に出た。

長い……千年以上の旅にね。

「……これが妹紅の話してこない部分」

ミステイアは、そう締めくくった。

喋り続けて喉が渴いたのかゴクゴクとお茶を飲んでいる。

何故私にそんな話を……なんて野暮な質問をしようとは思えなかった。

突き詰めても理由なんて無いんだろう。

予感がした——本当に、ただそれだけでこの話をしにわざわざこんな所まで来たのだ。

理由は無いのだろうが、それをする意味はきつと有る。

何か……今はハッキリとは分からないが、大切な意味がこの話をされた事に有るのだ。

「そんな事が……あったのか」

「大昔の話だろうけどね。桃から人が生まれるよりも」

「けど、まだ妹紅は鬼ヶ島から帰ってきていない」

「え？」

「……いや、何となくそんな気がしただけだ」

「へえ……」

ミステイアは湯呑みをちゃぶ台に置き、不意に私の事をジロジロと見つめてきた。

そして上目遣いで私にこういう。

「昨日から思ってたのだけど、貴方って変な人よね」

「そうか？」

心なしかミスティアか顔を近づけてくる。

お茶で潤った紅い唇がそこに。

「うん。とつても変。変人大賞があったらぶつちぎりね」

「なんだそりや……って、近くないか？」

「本当に変な人ねえ。うふふ」

さらに狭まっていく距離。

吐息が髪にかかりそうだ。

いやもう息遣いが聞こえて来る。

ハア、ハアって。

……荒く無い？

「あの、ミスティアさん？」

「さんなんて付けないで」

「いや、この距離感はちょっと拙いというか」

不意にミスティアは私の肩へ抱きつくように手を回し、チョココンと膝の上に座った。

小柄な体は思った以上に軽い。

無いような二人の隙間越しに見えるその瞳は薔薇のように紅く情熱的であった。

その扇情的に染まる頬をふつと緩め、ますます距離は縮まっていた。

「……なんか文体が官能小説だ」

「貴子……好き」

「え？寿司？」

「昨日見た時から……我慢できなくて」

そう言うと、ミスティアは着ていたカーディガンのボタンを器用に片手で外し、前開きにする。

布一枚の防衛線はあえなく撤去され、地肌へ直に熱が伝わってくる。

抱きしめる力は強くなり、肌と肌、胸と胸が接触する。

私の耳にはミスティアの喘ぐような荒い、それでいてか細い呼吸が

入ってくる。

胸から聞こえるこの煩い鼓動の音は、私のものか、それとも――。妖艶な色味を帯びた肉体は無抵抗な私の体へ絡みつき、その抵抗の術を奪った。

そしてとうとう……唇と唇は……。

「何してるのよ」

触れ合わなかった。

「幽香ー」

顔を可能な限りそらして幽香を見る。

幽香はミステイアの頭をがっしりと掴んで離さない。

ミステイアはモゴモゴと暴れているが幽香には赤子の駄々暴れに過ぎない。

あと薄紙一枚の距離だった。

ああ良かった、助かった。

不幸中の幸いだ。

「どういふつもりか説明しなさい」

ああ良かった。

全く助かってなかった。

不幸中の不幸だ。

これは世に言う、修羅場つてやつか。

その場にまさか本物の修羅がいるものだとは。

「ねえ貴子」

「はい」

いやに優しい声をかけられる。

理由は簡単。

ジェットコースターは落ちる前に上がるモノだ。

「私は店を見ておいてって言ったわよね？」

「はい。見ていろこの馬鹿と言われました」

コースターはレールの最上点に達した。

ここからは死を覚悟せねばならない。

猛スピードで落ちるだけだからだ。

努努脱線しない事を祈るのみである。

「そんなのがお望みなら、存分にしなさい——」

そう言うが先か、私の頭を掴むが先か。

右手に私、もう片方にミスティア。

絶叫系には二種類有る。

ジワジワ登る物と、いきなり最高速度を出すもの。

どうやら今回は後者だったそうだ。

私の顔面は、同じく掴まれたミスティアの顔に思いつきりぶつけられた。

激突する鼻先。

それはそれは顔全体が混ざりそうなくらい激しい接吻だったとき。

妖怪失格

この頃の朝、誰かに起こされるといふ事が本当に多かった。

それは毎度毎度心臓に悪い起こし方をしてくる幽香だったり、来るたびに説教と面倒事を提げてくる慧音だったりだ。

私はほとほと嫌気がさしているのだが、その日も例に漏れず私は叩き起こされた。

ただその日の朝は、何かが違うと目覚めた時に直感した。

人里が、何やらただならぬ雰囲気であったのだ。

立て付けの悪い玄関を壊れそうなくらい強くドンドンと叩く音がする。

戸を開けるとそこに居たのは慧音と妹紅であった。

「事情は後だ……とにかくついて来てくれ！」

ただならぬ剣幕で急ぎ立てるのは慧音。

妹紅もその隣で同じように眉間を狭めていた。

温厚な慧音がそんな険しい表情をするのは珍しい事であり、私の鈍い頭も流石に何か大変な事が起こっていると理解した。

急な申し出に混乱しつつも取り急ぎで寝巻きを脱ぎ、朝飯も食べずに家を飛び出た。

家の戸を閉めるなり慧音と妹紅が何処かへ走り出したので遅れぬようそれに追従した。

数分走った先についたのは寺子屋であった。

「これは……」

教室に飛び入るとそこには夢のような景色が広がっていた。

それも、とんでもない悪夢が。

普段子供達は私にしろ慧音にしろ、誰かが来たら元気な声で挨拶をしてくれるのだ。

慧音に言われたわけで無く、自然とその習慣がついていた。

だのに今日は誰一人としておはようの一言すら返ってこない。

「何があった……！」

私は酷く狼狽する。

教室はまるで地獄だった。

至る所から隙間風のような乾いた咳が聞こえてくる。

何人もの生徒が床に横たわり、デコに濡れ布を乗っけていた。

その顔は頬を除いて血色の悪い青色で、苦しそうに呻き声をあげる者もいる。

まるで死体安置所のような静かさだった。

「流行病だ」

寺子屋につくなり生徒の介護へと回った慧音に代わり、妹紅が質問に答えた。

妹紅もまた床に寝ている生徒の一人へ近寄って、水桶に浸した手拭いを絞っている。

とりあえず私もそれに倣い生徒が頭に乗せている布を交換してやる事にした。

改めて良く見ると伏せている者の殆どが見覚えのある顔だった。

「ここ最近欠席が多くてさ、今年は夏風邪が多いなって思ってたんだ……」

生徒の額にそつと濡れ布を置いてやりながら妹紅は言った。

声色は暗澹あんたんとしている。

「疫病だ。罹かつたら高熱と咳が止まらなくなる」

妹紅はたった一言そう言ったつきり黙っていた。

それ以上喋る余裕も必要も無かっただろう。

生徒達はゲホツゲホツと喉にイガでも入れられたような乾いた咳ばかりしている。

中には、喀血する者もいた。

急転する状況に、私はただ焦る事しか出来ない情けない女であった。

「貴子先生……っげほー」

緩くなってきた桶の水を換えるために、井戸のある外へ出ようとした。

すると不意に下から一人の女子生徒が、細い蠟燭のような声で呼びかけてくる。

その生徒は、私の事を先生付けで呼ぶ数少ない一人であった。

私はしゃがんで耳を近づけ、その消え入るような声を絶対に聞き漏らすまいとした。

隙間風のような声がする。

「くるしい……しんどいよお……」

青い唇と焦点の合わぬ瞳。

白い顔に涙を溜めながら弱々しく肩を震わしてその生徒は呻いた。

私は、何と言えはこの子を楽にしてやれるだろうかと考え、ついに何も言ってやる事ができなかった。

「先生……私、死にたくないよお……」

「つ馬鹿言うな！こんな風邪っぽっちで死ぬもんか！」

とうとう声を荒げて、その子の手に私の手を強く重ねた。

何でもいいから言ってやらないと、本当に馬鹿な事が起こりかねない。

息が荒れているのがわかる。

重ねた手がじんわりと汗で滲んでくる。

これは拙いと思った。

本当に高熱であった。

掌越しにでも火照りが伝わってきた。

「気張れよ！大丈夫だからな！」

私はそう励まし、一層その手を強く握ってやった。

そうする事しか出来なかった。

胸が締め付けられるような気持ちになる。

つくづくどうしようも無い奴だ。

しかし、少しは安心してくれたのか汗をかきながらその子は微笑んだ。

目まぐるしく看病に追われていると、不意に頭へ何かをぶつけられた。

それほど強くは無いが後頭部からヒリヒリとした痛みがする。見ると、床に一つ小石が転がっていた。

背中側には壁しか無かった筈だがと不審に思う。すると窓の外に気配を感じた。

この期に及んでまだそんな事をする野郎がいるってのか。とことん腹の立つ馬鹿だ。

忙しくなかつたら今すぐにぶちのめしてやってる。

……しかしそんな馬鹿の相手をしてる暇など無かった。

どう考えても目の前に横たわる病人が先決だ。

構ってる暇など無い。

——そう思い無視しようとした。

するとまた石ころを投げられる。

しかも今度はかなりの威力。

ゴツンという鈍い音が脳幹に響いた。

よく仏の顔は三度までというが、私は一度見逃してやったのをいい事に二度目をやらかす馬鹿に見せる顔を持ち合わせていない。

私の顔は一度つきりだこの野郎。

「おいコラ出てこいー！」

走って寺子屋の外に出る。

誰もいなかったので怒鳴ってやった。

隠れても無駄だ。

残念なことに私には気を扱う術の心得がある。

人間の子が放つ微小な気を探るのは難しい。

しかし、怒鳴り声のような大きな音でびっくりすると気は乱れるのだ。

そしてそれを悟るのはいとも容易い……のだが、どうやらその必要は無かつたらしい。

「お前……」

物陰から一人の生徒が出てきた。

皆が安価で手頃な服を着てる中、これ見よがしに上等な召し物を着ていた奴。

その鼻につく反抗的な態度と眼差し。
そして極め付けは、自己紹介の時のあの質問。

『なんで余所者がここにいる』

コイツは、私が初対面でデコピンをかました例のクソガキであった。

慧音の前でクソガキ呼びするともれなく額を割られるため絶対に禁句であるが、ここに慧音はいないため遠慮なく言わせてもらう。

「おいクソガキ、何しにきた」

私が優しく質問をしてやると、ソイツは例の反抗的な目線で睨み返してくる。

あろうことかメンチの切り合いを仕掛けてきた。

目を合わせて優しく睨み返してやる。

相変わらず鼻持ちならない奴だと思った。

しかし、その瞳にはいつものような不快感が無かった。

ごく一般的な生意気の範疇に収まる物だ。

それでも石ころをぶつけられた事は看過出来ないが。

世の中物事には適切な時分がある。

そしてそれは間違いなく今じゃ無い。

「人に小石を投げるってのは何のつもりだ？」

「……なのかよ」

「え？」

「アイツは無事なのかって聞いてんだよ！」

からかってやろうと思ったたら急に詰問口調で問い詰められた。

しかも先に怒鳴られてしまった。

これでは立場が逆だが、ソイツはやたらと真剣な顔をしていて私はふぎける気が失せた。

どうやら見舞いに来たらしい。

「アイツって誰だ」

「……アイツだよ」

ソイツが窓越しに指を差したのは、先程の私を先生付けで呼ぶ少女であった。

布を交換したのと、太い血管がある首や脇の下を冷やした事で今は楽そうな顔をして寝ていた。

「アイツは無事なのか？」

「仮に無事じゃなかったらどうなるんだ。教室で見てた感じはお前ら別に仲良さそうでもなかったが」

「……同じ学舎で学んだ奴を心配して悪いかよ」

「なら他の奴も心配してやれ」

「話を逸らすな！アイツは大丈夫なのかって聞いてんだよ」

「無事だ、大無事。心配しなくていい」

私がそういうと、石ころ坊主はホツとしたように肩を撫で下ろす。

その事を聞きにわざわざここまで来て人に石を投げたってのか。

「さてはお前、あの子の事が……」

「っ違う！馬鹿じゃねーのか!?!」

「まだ何も言っていないだろ」

「なっ、お前っ……!」

顔をトマトみたいに赤くする少年。

予想大的中。

つくづく分かりやすい野郎だ。

「お前の言う同じ学舎で学ぶ仲間ってのが高熱出して苦しんでるのに、自分は一人気楽に色気草か。呑気なものだな」

「うるせえ!」

「質問には答えた。これで満足か？」

こっちは手当に追われて一時も気が休まらないくらい緊迫してるってのに、子供は色恋の事で石ころをぶつけてきた。

なんだか腑に落ちない。

慧音みたく頭突きでもかましてやろうか。

「アイツがもし……もしも死んじまうような事があったら、その時はお前を殺すからな!」

「……おい。今自分が何言ったか分かってるか？ たった今その命を救おうとしてる奴の前で」

私かにじりよって凄むと、一歩引いてたじろぐ。

多分殺気を感じたのだろう。
無論わざと出している。

「っなんだよ」

「ざっさど帰れ。家で大人しく宿題してな」
相手にするだけ時間の無駄だと思ったので私は教室に戻ろうとした。

冷たい対応かもしれないが、石ころをぶつけた事を咎めなかっただけ有難いと思つて欲しい。

なのに、また引き止められた。

「待てよー」

腕を掴まれて足止めされる。

その手を振り払うのは簡単だが、少年の視線がそれを阻止した。

待てと言われて待つのも癪だがまた石をぶつけられたら今度こそキレそうだ。

そろそろ戻らないと色々説明が面倒だ。

聞くから早くして欲しい。

「何だよ」

「アイツは……生まれつき体が弱い。しかも喘息持ちで、咳をするだけでも危ねえ。絶対に目を離さないでやってくれ！」

そこで、私は驚く事になる。

元来頭を下げる事の多い人生であったが、人から——まして子供から頭を下げられるなんて、後にも先にもこれっきりだろう。

「頼むっー」

「……お前の家は裕福なのか？」

「え？」

予想外の問いかけに、顔を上げて困惑の表情を浮かべている。

私は少し、聞きたいことがあった。

「今、看病の人手が足りて無い。いくらあの子を診てようだったって、あの人数じゃ限界があるんだ」

「何だよ……金か」

「……は？」

今度は私が絶句する。

何をどう連想すればその返答になるのか少しも理解できなかった。「いくら払えば満足なんだよ。確かに家は金持ちだ。そう言うことだろう?」

私は頭を掻いた。

思わぬ溜息も出てしまった。

つくづく寺子屋は道徳と一般常識の授業を取り入れる必要がある。偉そうにも子生意気な事を言うので、温情のデコピンをしてやった。

「っ痛え!」

「金をやるから一人を鼻肩しろだ?嫌なこった。金持ちなら寺子屋に人を雇えってんだよ。この里が連呼してる助け合いの精神は何処にいった」

「それは……」

「出来ないんなら、お前が診てれば良いだろ」

「は?」

「だから、お前がアイツを診といてやればいいじゃないか」

少年は暗い顔をして俯いた。

「ころころ表情の変わる奴だ。」

「……できねえよ。アイツに合わせる顔なんて無い」

「そこにあるクソ生意気フェイスはお面か?」

「触んな!」

合わせる顔が無いとはどう言うことか。

その意味を問うた。

すると居心地悪そうにその子は言った。

「アイツの父さんはウチの奉公人だった。でも訳あって、妖怪に喰われたんだ」

「……訳ってのは何だ」

「妖怪が子供を喰らうことが増えたって慧音先生が言ってたろ」
「ああ」

その子は俯き、子供に似つかわしく無いような遠い目をした。

遺書を読む時、人はああ言う顔をする。

私は凶らずも心して聞く事となった。

「何年前、ちよつとした悪戯で里の外へ出たんだ……里の近くなら妖怪は出ないと思つてたんだよ」

「……そうか」

「案の定、妖怪に襲われて殺されそうになった」

「そうだろうな」

「その時、見張りを頼まれてたアイツの父さんが突然やってきて……妖怪に喰われちまつたんだ」

三泊置いて、少年は苦しむように吐き捨てた。

この後の台詞は、言わなくてもわかる。

「アイツの父さんはウチが殺したようなもんなんだ……」

親に泣くなと躰けられたのか、涙を漏らさぬよう必死に堪えながら言った。

震えながら、しかし何一つの嘘をつかずに少年は話きつた。

それがクソガキなりの誠意つて奴だろう。

「……慧音が妖怪の事を教えろつてしつこかつた理由が分かつたよ」

「アイツの親を殺しておいて、合わせる顔なんて何処にも無いんだよ……」

「そうか……」

「貴子……先生。頼む、アイツを——」

またも頭を下げようとする。

声は掠れて今にも泣き声に変わりそうだった。

頼まれるのは藪坂じゃないし、私の事を先生付けで呼ぶのも結構だ。

しかし私にはその態度が、そのあり方が少しだけ気にかかった。

平たく言えば、腹が立った。

「お前は申し訳ないと思つてるのか？」

「えっ？」

「過ちを犯したと、思つてるんだな？」

念押しするように強く問いかける。

戸惑いながらも少年は答えた。

「あの日の事を忘れた事なんてねえよ」

「なら、尚更顔を見せて謝ってこい。お前が本当に後悔しているのならな」

「……今更何を」

「そもそも、お前の言う合わせる顔ってのは何だ？」

冷静に話をしようと思ったのだが、結局頭に血が昇る。

こうなったら止められない。

私は思った事を、それが自分の正義に則っていればいるほど心の内に留めて置けない性格らしい。

「そうやって自分から距離を作っておいて一方的に申し訳ないだの目を離すなだのって、卑怯だろ」

「つ何で、お前にそんな事を！」

「落とし前もつけられない癖に生意気言ってるじゃねえよ！」

私の声は遠くこだました。

結局声を荒げてしまった。

別に、心の底から怒ってはいない。

小石をぶつけた事は許して無いが、別にコイツが憎くて責め立てた訳じゃ無いのだ。

多分これが、人を叱るって事なんだろう。

先生ヅラして小さい子供相手にムキになった私の方が、よっぽど卑怯だ。

……慧音の説教癖が感染ったのかもしれない。

「つちー！」

地面を蹴って舌打ちを返してくる。

所詮は良いところ育ちの坊っちゃんか、ちよつと怒られたらこれだ。言い返しもせずただ私の事を睨み、不機嫌そうに帰っていった。

石ころをぶつけたと思えば、金を払ってでも良いからアイツを診ていて欲しい……か。

過去を悔いて罪悪だと思えるのなら、尚更本人に会ってやらないとダメだろう。

何もすぐに謝る必要はない。

ただ、ソイツが困った時に肩を貸してやるのが償いって奴だと思
う。

それを金つぴらで解決しようとしてるのなら、それこそ本当の馬鹿
野郎だ。

……思ったより時間を食ってしまった。
早く戻ろう。

少し経って、ここは人里を出て東へ少しの所。

少年は、ある場所へ向かっていた。

その現在地は奇しくも数年前妖怪に襲われた所と同じであり、そし
て何の巡り合わせか、

「人間みつけ！」

妖怪が居た。

「ひいつー！」

少年は腰を抜かして尻餅をつき、妖怪は嬉しそうに歩み寄って
くる。

「ねえ何で一人なの？……まあ何人居ても変わらないけどね！」

「く、来るな！」

少年は震えながら懐から何かの紙切れを出した。

ミミズのような文字が書かれている、それはお札であった。

その紙を見た妖怪の動きが止まる。

「……くくくつ何それ!？」

「博麗のお札だ！近寄るな！こ、殺すぞっ！」

「……おい人間。あんまり私を舐めんなよ」

「っ!？」

雰囲気が一変し、妖怪は先程までとは全く違う声を出す。

そのドス黒い殺気に少年は心の底から恐怖した。

「そんな紙切れでビビるとでも思ったの？ガキって馬鹿だからホント
助かるわー。あつもしかして脳みそ空っぽ？あそこ好きだからもし
そうだったら嫌だなあ」

そう言つて、妖怪は不意に姿を消した。

「ま、何でも良いや」

そして後ろから少年の首を掴む。

指先は肉皮を裂き、気道が塞がれ呼吸が止まる。

「つや……めろ……慧音……せんせい……」

「いただきまーす」

妖怪の口が大きく裂け、頭を丸呑みしようとする。

唾液が、少年の顔にポタポタとこぼれた。

遠のく意識。

もはや激痛も何も感じられなかった。

「ああ……」

その瞬間、拳が顔面にめり込む。

鳴り響く鈍い音。

妖怪が顔から吹っ飛んだ。

「……だ、れ？」

少年はぼやける視界の中で一人の人間を捉えた。

そこで意識は途絶える。

遠くに吹っ飛ばされた妖怪がよろよろと立ち上がった。

顔面には深い拳の跡。

その顔はひしゃげて歪である。

「なんだお前え？」

煙草を啜えて、拳の犯人は煙と共に言った。

「妖怪退治屋だ」

「あ？」

「ウチの生徒に……手を出すんじゃない！」

「——おい、起きろ」

「……」

「起きろって、おい」

少年は、頬をペチペチと叩かれる痛みで目を覚ました。

意識が戻り、澄んでいく視界に写ったのは血みどろの女であった。

「つぎやああ!!」

恐怖で飛び退く。

少年目線では直近まで命の危機だったのだから仕方がない。

「つて、お前は……」

「何で里の外に出た」

「……悪いかよ」

「ああ悪い……ちよつとその紙切れ見せてみる」

「っそうだ、それ！」

少年の出したのは先程のお札。

強く握りしめていたせいでクシヤクシヤに折れている。

それは、少年が父の部屋から盗んできたモノであった。

「これ、父さんが博麗のお札だって、妖怪をやっつけてくれるって言うてたのにつ……」

少年からお札を奪い取るようにして受け取り、吸い終わったタバコを足で踏み消す貴子。

すると突然そのお札をビリビリと破り捨ててしまった。

「コイツは偽物だ」

「な、偽物？」

「まあ、本物でも効果なんて無かっただろうけどな」

「は、博麗のお札は、妖怪を退けるって……」

「授業で言っただろ。使う奴の力によるって」

「……そんなの」

「つたく。こんなモノを持って何するつもりだったんだ。事と次第じゃぶん殴る」

少年は言い淀む。

やがてとうとう覚悟したのか苦々しく口を開いた。

「あそこの木……」

「ん？」

「あれ、桃の木なんだよ……アイツは桃が好きなんだ」

「それを採りにきたのか」

少年はコクリと小さく頷いた。

そして一層声を震えさせ、こう言った。

「あの時、アイツは風邪を引いて……それで桃を持って行こうと思っ
て……」

あの時というのは、数年前に少女の父親が襲われてしまった時のこ
とだ。

桃は、里の中でもとびきり高価であった。

それを食えるとなれば、さぞ喜んだ事であろう。

しばしの間黙って、それから貴子はおもむろに立ち上がった。

「帰るぞ」

「っあれを採らないと!」

「あ、おい無理に動くな!」

「すぐ近くに……っ!」

少年は立ち上がるうとして、それができない。

膝下から激痛が走る。

思わず体制を崩し地面に倒れた。

「膝を挫いてるんだ。ほれ、おんぶしてやるから」

「嫌だ、汚ねえ!血塗れじゃねえか!」

「誰のせいだ」

貴子は嫌がる少年を無理やり背負って、里に向かい歩きだす。

少年は背負われながらなお暴れた。

「帰るぞ」

「待て!桃を持って帰るんだ!おい、降ろせ!」

「静かにしろ。今妖怪に襲われたら今度こそ死ぬぞ」

「……そうだ、あの妖怪は!」

「アレだ」

貴子が指さした先には、大量の血溜まりがあった。

その何処にも妖怪の姿は無かった。

妖怪は、死ぬと消滅するのだ。

そして貴子に纏わりつくのは、その返り血であった。

「金持ちなら、桃くらい大枚叩いて自分で買うんだな」

「お前、この野郎!」

「次騒いだら、今度は右足を折るぞ」

「……お前がやったのか!？」

「嘘に決まってるだろ」

そうして貴子に（無理やり）背負われる形で、二人は里へ帰っていった。

最後まで少年は桃を採ると言って暴れ続けついには貴子の髪を引っ張ったのだが、やがて疲れたのか静かになった。

里に着き少年の家まで送ってやると、それはそれは大変な騒ぎが起きた。

少年は里の長者が愛してやまない一人息子だ。

それが血塗れの女に背負われ、しかも怪我をしていたとなれば当然騒ぎは大きい。

そのせいで疫病により静閑としていた里が一気に騒がしくなった。

奇異の視線に晒されつつも子供を家の者に引き渡し、貴子は面倒事になる前に逃亡した。

逃げて顔が知られてるのだから全く無意味であるが、それでも逃げた。

「どうだ？楽になったか？」

「貴子先生……ゲホッ」

貴子は側に座り、少女の枕元に何かを置いた。

「先生……これは？」

「桃だ」

貴子がそういうと少女は、黙然として肩を震わした。

逃げ出したのは、いち早く寺子屋に戻る為であった。

新鮮な桃は水々しい。

その子はそれを手に取りしばしの間撫で付けて、しばらく経って口を開いた。

「先生……お返しは、瑠璃唐草をあげるね」

「……そうか。それは楽しみだ」

それつきり、少女は窓の外を向いて喋らなかつた。

体が弱いのに、無理して喋っていたのだろう。息が上がっている。

「……良かったな」

貴子は立ち上がり誰に言うでもなく呟いた。

少女が言った言葉。

お返しは瑠璃唐草。

その花言葉は……

「貴方を許します、か」

少女が笑ったような気がした。

結局その日はその後一日中看病に就いた。

生徒達は一向に良くならない。

人里の外へ妖怪をぶん殴りに行ったりと例外はあったものの、おおよそ寺子屋で過ごす事となった。

途中に何度か飯を挟みつつ、殆どつきつきりで生徒達を診たが症状はどんどん悪くなる。

治療が遅れているのには幾つか理由があった。

生徒達を回復させるにはとにかく栄養のある物を食べさせ休ませるしかないという事だ。

妹紅曰く里にある薬屋では、対症療法薬すら満足に調合できてないらしい。

解熱剤の材料となる薬草もまた、飢饉の時みたく二度起きた異変によつてろくすっぽ採れていないらしかった。

また薬草となると、前回のよう紅魔館で種を手に入れる事も難しいだろう。

あの館には病気にかかる者など居らず、不必要な薬草など一つも育てていないのだ。

ではパチュリーや美鈴を呼ぶのはどうだろうか。

以前咲夜が体を壊した時、美鈴は何やら気功術で咲夜の体調を整えていたし、パチュリーなら病気の治癒くらい楽勝だろう。

そう考えたが、これも駄目だ。

美鈴に習った気功術なら私も一通り試したし、その結果は芳しく無かった。

またパチュリーは魔法使いであって僧侶ではない。

外傷の治療なら多少の心得あれど、病気の治癒となるといくぶん不得手なのだ。

もしパチュリーに病を治す術があるなら、咲夜の事もすぐに治しただろう。

二人を頼るといふ線は薄い。

それよりも今人里を開ける事の方が不安だ。

慧音や妹紅は手際良く処置をしているが、それでも患者の数が多すぎる。

ぜんぜん人手が足りてない。

里には沢山の人がいるのだからそれを頼れば良いと思ったのだが、そうもいかないらしい。

どうやら大人達は別のところに有る診療所で他の者の看病をしているようだ。

そちらの方で手一杯らしい。

よって子供の手当ては寺子屋に一任されていた。

押し付けられた、と言った方が適切かもしれない。

その配分は失敗に近かった。

妹紅や私、他にも何人かの者が慧音を手伝っているが全く追いついていないのだ。

とりあえず夜は他の者と交代する事となったが、あの様子を見ると心配に思う。

妹紅はこう言った。

寺子屋に来る奴らは貧しい者も多い。

ここにいる奴らは金が無く、満身に治療を受けられていない者達なのだ、と。

夕暮れの帰り道、私の胸中がやるせない思いで満たされていく。

普段ならこの時間はまだ街に賑わいがあるはずだ。

しかし今聞こえてくるのは苦しむような呻き声ばかり。かえって不安は増してくる。

そこでようやく疫病が襲ってきた事を痛烈に実感した。

「幽香……」

「何？」

家に着き、服も着替えぬまま私は幽香に詰め寄った。

怒っていたのではない。

いつそ怒っていた方が楽であったかもしれないが。

「薬草が欲しい。出来るだけ沢山」

「貴方はいつ私に物を言える立場になったのかしら」

「頼む！お前しか頼れないんだ……お願いだ」

「私には何の義理も道理もないの。諦めなさい」

幽香の吐き捨てた言葉を聞いて、やっぱりダメかと諦めそうになった。

その時、私の頭にか細く囁いてくるあの生徒達の顔が浮かんだ。

まだ十にも満たないような小さい子供が、未知の病に犯されどれほど心細い思いをしている事か。

病気の恐ろしさはこれでも痛いほど知ってる。

あの子達は急に妖怪を連れて里に入って来たような輩を、先生と呼んだ。

頼りにした。

死にたくないと言った。

それに応えてやれなくて……何が大人だろうか。

「幽香あー！」

気がつけば私は幽香に向けて拳を振おうとしていた。

どうしようも無い気持ちだった。

そこには幽香への怒りや無念もあった。

何もできない自分にも腹が立った。

何よりもここで幽香を殴ってやらねばいけない様な気がしたのだ。

しかしその拳は幽香の頬を僅かに掠め、ブンと音を立てて空を舞うだけであった。

まともな頭ならそこで自分のした行いを後悔して立ちすくむだろう。

だが私はどうしても幽香を一発ぶん殴ってやらないと気が済まなかった。

後ろに避けた幽香を追ってもう一撃放つ。

これは失策であった。

幽香にちよいと足をかけられ、無様に床へ突っ伏してしまったからだ。

「つがあー！」

上から幽香が見下してくる。

「死にたいのならそう言えばいいのよ」

「くっ……」

床に突っ伏す私。

そんな無様な格好で、それでも蹴り上げようとする幽香の足を力一杯掴む。

一日動いてくれたびれたはずなのに不思議と力勇気が湧いた。

奥歯を食いしばると、どうしてか涙が溢れそうになった。

「いい加減に——」

「幽香……」

今度は私を殴ろうとした幽香の動きが止まった。

ああ、またこうやって後先考えずに行動してしまった。

つくづく私には何もできない奴だ。

そんな事はもうずっと思い知らされている。

異変も飢饉も私が起こしておいて、泥の一つも拭えない馬鹿だ。

意味のない暴力すら満足に振るえないような、本当どうしようもない人間だ。

ただ、そんな私でも命一つは持っている。

「私一人の命で、手を打ってくれないか……薬が、どうしても必要なんだ」

幽香はフンと鼻を鳴らし足を振り払う。

「思い上がるのも大概にすることね。貴方一人の命なんて何の価値も

無い。そもそも貴方の命は既に私の物よ」

「そうか……」

そこまで言つて、一日の疲労が祟つたのか私の意識はプツリと切れた。

ブレーカーが落ちるみたいになんの前触れもなく、世界が急速に微睡んでいった。

翌朝は誰にも起こされる事なく目が覚めた。

日が、昇ろうかサボろうか迷つてでもいるように半分だけ顔を出している時間。

生来目覚めは悪いのだが、一刻も早く寺子屋に行かなくてはと気が早つて仕方がない。

出来るだけ急いで布団を脱出する。

そして朝飯に茶漬けをかきこみすぐさま家を出ようとした。

戸を開けようとして、そこでパタリと勇足が止められる。

店を出る前、ある物が目に映つたからだ。

そこに異変が起きていた。

よく見ると、並べてある花の内容がガラツと変わっていたのだ。

昨日までは向日葵や菊など夏の花ばかりであったはず。

なのにそれが全て取っ払われていた。

盗まれたのでは無い。

代わりに、大量の緑草が置かれていたのだ。

カラフルな花たちにとって代わり、ユキノシタやクチナシなどが所狭しと並んでいる。

それらは全て、解熱作用の有る薬草であった。

「……幽香」

何故か分からないが、その名前が口から溢れた。

しかしずっと止まっている訳にもいかず、私はその草束を全て抱えて寺子屋へと走った。

なんだかやたら胸が痛かった。

寺子屋に着き、夜の間生徒達を見てくれた者と交代する。

この者は教師では無く里で働いているただの一般人だが、緊急事態と聞きつけて慧音への助太刀にやってきたのだ。

慧音は飢饉を救った里の英雄であり、そこに恩義を感じる者は少ない。

有難いことにそのような者は他にも何人かいる。

そうして朝晩の二人組体制でいつ何が起きても良いように備えているのだ。

昼は私、夜はこの人である。

妹紅や慧音も同様だ。

そこで事態は起きた。

人里からはすべからく鼻つまみ者の私が、誰かから話しかけられるのは大変珍しい事である。

しかし村八分など気にかけていられない事態があったのだろう。

夜番をしていた者が交代際に話しかけて来たのだ。

「あの……貴子さんでしたっけ」

その声からは恐る恐ると言った感じがヒシヒシと伝わって来て、そんなに怖がらなくても良いじゃないかと少し悲しい気持ちになる。

しかしそんな事は全くもってどうでも良かった。

異常事態だからだ。

私は絶対に怖がらせないよう最大限の優しい顔と声を意識し、その者から話を聞く事とした。

目を合わせると少し慄いたものの、その人はゆっくりと口を開いた。

「昨日から慧音先生……寝てないの」

「……え？」

私はすぐさま寺子屋に飛び入り、慧音の肩を引つ搦んだ。

「慧音っ！」

その場で責め立てようかと思ったが、足元で苦しそうな顔をしている生徒達を見て頭に上った血がスツと降りていった。

ひとまず寺子屋の外に出て慧音と話をつける。

忙しいのは承知で、渋る所を無理やり連れ出した。

「慧音は眉を釣り上げている。」

おそらく私も同じような表情をしていた事だろう。

「寝てないのか？」

「……ああ」

「つ馬鹿野郎！」

急に怒鳴られ目を丸い皿にしている慧音。

よく見ると、目の下には大きめのクマが出来ていた。

顔と声にもハリがない。

元気を大事にする慧音とは思えなかった。

私は止まらず、喉を枯らすほどの勢いで声を荒げた。

「お前まで病気になったらどうする！」

「……私は病気にはならないから心配は不要だ」

慧音はそう弁解する。

その言い分はとても慧音から放たれたとは思えない物だ。

いつも慧音は理路整然と話す。

だが、今の言い分は私からすればもはやスジも理屈も無い駄々っ子の言い訳と変わらなかった。

「なぜ言い切れる」

「アレは人間にしか発症しないからだ」

「だから、感染うつしたらどうするって……」

「まだ分からないか？」

急に、慧音が話を遮った。

風がざわざわと野草を揺らす。

太陽がとうとう観念して私たちを照らした。

「私は人間じゃない」

慧音はそう言った。

溜息を吐くように。

私は何も返せず、ただ硬い唾を飲みおろすだけであつた。
本当はどういう意味だと問い質したかつた。

胸ぐらを掴み上げて怒鳴りたかった。

しかし、慧音の真つ直ぐな眼差しが私の中にあつた怒りや疑念など全て吹っ飛ばしてしまつたのだ。

そして後に残つたのは僅かな諦めと胸いっぱい悲しさであつた。「いつか話そうと思つていたんだがな……私は人間とは呼べない存在なんだ」

慧音は辛そうに話した。

明かしたくない秘密であつたのだろう。

それを無理に今暴露する必要は無い。

「その話は今はいい。流行病が落ち着いたらそのうち聞かせてくれ」「しかし……」

「私はそう言う話をしてるんじゃない。暗い顔してたら生徒たちだつて治る物も治らないぞつて事だ」

それが私に言える精一杯であり、胸にあつた怒りの正体であつた。

口に出して仕舞えば単純な、呆気ない答えである。

無理をしたい気持ちはよく分かるが、それでも無理をしてはいけないのだと私は思う。

「……すまない」

「謝らなくていい。今すぐ家に帰れ。それで美味しい飯を腹一杯食べてぐっすり寝てこい」

「……できん。たとえ一秒でもここを離れる事は」

「私も妹紅もいる。家から熱冷ましの薬草も持つて来た。だから心配しなくても大丈夫だ。決して誰も死なせやしないさ」

「薬草があつたのか？」

「どう言う訳かな」

「そうか……」

私がそう言うのと、慧音は何も言わず下唇を噛んで俯いた。

瞼を閉じ、険しい顔をしている。

強張っていた肩は力を失い、言葉ともならない声ばかりが漏れ出していた。

「……紅霧が舞い、春が失われた。やっと落ち着いたと思つたら今度

は飢饉が襲ってきた」

地面に崩れ落ちながら慧音は言った。

今度は私が何も言えなかった。

語気はどんどん強くなっていき、そして声はどんどん震えていった。

「生徒達は皆一生懸命に生きている。なのに何故だ……何故こんな事ばかりが起きるんだ！」

「慧音……」

「あの子達は辛い思いばかりして……飢えで死にかけてた者もいるんだぞ?! 何故ほんの少しも平穩が訪れない! これは祟りか? 呪いか!？」

「落ち着け!」

「どうして今なんだ! やつと里に活気が戻ってきた! ようやく寺子屋を再開する事ができた! なのに……ここに住む罪なき人の笑顔をどこまで奪えば気がすむんだ!」

言い切つて、顔を手で覆いボロボロと慧音は泣き出した。

辛い叫びであった。

きつと堪えてきた物が我慢ならず溢れ出たのだろう。

大声を上げて心の底から泣いていた。

「……慧音」

私は地面に崩れる慧音の肩に手を添えて座った。

涙が込み上げてきたのは慧音だけではない。

本当は、私だって泣きたかった。

「辛いのは……私も一緒だ」

「どうして、どうしてなんだっ……」

肩を震わせ嗚咽する慧音。

地面にポタポタと涙が落ち、まだらな模様を作る。

……私は一体何を言う必要があるだろうか。

ずるい答えだが、多分何も言う必要はないのだ。

悲しい時に必要なのは百の言葉や千の慰めじゃない。

ただ黙って、同じように泣いてあげようとする気持ちが必要なのだと思う。

私はここに来て日が浅く、飢饉もただ辛いと思うばかりで周りの人間を励ましたりなどしなかった。

しかし慧音が流した涙の意味は、心が締め付けられるほどよく分かる。

無理に元氣付けようとは思わない。

悲しい物はどう振り切ったって悲しいし、それは頭で考えたって如何ともしがたいのだ。

何故なら、私や慧音が――

「人間だからだ」

「……え？」

多分、そういう事だろう。

子供達が泣いている。

それがどうしようもなく悲しい……と慧音は言った。

「他人の不幸を悲しめる奴が、人間でなくて何だ」

それが安い慰めなんてのは分かっている。

でも言わずにはいられなかった。

慧音はまた黙り込んでしまった。

「ともかく寝ろ。後は任せとけて」

「……だから、それは」

そうして私と慧音がまた問答を続けようかとした時、突然第三者の声が響いた。

「先生！」

振り返るとそこに、若い少年少女達がいた。

私もだが、誰よりも驚いていたのは慧音だろう。

「お前達！」

「先生、私達も手伝います……だから、無理をしないでください」

先頭に立つ少女は高く芯のある声で言った。

やって来たのは病を患っていない生徒達であった。

慧音を手伝うために何処からか駆けつけてきたのだ。

人手が足りず満足な処置も施せていない現状を知ってか知らずかは分からないが、ともかくやってきた。

「何故ここに来た!」

慧音は鼻声で怒鳴った。

私も慧音に同感だ。

困った仲間を救う。

それは満点をあげたい行動だが、残念なことに生徒達を教室に入れる事は出来ない。

患者を増やすリスクが大きくなるからだ。

今患者を増やすなど最も避けなくてはいけない。

ここに来てはいけなないと、おそらく慧音に言われていただろう。

なんなら菌が跋扈している外を出歩く事もご法度の中、家を飛び出てきた生徒達。

本来なら叱らないと駄目な場面だ。

事実怒鳴ったし、それは教師として間違いではないと思う。

しかし慧音の涙は、より一層多くなった。

「……私は、自分が情けない」

「何がだよ」

私はできるだけ優しく慧音に問いかけた。

すると慧音はしゃくり上げながら拙い声でこう言った。

「教え子に世話をかけてしまった……教師を名乗る資格なんて、私にはないっ!」

「だから何でだよって。むしろ誇って良い事じゃないか」

「それこそ分からないっ……どう見たって情けない恥晒しじゃないか!」

「何を言ってるんだ」

人の不幸を悲しむ事ができる奴を、立派な人間と言うのだ。

慧音は立派な人間だ。

そして……

「慧音の教え子達はこんな立派に育ってるんだぞ?なのに教師が生徒の成長を誇らないでどうする」

「……っ!」

生徒達もまた、立派な人間に育っていた。

顔を上げ、真っ赤に泣き腫らした目で私と生徒達を見る慧音。生徒たちは心配そうに慧音の顔を見ている。

気丈で優しく、尊敬と憧れを抱かれる先生。

それが今思いを吐露し、涙を流しているのだ。

心配そうな顔にもなる。

慧音はその一人一人を見つめ、その度に目を潤ませ鼻を吸った。

慧音の人生で今日ほど辛い日は無いだろう。

辛い事に散々遭って、一人でそれを抱え込もうとしたのだから。

そして……今日ほど教師として嬉しい日もない事だろう。

自分の教え子達が人の痛みを分かち合えるように育てていたのだから。

ようやく荒れた息が落ち着いて、慧音は口を開いた。

「貴子……私を殴ってくれ」

「え？」

「この私と言う大馬鹿者をどうか殴ってくれ……」

慧音は顔を差し出した。

とことん自分に厳しい奴だ。

「……それはまた今度にとつとくよ。ほらお前ら、行ってやんな」

太陽が顔を出し、辺りがフワつと明るくなった。

不安そうに立ち止まっていた生徒達を指で導く。

戸惑いもなくその子達は駆け出し、慧音の元に集まった。

地面に崩れている慧音の元に。

そして各々が声をかける。

「先生元気出して？貴子に虐められたの？」

「先生、泣かないで。はい、ハンカチ」

「先生」

「先生」

生徒達の声が重なる。

『慧音先生』

慧音はまた泣き出した。

今度ばかりは私も我慢できず、誰にも見られぬよう人のいない方を

向いた。

慧音はようやく納得いったようで、ひとまず家へと帰っていった。その見送りとして、生徒達も同行している。

集団下校のように生徒に囲まれ、生徒に導かれて歩いていく姿はなんとも言えなかった。

あの分だと泣き止むのはいつ頃かな。

慧音はいい生徒を持ったものだ。

先生に似て優しい心を持っている。

頑固な所まで似なければいいが

……と、いつまでも感傷に浸ってられない。

早く教室へ戻らないと。

「おい貴子」

「……妹紅？」

教室に入ろうとする手前で妹紅に止められた。

腕を組み柱にもたれかかっている。

もしかすると慧音とのやり取りを聞かれたのだろうか。

声は聞こえなくても、その場面を見られると大変だ。

泣いている慧音と怒ってる私の組み合わせは拙い。

「慧音に何を言った」

妹紅は目を狭めている。

口は逆三角形で、声は険しい。

やはり見られていたのか。

しかも慧音は帰ってしまった。

勘繰るのも仕方がない事だろう。

私は何と言おうか迷ったが、慧音への顔立てとして嘘は吐かない事にした。

「今度ぶん殴らせろって言ったんだよ」

「……そうか」

嘘はついていない。

その返答で何をどう満足したのか知らないが、妹紅は教室へ戻って

いった。

私も黙ってその後が続く。

「熱も落ち着いて来た」

「そうか」

妹紅が説明する。

相変わらず生徒達は苦しそうな表情だったが、朝持ってきた薬草を煎じて飲ましたので時期に回復するはずだ。

止まなかった咳もだいぶん落ち着いてきている。

ようやく光明が見えて来たような気がする。

本当、良かった。

妹紅は教室に入るなり足を止め、小さく言った。

「貴子」

「ん？」

「慧音、ありがとう」

……聞いてたのかよ。

正体不明のパンデミックが里を襲って二週間ほど。

正体不明の菌は健康な体を蹂躪し、咳と高熱でジワジワと嬲り人々を恐怖の底へ陥れた。

一時は病が病を呼ぶような状況で鼠算式に患者が増えていって、本当に恐ろしい物『だった』。

……過去形って事は、まあつまりそう言う事だ。

薬草っていうここぞのピンチヒッター処置と、慧音達による絶え間のない熱心な看病によって、人里は見事病魔を退けた。

誰一人として死ぬ事無く、だ。

幸せは絶頂、笑顔は絶えない。

私の事を先生で呼ぶ例の生徒も無事に治った。

例のクソガキが寺子屋の手伝いを申し出たのには驚いた。なにせ急にやってきて不器用に花を手向けたるのだから。

他にも手伝いを申し出る生徒は多く、人手不足という課題を乗り越え、私たちは打ち勝った。

こうして人里はまた一つの武勇伝を歴史に刻んだ。
その裏で、一つ事件が起こった。

幸せは不幸のお通し。

不意に、ミステイアの言葉がよぎる。

ああ、何で幸せのままに居られないのだろうか。

全員が喜びを分かち合い抱き合っていた時、

——慧音が倒れた。

リザレクション

妹紅は走る。

靴を履き外れて自分が裸足なのに気づいたが、それでも止まらな
い。

小石で足の裏を擦りむいてはその傷が塞がった。

背中には、苦しそうな息を洩らす慧音が抱えられていた。

妹紅は走る。

脚は加速していきあつという間に人里を飛び出た。

慧音は件の流行病には罹らない。

アレは人間にしか発症しないのだと、自嘲するように笑ったその顔
を妹紅は知っている。

それなのに、慧音は倒れた。

里の医者もアテにならない。

貴子が持つてきた薬草は、自分勝手な大人達が全て使い果たしてし
まった。

そして仮に薬草があつたとして、それが効くかどうかとも分からな
い。

慧音が何故倒れたのか、妹紅には皆目見当もつかなかった。

人里を飛び出て、野原を駆け抜ける。

華奢な慧音の体でも、抱えて走ると息が上がった。

こんな事なら煙草など吸わなければ良かったと、妹紅は心の底から
後悔した。

それでも立ち止まる事など出来なかった。

妹紅が目指す場所は一つである。

「妹紅！永遠亭ってのは何処だ！」

貴子が妹紅に並走しながら叫び聞いた。

慧音の護衛をする為について来たのだ。

着いてきたのには心配な気持ちもあった。

飛びかかってきた妖怪を右手で吹っ飛ばす。

妹紅は案外落ち着いた様子で、しかし声を上擦らせながら答えた。

「迷いの竹林に、八意永琳という奴が居る」

「誰だそいつは。医者か？」

「……輝夜の部下だ」

「輝夜!? 確かそいつはお前の……」

「永琳は腕のいい医者だ! たとえ輝夜の仲間でも、病人を見捨てたりはしない!」

妹紅は、半ばそうあつて欲しいと願うように叫んだ。

背中で慧音が息苦しそうに呻く。

いくばくもなく、迷いの竹林が見えて来た。

脚は更に回転を早め、竹を割るような勢いで二人は走る。

時刻は夕暮れ。

少しずつ沈んでいく太陽の、十倍も早く走った。

永遠亭は、迷いの竹林へ入ってしばらく走った所にあつた。

それを見た貴子はしばし絶句した。

見覚えのある建物であつたからだ。

だが慧音の嬌声で我を取り戻し、すぐさま門へと駆け付けた。

妹紅が壊れそうなくらいの力で必死に戸を叩く。

「永琳!」

慧音を胸に抱えながら、何度も何度も門を叩いた。

その度に、永琳と言う名を叫んだ。

だが、その屋敷は廃墟かのように静かであつた。

「おい永琳! 居るんだろっ! 慧音が!」

喉が枯れる。

門が軋む。

さりとて返事は無かつた。

「つく!」

妹紅は歯を食いしばり、より一層強い力で門を叩いた。

拳輪は内出血を起こし赤く腫れ、慧音の顔は一層青くなる。

「輝夜! お前の差金か! 慧音は部外者だろ!」

悲痛な叫び。

反響音が遠のいていく。

静かな世界。

力を失う妹紅。

「開けてくれよ……」

もう何度叩いたか分からない門に、もたれる様にして地面へ崩れ落ちた。

その様があまりにも痛々しく、貴子は下唇を強く噛み締めた。

「頼む、頼むよ……」

妹紅は項垂れながら、ポロポロと大粒の涙を溢した。

「慧音を……慧音を助けてくれ！」

掠れた声でそう叫ぶ。

しんとしていた辺りの竹が、少し騒めく様な気がした。

未だ返事は無い。

門は依然閉じられたままである。

静寂から妹紅の泣き声だけが響く。

駄目か——そう思った時。

「どうしたのよ」

門が開いた。

私達は、待合室でずいぶんと長い時間を過ごした。

妹紅は背中を丸めて俯いている。

沈黙が嫌で何度か話しかけようとしたが、その余りの剣幕を和らげる話題がなかった。

妹紅が言う腕の良い医者に見せたのだ。

これで安心だろうと私は少し安堵していた。

しかし当の妹紅がずっとこの調子なのだ。

慧音の診察結果を待つ時間は、黙って過ごすにはあまりにも長かった。

実際には十分も待つてなかったと思う。

診察室から、白衣を纏った女が出てきた。

「妹紅、落ち着いて聞いて頂戴」

「慧音は！大丈夫か!？」

「妹紅、落ち着いて聞いて頂戴」

「どっちなんだよ！」

「妹紅、落ち着いて聞いて頂戴」

「だからどっちって——」

「落ち着け」

妹紅の肩を叩く。

不毛なやり取りを聞いてられるほど心の余裕は無い。

私は取り乱す妹紅をたしなめた。

永琳と言う女は一つ溜息をつき、深刻な表情でカルテらしき物を凝視しながら少し目を狭めて言う。

「自律神経の不調による気管系の衰弱があったわ。腸管ペプチドの分泌量が多く、インスリンも多量……それで心拍数が低下、血圧の減少」

「……つまり？」

私はそう聞いた。

そんな要領を得ない説明ばかりされても困るからだ。

今聞きたいのは、慧音は無事よの一言しかない。

永琳は口の前に手をやり、取り直すようにゴホンと咳払いをして言った。

「食べすぎよ」

「……は？」

私の間拔けな返事に永琳は少しだけ頬を緩め、それから医者らしい厳格な顔になる。

「睡眠不足と過労、それに暴食をして食後低血圧が起きたの」

「……すると慧音は？」

「至って健康よ。私が保証するわ」

「食べすぎって……なんだそれ。」

洒落にもなっていない。

焦った私たちが馬鹿みたいだ。

……まあ、無事なら良いか。

疫病なんていう物騒な物よか、百倍マシだ。

「無事だつてさ、良かったな妹紅」

妹紅を安心させるために、そう言いながら妹紅の方へ振り返った。
しかし、

「あれ、妹紅？」

妹紅は居なかった。

診察室に入ると、慧音は白いベッドの上で寝ていた。

そこへ顔を埋める様にして座っている妹紅。

鼻を吸る音ばかりが響いていた。

「慧音は？」

「寝てるだけよ」

永琳がそう言う。

それは本当のようで、青かった顔に色味が戻っていた。

「……うう」

慧音が苦しそうに呻く。

体をもぞもぞと這わせて、眉間に皺を寄せた。

妹紅が顔を上げる。

「慧音！」

「……妹紅？」

「目が覚めた？」

「……は……っ！」

「慧音!？」

突然何かを思い出したかの様に起き上がり、診察室を飛び出していく慧音。

それを見た永琳が神妙な面持ちをしている。

「……変な薬を飲ましたりしてないだろうな」

私は隣で何かを書き込んでいる医者に聞いた。

永琳はカルテから目を離さず答えた。

「ちゃんと処方したわ」

「何をだ」

「下剤よ。強烈なのをね」

遠くから、ドアを叩き締める音が響いてくる。

大方、慧音が廁に飛び入ったのだろう。

やれやれだ。

とんだ肩透かしを喰らい、私は疲れと安堵の急降下で、肺の底から溜息を溢した。

「まさか食べ過ぎで倒れるなんて……恥ずかしい限りだ」

私たちは客間に上がり、屋敷の使いから出されたお茶を啜っていた。

妹紅と永遠亭について、色々な事情を聞いている私は緊張してしま
う。

なのに慧音は呑気に笑っていた。

「一体何を食べたんだ？」

「八目鰻をな……食べ放題と言うものだからつい……」

バツが悪そうに顔をポリポリと搔く慧音。

永琳は、呆れたと言った感じで笑っている。

そして妹紅は……

「けーねえ……ううっ……」

正座している慧音の膝に顔を押し付けながらずっと泣いていた。

膝枕のような体制でかれこれ半刻くらいは泣き通した。

慧音は妹紅の頭をずっとさすってやっている。

「ここまで妹紅が運んできたんだ。急に倒れるからビックリしたが、まさかただの食べ過ぎなんてな」

「……そうか」

慧音は目を伏せて、薄く微笑んだ。

「ううっ……けーねえ」

「ほら妹紅、帰るぞ。そろそろ泣きやめって」

私は声をかけたが、妹紅は泣き止まない。

それどころか更に声は強くなった。

本音を言うのと早く帰りたいのだ。

妹紅やらの因縁を差し引いても、ここは居心地が悪い。

「……すまないが、少し二人にしてくれないか？」

慧音がそう言うので、私は永琳の方を見る。

永琳は何も言わず立ち上がったので、私もそれに続いた。

永琳と二人きりになり、会話は弾む訳もない。

「煙草を吸ったら早死するわよ」

と言われたくらいだ。

私としては、早く妹紅に泣き止んでもらって家に帰りたいかった。

そこから更に半刻ほど経った時、慧音と妹紅の二人がやつと部屋から出てきた。

妹紅も流石に泣き止んだ様で、目を真つ赤に腫らしつつもトボトボと歩いている。

私たちは、里へ帰ることにした。

その日の晩、私の家に一人の来客が有った。

玄関口に立っていたのは、慧音だ。

「今晚、一緒にどうだ？」

「……また話でも有るのか？」

「祝いの酒だよ」

「なら歓迎だ」

慧音に連れられてやって来たのは、ミステイアの屋台であった。

相変わらず、鰻のいい匂いがした。

ただいつ来ても伽藍堂なので、利潤が出ているのかと心配になる。椅子に座り、とりあえずの乾杯をした。

「……ああ、美味しい」

慧音が呑み抜けにそう言う。

本当にその通りだった。

ミステイアの出す酒は頭一つ抜けて美味しい。

「いくらでも飲めそうだよ」

「……また倒れるぞ」

「ははっそれもそうだな」

すでに酔っ払ってでもいるのか、慧音は陽気だった。

明るいのは良い事だが、こうも能天気だとあれだけ心配していた妹紅が少し気の毒だ。

「はい、お待ちどおさま」

「お、来たか」

出された焼きたての鰻を口いっぱい頬張る慧音。

私は猫舌気味なので、少し冷ましてから食べる。

「食べすぎちやダメだよ」

「分かってるさ」

ミステイアまで慧音をそう諫めた。

それくらい、今日の慧音はおかしかった。

いつもは私の一挙一動を目ざとく注意する慧音だが、今日この時だけは逆だ。

慧音ばかりはしゃいで、私は静かに酒を飲む。

前来た時、妹紅はこう言う気持ちだったのかも知れない。

「……貴子、有難うな」

「何だよ藪から棒に」

「里を救ったのはお前だ」

慧音は何気なく言った。

普段からよく有難うと口にする慧音だが、今日のそれは殊更真剣だった。

改まって言われると、なんだか恥ずかしい。

それに……

「私は何もしていない」

薬は店に置いてあった物だし、看病の手際も悪かった。

特別な事なんて何一つ出来てない。

里を救ったのは慧音たちだ。

「お前は十分立派だ。お前が里に来てくれて、本当に良かった」

そう言って、慧音が深く頭を下げた。

せつかくの酒を呑む場なのに、そう言う事をされると些か反応に

困った。

何も言えず二回か三回、ぎこちない愛想笑いを返したと思う。慧音は面を上げて、また一つ盃を傾けた。

「一つ、話をしておきたくてな」

結局それかよ、と思った。

しかし、別に聞きたくない訳でも無かった。

思えば慧音が無駄な話をして来た事なんて、ほとんど無い。面倒だったのは靴下の柄と禁煙の話くらいだ。

今からされる話も、きつと大事な事。

私は体を傾け、話を聞く体制を取った。

「妹紅についてなんだがな……」

明るく陽気だった慧音は、いつものように落ち着き、いつになく自嘲的に言った。

宵が深まっていく。

月明かりがぼんやりとしていた。

「私は人間とは呼べない」

「ああ、聞いたよ」

「その事について詳しく話しておこう」

慧音が急に懐から紙と筆を出す。

それを私に手渡し、こう言った。

「ここに、私の名前を書いてみてくれ」

「名前？」

「ああ」

何でそんなものを。

酔っ払っているかどうかのテストか？

言っておくが私は断じて酔ってない。

これでも結構酒は呑める方なのだ。

名前を書くぐらい雑作もない。

上白沢……つと。

「これでいいのか？」

「ああ。そしたらその紙を良く見てくれ」

「紙？何で紙を……っ!？」

目が飛び出たんじゃ無いだろうか。

そう思うくらい仰天した。

何が起こったんだ。

今、確かに私は慧音の名前を書いた。

深酒で思考が朦朧としていた訳じゃない。

一筆一筆を克明に覚えている。

なのに、ハッキリとその紙には……

『上白沢けね』

と書かれていた。

「け、けね？な、何でだ。私はちゃんと書いたはずだぞ？」

「ああ。お前はキチンと書いていた」

「なら、けねって……」

「私がそうした」

慧音が？

どう言う事だ。

新手の催眠術か？

それとも子供達に話題のマインドコントロールって奴か？

「歴史を食べる能力……それが私の力だ」

「……つまり？」

「お前が私の名前を間違えるよう、歴史を食った」

「そんな事ができるのか？」

慧音はうなづく。

どうやら、本当らしい。

疑おうにも証拠があるのだから。

歴史を食べる能力……。

なるほど、とりあえずこの能力については分かった。

しかし、何故そこに妹紅が出てくるんだ？

私が黙っていると、慧音はじつと私のことを見つめてきた。

まるで私から、何かを待っている様に。

二人して黙ってしまおう。

その沈黙を破ったのは私だ。

「……慧音？どうかしたか？」

「あ、ああすまない」

「凄い力だな。なんだか、慧音らしい」

「……驚かないのか？」

「え？」

そう言うと慧音は悲しそうに目を伏せた。

目の光が濁る。

不安そうな横顔が煙の奥にあった。

「こんな力を持つているんだ。不気味ではないか？」

……確かに。

普通、今みたいな現象を目の当たりにしたら驚くべきだろうし、事と次第によれば恐怖するかも知れない。

目の前で起きたのは間違いなく、怪奇現象なのだから。

「私は、人間じゃないんだ。こんな能力を持つているからな」

「これでも色々な奴を見てきた。時を止めるメイドとかさ」

「……そうか」

慧音は何処か安心した様な目をする。

もしかすると、秘密を打ち明ける事で私に拒絶されるかもしれないと、心配していたのかも知れない。

生憎そういう神経は焼き切れている。

吸血鬼の館とか亡霊の屋敷とかを見てきた事が、意外な形で役に立った。

「それで、だ」

「ああ」

そこから慧音は勿体ぶって二の句を継がなかった。

焦らされると余計に気になる。

しばらく言い淀んで、やっと踏ん切りがついたように言った。

「私は長命だ。あと百数十年は生きるだろう。ただ、それでもいつか必ず死ぬ」

そして、と付けて慧音は続ける。

「……いずれ、妹紅を置いて逝くだろう」

いつか、妹紅を置いて逝く。

慧音はそう言った。

妹紅は不老不死だ。

百億年経ったって、ずっと生きている。

そしてそんな体に至るまでの経緯を私は知っている。

だからこそ、慧音の言う事が嫌なほどわかった。

慧音がどれだけ長生きをしても、絶対に別れの時が来る。

そして、どう足掻いても遺されるのは妹紅の方だ。

「私はな、貴子」

「ああ」

「妹紅と私の歴史を消そうと思ってるんだ」

何処かの茂みで、牛蛙が鳴いた。

生温い風に吹かれて草が擦れる。

何の為に……そう聞こうとした時。

慧音は——悲しく笑っていた。

「私が死んだ時、妹紅は心の底から悲しんでくれるだろう」

「……ああ」

不意に、今朝の妹紅が浮かんだ。

慧音が少し倒れたただけであの取り乱しだ。

もし死んだ時は、どうなるのか。

全く想像もつかない。

なのに容易に、映像が浮かんだ。

「だから妹紅が悲しまないよう、少しずつ歴史を食べていく」

そうして、私の事なんて忘れてもらう。

慧音はそう言った。

「……一緒に居てやれないのか」

「私だって居てやりたいさ」

そんなの矛盾している。

妹紅は慧音と一緒にいたい。

慧音は妹紅と一緒にいたい。

それなのに……何故別れる必要があるんだ。
棘を吐くように慧音は続ける。

「いずれ力が作用して、妹紅と私は他人になる」

「何で……」

「少しずつ、記憶が変わって行くんだ」

そんなの、あんまりだ。

妹紅は孤独を待っている。

千年級のヘビーな奴を。

それを埋めてやれるのは、慧音。

お前だけなんじゃないのか。

「妹紅の気持ちはどうなる！」

「……こうするしか無いんだ」

慧音は、落ち着いていた。

酒の勢いでこんな事を言うような人じゃない。

それはよく分かってる。

だからこそ、やろうとしている事の意味もよく理解しているはずだ。

「迷っていたんだ。今日、決心がついたよ」

「な、なんで」

「ちよつとの事で倒れるような奴と一緒にいたら、アイツが疲れてしまっただろ？」

慧音は笑った。

何もかもが上手くいかない時に何故か出てしまうような、笑顔だった。

多分、慧音だって酷く葛藤してるんだろう。

何度も何度も迷って、色々な事を試行錯誤して、その上で出した結論なんだ。

妹紅の事を想っているからこそその答えなんだろう。

それでも……私は、反対だ。

「理屈は分かった。確かにいつか妹紅は絶望するだろう。大切な人を

失うってのは、そういうもんだ」

「……やはり、そうか」

「でもな、人間は好き嫌いで生きるもんだ。論法で生きるもんじゃない」

「そうだ。」

一緒にいたいから一緒にいる。

それ以外の何があるのか。

悲しむせたくないから一緒に居ないなんて、無茶だ。

たとえ辛い別れが待っていても、それを払って釣りが出るくらい大切な人と過ごす時間ってのは尊い。

「いつか悲しませるのが嫌でも、ずっと一緒に居てやれよ」

「……やっぱり辛いな。駄目だ。アイツを泣かすなんて、耐えられそうも無い」

「そんなの……」

切ないだろ。

そう言おうとして、店主——ミスティアに止められた。

「貴子、慧音先生も辛い。分かってあげて……」

「ミスティア……」

ミスティアは……泣いていた。

眺から大粒の涙を何滴もこぼして、私を止めた。

ミスティアは妹紅について色々知っているだろうし、良き理解者だろう。

そして、その上で肯定した。

慧音が、まるで余命を悟った病人のように儂い表情をする。

「違う」

「え？」

違う。

慧音は辛い。

聞いている私だって辛いし、ミスティアだって泣いている。

それでも……一番辛いのは、妹紅の奴だ。

「私は反対だ。お前は教師だろ。辛くても教えてやらなきゃいけない

事があると、私は思う」

「……お前なら、そう言ってくれると思ったよ」

「ならっ」

「貴子……すまない」

慧音がそう言った瞬間、水と混ざる絵の具のように世界が歪む。

真っ直ぐなはずの串が渦を描く。

揺れる視界に吐き気がする。

でも、まだだ。

何かを言わなきやならない気がする。

ここで言うべき台詞があるはず。

……しかし、それをついぞ発せなかった。

最後に慧音は、笑ったような気がして。

それなのに私には、悲しい気持ちが伝わってきた。

幸せってのは、脆いもんだと思う。

素朴な事で、生きてて良かったなあと思う事が有れば、どんな贅沢をしても心が満たされない事が有る。

百年続いた愛が、明日冷めない保証は無い。

幸せになりたいと思ってしまうたら、今あるモノを失ってしまうかもしれない。

だから私は、今ある素朴な幸せを細々と感じればそれで良かった。

例えば、里にある甘味屋で下らない事を喋りながら団子を食べるとか。

例えば、紅葉を見に山を登って栗や木の実を沢山拾ったりとか。

そう言うありふれた一幕が、何よりも大切だ。

平穏な日々こそが一番の宝物、なんて陳腐だけどさ、色々な人がそれぞれを経験を通して、やっぱりその結論に至ったんだと思う。

私もその一人だ。

慧音と過ごす時間が何より楽しいし、幸せだ。

慧音が泣いていたら、私もずっと悲しくなる。慧音が笑っていたら、私もとんと嬉しくなる。

本当、自分でも参っちゃうぐらいだ。

夜、一人で居ると猛烈な寂しさに襲われる時がある。

以前だったら何とも無かったのに。

その度に心臓が止まるような思いがして、吐きそうになる。

その度に、私は酷く後悔する。

一緒に老いていきたかった。

同じ墓に入りたかった。

いつか絶対来るその時の事を考えるだけで、死んでしまいそうだった。

いつそ死んでしまいたかった。

今日は朝から大変だった。

寺子屋が休みだから慧音と一緒に出かける約束をしていたのに、思いつきり寝坊した。

昨日の晩にワクワクしすぎて全然眠れなかったせいだ。

やらかした。

待ち合わせの時間まであと少ししか無い。

慧音は遅刻に厳しいから、もし遅れたら不機嫌になっちゃうし。

ああ、せっかく髪の毛も整えて行こうと思ったのに時間が足りない。

何で寝坊なんかしたんだ私。

……結局、いつもの格好で行く事になった。

待ち合わせの場所である広場に着くと慧音がいた。

慧音はいつも私より先に着いている。

「ごめん、待った？」

「いや、私も今来た所だ」

嘘。

本当はずっと前に来てるのに。

慧音は嘘が下手だ。

顔に全部出てる。

「今日、寝坊しちゃってさ……」

「奇遇だな。私もだ」

「え？慧音が？」

「ああ。実は、今日の事が楽しみで眠れなくてな。急いで支度してきたよ」

そうやって笑う慧音は、安易な表現だけど本当に美人だった。

朝の日差しがやたら良く似合ってた。

「慧音せんせー」

見惚れていると、不意に遠くから呼びかけられる。

あれは確か、寺子屋に通っている子だ。

「お使いか？」

「うん。卵を買ってこいって」

「それなら今日は三丁目に行くといい。安売りをしているそうだ」

「分かった！それで、今から先生はデート？」

な、マセた質問を……。

今時の子供って奴は本当に。

慧音はこの手のからかいに滅法弱いからなあ。

顔が真っ赤だ。

「ああ、デートだ」

はにかみながら答える慧音。

そんな照れることも無いだろうに。

新婚さんじゃないんだから。

生徒はニヤけながらお使いの為三丁目の方向へ走って行き、私たち

は二人きりになった。

まだ顔を赤くしてモジモジしている慧音は。

私は不意に悪戯心が湧いた。

「それじゃ、今日はどこに行きますか？慧音せんせー」

「そうですねー。今日はお買い物に行きましようか」

……少しだけ経って、私たちは同時に笑った。

「何だよそれ」

「そつちこそ」

そんな事を言いながら、足並みを揃えて歩いていく。
今日は慧音が買い物をしたと言った。
どうやら、教室の備品を買いたいらしい。

「すまないな、折角の日にまで付き合わせて」

「いいよ。前見たけど、結構色々足りて無かったし」

前というのは、疫病が襲った時の事。

子供たちが相次いでパタリパタリと倒れるし。

何人も寺子屋に運ばれて来た時は血の気が引いた。

「まずは、花だな」

「花……ってことは」

「ああ。あの店だ」

賑わいのある人里、その中でも更に心臓部分。

千客万来の往来に、狼の群れに放り込まれた羊のような建物が一

軒。

ボロつちい玄関口に立てかけてある看板と、店先に並べてある花の数々。

色々と話題に事欠かぬこの店の名は、フラワーショップ風見。

実にセンスのない名前だと思う。

どうせ名付け親は……

「いらつしやい……って、慧音か」

こいつだろう。

店に入るなり目に入ったのは大量の吸い殻。

どうやら本格的に禁煙へのレジスタンスを始めたみたいだ。

……まあ、慧音に頭突きされたんだけど。

つくづく懲りない奴だ。

「言っておいた物はあるか？」

「ああ、そこに置いてある」

貴子が気だるそうに指さした先には、生命力に溢れた花があった。

花は売り手に似ないらしい。

「生徒たちに育ててもらおうと思ってな」

慧音がそう言いながらその花たちを掴む。
青色の花弁が優しく光った。

「アサガオ？」

「ああ」

目があつて、慧音が微笑む。

何度も見た事のある顔なのに、またドキツとしてしまった。

本当、慣れないなあ。

すると不意に貴子が悪どい笑みを溢す。

「おい妹紅知ってるか？」

「なんだよ」

「アサガオの花言葉はな、儂い恋だ」

……だから何だよ。

安っぽい冷やかしだ。

残念だけど儂い恋なんて大層な物、私には出来やしないさ。

「……ん？貴子、これ一輪多いぞ？」

「あれ？」

慧音が指折り数えて貴子に指し示す。

花を数えるも危ういなんて。

全く、これが慧音と同じ教師なんて考えられないよ。

「……なら、これは妹紅の分で」

「えっ」

アサガオを一輪手渡してくる貴子。

私はギョツとした。

何となく、それを受け取りたくなかった。

貴子が儂い恋だなんて言うからだ。

神なんて信じてないし、験は担がない主義だ。

けど、これだけは嫌だ。

遠慮しようと思った。

なのに慧音が満足気に、

「それはいいな。妹紅、お前も育てるといい」

って言うもんだから、とうとう断れなかった。

何だか縁起が悪いような気がした。

多分、慧音はそんな事全く気にしてなくて、曇りのない善意で言ってるんだろう。

……花なんて育てられるかな。

「いくらだ？」

「植木鉢やらも込みで……ええーつと」

貴子がおぼつかない手つきで算盤を弾く。

今時、算盤なんて小さい子供でも弾けるのに。ぎこちない動きでゆつくりと玉を動かす貴子。

慧音は反対側からそれを見ていた。

あれは生徒を見る時とおんなじ目だ。

しばらく経って、

「いいや、まけとくよ」

めんどくさくなったのか、そう言った。

そんな事を教師が許すわけもない。

「待っているから、最後まで計算しなさい」

慧音それ、生徒相手の口調。

貴子もこうなった慧音はとことん頑固なのを知ってるのか、渋々算盤を弾き直した。

またしばらく経ってようやく終わった。

「毎度あり」

貴子にそう言われながら私たちは店を出た。

そこからはばらく歩き、様々なものを買った。

行く先々で慧音は持てなされる。

律儀に毎回顔を赤くするんだから、ほんと真面目だ。

まあ、里を二度救った人だもんな。

話題にならない方が無理だ。

そののついでか、私も散々揶揄われた。

皆、仲が良いとか言って微笑む。

慧音はその度に照れてはにかむ。

お決まりの風景だ。

夕方になって、慧音の家についた。

整理整頓のされた慧音らしい部屋だ。

座布団に座ると、慧音の匂いがしてくる。

その匂いが、私は好きだ。

それを慧音に言う顔と顔を真っ赤にして恥ずかしがるから言わないけど。

私はいつも他愛もない話をして時間を潰す。

「人里の皆、元氣そうで何よりだね」

「ああ、安心したよ」

向かい合って座りながらお茶を飲む。

昼に買った羊羹を、二切れずつ皿に盛った。

お砂糖多めの慧音が好きな羊羹だ。

元々甘い物は苦手だったんだけど、慧音に合わせて食べてたら、何だか好きになった。

家に着くと慧音は落ち着いた表情をして、外にいる時よりも静かになる。

本人曰くりラックスしているらしい。

この時、私は慧音を独占しているような気分になる。

誰にも見せない、教師や人里の有名人としてじゃないありのままの慧音。

それを私の前で見せてくれることに、変な優越感がある。

「……今日は、有り難うな。妹紅」

慧音の口癖だ。

家に着くと慧音はいつもこう言う。

その度、私はぶっきらぼうに「いいよ」なんて言う。

本当は、礼を言いたいの私の方だ。

「今晚は、鮎を焼こうか」

「うん」

慧音は立ち上がって、エプロンをつける。

こつちで食べる時は慧音が、私の家で食べるなら私がご飯を用意す

る。

長年の間で培った暗黙の了解みたいな奴だ。

慧音は台所に向かった。

私は暇つぶしに、もらったアサガオを見た。

私のは赤い花をつけている。

慧音は、青色を育てるそうだ。

生徒に育てさせるなら、種を買えばよかったのに。

育った状態で買ったなら、後は枯れるだけだと思っただけだ。

まあ、慧音の事だからきつと理由があるんだろう。

「もー、すまないがちよつと来てくれー」

台所から慧音に呼ばれる。

焼き鮎のいい匂いがした。

私に向かうと、背伸びして高いところに置いてある皿を取ろうとしている慧音がいた。

「あそこの皿を取ってくれ」

「……ん」

お皿を二枚取って慧音に渡した。

有り難うの言葉も待たずに居間へと戻る。

慧音は少し背が低いのだ。

普段はあの変な（慧音に言ったら怒るけど）帽子とかで目立たないが、隣に並ぶと結構下に頭がある。

普段あんなにしっかりしている慧音の、一つの弱点だ。

「さ、出来たぞ」

鮎の塩焼きだ。

魚屋の主人が、慧音のためにオマケしてくれた。

程よく油の乗った身だ。

「いただきます」

慧音が合掌してそう言う。

私もそれに合わせて小さく呟く。

晩食を終え、風呂に入る。

私はいつも慧音の後だ。

別に深い意味はない。

そして一段落つくつと、二人でダラダラと喋る。

夜の女子会だ。

私も慧音も子供ではないが、女子会だ。

あそこの家に子供ができたのだ、生徒のテストの点数が伸びないだのつていう、取り止めのない会話。

いつも下らない内容だけど、この時間は唯一無二だ。

そこで酒を呑むかは日によって違う。

今日は、呑む日らしい。

そういう時は焼酎を持ってきて、チビチビやるのがお決まりだ。

二人して雑談を肴に盃を煽る。

それで程よく盛り上がって一通り話が終わると、私は一旦帰ろうとするんだ。

そこでいつも慧音は、暗いとか危ないとか言って引き止めるんだけど、それでも一回は帰る意志を見せる。

すると酔った慧音は寂しそうな顔をするので、やっぱり

今日は泊まる事に言う。

そして慧音が嬉しそうな顔をするまでが流れた。

今日もそうなると思って、帰ると言った。

「……そうか。分かった。気をつけるんだぞ」

……あれ？

引き止めは？

寂しそうな顔は？

「今日は楽しかったよ……うん。楽しかった」

いや、止めてよ！

いつもはそこで止めるじゃん！

……まさか、いつも反応を楽しんでるのバレた？

そこから引き返す理由を探し続けたが、最後まで見つからずとうと

う竹林にある私の方の家についてしまった。
もつと、喋りたかったのに。

……寂しい顔をするのは私の方か。

「あ、そうだ」

アサガオ、植えておこう。

忘れぬうちにやっておくのは、大事だから。

……儂い、恋。

どうやら私にぴったりだ。

死ぬ事のない私。

墓無い、恋。

……慧音。

曇り空の日だった。

何だか、頭が痛かった。

気圧のせいだろうか。

それにしても、痛みが鈍い。

何だかやっておかないといけない事を忘れているような、そういう
妙に釈然としない不安がする。

今日は人里で竹を売りに行く日だ。

……ああそうだ、思い出した。

その帰りに、何処かへ寄って行こうと思ってたんだ。

……あれ？

どこに行こうとしてたんだっけ。

うーん。

思い出せない。

肝心な所のはずなのに。

……まあ良いか。

忘れるって事はそれほど重要でもないんだろう。

家を出ると、鳥が低く飛んでいた。

明日は雨だな。

まあどうせ家から出ないし関係ないか。

竹を売って適当に酒でも買おう。

今年の竹は質が悪い。

冬が長かったおかげで竹炭は飛ぶように売れたが、別に出来が良かった訳じゃない。

むしろ最悪の質だった。

それは二度起きた異変のせいだ。

どうやら貴子はその二度の異変、両方に関わっているらしい。

活力のない奴に見えるけど、本当なんだろうか。

しかも里に起きた飢饉や疫病なんかまでアイツが一枚噛んでい
るって言う噂だ。

そのせいで大人たちは貴子をよく思っていない。

けど本人は必死に看病してたし、私にはそこまで悪い奴には見えな
かった。

評判は最悪だろうけど。

里に着き、問屋のオヤジさんに竹を卸した。

店を構えて売るのもめんどくさいし、さつさとまとめて売っ払った
方が楽だ。

「あれ、今日は一人なの？」

世間話の延長で、問屋がそう言った。

今日は一人？

私はいつも一人だ。

誰かと行動を共にすることなど殆どない。

「いつも一人だよ」

「ん？ああ、そうだったか」

不思議そうな表情で顔を傾ける。

とうとうボケたのか。

人間ボケると長話をする様になる。

話の長い人は苦手だ。

代金を受け取ったので、適当に話を切り上げ人里を散歩する事にし

た。

里をぶらぶらと歩く。

ポケットに両手を突っ込んでると、何だか心が落ち着かなかつた。何だろうか。

誰かに怒られるような気がする。

そんな事で注意をしてくる奴なんて知らないのに。

「おはようございます」

そんな事を考えていたら、不意に後ろから声をかけられた。

咄嗟のことで反応できず、無視する形になってしまう。

流石にシカトはできないので適当に会釈だけを返しておいた。

挨拶の主は少しだけ笑って、寺子屋の中へと入っていった。

あの人は、上白沢慧音だ。

人里の教師をしているらしい。

私も何度か喋った事がある。

話を聞いた感じは真面目な印象だった。

聞くところによると、里を二度救ったらしい。

お年寄りたちの人気者だ。

人里に住まない私には関係のない事だが。

日が傾いてきて、鳥が律儀にカーカー鳴く。

今日一日は、ずっと漠然とした不安に駆られていた。

それを言葉にして説明することはできない。

でも、靴擦れのように拭えない違和感がずっとある。

それは深刻で、取り返しのつかないような間違いを犯しているような。

ああ、イライラする。

もういい。

深く考えたって無駄なんだ。

どうせ時間はいくらでもある。

忘れるか思い出すかのどっちかなのだから。

寝よう。

明日がある。

雨だ。

しとしと降りの。

頭が痛い。

中をぐちやぐちやにされたみたいだ。

昨日よりもずっと痛い。

違和感はもつと強くなった。

これは気のせいと済むのか。

それとも……心まで妖怪になってしまったのか。
嫌だ。

もう動きたくない。

このまま消え去りたい。

雨音がうるさい。

朝飯を食べよう。

昨日人里で買った材料がある。

適当に塩焼きすれば完成だ。

さあ食べよう。

「……………あれ？」

私、疲れてるのかな。

一人で食べるってのに。

何でお箸を……四本持ってきたんだろう。

二本しか使わないのに。

……まあ良いや。

さっさと食べて、それから考えれば良いや。

「……………」

また、違和感。

いつも一人で食べてるはずだ。

なのに、何でこんなに静かなんだろう。

いつも何一つ音なんてしないのに。

物足りない気持ちになるのは何故だろう。

こんなに寂しいのは……どうして。
……何で私、泣いてるんだろう。

気がつくと、人里にいた。

ここに来る意味なんてないのに。

行く場所なんて無い。

けど、脚が勝手に進む。

まるで操られてるみたいだ。

傘を忘れた。

雨が降ってるのに。

「……ここは」

気がつくと、あまり行ったことのない場所に着いた。

小さな子供が何人もそこへ入っていく。

傘をさして蠢いていると、小さなキノコのような。

「……………」

そこで一人の人間と目があつた。

蒼い髪。

変な帽子。

確か寺子屋の教師だ。

名前は知らないが。

会ったこともほとんどない。

「……………」

頭痛が増す。

雨のせいで、体が震える。

ああ、面倒くさい。

一回死ぬか……。

「……傘、持って行くと良い」

急に寺子屋の教師が傘を差し出してきた。

突然すぎてびっくりした。

見ると何だか泣きそうな顔をしている。

何でそんな表情をしているんだろう。

私まで辛い気持ちになった。
会ったことないはずなのに。
聞き覚えのない声なのに。

傘をさして、私は家へ帰った。
道中ずっと、嫌な気持ちがあった。

雨音がやたらとうるさいのに、世界は静かだった。

「……花？」

何でこんな所に。

家の前に一輪のアサガオが植えられていた。

そうだ、私が植えたんだ。

何で……こんなものを植えたんだったか。

もう、なんでもいいや。

何をする気にもならない。

このまま死ぬるんじゃないだろうか。

寝よう。

もう二度と目覚めないくらい。

何なんだ今日は。

こんな悲しいのは。

私は孤独だ。

ずっとそうして生きてきたはずなのに。

——こんなに寂しいのは、何なんだ。

動けない。

動きたくない。

このまま床に横たわって野垂れ死ねたら……ああ幸せだ。
でも、意識はむしろハッキリしてくる。

何なんだよ、もう。

アイツに殺された時だって……こんなに悲しくなかった。
何がなんだってんだよ。

その声を……私は知っているのか？

私はその日記を恐る恐る開いた。

そこには確かに私の文字で、あまりにも沢山の事が書いてあった。

夏 対雨時行

今日から日記を書く。

日記なんて書いた事も無いし、書く内容も無い。

けど、——が書けとしつこい。

——は頑固だから、一度言い出したら仕方がない。

面倒だけど、気が向いたら書く。

今日の天気は晴れだった。

何の予定も無かったので、輝夜を殺しに行く。

結果は惨敗。

この所ずっとだ。

殺しても気持ちいが晴れない。

むしろ暗くなる。

血塗れで帰ったら——に怒られた。

そんなに怒らなくていいだろうと言ったら、また怒られた。

私のために言ってるんだとか、そんな恩着せがましい事を——は絶

対に言わない。

私にはむしろその方が、ずっと私の為に怒ってくれている気がする。

ひとしきり怒られた後、ご飯を食べて二人で喋った。

私の言い間違いがツボにハマって、——がずっと笑っていた。

今日は寒かった。

朝冷えて霜が降りてたから雨の匂いがした。

鳥が低く飛んでいる。

それを見た——が、明日は雨だと言った。

鳥が低く飛ぶと、雨が降るらしい。

結果はとんでもない晴天で——が気恥ずかしそうな顔をしていた。

過去の事が分かつてても未来はわからないらしい。
何だか面白かった。

折角の晴れだから二人で遊びに行った。

色々なものを見て、その度に——が話をする。

役に立つ内容なんだろうけど、あんまり長いからその事を指摘した。

——は焦って、生徒にもそう言われたと言った。

私はその長話も嫌いじゃないけどね、と言うと、顔を赤くしていた。

私も——を上手くあしらえるようになったらしい。

今日は——と喧嘩した。

私が——を泣かせた。

一緒に死ねないなんていって私が困らせてしまった。

家に帰って、私も泣いた。

明日、謝ろう。

この日記の中でも謝っておく。

ごめんね、——。

読んでる内に、前が見えなくなった。

私は……大馬鹿野郎だ。

何で忘れてたんだろう。

出会った日のことを。

一緒に笑った日を。

泣いた日、泣かせた日。

怒った事と怒られた事。

楽しかった事を。

私はその名前を知ってる。

「上白沢……慧音」

——全てを思い出した。

深い靄が晴れるような感覚だ。

私は、何度もその名前を呼んだ。

「慧音……慧音っ！」

日記が、びしょ濡れになった。
頭痛は止んだ。

「慧音！」

雨の中、寺子屋の前に走った。
裸足で、傘もささずに。

会いたくてしようがなかった。
人里の教師、人里の英士。

そんなんじゃない。

私の大切な人――

「慧音だ！」

やっと会えた。

その名前を私は知ってる。

その顔を、声を。

「……どうして」

私のことを見つめるその瞳。

ああ、思い出した。

そうだ。

違和感は、これだったのか。

毎日見ていた顔を忘れるなんて、できるわけない。

「何で……思い出したんだ、もっお……」

土砂降りの雨のなか、慧音は泣き崩れた。

篠突く雨と同じくらい、多くの涙を流した。

「お前といてしまつたら……悲しませるだろ。一緒にいて辛いのは、お前だけだ。だから私のことなど忘れて幸せに――」

「嫌だ！」

慧音のいない世界なんて……。

「そんなの、嫌だ！慧音が死んだら悲しいよ！でもそれは不幸なんかじゃない、幸せなんだ！」

「妹紅……」

「一人で幸せに生きていくよりも、私は慧音と過ごす辛さが良い！」
それが、幸せだったから。

だから……。

「だから……ずっと一緒に居てよ、慧音」

泣き腫らす慧音を、そつと抱擁した。

そうだ。

慧音が泣いた時は、いつもこうしてた。

胸に顔を埋めながら、慧音は泣いた。

「……つ済まなかった」

「会いたかった、ずっと」

「お前を悲しませなくなかった……」

「ごめんね。私のために。辛かったね」

慧音の肩をぎゅつと抱きしめる。

小さな慧音の肩は、あまりにも弱々しかった。

ずっとこうしていたかった。

時が流れて行く。

一切は過ぎて行く。

辛いことも多いだろう。

幸せなんて些細なものだろう。

それでも。

どんな雨が降ってようが、関係ない。

慧音が居れば。

「大好きだよ、慧音」

ずっと、一緒にいよう。

日記 夏 温風至

私は不幸だった。

親や友人、この国までが私の事を化物と呼ぶ。

でも、たった一人だけ、私を妹紅と呼ぶ人がいた。

その人は、人も妖も殺し尽くしてその両方の道を踏み外した私を、

受け止めてくれる人だった。

その人という事が幸せだった。

ご飯を食べて風呂に入って、たまに遊んだりして。

そんな事がこんなに楽しい事だなんて、知らなかった。

私の事を、人間に甦らせてくれた。

泣かしたりした事もある。

その度に仲直りをした。

愛するってことを知った。

人間になった。

ありがとう、慧音。

カグヤ・マグラ

——んん、もう朝か。

あーあ……よく寝た。

目覚めは最高だなこりや。

なんだか疲れが全部吹き飛んだみたいで頭がスッキリしてる。

近頃稀に見る爽やかな気分だ。

「お目覚めかしら」

「ああ、よく寝た」

「そう。良かったわ」

「何だか身体が軽い……つてえええ!?!」

「元気そうね」

軽い体を起こしてのびのび目を開けると、ベッドの脇に永琳が立っていた。

汚れのない白衣を着て、カルテを脇に挟んでいる。

「なんでお前がここに!」

「ここは永遠亭よ」

「永遠亭?」

馬鹿め、そんな訳あるか。

冗談も大概に西洋ベルサイユだ。

なんで私が永遠亭に……え?!

マジか……マジだ。

何がどうなってるんだ。

よく見たら私の下にあるのは見覚えのない綺麗なベッド。

いつもは煎餅布団で寝てるはずなのに。

それにこの部屋には見覚えがある。

ここは以前慧音が運ばれてきた部屋だ。

「………何で私がここに?」

「さっきと真逆じゃない」

永琳はカルテを右手に持ち、近くにあった椅子に腰掛けた。

時折私の方を見つつ、何かを書き記す。

混乱しながらそれを見ていたが、何だか落ち着かなかった。

人間、チラチラ見られるのは恥ずかしいのだ。

「頭の痛みは無さそうね。熱は適温。心拍数、呼吸ともに安定」
いそいそと鉛筆を走らす永琳。

竹林の奥に住んでるような胡散臭い連中だが、この女には慧音の事で一応恩がある。

礼を言っておかなければならないだろう。

沈黙が嫌だったわけではない。

「この前は世話になったな」

「ええ。また食べ過ぎたりしてないかしら？」

「慧音はそんな馬鹿じゃないさ」

やがてカルテを書き終わったのか、永琳の手がピタリと止まった。

そして突然、考え事に耽るような表情で私の目を見た。

矢のように鋭い視線が私を射抜く。

忙しそうにするせいで聞きそびれた重要な質問があった。

私は再び疑問を呈した。

「私、何でここに居るんだ？」

「ウチの者が運んできたの。貴方、竹林で倒れてたらしいわよ」

「え？私がか？」

「……ええ」

永琳は静かに、重々しく頷いた。

まるで余命宣告をされるような雰囲気だった。

竹林の葉擦れがざわめきのように響く。

私は思わずゴクリと生唾を飲んでしまった。

「何でだ。もしかして病気なのか？」

「血中の酒分濃度が尋常じゃなくらい高く……」

「いいってその長い説明！専門用語は分からん。私は大丈夫なのか？」

「……呑みすぎよ」

「の、呑みすぎ？」

永琳が呆れたように肩をすくめた。
同じように私も体の力が抜ける。

「なんだそりゃ」

「こっちの台詞よ」

呑みすぎって……。

食べすぎで倒れた慧音にあんだけ散々言っておいて、まさか自分が倒れるとは……。

全くもって面目ない。

慧音には、それはそれは歯に絹着せぬ物言いをした。

いっぱい食べるから胸がデカくなるんだとか言ってゴメン慧音。

堪忍袋もでつけーねな事を願おう。

永琳がゴホンと咳払いをする。

「右手に一升瓶を抱えながら泡を吹いて倒れてたそうよ。血中アル
コール濃度が0.84も出たわ」

「……それってどれくらいだ？」

「ゴリラが死ぬレベルよ」

「でも生きてる。とすると私はゴリラ超えか」

「薬を飲ませたのよ。全く、何でそんな大量に飲酒をしたのかは知らないけれど、これに懲りたら慎む事！」

ピシヤリと永琳に叱られた。

……参った。

そんなに飲んでたのか？

全く記憶がないぞ。

いつもにまして記憶はパーだ。

どこぞの三大奇書みたく、私はいつも記憶を無くす。

だが今回のこれは薬の副作用だろう。

とびつきり怪しい奴を飲まされたに違いない。

「副作用なんかじゃないわよ」

「な！」

「顔にそう書いてあるわ」

おいおいコイツ、心の中を読んだぞ。

まさかメンタルヘルスケアまでやるつもりか。
商魂たくましい奴め。

「……頭の中も見たほうが良いかしら」

「何がだよ」

「馬鹿なことばかり考えてるからよ」

「失礼な！」

「あまり騒ぐと体に響くわよ」

「誰のせいだ、誰の」

「自業自得じゃない。はあ……」

溜息を吐きながら永琳がしやなりと足を組む。

その一連に、思わず温唾を飲んでしまった。

……綺麗な足だ。

しかも、今時珍しい何一つ履いてない生。

程よく肉付きの良い白魚のような美脚だ。

ふくらはぎの曲線美は黄金比を描く。

引き締まりながらも立体的な太もものスジが実に良い。

これはこれは……っ痛！

「な、何をするだアーツ！ゆるさんツ！」

「私のセリフよ。人の足をジロジロ見ないでちょうだい」

「医者が人の頭をカルテで叩いていいのか」

「変態に倫理を説かれても説得力がないわ」

「私は至って健全だ」

「……はあ」

聞こえるくらいの音でクソデカ溜息を吐く永琳。

心なしに蔑まれたような気がするが、気がするだけだろう。

変態なんて言われる筋合いは無い！

「分からないわ。何故貴方がそんなに元気なのか」

「人間元気が一番だ」

「そうね。そして健康も大切よ。医者として言わせてもらおうわ。これ

から言うことをよく聞きなさい」

「なによ」

「貴方、このままだと後数年で死ぬわよ」

「……へ？」

「肺は真っ黒。細胞は酒浸り。全身の器官は壊滅状態」

「つ、つまり？」

「前例を見ないぐらい、不健康な身体だわ」

永琳は当然と言わんばかりに、あっさり結論を告げた。

ま、まさか。

酒を呑む時はシジミを食べてるし、運動量も申し分ないはずだ。

人間界を代表する健康優良児だぞ。

「なぜ今まで生きてこれたのが不思議だわ」

「……一回死んでるからな」

「え？」

「まあ、色々訳ありだ」

「……その話詳しく聞かせて貰えるかしら」

永琳が体を私の方に向け組んでいた足を解いた。

真剣な表情で興味深そうにしている。

ききたそうにしているの、私は惜しみなく話してやった。

紅魔館から白玉楼、そして人里に至るまで、笑いあり涙ありの人生譚を。

長くなるのもアレなのでおおよそ掻い摘んだが、それでも結構へビーな内容だ。

改めて実感するが、私の人生は中々に波乱を含んでいる。

それは永琳も感じたようで、茶化しもせず耳を傾けていた。

「……って言う訳で、今に至る」

「なるほどね。納得がいったわ」

「何のだ？」

「貴方、吸血鬼と契約を結んだのね」

「ああ」

「とすると、魂を妖怪に売った事になるわ。今、貴方の魂は半分くらいが妖怪なのよ」

永琳がスツパリとそう告げる。

しかし私の頭はクエスチョンマークで沢山だった。

言動が一つ一つ回りくどいのだ。

何が言いたいのか今ひとつわからない。

「どういう事だ？」

「そのままの意味よ。魂の癒着に悪魔の契約を使ったのなら、純人間のままで居られる訳ないじゃない」

「てことは何だ。私は半分妖怪なのか？」

「肉体は人間よ。でももしかすると妖怪に変化してしまうかも知れないわね」

「何だって!？」

思わず声が荒んだ。

私が妖怪になる？

何の冗句だ。

妖怪退治屋が妖怪になるなんておかしいだろ。

漁師が朝起きたらニジマスになるのか？

自信を持って言えるが私は人間だ。

人間以外の何者でもない。

「私は人間だ。今も昔も、これからもな」

「そう。もしそのまま人間であり続けたいなら、人間らしい生き方をすることね」

「……例えば？」

「即ち妖怪じみた行いはしない。人から恐れられたり、酒と博打に浸ったり、妖怪のいる花屋で働くなんてもつてのほかよ」

「何で知ってたんだよ」

「顔にそう書いてあるわ」

私の顔は広辞苑か。

何だって全部言い当ててるんだ。

まさかデタラメ言ってるんじゃないだろうな。

……流石にそんな訳ないか。

目覚めの衝撃が強すぎて忘れてたけど、曲がりなりにもこのお医者サマは命の恩人だ。

私にしても慧音にしても一度診てもらった借りがある。

永琳の妄言は、信じるのは受け入れがたいけど、疑うにはあまりにも説得力がありすぎた。

なら、本当に私は妖怪へなりつつあるのか？

……確かにレミリアと契約はした。

私が寿命を貰うというものを。

けどそれによって人間でなくなるなんて事あるか？

もし本当ならそんな重要な事をあの館の奴らが言わないなんて事

……。

待てよ。

そもそもレミリア達は、本当に何も言っていなかったか？

私は何で紅魔館から暇を出されたよ。

確か、パチュリーはこう言った。

魂が体に馴染んでいない。

もしも長生きしたいのならば、外に出て体を動かせと。

外に出て、体を動かす。

これはもしかすると、人間らしい行いをしろって意味か？

確かに紅魔館の中でずっと過ごしていたら、こっちまで妖怪になっ
てしまいそうだ。

レミリアやパチュリー、美鈴なんていう大妖怪がゴロゴロいるんだ
から。

だから館に籠らず外に出ろってか？

なるほど、無茶な論理だが確かに筋は通る。

だがもしこの仮説が正しいとすると……かなり拙いぞ。

人間らしく生きよと送り出されたのに、現状はどうだ。

むしろ妖怪の世界に鳴り物入りで踏み込んでるじゃないかよ。

人里からはとんでもなく恐れ嫌われ、酒や煙草で体を潰し……極め
付けはこれだ。

風見幽香と共に過ごしている。

これは大問題だ。

レミリアなんかはずいぶん良心的だった。

吸血鬼だつてのに分別がある。

無意味に暴力を撒き散らしたりはしなかった。

それに比べてあの緑髪悪魔はどうだ。

意味もなく人を貶す、殺す、こき使うの3K野郎だぞ。

トリプル役満じゃないか。

感覚が麻痺して特には気にしてなかったけど、常日頃からブンブン妖気だの殺気だのを飛ばしてやがるし。

妖怪らしさ全開のフラワー女だ。

あんなのと一緒にいたらそれこそ妖怪になつてもおかしく無いぞ。となると……早急に縁を切ろう。

この頭のコサージユさえなければ、全て円満解決だ。

「どうしたのかしら。ずいぶん難しい顔をして」

「頭に爆弾がついてる患者を治したことはあるか？」

「突然何を言い出すのよ」

「人間であるために必要なんだ」

「……勘違いしてるようだから言っておくわ。私は薬師であつて医者では無いの。外科や心療は専門外よ」

「なら、無理やり頭につけられたコサージユを取り除く薬はあるか？」

「ええ、あるわよ」

「まあそんなもの無い……つて、あんのかよ！」

「古典的なりアクションね」

そんな物があるなら願ったり叶ったりだ。

さつさとそれを飲んで幽香とさよならバイバイする。

それが人間讃歌のゴールドウエイに違いない。

あゝ良かった。

グッバイ幽香、フォーエバー。

「ならそれを——」

「オススメはしないわ」

「え？」

「どんな薬にも副作用があるの。この薬のは特に強烈よ」

「ど、どんな副作用だ」

「花妖怪にやたら好かれるわ」

「何でだよ」

タイムリーヒットすぎるだろ。

それじゃ何の意味もない。

痒み止めの副作用に痒みがあるようなものだ。

「何も治療法は投薬だけじゃないわ。少しずつ体の中にある妖気を取り除く事も可能よ」

「どうやるんだ？」

「そうね。体の機能を正常に戻すためにも、しばらく入院が必要だわ」
「どれくらいだ？」

「しばらくよ。その間に気を操ったり煙草を吸ったりするのは禁止。人間離れた事をすれば、文字通り人間から遠ざかっていくわ」

「な、なんだと」

「治療なのだから我慢しなさい」

「ちよつと待てよ」

これ以上は黙ってられないぞ。

アレよアレよでとんとん拍子に話が進んでいるが、そもそもの疑問が解決できてない。

疑うには説得力があつたが、助けてもらおうとは思わない。

「何でそこまでする。ここは便利なクリニックか？私の聞いた限りじゃアンタらは極悪非道、病人なんざ見捨てる連中だ」

人間だ妖怪だなんてことは後回しでいい。

ここには妹紅が死ねなくなった黒幕がいるはずだ。

そんな奴らに救ってもらう義理なんてないぞ。

それに縁もゆかりもない私をどうして入院までさせる。

善意だなんて吐かそうもんならぶん殴ってやる。

「私は妹紅のダチなんですね。悪いが入院はしない。数年で死ぬ？元々死んだ身だ。惜しくなんてないんだよ」

「そう」

短く永琳は返答した。

そして間をおかずに続けた。

「妖怪になったら簡単には死ねないわよ。貴方の場合理性を失って猛妖になるわ。誰かに殺されるまでずっと、永遠に」

「なら博麗の巫女様にでも退治してもらおうさ」

「……頑固なのね」

「信念ってやつだ」

「なら私にも信念があるわ。たとえ外道と言われても、目の前の患者を放っておくなんてしないの」

「そりや殊勝なこった。私以外によろしく頼むよ」

「残念、分け隔てはしない主義よ」

「何が主義だよ。薄っぺらい欺瞞だろ」

「貴方のと何が違うのかしら」

「それが分からないから欺瞞なんだよ」

「なるほどね」

小さく頷く永琳。

すると突然私の手首が握られる。

まるで手錠のような圧迫感。

振り払おうと思ったが、掴む手は石のように動かない。

「何であれ、貴方を入院させなきゃいけないの」

「結構だって言ってるだろ」

「遠慮は不要よ。こっちの都合だもの」

「だから何がって痛!」

急に右手首から、針を刺されたような痛みが走った。

「というか実際に刺されていた。」

注射針だ。

「何をっ」

「鎮静剤よ。脈が上がりすぎてるわ」

鎮静剤だ？

「ことわりもなく人に注射なんかするなよ。」

「医者でも薬師でもそれは一緒だろ。」

「このやろう……ふぎ……けんなよ……。」

「あと睡眠薬。もう聞こえてないでしょうけど」

……………ブウウ———ンンン———ンンン
……………。

「何の音だよ」

変な音がした。

どこぞの読むと精神崩壊するなんていう三大奇書みたいな音が。

その耳鳴りともハエの羽音とも取れるような音で私は目覚めた。

このベッドは相も変わらずフカフカで、腹立たしくも寝るたびに最高の気分になる。

体を起こすのも億劫に思っただけで首から上だけで辺りを見回した。

すると一つの人影が動いた。

ただ、その影はおかしな形だ。

頭から二本何かが生えている。

それは、耳であった。

「……………うさぎっ…」

「っ！」

私が声をかけた瞬間そのウサ耳は飛び退いてしまった。

引き止める隙もなく部屋から出て行ったので、私はほつりと一人になる。

急な出来事にショックを受けていると、ヤブ医者が部屋にやってきた。

「お目覚めかしら」

「ああ。そして心が傷ついた」

「あら、どうして？」

「うさぎが逃げたんだよ。私を見るなりな」

「そう。警戒心が強い生き物だから仕方がないわ」

「だからってなあ……………」

そうやってウダウダ文句を言っていたら、不意に視線を感じた。

敵意は無いが、明らかに怯えている気配がする。

出所を見ると、入り口の横から顔だけを出して中を覗いている者が

いた。

それはさつき私から逃げたウサギであった。

目があった瞬間、またすぐさま顔を引っ込める。

再びダメージを受ける私だが、その一連を今度ばかりは永琳も見えていたらしい。

「もしかしてあの子？」

「ああ」

「ごめんなさいね。あの子は人間が苦手なのよ」

「なら仕方ないな」

なんせ人から逃げるのも逃げられるのもしよっちゅうだ。

うさぎは初めてだったが。

さて、本題はそれじゃない。

「元氣そうね」

「帰らせてはくれまいか」

私は永琳に頭を下げ頼んだ。

無理に帰ろうとするとまた正体不明の薬で眠らされる。

体が縮んでしまうかもしれない。

強行突破が出来ないことを示すためにわざわざ眠らされたのだから。

とんでもないヤブ医者だ。

しかし私にはその暴挙への抵抗ができない。

ここは穏便に言葉で解決しよう。

だがしかし、永琳は首を縦に振らなかった。

「実は私たちにも少し都合があるの。人助けだと思って協力してくれないかしら」

「人じゃ無いだろ。アンタらは文字通りひとでなしだ。私よりも妹紅に土下座の一つでもしてくるんだな」

「私のいう事情が、妹紅に関係あるとしたら？」

「嘘を吐くと地獄に落ちるぞ」

「生憎、私は死なないのよ。そしてこれは嘘じゃないの」

「吐かせ。これ以上妹紅をどう苦しめる。何の恨みがあるんだ」

「違うわ。妹紅を……救うためよ」

「齒が浮いてるな。そんなの信じられる訳ないだろ」

「妹紅を救うかどうかは貴方次第よ。どのみち帰れないのだから」

「帰れない？何でだよ」

「外に出れば分かるわよ」

私はギツと睨んだが、永琳はそれ以上何も言わなかった。

その見透かされたような態度に腹が立ったので、私は屋敷を飛び出て、竹林へと突っ込んでいった。

鬱蒼とした若緑の牢獄。

うねるような勾配に道と言った道はなく、私は一つの方向から逸れないよう真っ直ぐ、ただ真っ直ぐ進んだ。

鬱蒼とした竹林をしばらく歩き、やっとこさ出口へと辿り着く。

……その奥に広がる光景を見て私は驚いた。

「……なんでだ」

脱出したはずの永遠亭がそこにあったのだ。

見ると玄関で、永琳が不敵な笑みを浮かべている。

「帰れなかったでしょう？」

「何をした」

「何もしてないわ。ここは迷いの竹林よ。帰れる訳がないじゃない」

「……アンタら、卑怯だな」

「改めて言うわ。ここに入院しなさい」

「私が居なくなったら慧音が突っ込んでくるぞ」

「ここへ入れるのならね。どう足掻いても永遠亭の中へは入れないわ」

「やっぱり卑怯だ」

「お好きにどうぞ」

……結局、私は入院を余儀なくされた。

体はどこも悪くないのに。

つくづくバカな話だ。

「……暇だ」

永遠亭のとある一室のベッドの上で私は寝っ転がっていた。

眩いた声が、タバコの煙みたいに空気へと溶け込む。

耳を澄まして辺りの音を探ってみたけど、時折床が軋むような音がするだけで本当にここは静かだ。

この屋敷にはどういいうわけか時計が無い。

秒針の音すらしないと、世界に私一人だけ残されたような感覚になる。

「……はあ」

つくづく殺生な話だ。

喫煙も飲酒も禁止されて、行動の選択肢を九割方奪われた。

そういう暇を持って余した時、私は鼻毛とかまつ毛とかを抜いてそれで漢字を書くという癖がある。

今まで薔薇とか髑髏とかを書き上げた実績もある。

今日はというと、檸檬に挑戦していた。

そしてあと一画になった時。

そういう時に限って邪魔が入るのだ。

「ガサゴソガサゴソ」

「……口で言うなよ」

「バレた？」

「隠す気もないくせに」

それもそうかもねと言いながら、扉の影から一匹のうさぎがぴよぴよと出てきた。

背が低くあどけなさが残る、初めてみる顔だった。

なんとなく教室にいるヤンチャ坊主たちを思い出させるその顔が、私の方に向けられる。

「アンタがお師匠さまの言ってた人間ね。初めまして、私は因幡てあつての」

「因幡か」

「あー、その呼び方だと他にもいっぱいいるから、てるちゃんって呼んどくれ」

「てるちゃんか」

「うわ、気色わるく」

「喧嘩売ってんのか」

ケラケラと笑うてみちゃん。

お師匠さまとは、おそろく永琳のことであろう。

私が様子を伺っていると、てみは無邪気とは正反対の悪い笑みを浮かべた。

「ウワサで聞いたよ」

「何をだ」

「アンタ、異変を二回も起こしたんだって？」

「起こしてない！」

「嘘はいけないねえ。確かなスジの情報だよ」

「一番確かなスジは張本人の私だろ」

「紅霧と春節、ありや本当に傑作だったよ」

「だから私じゃないって」

たまたま異変が起きた時に居合わせただけで、私自身はほとんど無関係だ。

博麗の巫女に退治された経験もない。

言っておくが私は不幸な巡り合わせの、被害者側だ。

「まー過去の事なんかどうでもいいさ」

「自分から話したんだろ」

「……なるほどねえ」

相変わらずいたずらっ子みたいな笑顔を顔に貼り付けて、私のことをじろじろと眺め回すてる。

そう見つめられると恥ずかしいってばよ。

「お師匠さまの言ってたとおりにね」

「何がだよ」

「こつちの話ウサ」

「何だその語尾。その法則だと私は語尾に『にんげん』ってつけるのか？」

「それは屁理屈だね」

「そうかもなニンゲン」

「……やっぱりお師匠さまの言つてたとおりだね」

「よく分からないけどなんだか腹立たしいぞ」

「褒めてんの」

「嘘つけ」

「嘘かどうかなんて分からないんだから、信じた方が幸せじゃない？」

「信じる者はすぐわれるんだよ。足をな」

「なら疑う者は胸がすぐわれないね」

「それこそ屁理屈だ」

私がそういうと、呆れたと言わんばかりに肩をすくめられる。

論じる者はすくめられるらしい。

「それで、何しに来たんだよ」

「何かなければ来ちやダメなの？」

「私は病人らしいからな。悪いが面会拒否だ」

「そう言わずにさ。暇なんでしょ？とあるうさぎの愚痴をきいとくれよ」

「やなこつた」

「最近お師匠さまがさ」

「聞けよ」

「アンタこそ聞きなよ。私がただ無駄話をしに来たように見える？」

「目先じゃ判断しない主義だ」

「なら聞いてくれるんだ」

「……手短にな」

「当然」

一層の笑みを浮かべながらてゐるは近くに置いてあつた椅子に腰掛
け、身振り手振りを交えながら雄弁に舌を振るつた。

私は語り始めを神妙にする派だが、このうさぎは軽快な語り口で
あつた。

まるで怪しい勧誘のようだ。

「今からする質問に、『はい』か『いいえ』で答えてね」

「何でだよ」

「……アンタ、友達いる？」

「はい」

「ならいいや。それじゃ質問ね」

「はい」

「貴方は人間ですか？」

「はい」

「死んだ事がありますか？」

「はい」

「医者の不養生という言葉をしってますか」

「……はい」

「今、見栄を張りましたか」

「はい」

「……はあ」

喉を低く鳴らしながらため息をつくてゐる。

正直に答えろとは言われてない。

それに医者の不養生くらい私でも知ってるぞ。

散髪屋のオツサンが禿げると不安になるって意味だろ？

「はい、馬鹿なこと考えないの」

「な！」

「顔に書いてあるウサ」

一回鏡で顔を見てこようか。

なんて、こんなこと考えてるとまた顔にでるな。

すこし気を引き締めよう。

一体なにをされているのか要領が掴めないが、何となく真面目に答

えないといけない気がする。

それでも単なる暇潰しに過ぎないが。

「お師匠さまは昔、天才と呼ばれてた」

「理不尽の天才か」

「ある意味そうかもね。なんでもできちゃうんだから」

「そりや凄い」

「それにどうしようもなく優しい。患者を見たら絶対に救うんだよ」

「無理矢理だけだな」

てるは、少しだけ息を吐いて窓の外を見る。
外には竹しかないはずなのに、何かを見つめているような瞳だった。

そして視線を私に戻して口を開く。

「……アンタはお師匠さまが目をつけた人間なの」

「そりや光栄だ」

「私も、アンタには一目置いてるんだ」

「何でだよ」

「初めてこの竹林に来た時のことを覚えてる？」

初めて……。

確か妹紅の竹取を手伝うためにきたはずだ。

蝉がうるさい炎天下だったのは覚えている。

でもそれがどうしたんだ？

「あの時、不思議な体験をしたでしょ？」

「不思議な体験……あ、そうだ！」

「思い出した？」

「あの時、私はこの屋敷を見たぞ！……でも門をくぐったら跡形も無くなってたんだよ」

「アンタは、この屋敷を確かに見たんだよね」

「ああ」

「だから一目置いてるの」

「何だそりや」

「ともかくさ、私はアンタに頼みたい」

「……何をだよ」

「お師匠さまの力になってやっておくれ」

どう言うことだ。

そう返事をする時には、すでにてるは部屋に居なかった。
窓の隙間から吹く風がカーテンをふわりと揺らす。

じんわりと暑い、夏がやってきやがった。

私は久しぶりに予感する。

大変なことが起こりそうな気がする。

ああ、嫌な予感だ。

まつ毛で書いた檸檬に、最後の一笔を乗せておいた。

正確なことで定評のある私の腹時計が午後一時を指し示した時に、永琳が部屋へと入ってきた。

「診察よ。きなさい」

一体何をどう診察する気かは知らないが、左手に握られている注射器を私は見逃さなかったので大人しくついていくことにした。

廊下を渡った先にある永琳の部屋へと入れられた。

「どうぞ」

机の上に湯呑みが置かれる。

だがそれを口に含むことはしなかった。

「何かを盛られてるかもしれないからな」

「そう。冷めないうちに飲んだ方が美味しいわよ」

「冷めても美味しい茶の研究でもしたらどうだ」

「善処するわ」

永琳は自分の方に置いてある湯呑みを手に取り、ゆつくりとそれを傾けた。

渋茶を啜るなんてババくさい事のはずだが、不思議と永琳がやるそれはサマになっている。

いちいちそつが無いのは腹立たしいが。

「さて、調子はどう？」

「最高。退院しても可」

「それを決めるのは私よ」

「私はいつまでここに居なきゃいけないんだ」

「しばらくよ」

「具体的には？」

「……白状するわ。その答えは『わからない』よ」

「何だそれ」

頼りにならないな。

もつとも何か複雑な事情があるのかも知れないが、そんなの私の

知ったこつちやない。

「ただ、貴方は暇でしよう?」

「お医者サマのおかげでな」

「その医者頼みを一つ聞いてはくれないかしら」

永琳は分かりやすく居住まいを正した。

椅子に腰掛け直し、両手を膝の上に乗せ私の方へと向いた。

「貴方から逃げたうさぎが一匹いたでしょう。鈴仙と言うのだけ
ど。私はうどんげと呼んでいるわ」

「ああ、アイツか」

私が目覚めるなりどこかへ逃亡したうさぎ耳だ。

人間が苦手なのだと言っていた。

「うどんげは優秀でよく働いてくれるのだけれど、少し課題があるの
「課題?」

「貴方にはそれをどうにかして欲しいのよ」

「……お得意のクスリでどうにかならないのか」

「ならないわ。これは……薬や魔法なんかじゃどうにもならない事な
のよ」

「アンタでも無理なのか?」

「手は打ったのだけど、効果は薄かったわ」

「アンタが出来ないことを私ができるとは思えないんだけど」

「それでも無いわよ。これは貴方にしか出来ないわ」

私にしか出来ない事なんて、ムー大陸ほどしかない。

つまり存在しないって事だ。

しかし、永琳は殊更真剣な表情をする。

「……課題って何だよ」

「あの子はね、誰かに心を開くことができないの」

低く零す永琳のそれは、まるで教会の壇上に跪いて己の罪を懺悔す
るような口振りだった。

かしこまった雰囲気だったが、生憎そういうのは苦手だ。

「シャイなのか?」

「貴方たちがよく言うコミュ症……というものよ」

「コミュ障ねえ……悪いが、私はその言葉が大嫌いなんだ」

「あら、気に障ったのなら謝るわ」

「マイナスネジならマイナスドライバーだろ。それをペンチでこじ開けようとしてるんだよ。自分の感覚を押し付けておいて何がコミュ障だ」

「……そうね。多様性は大切だわ」

「それで、そのコミュ障がどうした」

「言ってるじゃないの」

やれやれと言いながら永琳はため息をついた。

ため息ばかりついてると幸せが逃げるぞ。

幸せって奴はどうにもシャイらしいからな。

「貴方にはうどんげの、いわゆる闇を暴いてほしいのよ」

「よく分からないけど、そう言うのはそつととした方がいいんじゃないのか?」

「そう言いたいんだけど、もう十分そつとしたわ。受動的な治療が無理なら積極的治療に変更よ」

「さいですか」

「無責任だけど、貴方には期待しているの」

「何をだよ」

「貴方は人妖問わず変わり者に好かれるわね」

「それでも無いと思うけど」

「自覚はないの?」

自覚も何も……確かに私の周りには変人が多いが、よもや好かれているとまではいかないだろう。

特に嫌われてるとは思わないけども、人好きのするタチじゃないし。

皆、どうでもいいって奴だろ。

スイカにかける塩みたいなものだ。

無くて困らない。

「……無自覚ほど恐ろしいものはないわね。まさか自分で気づいてなかったとは」

「まともな奴に好かれないうんだぞ。変な奴がどうして私を気にいるんだよ」

「居るじゃない。わかりやすいのが」

「誰だよ」

「風見幽香よ」

その名前を聞いて、私は思わず吹き出してしまった。

笑いが込み上げたのではない。

あまりに突飛すぎて驚いたのだ。

「何でアイツがつー！」

洒落でも笑えない！

殺されかけてるんだぞ！

その話はしたはずだし、一刻も早く縁を切りたいつてのはずっと言ってるのに。

頭を解剖してその思考回路を見てみたいね。

きつとハムスターがせつせと車輪を漕いでるに違いない。

「悪名高いあの花妖怪が、一人の人間の家へ通うなんてどう考えても異常じゃないの」

「私が一番困ってるんだよ。小指一本で私なんて殺されるかもしれないんだぞ」

「大丈夫よ。多分」

「何を根拠に」

「今、貴方は生きてるじゃない」

「今をアテにすると痛い目を見る」

「私には今しかないわ。死なないのだから」

「死ななからうが明日は来るだろ」

「日が沈んで昇る事を明日とは呼ばないわ」

「それでも未来はある」

「その根拠は？」

「経験則だよ」

そう言うと、永琳は数秒の間私のことを見つめてきた。

ほんの少しだけ、真一文字だった口が緩んだような気がした。

「ともかく、うどんげの事を頼んだわね」

……ずいぶん無責任だ。

どうしてなんだよ。

つくづく馬鹿馬鹿しい。

困ってるものをお助けする救いのヒーロー。

そんな御伽噺を信じる歳じゃない。

じゃないが……。

てゐの言葉が響く。

お師匠さまの力になっておくれ。

……ああ、くそ。

どいつもこいつも何だって私なんだ。

私はヒーローじゃない。

他人を救うなんざ出来やしない。

ただのアル中ヤニ中自堕落無職。

それが私だ。

信じるものはバカを見る。

私という大馬鹿だ。

……クソ！

もういい加減にしてくれよ！

「どうなっても知らないからな！」

「悪くはならないわ」

もうヤケクソだ。

どうにでもなつてしまえば良い。

私は机上においてある湯気の止んだお茶を勢いよく飲み干し部屋を出た。

部屋で寝つ転がってた時だ。

天井の木目を見つめながら昼飯が運ばれてくるのを待ってた。

すると不意に部屋の外に、怪しい気配を感じた。

「コソコソしても分かるよ」

「っ！」

ドアの外から、ドタバタという音が聞こえる。
おそらくまた逃げ出したのだろう。

前ならシヨックを受けて終わりだったろうけど、不幸にもそうはいかなくなつた。

なにせ永琳にしろてゐにしろ、私を頼つてしまつたんだからな。
この際どうなつたつてお構いなしだ。

「待てーいー！」

鬱憤晴らしに、すでに小さくなつていたその背中を追うことにした。

来ているのは珍妙な服。

世に言うブレザーとスカートつて奴らしい。

学校つていう、寺子屋のバツタモンで着る物だそうだ。

……寺子屋か。

廊下を走つたら慧音先生にまた頭突きをくらうかもしれないな。

いつそボコボコにしてくれば、どれだけ楽か。

まだまだ追いかけるぞ。

「待て待てーいー！」

不良門番仕込みの足で付き纏つた。

あつという間に追いつき、その肩を掴む。

……そのはずだつたのだが。

「つちよ、はやー！」

うさぎは俊足であつた。

かなりの速度で追い回しているはずなのに、距離はだんだんと広がっていく。

このまま追いつけずに、この屋敷のどこかに隠れられれば二度と見つけられないだろう。

気配を探ろうとしたが、この屋敷にはうさぎが多すぎてどれかわからない。

しかし今、見失うのはまずい。

一度追いかけて回した相手なんて警戒しまくるはずだ。

そうなつてしまつたら二度と近寄つては来ないだろう。

今ここで捕まえなくちゃならない。

そして、その願いが通じたか。

「やっとな追いついたっ……」

「ぐぬう……」

うさぎは廊下の床板を踏み抜き、そこに留まっていた。

どうやら足が抜けないようで、モゾモゾと必死にもがいている。

ここまでは幸運の範疇だろう。

そしてここからは、不幸の範疇だ。

「見ないでえ……」

右足が縁側の床板にスツポリと挟まっている。

その勢いか、スカートが綺麗にめくれていたのだ。

どうしてそうなるんだよ。

初めて聞く兎のその声は、恥ずかしそうに呻く弱々しいものだった。

手で戻せば良いだけなのに、テンパって意味不明な行動をしている。

そのくせその度に腰が揺れるもんだから困った。

断っておくが私にはやましい気持ちなんて全くない。

ありのままを言うと、白にピンクの水玉だった。

世に言うイチゴってやつだ。

まさか御存命だったとは。

何かの縁として拜んでおこうか。

……お尻を見ながら合掌するなんて、見られたら大変なことになるな。

誰もいなくてよかった。

「ふんふん」

どこからか聞こえてくる拍子の外れた鼻歌。

「まづいー」

うどんげを床から引っこ抜き、それを抱えて私は近くの部屋に隠れた。

別に隠れる必要は無かっただろうけど、焦って判断が狂った。

パンツに惑わされた私を誰が責められようか。

何一つ後ろめたいことが無くても、隠れているとドキドキしてしまうのは人間のどうしようもない所だ。

黙る必要もないので、隣で借りてきた猫……もとい兎だが、そんな風に縮こまっているうどんげに声をかける。

「何で逃げるんだ」

「ひっ……」

善良な市民と索引すれば出てくるのは私だと自負しているのだが、
どういう訳かこの兎はまるで悪魔に囁かれたような反応をする。

私もこれまた堂々としてれば良いものを、声を潜めたせいで余計に
変な雰囲気になってしまった。

「落ち着けて。私の顔をよく見ろ、ほら。優しさあふれる聖母フェ
イスだろうが」

手首を掴んでぐっと顔を近づけた。

どうして私がここまで躍起になっているのかは分からない。

ただ、人間ならともかく兎にまで怖がられるのは嫌だった。

「私は何の変哲もない、かよわい美少女だ。そう強張らないでくれよ」
ペけペーん、ここで役に立つ知識をお教えしよう。

なかなか周りの人と打ち解けられない内気な諸君。

そういう時は勇気を持って素直になるのがグッドだ。

あの有名な方の言葉を借りればいい。

「恐れることはないんだよ、友達に成ろう」

「あ、あの……」

意を決しましたと言わんばかりの声で、やっと返事を引き出せた。

諦めない心もまた、人付き合いでは大事なのだ。

私はモナリザのような微笑みを浮かべながら二の句を待った。

数秒経つてうどんげは、うさ耳を広げた折り鶴みたいにシワシワに
しながら、恐る恐る言った。

「し、少女では無いと………思います」

よし。前言撤回だ。

てめえとは天地が割れても友達にならないからな！

野郎が死ぬまで少年のままのように女はいつまでも美少女だろ。
さてはお前、上司とかに「私ってホント若いだけで」とか言っちゃ
うクソ野郎だな。

この野郎、私もまだまだピチピチだ！

……多分。

ああ、辞めてくれその眼差し。

まるで骨董品でも見るみたいなさ。

私は古いだけが取り柄の壺か？

そういや寺子屋の生徒に言われたな。

自分のことを若いと言い始めたら年増だって。

なんと残酷な理論だ。

男は女風呂に入りたいと思った瞬間から、女風呂に入っ
てはいけな
いみたいなさ。

はい、軽くメランコリー。

いや確かに最近肉より魚の方が美味しいけどさ。

「って違ーうー！」

「ひいー！」

「怖がらなくていい。安心しろ。安心しろよ、イチゴパンツ」

「なー！」

「さつきから『ひいー！』だの『なー！』だの、一文字でしか喋れないのか。

私の目をよく見ろって、ほらー！」

「め、目を合わせたら……大変なことに」

「なるか！目からビームなんて出せないよー！」

「あつー！」

逸らす顔を無理くりこちらに向けて、その両目をばっちり
と凝視し
てやった。

瞳孔が開いているのがよく分かる。

まるで旬のリンゴみたいな、真紅の瞳だった。

……ブウウー……ンンン……ンンン

またこの音だ。

この屋敷に来てから、二度目になる。

どこからか祭囃子のような音が鳴り響いてきた。

まるで脳髓の奥を黄金虫がはためくようだ。

チャカポコチャカポコ……スチャラカ、チャカポコ。スカラカ、チャカポコ。チャカポコチャカポコ。

頭天が割れる。

おどろき混乱していると、牛やら鳥やら地蔵、その後塵を天狗や鬼、三步遅れて去年やら冥王星なんかドコドコズンズンと、大名行列のように私の髪先を掠った。

ああ……私もいかねば。

恒久の三角下水道が一億総プルチルを願う。

怠惰の絢爛を閻魔様が許さないなんてオセアニアじゃ常識なんだよ。

さあさあどこまでも、浮かれ憂世の憂さ晴らしを。

右足、腓骨、三半規管——つてください！

「起きなさい！」

ん？

何だこの声は。

頭をぶん殴られるような痛み。

狂った世界が元に戻った。

「大丈夫!? ちょっと！聞いてる!?!」

「っは！私は何を！」

「あ、正気に戻ったわね」

「ふう……助かったよ、モヨ子」

「まだ狂ってる！よーし、もう一回……」

後ろ足を大きく引いて握り拳を振りかぶる兎。

小さいオモチャのような手が私の鼻っ面をつてギヤア！

「何すんだ！」

「正気に戻った？」

「……何だか顔がやたら痛いんだが」

「気のせいよ」

そうか、気のせいか。

手で鼻の下をなぞったら血で真っ赤になっていたのも思い過ぎいだな。

その目がバツチリと泳いだのを私は見逃さなかったぞ。

「しかし一体……あれは何だ？薬中の幻覚でも見せられたみたいだ」

「そう、そうなのよ！」

耳を真っ直ぐ立てながら、嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねる兔。

兎なのだから飛び跳ねて当然だろうが、妙に興奮している。

コイツはさつきまでとは別人か？

敬語じゃなくなってるし。

「私の目を見たら狂気に侵されるの」

「な！」

そういう事はあらかじめ言っとけよ！

とすると……あのドンチャン騒ぎしてた地蔵やはコイツの目を見せいつて事か。

夢と目覚めの間みたいなの、異常なのにそれを認識できない感覚だった。

あれはとんでもない、まさしくトチ狂った光景だった。

二度と見たくはない。

「それで人の目を見るのが無理だったんだけど……アンタのは、見ても何ともないのー！」

「え？」

「ほら、こうやって目を合わせてもなんともない！」

「ん、どれどれ」

覗き込まれるようにして、うどんげの瞳を見た。

まるで炎のような、情熱的な瞳だった。

……………ブウウ……………ンンン……………ンンン……………

またこの音だ。

この屋敷に来てから三回目……って痛！

「殴るなよ！」

「また狂いそうだったから」

「誰のせいだ、誰の」

「理由はわからないけど、貴方の目は見ても怖くないのよ！」

「私はとんでもなく怖いよ」

「私の瞳を見たら相手は狂っちゃうし、私も目を見るのは怖いから人と目を合わせないようにしてたんだけど……凄いわ！」

「うん、分かったから。その輝く瞳をこっちに向けないでくれるかな」
ぴよんぴよんと飛び跳ね、そのたびにスカートがフワフワと捲れる。

そんなものに見惚れている余裕なんか無い。

必死に目を合わすまいと横を向いた。

そんな私の恐怖など汲み取りもせず兎はずいずい顔を近づけてくる。

だからやめろって！

「あ、鏡」

「え？」

二人して、部屋に置いてあった鏡を見る。

ご存知のとおり鏡は光を反射する。

そしてそこに写っていた鈴仙と、バッチリ目があったってしまった。

「あああああ！」

……………ブウウ……………ンンン……………ンンン……………

「ひどい目にあった……」

地獄すら生温いモノを見た。

ふんどし一丁のオッサン百人に追いかけて回される幻覚だ。

「少しテンションが上がってしまったわ。ごめんなさい」
しよぼんとする兎。

今はサングラスをかけさせている。

単純な対策法だが、これならば事故は防げるだろう。

耳が頭の上の方にあるのでかけにくそうだったが、テープでガチガチに固定しといてやった。

「改めて、私は鈴仙よ」

「鈴仙？うどんげじゃないのか？」

「……フルネームだと、鈴仙・優曇華院・イナバっていうの」

「鈴仙うどんげ……って長いな。どこまでが名字だよ」

「アンタは貴子よね」

「ああ」

「なら貴子って呼ぶわ」

「そりやそうだろ。他の呼び方があるのか？」

「タカピーとかタカチヨンとか」

「やめろやめろ、恥ずかしい」

「うーん、良いと思っただけど」

「ネーミングセンスが死んでるな」

「そうかしら……」

鈴仙の耳が垂れ下がる。

うどんげってよりかは鈴仙の方が呼びやすい。

そう呼ばせてもらうことにしよう。

「しかし……本当に驚きだわ」

「そんなにか？」

「私が目を見ても大丈夫なのは貴方と……姫様だけよ」

「姫様？」

「そう。この屋敷にいる輝夜様という人のことよ」

「輝夜だと!？」

そいつは……妹紅の！

そうだ、考えれば当然のことだ。

何を今まで呑気にしてたんだ。

ここに、妹紅から死を奪った奴がいる。

そう妹紅から言われていたはずなのに。

「輝夜はどこにいる」

「え？多分……お部屋にいると思うけど」

「輝夜の部屋つてのはどこだ」

「……何を考えてるか分からないけど、やめといた方がいいわ。姫様は強い。そして何より……残酷よ」

「それでも一発ぶん殴ってやんなきゃ気が済まない！」

何の罪もない人間一人から何もかもを奪い去った。

許せない。

安心しろ妹紅、私が代わりに死んでやる。

輝夜の顔面をぶん殴ってからな。

「聞きなさい！」

「ついた！」

脳天に衝撃が走る。

外角高めを芯で捉えたみたいな、気持ちのいい音があった。

「貴方に、何ができるのよ」

鈴仙は宥めるような、それでいて責め立てるように言った。

その一言は私の中にあつた煮えたぎる怒りを、あつという間に冷ましてしまった。

そして冷えた頭に湧くのは、悲しい気持ちばかりであつた。

「私は……弱い」

強い奴らの一挙一動にオドオドしてるような情けない弱者だ。

そんな私に何ができるのか。

悲しく笑う死ねない少女一人の恨みすら晴らせないような、クソつまらない人間だ。

拳句、人間ですらなくなっていると。

一体何をのぼせ上がっていたんだ。

私が誰かを救う？

笑えるな。

一番救えないのは私だ。

数いようもない馬鹿だ。

……でも、それでも。

「妹紅の無念を……晴らしてやりたいっ……」

それは我ながら、情けない声だっただと思う。

泣かないことが精一杯の土俵際だった。

「そんな事をしたって、意味がないわよ」

「理由はあるだろ」

「そうだ、理由はあるはずだ。」

理由……。

同情なんかじゃない。

可哀想だからじゃない。

じゃあ……何のためだ？

「復讐なんてすべからく無意味よ。これは師匠の受け売りだけど」

「……そうかもな。他人の憎しみで復讐しようなんざ、私が間違ってたよ」

頭が冷えて、怒りも無念も鳴りを潜めた。

許すってことが、大切なんだろう。

どんなバカでも分かることだ。

「それでね？きつと、貴方なら出来ると思うのよ」

「……何がだよ」

「姫様を、助けてあげて」

「ただっ広い永遠亭の、とある一室にそいつはいた。」

「アンタが輝夜か」

「貴方は？」

長髪で前髪パツツン、十二単を着込んだそいつは、やたら美人で……そんでもって怖い顔をしていた。

見かけは日本人形が息を吹いたような別嬪さんだが、相對してみると伝わってくる。

蛙を爆発させて喜ぶような無邪気な悪意と、人を不幸たらしめてはあくどく笑うような陰湿さが。

「永琳の患者だ」

「頭の病気？」

「さあな、魂の病気だ」

袖で口元を隠して目元を緩める輝夜。

動きの一つ一つが日舞みたいに綺麗だが、それがかえって歪に感じた。

「何のようかしら？」

「アンタを助けに来た」

「私を？それは一体どういうこと？」

「ブレザー着た兔がそう言ったんだよ」

「……貴方は何者？」

「哀れな人間だ」

不意に、感じていた殺気が無くなる。

どうやら輝夜が発していたものらしい。

窓の外を見ながら、輝夜が言う。

「そうねえ、確かに困っているわ」

「正直私は、ずっと困つとけばいいと思ってる。永遠にな。けど頼ま

れたんだよ。だからここに来た」

「英雄気取りかしら？」

「気取らせたのは、アンタらだ」

輝夜は私の目を見て、しばし固まった。

呆れているのか、口をあんぐりと開けている。

間抜けな顔だったが、サマになっている。

つくづく美人って奴は得だ。

しばらく、といってもほんの数秒だが経って、輝夜は顔を崩して大

声で笑った。

「あははははっ、なんて愉快なのかしら。そうね、私は困ってるわ。そ

して貴方はそれを解決する。ああ、やっぱり人間は可笑的い」

笑いすぎて、目から涙が出ている。

それでも笑うのを止めない輝夜。

「てるは永琳を救えと言った。永琳は鈴仙を、鈴仙は私を！そして」

「……つまさか！」

「そのまさかよ、私はてるを助けてあげてと貴方に頼むわ」

「な、なんだそりゃ」

とんでもないことになったぞ……全くの四角関係。
しかも……とんでもない欠陥を抱えた四角形だ。

「貴方は解決できるのかしら？この難題を」

「解決も何もそれって……」

「そうよ、この円環は終わらない」

つまり、四人はループしている。

てる↓永琳↓鈴仙↓輝夜↓てる……。

そして、このループは終わらない。

何故なら……。

「誰も、悩んでなんかいない」

四人とも他人のことを心配しているだけで、何一つ悩みなど抱えていないのだ。

解決する問題がないのだから、永遠に解決できない。

「そう、私たちは囚われ続けるの。これが永遠亭を渦巻く解決不能の難題よ！さあ、貴方に解けるかしら！」

「そりゃ、解くのは簡単だろ」

「え？」

驚くまでも無いだろ。

単純な話だ。

なにも特別な事なんて必要ない。

「全員にこう言えればいい。まずは自分のことを心配しろってな
「な、何よそれ」

「こんなの難題でもなんでもない。ただのコミュニケーション不足だ
ろ」

「そんなの……」

「心配ならな、本人に直接そう言えればいいんだよ。まったく、これが真相
相だったとはな」

「……面白くない」

不機嫌そうに輝夜は唸った。

頬を膨らましている。

今時そんな怒り方をする奴はいないだろ。

「期待して損をしたわ。そんなくだらない結論を出すなんて」

「笑えないか？はっはっは、そりや愉快だ。アンタみたいな奴、楽しませたくもない」

「何でそんな事を言われなきやいけないの！」

「私は妹紅のダチだからだ。アイツを悲しませたお前の余興に付き合ってたまるか」

「……うろうう」

うろう？

……何だろう。

愉快的な気持ちが出た。

それに果てしなく嫌な予感がする。

「うわあああああん！えいりいんっ……」

「えっ、ちよつと」

さっきまで大声で笑っていたかと思えば不機嫌になり、そして輝夜はワンワンと泣き出した。

どこからかドタバタという足音がする。

「っ姫様！」

襖が勢いよく開けられて、鬼のような顔をした永琳が部屋へと入ってきた。

「うう……永琳……意地悪されたよお」

「なっ！まさかこの人間に!？」

「……うん」

ゾゾゾつと背筋に悪寒が走った。

恐る恐る永琳の方を見ると、般若がそこにいた。

「……」

声にならない叫びをあげ、永琳の右拳が私の顔面を打ち抜く。

ああ、今日はよく殴られる日だ。

「……ニヤ」

っああ！

こいつ今笑ったぞ！

この性悪女があ！

「貴子と書いてきじと読む。キジも泣かずは打たれまい……かしらね。愉快愉快」

輝夜のその声が、消えゆく私の意識の中でやたら鮮明に聞こえた。

月が落ちたら運の尽き

人間の命は、何もしないには長すぎるが何かをするには短すぎる。どこぞの虎になったエリートがそう言ってたか。

本当にそうだと思う。

人生は、人里の娘でいるには退屈すぎたが……魔法使いになるには余りにも刹那すぎる。

魔法の森に移り住んでもう何年か。

親と喧嘩して里を出てからどれだけ経ったっけ。

しがらみを捨てて自由になった私の人生は、順調なのだろうか。

努力は海を進む船に喩えられる。

景色は変わらなくても、少しずつ進んでいるしいつか絶対目的地にたどり着くのだと。

しかし、全ての船が羅針盤や磁石を持っているわけではない。

実験で失敗して髪を焦がすたびに、私の脳裏にはある考えがよぎる。

『私には、才能が無いのではないか？』

底意地の悪い奴が囁くように、どこからか聞こえてくる声。

その声ができる度に私は頭を振って気合を入れ直すのだ。

なぜなら、解決する答えを持っていないから。

頭から追い出すしか、対処法がない。

それを否定するだけの材料を、私は持っていない……。

「嫌な気分だぜ」

宴会で馬鹿騒ぎをした翌朝みたいな、頭が痛くなる倦怠感。

そう言うのに襲われる日がたまにある。

吐き気もするし、景色は揺れる。

何より、心の底から無気力感に苛まれる。

そんな時は気晴らしに、外を飛び回るのだ。

頬を切る風が、嫌な気持ちちを吹き飛ばしてくれる。

「……その術式では制御が難しいわよ。この部分は書き換えた方が良いわ」

「うーん、そこを削ると火力がなあ」

「十分じゃない。このままでは余りにも必要限度を超えているわ」

「そうか？……それならこう言うのはどうだ？」

「それだと……」

紅魔館の昼下がり。

もはや顔馴染みとなった大図書館で、いつものようにパチュリーから魔法についての教えを受ける。

この時間は貴重だ。

パチュリーの話は、言い方とか教え方とかこそ気に食わないが、純正なだけあって内容は一級品だからだ。

紅霧異変の時からだから、結構長い付き合いになる。

だいたい一年位か。

基本の基本から教わって、この夏やっとな術式の構築を教えて貰うこととなった。

最初は私の持っているスペルカード、全部を駄作とこき下ろすもんでぶっ飛ばしてやろうかと思ったが。

「方向性はいいけど、全体的に要改善ね」

「マジかー。自信作だったんだがな」

「まだまだ未完成ね」

「……完成間際まで来てる感覚はあるんだ。けど、あと一つ何が足りない。そんな感じなんだ」

「……ラストピースを探すよりも全体を直しなさい。一つ一つがどこか荒いわ。もっと工夫をできる箇所がある筈よ」

「そうかい。善処するよ」

「……ねえ、魔理沙」

「何だよ」

「貴方は……いや、何でもないわ。とにかく頑張りなさいよ」

「何だそれ、気色わるいな」

「言っても聞かないと思って」

「そうかもな」

「さ、今日はここまでにしましょう。この後レミイとお茶しなきゃなのよ」

「ん、分かった」

「あら、えらく素直ね。嫌味の一つでも言うかと思ったのに」

「早くこの式を書き換えたくてな」

「殊勝ねえ。あ、そうそう。咲夜がお菓子を作っていたから、いくつか貰っていきなさい」

「いらねえよ。あんな化物が作ったのなんて」

「あら、いいの？この後アリスと会うんでしょ」

「……何で知ってんだよ」

顎を上げてオーホツホと笑うパチュリー。

やっぱりコイツは性格が悪い。

魔女の魔は、悪魔の魔だ。

性根のところから腐ってる。

その一から十までお見通しみたいな感じが気に食わない。

いつもより多めに本をパクって行ってやろう。

魔理沙が帰った後、大図書館で小さくため息を吐く者が一人。

いや、一魔法使いがいた。

「はあ……」

「あれ、お疲れですか？パチュリー様」

小悪魔がお茶を出しながらそう問いかけた。

はて、なぜそう思ったのかとパチュリーは勘案し、そしてああ、自分はやほど酷い顔をしているのだろうと答えを出した。

「ここらの夏は本当に蒸し暑いわね」

「温暖湿潤気候ですからね。西欧とは違います」

「分かってるわよそれぐらい。そうじゃなくて……夏になると人間までカビが生えたようになるの」

「パチュリー様がそれを仰いますか？」

「どういう意味よ」

なんと失礼な奴だ。

なぜ自分はこんな奴を召使えているのだろうか。

そうだ、昔悪ふざけで召喚したんだ。

それで魔界に帰そうと思ったらワンワン泣き出すものだから、断りきれずに契約してしまったのだ。

何という悪徳なやり方に騙されたのだろうか。

ああ、過去の自分が恨めしい。

「お休みになさいますか？」

「いや、いいわ。体は疲れてないの」

「では心が？」

「心も疲れてないわね」

「とすると、何処がお疲れでしょうか」

「さあ、見当もつかないわ」

「そうですか……」

そのまま何も言わず、小悪魔は去った。

時計の針が午後を告げる。

ようやく静かになった。

広大なこの館の中で、唯一私だけの空間。

これでようやくゆっくりとお茶を楽しめる。

「パチュリー様」

「……なにかしら」

リップトンを口に含みかけた所で、無粋に後ろから声をかけられた。

小悪魔は遠くに行っている。

この声は咲夜だ。

「魔理沙がパチュリー様の分のお菓子を盗んでいきました」

「多めに作っておいて頼んだはずよ？」

「はい。そして多めに盗まれました」

「何してんのよ」

背中越しに喋っているから見えないが、このさぞダメイドは真剣な表情をしている事だろう。

見なくてもわかる。

どこぞの馬鹿門番が育てたせいで、よく言えば大らか……悪く言えば少し抜けているのだ。

おかげで今日のお茶会はお菓子抜きになってしまった。そうなる……ああ、面倒なことになりそうね。

「レミイの分は？」

「辛うじて残っております」

「そう。なら大丈夫かしら」

「はい……御気遣い感謝いたします」

「はいはい。さつさと仕事に戻りなさい」

「失礼いたします」

全くドイツもコイツもイタリアも。

人がゆっくりしている時ぐらい、空気を読めないのかしら。

お菓子ならいつだって食べられる。

せつかくの紅茶が冷めてしまったじゃない。

熱いうちが美味しいのに。

……まあ良いわ。

ようやく一息つけるわね。

「パチュリーさん」

「……………っ！」

「っ痛い！本を投げないでくださいよ！」

「アンタねえ、アンタねえっ！」

「ちよ、何ですかその魔法陣！」

「……はあ、もう良いわ。何の用？美鈴」

「魔理沙からこれを取り返して来ました」

誇らしげに出された美鈴の手には、何冊かの魔導書が握られていた。

どれも私にとってはあまり不必要な、基本の内容しか書かれていないもの。

魔法術の入門編と言える代物だ。

「それは——」

「怪しい気配がしたものですから、調べてみたら案の定ですよ。しか

しこの紅美鈴、ネズミ一匹逃しません！」

「……ば」

「ば？」

「バカ！それは私が貸したのよ！取り返してどうすんの！」

「え！」

「えっじゃないわよ！」

……全く、このバカだけは本当に。

余計なことばっかりしてくれる。

いつそクビにしてやっただらいいのよ。

どこぞの呑んだくれみたいに。

「……そこに置いといて」

「了解です」

「……なに座ってんのよ」

「本でも読もうかと思いましたが」

「仕事しなさいよ」

対面の椅子に腰掛ける美鈴。

何を居座る気にいるのかしら。

この館の門番は年中無休で終日営業中のはずなのに。

「ところで、魔法の伝授は順調ですか？」

「……そうね。思ったより飲み込みが早いわ」

「そうですか。いやあ、最近どんどん強くなっていくものですから、門番としても大変ですよ」

「ふん、よく言うわ。そう思うなら本気を出せばいいじゃない」

「私は至って本気ですよ」

「魔法使いの私でも、それが嘘って事くらい分かるわよ」

「嘘じゃ無いですってば」

それが嘘じゃないなら、嘘の定義を教えて欲しいわ。

私は知っている。

あの悪名高い八雲の式神を、美鈴が拳でねじ伏せたことを。

確かに、魔理沙の進捗ぶりには目を見張るものがある。

けどそれは、美鈴からすれば取るに足らないものだろう。

わざわざそんな事を言うためにここへ来たのか。

職務怠慢も良いとこじゃない。

「ふう……私も長い事生きて来ましたが……人間というものは難儀です
ねえ」

「何よ急に。年増みたいな事を」

「はははっ、年増ですか。そうかも知れませんねえ。長生きすると、
氣を覚っていれば相手の心なんて簡単に読めちやいます。そしてあの
娘は相当に荒れている」

「あの年頃は皆そうでしょう」

「強い葛藤と焦り。後悔や無念。年頃にしても思い詰めすぎのような
氣がするんです」

「人の道を外れたんだもの。当然のことよ。それとも、貴方はそれが
心配だとも言うの？」

「ええ。放ってはおけません。だから貴方に伝えに来たんです」

「だから私にどうしろってのよ。そんなのアイツの問題じゃな
い」

「人間を辞めるなんて、それこそ辞めた方がいい」

「……魔理沙にそれを言ったら怒るわよ」

「だから貴方に言ってるんです。どうか、進む道だけは間違えないよ
う教えてあげてくださいね」

「そんなのアイツ次第よ」

「貴方次第ですよ」

そう言い残し、快活な笑みを少し浮かべて美鈴は図書館を去った。
一人になると心なしか、図書館が静かになったような氣がする。

私はレミイとの茶会までやる方なく、魔理沙から取り返したという
本を見た。

そこである事に気づく。

「……これは」

何度も開いたのだろう。

ページに癖がついていて、勝手にその項が開いた。

魔理沙が何度も見たであろうページ。

そこには……

『魔法出力の上げ方』

と書かれている。

「あんのバカ……はあ」

全く、私まで心配しているのだろうか。

吐息ばかりが溢れてしまった。

魔法の森に、とある変わり者が営むなんでも屋がある。

霧雨魔法店と題打たれたその店は、日光を嫌って影に蔓延るキノコのように、陽射しの当たらぬ所でひっそりと佇んでいる。

人里から遠く離れた、そんな胡散臭い店にやってくる酔狂な客などいるわけも無い。

少なくとも人間は、ここに訪れはしないだろう。

しかし最近、その店に何度も顔を出す者がいた。

「……また来たのかよ」

「何？客を邪険に扱えるほどここは繁盛しているのかしら」

「金を払わない奴にもてなしは無いぜ」

「料金分の働きのしてくれるのなら払うわよ」

店の番台に頬杖をつきながら、魔導書を読み耽る魔理沙。

雑に重ねられたそれらがもつぱらパチュリーからの盗品であることとは言うまでも無い。

魔理沙は面倒くさそうに舌打ちをする。

アリスは部屋の有様を見てにべもなく言った。

「少しは片付けたらどう？…これじゃまるで物置みたい」

嫌味を隠そうともしないアリス。

彼女は以前魔理沙に敗北を喫してからというものの、付き纏っては憎まれ口を叩くタチの悪い姑のような生活を送っていた。

プライドの高い彼女は、負けを認めようとはしない。

いや、できないのだろう。

その幼稚な防衛機制には魔理沙もほとほと呆れ果て、とうとう相手

にすらしなくなっている。

「ここは私の家だ。どうしようも勝手だろ」

「自分の物なんてほとんどない癖に。全部盗んできたんでしょ」
「借りてるだけだ。死ぬまでな」

「ならここで殺そうかしら」

「……冷やかしに来たんなら帰れ。私は忙しいんだよ」

「新しい魔法の研究？精が出るわねえ」

「けっ。とびつきりの奴が出来るぜ。今に見てろ」

「ふうん……あ、そこ間違ってるわよ」

「え、どこだ？」

手元に置いてあるペラ紙を見通す魔理沙。

本の内容を読みつつ考えをまとめていたようで、紙面上に魔法陣やら術式やらが書かれている。

アリスはその中の一文を指さして言った。

「その構文だと魔力の消費が激しいわ」

「バーカ。こうじゃなきゃ火力が出ないだろ」

「バカはどつちよ」

お前だろ、と言いながら魔理沙は薪に火をつけた。

コーヒーを淹れる用のお湯を沸かすためだ。

ミニ八卦炉からチリチリと小さな火が放たれる。

「……ねえ、そのマジックアイテム、ちよっと見せてくれないかしら」
「ん、これか？」

アリスはそのミニ八卦炉を指さした。

壊すなよと言いながら、それを雑にアリスへと投げ渡す魔理沙。
使い古されたそれをマジマジと見て、アリスは物思いに耽る。

「……それがどうかしたのか？」

「貴方、火を起こすときにこれを使っているの？」

「ああ。便利だからな」

「……ちよっと試して良いかしら」

「何をだよ」

魔理沙の質問に返事もせず、家の外へと出て行くアリス。

不審に思いつつ、ミニ八卦炉の行方を追って魔理沙もそれに追従した。

家の裏の少し開けた場所に出る。

「何をするつもりだ」

「私も火を起こそうと思つて。貴方はいつもどれぐらいの威力なの？」

「うーん。どれぐらいつつつてもなあ……本当にちよびつとだぜ」

「ちよびつと……ねえ」

眉を潜めながらアリスは空に向けたミニ八卦炉を、両手で強く握りしめた。

ゆつくりと目を瞑って深く息を吐き、小さな火を起こすだけの魔力を慎重に込めた。

そして魔法は放たれた。

辺りがどよめく。

「バカー！カ入れすぎだっー！」

「……やつぱり」

あろう事か、ミニ八卦炉からは七色に輝く強烈な閃光が放たれた。

光から数秒遅れて地鳴りのような音が響き、囀っていた小鳥たちが一斉に空へ飛びたつ。

低い残響音がざわめきながら森の木々へと消えていった。

その光景の余韻に浸る間も無く、アリスは魔理沙の手首を掴む。

「魔理沙、ちよつと来て」

「何だよ」

「いいからそこに座つて」

家の中へと戻り、向き合うように座る二人。

アリスは殊更に真剣な表情を浮かべて、魔理沙のことを指さした。

「いい？耳の穴かつぽじつてよく聞きなさい」

「何だそりゃ。らしくもない」

「今、貴方の……才能とも言えるものを発見したわ」

静寂の中。アリスが重々しくそう告げる。

才能、という言葉に思わず魔理沙は心臓が飛び跳ねた。

「私の……才能だつて？」

「ええ。喜びなさい」

「もし適当言ってるんなら、殺すぜ」

「生憎、貴方じゃ無いの」

「それで……一体何なんだ。お前の言う私の才能つてのは」

「貴方は、魔力の操作においてかなり高い適性を持っている」

「……どう言うことだ」

魔理沙の質問には答えず、アリスは持参していた自身のカバンから、少し大きめの物体を取り出した。

まるで模型のように正確でありながらメルヘンチックな姿をした、それは人形であった。

アリスが指を鳴らすと机上に置かれたその人形は立ち上がり、トテトテと歩き出した。

魔理沙の元まで進み、ペコリと綺麗なカーテシーをする。

一連の動作には、全くの淀みも無かった。

「さあ、やってみなさい」

「はっ」

「指から糸を出してこの子に繋げるイメージよ」

「……やれつつつてもなあ」

見様見真似で出来るものではないだろうと思いながら、真剣なアリスを止めることもできず魔理沙は言う通りにした。

魔力を指先から放出する要領で、上海人形に神経を繋ぐ。

すると、アリスほどでは無いものの、人形がぎこちなく動き出した。壊れたオモチャのように歪ではあるが、確かに動いたのだ。

「おお、やってみると出来るもんだな。流石に何体も同時は無理だけど」

「……やっぱり、そうよー」

「何だよ……まさかこれが才能なんて言うんじゃ無いだろうな」

「ええ、そのまさかよ。この技をすぐさま出来るなんて、かなりの才能と言えるわ」

「何だそれ！期待して損したぜ！こんな子供騙しが才能だど!？」

「こ、子供騙しなんかじゃないわ!」

「こんなの出来ない奴の方がセンスないんだよ」

「……人形だけじゃないわ、そのミニ八卦炉が証拠よ」

「これか?」

「ハツキリ言つて、それはオモチャ以下のガラクタよ。まして魔力の制御なんてできたものじゃないわ」

「……ガラクタなんかじゃねえよ」

「宝物だとしてもよ。事実私は、それで火を起こすなんて嫌。家が吹き飛ぶもの」

アリスの言葉を受けて、魔理沙はしばし黙った。

複雑な感情が湧いてきた。

確かに才能があるとと言われて、悪い気はしない。

むしろ、ここ最近心に立ち込めていた暗雲から、一筋の光明が刺したような気分だ。

しかし……そんな才能、欲しいとは思わなかった。

「魔術の制御……」

「ええ。その才能を磨けば、私の次くらいにはなれるわよ」

「負けた癖に」

「負けてない!」

「あーそうかよ」

「真剣に聞きなさい! 貴方はこのまま望みのない高火力ばかり追い求めるのは辞めて、魔法制御に重きを置くべきなの!」

「望みがないだど!? ふざけんな! 何でお前にそんな事言われなきゃいけないんだ!」

「夢を見るのは自由よ。でもそれを追い求めるのには資格がいるの。貴方はせっかくの才能を無駄にするつもり?」

「うるせえ! ぐちぐち上から物言いやがつて……鬱陶しんだよ! 帰れ!」

「っな!」

「お前なんざにとやかく言われたか無いんだよ! さっさと出てけ!」

「な、何よ……私は貴方の為に……」

「余計な世話だ！」

「……ふん！言われなくても帰るわよ！」

勢いよく戸を閉めて、アリスは去っていった。

怒鳴り合いからの急な静寂が、むしろ魔理沙の激情をいたずらに煽った。

帰り際にアリスが零した涙など、魔理沙は微塵も気づくことは無かった。

……最悪の気分だ。

吐き気がするぜ。

何が才能だ。

何が魔法制御だ。

そんなもん、燃えないゴミに捨てとけ。

私は魔法使いだろうが。

ド派手な技を撃ちまくる。

小手先なんざ二流の技。

火力こそが、私の正義だろ。

……本当にそうなのか？

私……そう、私だ。

よく考えてみるよ。

才能もない。

望みもない。

ただの夢見る普通人間。

——違う。

私は、努力をしているはずだ。

寝る暇も削って、魔導所を何冊も読んだし、毎日毎日研究に明け暮れた。

下手すれば本当に血が滲んでるだろう。

夢を叶えるために全てを注ぎ込んだ。

まるで馬鹿みたいに。

……何のためだ？

私は……何のためにこんな思いをしている。

私は何だつてやってきた。

地位も名誉も捨てた。

親を泣かせて里を飛び出た。

何もかもを犠牲にしてここまでやってきたんだ。

報われないはず……ないだろ。

それなのに何も得られないなんて……そんな事があつてたまるか。

何もかもを捨ててきたんだろ。

全ては目標のため。

私自身の望みを叶えるため。

それだけを考えて生きてきた。

全てを投げ捨ててきた。

……まだ、足りないのか？

これ以上何を捨てれば……何を。

今の私に残っているのなんて、ケチなプライドだけだ。

もう賭する物なんざ……。

いや……そうだ。あるじゃないか。

それもとびっきりの物が。

これが答えだったんだな。

コレを組み込めば……この魔法は完成する。

やっとなストピースがわかつたぜ。

待つてろよ……霊夢。

数ヶ月前の、幻想郷から春が失われた春雪異変。

その黒幕、西行寺幽々子の元へ紫は訪れていた。

しばしばお茶を飲みにごこへやってくる紫だが、一目見ればいつも

と違う様子なのが分かった。

大妖怪らしい余裕綽々とした態度は健在だが、その顔には鬼気迫る威圧感が漂っていた。

挨拶も飛ばして屋敷の客間へ入ると、妖夢から差し出された茶も飲まずに、対面に座る幽々子にいきなり本題を告げた。

「私の所に一通の手紙が届いたわ。差出人は、天狗の首領」

「……その手紙には何と？」

「幻想郷、滅亡の危機よ」

「……滅亡？」

突飛な単語に幽々子は呑気に茶を啜る。

紫は静かに頷いた。

「幻想郷に……月が落ちる」

「何よそれ。なりすましの悪戯？」

「この手紙には天魔の判子が押してある」

「……それってつまり」

「信憑性が、高いということ」

ようやく、のんびりとしていた幽々子の雰囲気が変わった。

冷たく乾いた殺伐とした静寂が二人の間を通り過ぎた。

「これから、空前の大異変が起きるわ。幽々子……貴方の力も必要になる」

「本当、退屈しないわねえ」

「結末は私にも読めない……それはそれは素敵な演目となる事でしょう」

扇子で口元を隠した紫。

決して、笑ってなどいなかった。

果たして何が起こるのか、誰にも分かるはずなど無いのだから。

果てもさても物騒な、前代未聞の大異変。

賢者も亡霊も、悪魔までもが名乗りをあげる。

その結末は神にも読めない。

幕開けは、博麗神社であった。

「……そろそろ来ると思ってたわよ」

「なら話は早いわね」

星が燦然と煌めく夜、幻想郷は静かであった。

ぼんやりとした月明かりばかりが照っている。

紫はスキマから出て境内に足をつけた。

その後ろから、八雲藍が姿を覗かしている。

「あの月を見てごらんなさい。なんと歪なことかしら」

「さあ、私にはいつもと同じに見えるけど」

「妖たちは皆血が沸いているわ」

「そう……面倒ね」

「言っておくわ。この異変には失敗など無い。有るのは解決……あるいは死よ」

「私にはいつだって失敗なんて無いわよ」

「頼もしいこと。最後までせいぜいその威勢を保てるようにしなさいな」

紫の皮肉には全く耳も傾けず、霊夢は鋭い眼光を薄い雲がかかる空に向けた。

そして険しい顔になる。

「……何を仕掛けたのよ」

「あら、気づいてたの。流石は霊夢ね」

「大方、夜を終わらせない術かしら」

「分かっているなら説明は不要ね。さて……参りましょうか」

「……あ、ちよつと待って！」

空へ舞う紫の足を止めて、霊夢は家の中へ戻っていった。

しばらくして、安心したような顔で戻ってくる霊夢。

「ガスの元栓、切ったかどうか忘れちゃって」

「そう……それで、ちゃんと切れてたのかしら？」

「危ない危ない、付けっ放しだったわ」

「確認しておいてよかったわね」

「あー！」

「……どうしたのよ」

「確認するだけして切るの忘れちゃった！ちよつと待ってて！」

「……あれが巫女で幻想郷は大丈夫なのかしら」

紫の愚痴は、霊夢の耳に遠く及ばなかった。

かくして、霊夢・紫ペアは異変解決へと飛び立った。

朧月夜の宵の越し。

霧雨魔法店の戸がノックされた。

「起きなさい魔理沙。面白いことになっているわよ」

ドアは開かれず、一枚の板越しに眠そうな声で魔理沙は返事をした。

「……何だよ、こんな遅くに」

「貴方の大好きな異変よ。出てきなさい」

「……つたく。忙しい時に……待ってる、四十秒で支度してくる」

そこからきつかり四十秒経って、ドアから魔理沙が出てきた。

アリスは数日ぶりに見たその姿に、絶句した。

「ど、どうしたのよその身体……」

「何でもねえよ」

服装は、いつもも着ている黒白の物であった。

しかし袖から見える腕に巻かれた血塗れの包帯。

頭にも、片目を覆い隠すように包帯が巻かれている。

その他、体の至る所に血で滲んだ包帯が当てられていた。

「何でもないわけ無いじゃない！どうしてこんな傷だらけに……まさか！」

青ざめた表情でアリスは魔理沙の家の裏に走った。

そこは魔法の試し撃ちをする場所であり、以前アリスがミニ八卦炉を使った所でもある。

「……やっぱり」

アリスが目の当たりにしたのは、惨いとしか言い表せない光景であった。

大量の不燃焼な魔力が周囲に散漫している。

あたりの木々は、爆風でも受けたかのように葉を落とし枝を折られていた。

そして……大量の血が、飛び散っていた。

「貴方……まさか」

「お前は説教をしにきたのか？異変解決が先だろ。さっさといくぜ」

返事も待たず魔理沙は箒に跨り空へと飛びだった。

そのスピードは以前よりも格段に速く、その不自然な成長を見てアリスは悟った。

霧雨魔理沙が、何を賭けたのかを。

己の美学に則り、それ以上は何も言わずアリスも空へと舞った。かくして魔理沙・アリスペアが異変解決に参入した。

霊夢と紫は道中に立ちほだかった屋台の妖怪主人を撃退したのち、人里へと向かった。

ミステイアと名乗るその妖怪が散り際に、誰かの名を呼んでいたのが少し気にかかったが、少し飛ぶうちに忘れてしまった。

さほど重要ではないと判断したからだ。

博麗の超人的な勘が人里を指し示した。

そこに異変の黒幕、もしくはそれに近い何かが居ると。

しばしの間飛行し、そろそろ人里に着こうかという所で霊夢はある異変に気づく。

「……人里はこの辺りの筈よね」

「あら、貴方には見えていないの？ほら、よくご覧なさいな」

そう言つて、不愉快な笑みを浮かべながら紫は前方を指し示した。

その指先には、暗い中でもハッキリと何も無いのが分かる平野が広がっている。

しかし、見覚えのある景色であった。

記憶と唯一違うとすれば、それは人里がないと言う事だ。

ポツカリと穴が空いたように、もしくはまるで最初から何もなかったかのような光景。

「……人里が消えた？」

「鈍いわねえ……ちよつとこつちに寄りなさいな」

紫が人差し指を何度か曲げると、霊夢は己の意思と関係なしに紫の元へ引き寄せられた。

紫が後ろから回すようにして霊夢の目に手を当てる。

視界を急に奪われた霊夢は抵抗しようとしたが、それより先に紫は

手を離した。

開けていく世界。

そこに映る景色を見て、霊夢は珍しく狼狽した。

背景は先程までと同じ。

違うのは、目と鼻の先にあるもの。

「人里が！」

「最初からそこにあったわ。貴方が見えていなかっただけ」
わずか一寸の所に、人里の入り口があった。

妖怪に化かされたような気分になりながら霊夢は進む。

すると、人里の中から砂利を踏む音が聞こえてきた。

ジャリジャリという小石の音は無機質なはずなのに、まるで怒りが伝わってくるような気がする。

遠くから、蒼い髪をした美人が月明かりの下に表れた。

眦は天を撃つほど鋭く、全身から怒気が滲み出ている。

「人里に何の用だ！」

「うーん、悪いけどアンタはラ・フランス」

「どう言う意味だ」

「用無しって事」

子どもを相手取るような口調で吐き捨てる霊夢。

その無礼な態度に、洋梨どころか林檎ほど真つ赤な顔を浮かべる慧音。

飢饉と疫病から里を守ったという武勇伝が噂に新しい。

その人里の守護者が、大妖怪と天下巫女に立ちはだかった。

「近頃の人間が襲われる事件……まさかお前らが犯人だとは。里の者には指一本とて触れさせんぞ！」

「ふうん。何でもいいけど、邪魔するなら容赦しないわよ」

「まあ待ちなさいな霊夢。何でも力づくで解決するのはナンセンスよ……もし、その人。その事件とやらを詳しく教えてくれるかしら」

紫は慇懃な態度で慧音に近寄った。

警戒心を超えて、敵対心すら滲ませている慧音。

怒鳴るような声で言い放った。

「里の者がたくさん死んだ。妖怪に食われてな！」

「そう。元凶は割れているのかしら？」

「白々しいぞ！こんな不穏な夜に里へ忍び込むお前らが犯人でなくてなんだ！あろう事か……貴子までもっ！」

「貴子？」

霊夢はその名を聞いてある違和感を覚えた。

先程倒したミスティアも、その名を口にしていたので。

霊夢自身もどこの誰かは知らないが、聞き覚えのある名前であった。

しかも、とんでもない悪印象をその名に抱いている。

どうしてだろうか。

「この場から今すぐ出ていけ！」

「ねえ紫」

「どうしたの？」

「多分、この里はシロよ」

「あら、どうして？」

「なんとなくだけど……気が変わったわ」

「そう。なら引き上げるとしましょうか。その人、お騒がせしたわね。これからも人里を守ってくださいな」

紫は薄い笑みを浮かべながらそう言い捨てて、霊夢と共に人里を去っていった。

慧音は最後に放たれた紫の殺気に立ちすくみ、しばらくの間動けなかった。

笑う膝に手をついて、額からじんわりと汗をかく。

「……人里を守れ、か。よく言うよ。邪魔をすれば殺すの間違いだろうに……」

里からしばし飛んで、霊夢はとある疑問を紫にぶつけた。

「ねえ、貴子って誰？」

「……覚えてないの？」

「私の知り合いだっけ」

「はあ……人覚えが悪いわね。確か二回会っているはずよ」

「二回？いつよ。宴会の時？」

「異変の時」

「……ああー」

霊夢は閃光のように思い出した。

あの黒髪の、やたらやさぐれた女を。

確かに二度、顔を合わせている。

しかもその両方で、異変の黒幕と関わりがあつたのだ。

そのくせ当の本人は誰よりも弱っちい。

人騒がせなモグリの妖怪退治屋だ。

確か里に花屋を開いたとかなんとか。

「そう言えば居たわねえ、そんなの」

「それがどうしたのよ」

「いや、何でもないわ」

「そう……それよりもご覧なさい、そろそろ見えてきたわよ」

「……あれが迷いの竹林」

夜の帳が下りて数時間。

幻想郷の住民たちも、そろそろ異変に感づいた。

動こうとしない月。

いつまでも輝いている星。

夜が終わらないのだ。

黒一色の暗い夜。

その闇の中でも一段と竹林の中は暗かった。

まるで深淵を覗くような気持ちで、霊夢は中へと入っていった。

竹の葉がわしゃわしゃと擦れる。

蝉や牛蛙が不安な鳴き声を立てる。

中へ踏み込むごとに嫌な予感が増すのは何故か。

霊夢には分からなかった。

ただ、得体の知れない不安が心を締め付けていた。

「紫、間違いないわ。この中に黒幕がいる」

「そう。なら先を急ぎましょう」

ここに来て、紫の表情は見たことのないくらい真剣であった。いつもの人を小馬鹿にするような薄っぺらい笑みすら浮かべずに、口を真一文字で結んでいる。

中へと進み切り四方に見えるのは果てなき竹林のみとなった。

更に進み、元来た道も見失った時分。

「よお」

そこに、魔理沙がいた。

「遅かったな。さぞ美味しい道草でも食ってたのか？」

「アンタ……その体はっ」

「これか？心配せずともちゃんと動くぜ。負けても言い訳できないくらいにはな」

「負けるって……まさか勝負するつもり？そんな体で!」

「ああ？傷だらけの人間とは勝負できないってか？おうおう優しくなったなあ。里で道徳でも教えてやったらどうだ」

箒に跨り、その上でふんぞり帰るように笑う魔理沙。

霊夢は、今が夏で良かったと思った。

もし季節が冬ならばきつと厚着をしていた。

そうなれば、魔理沙の全身に巻かれた包帯に気が付けなかっただろう。

肌よりも包帯の面積の方が広い。

しかも、白ではなく血で滲んだ赤黒。

右目を覆うように頭にも包帯がしてある。

そんな状態だと平衡感覚すら危ういのではないか？

まして弾幕勝負など……。

「そんな御託はいいぜ。かかってきな」

決意と覚悟に満ちた表情でスペルカードを取り出す魔理沙。どうしようかとアレコレ考えて、結局出るのは溜息ばかり。霊夢もまた覚悟を決めた。

魔理沙の、並々ならぬ気持ちを感じとってしまったのだ。こうなってしまった魔理沙は何より頑固で意地っ張り。

それならさっさとぶっ飛ばして、大人しく家に帰らそう。
今回の異変は、ヤバい予感がする。

もし手負の者が首を突っ込んだら……。

霊夢は心の帯を締め直した。

魔理沙を守るために、魔理沙を倒す。

「手加減はしないわよ」

「上等だっ……い！」

ぎゅっと箒を掴んで、帽子を深く被る魔理沙。

霊夢はお札を懐から取り出し構えを取った。

地面に水雫が落ちる。

夜露ではない。

霊夢が魔理沙か……はたまたその他の誰かが緊張故に出した汗だ。

次の瞬間、冷たい月光の下で二人の少女がぶつかった。

月光は冷たく下界を照らすのみである。

月が太陽を照らす

博麗霊夢と霧雨魔理沙は、対照的な人生を歩んできた。

博麗霊夢は生まれた時から巫女として生きてきた。

彼女は人間でありながら、まるで神に愛されたような才能を持っていた。

それでいて力や野望などとは全く無縁の生活をしている。

幻想郷で最も強い、人呼んで天下無双の巫女。

誰もが一目を置く神童と言って過言ではない。むしろ過小評価ですらあるだろう。

その霊夢に唯一食ってかかった人間が、魔理沙であった。

霧雨魔理沙は人里の名家に生まれた。

幼い時から大層可愛がられ、何をせずとも飯には困らず、働かずとも銭が手に入る。

そんな何一つ不自由のない人生を約束されていた。

しかし魔理沙は、その全てを投げ捨てた。

裕福な未来を全部投げ打って、自ら茨の道に身を落とした。

レールの敷かれた未来を捨てて、己の身一つだけで生きていく未来を選んだ魔理沙。

故に、誰よりも自由であった。

この広い世界を箒で飛び回る。己の意思だけに従って生きる。

彼女は、全てのしがらみから解き放たれた幻想郷で最も自由な人間であろう。

魔理沙と霊夢。

巫女と魔女。

決して交わることはない二者が友人として知り合い、そして今ここでぶつかり合うのは偶然か、必然か。

そのどちらであろうと、二人が感じる血の滾りを止めることはもう、出来ない。

「お前とやるのはいつぶりだ？ 霊夢」

「さあ、覚えてないわ」

「ツレの誼よしみみで言つといてやるが、私は結構強くなったぜ」

「あつそ。ご親切にどーも」

魔理沙は霊夢の冷たい対応に少し笑って、それから鋭い顔をした。慣れた動きで懐からミニ八卦炉を取り出し、箒を一層強く握りしめる。

緊張が二人の間を駆け抜けた。

牛蛙が喉を鳴らす。

開戦の合図は魔理沙の攻撃であつた。

「最初っから全開だ！」

叫びながら通常弾幕を展開する魔理沙。

闇一色だった辺りがボワツと一気に明るくなる。

赤青黄色、色とりどりの流星が魔理沙を中心に舞った。

「アンタ、やっぱり……」

霊夢は弾幕勝負において一度も負けたことがない。

異変以外でも数多の戦いを経験してきたが、敗北はおろか、残機を削られたことすら稀である。

特に魔理沙が相手の場合、一機も落としたことはない。

だが霊夢は今、冷汗をかいた。

それは魔理沙の弾幕が、己の知っているものと全く違ったからだ。

圧倒的な煌めき。

量も質も、明らかに数倍強くなっている。

しかし、見かけほどの難易度ではないと霊夢は直感した。

お札を宙に放って結界を貼る。

これによってしばらくは攻撃を防ぐことができるだろう。

その中で数秒思考した。

（多分パチユリーのせいね。だけどあの傷は……まさか、魔理沙に限ってそんなことは——）

その瞬間、結界にヒビが入った。

ガラスが割れたような音。

赤い彗星が霊夢の頬を掠めた。

想定より数段も早く結界が突破されてしまったことに、霊夢は舌打ちをした。

「言つたろ。前までの私とは一味違うってな」

「どこが変わったのよ。まさか今のが修行の成果？」

「急かさなくても見せてやるよ。一枚目のスペルだ」

カードを提示し、魔理沙の攻撃が始まる。

頭を低く下げ、ミニ八卦炉を前に構える魔理沙。

発射口にキュルキュルと装填される巨大な魔力。

そこから繰り出される攻撃を霊夢は知っていた。

マスタースパークだ。

「喰らえー」

空気が縦に揺れる。

ほんの一瞬でレーザーが迫り来る。

目の前に、超ド級の魔力を感じた。

威力も速度もアップしている。

前のが亀に感じるくらいだ。

しかし、避けるのは容易かった。

所詮は攻略済みの技なのだから。

隙が大きいその攻撃を、何度か左右に避ける。

なんなく時間は尽き、特に苦労もなく一枚目を突破してしまった。

交代に、今度は霊夢がスペルを宣言する。

「悪いけど、さっさとケリ付けるわよ」

「上等だぜ」

「私も一枚目よー」

お札を宙へ大量に放ち、スラスラと祝詞を詠む。

命を持った鳥のようにお札が飛び回る。

千鳥格子に展開された弾幕が、檻のように魔理沙を取り囲んだ。

「無双封印ー」

「へっ、止まって見えるぜー」

声高らかにそう言って、言葉通り魔理沙は弾幕を突破した。

いつもの魔理沙ならばここまでで一機は落としているだろう。

そうでなくとも少なからず危うい場面があるはずだ。

だが……今の魔理沙は汗一つかいていない。

「今まで、こんなのに苦勞してたなんて信じられないぜ」

「……魔理沙、アンタやっぱり！」

「喋る余裕があるのか？もうすでに、二枚目は始まってんだぜ？」

「っ！」

霊夢は辺りを見回した。

鋭く舌打ちをする。

やられた。すでに取り囲まれていたのだ。

四方で銀河のような大量の星々が輝いている。

違うのはその蜜と。

以前とは明らかに物量が段違いだ。

隙間も薄く、力技で抜けることができなくなっている。

攻略するには正攻法しかない。

「もう遅いぜ！スターダストレヴアリエー！」

魔理沙の叫びに呼応して、輝く星々が軌跡を描きながら舞い踊る。

霊夢も、それに合わせて動くことを余儀なくされた。

「この弾幕は……」

それは、霊夢にとって初めての感覚であった。

見える世界が変わったかのような違和感。

霊夢は弾幕勝負を楽しいとは思わない。

なぜならいつも、弾の方から避けていくように思っていたからだ。

自分は何もしていないのに、気づけばスペルを突破している。

マスタースパークも、当たる直前で逸れていく。

そういう感覚だった。

だが今喰らっているそれは違う。

むしろ全てが自分を追いかけてきているような迫力。

「……っちー！」

魔理沙の舌打ち。

時間切れとなるまでの数十秒、霊夢にとっては初めてとなる『回避成功』であった。

硬く閉じた手の中でお札が折れている。

握りしめてしまったのだろう。

自分が緊張していたことに霊夢は気づいた。

「今のは自信あったんだがな」

挑発するような魔理沙の発言には返事もせず、霊夢は焦るように二枚目のスペルを宣言した。

「……手加減しないわよ！封魔陣！」

宣言と同時に宙のお札が丸まり、針のように細くなる。

魔理沙がそれを認識したのは——己の肩に刺さってからだった。

「っああ!？」

「被弾ね……まだまだあるわよ」

思わず顔が歪む。

肩に刺さった針を抜き、苦しながら顔を上げた。

そこには、あまりにも美しく、そして残酷な景色。

沸騰寸前まで滾っていた血が、氷点下まで青ざめた。

千か二千か。

視界の隅々に、針があった。

その切先が全て自分に向いている。

処刑の合図を待つかのように。

「へへ……やつと本気か……そうこなくちやな！」

覚悟を決める。

帽子を深く被り直して、弾幕に向かって突っ込んだ。

針が魔理沙の耳を掠める。

皮膚が切れて血が垂れ落ちた。

されど止まることは許されない。

まだまだ弾丸のような速さで飛んでくる攻撃。

しかも数は桁知れない。

だが魔理沙は目に闘志を宿らせる。

「……で負けるわけには……いかないんだよ！」

……数十秒後、攻撃が止む。

月光が差し込んだ暗闇。

そこに、魔理沙は立った。

二度の被弾、そして数千回のグレイズを伴って。

「針は……一点集中だ。鋭い分面積は狭い。お陰で服はボロボロになっちまったがな……」

「まさか……アンタ、あれを避け切ったの!?!」

霊夢は狼狽した。

天変地異にさえ鈍感な彼女すらも驚かす魔理沙の胆力。

封魔陣は恐ろしい技だ。

たとえ妖怪であつてもひとたび喰らえば悶絶する。

普段は霊力を加減して、注射を打たれた程度の痛みしか感じないようになっているが、本来は痛みを与えることに特化した技なのだ。

その痛みは、本能的な恐怖に作用する。

そして今放った封魔陣は、手加減などしていない。

妖怪ですら喰らえば激痛にのたうち回るだろう。

あくまで敵意を削ぐための技。

だからこそ恐ろしいのだ。

それを魔理沙は……。

「コイツが最後のスペルだ……しかし、追い詰められちゃいけないぜ。

私の本命は最初っからコレ一枚だからな！覚悟しろよ霊夢！」

叫ぶ魔理沙の頬を汗が走る。

意気衝天とした表情の中から、緊張と不安が見て取れた。

深く息を吸って、大きく魔理沙は宣言した。

「喰らえっ！ブレイジングスターツ！」

その技の名を、霊夢は聞いたことがない。

ただ魔理沙から発せられているのは、今までのどれよりも強力な魔力。

警戒心がブザーを鳴らす。

攻撃の初動。

魔理沙は、あろうことか霊夢と真逆の方向を向いた。

そしてミニ八卦炉を構える。

「おおおおおおお！」

後ろ向きに放たれたマスタースパーク。

その威力は箒に伝わり、魔理沙は音を置き去りにした。光り輝く一筋の流星。

世界が揺らぐような破壊力。

魔理沙がそれを回避できたのは、直感が鳴り響いていたからだろうか。

しかし、息を吐く暇すらない。

すぐさま二発目がくる。

体制を立て直し、ふたたびミニ八卦炉を構える魔理沙。

さらに、魔理沙の通った道筋からも星弾が放たれていた。

あまりに眩しく絢爛な技。

それが、ブレイジングスターであった。

「一度見たら見切れるわよ！」

魔理沙はそう猛る。

それは事実には近かった。

魔理沙からすれば一度見てしまえば、二度目を避けるのは遥かに容易い。

見切りの速さこそ魔理沙の天才たる所以だろう。

二度目をなんなく躲す。

しかし三度目を避ける前に、それは起きた。

「っこれはー！」

魔理沙の目に、何かが掛かった。

視界が赤く染まる。

薄らとした鉄の匂い。

「血ー！」

真っ赤に染まった世界から魔理沙は消える。

急いでそれを拭い取ろうとする魔理沙。

その僅かな時間が、命取りであった。

「届けえええ!!！」

眩い光を纏った魔理沙が魔理沙の胸を貫いた。

轟音。

時が止まる。
博麗霊夢、被弾。

「……アンタ、誰」

「ああ？誰だったら嬉しいんだ？」

「別に誰でも嬉しくないわ」

「良かったな。これからはそんな退屈な人生とおさらばだぜ。何せこの私、霧雨魔理沙と出会ったんだからな」

「ふーん……それで、何しに来たの？」

「お前を倒しにきたぜ！博麗霊夢！」

「……変な奴」

……遠い日の記憶。

霊夢と魔理沙が出会った日。

なんで今、そんな事を思い出したのだろう……。

「はあ……はあ」

「アンタ……」

「まだだ……まだ、終わって……ないぜ」

攻撃をしているのは魔理沙。

被弾したのは霊夢。

しかし、死にそうなのは魔理沙であった。

包帯は破れ、体中の傷からは血が止めどなく出ていた。

剥き出しの肌には化膿した火傷。

息も絶え絶えの魔理沙。

四度目を待たず、時間は尽きた。

「今のは驚いたわ。ちょっとだけね」

「へへ……驚いたか……」

「だから私も、全力でアンタを倒す」

「上等だ……つぐ！」

「無双転生……」

霊夢が放った最後のスペル。

——音も光も全てが消える。

たった一度の攻撃。

その一撃は一瞬にして魔理沙を射抜き、そして勝負は幕を閉じた。

「……ふざけんじゃないわよ」

眩く霊夢。

力尽き、地面に真つ逆さまで落下していく魔理沙。

衝突寸前で、人形らしきものが優しくそれを受け止める。

横たわって呻く魔理沙に、霊夢は近づき胸ぐらを掴みあげた。

勝ったはずなのに、その顔は歪んでいた。

「どうしてなのよー」

自分でも驚くほどの怒鳴り声。

しかし魔理沙は返事をしない。

焦点の合わぬ虚ろな眼に霊夢が映る。

「なんで……そんなになつてまで強くなろうとするの!? アンタこのま

まじや……死んじやうわよ……?」

胸ぐらをより一層強く引つ張り上げる。

消え入るような声だけが、口から溢れた。

肩を震わせて、泣きそうな顔をする霊夢。

牛蛙の鳴き声だけが響く沈黙。

「お前に……勝つためだ」

「っ!」

「命を削つたのも……こんな体になつたのも……全部お前を負かすためだ」

魔理沙は空を見ながら言った。

死にそうな声だった。

「何だよ……私に勝つてどうなるの!? そんな事の為に……アンタ、馬鹿じゃないの!」

「お前は……一人ぼっちだったろ」

スウツと目に光を取り戻した魔理沙。

目の前で苦しそうな顔をする霊夢の瞳を真っ直ぐに見つめて、母のように優しく言った。

「ガキの頃からずっと……一人あんな寂れた神社に居たんだろ？妖怪だつてのしちまう誰よりも強い奴……前にも後ろにも、誰もいない。お前は……寂しいんだ」

隙間風のような乾いた咳をして、口から血を吐き出す魔理沙。

黒い喀血が服にかかる。

「私がお前に勝てば……お前は一人じゃなくなる。孤独なんかじゃ……なくなるんだ」

「馬鹿っ！余計なお世話よ！アンタに……アンタに何がわかるの!？」

「お前に追いつきたかった……巫女としてじゃない、霊夢。お前という人間にな……」

「なんで……なんでよ！」

胸ぐらを掴み上げて、霊夢は魔理沙の頬を殴った。

殴っても、痛いのは魔理沙ではなかった。

「アンタはただの人間じゃない。追いかけてなんてこないでよ……アンタが死んだら私は……」

「おい……霊夢？」

「うっさい！馬鹿！」

「何で……お前が泣くんだよ」

「泣いてない！」

霊夢はそう言った。

魔理沙は、己の顔にかかっている水の正体を、それ以上追求しなかった。

「異変は危険な事ばっかよ……それに首突っ込んで……心配ばかりかけて！」

叫びの余韻が、竹林に溶け消えた。

霊夢も魔理沙も、息を切らしながらお互いをじっと見据えるだけで、何も言わなかった。

「強くなつてならなくていい……私になんて勝たなくてもいい……誰よりも弱くたって良い。だから、危ない事ばっかしないでよ……」

「何でお前がそんなことを……」

「心配だからよ！どんだけ守っても、アンタは危険に首突っ込んで！もし死んだらどうすんの!?」

「……私が死んだら、お前は悲しいのか？」

「そうよ！悪い!?迷惑な限りよ！ずっと一人で生きてこれたのにアンタは……私の人生にまで首突っ込んで……!」

霊夢の思わぬ告白に魔理沙はたじろぐ。

帽子を深くかぶって顔を覆った。

霧雨魔理沙と博麗霊夢は、対照的な人生を歩んできた。

多くの者に可愛がられた魔理沙。

多くの者から恐れられた霊夢。

表と裏のような二人が出会い、戦い、そして愛し合ったのは、決して偶然などではなかったのだろう。

「お前は……私がいなきやダメだな」

「アンタが、私がいなきやダメなのよ!」

「……さつさと行けよ。異変が待ってるぜ」

そこまで言って、魔理沙の体からカクンと力が抜けた。

傷だらけながら満足そうな顔をして、穏やかな息を立てている。

「……行くわよ紫」

「お涙頂戴ねえ。感動したわ」

「アリス、こいつの事よろしく」

「……ええ」

木陰からアリスが出てくる。

魔理沙に、勝負が終わるまでは出てくるなと言われていたのだ。

普段なら食ってかかったろうが今夜の魔理沙には何か迫り来るものがあつた。

竹にもたれて眠る魔理沙。

アリスは人形を使って、その体を優しく担ぐ。

霊夢はそれを見送るもせず、先へと向かった。

揺蕩うような疲れを感じながら……。

迷いの竹林での決闘

勝者 博麗霊夢（被弾一）

霊夢の直感を頼りに進む一向。
竹林の闇に、何やら怪しく動く影を捉えた。

こんな夜更けにこんな所を出歩く者などマトモなわけがない。
自分たちも含めてだ。

不穏な空気が漂い、周囲の温度が下がっていく。

ここへ来るような思いをしながらお札を出して警戒する霊夢。

そこに着物姿の女が現れた。

「妖夢く？どこ行ったのく？」

「……幽々子？」

喋りかけたのは紫であった。

急な声に驚いたのか肩を弾ませ、それから霊夢と紫の顔を見て嬉し
そうに笑う幽々子。

「やっとなにに会えたわあ〜」

「人じゃないでしょ、お互いに……あら？妖夢はどうしたの？」

「そう、そうなのよ。大変なのよう」

「……まさか」

「妖夢が迷子になっちゃったのよ〜！」

手で顔を覆い泣いているような風と言う幽々子。

大変という割には呑気に見える友人に紫は呆れ溜息を吐き、それか
ら薄目で霊夢の方を見た。

「先を急ぐわよ」

「引き止めたのはアンタの方でしょ」

「さっきの勝負にかけた時間でおあいこ。ほら幽々子、行くわよ」

「でも妖夢が……」

「あの子なら大丈夫よ。多分」

「紫が言うのと信憑性ないのよう……」

一方その頃妖夢はと言うと……。

「貴様……なぜここにいる！」

「あら、お久しぶりねえサムライさん」

「ここで会ったが運の尽き！前の借りを返させてもらう！」

「遅いわね——」

剣を振りかぶる妖夢。

その懐に素早く潜り込み、首筋にナイフの白刃を当てがう咲夜。

冷たい切先の感触。

少しでも動けば妖夢の首はない。

咲夜は言葉なく脅している。

「ここは顕界。死人の貴方では少し調子が悪いのではなくて？」

「つぐ……」

「さっきの質問の答えだけど。私は異変を解決しにきたの」

「たった一人でか？」

「お嬢様も一緒よ……今は迷子になられてしまったけど」

「迷子なのはお前じゃないのか」

「迷う子と書いて迷子よ。私は迷ってなんかいないわ。ほら……」

咲夜は武器をしまい妖夢の後ろを指さした。

妖夢も刀を鞘にしまって、示された方向を瞳だけで見る。

「あれは……」

「ポツンと一軒家なんて怪しさ全開ねえ……さて、どうするの？」

「ここで待っている。私が行く」

「なら一緒に行きましょうか」

「何でそうなる！」

「一人より二人よ」

「断る！」

「ついていくからお好きにどうぞ」

激昂して再度刀を抜こうとする妖夢であったが、出発前に言われた

幽々子の言葉を思い出した。

『もし迷ったら異変解決を優先なさい。寄り道してはダメよと』

咲夜はすでに屋敷の門を潜っていた。

腹立たしい気持ちと幽々子の言伝に葛藤しながら、妖夢もそれに続いた。

遅れを取らぬよう走って門を潜る。

「……あれ？」

「さて、困ったわねえ」

意気揚々と一步目を踏み出した妖夢だが、その一步目から足を止めることとなった。

「屋敷が……消えた？」

「……見えなくなったわけでもなさそうね」

「門は？」

「ダメ。跡形もないわ」

二人して足止めを喰らう。

妖夢はしばし考えて、それからハツとしたような表情で言った。

「……待て。よく考えてみる……ここには最初から、何もなかったぞ」
「……何を言ってるの？すぐそこにあつたのよ？この目で見たじゃない」

「いや、何もなかった。いいか？よく考えたら何一つなかったんだ」

「熱中症？」

急にうわ言のようなことを繰り返し始めた妖夢。

咲夜がどれだけ諫めても、ずっと「何もなかった」と連呼している。
まるで何かに取り憑かれたように。

「頭の愉快な人なのね」

「何一つそこにはなかった。元からただの竹林だけだった」

「いい加減にしなさい。現実逃避なんて見苦しいわよ」

「私たちはずっと竹林を彷徨っている。何も見つけてなんかいない」
精神が壊れたのか？

頭界にずっといるとこうなってしまうのか。

それとも……本当に何もなかったのか。

あれは迷いの竹林が私たちに見せた幻覚なのか？
そこにはただの竹林しか無かった。

最初から……何も。

「っ！」

「やっと思えたか」

咲夜はまさしく面食らった。

己の目を疑うことなど初めての経験であった。

「あれは……」

「まだだ。あれは幻覚だと思っておけ」

「だけど……なんで『屋敷が現れた』の?」

妖夢は屋敷へと歩み出した。

歩くたびに刀がチャカチャカと金属音を鳴らす。

「おそらく認知と思考を反転させる術がかかっている。要は思ったことと反対に感じるんだ。だから有ると思えば見えなくなる」

玄関の戸に手を当てて、ガラリと開く。

咲夜は呆然とその言葉を聞くしか無かった。

「ならば逆の事をすればいい。簡単な事。無いと思えばいいだけだ」

「……なるほど。だからずっとあんな事を……」

「やっと分かったか。さっさと行くぞ」

「あら、私は居なくても心配なさそうだけど?」

「一人よりも二人、なんだろう?」

「ふふ、貴方も案外やるじゃない」

その言葉には返事せず、妖夢は屋敷へ上がっていった。

妖夢と咲夜が、屋敷への一番乗りであった。

夜はいつそう深まっていき、不自然な月光はますます強くなった。

レミリアは一人竹林を歩いていた。

月は吸血鬼にとって重要なフアクターである。

それに手を出されてしまったのだから、指を啜えているわけにはいかない。

さらに夜が終わらないと言う大異変。

夜の王たる吸血鬼がまるで眼中に無いかのような狼藉。

心中が穏やかでないのは語るに及ばないだろう。

しかし、彼女の不機嫌には別の理由があった。

「どこに行ったのよ咲夜!」

幼なげな声が竹林に飲み込まれる。
ますます腹が立ち、咲夜へお仕置きをしてやろうと企んだ。せいぜいオヤツ抜き程度だが。

憤懣やる方ない思いで夜を歩む。

すると、竹林の影から一人の人間が飛び出てきた。

あまりの不意打ち。

レミリアは衝突を避けられなかった。

「痛いわね！どこ見て歩いてんのよ！」

「なんだお前？輝夜の新しいペット？」

「うるっさいわねえ！あんた人間!？」

「どうなんだろう。妖怪かな」

「なら死ね！」

不思議そうな表情をする人間。

その顔を右ストレートでぶっ飛ばす。

首から上が綿菓子のように容易くちぎれて、はるか遠くへ吹っ飛んでいった。

「南無南無……恨むなら己の不運を恨みなさい」

「……あ??」

「あら、やっぱり妖怪じゃない」

「ったく。妖怪に用は無いんだけど……邪魔するんならぶっ飛ばすぞ、このクソ妖怪」

「くっくっく……そりや楽しみだ。ようやく暴れられそうね！生まれたことを後悔しなさい！」

レミリアの背中からその体格に似合わぬ巨大な羽が現れる。

妹紅はやれやれと思いつながら髪をかき上げた。

屋敷の奥へと進む妖夢と咲夜。

外観よりも遥かに広い間取りに、咲夜はどこか親近感を覚えた。

渡り廊下を進み、ある一つの部屋に入る。

何やら異質な空気を纏う畳敷きの和室。

そこに一匹の兎がいた。

「……師匠の言つてた通りね。剣士とメイドがここに来たのは」
ネクタイを締め直し、白みがかかった髪をフアサリとかきあげる。
その瞳は真っ赤に燃えていた。

「兎は餅でもついてたらどう？」

「月の兎はパン派なのよ」

「月の兎ならセーラー服でも着てなさい」

「月に代わってオシオキするわよ」

鈴仙は手を鉄砲の形にして咲夜に向けた。

懐からナイフと懐中時計を出してそれを受ける咲夜。

「お前は下がってろ！私が相手だ！」

妖夢が抜刀する。

刀の峰には名刀特有の、霞のような艶。

鈴仙は嘲るような笑みを浮かべて言う。

「二人まとめてかかってきなさい。悪いけど時間がないの」

その挑発に呼応して、二人が攻撃を繰り出したのは同時であった。
両方から飛んでくる斬撃を容易く躲し、弾丸を放つ。

拳銃のような威力で飛んでくるそれを、咲夜は時間を止めることで
避け、妖夢は素早く刀で弾いた。

「今日は兎鍋ね！」

咲夜が時間を止め、大量のナイフを展開する。

能力を存分に使った得意技の一つだ。

部屋いっぱい広がる刃物。

避ける隙間などは見当たらないように思えた。

「……………」

鈴仙は、姿勢を低く構え手を耳に添えた。

うさ耳がピヨコンと伸びる。

動き始めたナイフが襲いかかる。

しかし、鈴仙は迷いのない動きでそれを避け切った。

咲夜に向かって馬鹿にするような顔をする。

「道化師でも目指してるの？」

「ビショップは二個あるものよ」

不敵に笑う咲夜の後ろから妖夢が現れる。

光沢を放つ刃が振り下ろされる。

一撃で命まで奪われようかと言う強力な一撃。

「いくつあっても同じことね」

鈴仙は妖夢の刀をサラリと避け、妖夢の顔に蹴りを叩き込む。

二の刃を繰り出すよりも先に、妖夢は吹っ飛んだ。

「つぐー」

呻く妖夢。

立ち上がり、そして舌打ちを打った。

元々近接戦を得意とする妖夢にとって、弾丸による攻撃が主な鈴仙は天敵と言えるだろう。

間合いが狭まらず、喰らうのは一方的な攻撃。

「咲夜ー！ここは連携だー！」

咲夜が黙って頷く。

妖夢が鈴仙に突っ込んでいった。

咲夜はその後ろからナイフを構える。

「うおお!!」

刀を上段に構え走る。

咲夜はその後ろから銀のナイフを放った。

ナイフはどんどんと加速し、そして鋭く敵の心臓を射抜いた。

「……………?!」

刀を落として跪く。

敵は、妖夢であった。

「バレてないとも思っていたの?」

「な、んで……………」

世界が音を立てるように倒壊していく。

グネグネと揺れる水面のように歪む景色。

倒れていたはずの妖夢は鈴仙になる。

そしてずっと戦っていたはずの鈴仙は、顔を真っ赤にしている妖夢になった。

「なりすましが通じるとでも？」

「……私の能力は、完璧なのに……」

「ええ、全く気づかなかったわ。でもね……」

咲夜は、ナイフを太もものホルスターにしまいながら言った。

「妖夢は私のことを『咲夜』なんて呼ばないのよ」

本物の妖夢が無言で刀を鞘に収める。

冷たい金属音が屋敷に消えた。

「貴方は油断して私に背中を見せた。それが過ちだったわね。なぜなら私たちはここに入る前……絶対にお互いの背中を見せないよう約束していたのだから」

「裏切られないように決めた約束が……思わず役に立ったみたいだな」

ピクリとも動かない鈴仙。

それを見て、先を急ごうとする咲夜。

しかし、そこであることに気づいた。

己の膝が、撃ち抜かれていることに。

鈴仙の手が、拳銃の形になっていた。

その指先から、硝煙が立ち上る。

「はあっはあっ……最初から時間稼ぎが目的なのよ……勝とうが負けようがね！」

「貴様！」

激昂した妖夢が鈴仙に飛びかかる。

しかし……。

「はーい残念！」

「っ誰だ！」

「幸運の白兔ちゃん、人呼んで因幡てゐってもんだよ」

「卑怯だぞ！」

抵抗する暇もない。

あっという間に縄で身動きを封じられた妖夢。

膝を撃ち抜かれた咲夜と共に、頑丈な柱に括り付けられた。

全く身動きは取れない。

傷跡を押さえながら鈴仙が笑う。

「最初から二対二だったのよ……まんまと策にハマってくれたわね……これも師匠の言う通りだったわ」

「そうかもね……」

てゐはニヒルな笑みを浮かべた。

それから鈴仙に少し近寄る。

「けどき、鈴仙」

「なに？」

「アンタがこうされるのも計算済みかい？」

「っ何を！」

「小一時間眠つときな」

てゐが鈴仙の首筋に手刀を当てる。

軽く触れただけなのに、よほど上手く当てたのか鈴仙はまんまと意識を失った。

元からのダメージも相まって、ドサリと地面に倒れ込む鈴仙。

てゐは身動きが取れない三人を部屋に放置して、どこかへと消え去っていった。

月に消えてその姿をもう見ない。

永遠亭の決闘

勝者 咲夜、妖夢（身動きとれず）

敗者 鈴仙（気絶）

?? てゐ（消息不明）

レミリアの咆哮。

それにこだまして大量の弾幕が展開される。

「死ね！」

「殺してくれるのかい？」

レミリアはイラついていた。

咲夜と逸れたのだ。

今回の異変、解決に名乗りを上げたのは誰であろう、咲夜であった。

とはいえ過去二回の異変、その両方で今際の際を彷徨っている咲夜。

事実冥界では一度死んでいる。

それを放任しているわけにもいかず、レミリアが付き添う事にしたのだ。

「つたく、鬱陶しい事この上なしね！」

「お前から仕掛けてきたんでしょ？」

イライラの欠片がどんどんと積もって行って、一つの山になる。

目の前の人間にしてもそうだ。

殺せど殺せど甦っては立ち向かってくる。

どうして人間というのはこうなのだろうか。

レミリアはほとほと嫌気が刺す。

特に、咲夜の暴走っぷりには頭痛がする。

咲夜は死を恐れていない。

異変に乗り込んで、危険な土産話をもってくる。

誰が手塩で育てたあの娘をあんなにしたのだろうか。

悪影響を与えたのだろうか。

いうまでもない。

アイツだ。

「腐ったミカンも良いところよ、ほんと」

「あ？何の話だよ」

「ぶっ飛ばしても死なないアンタは雑草。悪い方に誑かす馬鹿は腐ったミカン。うちの果物に手を出さないでくれる？」

「何言ってるんだ。けどまあ、果物なら一皮剥ける必要があるんじゃないか？」

「アンタは刈り取る必要がありそうね」

妹紅が指で輪っかを作り、そこにフツと息を吹く。

すると巨大な火の鳥が現れて、レミリア目掛け突っ込んだ。

それを正面から受ける。

微かに傷ついた体も、一瞬にして元に戻る。

どちらが不老不死かわからないほど、両者化け物じみていた。

それは力の均衡を示し、勝負が長引く事を意味していた。咲夜が心配なレミリアにとってこれは都合が悪い。しかし出会った敵は全て倒すというプライドがある。それこそレミリアにとつての敵であった。

「無意味な争いは辞めたいんだがな」

「あら、死なないから負けないでも思っているの？」

「永遠に戦えるからな。負けようがないだろ」

「圧倒的な恐怖の前に跪かせる。これが私の勝ち方よ」

「そいつあ恐ろしいこつた」

「不老不死ねえ。うちの門番の方がよっぽど頑丈よ」

「そうかい。そりやすごいな。張り合う気もないけどね」

「私はアンタに使える時間なんてないの」

「ならさっさと行けよ。いくらやったって無駄なんだから」

「初心な貴方に敗北の意味を教えてあげるわ」

再度構えを取るレミリア。

妹紅もめんどくさそうに腕を上げる。

はたして終わりが見えなさそうなのこの対面。

しかし、事態は急転直下で変化した。

「っ!!!」

レミリアは背筋に何か走ったような感覚になった。

身の毛がよだつ。

警戒する猫のように。

五百年を生きてきて始めた味わうその感覚。

それは慄きであった。

「こんな夜遅くまでご苦労ねえ」

妹以外で初めて出会う、自分と同じくらいの妖気。

それも、知恵やハツタリなどではない。

純粋な悪意のみで構成された力。

まさしく暴力。

「さて、どちらから殺そうかしら」

風見幽香が、狂気の夜に現れた。

竹林を蹴りつぶすように堂々と。

妹紅とレミリアを吟味するように見つめる。

日傘をさして少し近づいてくる。

「何で日傘なんかさしてるの？太陽なんか一つも出てないわよ」

「返り血を防ぐためよ」

幽香は不敵に笑う。

大妖怪たる余裕と傲慢さが溢れ出る。

「先に殺されたいのはどっち？」

「真っ先に死ぬのはアンタよ！」

レミリアが激昂する。

しかし、先手を打ったのは妹紅であった。

「お前がここにいるって事は……まさか、アイツもいるのか？」

睨みを効かせながら尋問する妹紅。

幽香はしばし勿体ぶった。

そして放たれた返答は、肯定であった。

「ええ、そうよ」

「何しにきた！」

「月が綺麗なのよ」

「……は？」

「それ以上の理由なんて無いわ」

幽香は傘を閉じて、その辺に落ちていた石ころを拾う。

そしてそれを軽く放った。

「っ！」

妹紅の眉間に風穴が開く。

弾丸よりも遥かに早い速度で射抜かれた。

石ころはまだまだ止まらず、竹林を割るように突き進んでいった。

「そう言えば貴方、不老不死だったわね」

「生憎な。お前でも私は殺せないさ」

「死ぬ事なんか怖くないの。本当に恐ろしいものとは何かを教えてあげらわ」

「そんなのどうでもいい。貴子はどこに行った」

「さあ。私を知るわけないじゃない」

「貴子は私らの恩人だ。お前みたいな下衆が弄んでいい命じゃないんだぞ！」

「その下衆に今から弄ばれるのは貴方よ」

月に雲がかかる。

不穏な空気。

妹紅と幽香の拳が交差した。

妖怪相手の鉄則。

それは先手必勝、見敵必殺だ。

つまり先に仕掛けるのは妹紅である。

「おいお前、知ってるか？世の中には相性ってもんが有る。例えば草タイプに炎技は効果抜群なんだ」

「そう。それがどうしたのよ」

「お前と私じゃ相性が悪いって事だよ」

妹紅は拳から紅炎を放ち幽香にぶつける。

微かに肌が焼け焦げた。

「私は不死鳥。炎と飛行タイプだ。お前は草と格闘タイプってところ。分かるか？私の攻撃は少しずつお前をあの世に追い込んでいくんだ」

「何のことか分からないわね」

「私に勝つには水の妖怪でも連れてくるんだな」

「必要ないわね。私とその他では圧倒的なレベルの違いがあるんだもの」

幽香が隙をついて妹紅の横顔を殴り抜く。

まるで豆腐のように妹紅の顔が潰れる。

「所詮は人間、相手をするにはつまらないわね」

首から上が無くなった妹紅を背に幽香は一人ごちる。

しかし、辺りには誰もいなかった。

「あら？吸血鬼は逃げたのかしら」

「そうか……そりゃあ良い」

妹紅が幽香を後ろから抱きしめる。

そして力を込める。

「周りに誰か居たら使えないからな……この技は」

「何をしてくれるのかしら」

「この世で一番威力の高い技を知ってるか？」

「知らないわね」

「自爆だよ」

——爆炎が、妹紅と幽香を包んだ。

辺りの竹林にも引火し、一つの巨大な火柱を昇げる。

メラメラと燃え尽きる二人。

妹紅は消し炭の中から再度蘇った。

「……こんなので死ぬタマじゃないよな」

「今のは何かしら。火傷一つできないわ」

「何回でもやってやるよ」

再び体に豪炎を纏う。

拳と拳がぶつかりあう。

その度にひしゃげるのは妹紅の手。

何度も何度も再生を繰り返す。

「死なないだけなんて退屈ね」

「時間を稼いでるんだよ。今に大変な事が起こるぞ」

「面白い事が起こるのよ」

幽香は妹紅の顔をリングゴのように握りつぶす。

水風船が割れるように血が飛び散った。

返り血で幽香の体が濡れる。

「もつと面白く死んでくれない？」

「お前が見本を見せてくれ」

妹紅が指を鳴らす。

返り血で赤く染まった幽香の服から、熱気が迸った。

「私の血は燃えるんだ」

ゴウゴウと焼ける幽香の体。

辺りの土が溶けそうなほどに温度が上がる。

火柱は空まで届こうかという勢いだ。

そこは更に妹紅も突っ込む。

燃え盛る炎の中へ、自らを燃料にする。

火力はさらに上昇する。

「燃え尽きろー!」

炎の中にいる幽香の顔を、妹紅は殴り抜いた。

血が、ジュツという音を立てて一瞬で気体になる。

しばらく経って、火が止まった。

焦げ臭い煙の中から、幽香が現れる。

頬には一筋の傷がついていた。

「全く目障りね。それに花が燃えてしまったじゃない」

「花は朽ちてもやがて他の花の糧になる。だからこそ散り際が美しいんだ」

「なら貴方は美しくないわ」

「命一つは捨て所ってね」

「あっそ」

幽香は溜息をついた。

殺してもつまらないからだ。

目の前の人間とどれだけ戦っても己の求めるものが手に入らないと悟って、途端退屈になった。

「面倒ね。終わりにしましょう」

「駄目だね。今、お前を貴子に合わすわけにはいかない!」

「もう手遅れよ」

幽香は日傘を開く。

そして妹紅に背を向ける。

敵に背中を見せるという事は自殺行為であり、傲慢であり、そして無礼である。

妹紅は後ろからぶん殴ってやろうと思った。

しかし、そこで悟る。

この勝負の顛末を。

「……………」

足が、動かなかった。

地面から、木の根のようなものが生えて足に絡み付いている。
何という植物の根かは分からないが、とにかく頑丈だ。
ピクリとも動かせない。

妹紅は己が敗北した事を理解した。

「花の中には、宿り主に寄生して養分を吸い尽くす子がいるわ。例えば、白檀とか」

「へえ、勉強になったよ」

「不老不死に寄生したらどんな花が咲くのかしらね」

「……さあな」

知るかよ。

そう言おうとして、口の中に違和感を感じる。

喉の奥から、大量の花の茎が伸びてきた。

物を言うことすら叶わない。

意識が薄れていく。

全身を、鼻に乗っ取られてしまった。

「永遠の命を養分に育つ花は、さぞ美しいでしょう。それは貴方が燃やした花の報いよ」

棒立ちのまま、妹紅は動かない。

「朝日が昇れば枯れるわ。良かったわね、死ねなくて」

そう言つて、幽香は去っていった。

花は月光を受けて怪しく咲き誇るばかりである。

迷いの竹林での乱戦

勝者 風見幽香

敗者 藤原妹紅（花に寄生される）

ロマンスの夜明け

月がでたでた。

月がよいよい。

死ぬ阿保に生きる阿保。

同じ阿保なら殺さなきゃ損損。

霊夢は永い夜を彷徨い歩き、そしてとうとうたどり着いた。

妖華な竹林の中でも一際異質な雰囲気を放ちながら、どこか寂しげな門へと。

「……間違いないわ紫。ここに黒幕がいる」

「そう。時間が惜しいわ。急ぎましょう」

開けっ放しの門からズカズカ中へと入る霊夢。

待ち受けるは中へ入った者が皆一様に苦しめられた術。

結界の専門家である彼女は、そこに仕掛けられたものをすぐさま理解した。

「紫、お願い」

「はいはい」

皆まで言われずとも理解した紫は手で何かをなぞるようにして宙を撫でる。

すると、隠れていた屋敷が姿を表した。

慧音が人里を隠した時のように。

霊夢はそれを見て特段驚きもせずに悪態をつく。

「この中にいる奴らは随分と臆病なのね」

「認知と現実の境界を緩めたわ。注意なさい。変な事を考えると幻覚が見えるわよ」

「……だとするとあれは幻覚?」

霊夢は眉をひそめながら屋敷の外壁を指さした。

見えるのはおどろおどろしい風景。

呪われた屋敷のように大量のお札が貼られていた。

少し警戒する霊夢。

しかし紫はそれの正体を容易く看破した。

「よほど用心しているのね。幾重にも防衛陣を張ってあるわ」

「そんな事しなきゃ生きていけない奴なんて恐るるに足らずよ」

「用心しなさいな。術式はかなり洗練されているわ」

「言われずともよ」

霊夢は一層と唇を固く閉じ、気を引き締め直す。

だんだんと邪魔な思考が排除されて、視界がクリアになっていく感覚。
覚。

しかし、それを邪魔するものがいた。

「二人とも早いわよお」

「……何してんのよ」

一足遅れて後ろから幽々子がやってきた。

冷たい亡霊とてどうやらこの熱帯夜に着物では流石に暑いらしく、

少し汗をかいている。

フワフワと低速移動をしながらやっと追いついて来たのだ。

しかし、門をくぐった途端呑気な顔はすぐさま底知れない強者の表情へと変わった。

「……妖夢はここにいるわね。それに元凶も」

「月を落とすなんて愉快なことを思いついてくれたんだもの。こちらも最大限のお礼を返さなくてはならないわ」

「御託はいいわ……行くわよ」

霊夢の発破に二人して頷き、妖怪退治一行は敵陣の敷居を跨いだ。

あるいは天下巫女。

あるいは隙間妖怪。

あるいは冥界の主。

どれをとつても最強格。

幻想郷において、最も出会いたくない者たち。

その進軍を止めることなど、もはや誰にもできなかった。

「……二人」

「え？」

「敵は、二人いるわ」

屋敷の入り口から少し進んで突き当たり。

左右に廊下が分かれているその分岐点で、霊夢は立ち止まった。

「紫と幽々子は左へ進んでいって。私は右へ行く」

「……貴方が言うのなら、そうしましょう」

紫はそれだけをポツリと呟いて、霊夢に背を向けた。

幽々子もまたそれに追従する。

一歩ずつ遠ざかる両方。りようかた

思い出したように、紫は背を向けたまま呼びかけた。

「……霊夢」

「何よ」

いつものように気軽に、いつになく真剣に。

幽々子ですら聞いたことがないような重たい声色で。

「何があっても生きて帰りなさいな」

「……当然よ」

普段から冗談ばかりで、人のことを茶化すばかりの紫。

だからこそ、その言葉には重みがあった。

死ぬつもりなど毛頭ないが、それでも改めて帯を締め直す。

これは自分の人生でもかなりの山場になる。

霊夢はそう直感していた。

「そつちは頼んだわよ」

「ええ。任せなさい」

それ以上の言葉は交わさず、先へと進んだ。

月は一層傾いてゆく。

暗い迷いの竹林の中でも比較的月光が当たる所で、魔理沙は寝かせられていた。

辺りにはアリスの人形が包围網を貼っていて、妖怪等から身を守れ

るようになってる。

魔理沙は燃え尽きたような瞳で月を見上げながら零す。

「なあ、アリス」

「……何よ」

「お前は私に、魔法をコントロールする才能があるって言ってたよな」
「……ええ、そうね。貴方が魔法制御のセンスを持つてるとは私が認めるわ」

「センスか……確かにそいつは良いかもな」

「考えが変わったの？」

「ああ、やっと吹っ切れたぜ」

魔理沙は痛む体を労りつつヨロヨロと起き上がり、空に向けて曇りのない笑みを浮かべた。

「実は迷ってたんだ……パワーばつか追い求めてても良いのかって。でも決めたぜ。私は死ぬまでこのままだ」

「……そう」

魔理沙の独白。

己の才能を捨てる覚悟。

いつもなら嫌味の一つでも言っているアリスだが、今宵だけは優しく頷いた。

たとえ魔理沙が憎かろうとも、アリスは知っているのだ。

魔法に対するひたむきな姿勢を。

日夜研究に没頭している情熱を。

そのあり方に、同じ魔法使いとしてアリスは敬意を払っている。

深く悩み葛藤し、己を犠牲にしてまで勝利を求めた。

その上で出した結論にケチをつけるなど、アリスにはできなかつた。

「お前の言うことも確かだ。でもな、私に言わせりゃロマンに欠ける」

「……何がロマンよ。ほんと、馬鹿ね」

「やっぱり、弾幕はパワーだぜ」

「ブレインよ。この馬鹿」

「なんだと？この一人ぼっちめ」

……結局は言い合いになる二人。

しかし不思議と腹立たしくはなかった。

魔理沙の心に巢食っていた焦燥も苦悩も、夏に降る通り雨のように去っていつてしまったのだ。

心を弾ますのは霊夢から奪った一機。

それは数にすれば小さなたったの一機だが、されど何よりも大きい高嶺の一機。

最大の目標に一矢報いてやったことが、魔理沙にとって何よりも嬉しかった。

自分の実力を、己の手でハッキリと示すことができた。

最後のスペルを放った時の霊夢の顔を、一生忘れる事はないだろう。

あの時の、確かに届いたという感触が今も手のひらに残っている。

「とはいえ……今回はもうリタイアだ。流石に動けないぜ」

「あんな無茶するからよ。自分を弾に使うなんて……」

魔理沙はまたアリスのお小言が始まったかと面倒くさく思う。

しかし、意外にもその話はすぐに終わる事となる。

原因はある一人の女が現れた事だった。

「っ！」

真っ先に何者かの接近を悟るのはアリス。

張り巡らせた人形の警備網がブザーを鳴らしたのだ。

すぐ近くまで誰かが来ている。

妖怪か、敵襲か。

手負を連れて応戦できるか。

頭の回転が早いアリスの脳内を、さまざまな懸念が駆け巡る。

そうしてすぐさま一つの結論に行き着いた。

もしも敵ならば、戦うしかない。

「誰かしら？」

「うわっ！脅かすなよ！」

「……本当に誰よ貴方」

キリキリと高まった警戒心に間拔けな声が返事をする。
普通の背丈。

平凡な存在感。

見るからに普通の女。
少々やさぐれた感じこそあっても、気配はただの人間としか思えない。
い。

妖気の類も、何一つ感じられない。

しかしそのあまりに場違いな反応が、かえって怪しかった。

尋問は静かに始まる。

「こんな所で何してるのよ」

「霧雨魔理沙という奴を探してるんだが」

「貴方の名前は？」

「ああ、それもそうか」

ポケットに手をつ突っ込みながら、さも平然とその女は言った。

粗野な振る舞いに、お里が知れるわねとアリスは内心毒づいた。

「私は貴子。ただの妖怪退治屋だ」

「……妖怪退治？ 怪しいわね」

「何でも良いよ。それより、霧雨魔理沙は知らないか」

「知ってたら何よ」

「今どこにいる」

その質問に、アリスは少し困った。

怪しいとは言えども一見はただの人間。

そこに、今自分の後ろで寝ている者を差し出していいかどうか。

あまりに素生も目的も分からない。

気配を断つ達人とは思えないが、こんな夜に彷徨い歩く時点で既に

曲者。

はたしてどこまで信用できるか。

答え淀んでいると、貴子は付け加えるように言った。

「あー、パチュリーって言えばわかるって聞いたんだけど」

「……あの紅魔館の？」

「他にパチュリーがいるなら教えてくれ」

若干イラツとする物言い。

なぜ初対面のこんな人間に嫌味を言われなきやいけないのだ。少し攻撃してやろうかとも思ったが、しかしパチュリーの名を知っているとなると殊更に悩ましい。

実際、パチュリーはそれほど有名人ではない。

魔法使いという種の習性と、表に出たがらない当人の気性が相まってほとんど引きこもりだからだ。

館で働く者が魔法使い仲間でないとその名は知らないだろう。

だがコイツが魔法使いならば私とも面識があるはず。

となると紅魔館の使いか？

紅魔館は人間を雇わないと聞いていたのだけど。

色々と推測や疑念が飛び交う。

何と答えるのが正解か、どうにも不明な点が多すぎる。

そもそもなぜ魔理沙の為に悩まなくてはダメなのか。

そう思うと俄然腹が立つてきた。

こうなったらこんな怪しいやつ追い払ってやろう。

幸い一人で来ているらしい。

なら威嚇で十分だろう。

そう思いアリスは張り巡らしていた人形を手繰り寄せた。

しかし、せつかく意気込んだのにその目論見は失敗する事となる。

「私が……魔理沙だけ」

魔理沙が立ち上がったって名乗りを上げたからだ。

人が延々悩んでいたのに、こいつは全部台無しにする。

一人相撲で骨折り損じたことに、アリスはため息をついた。

アリスに肩を借りながら魔理沙が貴子と対峙する。

「ん？アンタどっかで会った事あるか？」

「さあ、居酒屋とかじゃないか？」

「いや、もつと衝撃的な……」

「思い出したら言ってくれ。アンタが魔理沙だな？」

「ああ、そうだけ」

「パチュリーから一つ伝言を預かって来た」

「アイツが？」

「ああ」

貴子の狂言に疑念が浮かぶ。

魔理沙が知っている限りでは、パチュリーはとんでもなくドライな奴だ。

いつも、自分のやりたい事が済んだら話しかけるなオーラを出す。

まず間違いなく言伝などはしないようなタイプだ。

むしろ、会った時に言えば良いじゃないとか吐かす無粋な系統。

ますます疑念は勢いを増す。

「それで、パチュリーはなんて？」

色々悩んだが、返事はそれに尽きた。

あのパチュリーがわざわざ人をよこすなんて、一体どんな内容なのか。

検討がつかないし、良い予感はない。

「一言一句そのまま伝えるぞ」

「ああ」

「無茶するからそうなるのよ。さっさと家に帰りなさい……だそう
だ」

「……ああ？」

魔理沙の大きな目が、一層大きく瞬いた。

アリスもまた同様に驚いている。

たしかに今の状況からすればタイムリーな話だが、それにしておかしいからだ。

「その伝言は……いつ聞いたんだ？」

「今日の昼だ」

「……あんにやろう」

魔理沙は口端を少しだけ上げて呟いた。

本当に……本当に嫌な奴だ。

全く、どこまで見透かせば気が済むのだろうか。

まるで全部お見通しみたいな態度。

つくづく気に入らない。

「さっさと家に帰れだあ!?!やなことった!」

「……事情はわからんがやめとけ」

「ああ?」

「全身傷だらけじゃないか」

「こんなのかすり傷にもならないぜ!」

魔理沙はよろけながら吠える。

眠たそうだった瞳が、メラメラと燃え上がる。

「先を急ぐぞアリス!この異変は私が解決してやる!」

「やめときなさい!死にかけじゃないの」

「私は死なないぜ。何たってアリス。お前がいるからな」

「だとしてもよ!」

「不思議だぜ。今はちっとも死ぬ気がしない」

「馬鹿!」

魔理沙の胸ぐらを掴み上げて、かすかに声を震わしながら怒鳴るアリス。

クールにいる事こそを美学とする彼女だが、それは情緒に振り回される事の裏返しだ。

しばし沈黙を決めていた貴子の軽薄な口が開かれた。

「長いこと妖怪退治なんて仕事をやってたから分かる事がある。勇者ってのは臆病な奴だ。そして、怖くてしょうがない所へ恐る恐る突っ込んでいく事が勇氣だ」

「私は勇敢なんでね」

「アンタのそれは蛮勇だ。若すぎる故のな」

「説教でもする気か?」

「見殺しにはできないからな」

「私は死なん」

「近くに風見幽香がいるぞ」

「なっ……」

貴子の言葉に反応し、全身の身の毛を震わすように愕然としたのはアリス。

他方で魔理沙はケロツとしている。

「風見幽香？何であいつがこんな所にいるんだ？」

「……そんなの私が知りたいね」

「……最近、幽香が人里に入り浸ってるって噂があった。怪しげな花屋をやってるって誰かさんが言ってたぜ」

その誰かさんというのが、アリスであることは言うまでもない。

そして……。

「そんでその花屋には余所者の人間がいるそうだが……まさか」

「……ああ。私がおの人間だ」

貴子こそが幽香を異変に招いた人物であることもまた言うまでもない。

第一級の迷惑野郎に、魔理沙はドツと爆笑する。

貴子はますますバツの悪そうな顔になった。

その顔をマジマジと見て、魔理沙はポンと手を叩く。

「やっぱりか！思い出したぜ！アンタ紅霧異変の時に紅魔館にいた奴だろ」

「何ですって!?!」

「そんで春雪異変にも一枚噛んでるってな！」

「超危険人物じゃない！」

「なあ、アンタは一体何者なんだ？」

「ただの不幸な妖怪退治屋だ」

そうとだけ言ってタバコを咥え貴子は黙る。

暗闇の中、月光を受けて煙だけが揺蕩った。

「ともかく、私はこれから幽香を探しに行く」

「何でだ？」

「嫌な予感がするんだよ」

「……なら、私もついて行くぜ」

「来なくて良い」

「アンタは危険人物だぜ。見張つとく必要がある」

「……迷惑な魔法使いだ」

「よく言われるよ」

そこから少し問答があり、結局魔理沙の決意を打ち砕くことはでき

ず不本意にも三人は先へ進むことになった。
貴子にとっては三回目の、迷いの竹林へと。

二手に分かれた霊夢一行。

右へ進んだ霊夢は、四度目の曲がり角で立ち止まる。

「やっぱり……同じ道を歩かされてるわね……」

あまりにも内部が殺風景すぎて気付くのが遅れた。

しかし、壁に貼っておいた御札を誤魔化すことはできない。

「このお札は私のもの……とことん臆病な奴なのね」

眩きながら霊夢は勘案する。

最初からおかしいとは思っていた。

この屋敷はあまりにも偏狭すぎるのだ。

強者の住まいとは思えないほどに。

旅人を惑わし行く手を阻む竹林。

入ろうと思えば見えなくなる屋敷。

そして今立ち塞がっている、永遠に続く回廊。

どれも厄介だが、これらにはある一つの共通点があった。

それは、奥へ行こうとする者のみが術の効果にハマると言う事だ。

まるで蝸壺の逆。

中へ入れないが、簡単に出られる。

進もうとすれば進めない。

しかしそこに、拭えきれない違和感もあった。

隙間風にもよく似たその感覚は、どこかに突破口がある事を指し示している。

「近くにいるんでしょ？ 気配を隠しきれてないわよ」

虚空に向かって啖呵を切る。

しかし返答は耳が痛くなるような沈黙ばかり。

霊夢の憤りはますます募りゆく。

いつそ屋敷ごと吹っ飛ばしてやろうかしら。

そう思っ、やめた。

ある閃きが頭を掠めたから。

「進もうとすれば戻る……だったら！」

霊夢は勢いよく振り返り、自分が進んできた道をフルスロットルで駆け戻った。

「ビンゴー」

たった数十歩分進んだ先に、もつとも豪華に装飾された扉が現れた。

明らかに気配が違う。

「さあ……行くわよ」

部屋へと近づく。

足で引き戸を蹴っ飛ばして、中へと乗り込んだ。

「……やっと会えたわね」

狭い和室。

しかし地球上のどこよりも広大な世界が広がっているような気がした。

その中央で鎮座する人物。

長くサラサラの黒毛を櫛でとかして、楽しそうに鼻歌を歌っている。

神か悪魔か、誰が望んだのか。

とうとう二人は対峙してしまった。

「幾重にも難題を出した。それらは全て貴方の心に起因する」
「は？」

「私は蓬莱山輝夜。黒幕よ」

「知ってるわ。名前は初めて聞いたけど」

「夜が明けないのは貴方の仕業？」

「何だって良いでしょ、そんなの」

「ふふふ……貴方は私の難題、全て解けるかしら？」

「違うわね。アンタが生き残れるかどうかよ」

「いとあわれ」

輝夜はゆっくり立ち上がった。

幾重にも重ねられた単を着ているのに、全く衣擦れの音すら立て

ず。

仇敵を睨むように、あるいは珍しいものを眺めるようにじつと霊夢の顔を見る。

瞬間、重力が失われた。

「ここはっ!?!」

「貴方は見た事があるかしら。宇宙というものを」

霊夢は咄嗟に後ろを振り返る。

青く光る丸い球がそこにあつた。

「これは幻覚。でも限りなく現実に近い幻術」

「ふん、何でも良いわよ。ここが地獄だろうとあの世だろうと。私はアンタをぶっ飛ばす。それだけだもの」

「威勢よし! さあ、月を惑わし夜明けを奪った不屈き者よ! 恐れを超えてかかって来なさい!」

空前絶後の大異変。

最終決戦の火蓋が落とされた。

一方で紫と幽々子。

こちらにもまた最果ての部屋へとたどり着いた。

惑わされた霊夢とは対極的に、誘われるようにアツサリと。

「まるで案内されているようね。この部屋へ入れと言わんばかりに」
「よほど自信があると見える。行きましよう紫」

遠慮も躊躇もない。

あるのは熱烈な怒りと殺意のみ。

立て付けのいい戸を開けると、そこに女がいた。

足まであらうかという長い銀髪を一本に束ねて赤と青の服を纏っている。

薬を作る部屋なのか、ツンと鼻に刺さるような薬草の匂い。

その部屋の奥に女は正座して、傍には弓と矢が据えられていた。

「私の計算は寸分の狂いもない。幻想郷の賢者と冥界の主人がここにやってくる。どこまでも予想通り。退屈すぎて死にたくなるわ」

「お望み通り殺して差し上げますわよ」

「死ねないのもまた運命よ。貴方じゃ私は倒せない」

「あら、そうかしら？」

「月の賢者、八意永琳。ここで貴方達を討つ」

「囧だなんて健気な事ですわ」

囧という紫の言葉に、永琳の眉間が少しだけ跳ねる。

僅かに顔が険しくなった。

「だけど残念、囧も本命も退治されるのだから」

「姫様の所へ行くのは貴方達を殺してからでも十分間に合う。お茶を飲んで暇すらある」

「霊夢が心ゆくまで舞えるように取り計らう。私の役目はただそれだけ」

「私を怒らせない事ね。鎮痛剤は切れてるの」

「ふふふ……御生憎様。私はどうの昔に怒り狂ってますわ」

「馬鹿に効く薬も処方しなきゃいけないみたいね」

「村八分目の医者要らず。貴方はここでお終いよ」

紫はパタリと扇子を閉じた。

ほぼ同時に永琳の攻撃が始まる。

瞬きさえできないような刹那の中で、僅かに動く右手を紫は捉えた。

「そうは行かないわね」

永琳の右腕を、何者かが掴む。

見ると空中に生じた隙間から綺麗な手が伸びてきている。

「ここではスペルがルールよ」

「……郷に入ればなんとやら、かしら？」

永琳の腕を掴んだ手は、腕もろとも隙間の中へと戻っていく。

振り払おうとした永琳だったが一步遅かった。

隙間が消え、中に入っていた分の永琳の腕もまた消滅した。

肘から先の消滅。

だが、一瞬でその傷は完治する。

失ったのは手に持っていた弓。

早くも武器を失った永琳。

しかしそれすら計算済みといった顔で不敵に笑った。

「夜は永いの。焦らずいきましよう」

永琳と紫、幽々子。

賢者は拳を使わない。

たった一本の指で空中に文字を書く。

それだけの動き。

だがその一挙一動が空気を震わせ世界を揺らす。

目まぐるしい攻防の一つ一つが、恐ろしく美しかった。

博麗霊夢は敗北を知らない。

鬼や天狗の跋扈する幻想郷であってなお最強の名声は彼女のもの

だろう。

強いから負けないのではない。

むしろ全くの逆。

無敗という事実が、彼女の強さに拍車をかけていた。

人里の中には彼女のことをこう呼ぶ者もいる。

「妖怪」と。

あるいは化物。

あるいは英雄。

あるいは……。

里民は何人たりとも、彼女のことを霊夢とは呼ばない。

表で巫女様と敬い、裏で妖怪巫女と恐れ罵る。

誰が言ったでもないのにある種の差別意識が根付いていた。

近寄り難い存在として、どんどんと孤立の一途を辿っている。

理解者を持たない彼女の孤独は何より深かった。

年端も行かない可憐な少女が背負うにはあまりに過酷で凄惨な宿命。

それでも逃げ出すことはできない。

己が博麗霊夢であるように、幻想郷は幻想郷だ。妖怪が異変を起こし、それを巫女が解決する。

その一連が民に恐れを生む。

恐れは信仰を生み、信仰は異形の者達にとっての糧となる。

紫によつて構築されたこのシステムには隙がない。

そしてその複雑に絡み合う歯車の中で不可欠なのが巫女の存在だ。

なぜ己が巫女なのかなんて知らないし興味もない。

知ったところで何が変わるといふのだ。

むしろ、己が可哀想でたまらなくなるかもしれない。

だからずっと、盲目な無知を演じ続けるのだ。

灼熱に満ちた真実から必死に目を背け、呑気に生きるフリをして。

霊夢は神を信じない。巫女が神を否定するとは倒錯的だが、霊夢にとっては変え難い心境だった。

無神論者な訳ではない。神は存在するだろう。実際に何柱か見聞きしている。

では何を信じていないのか。

それは、力だ。

己の人生において神が何を施してくれたか。

神は私を救わない。救世主は偶像だ。

巫女の私が救われないなら、神もとうとう経営難だ。

神は居る。

だけど信じてはいない。

それが霊夢のスタンスであり、本音であり、絶望であった。

「戦いは無意味。勝利は苦痛。栄光への道は果てなき地獄。貴方はそう思っているのね？」

「あん？」

「心の中が手に取るように解る。攻撃の一つ一つが泣き叫びに聞こえるわ」

「幻聴よ。いい薬を教えてあげるわ」

「薬には困ってないわ。天才が居るんだもの」

「跳べるクスリは遠慮しとくわ。幻聴はごめんだもの」

「もう手遅れよ。とつくにトリップしているのだから」

「あんまり喋ると舌を噛むわよ。頭上に注意しなさい」

霊夢は上を指さす。

輝夜は緩慢な動作で見上げた。

「お札注意報よ」

「あなわびし」

煌めく弾幕を、日本舞踊でも舞うように軽やかに避ける。

様子見の攻撃ゆえ当たるとは思っていなかったが、あまりにも軽い

手応えに苛立つ。

今度は輝夜の番だ。

「世にも愉快的な焼かれる経験をさせてあげるわ」

そう言つて輝夜は二回手を打った。

「……何も起きないじゃない」

「そう焦つては駄目よ。焦れぬ心を持ちなさい」

輝夜は不敵に笑う。

それと同時に、霊夢は己の身から熱を感じた。

あまりにも些細な変化。

しかし熱は勢いを増していく。

皮膚からチリチリと黒煙があがった。

最初は火照りのような温さだったが、段々と熱くなつていくのがわ

かる。

「つぐー」

顔が歪む。

熱湯をぶっかけられたみたいに全身が熱い。

燃え盛る鉄板を押し付けられたかと錯覚する。

肉を焼いた時特有の、ジュウジュウという音がなる。

火炙りみたく、乾いた灼熱。

火力は止まることを知らない。

「まだまだ熱くなるわよ。どこまで我慢できるかしら?」

「ちっ……!」

「これは貴方の業よ。罪人はよく燃え盛るわね」

不味い。

体から生じる熱は回避不能。

幻覚なのは分かっている。

しかし、自分が紅炎の中にいるように思えて仕方がない。

汗が出た瞬間に蒸発する。

「まだまだ弱火よ。ほらほら、もつと我慢しなさい。人間なんですよ？」

霊夢は息すら苦しくなる熱に苦しむ。

肺が焼かれてしまったか。

視界は白くなり、意識は闇に吞まれつつある。

輝夜が放ったのはたった一つの技。

それだけの技が、霊夢を死に追いやりつつある。

だが、霊夢は己のうちにもう一つの炎を灯す。

憎しみを火種に燃え盛るのは、怒りであった。

焼き切れそうになる精神の中で、霊夢はある事を誓った。

「ぶっ飛ばすっ……!!!」

「どこまで堪えられるかしら」

火力が増した。

指先から焦げ臭い匂いがする。

もはや火傷の一步手前。

体の中の脂が燃えつつある。

これは本当にやばい。

肉体の悲鳴が克明に聞こえてくる。

「こういう時に言ってみたいセリフがあつたのよ。永琳に隠れて読んでた漫画のね」

輝夜は愉快そうに笑う。

目の前で苦悶に悶える人間を見てその笑みは深みを増す。

「今のはメラではない。メラゾーマだ！」

「バーカ。逆だぜ」

「っ！」

喉が焼かれて声が出せない。

カラカラの断末魔が微かに出せるか出せないか。

それでも霊夢はたしかに叫んだ。

その者の名前を。

「魔理沙っ！」

「私がいなくて心細かったようだな。 霊夢」

軽口を叩きつつ、魔理沙は霊夢にむけてある魔法を放つ。

青い残像を纏いながら直撃したそれは、燃えさかる霊夢から急速に体温を奪った。

「っさむー！」

「隠居もやしに役に立ったぜ。 水符なんてガラじゃないがな」

「……熱が、引いた？」

「あの技は精神を焼く技。 物理的に冷やしちまえばそれまでだぜ」

「……詳しいわね。 それもパチュリー？」

「いんや、私の研究だ。 さあ、反撃と行こうぜ！」

発破をかけて魔理沙は弾幕を展開した。

真つ暗な宇宙空間で飛び回る彗星はさながら銀河。

それらが流星群のように輝夜を狙い撃つ。

しかし輝夜に攻撃は通らない。

当たる寸前で全てが炸裂した。

まるで見えない壁でもあるかの如く。

輝夜の不敵な笑みはますます深くなる。

魔理沙は素直に驚嘆した。

「何だ？ 避けてすらいなかったぞ今！」

「……あれは結界よ！ 攻撃は全て防がれるわ！」

「けっ！ なら防ぎきれないくらいにの技を撃つまでか！」

両手でミニ八卦炉を構える。

輝夜との距離は遠い。

この間合いで魔法を命中させるのは至難の技。

狙いを澄まして放たなくてはならない。

魔理沙は指先に集中する。

輝夜は攻撃を放った。

しかし先程輝夜がやったように、今度は魔理沙が身動き一つ取らなかつた。

「霊夢！援護頼むぜ！」

「もうやってるわよ！」

お札を放ち、魔理沙に強力な結界を張る。

輝夜の攻撃は当たる寸前で全て迎撃された。

「あと少しだっ……！持ち堪えろよ！」

されど止まぬ輝夜の猛攻。

結界にヒビが入る。

あと数撃で打ち破られるのは一目瞭然。

輝夜が先か、魔理沙が先か。

……レースを制したのは魔理沙だった。

ミニ八卦炉に白光が灯る。

「マスタースパークツ!!!」

一筋のレーザーが闇を切り裂いた。

「愚かね。結界は無敵よ」

「生憎、私の魔法も無敵だぜ！」

眩い閃光が一瞬にして輝夜の鼻先まで届く。

またしても避けようとしないう輝夜。

「っ！」

マスタースパークは、輝夜の肩を撃ち抜いた。

「ふう……その結界は誰が組んだのよ。面倒な式だったわ。お陰で穴

一つ開けるのも一苦労よ」

「お前の体に風穴を開けるのは簡単だったがな！」

「人間が……面白いじゃない！」

「マスタースパークも苦労したぜ。なんせこの距離からあんな穴を通

さなくちやならないんだからな」

魔理沙はミニ八卦炉の発射口から登る硝煙を息で吹き消して懐に

しまった。

「だから発射時に螺旋回転を加えて速度と精度を上げたんだ。ライフ
ルみたいにな」

「輝夜だっけ？世間知らずそうだから言っついてあげるわ」

魔理沙は帽子を被り直し、霊夢は腕を組む。

そして二人で輝夜を指差して言った。

「人間を舐めるな！」

輝夜は己の体に空いた穴を手で押さえる。

一秒もたたずにその穴は塞がった。

「貴方達が苦勞して付けた傷もあつという間に治る。元から勝ち目なんてないのよ」

「ここは殺せば勝ちじゃないぜ。死なないくらいでいいハンデだな」

「退屈しないわねえ。それなら次は水攻めと行こうかしら」

「やめとけ。もうお前の技の弱点はバレてるぜ」

「弱点？私にそんなものは存在しないわ」

「あるんだよそれが。言っつてやろうか？お前の技は一人にしか効果が無い………だろ？」

「……っ！」

「サシなら勝てないかもな。だが人間は群れるもんだ。遠慮なくいかせてもらおうぜ」

「………はあ」

魔理沙の鋭い指摘を受けて、輝夜が見せた表情は苛立ちであった。

それはハッキリとした失望の色。

期待を裏切られたようなため息をつく。

「技で遊ぶくらいが面白いのに………あーあ。退屈させてくれるわね。まあ、私にこの力を使わせたんだから、褒めといてあげるわ」

「あ？」

「走馬灯は見終わった？最後の世界をしかと堪能しときなさい。成仏できるようにね」

「自分の不利を認められないのか。哀れなやつだぜ」

「かくは痴れ者なり」

その一言はもはや溜息に近いもので、血の湧いている魔理沙からすればずいぶんと腹立たしかった。

輝夜は僅かばかりも動かず、瞳孔の開いた無機質な眼で魔理沙のこ
とをただ見ている。

一切の色がない不気味な表情に、体が強張った。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、指先を微かに震えさせることしか
できなくなつた。

息がしづらい。

この重圧は、何か。

まるで巨大な惑星が自分に降りかかっているかのような。

圧倒的強者のプレッシャー。

魔理沙は気持ちを入れ替えるため、たった一回の瞬きをした。

たった一秒にも満たないその僅かな時間は、戦いにおいて命取りと
いえる。

輝夜の右腕が、魔理沙の鳩尾を捕らえている。

「やっようなら」

「っー」

拳が、魔理沙の腹部を貫いた。

軋むような音が聞こえる。

背中から輝夜の拳が現れ、クタリと魔理沙の体から力が抜けた。

「……………これは……………綿？」

引き抜いた右腕を見て、輝夜は戦慄した。

たしかに体の中心を貫いたはずの右腕に。

一滴も血がついていなかった。

「気付くのが遅かったな！」

輝夜は足元である一点の光に気づく。

それは魔理沙のミニ八卦炉であった。

「つなげ貴方が二人も！」

「人形だぜ。私にそっくりのな」

「つくー！」

「あばよー！」

ミニ八卦炉から、今までの何よりも強く煌めく光線が放たれる。
その直径は、輝夜の体よりもゆうに大きい。

「ファイナルスパークツ!!!」

「……それしきの光!ただ横に避ければ終わりよー!」

輝夜は先程魔理沙に近づいたときみたく、まるで時でも止めたかのような瞬間移動をした。

「柔よく剛を制す。所詮は一筋の浅知恵かな」

余裕綽々、傲慢不遜に顎をひけらかして高らかに笑う輝夜。

もはや育ちの良さよりも、底の知れない悪意を持った吐き気を催す邪悪だけが表に出ていた。

「……忘れたのかしら?蓬萊山輝夜」

「は?」

霊夢が魔理沙の背後から現れる。

ミニ八卦炉を持つ魔理沙の手に、霊夢の手が重ねられていたのだ。

「柔よく剛を制す。その通りね」

「ふん、負け惜しみ?」

「覚えてないの?」

「何をかしら?」

「私の弾は、ホーミングするのよ」

「……まさかっ!!!」

「避けられなどしない!これで真正正銘の終わりよー!」

ファイナルスパークは軌道を変えて輝夜に再び襲いかかった。

反応の遅れた輝夜は、正面からそれをまともに受ける。

「いっけええええ!!!」

霊夢と魔理沙の叫びがこだまする。

宇宙空間を模した輝夜の幻術。

果ての見えぬ景色。

ファイナルスパークに押され、その天井に輝夜は打ち付けられる。

されど止まらない。

勢いそのままに天井をぶち抜いた。

まるで光を纏う竜。

その閃きは部屋の屋根に大穴を開ける。

屋敷の天井をぶち抜きながら打ち上げられた輝夜。

永遠亭上空。

満月の逆光で、彼女の影だけが鮮明に映った。

永遠亭 頂上決戦

勝者 魔理沙と霊夢

敗者 蓬莱山輝夜

永夜異変 終幕

「……私たちの負けね」

「……どうやら霊夢がやってくれたみたいね」

「姫様はこの屋敷から出された。それは私たちの敗北を意味する。これ以上戦う必要はない」

「賢明な判断で助かりますわ」

混戦を極めたこちらの戦い。

輝夜の没落を受けて、永琳は弓手を下げた。

紫の隙間から現れた藍がその両手にお札を貼る。

「しばらく拘束させてもらう。安心しろ。抵抗しなければ何もせぬ」

「姫さまっ……どうかご無事でっ……」

永琳はその場にうずくまり、険しい顔をしながら目を閉じた。

「……霊夢は無事かしらね」

紫はスキマを使って、霊夢のところへ向かった。

幽々子はそれについて行かなかった。

「妖夢が何処かに居るはずなんだけど、知らないわよねえ」

永琳に向かってそう問いかける。

藍がそばに立って怪しい動きをせぬよう見張っているとはいえ、あまりに無警戒だ。

その行動に藍は肝を潰すが、幽々子には他人の殺気を感じ取れる能力がある。

永琳からはその類を感じられないと見えた。

「私が知ってるウサよー！」

「……だれ？ 貴方」

「幸運の兎、因幡てゐだよ」

「そう。それで妖夢はどこ？」

「まあまあ、ついてきなよ」

てゐの先導に幽々子は従い去っていった。

残された藍はその場で永琳と二人きりになった。

熱帯夜だというのに、冷や汗ばかりが流れる。

藍は先程の戦いをスキマ越しに直で見ている。

その戦慄がまだ抜けないのだ。

あまりの激闘に衝撃を受けた。

幻想郷のトツプクラスが二人がかりでようやっと互角。

あまりに圧倒的すぎる力。

もし今ここで暴れられたら、止められるわけなどない。

藍は己が最強に近い実力者である自信があったし、紫の式として事

によつては誰であつても勝つという覚悟があつた。

藍の覚悟はけつして生半可ではなかつた。

正しく命を賭けていた。

その藍が、一歩も動けなかつたのだ。

目で追うことすら困難な技の応酬。

水面下で繰り広げられる何百手先までも見据えた読み。

一撃一撃が藍にとって奥義級の技。

軽々しくそれを放ち、そして避けて、受けて、返す。

藍はただ見ていることしかできない自分が醜く、恨めしかった。

「貴方が私の見張り？」

「……………」

「私を抑えられるとは思えないけど。暴れる気はないから安心しなさい」

「い」

「……………」

藍は永琳からの問いかけを全てシカトする。

それは敵意ではない。

むしろ、ある種のリスクがあつた。

己のような臆病な者が話をしている訳ないという反省。それと同時に、恐怖があった。

たった数言話してしまうだけで、自分の中の恐れや怒り、心中を全て見抜いてしまいそうな底知れなさを永琳は持っていた。

己がひどく怯えている事に聡明な藍が気づいていない訳がない。

だからこそ、それが何より情けなかった。

「……これは」

「おい、怪しい動きをするな！」

「……ねえ、貴方も少しは手練れとお見受けしたのだけど、一つ聞いてもいいかしら？」

「何だ」

「人間が妖怪になった場合の処遇はどうなるの？」

「……その場合は問答無用で死だ。人が妖怪になることは最も罪が重い」

「そう。だとすれば仕事の時間ね」

「……どういう意味だ」

「妖怪が出たわ。もしくは大罪人がね」

「何だ?!」

怒鳴りながら藍は立ち上がった。

永琳は落ち着き払いながらも、何処かを見つめながら溜息をついた。

「全く……貴子ったら、何をしてるのよ……」

「貴子？ まさか、貴子と知り合いなのか!？」

「ええ。知り合いも何も、今回の引き金は彼女よ」

「何だと！またアイツが関わっているのか!」

「それより急がなくていいの？ 貴子とどういう関係かは知らないけど、あの子妖怪になりかけてるわよ」

「……貴様を一人にはできない」

「だから、同行すればいいでしょう。どの道、私がいた方が都合がいいと思うわよ」

「貴様……何を企んでいる」

「何も企んじやいないわ……ただ、貴子は姫様のお気に入りなのよ。それが殺されるのは困るわね。私の患者でもあるし」

「……案内してもらおう。あの馬鹿は何処にいる」

「着いてきなさい。少し急ぐわ。ものの五分でつくわよ」

永琳は立ち上がり、屋敷の外へと急いだ。

複雑に入り組んでいたはずの屋敷が簡単な間取りに変わっていたが、そんな事は意に介さない。

藍にとつての問題は、もっと別の所にあった。

永琳のことを信用するわけなどないが、貴子の名を出されてしまうと話が変わってくる。

何せ、貴子は赤マルの要注意人物だ。

過去二度にわたる異変でも関連性を疑われているし、先の春節異変では実際にその姿を確認している。

それが今回もとなると、事は一刻を争う。

しかも、永琳によれば貴子は妖怪と化しているらしい。

これは貴子だからというわけではなく、一大事だ。

人間が妖怪になることは滅多にない。

それは紫が妖怪と人間の境界を厳粛に調整し、監視しているからである。

それでも時折その掟を破る者がいる。

そう言った無法者は皆殺してきた。

当人が本意であろうと不本意であろうと、妖怪と化してしまった人間に命は無いのだ。

今回は貴子の出現と人間の妖怪化。

二つの事件が重なって同時にきた。

これを解決せねば異変の幕は閉じられないだろう。

今、紫も幽々子も霊夢もない。

すなわち自分が解決せねばならない。

普段なら雑作もない事だろうが、敵を見張りながらというのはイレギュラーだ。

果たして自分にこなせるかどうか……また、貴子は風見幽香との目

撃情報も多い。

もし風見幽香がいた場合、交戦になる可能性が高い。
自分に奴を倒せるか……。

藍は無言で心の帯をキツく締め直した。

永琳はその様子を見て、少しだけ微笑んだ。

その意図は、本人にしか分からない。

「……なあ霊夢」

「何よ」

「私たち、勝ったんだよな」

「……ええ、そうね」

「そうか……そうだよな。勝ったんだ。異変を解決したんだ」

魔理沙は地面にぶっ倒れながら握り拳を上げる。

霊夢もその隣に腰を下ろして、瞼を閉じた。

「……それにしても、あつついわねえ」

「あの術に比べりやマシだろ？」

「暑さの種類が違うのよ」

「我慢しな。もう魔力は残ってないぜ」

「残念。もう一回あの技を使って欲しかったんだけど」

「ありや強力だからな。生身に撃ったら怪我するぜ」

「魔法つてのも不便ねえ」

「アリスに頼めよ。魔力は有り余ってるだろうからな」

魔理沙はそう言って目線で示したが、アリスは手をヒラヒラと振って拒否する。

「ダメ。私もクタクタ」

「なんでお前が疲れてんだよ」

「アンタたち二人分の囷を作ったのよ？ それも人形なしで」

アリスが言っているのは、先程の戦いで現れた偽物の魔理沙たちだ。
輝夜がドテツ腹を殴り抜いたにも関わらず、倒れるどころか血すら

流さなかったもの。

「たかだか人形を作るだけの魔法だろ？お前なら雑作もないと思ってたんだがな」

「作るだけならね。それを動かすとなると結構神経使うの。それに……」

「なんだ？」

アリスは指を何度か開いたり閉じたりして、それから溜息をついた。

「輝夜の攻撃で吸い取られちゃったのよ、魔力」

「そんな技だったのか？」

「尋常じゃなかったわね。とんでもない引力。まるでブラックホールみたいだったわ。今日が満月じゃなかったらどうなってたか」

「お前に囷を頼んで正解だったぜ。私が喰らってたら即死だ」

「あんな危険な作戦、二度と御免よ」

「言つたろ？お前がいるんだから私は死なないってな」

「私が死ぬ所だったわ。ほんと迷惑」

「生きてるんだから文句は言いつこ無しだぜ」

「はあ……連れてこなきゃ良かった」

「……そう言うな。結構、感謝してるんだぜ。お前が私を連れ出したこと」

「何よ急に」

「二度は言わないぜ」

「はあ……まあ良いわ。今日はもうクタクタ。さっさと家に帰って眠りたいわ」

「同感だ」

魔理沙はアリスの手を借りながら起き上がり、服についた土を手で払った。

帽子を被り直して、箒に跨る。

「じゃあな霊夢」

「ええ、おやすみ」

そう言つて、家に向かい飛び立とうとした矢先。

魔理沙は目を見開いた。

眠気が失せるような光景だった。

「何だありや!」

「どうしたの?」

「妖怪……か? 分からないが、何かが暴れてんだよ」

「……マジ?」

「嘘だったら嬉しいか?」

「ええ。歓天喜地だわ」

「そりや残念だ」

魔理沙は少し申し訳なさそうに呟いた。

その意味を理解して、程なく霊夢も絶望する。

「知らないふりして帰りましょ」

「名案だな」

「珍しく三人の意見が合ったわね」

「駄目に決まってるでしょう?」

「ダメか……ならしようがない」

「魔理沙とアリスはもう帰っても良くてよ」

「そりや良かった。じゃ、頑張れよ霊夢」

「ええ! 何で! ……って、いつの間に行ったのよ紫」

「さつき来たばかりよ」

宙に浮かぶ隙間から長い金髪が姿を表す。

そこから顔を出したのは、若干疲れたような表情の紫だった。

「元凶は倒したみたいね。良かったわ。幻想郷は救われた」

「まだ仕事が残ってるみたいだけどね……」

「すぐに終わるわ。行きましょ」

魔理沙が小さく手を挙げる。

「……私たちも行くぜ。毒をくらわばって奴だ」

「私たちって、私を入れないでよ!」

「ここまで来たら最後まで見届けようぜ」

「嫌よ」

「あつそ。ならさつさと帰りな」

霊夢と紫の後を追っていく魔理沙。

一人残されたアリスにぼつねんとした空気が舞う。

「……行くわよ！行けば良いんでしょ！」

幻想郷における大罪。

それは三つ。

博麗の巫女を殺すこと。

人里の人間を殺すこと。

人間が妖怪と化すこと。

どれか一つでもしでかせば、巫女か賢者が飛んでくる。

秩序の平穏を守るための鉄則。

それを破った者に待ちうけるは、無慈悲な死のみ。

「……どうしてこうなったかは聞かないわ。過程なんてどうでもいい」

「有るのは今この瞬間の現実だけ。実に愉快で残酷ね」

霊夢と紫から出た言葉は、ただそれきりであった。

紫はスキマを多数繰り出し、霊夢もまた呪詛を詠んでいる。

「驚いた。まさかとも思わなかったぜ」

「人非人の成れの果てね」

少し遅れて到着した魔理沙とアリス。

遠くに浮遊しながら事の結末を見届けんとする。

「さあ、一体何があったんだ。話してもらおうか。レミリア」

「……分からない」

「何で、貴子が暴れてんだ」

騒ぎの中心で暴れ回っている妖怪は、低い地響きのようなうめき声を上げた。

その妖怪の姿形が、魔理沙の知る貴子のものと瓜二つだったのだ。

「幽香と貴子が合流したの。そしたら貴子の様子がおかしくなった。

原因は分からない……いや、一つだけ考えられる事が有るわ」

「何だ。言ってみな」

「貴子には私の妖力が入っている……パチエの魔力も、おそらくはあの亡霊の霊力も……」

「……だからどうなんだ？」

キョトンと首を傾げる魔理沙に、やれやれと言いながらアリスは捕捉した。

「貴子……だったっけ。体の中にそんな物騒な物が流れてたんでしょ？空を見なさい魔理沙。今日は何の日？」

「……満月か！」

「そう。体の中にあつた強大な力。そして妖怪の力を強める満月。そして……幽香に出会ったことが起爆剤になった」

「その通りよ」

不意に、三人のものではない冷たい声ができる。

けして大きく無いはずだが存在感のある声は、アリスと魔理沙に戦慄を走らせた。

「誰だ！」

「八意永琳と言う者。その魔法使いさん。今の説明はおおむね正解よ。ただ一つ抜けていることがある」

「……何よ」

「それは、貴子の中には元から何かが眠っていたという事。それが何かは分からないけど、それが目覚めてしまったのよ」

「そう……あの人間にねえ」

「人間は見かけによらないわね」

「……それで、貴方は何しにきたの？手錠なんかハメて」

「本題はここから。貴子は今妖怪と化している……いや、なりかけている、が正しいわね。おそらく意識はない。けれどももしこのまま妖怪になれば殺されてしまうわ」

「へえ、そりや大変だ」

「ここに一発の弾がある。これを鈴仙という兎に渡してきてくれないかしら。私は生憎、コレだから」

そう言つて、結界で固められた両手首を示す。

「弾？どうするつもりだ」

「鈴仙なら分かるはずよ。この弾の意味が」

「……よし、分かったぜ。鈴仙だな」

「感謝するわ。鈴仙はあそこにいるはずだから。頼んだわ」

魔理沙は永琳から手のひらに収まる大きさの物体を受け取る。

そして箒に跨り飛び立った。

「……貴方は行かないの？」

永琳は意地悪くアリスに問いかける。

アリスは髪をかき上げながらつつけんどんに言った。

「さつきからそこで黙ってる狐が、二人つきりにしないでくれって訴えてるのよ……それに、ああ言う仕事はアイツみたいなのにやらせれば良いの」

「面倒くさがりなのね」

「合理的と言ってちょうだい」

貴子が尋常では無い目つきで辺りを睥む。

囲むのは三名。

風見幽香。

博麗霊夢。

八雲紫。

それぞれが強烈な攻撃を放っている。

しかし貴子は容易くそれらを躲した。

「何であんな力を……不味いわね」

「霊夢！結界の準備をなさい！」

紫の指示を受けるよりも早く霊夢は動き始めている。

戦い方を仕込んだのは紫。

一手先の指示くらい聞かずともわかる。

だが、戦況は揺れた。

「勝手な事を言わないでくれるかしら」

風見幽香が右ストレートで八雲紫を殴り飛ばしたのだ。

竹林を薙ぎ倒しながら吹っ飛ばす。

霊夢は結界の展開を止めて臨戦態勢を取る。

そこで幽香は、己の右肘から先がないのに気づいた。

「チツ、スキマが……」

「どういうつもりかしら。風見幽香」

スキマから紫が現れる。

どこまで吹っ飛ばそうと関係のない事なのだろう。

幽香もまた右腕を再生し舌打ちをする。

「コイツは私のモノ。コイツを殺していいのは私だけなのよ」

「掟破りは見逃せないのよ。たとえ誰のモノであつても」

「部外者が手を出すな」

「あら、こちらの台詞ですわ」

幽香は傘先を紫に突きつけ、元から鋭い瞳を一層吊り上げて睨みつけた。

戦いは三つ巴の様相を見せていく。

「……んん？」

鈴仙は目覚めた。

何者かに己の肩が叩かれているのだ。

「ふあああ……しししょー、もうあさですか？」

「何寝ぼけてんのよ」

「っー」

咄嗟に飛び起き、手を拳銃の形にする。

そしてそれを肩を叩いていた主——咲夜に向けた。

しかし咲夜は諸手を挙げて先頭の意味はない事を示す。

隣にいた魔理沙が鈴仙にあるものを投げ渡した。

それは永琳から受け取ったものだ。

「お前が鈴仙だな？それはお前の師匠から受け取った者だ。お前に渡せば分かるはずだつてな」

「これは……」

「分かったか？私にはさっぱり分からん。弾丸か？」

「違うわ。これは……薬よ」

「葉だあ!？」

「ええ……そういう事ね。分かったわ!案内して!」

「よしきた!後ろ乗ってけ!」

魔理沙が箒に跨り、その後ろに鈴仙も飛び乗る。

フルスロットルで屋敷を飛び去った。

妖夢と咲夜も飛び体制を取る。

飛び立つ寸前で妖夢が咲夜に声をかけた。

「……傷は大丈夫?」

「あら、お優しいのね」

「……私の落ち度だから」

「うふふ。気にしなくて結構よ。これでも強く育てられていますの」

「……そうか」

そう言ったやり取りを経て、後ろから咲夜と妖夢も同行する。

激戦地へと、ものの数分でたどり着いた。

幽香が放つ、紫の顔面目掛けての回し蹴り。

紫は緩慢な動きでその蹴りを止める。

紫は貴子にも幽香にも攻撃をしない。

ただ受け続ける。

攻撃をするのは……

「無双封印!」

霊夢だ。

お札の波を貴子はすり抜け、霊夢に向かっての正拳。

首先で躲し、その顔面にお札を貼り付けた。

しかし、貴子の攻撃は止まない。

「妖怪封じのお札が効かない……」

「動揺してはダメよ霊夢。封印して動きを止めなさい」

「……分かってるわよ!」

不意に、甲高い音が響く。

まるで何か高速の物体が空気を切り裂くような。

「待たせたなあ！」

音の主は魔理沙であった。

鈴仙がその後ろで貴子に狙いをつけている。

「貴子に隙を作って！」

鈴仙はそう叫ぶ。

それが自分に向けられたものだとして理解して、霊夢は顔に筋を入れる。

「しづといわね！」

霊夢は、次の攻撃は右足での蹴りであると予測した。

しかしその予想は外れる。

「っ!？」

事実貴子は蹴りを出そうとしていた。

しかし、足が地面から離れなかった。

足に紅い槍のような物が刺さっていたのだ。

「手出しは無用だと思ったが、運命が変わった」

レミリアは空中で尊大にものを言う。

手からは、紅い魔力が立ち昇っていた。

「レーヴァテイン。右足は封じたぞ」

「あら吸血鬼さん。奇遇ね」

対面で幽々子が扇を広げる。

見ると貴子の左足には、黒い蝶が載っていた。

両足を封ぜられ、貴子は身動きを取れなくなる。

霊夢はそこに、一枚のお札を貼った。

「動きは止めた！効果は短いわ！急ぎなさい！」

鈴仙は魔理沙の箒の上から、永琳からもらった丸い薬を人差し指と中指で挟み、手を拳銃の形にした。

左手を右手に添え、片目を閉じ狙いを澄ます。

「……………」

銃声。

静かな竹林に、余韻を残して鳴り響く。

硝煙を上げながら鈴仙はダラリと脱力した。

霊夢は貴子に近づこうとする。

「近づいてはダメよー！」

紫が叫び霊夢の足を止める。

霊夢の鼻先を貴子の腕が掠めた。

「っ効いてないの!?!」

霊夢は責めるような眼差しで鈴仙を見る。

鈴仙は焦点の合わぬ目で震えながら言った。

「外した……私が攻撃を……」

己の手を見ながらブツブツと言いつける。

霊夢はそれに一瞬気を取られて、後ろを見逃してしまった。

「幽香……何をっ！」

幽香が貴子の肩を掴む。

そして顎に手を添えた。

「……まよか」

幽香の口には、鈴仙が外した葉がくわえられていた。

幽香は貴子の顔を上げ、その唇に己の唇を重ねた。

「っ！」

しばらくの間、その奇妙な光景を黙って見ることしかできない周りの者たち。

体感では長く、実際には短かったであろうその出来事はようやく終わる。

貴子は口移しで葉を飲まされた。

そして地面にぶっ倒れた。

……んん。

ああ、朝か？

何だか全身が無茶苦茶に痛い……また呑みすぎたんだっけか。

……いや、違う。

昨日私は異変に出て、それで……。

「ここは……迷いの竹林？」

寝そべっている床が、いつもの安い布団じゃなく土だ。

何があっただんだっけか……。

「起きたか？」

「……魔理沙か」

「こんな所で寝るなんて随分変わってるな」

「そう言う気分だったんだよ」

「へへ、アンタはやっぱ面白いぜ。ほら、これを受け取りな」

「何だ？」

「これは……紙だな。」

特に変哲もない。

「招待状だ。今夜博麗神社で宴会をする」

「宴会？なんで私が」

「異変に関係した奴はみんな呼ぶ決まりなんだよ。死んだり生き返ったりしてアンタは来れてなかったけど」

「……分かった。幽々子とかも来るんだろ？」

「ああ、来ると思うぜ」

「久しぶりに会いたいからな」

「……本当は昨日会ってるんだけどな」

「ん、何か言ったか？」

「いや、何でもないぜ。そんじゃ、隣にいる奴にも言っといてくれな」

「……隣？」

隣に誰かいるのか？

こんな野原で寝っぱらう間抜けが私以外に居ないと思うが。

一体誰が……。

「っー」

可愛い寝顔。

慎ましい寝息。

そして凶悪な緑髪。

「幽香!？」

何で幽香が！

いや、そもそも何で私がここに居るのかも分からないが……。それに幽香の拳。血塗れ……。

私は思わず叫んでしまった。

そしてそれは失敗だった。

「……もう朝？」

「……多分昼だ」

「そう……」

心なしか普段よりも高い声。

予想は思わぬ形で外れた。

朝から殺されるかと思つたが。

思えば私は幽香の寝起きを見たことがなかった。

だから目の前でボーっとしている幽香は目新しかった。

不意に一つの悪戯心が湧く。

「なあ幽香、何で私たちこんな所に居るんだ？」

「……あら、覚えてないの？」

「ああ、全く」

幽香が起き上がり私の横に座る。

その目には敵意こそないが、それよりも有害な何かがあるような気がした。

「こう言うことよ」

「っん!？」

幽香の顔が、今までのいつよりも近かった。

それはもう、唇同士がくっつくくらい。

ああ、柔らかい……じゃなくて！

「っ何してんだ！」

「昨日のこと覚えてないの？」

昨日!？」

何で昨日の私は幽香とキスしてるんだ……。

こんな場所で二人並んで寝っ転がって……それに幽香のこの反応

……。

まさか……まさかまさか。

私、やっちゃまったのか……？

そんなわけないだろ……ないよな？

「なあ幽香」

幽香と目が合う。

明らかに、以前のものとは違う眼差しであった。

日光の加減もあつてか知らないが、頬が赤らんでいた。

私の頬から血の気が引いて真つ青になっていくのだけがよく分かった。

博麗神社。

いつも誰も居ない怪しい所。

だが今夜の博麗神社は格別に騒がしかった。

妖怪、亡霊、蓬莱人。

多くの人外がそこに集まって宴会をしようと言うのだ。

それはそれは喧騒の夜となることだろう。

「はえー、こりや凄いなあ霊夢」

「こんなの面倒なだけよ」

「知り合い全員来てるんじゃないか？」

「アンタが馬鹿みたいに招待状配るからでしょ」

「良かったじゃないか。人が集まるってことは人気の証拠だけ」

霊夢は賽銭箱の前に座りながら一つ溜息を吐く。

そして、鳥居の奥にある人間を見た。

「ここが博麗神社か……初めて来たな」

貴子が鳥居をくぐった。

一層、中の盛り上がりは増したように思えた。

その後ろから幽香が姿を見せる。

一気に、全員が押し黙った。

「とりあえず霊夢に挨拶か」

貴子が霊夢に近づいてくる。

「アンタも大変だな」

「ええ、誰かさんのせいだね」

「これは差し入れだ。後で皆に出してくれ」

「ん、分かったわ」

それだけ言っただけで、霊夢は手をひらひらとふる。

さっさと行けのサインだ。

貴子は境内へ出て、宴会へと混ざっていった。

「……アンタも行きなさいよ幽香」

「私は他の奴と馴れ合う気は無いの」

「ふーん。そう言うのなんて言うか知ってる？」

「何よ」

「コミュ障ってのよ」

黙って聞いていた魔理沙が、ケケケつと笑った。

宴会は進み、全員が程よく出来上がってきたころ。

幽香と貴子は二人で月を見ながら酒を呑んでいた。

「……思えば、ヤクザに脅されたのが全部の始まりだったな。それからこうして色々あって、お前と酒を呑んでるんだから人生は不思議だ」

「そうね……」

「今夜は死ぬくらい呑もう。こんな楽しい宴会は滅多にない」

幽香はお猪口を傾け、そして言った。

「……ねえ貴子」

「ん？」

「……月は、今でも綺麗かしら？」

「今夜の月は綺麗だ。多分、明日もな」

「でも、表面は歪なのよ」

「それを含めて綺麗なんだよ」

幽香は珍しくその鉄面皮を崩して苦笑いをした。

酒が入っていたからかもしれない。

「意味なんて理解してないでしょう」

「……そうだな。少しも意味がわからん」

「やっぱり。学がないわね」

「でも分かることがある。例えばどんな形をしてようと月は綺麗だ」

「そうね」

「私は殺されそうになったとしても、そんな月が結構好きだ」

「……っ」

幽香が貴子のことを驚いたように見る。

貴子は恥ずかしそうに、しかし誇らしげに笑った。

「乾杯だ。幽香」

「……乾杯」

コツンと小気味の良い音が鳴る。

貴子に一本取られた幽香。

酒のせいか、幽香の顔はますます赤くなった。

博麗神社はますます盛り上がっていく。

異変を起こした側も解決した側も、肩を組んで歌を歌っている。

宴会は、いつまでも続いた。

月光は神社を照らす。

死ねない少女と頑固な寺子屋の教師を。

天才巫女と努力家な魔法使いを。

月の賢者を。

スキマ妖怪を。

吸血鬼にメイド、門番にもやし。

亡霊、庭師。

そして……。

月光は二人を照らす。

まるでそこだけが別の世界かのように。
ふんわりとした月明かり。
最強の花妖怪とろくでなしの呑んだくれ。
二人が出会い暮らした夏が、もう時期に終わる。
向日葵が咲かなくなる季節が来る。
されど二人の関係は、まだまだ終わらないだろう。
満ちては欠ける、あの月のように。

永夜抄編 完

その日暮らしがなくな頃に

——あるうさぎの苦悩

拝啓 師匠へ

どうも、鈴仙です。

先の異変では姫様を守るための大立ち回り、感動の一念に尽きました。

御多忙の事と思い、書き置きの手紙という形でお話をさせて戴きます。

私、鈴仙・U・イナバは命を狙われています。

なぜ、誰に、命を狙われているのかはわかりません。

ただひとつ判る事は、永夜異変と関係があるということです。

藤原妹紅の死体をもう一度よく調べてください。生きています。

妹紅の死は未知の植物によるもの。

証拠の花はこれです。

どうしてこんなことになったのか、私にはわかりません。

これを師匠が読んだなら、その時、私は死んでいるでしょう。

……死体があるか、ないかの違いはあるでしょうが。

これを読んだあなた。どうか真相を暴いてください。

それだけが私の望みです。

「……何よこれ」

「面白くないですか？」

「何だか首が痒くなりそうな文章ね」

永琳はため息すらつかず半目で鈴仙のことを見た。

明らかに呆然とした視線である。

「貴方がいつ命を狙われたのよ」

「常日頃ですよ」

「そう。処方箋が必要みたいね」

「ところで師匠」

「なに？」

薬の調合を止めて顔を上げる永琳。

そこには訝しげな表情の鈴仙がいた。

「あの薬って何だったんですか？」

「……貴子に打った薬のこと？」

「はい。妖怪を人間にする薬なんて無かったと思うんですけど……」

「そうですね。確かに妖を人に変える薬はないわ。人魚姫のように泡と
なって消えてしまう恐れがあるもの」

「それじゃあの薬は一体……」

「私の弟子なら分かるでしょ？ 今日一日で考えなさい。あの薬の効用
を。宿題にしておくわ」

「げげ……そんな事なら聞かなきゃよかった」

「もし解けたらご褒美を上げるわよ」

「よーし！ 頑張りますー！」

そう言っつて鈴仙は部屋を後にした。

一人残された永琳は薬の調合を再開しつつ呟く。

「……あの子のやる気は零か忝しかないのかしら。まるで二進数みた
いね……ふふふ」

自分で言ったことに我ながら面白いと自画自賛する永琳。

年齢が億単位の存在が考えるギャグなのだからつまらないはずな
どない。

そう永琳は思っているが、彼女はしばしば空気を凍らす癖がある。

タブーな話題に触れたり話が面白くなかったりが原因だ。

タチが悪いのは、本人が無自覚と言うことであろう。

それに付き合わされる鈴仙もまた、苦勞人である。

「とはいえ薬の効能ねえ……私にはさっぱり分からないわ」

鈴仙は一人で呟く。

彼女には、人の目を見れないという癖があった。

人を狂わせてしまうその瞳の能力もあって、誰とも目を合わせずに
いた。

その彼女が唯一直視できたのが貴子であった。
故に、鈴仙は貴子に対して興味を抱いていた。

「妖怪を人間にする薬なんて聞いたこともないし……」

「お困りのようだね」

「あ、てゐ」

「貴子に使った薬の効能？」

「うん。師匠に聞いたら自分で考えろって」

「それじゃあ不幸な鈴仙ちゃんに、ヒントをあげちゃおうかな」

「ヒント？もしかしてアンタは答え知ってるの？」

「考えれば分かることだよ」

「なら答えを教えなさいよ」

「そんな事したら面白くないでしょ？」

「……ケチ」

「アンタも天才の弟子ならこれくらい分からないと」

「だから考えてるんでしょ？」

「そうさねえ……ヒントと言うかほぼ正解なんだけど、一つだけ言えることがあるよ」

「まどろいわねえ、言ってみなさいよ」

「貴子を狂わせたのは、満月だった」

「そんなの分かってるわ」

「まあまあ大事なのはここから。ほら鈴仙、よく考えてみなよ。ガサツで言葉が荒いから忘れがちだけどさ、高子の性別はなんだった？」

「……女でしょ？」

「そそ。それがヒントだよ」

「……まさか」

鈴仙は思わずこめかみを指で抑えた。

それは自分の出した答えが、妙に別方面で問題を孕んでいそうな気がしたからだ。

その日の夜。

永琳が基本滞在している薬剤室にて。

鈴仙は永琳に茶を差し出した。

「師匠、少しお時間をよろしいですか？」

「ええ。どうしたの？」

「貴子に打った薬の件なんですが……」

「答えは分かっただのかしら？」

「はい……ですが、まだ確証がありません。ですので一つ質問をさせていただきます」

「構わないわ」

永琳は茶を飲みながら続きを促した。

「その薬を使うのは主に女性ですか？」

「……ええ。どうやら分かったようね」

「……はい」

「さあ、答えを聞かせて」

「その薬の名前はエルペイン。効能は……生理痛の軽減です」

永琳は湯呑みを置いて微かに微笑んだ。

かたや鈴仙の表情は、怒られたあとのように暗かった。

「正解よ。やるじゃない」

「原因物質の生成を抑え下腹部の緊張を緩和する効果があります。服用は三回を限度とし四時間以上の服用間隔が必要です」

「……詳しいわね」

「月の兎たちには常識です……しかし、師匠」

「どうかした？」

「メンスとかアンネとか……そういうデリケートな事をこんな冗談小説で取り扱うのは拙いと思うんですけど……」

「何を言ってるか分からないけど、大丈夫よ。後で分かったんだけど直接的な原因はそれじゃなかったの」

「え？」

「貴子がストロベリーウィークだったのは事実だけど、妖怪になった事とはあまり関係がなかったの」

「じゃあ本当の原因って何ですか？」

「……急性アルコール中毒よ」

「……へ？」

「あの馬鹿、二日酔いの状態で竹林に来たの。その結果汗をかいて体内のアルコール濃度が跳ね上がったのよ」

「そ、そんなことで？」

「とんだ笑い話ね」

「それじゃ笑いは無いですよ！」

鈴仙の耳に深い皺が刻まれたのは言うまでもない。

なお、宿題のご褒美は肩たたき券であった。

無論、鈴仙が永琳の肩を叩くのだ。

後に鈴仙はこう述べる。

「何億年生きたらあんなに肩が凝るんでしょうか……」

その後、鈴仙の姿を見たものは居ないとか。

——人か崇りか偶然か

「……それで、話って何だ」

「少し確かめたいことがあったのよ」

とある日の昼下がり。

私は永遠亭、永琳の元を訪ねていた。

ここへ来るのも手慣れたもので、迷いの竹林を迷わなくなっている自分が少し嫌になる。

「人里で起きた事がいくつかあるわね。まずはそれを整理しましょう」

「起きた事？例えは何だ」

「そうねえ。最近だと、例の流行り病とかかしら」

「ああ、そう言うのか」

「ええ。ここ最近は出来事が多かったから知っておきたいのよ」

「……何か企んでるんじゃないだろうな」

「不安なら八雲でも風見でも呼びなさい」

「そいつらを呼ぶ方が不安だよ」

「そう。心配しなくても大丈夫よ。ここには外の情報があまり無いから聞いておきたい、それだけだから」

「分かった。ただ私も、最近里に入ったばかりだから詳しく無いぞ？」
「十分よ。さっそく聞かせてちょうだい」

「そうだなあ……最近だと……」

私は永琳に自分が知っている限りの情報を話した。

といつても知ったところで雑談の種になるかどうかのつまらない話ばかりで、得られる物は少ないだろうが。

主に話したのは、

・紅霧異変

・春雪異変

・大飢饉

・流行病

の四つだ。

「最近だとこんなもんだろ」

「……貴子。ここからする話は全て私の考察……いえ、妄想の域だから、深く考えずに聞いて欲しいわ」

「何だよ」

焦ったく話す永琳。

妙に低い声色だった。

「まず二つの異変は貴方が引き起こしたのよね？」

「……もうそれでいいよ。否定も面倒だ」

「その結果不作で飢饉が起きたと……」

「ああそうだよ！掘り返すなそんな事！」

「問題はここからよ。貴方は飢饉を解決するために吸血鬼達の館から西洋の食材を仕入れたのよね？」

「ああ、種をもらってな。すぐ育ってくれたよ。いい案だろ？」

「なるほど……その館に、人間は居た？」

「……ああ、一人居た。時を止めるビツクリ人間がな」

「最後の確認。その人間は高熱を出したりしてなかった？」

「……っ！」

永琳からの質問に、私は身の毛もよだつ思いがした。

いや、実際よだったかかもしれない。

そんな言葉が有るかは知らないが、身の毛がよだちまくりだった。そして強烈な嫌悪感、あるいは焦燥が私を襲った。

嫌な予感が、鮮烈に脳裏をほとばしった。

「咲夜は……館にいた人間は確かに一度高熱を出して倒れた。それがどうしたんだ……？」

「やっぱり……貴子、落ち着いて聞きなさい」

「何だよ……」

思わず固唾を飲んでしまう。

膝の上に置いてある手に力がこもる。

永琳は殊更に重々しく告げた。

「館からもらった野菜は、人体には毒だったのかも知れないわ」

「何だつて……？」

「元々は西洋の種。それを育てたのは妖怪。もしかすると、妖力に当てられていたのかも知れない」

「だ、だとしたら、流行病の原因は……私が配った野菜かつ!？」

「決めつけるのは早いわ。それに悲観することでも無い。私は貴方を非難したくてここに呼んだわけではないの」

「で、でも寺子屋の生徒達は……あんなに苦しんで」

「おそらくはその咲夜という人間も野菜の毒が効いたのでしよう。ジャガイモの芽にはソラニンという毒。インゲン豆にはフィトヘマグルチニンという毒があるの」

永琳は落ち着き払ってただそれだけを告げた。

私に取っては死刑宣告よりも、親の死を知らされるよりも残酷な一事を。

「私は……また間違ったのか」

「……いいえ。貴方は何一つ間違っていないわ」

「だけど……」

「毒を取って余りある栄養が野菜には有る。誰一人死ななかつたのだから貴方が間違った事なんて何一つ無いのよ」

「……そうなんだろうか」

「間違いがあるとすればそれは悔いる事よ。過去を悔いたつてどうに

もならない。誰一人死なずにすんだ。それだけが事実。貴方を感謝している者もいる。その感謝に答える事が大切でしょう?」

「……死ななかつたなんて結果論だ。里の奴ら……子供達には辛い目、危ない目に合わせた。慧音が泣く事だつてなかつたはずだつ……」

「じゃあ貴方は過去に戻れたとしてどうするの?野菜を配らず皆を飢饉で死なすつもり?」

「そんな事しない!……もつといいやり方で皆を救うさ」

「いいやり方なんて無いわ。何も捨て払わずに全てを得ようなんて傲慢よ。貴方は良くやった。薬師の私が断言するわ」

「……それでも、この事を皆に伝える必要がある」

「ええ、好きだけ伝えなさい。そこにいる人にね」

永琳は後ろからある人物を呼んだ。

——何でもお前がここに。

そう聞くことすら、出来なかつた。

何度も見たことのあるその目には大きな涙が溜まっていて、私を一層哀しくさせたから。

「慧音……」

「貴子……お前つてやつはっ!」

私に近づき、じつと非難するような視線で見据えてくる慧音。

とうとうバツが悪くなり、そつと目を逸らそうとした。

その時だつた。

「っ!」

私は平手打ちをされた。

頭突きなんかより何倍も、痛かつた。

しかし、当然の報いだ。

「馬鹿者つ……」

「……っ!?!」

感じるのは、何よりも優しい柔らかさ。

ハリネズミみたいに刺々しく荒んだ心を包み込んでくれるような、慈愛に満ちた包容力。

慧音が私のことを抱きしめてくれていることを、程なくして理解した。

「貴子……お前と言う奴は、何て馬鹿なんだっ……」

「慧音……」

私の肩に雫が溢れる。

震えた慧音の声が、消え入るように響いた。

「一体誰がお前のことを憎む……誰がお前を責め立てる！」

……違う。

私なんかがいなけりや、里は毒を喰らわずに済んだだろ。

浅知恵で誰かを助けようなんて傲慢だったんだ。

無知は罪だ。

無力は罰だ。

誰かを救えるなんてとんだ思い上がりだったんだ。

「私は罪人だ……私自身が許せないのさ」

「貴子、己を許せ……お前は罪人なんかじゃない。まして悪人でもない。お前は人里を救ったんだよ……何度も何度も」

「……救ったもんか。私が種を蒔いたんだ」

「救ったんだ！お前は気づいてないだろうが、病気や飢饉なんかじゃない。もつと深刻な問題を解決したんだ」

「何だそれ」

慧音の腕が、より強く私の体を締め付ける。

慧音の言葉が、より強く私の心を締め付ける。

「それは絆だよ。里の者達はお互いを信用し、頼りあう事の大切さに気づいたんだ。それこそ貴子、お前の手柄なんだ」

「……そんなの私には関係ない」

「ある。大いにあるんだ！お前がいなきや里は今頃滅んでいたさ！」

「違う……私なんかいなければ、飢饉すら起こらなかった。里は平和だったんだ」

「今回はそうかもしれない……だが、これからの里は飢饉や病魔には負けん。お前が里の差別を無くしたんだ。貴子、お前なんだ……お前がやったんだよ！」

「私なんかじゃ……」

「お前なんだ！もう自分を許してやれ！お前はもう私たちの仲間だ！」

「私が許しても……世間が許してくれんさ」

私がそういうと慧音は一呼吸置いて、すこし怖い顔をして言った。

「世間とは何のことだ。里か？大人か？違うな。世間というのはとどのつまり、お前だろう」

「……私？」

少しうなづいて、長い息を吸う慧音。

怒鳴られるのかと思っただが、違った。

「ああ、お前は自分の事を許せないんだ。出会った時からずっとそうだった。お前はずっと自分を責めて、呪って、傷つけるんだ」

「そんなこと……」

ないと言い切れないことが、私の人間としての弱さだ。

己を呪うこと、忌避することは思い返すまでもなく多い。

それが当然の事だと思っていた。

「最初、お前は差別や偏見をもつものかもしれない奴だと思っていた。でも違ったんだ。一番お前を差別しているのは、お前だよ。自分のことすら愛せないんだ」

「愛してるさ。人並み程度に」

「貴子。お前のことを恨んでる奴なんて一人もいない。逆にお前のことを好きな奴は沢山いる。ここにだって一人いる。もう自分を……責めないでくれ」

……慧音が泣くのをみるのは何回目だろうか。

まして、自分のために誰かが泣くのをみることが今まであったろうか。

くそつたれだ。

私はいつも誰かを悪い方向で泣かして、悲しませていた。

心配の涙を流されることなど、ただの一度も無かった。

だからこそ私には慧音の涙が何よりも堪える。

慧音の号哭を見かねたのか永琳が声を発した。

「貴子……何回人を泣かせれば気が済むの。シヤキツとしなさい。貴方がウジウジしては、皆も気が気でなくってよ」

「……永琳、ありがとう」

慧音の肩に手をやり、そっと背中をさする。

「ありがとう、慧音。私のために……」

しやくりあげる慧音の荒い呼吸が治るまで、何も言わなかった。いつもは玲瓏とした慧音だが、泣く時は子供のように涙を流す。

私は胸の奥から込み上げてくるモノを抑えつつ、自戒の意を込めて言った。

「精神的に向上心のない者は馬鹿だ」

「え？」

「馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を呟いた。

そうして、その言葉が慧音の上にどう影響するのを見つめていた。

「私は馬鹿だ」

一体私は馬鹿だった。

だが、慧音が私を許すと言った。

私は皆が幸せになれるように自分が出れることをした。

私は何一つの悪気など無かった。

神に問う。無抵抗は罪なりや？

「違う」

私は誰かを傷つけたかった訳じゃない。

まして褒められたかったわけでもない。

ただ、幸せになって欲しかった。

「私は……私を、許せない」

「お前っ、まだ！」

「でも慧音。お前が私を私を許すと言ってくれた。だから私も私を許してやりたいと思う」

「貴子……」

「ありがとうな、慧音」

慧音が私を許すと言ったから。
私も私を許してやりたい。
またしても慧音の嗚咽が響く。
なんて幸せ者だろう。
こんなに想われているのだから。
良かったな、私。

——死後のたけのこ

私が入里に来てから結構経った。
慣れとは全く恐ろしいモノだ。

最初は里の勝手など全くわからなかった。
だが今は違う。

里の事なら有る程度わかる、ようするに入里のプロになったのだ。
その実力を発揮する時がやってきた。

臨時収入があったのだ。
自分へのご褒美をやるには十分すぎる額が。

こういう時、酒を飲んだりしてしまうのは素人。
ハッキリ言って論外だ。

プロなら思わぬ収入があった時にこうする。
団子を食べに行くのだ。

里の中で団子といえばあの店しかない。
幽香にむりやり連れてこられた時は散々だったが、私の誠実な対応

が花開いたのかやっところさまともに生活する事ができるようになっ
た。

石ころをぶつけられたり団子に剃刀を入れられたりする心配はな
くなつたのだ。

というわけで、今日はみたらし団子をおおう。
甘いものはいつだって私の味方なのだ。

「らっしやい」

「みたらし二本で」

「あいよ」

暖簾をくぐり、店主とのやりとりも済ませたところで私の戦いは始まる。

第一に場所取り。

最も良いのは軒先の長椅子だが、あそこは常に満席だ。

だから店の中で席を確保するしかない。

相席になるのは極力避けたいが……どこかに空いてる席は無いかな？

「おい姉ちゃん、ここに空いてるよ」

私がオドオドと席を取りあぐねていると、隅の方からハリのある良い声がした。

出来れば一人が良かったが、親切を受けたからには断る道理もあるまい。

お言葉に甘えて相席させてもらおう。

「ここ、座るよ」

「どうぞ」

「いやあなかなかどうしてこの店の団子は美味しいんだ」

「へえ、一回死んでも団子は美味しいのかい」

「ああ……ああ？」

「久しぶりだねえ。貴子」

「ア、アンタは！小町!?!」

「声が大きいよ」

「すまん……」

見覚えのある顔でケタケタと笑う小町。

不覚だ。

服装が変わっていて気づかなかった。

小町は里でよく見る格好をしていた。

それでも目立っていたけど。

何故目立っていたのかは、胸元あたりを見てくれればよく分かる。

冗談はさておき、コイツは立派な死神だ。

色々あって今はあまり会いたくない奴でもある。

「何でお前がここに居るんだ？」

「何でつて……今日は休みなんだ。それとも死神が団子を食べちやダメなのかい?」

「……私を捕まえるのか?」

「ん? どうしてさ」

「私は生き返った身だ。ルール違反も良いところだろ」

「ああ、そうかもねえ」

団子を食べ終わり、緑茶を啜りながら答える小町。

何も考えていない、あるいは達観しているような飄々とした態度は健在だ。

冬のことを思い出して少しだけ懐かしさを覚えた。

「確かにこつちじゃアンタはちよつとした有名人だよ」

「マジか……」

「でもねえ、しばらくは大丈夫だと思うよ」

「え?」

「今ちよいと立て込んでね。アンタに構ってる暇が無いのさ」

「何かあったのか?」

「これからあるんだよ。大変なことが。まあ、アンタらには関係のない事だよ」

「そうか。なら安心だ」

「どつちみち、アンタは捕まえないさ」

「どうしてだ?」

「何であれアンタは今、生きてんだ。それを死なせて連れてくなんて誰にも出来っこないのさ」

「へえ……」

「顔を見て安心してよ。元気そうじゃないか」

「……まあ、色々あったからな」

「また異変を起こしたんだって?」

「え?」

小町は串を啜えながら言った。

このやりとりは何百回目だ。

またもや不名誉な勘違いをされているらしい。

「夜が終わらないなんてねえ、あれは一体どういうつもりだい？」
「私は無関係だ」

「へえ……とすると映姫様が嘘をついたってか」
「は？」

「映姫様、また貴子が異変を起こしたって大激怒さ」

「またもなにも、私は一度も起こしてないって」

「そうかい。死んだらあの世でそう言いな」

「……もう死ぬのは懲り懲りだ」

「違いない」

少しだけ笑って、立ち上がる小町。

私のみたらしが運ばれてくるのとそれは同時だった。

「それじゃ、元気でね」

「久しぶりだ。呑みにいかないか？」

「……すまないねえ。今、酒は絶ってるんだ」

「そうかい。残念だ」

「ここらの酒は暖かい味だ。嫌いじゃないよ」

「そりゃ良かった」

ひらひらと手を振って小町は店を出た。

アイツは死神のくせに、いつもヘラヘラしてる奴だ。

だけどその時の別れ際の表情はいつになく真剣で、異変が終わって
ホツとしている私の不安を掻き立てるには十分だった。

せつかくのみたらしが不味くなりそうだ。

——ゆかりちゃんマジ賢者

説教というのは本当に悪い文化だ。

全く、誰が始めたのか知らないがこんな文化は廃れてしまえばいい。
い。

そもそも、怒られている方はちっともいい気にならない。

しかも悪質なのは、ストレス発散のために怒りを撒き散らす輩がいることだ。

もつと冷静に穏便にモノを解決しようという気は起こらないのか

ね。

……とまあ、これは結局被害者の論理であつて相手にされるわけもないのだが。

世の中広しと言えど私ほど説教を受けた奴もそういまい。
受けた説教数知れず、言われた罵倒は天の川。

お叱りを受けることに関して、私は相当の達人と言えるだろう。
御察しの通り今回も例に漏れず怒られているわけだが……。
さあ困った。

私はここから生きて帰れるだろうか。

「そう緊張なさらずとも結構よ」

扇子で口元を隠しながら笑うのはなんとビックリ八雲紫。

その扇子、いいセンスですななんて事しか考えられない私を誰が責められようか。

これはなかなかファンなギャグ。

これぞ私の最終奥義、なんちやつて。

……無粋な奴のために解説しておこう。

今のは奥義と扇をかけたハイパー高等テクニク……。

「私の目を見てくださる？」

「はい」

思わず背筋がピンと伸びる。

自由に身動きすら取れず、さつきから汗が顎をダラダラと伝っているのがわかる。

現実逃避もここまでか。

何故であろうか。

私は八雲紫に、正座でブチギレられていた。

「そのお茶、飲んでよろしくてよ？」

「いや、その……」

お前からもらった茶など飲めるか！なんて言えるわけがない。
どこのゴルゴ13だ。

下手な事を口走った日には、頭と体が一緒に居られる保証はない。
ひとまず今は首が健在なことに胸を撫で下ろす。

「本題はなんだ？」

「……幽々子の件もあるから貴方にはあまり手を出したくないのだけれど、流石に目に余るわ」

「何がだよ」

「紅霧、春雪ときてとうとう永夜異変まで起こすんだもの。どういうおつもりかしら？」

「だあ！しつこい！私は何一つ関与してないつつつてんだろ！」

「永夜異変……といっても夜を終わらなくさせたのは私だけど、月が落ちるといふ大異変。その元凶である永遠亭に話を聞いたら、貴方の名前が出るわ出るわ……」

「冤罪だ」

「ではあの夜、迷いの竹林に居たのは何故かしら？」

「……幽香に連れてこられたんだよ」

「幽香が？」

「ああ」

……あの日、私は幽香の元を訪れていた。

私と幽香が出会った場所、向日葵畑さ。

色々あって幽香とは気まずかったんでな……そういう関係を残しとくのは苦手なんだよ。

そこで月を見ながらどーでも良い事を話してたんだ。

あの日は満月だったか。

チビチビ酒を飲みながらダラダラしてた。

酔えもしないくらいの安酒をな。

いつもより大きく見える月をポーッと眺めてたら何だか酔っ払ったみたいに頭がクラクラしてきてね。

幽香も同じだったのかいつもより饒舌だった。

その勢いのまま、こう言っただよ。

「今日は月が綺麗だな、幽香」

そこから先はあんまり覚えてないが……気づいたら迷いの竹林に居た。

どつちみちパチュリーからの伝言やら何やら、迷いの竹林に行く予

定ではあつたんだが……幽香が付いてきたのは誤算だったね。

やたらテンションの高いアイツに連れられてきた。

それが事の真相だ。

「……なるほど。よく分かったわ」

「分かつてくれたか?」

「ええ。貴方がマヌケと言うことがね」

「何一つ分かつてないな」

紫が聞こえよがしに溜息を吐く。

無論私への嫌がらせだろう。

こんな事で腹を立てる私ではないが、ぶん殴ってやろうか。

「では、幻想郷に月が落ちるといふ事の真相も教えて貰えるかしら?」

「だから知らないって言ってるんだろ」

「はあ……もう良いわ。帰って結構よ」

「お前が急に現れただけでここは私の家だからな」

「土に還って結構と言ってるのよ」

「残念だったな。カエルはお前の方さ」

「あら、どうして?」

「下戸下戸ないで、ゲロゲロ吐くだろ」

「……面白くないわよ、それ」

「オツタマげくだな」

割と強めの紫ビンタを喰らって、私はなんとか生き延びた。

それにしても異変の真相か……今回ばかりは完全に無関係だと思
うんだがな。

……永遠亭の昼休み。

鈴仙はふと気になった事を永琳に問うた。

「ところで師匠」

「何かしら?」

「さつき紫と名乗るスキマ妖怪が来て喚いてましたよ」

「あら、紫は何と?」

「月が落ちるとはどういうつもりだったのよ!だそうです」

「またその質問……私たちにも全く身に覚えが無いのに」

「でも天魔の印鑑が押されてる以上悪戯なんかじゃないそうですよ」

「……不思議ねえ」

「迷惑でしたらより強力な幻覚を見せられますが、どうしますか？」

鈴仙は真面目な表情をしながら言った。

その立ち振る舞いに、月で軍人をしていた頃の面影を永琳は見た。

「月が落ちるなんてあるはずなのに、地上の民の言うことはよく理解できません」

「……そう言えば、貴子が何か言ってたわね。ツキがどうこうみたいな事を」

「ああ、アレですか？何か急に貴子が怒りだして、『こんな所に居たらツキが落ちる！』とか叫びだしただけですよ」

「へえ、何かあったの？」

「大方、てゐにイカサマされたんでしょう。あの二人、ずっと病室で花札やってましたから」

「まさか、ツキが落ちる事件の真相は貴子のその発言じゃ無いでしょうね……」

「はははっ。そんなオチだったら笑えませんね」

笑ってるじゃないかと思いつつ、ふと永琳はあることに気づいた。

天才でなくとも分かる一つの違和感。

「ねえ、仮に原因が貴子のその発言だとするじゃない」

「はあ」

「だとすると、それを天魔に伝えたのは誰？私や貴方はあり得ないし……姫様も同じくシロでしょう」

「だ、だとすると……まさかっ！」

「……はつくちゅん！ああ、噂されてんのかねえ。全く、人気者は辛いウサ……」

……兎がつくのは餅か、それとも大嘘か。

つくづくツイてないのは、貴子ばかりであった。

——異変の真相

「はい、これで四光ウサ」

「な、またアガリ!？」

「さてさて今度はどんな罰ゲームにしようかねえ」

「イ、イカサマだ!」

「面白い事を言うねえ。冗談は現場を押さえてから良いなよ」

「くっ……」

永遠亭で入院中。

暇を持て余した貴子は日中ずっととてると花札をやっていた。

そのうちどちらかが、何か賭けなくてはつまらないと言い始め、勝った方が負けた方に一つ命令出来るというルールが始まったのだ。

それまで五分五分だったのに、賭け始めた途端勝てなくなるのは貴子が滅法勝負に弱いだけである。

「そうだねえ。とりあえず私に敬語かな」

「ぐぐぐ……」

「ほらほらさつきと喋りんす」

「さつきから悪い手札ばかりだ!」

「それはアンタの運だろう」

「こんな所にいたらツキが落ちる!」

「……っそれだ!」

「は?」

「悪いね貴子!ちよいと席を外すよ!」

「あ、ああ」

目をウキウキとさせながら何処かへと飛び出していった。

その後ろ姿を見て、貴子の感じた嫌な予感を決して間違いではなかったのであった。

「……私はお師匠さまに呼ばれるような事してないよ」

「うどんげを気絶させたじゃない。それで十分よ」

「私が手を出した所にたまたま鈴仙が居たんだよ」

「そう。偶然ねえ……」

「……はあ。アンタに隠し立てはできないか」

「さあ、正直に話さない」

居住まいを正す永琳とてゐる。

常日頃から飄々としてゐるが、唯一真剣に取り合う相手こそ永琳であつた。

「貴子がここに来る前の話は聞いたかい？」

「……ええ、ある程度はね」

「アイツと出會つて悪魔が変わつた。亡霊が変わつた。人里が、慧音と妹紅が、そして……風見幽香が変わつた」

「そうなの？」

「そうさ。不思議なことにアイツは人を変えちまうんだ。だから私も変えようと思つてね」

「何をよ」

「この屋敷さ」

ニタリと笑うてゐる。

そこにあどけなさなど残つていなかった。

「いつまでも隠れてるんじゃないやダメだ」

「永遠は即ち完全よ」

「何処がさ。アンタらは気づいていなかったのか？この屋敷はゆつくりと腐つていつてたんだ。風も通さぬ箱入り屋敷じゃ当然さね」

「……だから異変を起こさせたよ」

「違うね。起きたら良いなと思つただけさ。私はずいぶん運が良いもんでねえ」

「そう……」

月の賢者は足を組み、物言わず長考した。

これは永琳が真剣な時にのみ見られる癖である。

そしてその癖が出るときは、大方ヤバい時なのだ。

「……すまなかつたとは思つてるよ」

「え？」

「姫さんを外に出すんだ。アンタは嫌がるだろうからね」

「よく分かつてるじゃない」

「ハッキリ言って賭けだった。そればかりは、幸運じゃどうにもならない事なのさ」

「……てる。私は怒ってないのよ。貴方はよくやった。誰にも成し得ぬ事をしたの。自分を褒めてあげなさい」

「……ふん。私は何もしてないよ」

「ありがとう、てる」

そう告げて、永琳は立ち去った。

残されたてるは、妙な敗北感と確かな達成感を胸に感じていた。

彼女もまた、永遠亭を愛していたのであった。

永夜の落とし前

勝者 永琳

敗者 てる

——迷惑な魔法使いと素敵な巫女

ホント夏って嫌い。

暑いし、蝉はうるさいし。

……熱くてうるさいなんて、どっかのバカ魔法使い見たいじゃない。

「おーい霊夢！遊びに来たぜー！」

噂をすればバカ見参。

こんな暑い中よく飛び回ってられるわ。

熱中症になって妖怪に襲われなきや良いけど。

「あつちい！水くれ！」

「そこに井戸があるでしょ」

「冷たいのが良いんだがなあ……まあ良いぜ！その井戸枯らしてやるよー」

「どんだけ飲むつもりなのよ」

……にしても熱いわねえ。

私も水を飲もう。

「……つかあ！美味い！」

「大袈裟ね」

「そうだ霊夢、今朝の新聞は読んだか？」

「新聞？ただだけど」

「そりゃ良かった！今すぐ読んでみるよ！」

「何よ。どうせまた天狗のデタラメでしょ？」

「へへっ、アレがデタラメかどうかはお前が一番よく知ってるだろうぜ」

魔理沙が新聞を取り出した。

変なところで準備のいい奴。

そこまでして私に読ませたいものって何だろう。

「さあ存分に読め！」

「……っこれは！」

その新聞の一面には、箒に跨って魔法を撃ち放つ人間の写真と共にかこう書いてあった。

『大活躍か！永夜に闘う霧雨魔理沙！』

「何よこれ！」

「見たまんまだぜ」

「何でアンタが新聞に載ってんのよ！」

「いや、天狗の耳は怖いなあ。とうとう私も有名人だ」

天狗の新聞は所詮ゴシップだと思っただけで熱心に読んでないけど、異変の記事に関してはある程度目を通してる。

二度の異変、その両方の記事に魔理沙の名前は出てなかったはず。

紫が言うには、博麗の巫女が異変を退治するって言う構図を分かり

やすくする為……だけど私からすればもっと別の意味があった。

それは魔理沙を守るため。

私のする妖怪退治は人間の為じゃない。

妖怪のためでもない。

言うなら、幻想郷のため。

この世界を守るために私は妖怪を退治する。

無論人間たちに依頼されて行く妖怪退治もあるが、基本的には秩序の維持だ。

それを無意識に悟られているのか。

私は人里からあまり快く受け入れられていない。
有害か否かの差こそあれど人里から見た私は、妖怪みたいなモノ
だ。

だからこそ魔理沙には……。

「アンタ、分かってんの？」

「何がだ？」

「有名になる事は必ずしも味方を増やす訳じゃ無いのよ」

「ああ、分かっているさ」

「分かっているわよ！」

「妖怪退治が里にウケないって事は重々理解してるぜ」

「だったら……」

「心配ないさ。ここの一文、読んでみるよ」

魔理沙は余裕な態度で新聞を指さす。

その記事は全編に渡って魔理沙を称えているが、一際私の目を引く
一文がそこにあった。

『博麗霊夢に並ぶ異変解決の立役者！』

魔理沙がしたり顔で笑っている。

私の腹の底で怒りと脱力感がごちゃ混ぜになっているのがよく分
かった。

「この意味がわかるか霊夢」

「どーせ、異変解決は私の力とか言うんでしょ」

「違うぜ！博麗霊夢に並ぶってとこだ！世論じゃ私とお前は対等だ。
もうお前に守られる必要もない！」

「アンタを守った事なんてないわよ」

「不思議だな。私はお前に守られた経験がゴマンと有るぜ」

「……バーカ」

ホントにこの馬鹿は夏みたいな奴だわ。

熱いしうるさいし迷惑。

だから私は夏が嫌いなのよ……。

熱いのはコイツだけで結構だから。

「だからな……霊夢」

「何よ」

「もう一人で背負わなくていいんだぜ」

「——アンタ、何言って……!」

「お前が何を背負ってるかなんて分からないけどさ、もうお前は一人じゃない」

「アンタねえ……」

「背中を預けてくれていいんだぜ。それが私ら、人間の生き方だろ?」

明朗快活に笑う魔理沙。

私のことなんて少しも分かってない癖に。

……そうだ。

どれだけ妖怪を打ちのめそうと、私がどれだけ戦おうと、魔理沙は私を人間扱いしてくれる。

博麗霊夢として、私と向かい合う。

私はそんな魔理沙が……。

「つたく、ホントに熱いわねえ」

「友人に茶の一つでも出せば涼しめるぜ」

「ウチはお茶屋じゃないわ」

「お茶を出す権利は平等だ」

「ならお茶請けの一つでも持ってきなさいよ」

「そう言うと思って持ってきてやったぜ。ほれ、カステラ」

「……玄関はあっちよ」

「へいへい」

変なところで用意がいいのはずっと変わらないわね。

冷たいお茶にカステラは合うかしら。

——輝夜様は和了らせたい

不味い……集中しろ、集中しろ!

思考を絶やすな。

目の前に全力を燃やせ!

さもなければ死ぬ……そう、死だ!

死神はすぐそこで涎を垂らして待ってやがるんだ。

どんな馬鹿でも感じ取れる。

自分が断崖絶壁に立っていて、眼前に真っ黒な底無し谷がどこまでも広がっている景色を。

生きたいならば一歩ずつ確実に、この崖の終わりへと向かわなきやならない。

生還というか弱い蜘蛛の糸を手繰り寄せなくてはいけない。

「どうしたの？親の貴方が切らなくては始まらないわ」

輝夜が私の焦りを見透かしたみたいなき地獄の悪い笑みを浮かべる。

クソッ！

またこのパターンかよ！

……事の顛末を出来るだけ簡単に言おう。

私はさつきまで慧音の家で酒を呑んでいた。

といつてもいつものバカ呑みじゃなく、和気藹々と語り合うものだ。

そこには当然も妹紅もいて、そして何故か幽香もいた。

二人は激烈にピリピリしていたが、その理由を私は知らない。

どうせ幽香のバカが異変の時に何かしでかしたんだろう。

そんな訳で四人机を囲んでチビチビやってた時。

ほんのり頬を赤くして慧音が急にこう言い出した。

「そうだ貴子、この前いい物を貰ったんだよ」

そうやって机の上に置かれたのは、確かに私からすれば馴染み深く、そしてこの場にはイマイチ似合わぬモノだった。

黒い箱の中に入れられた全部で百三十六の牌とサイコロ、そして点棒。

これは……。

「麻雀牌？」

「そうだ。貰ったはいいがやり方が分からなくてな。お前なら詳しくうだ」

「そりや確かに麻雀は打てるが……まさか」

「麻雀は四人でやるんだろ？丁度いいじゃないか」

四人。

この場にいるメンツ。

私、慧音、妹紅、そして幽香。

「妹紅は打てるのか？」

「うんにゃ、全然」

「……幽香は？」

「初めて見たわ」

この四人で、しかも経験者は私一人。

間違いない。

まともに打てるわけがない。

「まあ楽しめればそれでいいんだ。気負わずやろう」

「麻雀は牌だけじゃできないぞ？麻雀用の卓がないと」

「そうなのか？」

「ああ、四角い机があれば良いんだが」

「すまん。この家にあるのはこの机だけだ」

慧音が恥ずかしそうに今使っていた机を指さす。

汚くはないが、食器やら酒瓶やらが置いてあつて使えそうにない。

「どうしようか……」

慧音が少しシヨンボリとした。

もしかすると麻雀をするのが楽しみだったのかもしれない。

……慧音は忙しい中で今日のために時間を作ってくれた。

できることなら、最大限楽しませてやりたいが……。

私が悩んでいると、相変わらずの鉄面皮で幽香が突然指を鳴らし

た。

すると、床から巨大な向日葵が生えてきた。

茎が細く花だけがやたら大きい。

まるで机のように花が天井を向いている。

「はい。これで出来るでしょう」

「何がだよ」

「台を用意してあげたのよ。感謝しなさい」

「まさか……この花を台に？」

「ええ。それ以外に考えられるの？」

「何でお前はノリ気なんだよ」

「面白そうじゃない。気まぐれよ」

幽香がいじらしく笑う。

コイツのことだ。

本当に気まぐれ以外の何でもないんだろう。

だから余計にタチが悪い。

「とりあえず座ってみたが……まさか花の上で麻雀を打つ事になるとはな」

テレテーン！

どうも、呼ばれてないのに飛び出す因幡てゐだよー！

本編では出番がなかったけど恒例の解説コーナー、私が受け持たせてもらおう事になったウサ。

優しく解説してやるから、その小さい耳の穴かっぽじってよく聞くこと。

え？お前じゃ信頼できないから鈴仙に変われだつて？

ははは。皆、ちよつとだけ待っててね。

………つと、邪魔も居なくなつたしそれじゃ始めようかね。

今回出てきたのは麻雀だよ。

名前くらいは聞いたことが有るでしょ？

凄いきつくり言うのと、山と呼ばれる所から順番に牌を持ってきて、

手牌から不要なのを一枚切る。

それを繰り返して一番早く自分の手を完成させるゲームだね。

あと一枚で手が完成する状態の事をテンパイって言うんだ。

テンパイの状態で最後の一枚を持ってくるとツモ。

あるいは、最後の一枚を誰かが捨てる時、ロンあがと言って和了あがる事が出来る。

それを繰り返して、最終的に点数が一番多かった人の勝利だよ。

複雑に見えてシンプル。

だけど単純に見えて奥が深い。

みんなもぜひひやってみて欲しいウサ！

それじゃ、アタシはここらでお役御免とさせていただきますらうよ。

「てる……?」

「山を積んでみると一気に麻雀らしくなるな!」

「さあ、始めましょう」

そんなこんなで、私たちの麻雀は始まった。

不安しかない面子だったが、慧音や妹紅の飲み込みが早いのもあって初めて見ると意外と結構盛り上がった。

東南西北でカンしたり、白をオールマイティだと思ったりと初心者の鉄板ミスもしでかした。

半荘二回終わった所で、流れが変わったのだ。

「面白そうなことをやってるわねえ」

急に玄関から声がした。

穏やかなのに戦々恐々とさせるその声の主は、迷惑者の第一人者、蓬萊山輝夜であった。

「輝夜ア!?何しにきた!」

真っ先に反応したのは妹紅だった。

無理もない。

妹紅と輝夜の因縁は千年物なのだから。

「そう気を張らないで。遊びに来ただけよ」

妹紅の詰問ににべもなく答える声。

輝夜の後ろから永琳が現れた。

白衣も纏わずに完全な私服で。

しかし妹紅の怒りのボルテージはますます上がっていく。

「お前らと遊ぶ義理なんて無い。帰れ!」

「せっかく麻雀をやってるんでしょ?今日は趣を変えて麻雀で勝負といきましょう」

妹紅の激情を逆撫でする様にニタリと笑いながら輝夜は言った。

こいつはそう言う女だ。

他人を不快にさせて喜びを得る最低な奴だ。

竹取の時代からずっと変わらない。

「誰が相手をしてくれるのかしら?」

永琳と輝夜は勝手に家に上がり台の近くへとやってきた。

まず席を立ったのは慧音であった。

酒が回って状況を理解できていないのか御機嫌に笑いながら、
「皆でやった方が楽しいからな！」

と言っていた。

相当酔っているらしい。

また永遠亭のお世話になる日は近いかもしれない。

意外なことに、次に席を立ったのは幽香であった。

面倒事を起こすのも首を突っ込むのも大好きなコイツの事だから、
無理にでも参加すると思っていた。

しかしどう言う訳かすぐに席を立ち戦線を離れた。

「……となると、残ったのは私と妹紅か」

「これで四人ね。始めましょうか」

席に座り、私たちの麻雀は始まった。

妹紅と輝夜が睨み合う。

火花が散って引火しそうだ。

かたや永琳も、静かだが明らかに臨戦態勢に入っている。

妹紅から手が出れば遠慮はしないと云った雰囲気だ。

かくいう私は……早く家に帰りたいかった。

「私が親ね」

起家は輝夜であった。

そこから反時計回りに永琳、妹紅、私の順番で座っている。

妹紅と輝夜が睨み合う形だ。

賽が振られ、戦は始まった。

「そうそう、罰ゲームが無いとつまらないじゃない」

輝夜がさも思い出したかのように言う。

ハナからそのつもりだった癖に。

「だから、一位は四位に何でも一つ命令ができると言うとはどうかしらっ。」

「望む所だっ！」

「決定ね」

ちよっと待てやい。

「望む所だっ！」ってお前は漫画の主人公か。

そんなリスキーなギャンブル、私は反対だ！

抗議してやろうと思った。

しかし立ち上がろうとした瞬間、全身を高压電流で焼かれたみたい
な痛みが走った。

どういうわけか、叫び声すら出せない。

揺れる視界で微かに見えたのは、静かに私のことを見据える永琳で
あった。

「文句は無いわよね？」

永琳が私に問いかける。

それと同時に体の痛みは強くなる。

犯人はテメエか！っていだだだだ！

声の出せない私は頷く事しかできなかった。

「後悔してももう遅いわよ」

後から悔やんだりなんかしないさ。

今この時に既に悔やみまくってたんだから。

さて、私たちの麻雀はかくして始まった訳だが、当然一筋縄ではい
かなかつた。

異変は、東二局で起きた。

「っ！」

思わず反応してしまう。

今一瞬の狼狽を周りに悟られてない事を祈る。

配牌が、余りにも良すぎた。

このまま進めば、九蓮宝燈まつしぐらだ。

九蓮宝燈とは麻雀の中でも最高の役で、ポーカーのロイヤルスト
レートフラッシュだと思つて貰えば良い。

ただしポーカーのそれとは出現頻度と強さが段違いだが。

この手なら四位を取らないのは勿論、一位を目指すことさえ可能
だ。

この好機、逃せはしない！

「まあまあ配牌ね」

そう言いながら永琳が第一打を切った。
捨てたのは西。

続く妹紅もまた、西を切った。

——二度続けての西。

麻雀においてはそう珍しく無い、良くある場面だが私の頭にはとある懸念が浮かんでいた。

まず第一に、私の手の中で西が孤立していた事。

もし次に有効牌を引いてきたら、西を切らざるを得ない。

そしてもう一つの懸念……。

それは、輝夜が次に引く牌が西であるという事だ。

私の前にある山に、確かに西はあった。

それを輝夜が引くことは確実だ。

私が西を切り、そして輝夜が西を切った場合。

私が懸念しているのはそれだ……。

麻雀には、四人連続で同じ字牌を切った場合その局を最初からやり直すというルールがある。

天から降りたとしても思えぬこの配牌をオジヤンにされては堪らない。

この第一ツモだけは、無駄な牌を引いてきて欲しい……！
が、ダメっ……！

私が引いたのは、最も欲しかった牌だった。

西を捨てるしか無い……。

しかし、三枚切れの西を輝夜が残す確率は限りなく低い……。

全ては運に委ねられた。

輝夜が第一ツモを引く。

あれは間違いなく西。

切るな、切らないでくれ！

「こんなのいらないわ」

つまさか！

……輝夜の捨て牌。

それは、白であった。

「ふう……」

良かった。

一巡目さえ凌げれば、後は千載一遇の大チャンスのみ！
この九蓮宝燈で勝負を終わらすだけだ！

永琳がツモる。

「これじゃないわね」

その捨て牌は……。

「ロン！それだっ！九蓮宝燈、役満だ！」

運は私に味方した！

勝った！

生き残った！

これで一位だ！

「はっはっは！どうした永琳、驚きで言葉も出ないか!？」

麻雀の恐ろしい所だ！

どれほどの強者でも、女神にそっぽを向かれたらそれまで。
逆に、どんな間抜けでも運を味方につければ勝てるんだ！

今日は人生で一番ツイてる日だ！

「確かに……これは驚いたわ」

「さあ、子の役満だ。点棒を貰おうか」

「いえ、点棒を払うのは貴方よ」

「あ?」

「自分の手をよく見なさい」

「よく見ろだ?どこからどう見たって九蓮宝燈だろ！」

さつきから何万回も見直した。

何遍見たってこの手は変わらない。

ちやんとバラバラに……っああ!?

「な、何だこれ!？」

「役満どころか、バラバラも良い所じゃない。ヒロポンでも打ってき
たの?」

「だ、だったらこれは……」

「誤ロン。チョンボね」

何でだ!?

さつきまで確かに九蓮宝燈だったのに!

どうしてこんな無茶苦茶な手牌になってるんだ!

「さあ、マンガン払いよ。点棒を払いなさい」

「そんな馬鹿な事が……」

マンガン払いって事は、八千点を失うっ……!!

一気に最下位っ……!!

ぐにやああああ……。

その後、チョンボにより失った流れを取り返せなかった私は弱気な打ち方しか出来ず、どんどんと点棒を削られていった。

ここで現在に至る。

持ち点は四千点……もはや、地獄の一步手前。

否、もはや業火は背を焼いているっ……。

しかも、オーラス。

親は私。

三位、永琳との点差は二万六千点。

親満を直撃しても逆転できない……。

跳満条件での、オーラス。

一位は、輝夜……。

このまま負けたら、即罰ゲーム。

何を命令されるかなど、考えたくも無い。

しかし……。

「ぐぐぐ……」

「さあ、早く切りなさい。運命の一打をね」

配牌は最悪……とても跳満を目指せる手では無い。

それどころか、安上がりすら遠い。

どう足掻いてもゴミ手。

ここまでか……?!

「つまらないわね。所詮はそれまでかしら」

……誰だ?

ただでさえ絶望してんのに嫌味な事を言う奴は。

「死にかけてるのに諦めるなんて、毫碌したわね」

「っ幽香！」

「もつと醜くもがきなさい。悪あがきは貴方の得意技でしょう？」

……こんの野郎。

後でぶん殴ってやる。

もし生きてたら話だが。

まずはこの局をどうにかするんだ。

このゴミ手で和了するには……。

生き残るには、どう打つべきだ。

……そうか！

「これが私の、第一打だ！」

切ったのは、ど真ん中の五であった。

波紋の様に衝撃が広がる。

「何を考えているの？」

「勝負を捨てたか!？」

永琳と妹紅が狼狽える。

輝夜のみ、静かに事の成り行きを見ていた。

「ふふふ、そう来るのね。面白いわ」

私は次も、その次も、序盤はおろか終盤ですら切られる事のない真ん中の牌を切り続けた。

そこまで来ると、どうやら永琳は私の狙いに気づいたらしい。

「まさか、国土無双……?」

国土無双とは九蓮宝燈と同じ点数の役だ。

基本的に使い勝手が悪く早々に切られる事の多い一と九、そして字牌をそれぞれ一枚ずつ集める事で完成する。

私の一打一打に全員の視線が集まるのが分かる。

雲行きが怪しいまま、とうとう終盤まで勝負はもつれ込んだ。

珍しく永琳が吼える。

「国土無双が出現する確率は限りなく低い……ましてこんな場面で出すなんて無理よ！」

「さあ、どうだろうか？」

「つく……」

そこに輝夜が合いの手を入れてきた。

「貴子は落ち目だった。端牌を引いてきてもおかしくはないわね」

「姫様まで……」

「さあ、早く切れ！八意永琳！」

「私はそんなオカルト、信じないわ！」

「なら切ればいい。その危険牌をな」

「つく……」

永琳の眉間が一層狭くなる。

事実、永琳の手には東が握られていた。

それは貴子に対して放銃する確率の高い超絶危険な牌だ。

「これを切ればっ！切ればっ！」

「さあ、切れ！かかってこい！」

「っ！」

永琳が牌を切った。

捨て牌は……唯一貴子の現物である白であった。

「屈辱ね……」

そのまま誰も上がる事なく、とうとうその局は流局となってしまうた。

輝夜、妹紅、永琳の三人ともが手を伏せる。

「ノーテン……」

「私もノーテン」

「私もだ」

全員、貴子の国士を警戒して危険牌を嫌えなかったのだ。

それだけの迫力が貴子には有った。

麻雀における全ての出来事の確立を計算できる永琳を降ろさせるほどの迫力が。

全員が貴子の方へ注目する。

その手を拝んでやろうと。

貴子は自分の手牌に手をかけた。

そして……。

「私もノーテンだ」

牌を伏せた。

「ノーテン!？」

「ああ。なんなら見せてやろうか？」

貴子が手牌を晒す。

その手牌は……。

「バラバラ……」

国土無双には程遠い、ただのバラ手であった。

永琳が立ち上がる。

「あり得ないわ！何で……何でノーテンなのよ！」

「一つも良い牌が来なかったのさ。何せ私は、落ち目だったからな」

「……っ！」

結局、その局は点棒が移動する事なく流れた。

それは貴子にとって、勝ちに等しい流しであった。

「ブラフ……」

「ふふ。案外やるじゃない。まさか永琳を騙すなんて」

「さあ、次の局だ！」

点数状況としては相変わらず最低の貴子。

にも関わらず、強気であった。

かたや三万点を持っている永琳。

勝っているのに、項垂れていた。

勝負の流れは、もはや貴子に対して向かい風では無くなっていった。

次局が始まり、永琳は弱気な打ち筋だった。

そこを付け狙うかのように、妹紅からのリーチが入る。

「リーチ！オーブンだ！」

妹紅が自身の待ちを晒す。

わずかに輝夜がどよめいた。

「何よその手……地獄待ちじゃない！しかも、ノミ手……」

「流れは今全員に平等だ。運を揺らしてやるよ」

「そんな手、和了れるわけがない！」

「ああ。こんな手を和了れる訳ないさ。だがもしこの手が上がったら、普通和了れるはずのないものが和了れちまう！それが本物の博打ってもんだろ！」

「知ったような口をー」

輝夜は強気な打ち筋であった。

待ちの见えている妹紅は無警戒。

また永琳はもちろんの事、リーチをかけている貴子も、ほぼノーマーク。

輝夜が貴子の手を恐れないのには理由があった。

それは……覗きだ。

単純にして最強のイカサマ。

輝夜は覗きによつて貴子の手の内を全て知っていた。

だから何一つ恐れる事などないのだ。

つまり、自分の手のことだけを考えて打つ全ツツパで打てる。

前局、ブラフに引っかけかかり戦意を失った永琳は典型的なベタオリ。

輝夜の邪魔をする者はいない様に思われた。

「カンよー」

四枚の牌を晒しドラ表示牌が増える。

ドラは輝夜がカンした牌の激近であった。

輝夜は自身の運が上り調子である事を確信した。

「ドラ……いらないわー」

輝夜の勢いは凄まじく、有効牌をみるみる引いてくる。

ドラなど恐怖に値しなかった。

「ドラか……よく切るな。そんな所」

「え？」

「まるで知っているかのよう。私の待ちを」

「……何が言いたいのよ。無いと決めたらスパツと切る。それが博打でしょ？」

「成る程……そんな覚悟で切ったドラなら、問題ないな。何が起ころうと……！」

「何が言いたいのよー！」

「輝夜……見誤ったよ。アンタ……！」

「は？」

「なんて言ったら良いか……ボコ殴りのボコ蹴り、圧倒的に優勢なケンカで相手はもはや……瀕死！地面を這って舐めてボロボロッ！どう転んでもここから負けなど考えられないケンカ……！」

貴子の語りに、全員の手が止まる。

輝夜は何のことか分からぬといった表情で聞いていた。

「ところが……そしたら突然、何の前触れもなく……雷が降って来て、いきなり形勢逆転みたいな感じかな……！これは、アンタから見たら……！」

その形勢逆転に、なんとなく風見幽香は聞き覚えがあった。

輝夜は面倒くさそうに顔を顰める。

「くどくどい！さっさと進めなさい！いい加減聞き飽きたわ！くだらぬ戯言！」

「おつかねえってこと……！博奕は！」

「え……？」

「刮目せよっ！」

貴子が手牌を倒した。

「ドラ！そのドラ！ロン！ロンッ！ロンッ！ロオーンッ……！ロオーンッ！ロオーンッ……！！！」

「あ、あわわ……！」

嗚咽まじりに響いた貴子の叫び。

全員がどよめく。

風見幽香を除いて。

「あ、あり得ない！な、何よこの手!？」

輝夜が立ち上がり貴子を睨む。

それを余裕の表情で受け流す貴子。

「今度はチョンボじゃないみたいだな」

「そんな、どうして！あり得ないわ」

「何だ？その断言は。おかしい事を言うな」

「そ、そんな……！」

貴子の手牌は輝夜にとって最悪の手であった。
リーチ、タンヤオ……そこに大量のドラが含まれていたのだ。
大量の火薬を積んだ爆弾は、輝夜の火種で起爆した。

「ドラが七枚も……」

「七枚じゃない」

「え？」

「……実はさつきから、足が震えてるんだ」

貴子は笑みすら浮かべず、ある一箇所の牌に手をかけた。

それは……。

「裏ドラッ！」

「そうだ！裏ドラで三枚の加算！都合十一枚！親の数え役満、四万八千点だっ！」

「そ、そんな馬鹿な事が……」

「お前の負けだっ！」

貴子は叫ぶ。

輝夜はドサリと倒れ込んだ。

「ドラが十一枚も……アンタの勝ちだ、貴子。しかし輝夜の奴はどうしてここまで狼狽えてたんだ？ドラなんて切ったらそうなるだろうに」

「……覗いてたんだよ。こいつは」

「っ！」

輝夜の肩が跳ねる。

その反応が答えだった。

「隠れてないで出てこい！鈴仙、てる！」

貴子が叫ぶ。

ドアの方から、申し訳なきような顔をした鈴仙とニヤニヤ笑うてゐが入ってきた。

「な、お前ら！」

妹紅が驚きの声を上げた。

何の気配をしなかったからだ。

「私のチョンボはおそらく鈴仙の仕業だろう。そして窓の外から私の

手を見て輝夜にサインを送っていた。違うか？」

「……………」

鈴仙は露骨に目を逸らした。

どうにも永遠亭の連中は隠し事が苦手らしい。

もつとも、隠れていた時点で言い逃れはできないが。

「なんて卑怯な事をつ……………」

「まだ有るぞ。おい妹紅、永琳の手を開けてみろ」

「何？」

「っ！」

永琳は慌てて自分の手を崩そうとした。

しかし一步妹紅が早かった。

「な、これは、四暗刻!?!しかも…………私、二巡前にこの手にフってるぞ！」

「ああ。どうせ輝夜のことだ。自分の手でトドメを刺したくて永琳にストップをかけてたんだろ。その傲慢が命取りだったな」

「な、なんて事をつっ！」

「コイツらはイカサマを仕掛けた卑怯者だ」

輝夜たちの手口はこうだった。

まず鈴仙の能力で私にチョンボをさせる。

おそらく私の動きを封じたかったのだろう。

そして鈴仙に覗きをさせる事で私と妹紅の手を把握。

最後に役満でドカんだ。

「汚ない…………汚ないぞお前ら！」

「勝負が変わったのはお前のオープンリーチだった」

「え？」

「あのまま進めば私たちは負けていただろう。しかしお前がオープンリーチをする事でこのドラが飛び出たってわけだ」

「しかし、まさかあの土壇場であんなにドラを引くなんて…………待てよ。

何で覗いてたのに輝夜はロン牌を捨てたんだ？」

「さあな。コイツらに倣って私はあるイカサマをした。それはぶっこ抜きだ」

ぶっこ抜きとは、自分の手牌とあらかじめ山に積んであった良い牌

をすり替えるイカサマである。

「積み込んでいたのか？」

「偶然だ。たまたますり替えた牌が全部ドラだった。そして裏ドラも乗った。どうやら今日は運が良かったらしい」

「運って……運だど!?まさか!」

妹紅がてゐの方を向く。

何のことやらと言った態度でてゐは肩をすくめた。

「アタシは何もしてないよ。でもねえ、勝負は平等じゃ無くっちゃつまらないだろう?」

「勝ちを確信した輝夜は鈴仙のサインを見るのをやめたんだろう。だから私の手に振った。傲慢故の……敗北だ」

この失点により輝夜は持ち点を全て失った。

命懸けの麻雀は終わった。

貴子が一位、輝夜が最下位という結果を残して。

「さあ罰ゲームだ。一位は四位に何でも命令できるんだったな。妹紅、どうする?」

「え?」

「この権利はお前に譲るよ。罰ゲームもお前が決めて良い」

「……良いのか?」

「良いも何もお前の物だ。お前以外、全員イカサマをしてたんだからな。失格さ」

輝夜にコスプレをさせて街中を歩かせるとか、わさび寿司を食わせるとかそう言うのも考えていたが、今回の勝利は妹紅無しでは得られなかった。

何より、最後まで正々堂々闘っていたのは妹紅だけだったのだから。

「……それなら、一つだけ」

「何だ?」

「こうするんだよっ!」

妹紅が大きく振りかぶる。

右拳が空を切る。

「つな！」

泣き腫らしていた輝夜の鼻っ面を、妹紅の鉄拳が殴り抜いた。

鋭い一撃。

銅鑼を叩いたような鈍い音。

勢い止まらず輝夜は、慧音の家の壁を打ち抜いてどこまでも吹っ飛んでいった。

拳から煙を上げながら妹紅は歯を見せて笑った。

「一発ぶん殴らせろ！ってね」

「ははは、そりゃ良いや」

「久しぶりにスツキリした！」

妹紅の爽快な顔。

それを見ただけで、さっきの勝負には価値がある。

ホント、良い気分だ。

ふう……勝って吸いきる煙草は美味しい。

「妹紅、貴子……」

「どうだ慧音。妹紅がやったぞ」

「お前らなあ……」

「え？」

「人の家の壁を壊すわ煙草は吸うわっ！いい加減にしろっ！」

「ちよっ待っギャアアアッ！」

……狂気の夜は幕を下ろした。

私と妹紅の血によって。

——夏祭り

蝉も、声が枯れてきた。

入道雲が夕焼け空を反射して照れ屋さんになってる。

もう、夏も終わりか……。

本当に波瀾万丈だった。

私は今でも寺子屋で教師をしている。

いつまで経っても人喰い妖怪の噂は絶えず、慧音が必要だと言っているのだ。

結局、辞めるに至る理由もなくダラダラと続けている次第だ。妹紅と慧音は、夏だつて言うのにベタベタと熱苦しい。

特に妹紅からのスキンシップが激しくなった。

アイツ、慧音が恥ずかしがってるのを見て喜んでやがる。

もつとも、何をされても拒まない慧音も慧音か。

もう一個、この夏で変わったこと。

それは私が人里に来た事だろうな。

余所者に厳しい人里も、つまる所は人の集まりだ。

人間って奴は、どんな状況でも慣れてしまう生き物らしい。

あれだけ里を賑わせていた私も、そろそろ市民権を持ち始めていた。

里の有力者が、余所者として人間だと受け入れる方針を固めてくれたそうだ。

その有力者の顔も名前も知らないが、変な奴も居るもんだ。

もつとも、私はそいつの事を立派だと思うが。

これは後で知った事だが、その有力者は寺子屋に通っている子供の親らしい。

しかもその子供というのが、疫病の時に私に小石を投げつけてきたあのクソガキだというのだ。

全くもつて世間は狭い。

何処で誰と繋がるか分からないものだ。

……本当に、誰と繋がるかなんて分からない。

私が風見幽香と知り合ったように。

人間って奴はつくづく慣れてしまう生き物らしい。

その法則はどうやら私にも適用されるそうだ。

恐ろしいことに、家に幽香がいる状況を何とも思わなくなってきた。

朝は幽香に叩き起こされて朝飯を食べる。

昼は寺子屋で子供たちに授業をする。

それが終わったらミスターの屋台で軽く引っ掛けて、幽香の待つ家へと帰る。

この生活リズムが体に染み付いてしまったのだ。
幽香は昼になるとひまわり畑へ向かうらしい。

……風見幽香は悪魔だ。

それはもう変えようのない事実だろう。

私だって殺されかけてるし。

でも、人里で悪事を働いたことはない。

それはここに来た時に慧音とした約束が理由だ。

幽香が里で人を殺したら、私の首を差し出すというもの。

それでも私が今生きているということは幽香が約束を守っている
ということだ。

結局幽香は、ただの口悪フラワー女に過ぎない。

因みに悪事を働かないというのは人里の人間に対してのみであり、
私に対しては適用されない。

適用されるなら、私の家は花屋になったりしてないだろう。

あと私の自由を妨げるのも幽香だ。

ずっと言っているが元々私の家だったのを幽香が乗っ取ったんだ。

何の権利があつて煙草を吸うんだの言えるんだ。

さらに酷い事例がある。

その日、私は訳あつて懐が暖かかったんだ。

その訳というのが博打であるのは言うまでもないが、とにかく財布
に余裕があつた。

いい気分のままミスチーの屋台に行つて、楽しく呑んでたんだ。

そこからの記憶は曖昧だけど、どうやら私はミスチーの屋台で寝て
いたらしい。

辺りはすっかり夜だった。

「ああ……っ今何時だ!?!」

狼狽えてそう聞いた。

ミスチーの屋台は人里の外。

夜に家へ帰るのは危険だからだ。

しかし、私の質問に答えたのはミスチーではなかった。

「深夜二時よ。どういふつもりかしらねえ貴子……説明しろ」

「な、幽香あつ!？」

私の隣に、見た事がないくらい良い笑顔の幽香がいた。
幽香がそういう笑い方をする時は私の死期だ。

「寝たいなら言ってくれば良いのよ」

「二度寝はごめんだ」

「永眠よ」

「つぎやあああ!」

美鈴仕込みの中国四千年も、幽香のアイアンクローには勝てなかった。

だがここで待ったをかけた。

そもそもがおかしいではないか。

私という人間が酒を飲んで幽香という妖怪がキレる筋合いなどどこにも無い。

全く、人の顔に傷つけやがって。

五針縫ったせいで慧音に

「どうとうヤクザになったのか!」

って怒られたんだからな。

他にもある。

風邪を引いて寺子屋を休んでた時のこと。

私は幽香と将棋を打ってたんだ。

……まあ、ただの将棋じゃなくていわゆる賭け将棋だったんだけども。

何でか知らないが幽香のやつ、滅法将棋が強かった。

地元じゃ貴子竜王で通ってる私が負けそうになるくらいには。

そんなチャンスをアイツが見逃すわけもなく、コテンパンに嫌味をぶつけられた。

「ほら、貴方の番よ。もう何をしても無駄だけどね」

「ぐぐぐ……」

「さて、どうやってトドメを刺そうかしら」

「……あ! あんな所に日本人!」

「え?」

「今だっ！——あら？」

「こっそり飛車に伸ばした手がピクリとも動かない。

「そんな古典的な手に引つかかる訳ないでしょ」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

「さあ早く打ちなさい。五手詰めかしらねえ」

「……くそう！」

「はい、どうぞ」

「……なーんてな。王手」

「悪あがきね。逃げられないわよ」

「よく見てみる。そこは取れないぞ」

「馬鹿も程々にしなさい。何の駒も掛かってないじゃない」

「ほら、この角」

「……あら、あんな所に半獣が」

「慧音か？下手な嘘は見苦しいぞ。こんな昼間に慧音がいるわけ

……」

「何をやってるんだ？」

「そんなの賭け将棋にきまって……ええ？」

「元気かどうか見に来てみれば……貴子、お前って奴は！」

慧音が説教モードに入る。

頭突きに王手だ。

「ちがっ違うんだ！風邪ひいて暇だから時間潰しに！」

「このままだとお金が取られちゃうわねえ」

「やっぱり！」

「な、幽香お前このやろう！」

「自業自得よ。イカサマさえ無ければバレなかったじゃない」

「イ、イカサマだと！賭博の上に不正までしたのか！」

「してないって！」

「問答無用だっ！」

「つぎやあああ!!!」

「やっぱり五手詰めだったわね。どっちにしろ負けたのよ……」

全く、私ほど不幸な目に遭っている人間もそういまい。

楽しく将棋を打つことすら許されないのだから。

慧音から頭突きは貰うわ将棋には負けるわ……前世で何をしたらこんな目に遭うんだよ。

幽香と関わってから酷い目に遭いつばなしだ。

……なら、とつとと縁を切れば良いのに。

そんな眩きが私の心で聞こえる。

確かに幽香と絶縁できたら二十年は寿命が伸びるだろう。

でも、私にはそれが出来なかった。

心底から憎むなんて簡単な事なのに。

私はアイツに殺されちゃいない。

私はどうやら殺されでもない限り……いや、仮に殺されたとして

も人を呪えない弱虫らしい。

しかし、仕返しをするかどうかは別問題だ。

アイツは気まぐれで私を振り回す。

だから私も、気まぐれでアイツを連れ出してやろうと思う。

そう、これは気まぐれだ。

寺子屋に貼ってあったお知らせをたまたま目にした、それだけが理

由の気まぐれ。

今日ばかりは私が幽香を困らせたっていいだろう。

「おい幽香」

「偉くなったわねえ、誰を呼び捨てにしているのかしら」

「幽香ちゃんか？それよかゆうかりんでも良いぞ」

「殴りたいの？」

「御託はいい！祭りだ！」

「は？」

「今日は祭りの日なんだよ！」

「へえ。だから何よ」

「決まってるんだろ。行くんだよ」

向日葵の浴衣は、持ち主に全く似合わぬ優しい色だった。

黄色の花弁は暗くなつていく夕焼けによく映える。

惜しむらくは、暴力花妖怪が着ていなければ満点の仕上がりだったことだ。

「たかが祭りで騒ぎすぎよ。鬱陶しいわね」

下駄をカンカンと鳴らしながら幽香は毒づいた。

手には向日葵の刺繍が入った巾着袋が下げられている。

花柄の浴衣は幽香によく似合っていた。

夕焼けが幽香の唇を紅く照らす。

ううむ、黙ってさえいれば美人なんだがなあ。

おしゃぶりでもしゃぶらせとこうか。

「しかし、流石に人が多いな」

「人がゴミと書いて人混みよ」

「へー、バルスバルス」

私たちは祭りの賑わいの中心地へと乗り込んだ。

この混雑の中で自由に身動きが取れるか不安だったが、その心配は全くなかった。

隣に幽香が居ると、皆が道を開けてくれるのだ。

というより、距離を取られている。

まあ、歩きやすくていいや。

「屋台も多いし、楽しめそうだな」

「祭りではしゃぐなんて子供ね」

「人は夏になると突然はしゃぎたくなるんだよ」

「貴方は年中騒いでるじゃない」

「お、りんご飴！行こう！」

幽香の手を引き屋台へ連れ込む。

甘いツヤのある美味しそうなりんご飴だった。

「おっちゃん、二本くれ」

「あいよ……あい、お待ちどう」

りんご飴のこの重量感。

祭りといえばこれだよな。

というか、こんなもん祭りでもなきや食べないだろうな。
飴を舐めながら祭りを進む。

「あら、貴子じゃない。来てたの」

「おお咲夜か。誰と来たんだ？」

「紅魔館の連中よ」

「へー、何処にいるんだ？」

「あの辺りよ」

咲夜がやれやれと言った顔で指さす。

その先に、一際大きい賑わいがあった。

見ると、射的屋の景品を胸いっぱい抱えた美鈴とフランがいた。

少し離れて、楽しげに話すレミリアと人混みでボタンキュー寸前の

パチューリーもいた。

「射的屋のオツサンも可哀想に……」

「接着剤で景品をくっつけてたの。妹様が欲しがったのが運の尽きね」

「楽しそうで何よりだ」

「あんなの買った方が安いじゃない」

「祭り取るから良いんだよ」

「それにしても貴方の浴衣……桜の柄？ずいぶん上等ね。盗んだの？」

「んなわけ無いだろ。これはなあ……」

私は事情を説明しようと思ったが、その必要は無くなった。

遠くにある人影を見たからだ。

「妖夢！」

「あ、貴子さん。お久しぶりです」

「来てたのか」

「幽々子様が祭り料理を食べたいと言い出して……あ、その浴衣。着てくださってるんですね」

「ああ。ありがとう……という訳だ。咲夜」

「亡霊から貰ったのね。なら納得だわ」

咲夜が腑に落ちたように手を叩く。

それと同時にレミリアの声が響いた。

「今のはレミリア!?!おい咲夜っ……もう居ない」

流石はメイド長だ。

誰よりも早く駆けつけていったのだろう。

「流石ですね……あの人は」

「ん？ そうだな」

「異変の時もそうでしたが、時間を止められるなんて、本当に驚くばかりです」

溜息のような褒め言葉を吐く妖夢。

その頬はやたら紅かった。

……さては。

「ははーん？」

「な、何ですか」

「さては妖夢……ホレたな？」

「つな！ 何ですか急に！」

汽車みたいに顔から煙を吹き出す妖夢。

剣士なのに言葉の歯切れが悪くなる。

「咲夜はやめとけ。もう相手がいる」

「そ、そうなんです……」

「その反応、やっぱりホレたのか！」

「ち、ちがー！」

妖夢が手をブンブンと振りながら慌てる。

遠くから気の抜けたな声が聞こえてきた。

「そうよお。お赤飯炊かなくちやいけないわ」

「幽々子！」

「あら、貴子じゃない。久しぶりねえ」

祭りの名物といえは焼きそば、イカ焼き、たこ焼きなど多くの品物が考えられる。

その全てを幽々子は手に持っていた。

「祭りって楽しいわねえ」

「妖夢の飯のが美味しいだろ」

「今日はお暇を上げたのよ。だから私についてくる必要はなかったのに」

「幽々子様を一人にしてはおけません」

「ふふふ。頼もしいわね。それじゃ、私達はこの辺で」

「ああ、もう行くのか」

「後ろの花妖怪が怖い顔してるもの」

「え？」

「さようなら〜」

幽々子が桜色のハンカチを振りながら何処かへ去った。

残された私と幽香。

見ると、幽香は鬼すら慄くような表情をしていた。

「おい幽香！どこ行くんだ！」

「…………ふん」

「待ってっ！」

幽香の手首を掴む。

それと時を同じくして、私の鼻頭に右拳が入った。

「っ何すんだこの野郎！」

「退屈。帰るわ」

「待てっ！」

良かった。

あの勢いで殴られたけど、なんとかまだ幽香の手をこの手に握っている。

今帰られたら駄目なんだ。

コイツには、どうしたって見せなきや行けないモンがある。

「離しなさい」

「嫌だ」

「帰るって言ってるでしょ」

「うるせえ。良いからついてこい！」

私のどこにそんな力があつたのか、幽香は大人しかった。

下駄の音が、カンカンと荒く鳴り響いた。

祭りの中心からしばらく歩き、日も沈んできた時分。

「…………そろそろだな」

「人もいない、店もない。何を考えてるの？連れ回されて迷惑なのよ」

「知るか。お前がなんと言おうと今日だけはこの手を離さないからな」

「自分勝手すぎるわ」

「人間だからな……まだ始まらないのか？」

「だから何が始まるのよ！」

「……もうすぐわかる」

「何を言っ——」

そこから先の幽香の声は聞こえなかった。

夏空に一輪の綺麗な爆発が咲いたのだ。

「……花火」

「花妖怪でも、アレだけは操れないだろ？」

「ええ……けど花火なんて、どこから」

「花火に使われるのは火薬。薬についてれば作れない物はないんだとさ」

「……誰が言っただのよ」

「どこぞの馬鹿薬師だ。しかし、綺麗な物だな」

「……ふん。空に花を咲かそうなんて馬鹿馬鹿しいわ。人間の考えそ
うな事ね」

「達者な口だ。少し黙りな」

破裂音。

乾いた口笛のような音。

一等星のように輝きながら天へと舞い昇る光。

誰もが息を呑む。

幽香は静かだった。

貴子が、その唇を塞いでいたから。

一際大きい花火が、空気を揺らしながら派手に咲き誇った。

「っ何すんのよ！」

「この前のお返しだ」

「……生意気」

「へへ。良い気味だ」

とうとう幽香から一本取ってやった。

なんて気分のいい夜なんだ。

「ねえ貴子……」

「ん？」

花火が打ち上がる音がする。

幽香は一息飲んで、言った。

「――」

花火の音にかき消されて、私にはそれが聞こえなかった。

「すまん、聞こえなかった。何て言った？」

「何でもないわ」

「隠されるとむしろ気になるんだよ」

「お返しよ」

そう言つて、幽香は――とても朗らかに笑った。

初めて見る笑顔だった。

花火なんかに負けてないくらい、綺麗な横顔だった。

女の私でもしばらく見とれてしまったのだろう。

手に何かの感触が伝わって、ようやくハツとした。

手のひらの上で横たわるモノ。

それは、向日葵のコサージュだった。

「……っ不味い！爆発するぞ！」

「貸しなさい」

幽香は私からコサージュを掴み取り、空に向けて投げた。

私達からたった二メートルくらいの距離で、それは爆発した。

「た、助かった……」

「さあ、帰りましょうか」

「え？花火はまだあるぞ」

「今ので十分よ」

「……それもそうだな」

「そうだ。」

「今ので十分だ。」

私の気まぐれに幽香を無理矢理付き合わせて、日頃の仕返しもしてやっただ。

それに、幽香のあんな顔も見れた。
もう十分だ。

「もうひぐらしも鳴かなくなったわね」

「ああ、そうだな」

「夏も終わりね」

「来年になったらまた来るさ」

「……ふふふ。そうね」

幽香はすっかり機嫌を治していた。

いつもより素直なコイツが今日はなんだか愛おしくて、思わずまた手を繋いでしまった。

「……………」

幽香の視線で我に返って慌てて離そうとした。

しかし、手は離れない。

幽香の指が、優しく私の手を握り返していたから。

「今日はずっと、離さないんですよ?」

遠くでまた、花火の音が鳴った。

第四章 花映塚編

平和な空の下

蟬も七日間の人生を謳歌し終えて静かになってきた。

永夜の異変から少し経って、世間が少しづつ落ち着きを取り戻してきたと言うのに、相も変わらず騒がしい女がいた。

女は、二度目の人生だった。

寺子屋の教員室で椅子にもたれてギコギコと鳴らしながら、懲りもせずに煙草を燻らせている。

その女の名は――

「貴子！」

「ん？」

「ここは禁煙だと何回言えばわかるんだ！」

「慧音、花火師の悲劇って知ってるか？」

「……何だそれ」

「町を綺麗にしようって言う名目で花火を禁止にしたら、花火師が仕事を失って伝統が一つ失われたって話だよ。花火は汚いか？私ほむしろ綺麗だと思っただけ」

「話を逸らすな」

「一緒だよ。禁煙ブームでどれだけのタバコ売りが泣いたか。私はこの文化を守りたいだけなんだ」

「……そうか。確かに一理あるかも知れないな。花火師の悲劇、聞いたこともなかったよ」

「今私が作ったからな」

「……貴子、私はこの怒りをどうしたらいいと思う？」

「一本吸えば落ち着くんじゃないか？」

「馬鹿者！」

煙草は消えたというのに、煙がぷすぷすと上がった。

出所は貴子の額だ。

けしからんという態度はそのままに、慧音が話題を振った。

「……貴子、お前に話がある」

「何だよ」

「花屋は順調か？」

花屋というのは、貴子の家を改築してオープンした『フラワーショップ風見』の事である。

店主も店員もフダ付きで、色々と曰くの絶えない店だ。

「順調ならこんな所にいないさ」

「それもそうだな。風見幽香は元気か？」

「残念なことに元気だ」

「そうか……貴子、この新聞を読んでくれ」

「新聞？」

一冊の新聞が貴子に手渡される。

その一面記事を見て、貴子は目を瞬いた。

「花の異常発生!?!何だこれ!」

新聞には一枚の写真があった。

何もなかったはずの平野が、一面の花畑に変わっているという写真が。

季節を無視して紅葉や牡丹、芒に菖蒲と咲きたい放題であった。

「疑うつもりはないんだが、お前と幽香は関与してないんだな？」

「もちろん無罪だが……こんな事が起きたら幽香が疑われるに決まってる。何てこった……」

「貴子、落ち着け。私は今回のコレの原因を知ってるんだ」

「そうなのか？」

「ああ。コレは異変でもないし、博麗の巫女に退治される事もない」

「よかった……しかし花がこんなに咲くなんて、一体何が原因なんだ？」

「毎年梅雨がくるように、六十年に一度花が溢れる時期が来るんだ」

「へえ……あんなに花が咲くのか？不思議なことがあるもんだ」

「それでな、何かの害があるわけでも無いし、いい機会だから子供達に花の勉強をさせようと思ってるな」

「そりゃあ良い。子供と言えど花の一つでも愛でれなきやな」
「そこでなんだが、お前の店に花を注文したい。四季の花をそれぞれ十輪ずつ頼めないか？」
「……返事は少し持つてくれ。何せ花を仕入れるのは幽香だからな」
「ああ、手間をかけるな」
「良いさ。気にすんな」

翌朝。

場面は変わって件の花屋。

貴子は幽香に、慧音からの注文を説明した。

「……という訳なんだが、仕入れて来てくれないか？」

「嫌よ」

にべもなくキツパリと断る幽香。

その反応は予想の範疇だった。

だからといって食い下がれる訳でもない。

「慧音はただでさえ客が来ないこの花屋のお得意様だぞ？頼むよ」

「嫌よ」

「何でだよ」

「面倒だからよ」

「お前なあ……」

「花なら貴方が取りに行けば良いじゃない」

「私が？」

「ええ。妖怪退治屋でしょう？」

「そう言うなよ。お前の能力でチョコチョコとやってくれるだけで良いんだ」

「私は便利屋さんじゃないの。苦勞せずに何かを得ようとすると墮落していくわよ」

「……お前に真つ当な事を言われるとは」

「急いだ方がいいわよ。あの花たちはすぐに枯れるわ」

「そうなのか？」

「別に信じなくてもいいわ。数日経てばわかるもの」

「ぐぬぬ……」

幽香は花模様のティーカップを傾けながら、思い出したかのようにこう言った。

「最近、里の外で不審な奴がいるそうよ」

「なら尚更行けないぞ」

「何言ってるのよ。妖怪退治屋の貴方が行かなくて誰が行くの？」

「博麗の巫女じゃないんだ。妖怪退治するのは命懸けなんだぞ？」

「懸け惜しむ命かしら」

「私一人の命じゃないんだ。死んだら義理が立たん」

「へえ……ところで今思い出したんだけど、私貴方にお金貸してたわよね？」

「……何のことだ？」

「誤魔化すな」

家の外の鳥が何処かへ逃げるように飛んでいく。

不審な影よりも怖い存在が殺気を放ったからだ。

一番近い場所でそれを受けた貴子が、身動きなど取れるわけもなかった。

「返して欲しいんだけど……無理よねえ」

「……何が言いたい」

「依頼をしようかと思つて。妖怪退治屋なんでしょう？里の外にいる妖怪を一匹、退治して来てくれないかしら」

「あ!？」

「まさか、断れる訳ないわよね？」

逆らえば殺すと、幽香の顔には書いてあった。

というよりも、常日頃からそう書いてある。

「……はい」

「さつさと行つてきなさい」

「ちくしょう……帰ったら覚えてろよ!」

「ああ、そうそう。花畑には妖怪が集まるから注意しなさい……つて、もう居ないじゃない」

幽香が話し始める時には、既に玄関の戸は空いていた。

呆れ半分に溜息を吐く。

「人の話は最後まで聞けと教わらなかつたのかしら。今日が命日になるかも知れないわね」

紅茶のおかわりを淹れながら幽香は誰もいない家の中で一人呟いた。

「勢いに任せて出て来たけど……どうしたもんか。花さえ摘めればそれで良いんだよな。わざわざ妖怪を退治する必要もないだろう」

里の外に向かって走りながら貴子は呟く。

人里と外との門を潜った所で、その歩みは止まった。

「写真では見たけど……ここまで咲いてるともはや恐ろしいな」

まるで絵の具を載せたパレットのように、色と色とが混ざり合っている。

それでいて濁らず、一色一色が際立っていた。

花の絨毯を極力潰さぬよう貴子は進んだ。

「慧音の言ってた花は……この辺りには無いな。もう少し向こうか」

貴子はあまり里の外へは出ない。

危険という事もあるし、何より用が無いのだ。

せいぜいミステリアの屋台へ行くか、たまに紅魔館へ寄るぐらいだ。

しかし、里の法が適用されない故の利点もある。

それは……。

「タバコが吸い放題ってのは良いね」

貴子はそう言いながら、また一分寿命を縮めるのであった。

ブラブラと歩きながら花を探す。

時刻は正午を迎えていた。

ほぼ何も考えずに歩いてきた貴子は、今までの花とは少し違う感触を足に感じて我に帰った。

「これは……彼岸花か？こんなのも咲くのかよ。縁起でもない」

足元で咲いている小さな炎をマジマジと見る。

貴子はその花が心なしか、寂しそうに感じた。

花を見て愛でる大層な感性は持ち合わせていないが、兎にも角にも目が離せなかった。

「これも持つていつてやるか」

「あー！」

「っ!？」

彼岸花を摘もうとしゃがんだ途端、後ろから大きな声がした。

先程の静けさとの差で、心臓が飛び上がった。

「その花は取ったら駄目だ！……っつて、貴子？」

「小町!？」

職務怠慢の死神、小野塚小町が花畑から現れた。

昼寝でもしていたのだろうか、横になられるとこの花畑では居ても気づけない。

「アンタ、こんな所で何してるんだい？」

「お花を摘みに参りましたの」

「ああ、オシッコか」

「そう言う意味じゃない。文字通りだ」

「花摘みかい？放つておいても枯れるのに」

「観賞用だ」

「……だとしても、彼岸花だけは取ったらダメだよ」

「何でだ？」

「……ここじゃアレだね。場所を変えよう」

小町に言われるがまま、花で覆われた丘を登る。

もつとも見晴らしがいい場所に、小さな切り株があった。

「ここは私のお気に入りなんだ。座りなよ」

「……凄い景色だな。辺り一面の花畑。ここはあの世か?」

「そうじゃ無いことはアンタもよく知ってるだろう?」

「屋台と呑み屋の立ち並ぶあの世なんて夢がないからな」

「ろくでなし女はあの世の夢を見るか?」

「名作SFを気安くもじるな」

「へえ。先生みたいなことを言うんだね」

「先生だからな。寺子屋で教師をやってたんだ」

「教師？アンタが？あははは、こりや傑作だ。騒ぎを起こす方法でも教えてるのかい？」

「お前みたいな奴のブツ飛ばし方を教えてるんだ」

「そりやいいや。この頃妖怪に襲われる子供が増えててね。それを運ぶのはアタイらの仕事だつてのに」

「幽香って奴も運んでくれないか？」

「死んでもやだね。あんな極悪、向こう岸まで何年かかるか分かったもんじやない」

「何年ぐらいだ？」

「さあね。十年くらいじゃないか？」

「何で私より短いんだよ」

小町がケタケタと笑う。

五十年の三途の川を乗り越えた者同士、しばしの近況を語り合った。

「それで、結局死神様が何しに来たんだ？三途の川はどうしたよ」

「……ああそうだった！おい貴子、彼岸花だけは絶対に取るなよ！」

そう言つて走り去ろうとする小町。

しかし、三步もせずその足は止まる事となる。

急に立ち止まったせいで、担いでいた大鎌がガシヤンと軋んだ。

「小町、待ちなさい」

「げげ」

「何ですか。その反応は」

「映姫様……何でこんな所に」

「それを聞きたいのは私の方です。こんな所で何をしてるのですか？」

「いや……休憩を」

「そんなの仕事が終わつてからいくらでもしなさい。大体アナタはいつもいつも……」

どこからか長話の好きな閻魔が現れた。

貴子は映姫と関わってロクな目に遭つていない。

できれば遭遇したくない相手であった。

そのことを知っている小町は、映姫が説教モードに入った事を確認し、貴子にこっそりと指で示した。

バレないうちに逃げろの合図だ。

受け取った貴子は足音を立てぬよう立ち去ろうとした。
が、ダメだった。

「どこへ行くのですか？」

「えっ!？」

「久しぶりですね」

「人違いです」

「まだ何も言ってますんですけど」

ピリツとした声色。

しかし攻撃の意図はなかった。

小町が尺で叩かれてタンコブまみれになっている。

貴子にはそれが数分後の自分を示唆している気がした。

「私はもうアンタと無関係。立ち止まる筋合いはないよな……映姫」

「輪廻を破った貴方と閻魔たる私、無関係とはいきません。少し話をさせてください」

「やだね。死んでるうちはまだしも生きてる時に三日三晩話されたりしたら洒落にならない」

「話というのはですね……」

「嫌だっけ言ってるだろ。長話は死んでからいくらでもしてくれ」

そう言っけ貴子は逃げ去ろうとした。

しかし、構えを取った段階で計画は潰えた。

タンコブまみれの死神の妨害によつて。

恐ろしい怪力で貴子は後ろから羽交い締めにされた。

「なっ小町! どういうつもりだ!」

「水臭いじゃないか貴子! どうせ怒られるなら二人でだ!」

「この野郎! 道連れにするつもりか!」

「死なば諸共だよ!」

「静かにしなさい!」

映姫に雷を落とされる。

腰に手を当ててプンスカと起こる仕草は、部下からよくあざといと言われている。

本人は無自覚である。

「長いのが嫌なら結論だけ言いましょう！貴子さん、貴方には死神になっても構いません！」

「えっ……えええっ！」

小町と貴子の叫びがハモった。

「そ、そんな映姫様、あたいはクビってことですか!？」

「待て映姫！私に死ねってのか!？」

「一度に喋らない！だから人の話はよく聞けと教わるんです」

映姫が軽く咳払いをする。

騒ぐ二人が落ち着いたのを見計らって、話を続けた。

「貴子さんにやって欲しいのは、死神の手伝いです」

「……死神の手伝い？どういうことだ？」

「正しく理解してもらうにはまずこの花について説明する必要がある
ますね……」

映姫が近くの切り株へ腰掛ける。

結局長話を聞かされるのかよと、貴子は心の中で毒吐いた。

現在、幻想郷で起きているのは花の大量発生。

ですが、これは異変ではありません。

雨や風と同じ自然現象なのです。

その原因は何か……。

実は、完璧と思われていたこの幻想郷の結界にも弱点があったので
す。

専門家ではないので詳しいことは分かりませんが、どうやら六十年
周期で結界に緩みが生じるらしくて。

それだけなら良かったのですが……。

貴子さん、まず一つ知っておいてください。

今咲き乱れている花には、亡人の魂が宿っています。

行き先もわからず迷った魂は、花に宿り開花してしまいました。

それがこの花たちです。

そしてもう一つ知っておいて欲しいのは、結界の緩みです。緩んだ結界の穴から、外の世界の魂が流れ込んできてしまいました。

死者の魂の案内が我々の役目。

死後を安穩に過ごせるよう、幻想郷に迷い込んだ魂を小町達があの世へ導く予定でした。

ですが……今回については、私たち閻魔にとっても予想外のことが起こったのです。

魂の量が、あまりにも膨大でした……。

一万か、それとも十万か……。

六十年前に外の世界で何があったのかは知りませんが……あまりにも多くの命が、失われていました。

無数の魂が幻想郷へと迷い込み、花となって姿を表した。

それがこの花たちの……正体です。

私たちの目的は、その魂をあの世へと運ぶこと。

本来は小町の役目なのですが、あまりに量が多いので私も手伝いに来たのです。

そうしたらあろう事か小町がサボっていた訳ですが……コホン、今は置いておきましょう。

問題は人手が足りぬということ。

死神の仕事は性質上なかなか担い手が見つかりません。

そもそも人手が足りていれば小町なんてすぐにクビです。

魂を扱うというのは、それだけデリケートな仕事なんですよ。

貴子さん、貴方は一度死んでいる。

生と死を併せ持つ貴方なら、魂を導くこともできるはずですよ。

どうか私たちに、手を貸してくださいませんか。

……嫌だというならそれも仕方ありません。

貴方からすれば私は少なからず因縁の相手でしょうから。

受けるかどうかは貴方の自由、我々にそれを責めたてる権利などありません。

……ところで関係のない話なんです、私は今とある物を持っていません。

これが実に珍しい代物。

貴方の逮捕状です。

これは中々に拙い状況ですよ。

だって、あの世が貴方を捕まえようとしているという事ですから。きっかけさえ有ればいつでも貴方をあの世へ連行する権利を、私は持っています。

あまつさえ貴方は再び異変を起こした。

きっかけとしてこれ以上のことがありますか？

本来ならば貴方をここで縄に縛りあの世へと連れて行つてた所です。

今の状況がイレギュラーだから、見逃しているんです。

貴子さん、肝心な報酬の話をしてませんでした。

アルバイト代は、この逮捕状では足りませんか？

「てめえ汚いぞこの野郎！」

「ある意味一番の死神だよこの人」

「悪い話ではなかったと思うのですが……残念です」

「お前覚えてろよ！」

「恨みは死んでからいくらでもしてください」

凜とした表情で貴子の怒りを跳ね除ける映姫。

ヤクザまがいの脅しに貴子は心底嫌気がさした。

「なあ小町……」

「何だい」

「閻魔っていう字に『魔』って入る理由がわかったよ」

「悪魔とか魔王とかの仲間だからね」

「お前も大変だな」

「アンタもね」

もはや映姫にこき使われる者同士、傷を舐め合うしかないのであった。

散々な言われようの映姫。

彼女の閻魔の尺には、言われた悪口の回数が書かれている。その数と小町が叩かれる回数が一致しているのは、偶然か必然か。全ては閻魔様のみぞ知っている。

「それでは小町、行くわよ。その罪人さんにはお別れを言いなさい」「な、映姫様……もしかして、怒ってます?」

「私は閻魔大王ですよ? 私情を挟むわけが無いでしょう。まさか無法に蘇った挙句、お願い事を断られたとしても私は怒りません」

「なるほど、激おこなんですね」

「罪人を捌くのは死んでからです。その貴方、せいぜい二度目の今世を楽しんでください」

冷たく言い放つ映姫。

彼女をよく知る小町ですらドン引きであった。

まして言わんや、映姫に良い印象を持たない貴子が看過するわけもない。

「おいコラ映姫! てめえ喧嘩売ってんのか!」

「私が間違った事を言いましたか?」

「言い方が間違ってたんだよ! 正論なら何でも許されると思うな!」

「言葉遣いについて、貴方に怒られる筋合いは有りません」

プチンという音が鳴る。

貴子の拳が空を舞っていた。

フライトの目的地は映姫の顔面である。

「おい貴子やめろ!」

「どけ!」

小町が止めに入るが遅かった。

貴子の鉄拳は既に映姫の鼻先を捉え、真つ直ぐに進む。

残りわずか数センチ。

鈍い音。

ぶっ飛んだのは、貴子であった。

見事な一本背負いで地に伏せられたのだ。

「私に暴力は震えません」

落ち着き払って足元に伏す貴子を見下す映姫。

沸る怒りはますます過熱し、貴子から冷静さを奪っていった。

起き上がり飛びかかる貴子。

正拳が飛ぶ。

鈍い金属音。

小町が大鎌の刀身で、貴子の拳を受け止めていた。

「貴子ーアンタの気持ちも良く分かるが、映姫様はあたいの上司だ。オイタが過ぎちや見過ごせないよ」

正に死神のような冷たい眼で貴子を睨む。

金属に打ち付けられ痛む拳を匿いながら、貴子は構えを取り続けた。

小町の怒りの鋒は後ろの映姫に向けられた。

「映姫様、貴方も貴方です！貴子が蘇った事に、本人の意志はありましたか？そもそも来世が無かったのが事の発端。それはコチラの不始末でしょう！」

「……………」

「今は喧嘩をすべき時じゃない！優先すべきは迷える霊を救う事！それを一番分かっているのは映姫様、貴方でしょうが！」

鬼気迫る小町の怒声に貴子は拳を下ろし、映姫は目を伏せた。

ささやかな静寂が花を揺らす。

「おい映姫！」

「……………何ですか？」

「死神の手伝い、やってやるよ」

「本当ですか？有難うございます」

「ただ報酬について条件がある」

貴子はタバコを啜えてめいっばい煙を吸い、映姫の顔を指差して言った。

「もし仕事が終わったら、一発ぶん殴らせろよ」

「……………お安い御用です」

「忘れるなよ。今の言葉」

「ええ。閻魔ですから。それでは小町、貴子さんに仕事の説明をなさ

い

「へいへい」

それだけ言うと、映姫はスタスタと何処かへ立ち去っていった。

小町と貴子は、もともと喋っていた場所に腰掛け、仕事について話した。

「死神の手伝いって、そんな難しい事じゃないよ」

「そうなのか？」

「アンタもやった事があるんじゃないか？死神といやあこれだろ？」

小町は貴子にあるものを手渡した。

それは確かに見た事があるものだった。

「鎌？」

「あはは、死神らしくなったじゃないか」

「何処がだよ。お前の持つてる大鎌ならともかく……これはどう見ても草刈り用の鎌じゃないか」

貴子が渡された鎌は、片手に収まる小さなものだった。

小町の持つている肩に担いでやつとの大鎌とはもはや全くの別物である。

「鋭いねえ」

「え？」

「あたいらは今から何をすると思う？」

「……まさか」

「この花だって立派な命さ。それを刈るのも死神の仕事ってね」

「……そんな仕事なら誰でも良かったんじゃないか？」

「そう簡単にも行かないんだよ」

「どう言う事だ？」

「やれば分かるさ」

そう言つて笑う小町の顔は、どこか自嘲的であった。

怒りに乗せられて仕事を引き受けた己の軽薄さを貴子はただただ呪った。

「それじゃ、その辺を頼むよ」

「ああ……しかし、草刈りなんてやらされるなら逃げとけばよかった」
ぶつくさと言いながら、彼岸花が多く咲いている場所にしやがむ貴子。

一輪目の花に鎌の刃を当てる。

綺麗に咲いている花を刈ることは少なからず抵抗があった。

どこか悲しげに咲いている花たち。

仕事だからと自分に言い聞かせ、鎌を握る手に力を込める。

最初の花を刈って理解した。

映姫が己を選んだ意味を。

「っ!」

「どうだ。『見えた』かい?」

「今のは……」

「アンタには何が見えた?」

「……空だ。あれは……朝の景色。ひもじい想いをしていた。窓から外を見た瞬間……世界が真っ白になった」

「そうかい。上出来だよ」

「おい小町!アレは何だ?!私は何を見た!」

小町はハナからその説明が来る事を見越していたかのように、滔々と語り始めた。

「花を刈った瞬間に、アンタは記憶を見たんだ」

「……記憶?」

「ああ。その花に宿る霊が亡くなる直前のね。今貴子が見たのは、その花に宿る魂の生前の景色さ」

「てことは何だ……この大量の花たち一つ一つにその記憶があるのか?」

「ああそうだ。死神も簡単じゃないだろう?」

「しかしあのひもじさは……」

「立ち止まってもいられないよ。花はゴマンとあるんだ」

「……そうだな」

今さっきまでサボっていた小町に仕事を急かされるのは腑に落ちなかったが、何より貴子には今見た景色が脳裏に焼き付いてしょうが

なかった。

その後も貴子はせつせと花を刈り続けた。

一輪一輪刈るたびに、鮮明な景色が頭に直接流れこんでくるようだった。

見えるのは、写真のような風景だけでは無かった。

その時に抱いていた感情や想いが、鮮烈に伝わってくる。

ただでさえ炎天下の草刈り作業。

肉体的にも辛かったが、何より心が抉られた。

一時間ほど働き、すこし休憩しようと思った頃。

ちらりと小町の方を見た貴子はしばし絶句する。

小町の働きぶりは見る者の目を奪うのに、あまりにも十分であった。

担いでいた大鎌を器用に使い、十輪か二十輪かの花を纏めて刈り取っていた。

当然、仕事を終えた面積は貴子のその数十倍大きかった。

「……大丈夫なのか？」

「何がだい？」

「そんな風に纏めて刈り取っても」

「そりゃ記憶も一気に入ってくるよ。今さつき刈った十六人分、説明してこうか？」

「いや、良い。初めて小町を凄いと思ったからさ」

一輪摘むたびに脳天が割れるような衝撃を受ける。

ましてやそれを一度に十輪など、想像すらできない。

「こればかりはアタイの方がベテランだからね……もっともこんな事、慣れたくも無かったけどさ」

「なあ小町……一つだけ気になったんだ」

「何？」

「一時間くらい働いて……結構な花を刈ったし、それだけの記憶も見た」

「ああ。手際がいいね」

「その、記憶なんだけどさ……全部、一緒なんだ」

「……一緒？」

「性別も年齢もバラバラ……だけど、皆ひもじい思いをしてる。お腹をすかしてるんだ」

「飢饉でもあったんじゃないか？」

「それだけじゃない……全員、結末が同じなんだよ。全員最後は、空が真っ白になって……そこで終わるんだ」

「へえ……何があったんだろうね」

「私は一体、何を見てるんだ？」

「……全てが済んだら、映姫様に聞きなよ。アタイに分かるのは……ここにいる魂は全員幸せに死んじゃいないって事だけさ」

「私は何か、恐ろしいモノを見てる気がするんだ」

「死神より恐ろしいモノはないよ」

「……少なくとも、私には人間の悪意の方が何倍も怖い」

「ははは、それもそうかもね」

声こそ笑う小町だが表情か、はたまた足取りか。

そう言ったほんの僅かな誤差が積み重なり、大きな違和感となって貴子を襲った。

「お前は知ってるのか？この花たちの末期を」

「さあね。アタイら死神にやそんな事関係ないのさ。ほら、仕事仕事」

立ち上がって続きを刈りはじめた小町。

それは休憩終わりの合図でもあり、これ以上踏み込むなどと言う警告のようにも取れた。

無駄な詮索はしたくないが、花を刈るたびに今際を見せられては嫌でも気になるだろう。

黙々と作業して少しづつ積まれていく花の残骸たちが、貴子には何とも悍ましい異形の物に思えた。

しかし嫌悪など貴子が抱いた感情の一片に過ぎない。

貴子に湧いた気持ちの本質は哀しさ。

思わず胸の奥がズキンと痛む。

花の残骸を見ていると、どういうわけか悲しくなってくるのだ。理由など分からない。

貴子は思った。

花となり咲いた霊たちはまるで叫んでいるようだ。

死者たちの声は怒り。

あるいは無念。あるいは嘆き。

小町の台詞が改めて重くのしかかる。

『ここにいる魂は全員幸せに死んじやいない』

死は悲しみの象徴だ。

別れを伴う出来事から、喜びは得難い。

「お前ら……幸せだったか？」

花たちは答えない。

穏やかな風が優しく花びらを撫でる。

「どうか安らかに眠ってくれよ」

彼岸花に鎌をかけながら、貴子は呟いた。

映姫への私怨などとうに忘れて、胸いっぱい供養を添えた。

また、一人の記憶を見る。

「ワシはお父の仇を討つんじや！鬼畜米國討ち滅ぼすんが、死んだお父への弔いじや！」

丸坊主に迷彩柄の帽子を深く被った少年が、どこかの家で火を吹いていた。

袖のないシャツから見える腕には脂肪がなく……よほどひもじかったであろう。

爪に、何度も噛んでいる跡があった。

激情のままに暴れる彼を、一人の女性が言葉で取り押さえた。

「何をしたつてもうお父は戻ってこん。アンタ、私を人殺しの親にしよるんか？」

「戻ってこんから殺すんじや！悪いんは敵じやろうが！」

「違う！戦争がいかんのじや……お前のお父は敵兵に殺されたんと違う！戦争に殺されたんじや！」

「そんなもん分かつとる！」

少年は顔を赤くして怒鳴った。

細く枯れた眈から血のような涙がポタポタと溢れた。

「ワシは……何を恨めばええんじや……」

「何も恨まんでええ。恨まんでええ……優しい人になりなさい」

「お母……」

「アンタならなれる。だってアンタはあの人の――」

時計が八時十五分を指す。

街は怪獣の咆哮と共に、光へ消えた。

「またあの光……」

あるいは老夫婦。

あるいは若い女。

あるいは赤子。

花の数だけ人がおり、記憶がある。

過程はバラバラだが辿る結末は同じ。

見る記憶全て同じ時間帯。

八時十五分。

そして何度も出てくる言葉。

『戦争』

この花たちに何が起こったのか、貴子は少しずつ理解し始めた。

「八時十五分に……みんな死んだ」

何が原因かは分からない。

いや、分かるには分かる。

光、音、熱。

人が感じられる全てが苦しみに直結していた。

もう他人事とは思えず、貴子はその原因を全力で思案した。

思いつく全ての可能性を出してやろうと、足りない頭で考えた。

一つ一つの記憶に、向き合った。

だが納得のいく答えは分からなかった。

光の正体を掴めず、眉間に皺を寄せた。

もはや思考回路は知恵熱寸前。

鈍い頭痛がして、頭を押さえた。

不意に、手にある物が当たった。

「……コサージュ」

風見幽香の顔が浮かぶ。

悪意、殺意。

人を傷つけるための道具。

貴子はハツとした。

手に正解が握られていた。

だが、その恐ろしい答えにとうとう吐き気がした。

八時十五分。

人々に降りかかった光。

その正体は……。

「爆弾……」

その答えは、当たっていた。

不意に貴子は慧音が八月六日と九日に黙禱を捧げていたことを思い出した。

何をしてるんだと問い、慧音は神妙に答えた。

『外の世界に広島と長崎という地方がある。昭和二十年、そこに原子爆弾という兵器が落とされたんだ。ほんの一瞬で、五十一万(※)を超える命が奪われた』

※(正確には広島で32万8929人。長崎で18万9163人。合計で51万8092人もの人が亡くなられた。この数字は被曝の後遺症で亡くなる方を含め年々増加している)

貴子はまず驚いた。

突拍子もない数字に唾然とし、後から嫌悪感が追ってきた。

『そんなモンがあったのか』

『あつたんじやない。今も一万二千基有るんだ』

『……何億人殺す気だよ』

思い出した。

昭和二十年。

時期も重なる。

あの光の正体は、殺戮兵器だったのだ。

「うっ……」

吐き気がした。

胸一杯に気分の悪い感情が詰まる。

貴子はその嫌悪感の塊を何も咲いていない場所へ吐いた。

朝食べた米が見えてもまだ吐いた。

キリキリ痛むのは腹か、心か。

遺産の逆流につられて、涙と鼻水も溢れた。

しかし己の顔すらなりふり構ってられないほど、とにかく腹から込

み上げてきた。

人間の悪意より怖いものなど無い。

己の持論が恨めしかった。

「はあっ……はあ……っうう」

一通り吐き終えて軽くなったのは胃袋ばかりで、心はむしろ重くなった。

濡れた眼に映るぼやけた世界。

死者の魂が咲かせた花畑は、あまりにも広がった。

日が沈みかけ、赤く染まった空の下で小町と貴子は大量の花を籠に入れていた。

何十個もの籠が用意されていたが、それでも足りるか分からない。

「やればできるもんだねえ。思ってたよりも早く終わったよ」

「ああ……そうか。良かったよ」

「……どうしたんだい。思い詰めるなんて似合わないよ」

「なあ小町。妖怪が人を食うのは悪か？」

「うーん。善では無いだろうけど、致し方ない部分もあるね」

「……人が人を殺すのは悪か」

「悪だよ——」

即答だった。

迷いなどなかった。

それが絶対に揺るがない真理であるかのごとく言い放つ小町に、貴子は少し救われた。

「アンタ、気づいたんだね。花が見ている世界の真実に」

「……ああ」

「アタイには人間の方がよっぽど死神に思えるよ」

「神なもんか。狡猾で残酷な獣だ。自分らが畜生って事にいつまでも気づけない、馬鹿な生き物なのさ」

「そんなに辛いモノを見たのかい」

「なんで人間ってのはこうも愚かなんだろうな」

「自分たちが利口だと信じて疑わないからさ」

「……そうかもな」

それはある意味的を得ていたかもしれない。

救いようもない現実だった。

「それじゃ、行こうか」

「何処にだ？」

「花たちを燃やして吊うんだよ。映姫様がやってくれる」

小町につれられ、貴子は向かった。

身寄りなきものの吊いの地、無縁塚へと。

無縁塚は幻想郷の中でもかなり辺境にあった。

ここへ埋葬されるのは、主に外から紛れ込んできた人間だ。

外界との境界が最も甘い場所であり、外の魂が迷わず成仏できるよう映姫が選んだのだ。

小町らは自分たちが刈ってきた花たちを積み上げ、小さな山のようにした。

幻想郷を包み込んだだけの花を積み上げると、貴子が見上げるほどの高さになった。

何人かの死神が整列し、その前で映姫が火を持っている。

全員が黙って見守る中、映姫は口を開いた。

「皆、苦勞様でした。放たれた魂が迷わないよう案内をしてください。それでは、始めます」

火は瞬く間に広がり、一つの大きな炎となった。

死神たちはみな目を瞑り、黙禱を捧げていた。

静かだった。

貴子も右に倣って目を瞑ろうとした。

だが、燃える炎とは違う音が耳に入ってきて、目を開いてしまった。それは、啜り泣く声。

映姫の声だった。

膝から崩れ落ち、ボロボロと大粒の涙を溢していた。

手で顔を覆って、しきりに呟いていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

映姫の静かな歔歔は、炎が尽きるまで続いた。

どこまでもどこまでも祈るように続いた。

一通り終わり死神たちもまばらになった所で、貴子は灰となった花たちに向け合掌をした。

願わくば、安らかに眠れるように。

「……………」

不意に、隣に映姫が現れた。

同じく諸手を合わせている。

その瞳はまだ赤かった。

貴子は、ずっと聞きたかったことを映姫に打ち明けた。

「魂たちは何処へ行くんだ？」

「貴方が辿ったように三途を渡り彼岸へ向かいます」

「輪廻転生か？」

「はい。また忙しくなりそうです」

「……なあ映姫」

「何ですか？」

「この人たちの来世はできるだけ幸せにしてやってくれよ」

「……それは彼らの生前の行い次第です」

「そうか。なら良かった。幸せになれるよ」

「……貴方の言う幸せとは何ですか？」

「そうだな……お腹いっぱいになれたら、幸せだ」

「……貴方らしい答えですね」

「ならアンタにとっての幸せって何だ？」

「それは善い行いを積み、人の為に生きることでしょう」

「アンタらしい答えだ」

「変ですか？」

「いや、すごいと思うよ」

「どうしたんですか。貴方らしくもない」

貴子は空を見上げて言った。

「なあ映姫……もしこの涙が名も知らぬ花たちに流れたものだとしたら、アンタ笑うか？」

「……笑いません。笑わせません」

「人間を殺すのはいつだって人間なんだろうな……なんだかそれがどうしようも無く悲しくってさ」

「……ええ。ですが貴子さん、人を癒す事ができるのもまた、人間なんですよ」

映姫の声は優しく、いつもの説教臭さがなかった。

風に乗って散りゆく灰を見つめて言った。

「人を傷つけるのは簡単です。それと同じくらい、人を癒す事も簡単なんですよ」

「アンタが言うなら、そうなんだろうな」

「私は閻魔です。私情は挟みません。ですが……一度だけ、私の気持ちを言わせてください」

「ああ」

「どうして……どうしてこんなに沢山の罪無き命を奪う必要があったんですか……！花となった命一人一人に、待ち侘びる明日があったのに……愛する家族が居たのに！私は憎い！こんな惨い事をした者が！」

顔を歪め激情を吐露した映姫は、何より悔しそうであった。

「……花の一つが言ってたよ。悪いのは戦争だつてな」

「ええ。だから許せ。その論法は痛いほど分かります！ですが……ですがつ！」

「私だって許せない。だけどさ、憎しみの果ては……戦争だろ」
「……つ」

「少なくとも私はもう花畑を咲かせたくはない……二度とな」

「……私も同じです」

「私は馬鹿だから難しい事は分からないけどさ……来世でご飯いっぱい食べられたら良いな」

「ええ……できますよ。きっと、できます」

「今度は平和な空の下で、生きてて良かったと思えますように」

貴子は深く願った。

広い空は、花の煙を受け止める。

映姫の涙を見て、木陰で休んでいた小町が呟いた。

「冥福を祈るよ」

懐から一羽の折り鶴を出す。

折り鶴は空へと舞い立つ。

平和な空を目指してどこまでも、羽ばたいていった。

告白と筋トレはサンセット

ある日の暮方の事である。

一人の女が、寺子屋の中で筆を走らせていた。
狭い部屋の中には、この女の他にもう一人女がいた。

「おや貴子。何を書いているんだ？」

「……その質問はお前で十人目だよ。私が何かを書いてるのがそんなに珍しいか？」

「いや、悪気はないんだがな」

右頬を押さえながら言う慧音。

表情はどんどん曇り、涙目にまできている。

すこしやつかみが過ぎたと、流石の貴子も申し訳ない気持ちになった。

「私に読み書きを教えてくださいましたのは慧音だろ？その練習がてら日記でも書こうかと思つてさ」

「……………」

「な、なんだよ。悪いか？」

「偉いっ！」

「はっ？」

「自ら学ぼうとする姿勢、感動したぞ！」

「そんな大袈裟な……………」

「どれ、良ければ私にも読ませてくれ！」

「そりゃ構わないけど…………少しも面白くないぞ」

「お前の日常を書いているなら小説より奇なりだ！どれどれ——」

慧音は日記を手に取り意気揚々と読み始めた。

生徒の宿題を見るような、あるいは我が子の成長を喜ぶような優しい瞳で。

だが、三行目で破顔した。

『ゆうかになぐられた。三ぱつ。アイツがじごくに落ちますように。あの世でえいきと出会った時が楽しみだ。』

昼、けいねに頭つきされた。石頭め。

ゆかりに怒られた。いへんなんて知らないと私はなんどもいつて
いるのに』

パターンと日記を閉じ、ヘナヘナと地面に座り込む慧音。

人の日記を読んで一番シヨックな反応をされたと貴子は思った。

「殴られた事から始まる日記なんて初めてだよ……」

「照れる照れる」

「結構な量を書いたが……この恨み節はどの辺りまで続くんだ？ 読み飛ばさないと疲れそうだ」

「ん？ まだ書いてる途中だよ。幽々子の分が終わってない」

痛みに強い慧音の石頭が、中の方からジリジリ痛む。

「どういう育ち方をしたんだかと、心底思った。」

「……あ、そうだ慧音！ お前この野郎！」

「ど、どうした急に」

「この前花を採ってくるよう頼まれたよな。お前、何が博麗の巫女に退治される心配は無いだ！」

「え？」

「花取ってたら博麗の奴にぶん殴られたぞ！ 『やっぱりアンタが犯人なのね』 ってな！」

「そんな事があつたのか!?!」

「せっかく取ってきた花もすぐに枯れたし！ とんだ目に遭ったよ！」

「それはすまない事をした……」

「ごめんで済んだら妖怪退治屋はいらねえだろうがよお！ ああん!？」

「どうしたんだ貴子、ちよっと変だぞ」

「そのでけえ乳揉ませろい！」

怒り心頭、貴子の手が真っ直ぐに延びる。

鈍い音がした。

何度も何度も、除夜の鐘のように。

「——いやホントずびばせんでした」

「ごめんで済んだらと言ったのはお前だぞ」

正座でマジギレされる貴子。

慧音は下品なネタを何より嫌う。

その事を努努忘れないように、貴子は日記と筆を手を取った。

『けいねに頭つきされた。百八回』

額の汗を拭い満面に笑う貴子。

「反省しろ！」

百九回目の音がゴツンと鳴り響いた。

太陽が定時を迎えて沈んだ時分。

貴子はたんこぶまみれの頭を労りながら永遠亭で診察を受けていた。

戸を叩く事すらせずにズカズカと上がり込む様は、勝手知ったる常連の振る舞いである。

永琳は開口一番、貴子に問い詰めた。

「馬鹿なの？」

「ギャグ回なら怪我しないと思っただが」

「メタな発言は冷めるわ……それにしても貴方、生傷が絶えないわねえ。体は大事にしなさいよ」

「不思議なことに妖怪退治やってた時より怪我してる気がするんだよ」

「その頃は毎日酒と博奕でしょ」

「紅茶とヴァイオリンだ」

「プライドだけは貴婦人なのね」

薬を手渡しながら永琳は言った。

時刻が深夜帯ということもあって、不機嫌そうにカルテの端をコツコツと指で叩いている。

チラチラとカレンダーの方をみながら、溜息をついた。

露骨に帰って欲しそうな態度を取る。

それに気づいているのかいないのか、偉そうに椅子の上で足を組む貴子。

焦ったく湯呑みを傾ける。

「ふう……」

「早く帰りなさいよ」

「……折り入ってお話があります。永琳先生」

「何よ改まって、気持ち悪い」

「今晚だけ……私を入院させてください」

「何故？前はあるなりに入院を嫌がっていたのに」

「薬師は命を守る職業だよな？」

「ええ、だけど貴方の体は健康体よ」

「今帰ったら……次に会うのは葬式だ」

「どういうことよ」

空になった湯呑みをことりと机に置いて、泣きそうになりながら貴子は言った。

「幽香に殺される……」

「……何をしたのよ」

「私は断じて何もしていない」

「はいはい、悪者は皆そう言うのよ。何もしてないなら帰りなさい」

「いや、語弊があったな。確かに何かはやらかしたんだ。でも私には

それが何か分からない。頼む、アンタの頭を貸してくれ」

「嫌よ」

「つな！私が死んでも良いのか!?!」

「そうね。貴方が死んでから考えるわ」

頬杖を突きながら、面倒臭そうな口調で永琳は告げた。

永琳からすれば貴子はもはや面倒事を起こすだけの迷惑な人間でしかなかった。

ましてそれを助けてやる義理はない。

「今日はもう閉店よ」

「明日になったら白骨死体だ」

「……はあ。これに署名しといてくれるかしら」

「何だよ」

永琳が引き出しから出した紙を見る。

やたら無愛想な文字でこう書いてあった。

『臓器提供の同意書』と。

「役に立てるわよ」

「死ぬ前提で話を進めるな！」

貴子の怒声が夜の永遠亭に響いた。

それと同時にもう一つの音が鳴った。

永琳の診察室の戸が開く音だ。

何者かがやってきた。

「永琳！助けてくれ！慧音に殺される！」

並々ならぬ剣幕の妹紅だった。

永琳の顔に青筋が一つ増えた。

「あれ、貴子。何してるんだこんな所で」

「幽香から避難してきた。お前は？」

「奇遇だね。私も慧音から避難してきたんだよ」

「あつはつは。お互い根無草か」

「こりや傑作だ」

「二人とも、ちよつとそこに座りなさい」

「もう座ってるよ。慧音が不機嫌でさ、今晚ちよつと入院させてくれ」

プチンと音が鳴った。

大きく膨らんだ水風船を破裂させたような、勢いの良い音が。

永琳がいたはずの場所に、般若がいた。

「はい、ちよつとそこに立って」

「ん？」

「イヤーツ！」

セツナ！永琳のブレイクダンスめいたカポエイラがか細い妹紅の

首筋を潰す！

「グワーツ！」

右頬を蹴り抜かれた妹紅の体が浮いた！

青ざめる貴子！

その隙を永琳は見逃さない！

「イヤーツ！」

回転の勢いを拳に乗せ流星めいたライトブローを放つ！

ゴウランガ!

一瞬にして二つの悪は成敗された!

インガオホー!

永琳は闇深き夜空に絶叫した。

インガオホー……。

「……師匠」

「何かしら」

「どうして患者が二人も増えてるんですか」

「鳴いた七面鳥は矢で射たれ焼かれる定めなのよ」

「ここはネオサイタマじやありません。師匠も手伝ってくださいよ」

「はいはい……」

ボコボコにやられた二人がベッドに寝かされる。

後日貴子の日記に『えいりんになぐられた』と加えられたのは言うまでもない。

「……なあ妹紅」

「なに?」

傷だらけの貴子が、すでに回復した妹紅に問いかけた。

暗い病棟に蝉の声と二人の声だけが響く。

「なんで慧音は怒ったんだ」

「……わからないんだ。いつも通りのはずだったのに」

「だよな。そうだと思っただよ。妹紅、岡目八目って知ってるか?」

「ううん、知らない」

「当事者よりも他人の方が物事を客観的に見れるって意味だ。そこで一つ提案があるんだけど」

「なに?」

「私も幽香がなんで怒ってるか分からない。だから、最近の出来事を話し合っただけ原因を突き止めないか?」

「……なるほど。良いアイディアだ」

「よし。じゃあ妹紅から話してくれ」

「ん、わかった」

上半身だけを起こして、妹紅は話す体勢に入った。さてどこから話そうかと思案する。

不意に、戸が軋む音がした。

思わず身構える二人。

そこにいたのは、鈴仙だった。

「寝込みを襲うなんて破廉恥なお人。発情期か？」

「違うわよ！……つと、夜中だから静かにしなさい」

「叫んだのはお前だろうが」

「その……私も混ぜてくれないかしら。オカメハチモク？……だか何だか知らないけど」

「ああ、良いけど。誰か怒らせたのか？」

「……この前師匠に怒られちゃったの」

「この前？じゃあもう機嫌は治ってるんだろ」

「ええ。ただ原因を知っておかないとまた怒られちゃうじゃない。

師匠、怒ると怖いんだもん」

「そうか。まあ来るもの拒まずだ。よし、今夜はとことん語り合おう」

「それならこれを点けましょう」

そう言うのと鈴仙は、一本の蠟燭を立ててそこにマッチで火をつけた。

ゆらゆらと揺れる小さな灯火を囲んで三人で話し合う。

まるで百物語のようだと、貴子は密かに思った。

「それじゃ、私から。」

慧音が不機嫌になったのは今日の昼からで、その時私たちは買い物に行ってた。

出会った時は全然楽しそうだったのになあ。最後の方なんか返事もぶつきらぼうでさ。

私もそこまで人の感情に敏感じゃないけど、流石に慧音が不機嫌なのは伝わってきた。

何かしでかしたのかなと思ったけど全然心当たりもないし。でも

慧音を傷つけてたら嫌だからさ。思い切って聞こうとしたんだ。そこで問題が起きたんだよ。

……こればかりが私も分からないんだ。

いくらなんでも往来の真ん中で聞き詰める訳にはいかない。

だから機嫌取りの意味も含めて甘味処に誘った。

慧音が甘いもの好きなのは知ってるでしょ？

そこでゆつくり話をしようと思ってたんだ。もちろん私の奢りで。

そしたら、ビックリだよ。

急に立ち止まったと思ったら、慧音が泣きそうな顔しててさ。

そのまま何も言わずに何処かに走って行っちゃった。

わたしは一体何をしでかしたんだか……」

妹紅は難しい顔をしながら話した。

——少しだけ考えた後、鈴仙が手を挙げた。

「慧音さんの服はいつもと同じだったの？」

「うん。いつもの服だったし、いつも通り似合ってたよ」

「サラッと惚気ないの……けど、服を褒めなかった訳ではないのね」

鈴仙の表情は振り出しに戻った。

今度は貴子が質問をした。

「それは今日の話だよな？」

「うん。正午くらいかな」

「私、夕方慧音に出会ったけど別に不機嫌じゃなかったぞ」

「え、そうなの？」

「ああ。ボコボコに頭突きされたよ」

「……それって不機嫌なのでは」

「いつも通りって事だ。もし慧音が不機嫌だったら頭が碎けて死んで

るよ」

「しかし……ますます不可解だ。私と別れて貴子と出会うまでに何があつたんだ？」

妹紅の問いかけに全員がそれらしい答えも出せず黙り込んでしまった。

オカメハチモクの効能は薄いのか——そう思った時、煮詰まった場

が動いた。

発破を掛けたのは貴子である。

「そもそもなんだけど、慧音にしてはおかしくないか」

「何がだ？」

「もし妹紅が何かをしたんだとしたら、慧音はちゃんと注意すると思うんだ。アイツは言うべき事は遠慮なくいうタイプだろ？」

「……確かに、そう言われるとそうかも」

靴下の柄が左右で違うと三十分怒られた事のある貴子。

その発言には、説得力があつた。

しかしそれ以上先に進める訳でもなく、またしても場が硬直しようとした時……

「あー私分かつたー！」

不意に、鈴仙が声を上げた。

蠟燭の火が風を受けて揺れる。

過敏になっていた耳に大きな声で喋られるもんだから、余韻でキーンとなつてしまった。

「もう少し声抑えろっ……！」

「ごめん……けど、分かつたわよ」

「自信满满だな。聞かせてもらおうか」

鈴仙は長い髪をかきあげて、己の推理を語り始めた。

「まず確認ね。」

最初に出会った時はいつも通りだった。服を褒めなかった訳じゃない。少しずつ様子がおかしくなつていつて、最後は返事も無愛想だった。

機嫌取りに甘味所へ誘ったら、泣きながら何処かへ走り去つてしまった。

「……と。ただど夕方、貴子と出会った時はいつも通りだった……と。そして何より、慧音さんはちゃんと注意をできる人なのよね？なるほど、これはもう私の推理に間違いないわね」

ドヤ顔でウンウンと頷く鈴仙。

その焦ったさに妹紅と貴子の不快感ゲージがみるみる上昇していく。

「はやく結論を聞かせてくれ」

「せっかちなねえ……まず一つ。今回の一件、妹紅は悪くないわね」
「え？」

「完全無罪かどうかは知らないけど、多分原因はもっと別よ」

「そうなのか？なら慧音はなんで怒ってたんだ」

「それはね……」

殊更に焦ったく出し惜しむ鈴仙。

どこぞの少年探偵なら、急にドアがボタンと閉まって広告に入る所だろう。

鈴仙があまりに勿体ぶるので、貴子のデコピンが炸裂した。

「いたっ！」

「早よ言え」

「もー、分かったわよ」

気を取り直して鈴仙は言った。

「慧音さんは、虫歯だったのよ！」

したり顔の鈴仙。

呆気に取られる妹紅。

あまりに突飛な結論だった。

「その根拠は？」

「ふふん、一つ推理してみようかしら？」

「何だよ」

「貴子、夕方の慧音さんの事をよく思い出して。その時の慧音さんは……ほっぺたを抑えてたんじやないかしら？」

「……………あっ！」

貴子に電流のような衝撃が走る。

夕方の慧音。

それは貴子の日記を読んでいた時。

あの時、確かに違和感を覚えた行動があったはずだ。

『右頬を押さえながら申し訳なさそうにいう慧音。』

表情はどんどん曇り、涙目にまでなっている。すこしやつかみが過ぎたと、流石の貴子も申し訳ない気持ちになった』

あの時の貴子はあまりにも質問されすぎるから腹が立って、その苛立ちを慧音にぶつけた。

そのせいで傷ついたんだと思ってたが、確かに落ち込みすぎだった。

「押さえてたよ。泣きそうになりながらな」

「やつぱり。事件の真相はこうよ！」

痛み止め等を服用して虫歯を隠しながらデートに向かった慧音さん。

だけど効きが薄かったのかどんどん痛みが増してきた。

それで不機嫌になっていったのよ。

そこに妹紅が甘味所なんか誘うから……慧音さんは泣いちゃったのよ。

よっぽど処置が遅れたのかしら。

大方、走り去った後は歯科医に診てもらって、虫歯の治療をしたんじゃないかしら。

そのとき打った麻酔が気になって頬を押さえてたと思うの。

「なるほど……」

「これが事件の真相よ」

「なら妹紅は無罪じゃないか？せいぜい虫歯の慧音に甘いモノを勧めたくらいだろ」

「いや……そうでもないわよ」

「え？」

「だってね、貴子……」

またしても結論を焦らされる。

——もう鈴仙の勿体ぶりについてツツコまないようにする。

「虫歯はキスで、感染るのよ」

蠟燭の光に寄せられた蠅が、炎に焼かれてジュツと消えた。

思わぬ感染経路。

どうやら、妹紅が犯人らしい。

齒磨きはちゃんとしようと、貴子は誓った。

「それじゃあ、次は私で良い?」

鈴仙が名乗りを上げる。

了解を得る前に話は始められた。

「妹紅なら知ってるかもだけど、お師匠様は滅多な事では怒らないわ。たとえ酒や食べ物を頭からぶっかけられようが、唾を吐きかけられようが大抵のことは笑って見過ごしてくれるの。」

だけど優しい分怒った時はホントに怖いわ……しかも夕子の悪いのが、どこに地雷があるか分からないのよ。

例えばご飯を炊き忘れたとしても気長に待ってくれるのに、蚊を一匹殺しただけでキレたりするの。殺生が嫌いなのは分かるけどどうも極端だと……。

あと、怒る時の前兆が全くないのよ。ついさつきまで楽しく話してたのに、十秒後には雷が落ちたりするんだから。

今回も、急だったわね。一昨日のことだったかしら。

その日、私は師匠にお出かけのお誘いを受けたのよ。

今日から見て三日後の日は空いてるかって言われて。

でもその日はちよつとどうしても外せない用事があったから、別の日にしてもらえないかって聞いたの。

私は師匠の予定はちゃんと把握してるし、他にも暇な日が沢山あるのを知ってたから。

それに、師匠は優しいからお誘いを断ったくらいじゃどうもならないと思ってたの。

でも何故か、ダメだったわ。

師匠があんなに怒るのは初めて見たわよ。『何で私の言う事を聞けないの!』って怒鳴られたし。

師匠が声を上げることなんて珍しい……というか、初めて見たわ。でももつと珍しかったのは、怒りが尾を引いてたこと。

切り替えの早い師匠が、その日一日拗ねて無愛想だったのよ。

お誘いを断っちゃったのは申し訳ないけど……なんであんなに怒ってたのかしら。私には全く見当がつかないわ」

長いうさ耳をタランと垂らしながら鈴仙は首を捻った。

「啞えタバコで妹紅が聞いた。」

「多分誘いを断った事自体よりも、三日後つてのが大切なんだろ。何か心当たりはないか？」

「うーん、その日は何の変哲もない平日だし……」

「平日……日付……」

そこで貴子はいきさっきの事を思い出した。

そういえば、永琳がやたら気にしていた物があつた。

「カレンダー……」

「え？」

「そういや永琳の奴、やたらカレンダーを気にしてたぞ」

「ホント?となるとカレンダーに手がかりがあるかも知れないわね」

そう言うなりすぐさま立ち上がり、三回息を吸って吐いてする間に鈴仙は戻ってきた。

胸にはカレンダーの束が抱えられている。

「屋敷中を持ってきたわ!」

「いや、いらないだろ」

「三日後はつと……何、これ」

意気揚々とした鈴仙の手が止まる。

カレンダーの日付欄。

三日後の枠に、大きく『☆』と付けられている。

「これだけじゃない……これも、これも……何よこれ!全部のカレンダーについてるじゃない!意味不明よ!」

「……ともかく、三日後に何か意味があるつてのは間違い無いな。しかもこんだけ印をつけるつて事はそれなりのイベントが」

分かるのは永琳にとって三日後が大切な日であると言う事。

満月でもなければ大安でもないその日に一体何の意味があるのか。

その事が分からず、三人の議論は踊った。

「うーん……やっぱり分からないわよねえ」

「手がかりが少なすぎるなあ。せめてもう一押し何かあれば……」

「うーん、そういえば」

鈴仙が思い出したように言う。

「最近師匠が星座占いにハマってたわね。ラッキーアイテムがどうか」

「なんだよそれ！どうでもいいー！」

「いや……まて」

妹紅が口元を押さえながらただならぬ表情をする。

指に挟まったタバコから、灰がポロリと落ちた。

「分かったぞ……そうか、そう言うことか！」

「何が分かったのよ！」

吸い殻を灰皿に押し付けながら妹紅は言った。

「誕生日だよー！」

「……え？」

「永琳は誕生日だったんじゃないか？その星座占い、永琳は何座だった」

「えっと……確か乙女座よ」

「やっぱりな。乙女座は今の時期だよ。誕生日が近いって事に気づいて欲しくて星座占いだのを始めたんだろう」

「でも師匠は（規制）歳よ！？誕生日なんてそれこそ数えきれないくらい迎えてるわ！今更それを気にするなんて……」

「分からない奴だな……永遠亭で祝って欲しかったんだろ。カレンドーに星マークまでつけて、気づいてもらえるかとワクワクして。挙句誘ったら仕事で無理って……そりゃ永琳も怒りたくなるさ」

「むむむ……そうだったのかしら……」

「祝ってやりなよ。アンタにとつちや大切な人なんだろ？」

「けど、用事が……」

「そもそも永琳の誘いをすっぱかすなんて何の用事なんだよ」

「ネイル塗りに行くのよ」

——妹紅のゲンコツが、鈴仙の頭をカチ割った。

骨と骨の高い音。

両耳の間にぷくりとタンコブができる。

「いったーいー！」

膨れたのはたんこぶだけでは無い。

両ほっぺもまた焼きすぎた餅のように膨らんだ。

「……ところで」

「なに？」

「永琳のバースデーケーキには何本蠟燭を刺すんだ？」

「それは歳の数だけ……」

「(規制) 本も刺すのか……?」

三人の頭に、ウニのようになった無残なバースデーケーキが浮かんだ。

何億回目のハッピーバースデーを祝ってほしいと拗ねた乙女座の永琳。

たしかに乙女な奴だと貴子は笑った。

「……さて、意外と岡目八目作戦はうまくいってるな。妹紅も鈴仙も問題は解決したろ?」

「答えがあつてたらね」

「それじゃ、最後は私か……先に言つとくが、相手は幽香だからな。常識とか論理とかは通じないぞ」

「アンタも十分通じないよ」

「それ、同感だわ」

二人が道端に落ちている犬のフンでも見るような眼で笑う。

それもそのはず、二人の問題はとっくに解決している。

残すところは他人事なのだ。

そして二人は知っている。

どうせ貴子がやかしかしているのだろうと。

この迷惑が服着たような奴が原因なのだろうと。

「何だか不名誉な事を言われた気がするが、まあ良い」

「幻聴にはエビリファイが効くわよ」

「ああ、最近夜な夜な『殺す』って声が聞こえてきてき、助かるよ」
「殺す……殺す」

「ほら、今も」

「ホントだ、聞こえてくる……って」

蝋燭の炎が消えた。

「幻聴じゃないわよコレ！」

「殺す！」

屋敷の壁が爆発音とともにぶち破られる。

そこにいたのは、悪鬼羅刹のように怒り狂った緑髪。

硬く握られた右拳から煙が立ち上っている。

「なっ、幽香ああ!？」

「久しぶりねえ貴子。死になさい」

幽香から心臓が凍りつきそうになる殺意が飛んだ。

辺りの竹林が揺れる。

近くの動物たちは皆して逃げた。

冷たい眼光が貴子に刺さる。

「辞世の句を読みなさい」

「馬鹿野郎！尊い命を！大切に！」

「そうね。命は大事にすべきだわ。そして貴方は私を怒らせるべき
じゃなかった」

幽香が右手を上げる。

——瞬間、妹紅が貴子を蹴っ飛ばした。

蹴り様に貴子が見たのは、首から上のない妹紅の死体だった。

幽香の手には血がベツトリと付着している。

僅かでも遅れてたら、あの血は貴子のもものだった。

「つち！最近首から上がよく吹っ飛ぶよ！痛いんだからやめてよね
！」

爆炎を伴って復活する妹紅。

熱そのままに怒りで声を荒げている。

「おい貴子……お前一体何したんだ！」

「分からないんだよ！」

「ごんの馬鹿！」

妹紅と言い合う貴子。

そのせいで、僅かに気付くのが遅れてしまった。
自分の横顔のすぐ近くに幽香の拳があった事を。

「あつ、死んだ」

——およそ人を殴ったとは思えない怪音。

壁が打ち付けられて碎ける。

吹っ飛んだのは——幽香だった。

「私の患者に手は出させないわよ」

「うふふ……貴方の患者である前に私の奴隷。ぶち殺しても文句は無いわよね」

「大有りよ。この屋敷を壊したついでだけで万死に値するわ」

「その馬鹿を渡してくれば何もしないわ。それとも貴方が死にたいの？」

「頭のクスリが要るようね。とびつきり苦いヤツを処方してあげるわ！」

幽香は根っからの強者、そのファイティングスタイルは至ってシンプル。

力でもってねじ伏せる。

防御や絡め手など、この花妖怪の前では意味をなさない。

ガードしようと思わないのだ。

それはまるで、藁の家が大砲を防げぬように。

圧倒的な剛。

故に、強い。

「っ!？」

だが、永琳は幽香の知る獲物では無かった。

繰り出した拳が、まるで飲み込まれるような感覚。
勢いのまま、気づけば足が浮かされていた。

しばしの浮遊感を堪能し、くるりと空中で回転して着地する。

その隙を永琳は見逃さない。

すでに右足の蹴りが空を掠めていた。

幽香は右手でそれを受け、掴み、そのままジャイアントスイングの要領でぶん投げた。

「うふふ、なかなかやるじゃない。久しぶりに退屈しのぎができそう
だわ」

「そう。私は暇すぎて欠伸が出そうになったわ」

「そのまま眠らせてあげるわ。永遠に」

幽香の鉄拳は当たらない。

猛攻、一撃一撃が巨大な隕石の如く。

底知れぬ悪意を持った攻撃は豪雨のように降り注いだ。

かたや永琳はそれを着実に返す。

永琳の戦い方は合気道のそれに近かった。

相手の攻撃が強ければ強いほど、返しの技が強力になる。

幽香にとって永琳ほどの技術を持った合気道は正しく天敵と言える
だろう。

己の凶悪さが己に牙を剥く。

しかし永琳とて余裕があるわけではない。

もし一撃でも交わし損ねたらおそらく自分が死ぬ。

まさか月の民、その中でもトップクラスに強い自分が死と隣り合
せの戦闘をする羽目になるとは。

それは上空にかかった木の板を踏み外さぬよう一步一步歩く事に
等しい。

冷静に一歩ずつ。

足を踏み損ねるような事は、落ち着いていれば起きえない。

「まるで獣ね。敵を屠る事しか考えられない哀れな畜生みたいだわ」

「遺言はそれでいいのかしら?」

「残念、私は死なないのよ」

「それは可哀想ねえ。死ねた方が楽なのに」

「どっちみち貴方に私は殺せないわ」

暴力の極みたる剛を技術の果てたる柔で返す。

柔よく持って剛を制すとは言うが、実際はどうか。

このままでは埒があかない。

もつと強力な返し技を。

幽香を打ち倒す為には並々なる技ではダメだ。

より強烈な一撃を。

その為にはもつと近く、危険な所まで攻撃を近づけなくてはならない。

当たる寸前、わずかな所で返す。

今よりも更に引きつける。

「……………」

そこからの出来事を、周りの者たちは呆然と見るこゝとしかできなかった。

永琳は構えを解いて両腕を垂らし、全身から力を抜いた。

立つ事以外の力全てを捨て去った。

その意図を幽香も理解したようで、スタスタと近くまで歩み寄る。

そして永琳の顔面目掛けて右拳を構える。

睨み合う両者の間合いは恐ろしく近い。

仁王立ちの永琳。

拳を構えたままの幽香。

恐ろしく長い数秒が二人を包んだ。

「次が最後の一撃になるわ。全力で来なさい」

「うふふ、久しぶりに楽しかったわ」

幽香の右拳に力が込められる。

気迫のぶつかり合いは周囲を揺らし、草木はのけぞるように折れる。

もはや力を溜め切った幽香の攻撃は巨大隕石に等しい。

悪どい笑みを浮かべる。

——彗星が放たれた。

火山が噴火したような轟音……。

「……………どっちが勝ったんだ」

物陰から事の成り行きを見ていた妹紅が現れる。

そこには、二人の影があった。

「な……いつらバケモンか!？」

声を上げて狼狽する。

無理もない。

幽香も永琳も——立ったまま気を失っていたのだから。

幽香の正拳突きと永琳の返し技。

それらは交差し、全く同時にお互いを撃ち抜いた。

「師匠っ!」

慌てて鈴仙が飛び出てきた。

まさか永琳がやられるとは、想像もできなかった。

否、勝負は痛み分けであったが、相手が永琳ならば傷一つ付けることすら大金星である。

たかだか地上の花妖怪が、拳一つでねじ伏せた。

その一事が何より恐ろしかった。

「とにかく治療よ! 妹紅、貴子! 二人を連れてきて!」

治療室の前で、貴子と妹紅は静かに座っていた。

部屋の中では鈴仙が処置に走り回っている事だろう。

妹紅は最後の一本に火をつけながら言った。

「何であそこまで怒らせた」

「……さあな」

「事細かに言いなよ。あの花妖怪は案外繊細な奴だ」

壁にもたれかかりながら、貴子はゆっくり語り始めた。

「朝起きたら、何故か私は一枚も服を着てなかった。やたら頭も痛い。とりあえず水を飲もうとして起き上がったら、布団の中に私と全く同じ状態のミスティアがいた」

「二人裸で寝てたのか?」

「そうなるな」

「……貴子、そりゃ誰だってキレルよ」

「……だよな。認めたくない現実にウンザリしてる」

煙混じりの溜息が、プカプカ消えた。

——後日

人里の往来で妹紅は慧音と出会った。

「あれ、慧音か。何してるの?」

「良かった妹紅、言いたいことがあったんだ!

「どしたの?」

「この前は済まなかったな。私、不機嫌だっただろう?実はな——」

「虫歯、でしょ?」

「え……ああ、そうだけど……どうして分かった?」

「岡目八目だよ」

「え?」

「んーん、何でもない」

「ふふ、変な奴だな。今日はこれから暇か?良かったらこの前誘ってくれた甘味処に行かないか?」

「良いね。行こう行こう……っ!」

「どうした妹紅!」

急に地面にうずくまり、悶絶する妹紅。

顎の神経に直接針を刺されたような痛み。

「歯が……痛い……っがあ!」

「……まさか」

「自分の虫歯には気づけなかった……っく」

「非常に明るいボンボリの前はかえって見にくいんだな。行き先は歯医者に変更だ」

「夏休みの宿題と歯医者是一緒だ……」

「その心は?」

「どちらもドリルが嫌になる。もこっちです」

「掛けとる場合かーっ!」

——同日、永遠亭

診察室で鈴仙は永琳にあるものを手渡した。

「師匠、誕生日おめでとうございます!」

「え?」

戸惑う永琳の手に、白いハンカチが手渡された。
その瞬間、クラツカーの音が鳴る。

後ろから輝夜とてゐが現れた。

「ふふふ、カレンダーに印をつけるなんて可愛らしい所もあるのね」
「姫様……」

「誕生日おめでとう、永琳」

永琳の表情は僅かに固まり、そして綻んだ。
顔にほろりと一筋の線ができる。

「え、ちよつ、師匠!？」

「うふふ、ごめんなさい。嬉しくてつい……」

「サプライズは如何でしたか?」

「ええ。貴方のハンカチがすぐに役立ったわ」

「それは何よりです。ケーキも用意してますよ!」
箱を取り出してそれを永琳に手渡す。

入道雲を固めたような真っ白のショートケーキ。
その上には幸せの赤いイチゴ。

そして、蠟燭。

「この蠟燭は?」

ケーキの上には四本の蠟燭が灯されていた。
それぞれが数字を象っている。

『8556』と。

「どう言う意味?」

「やごころ、と読んでください」

「あら、なるほど。考えたわね」

部屋が暗くなり、ケーキの蠟燭のみが灯りとなった。

「happy birthday to you♪」

鈴仙の子守唄めいた可愛い歌声が蠟燭を揺らす。

永琳はフツと蠟燭を拭き消した。

何億回目の誕生日。

そして生まれて初めての、バースデーケーキだった。

——同日、人里

人里は景色の綺麗な所。

自然に囲まれ空気は澄み渡り、一日を通して色が変わる。

朝は青。昼は緑で、夕方は赤。

中でも暮方の茜空はどこか懐かしい気持ちになる。

道を歩けば軒から香る醤油の香り。

遠くからは歩き屋台のラツパ。

カラスの寂しそうな鳴き声が聞こえる。

そこへズタズタと野暮な足音。

砂利を蹴飛ばし大通りを駆け抜ける女が一人。

「どいてくれーっ！」

道ゆく人を避けつつ交わしつつ、風のような速度で走る。

人里の者達は皆困ったように笑う。

あの女は誰かに追われないと生きていけないのか、と。

事実その時も追われていた。風見幽香に。

そして捕まった。

あまりにも呆気なく、逃げ切れるわけもなく。

「本日は何を求めかしら？」

「風見幽香の愛情く花の優しさを添えてくでお願いします」

「そちらは売り切れよ」

「他には何が？」

「本日は質の良い目潰しが手に入ったわ。もしくは指折り、爪剥ぎ、脛

砕きもオススメよ」

「お勘定で」

「お会計、半殺しになります」

「ツケといってくれ」

「お死払いは一括払いがモットーよ」

「ちよっと待ち合わせが無くて」

「なら、こう言うのはどうかしら？」

「つぐえ！」

幽香の拳が貴子の鳩尾を抉る。

「うふふ。払いたく（腹痛く）なっただでしょう？」
「ああ神様、どうかこの悪霊を祓い給え」

……後日、寺子屋に現れた貴子は慧音から「その顔じゃ生徒が怖がる」と言われて授業を止められた。

貴子の日記にはとうとう、『ゆうか、くたばれ』と書かれたのであった。

最後の最初

夢を見た。

……明晰夢とか予知夢とかそういうチャチなモノじゃない、もつと克明な……敢えて言うなら現実よりもリアルだった。

脳が記憶整理のおまけで見える奇天烈な世界じゃない。

あまりの彩度に起きた後もしばらく体から緊張が抜けなかった。本当にとんでもない夢だった。

決して悪夢じゃない。

だが（こんな言葉が有るかは知らないが）吉夢でも決して無いだろう。

それはこんな夢だ。

——私は湖の上に立っていた。

泳いでたんじゃなく、水面が陸地のような質感になってその上に立たされていた。

軽い揺れに耐えながら、私は誰かを待っていた。

誰かはわからないがとにかく待っていた。

いくばくもしない内に段々と天気荒れていって、雷を伴う大嵐がやってきた。

深浦の十二湖みたいな透き通った湖が、雨風を受けて大きくたわむ。

その上にいる私はまるで地震に襲われたみたいに平衡感覚を奪われた。

押しでは引いて、湖底の砂が舞い上がり水中が濁る。

風は吹き荒び今にも私を吹き飛ばさんとした。

だが私は誰かを待たなくてはならない。

顔すら見知らぬ誰かのために、この苦境を耐え凌がなくてはと躍起になった。

私は跳ねる水飛沫を手で掴み吹き飛ばされぬよう必死に耐えた。

ずぶ濡れになった体を目掛けていつ雷が落ちてきてもおかしく無

い状況。

何が為に待たされているかは知らないが、こんな中で私を待たせた奴はぶっ飛ばしてやる。

確かな怒りが心にあった。

そして——とうとう待ち人來たる。

青白い火の玉のようなモノがフヨフヨと舞い飛んできた。

私の近くで止まったそれは一層明るみを増して形を変える。

火球はどんだん人の形に近づいていき、やがて完全な人になった。

顔を一眼拝んでやろうとしたところで、次に私の目に写ったのは、見慣れた天井だった。

夢か……。

そう思つて溜息を吐こうとした時……今でもにわかには信じられないけど、声が聞こえた。

出所はわからないがハッキリと。

少し高めの女声でこう聞こえたのだ。

「明日また会いに行く」

寝ぼけた故の幻聴なんかじゃ無い。

絶対に声として聞こえていた。

驚いて近くを探し回ったけど、人影らしきものすら見当たらず倦怠感と恐怖だけが後に残った。

明日、何かが来る。

そしてその明日は、今日だった。

「……曇りか」

化粧を忘れたお天道様が恥ずかし紛れに顔隠す。

路端に伸びた芒の先が風も無いのにたなびいた。

褒められたって嬉しくないが、私の予感によく当たる。

悪い予感なら尚更当たる。

夢を信じた馬鹿ならまだ良し。

救えないのは当たる夢。

「……鬼気迫ろうが夢は夢。怯えて暮らすのは馬鹿馬鹿しいか」

平生から面白い夢を見たとか、そういう話が嫌いだったがいざ自分

が見てみると確かに誰かに話したくなる。

あの夢はそういう、一種の妙な力を持っていた。

気は進まないけど、博麗の奴に相談してみようか……。

曇天はますます暗さを増し、今にも一雨降り出しそうであった。

私はあまり神社へは行かない。

母数が少ないってのもあるけど何より深刻なのは、私が神社に行くこととするといつても雨が降ることだ。

私らみたいな一般人からすれば神を拝むなんて気分の問題で、まして雨なんかに打たれたら良い気分にはならない。

実際、今日も空には分厚い雲がかかって今にも天が泣き出しそうだ。

神様は私のことが嫌いなのかしらん。

もう一つ面倒なことに、ここから神社までは遠いのだ

なんだかんだで人里に住んでるけど、ここから博麗神社までは少し離れている。

直線的な距離で見たらそれほと遠くはないが道中で妖怪に襲われるリスクなりを考えたら近いとは言えないだろう。

余談だが妖怪退治屋の役割といえましょうという危険な道を安全に案内することだ。

一度里の偉いさん方が妖怪退治屋の組合を作って一元管理しようとしてたらしい。

だが結局殆どの妖怪退治屋が外れ街に住んでるような輩ばかりで頓挫したらしい。

そりゃ上手くいかなくて当然だろう。

私が言えたことじゃないが、妖怪を殺して稼ごうと考えるような連中はクズばかりなんだから。

私だって大手を振って表通りは歩けない。

人目を忍びながら裏路地をこそこそ歩かねばならない身だ。

愛に満ち溢れた素晴らしきこの世界だが、どうにも妖怪退治屋への差別は根深かった。

連中のガラの悪さも原因の一つだが、妖怪退治屋が外れ街に住む主な要因は人里からの差別だ。

神を信じぬ私からすると、世間の信心深さは並大抵ではない。

まして、妖怪を素手でぶん殴っちまうような仕事。

ケガレだの、ヨゴレだの。

迫害する理由なんて腐るほどあるさ。

妖怪退治屋は、人間達の頼もしい味方だとは思われていない。

むしろ妖怪じみた連中だとして下らぬ差別を受けていた。

博麗霊夢とて、その例に漏れない。

年端も行かない少女が山のような大妖怪を振り伏せてしまうのだから、確かに恐れるなという方が無理かもしれない。

でも、人里の中には心ない奴らがいる。

巫女を化け物呼ばわりするクソ野郎どもがいる。

墮落しながらも分け隔てのなかった外れ街の方が幾らか上等に思えて仕方ない。

私は半分以上自分の意思でこの仕事についた。

一番手軽で、毎日働かなくて良かったから。

あの巫女はどうなんだろうか。

重すぎる立場に自分の意思はあったのだろうか。

……まあ、大丈夫か。

なんせ私らみたいな被差別の民と違って、人に恵まれてるだろうか
らな。

「……やっと着いたか」

すこし熱の籠った森を抜けて苔むした石段を登る。

丹塗の剥げつつある鳥居をくぐればそこに博麗神社だ。

何であれ来たからにはひとまず参拝かな。

イの一番に手水舎で心身を清める。

山間にあるだけあって湧水はとても澄んでいた。

喉も乾いてたからそのまま飲みたかったけど、一度それで腹を壊しているから我慢した。

拜殿に向かい、カランコロンと乾いた鈴を鳴らす。

あの独特な音色は、日本人なら何故かめでたく感じてしまうものだ。

一際丁寧に手入れされた賽銭箱へ小銭を投げ入れる。

子供の頃、いたずらで小石を入れてカンカンに怒られたものだ。今でも小石くらいのものしか投げれてないが。

背筋を伸ばし、深呼吸。

腰から二度深くお辞儀。

胸の高さくらいに手を持ってきて、両手を合わせる。

この時、右手は少しずらしておく。

心を込めて、二度柏手を打ち最後に深く、お辞儀する。

願うのは健康と安穏だ。

「……意外と作法に詳しいのね」

一通りの参拝を終えたと同時に、拜殿の陰から箒を持った霊夢がやってきた。

その表情は海辺に転がるクラゲの死体を見た時に等しい。

「意外と信心深いのかしら？」

「尿意がなくてもトイレに行ったら用を足すだろ」

「そんなものを神様と一緒にしないで」

「意外と信心深いのか？」

「巫女なんだから当たり前でしょ」

「今時の巫女は異変を解決したりするんだな」

霊夢の眉間に皺が入る。

しまった、軽口が過ぎたか。

「何しに来たのよ」

「少し、相談しにきた」

「……はい」

「へ？」

霊夢が手に持っていた箒をつっけんどんに手渡してきた。

どういうつもりだろうか。

「どうせお金、持ってないんですよ。料金は労働で前払いよ」
「まだ何一つ内容を伝えてないぞ」

「相談料」

「……ろくな死に方しないぞ」

「よく言われるわ。階段を綺麗にしたら呼んでちょうだい」
キツパリそれだけ言って拝殿の奥へと消える霊夢。

あそこまで徹底した料金前払いは絶対に仕事をミスらないという自信か、はたまた極度の拝金主義か。

何であれ、やらない事には話が進まなさそうだ。

全く面倒なことになった。

まだまだ暑さは健在だつてのに。

——三十分ほど経って。

「おーい、こんなもんで良いかー?」

「ん、良いんじゃない」

「テキトーかよ」

「そんじやさつさと上がりなさい」

招かれるまま社殿の奥、霊夢の住居らしき所へと進む。

自然に囲まれていて風情があるのはいいが、少々年季の入った建物だ。

柱には細かい傷が入ってるし、床板が軋む音は不安を駆り立てる。

しかし社の傷みはそれだけ長い歴史を物語っていた。

「良い建物だな」

「建てた奴に言いなさいよ」

「住んでる奴がダメならこうはならないよ」

「はいはい」

何を言おうと返ってくるのはだるそうな相槌。

このやろう、社交辞令つてのを知らないのか。

「はい、お茶」

「ああどうもどうも」

喉が乾いてたから差し出されたお茶をがぶりと飲む。

……ぬるい。そして渋い。

「それで、アンタが一体何の相談よ。次の異変について?」

「そうだな、それについても一つ申し分があるんだよ」
「何よ」

霊夢の半目でだるそうな返事からは不信感が滲み出ていた。
そんな目をされるほど悪人じゃないのに。

「三度も異変を解決したアンタなら、私が無関係って事ぐらい分かってるだろうが」

「いや、関係ありまくりじゃない」

「だーかーらー、たまたま居合わせたただけだっつの」

「世間がやったと信じてるなら、真偽なんて関係ないのよ」

「暴論だ。メディアの陰謀だ」

「三度起きた異変、黒幕は全員違うのにアンタだけはずっといんのよ。無関係って方が無理あるわ」

「たかだか三度くらいで決めつけるなよ」

「この前花が沢山咲いた時もいたじゃない」

「あれは異変じゃなかったろ。会うなりブン殴りやがって！」

「紛らわしいのよ。死神と一緒に居るなんて」

「アレも色々大変だったんだぞ」

「知ってるわよ。新聞でやってたわ。花に魂が宿るなんてまるで御伽噺ね」

「夜が終わらなくなったりするのは滑稽か？」

「そうね、少しも笑えないことを除けば立派な笑い話だわ」

「ていうか、そうだ。新聞だよ」

「なに？」

「私の名前は新聞には載ってないよな」

「……そういえばそうね」

「ならなんで皆私の事を知っている。最近出会い頭に異変のことを言われるってパターンが多すぎて嫌気がさしてんだよ」

「多分、天狗の新聞とは別に異変の報告書が出てるからだと思うわよ」

「な、誰だよそんなことするのは」

「私だけだ」

「テメーかよ。頼むから確実な情報を広めてくれ」

「私が書いてるのは各所の有力者向けよ。閻魔とか、幽々子とか……人里なら慧音とかね」

「そこに私の名前があるのか？」

「その場にいた奴全員載ってるわよ。その中でも要注意な奴は赤で書かれてるの」

「もしかして私は赤か？」

「ううん、違うわ」

「ほっ……良かった」

「アンタはバーミリアンよ」

「真っ赤!？」

「一応目を通してく?ここにがあるけど」

「見せてくれ……」

霊夢が筆筒の引き出しから冊子のようなものをもってくる。

その表紙には後ろに行くにつれて雑になりながら『幻想郷異変概要』と書かれている。

表紙をペラりとめくった。

『紅霧異変関係者 レミリア ” 貴子 ” その他』

「これ私の名前目立ちすぎだろ!」

「気のせいよ」

「どこがだよ!その他ってなんだその他って!」

この野郎……いやに噂が広まってる原因だったか。

レミリアだの幽々子だのに並んで『貴子』なんて名前が書かれてたらそりや目につくだらうさ。

「アンタに一片の非がないなら謝るけど?」

「……いや、無罪かと言われるとそうでもないけど」

「それに今更何をしたって無駄よ。イメージはそうそう覆らないの。せいぜい忘れられるまで大人しくしてなさい」

大人しくしてろ……か。

そりや変哲ない日々を送れるならそれに越したことは無いだろう。

だが、今朝の出来事がそれを邪魔する。

「……また面倒事が起きそうって言ったらどうする?」

「ここでブン殴るけど」

「そりゃ恐ろしい」

「何よ、成敗されたいの?」

「いや、そうじゃない。なあ博麗さんや。ここの神社は夢占いってやってるか?」

「……夢?」

「ああ。実はそれが本題なんだ」

「……詳しく聞かせなさい」

——私は霊夢に今朝見た夢を説明した。

特に不安なのは『明日また会いに行く』という土産言葉。

今日、何かが起こるのではないか。

その疑念はほぼ確信に近かった。

「あの夢は相当リアルだった。何も無しに見られる代物じゃあない。例えば妖怪に取り憑かれてるとか……私の身に何か起きてたりしないか?」

「……参ったわねえ」

「な、そんなに不味い夢なのか!」

「いや、違う……違うけど、厄介な夢だわ」

「一体何が分かったんだ?」

「私も見たのよ。そんな夢を」

「……何だと!」

霊夢は湯呑みを机に置いて、口元を締めながら言った。

真剣な雰囲気、思わずたじろいでしまった。

「私の場合は木にもたれながら誰かを待ってたわ。いつまで経っても来ないからぶん殴ってやろうと思ってたんだけど……目が覚めたの。そこからはアンタと一緒によ」

「明日また会いにくる……か」

霊夢は無愛想ながら真剣な表情で頷いた。

「そんであんたが来るもんだからてっきりアンタが犯人かと思ったけど……どうやら違うようね」

「ますます不可解だな……二人して変な夢を見るとは」

「気をつけた方がいいわよ。私の夢に入り込める奴となると相当な手練れだわ」

「そうだな……ここに来て良かった。ひとまず安全だ」

「仕事を増やさないでよ」

「それは贅沢な悩みだぞ。世の中には一つも妖怪退治の仕事が来なくて借金した馬鹿がいるからな」

「過ぎたるは何とやらよ」

「若いうちは過ぎたことなんてないだろ。無茶してなんぼだろ」

「うわ、ババくさ」

「ガキンチョがナマ言うな」

「若さは無敵の類義語よ」

「老いというイベントを残してる可哀想な奴らだ」

「憐れまれるほど若くもないわ」

「馬鹿言うな。女はいつまでも少女なんだぞ」

「少女の言葉遣いとは思えないわ。それに少女はお酒も飲まない」

「若気の至りだ」

「年増の至りでしょ」

「どっちでもいいよそんなの!」

「そうね。問題はあの夢の正体よ」

「心当たりはないのか?」

頭を軽く傾げ、唸るような声を出す霊夢。

「予知夢ならたまに見るけど、起きてから声を聞くなんてのは初めてだわ」

「犯人に悪意があるかないか、それが問題だ」

「そうね。仮に敵でも私は負けないけど」

「私が負ける」

「知らないわよ……それにしても、いつ来るのかしら」

「今で大体正午だが……夜に来られると面倒だぞ」

「んー……そうね」

霊夢は大きな欠伸をして、瞼を重たそうに擦った。

「とりあえず……誰か来たら起こしてちょうだい」

「え？」

「いつも昼寝する時間なのよ。しなかったら能力半減だわ」

「本気か？二度と目覚めないかも知れないぞ!？」

「それは最高ね」

特別皮肉をかますような口ぶりでもなく、ただ本音を溢しただけのようにさらりと霊夢はそう言った。

すでに座布団を二つ折りにしてゴロリと寝転がり、細やかな寝息を立てている。

「呑気な奴だ……」

「んー……眠たいならアンタも寝て良いわよ」

「遠慮しとくよ。枕が変わると眠れないタチだから」

「そう……」

目を閉じたまま答え、また呼吸の音だけが聞こえる。

あつという間に眠りの世界へと落ちていった。

鳥の陽気な口笛が通り抜ける。

博麗神社が安全かどうか、見誤ってしまったかもしれない。

目の前にいるのはただ気持ちよさそうに目を瞑る一人の少女なのだから。

……こうしてみると、博麗のはまだまだ子供だ。

物言わずに寝てる所は、年相応の女の子でしかない。

得体の知れぬ何か夢に入り込んだという不安は、できるだけ穏便に取り扱いたいが、まるで澄んだ水面のように目を瞑っている霊夢を邪魔してやりたくなかった。

もう散々身に染みているけど、私もずいぶん大人だ。

結婚年齢の相場を鑑みても、子供が一人くらい居たってなんら不思議じゃない歳だ。

男は十五で元服、女は十三でお齒黒の世の中。

三丁目の人は十六で結婚して、最近子供を産んだらしい。

実にめでたい話だ。半回りくらい年上の私を焦らせるには十分すぎるほどに。

……私だつてずっと一人がいいわけじゃない。

言い訳がましくなるが、妖怪退治屋なんて職業についてた頃はまあ結婚なんてできないだろう。

どっちかが早死するのがオチだし。

そもそも外れ街の奴らは色恋なんてプラトニックという概念がない。

九割近くが授かり婚ってやつだからだ。

昔の言葉で言う『ズツコンバツ婚』だが、それを咎める風潮も薄いし、あそこは子供の教育って面からすれば最低の所だ。

私はと言うと……そんな街ですら貰い手がなかった。

あの時は黒歴史だからあまり触れたくないが……酒癖が悪かったのもあるし、博打ばっかやってたつてのあるだろう。

料理もあの時はできなかつたし……言つとくけど今はできるからな。勘違いするなよ。

まあそんなこんなで私は長らく独り身だ。

でも、生まれてこの方ずっと孤独だったわけじゃない。

実は私にも、人生で一人だけ恋人なるものがいた。

付き合つて三日目で、そいつは死んじまつたけどね。

いい奴だったよ。

私が十二の時の時だった。

妖怪に襲われて死んだつてんだから、つくづく妖怪退治屋の寿命は短い。

どれだけ立派に生きようとも妖怪の爪がカスればそれで呆気なく終わり。

その時に私は人の命がどれだけ脆いかを知ったから、今日まで自由に生きてきた。

そして、紅魔館で終わるはずの命だった。

あるいは風見幽香に雷が落ちなければ死んでいたかも知れない。

薄氷の上に立つ命を尊ぶなんて酔狂な事をできるほど私は立派じゃない。

今だって私はなぜ生きているのかを即答できない。

もう、随分生きた気がする。

これから何をして生きていけばいいのだろうか。
死ぬ前は生きることが全てだった。

けれど一度あの世に行ってしまったら、もうこの世にこだわる理由なんてあんまり無い。

子供を産みたいって気持ちも無いし、誰かに嫁ぎたいわけでもない。

面白く生きたいわけでも無いし、十分に幸せだったと思う。
やり残したことが、もう思い当たらない。

あとは死ぬまで生きるだけ。

そう思うと安心する反面、急に張り合いがなくなって、失望にも似た奇妙な脱力感に苛まれるのであった。

あとは死ぬまで生きるだけ。

私にとっては本当にそれだけの人生だと痛感させられた。

結局、しばらく私はだらだら過ぎゆく時間を退屈と二人つきりで乗り過ごした。

鳩が三回鳴いた頃、私はいつものごとく鼻毛で文字を書いていた。
今日のお題は髑髏。

過去一番の難題だったが、後二画……そう、たったの棒二本で完成していたのだ。

緊張を押し殺して指先に神経をとがらしていた。

感覚は過敏になり、瞳孔はレンズを絞って目の前の僅かな空間を鮮明に捉えた。

震えながらも正確に毛が近づいていく。

耳の中がじんわり温まる。

遠くの小石を蹴る音すら聞こえそうだった。

これさえ置けば……あと少し、あと少し！

——勢いよく襖が空いた。

「霊夢……ちょっと出てきなさい！」

タイトな服に身を包んだ桃色髪の女だった。

餡の詰まった餃子みたいに、服で全身を抑えている。

思わぬ敵襲に私は慌てて霊夢の体を揺らした。

「おい霊夢！」

「んー……あと五分だけ……」

「起きろ！誰か来たぞ！」

顔をペチペチ叩いてもしかめつ面をするだけで起きる気配がない。

まずい、博麗がいなけりやここはただの危険地帯だ。

戦えるか……？

「失礼、私は敵ではありません」

桃色髪の女は胸の前で握った拳を反対の手で受け止めてペコリと

お辞儀した。

美鈴がよくやる抱拳礼だ。

「アンタ……何者だ」

「隻腕の仙人、茨木華扇と申します」

「……華扇っ!？」

爆睡を決め込んでいた霊夢がカエルのように飛び起きた。

それを半目で見ながら華扇は言った。

「おそようございます」

「な、来てるなら起こしなさいよ貴子！」

「起こしたよー！」

かよわき私の弁明など耳に及ばず、ポカリと頭を叩かれる。

すると歌仙なる人が「人を殴ってはだめ！」といって霊夢の頭を

殴った。

殴ってんじゃねえか。

「霊夢、客が来たらまずはお茶を出しなさい」

「分かってるわよ……」

奥歯に詰まった食べこぼしがとれないような顔をして、霊夢が立ち上がる。

台所に行く途中で私の目を見て、ギロリと睨みつけてきた。

残された私は客を自称する凶々しい奴と二人つきり。

長い数分、蛇に睨まれた蛙の気分を咀嚼していた。

すると台所から霊夢の声が聞こえた。

「貴子ー、ちよつと来てー」

私にはそれが汚泥に光る鶴の一声に聞こえた。
しかし喜んで応えるわけにもいかないだろうと思い、ちらりと華扇の様子を見た。

瞑想中のような顔で「行ってあげなさい」と言われたのでそれに従うことにした。

「ニブい奴ねえ、呼ばれる前に来なさいよっ……いっ！」

台所に着くなり私は霊夢に責め立てられた。

聞かれると不味い内容なのか、ヒソヒソと罵倒を続けられる。

なんでそんなに言われなきやならないんだか、全く身に覚えがなかった。

「呼ばれなきや来ないだろ」

「ちゃんと合図したじゃないの！」

「合図？」

「ほら、こうやってウインクしたでしょ！」

そういうと霊夢はまた先ほどのように私を睨みつけた。

細めた目はヤクザめいた迫力を持っていて、少なくともウインクなる可愛らしい物ではなかった。

「てつきりメンチを切られたのかと……」

「そんなこと私がすると思う？」

めちゃくちや思います。

「それより、ヤバいわ……」

「何がだよ」

「よりもやって、華扇が来るなんて……」

「そんなヤバい奴なのか？」

「ええ、だってアイツ人間の味方をするのよ」

人の味方がヤバいのならば、そのヤバいはギャル御用達の「ちよーヤバーい」的な奴か？

そうツツコんでやりたかったけど、霊夢の怯えた顔は尋常じゃなかった。

目の焦点すら合わなくなっている顔は、後から思い出そうにも上手

く再現できない。

理由は分からないけど、ちよーヤバそうだ。

「ともかく……早く帰るように協力しなさい！」

「ええ……」

私、客。

やんごとない事情持ち。

何故依頼を受ける立場になっている？

「もし邪魔したら処刑よ！」

……結局私は首を縦に振らざるを得なかった。

誰だつて処刑は嫌だからさ。

ちやぶ台に湯呑みが一つ置かれた。

飲み口からは真つ白の湯気が湧き出ている。

茶葉は三回目の出廻らし。

新葉を使わないのは霊夢の嫌がらせだろう。

そのお茶ともお湯とも取れない飲み物を静かに啜りながら、桃色の

女——華扇なる者は口を開いた。

「何故私がここに来たかわかりますか？」

「知らない……」

小さく正座する華扇からは威圧感が滲み出ている、かたや大仰に横座りしている霊夢が小さく見えた。

誰にも従わない天衣無縫を絵に描いたような博麗霊夢にも、頭の上からない相手がいたらしい。

その事が少し愉快だった。

「異変……と言えばわかるでしょう」

「知らないってば」

「しからばこれをご覧なさい」

そう言つて華扇が取り出したのは、細長い木の枝のような形をした、色の悪い人参だった。

「里の者が育てた農作物です。何たることか、ただでさえ痩せこけているのに、人体に有害な成分が含まれています。毎日汗水を流して育

てたモノがこんな風に育った、その気持ちが変わりますか？」

「対処しようにも報告が来なかったのよ。私が聞いた時には解決済みだったわ」

「慣れぬ食物は里にとって不安でも有りました。結果として飢饉は脱しましたが、もし人が死んでいたら貴方はどうするつもりだったのですか？」

「そんなもしもなんて起こり得ないわよ。私だって馬鹿じゃないわ」

「貴方がそう思っていてダメなのです。博麗の巫女ならどうにかしてくれるはずと、安心させられるくらいの人になりなさい」

「そんなの……」

「それができるから、貴方は博麗の巫女に選ばれたのです」

「何回も聞いたわよその文句」

「本当のことだからです」

そういうと半分くらいになった湯呑みを置いて、華扇は優しく微笑んだ。

「皆貴方に期待しているのよ、霊夢」

こうなってしまうと流石の霊夢も返す刀が無いようで、下唇を緩く噛みながら押し黙った。

はてさて私はと言うと、これまた同じように黙るしかなかった。

何故ならば……。

「異変を起こした者は徹底的に叩きなさい。貴方は人の味方、妖に情け容赦はいりません」

おお神よ、異変を起こしたのは吸血鬼でも亡霊でもない……ただの哀れな一般人。

もつと具体的に言うなら私なんだ。

いや、私は真剣に関係ないけど書面上では赤線二本の極悪人になってるらしい。

もしそれがこの場で漏洩したら……異変だけに、たいへんだ。

「っちー！」

ええーこちら放送席、たった今博麗霊夢さんから舌打ちをいただきました。

この場じや処理できないのでラッピングして持って帰ろうと思
います。

「アンタならどうするのよ、華扇」

「私？」

「三度起きた異変、全部に関わってる奴がいたらどうするの？」

「そんな者はいないでしょう？」

「もしもの話よ」

「仮にも有り得ないわよ。そんなのがいたらとつくに貴方が退治して
るでしょ？」

「……そうねえ」

そういうと霊夢は私のことをチラリと見た。

一度だけじゃない。何度も何度も露骨に見てきた。

ここで霊夢の事を殴らなかつた自分の理性と優しさを私は褒めて
やりたい。

実際は臆病に震える手で損得を勘定しただけだけど。

だってバレたら殺されるんだよ？

命の危機に震えられない奴が死んでいくんだ。

いつだって生き残るのは臆病な草食動物さ。

「ともかく、今後一年の間は異変が起きないよう努めること！」

「そりやそれが出来たら一番だけど、そう単純じゃないのよ」

「もし次の異変が起きたなら、その元凶は少し強めに懲らしめなさい」

「……そうねえ」

霊夢の冷たい眼は明らかに私のいる方向を向いていた。

だから、見るなつつつてんだろ。

「今日私が伝えたかったのは以上よ」

「はいはい、分かったわよ。全く、来るなら言っついてよね」

「ちゃんと夢で伝えたでしょう？」

「……あれはアンタの仕業だったのね」

薄々感じていたが、やはりそうだったか。

人の夢に干渉するなんざ悪趣味すぎる。

そんな私の不信感が滲み出たのか、華扇は私の方を向いて軽く頭を

下げた。

「申し遅れました。茨木華扇、仙人です」

「あ、どうもどうも。貴子、人間です」

「お先にいらっしやった所をお邪魔して申し訳ありません」

「……………」

ここで私は華扇が来てからずっと抱えていた違和感の輪郭を捉えた。

そうだ、夢という言葉で思い出した。

華扇のこの反応はおかしいではないか。

「私ら、夢であつたよな？」

「え？」

「霊夢に説教するつてので夢を見せたのは分かるけど、どうして私を巻き込んだんだ？」

「話がよく見えないのですが」

「だから、何で私の夢にまで入り込んだんだつて」

私の語りが熱を帯びつつ加速していこうとした時。

華扇はキョトンと首を傾げた。

「私は霊夢の夢にしか入っていませんが」

「……………」

華扇の発言が耳に入ってからその意味を理解するまで三秒かかった。

途端、全身が慄いた。

「ならあの夢は何だ……………」

「私に聞かれても分かりません！」

「一体誰が——」

「私だよっ！」

大声がした。

緩い風が部屋に入ってくるのとそれは同時だった。

芯の通った朗らかな声のした方を見ると、襖が蹴破られていた。なんて事しやがる。

「誰だ！」

「黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって！おいコラ華扇！私も混ぜろよ！」

博麗神社に乗り込んできたのは、小さな女の子だった。

タツパは私のへそくらいで、顔つきも里のガキンチョと変わらな
い。

しかし際立って異常な点が幾つかあった。

まず容姿。

その女の子の小さな頭からは、鹿みたいに立派なツノが生えてい
た。

壮観なツノは少女の華奢な体には些かアンバランスであった。

もう一つ、少女は手に瓢箪を持っていた。

それをぐいと口に持っていていき喉をゴクリと鳴らす。

鼻を微かに突いたアルコールの匂い。

おそらく強烈な度数の酒が中に入ってるんだろう。

見た目に似合わぬ酒と角、とにかく歪な存在だった。

「よつと……まずはかけつけ一杯だ、呑みなよ」

ズケズケと上がり込み我が物顔で座る（推定）少女。

ちやぶ台に置かれていた空の湯呑みにトクトクと酒が注がれた。

今度はよりハッキリと酒の香りがする。

よほどいい銘柄なんだろうが、恐らく昼間から呑むようなモンじゃ
ない。

霊夢も同じ思考のようで、懽然とした態度で湯呑みを突っぱねた。

「何だい、私の酒が飲めねえってのか？」

「鬼の酒なんざ死んでも嫌よ」

「けっ、生意気な娘だねえ。隣のアンタは呑んでくれるよな？」

霊夢から鬼と呼ばれた少女は赤い顔をこっちに向ける。

返答次第じゃとんでもない事になりそうだ……。

「生憎私はロマネコンティしか呑まないもんで」

「……あ??」

「ワイン派でございますの」

「良いから呑めっての！」

後頭部に衝撃。

押し付けられる湯呑み。

唇に痺れ。

口内に広がる日本酒の酸味。

溶けゆく意識……ん？

「……旨い」

「へ？」

「この透き通るようでいてコクのある後味……鼻から抜ける気持ちのいい酸味……」

私の口から思わず出たのは、酒の感想だった。

勢いよく飲んだ時に来る目眩もしない。

僅かな体の火照りが心地よかった。

こいつは……とんでもない名酒だ。

「ちよつとアンタ、大丈夫!？」

霊夢の声が耳に入ってくる。

まるで嘘でも吐かれたみたいに目をかっぴらいている。

隣の華扇も同じ顔をしていた。

「……私が今まで呑んでた酒はドブ水か？」

私がそう言うのとツノ女は急に大きな笑い声を上げた。

「はっはっはーやっぱアンタ、イカれてるよ！私の見込んだ通りだ！」

ちやぶ台の上に勢いよく瓢箪を叩きつけ、少女は口上を述べた。

「私の名は伊吹萃香！妖怪を代表して今日この場に乗り込んだ！鬼に喧嘩を売りたい奴が居るならかかってきな！」

堂々たる名乗りに神社が揺れた。

発せられる妖気はこの世の存在と思えぬほど強い。

例えばガラス製のコップをナイアガラ滝に入れたらどうなる？

そりゃ勿論割れるよな。

ただの人間が強烈な妖気を近くで浴びるってのはそれに等しい。

つまり、意識が弾け飛びそうだった。

「つぐー」

弱小代表の私は勿論、天下の巫女様も流石にキツかった様で顔を顰

めていた。

「いつから貴方は妖怪を代表できるほど偉くなったのかしら」

しかし一人、華扇だけがまるでそよ風に吹かれたかの様に平然とお茶を啜っていた。

「思い上がりも大概になさい。妖怪は貴方を求めてなどいない」

「私がいづつから偉くなったかだと? 『ずっと』だよ!」

発せられる気迫が一段ギアを上げた。

私が意識を失わなかったのは、華扇がいたからだ。

華扇は萃香を名乗る妖怪に対抗するよう気をぶつけてくれていた。

威力が相殺されたお陰で私も辛うじて耐えることが出来ていた。

「思い上がりはお前だよ! 人間の味方をすれば徳を積めるとでも思ってたのか? 人間はお前なんかを求めちゃいない!」

「黙りなさい! 浅はかな行動は身を滅ぼすだけよ!」

「ああ!? 誰に口聞いてんだコラ!」

「ここに貴方は呼ばれていない!」

「異変を起こさせないなんて横暴、見逃す訳がないだろ! 私を含めて妖怪が黙っちゃいけないね!」

「もう十分異変は起きた! 人間達は嫌というほど恐れた! 人智を超えた存在を!」

「恐れただあ!? 生ぬるい事言うなよコラ!」

こっちまで熱くなりそうなほど顔を赤くして怒る萃香。

コイツ、とんでもない妖怪だ。

けど……華扇も一緒ぐらい化け物だ。

なぜこの状況で平然としていられるんだ。

下手すりゃ死ぬぞ!

「ついい加減にしなさい!」

霊夢が聞いたこともないような大声で怒鳴った。

それと同時に暴風のような圧力は過ぎ去った。

「……成程、博麗の巫女か」

萃香はそれだけ呟いて、胡座をかきなおした。

その胸元には一枚のお札が貼られていた。

「そのお札を剥がした時、私はアンタを退治する」

「ふん、出来るもんならやってみなよ。妖気を抑える札なんざ作って……ハッキリ言ってお前、弱いだろ」

「そうね、アンタの次くらいに弱いわ」

「生意気な餓鬼は嫌いだよ」

「なら帰れば？」

「……へえ、八雲のババアにしちや良く育てたね……ってイタツ！」

……ありのまま今起こった事を話すぜ。

萃香が紫の悪態を吐いたと思ったら急に空中に割れ目ができて、そこから拳骨が落ちてきた。

萃香の頭をぶっ叩いてその手は消えていった。

何を言ってるかわからねーと思うが私も何が起きたのか分からなかった……。

若作りだとか加齢だとかそんなチャチなもんじゃ断じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったよ……ってイタ！

「何でアンタも殴られてんのよ」

「グレイトフル・デッドにでもやられたんだろ……」

信じられない出来事ばかりが続く……が、頭の上にぷくりと咲いたタンコブだけが現実味を伴っていた。

萃香の暴力に等しい気迫が霊夢のお札で鳴りを潜めて、ようやくまともに頭が回るようになってきた。

ここらで状況を整理しておこう。

まず時刻は正午。鳩が呑気にぽっぽと鳴く頃。

場所は博麗神社でこの場にいるのは四人。

まず一人目は博麗霊夢。人間界最強の天下巫女。

私は今日見た奇妙奇天烈な夢の相談をしに霊夢の元へ訪れた。

すると霊夢も同じような夢を見たと言った。

その時に現れたのが二人目、茨木華扇。

右腕に包帯を巻いた、桃色髪の女。

毅然とした態度でくるなり早々説教をかました奴だ。

どうやら夢の犯人は華扇だったそうだが、私には何もしていないいら

しい。

当然と言えば当然だ。私と華扇には一つも接点がないのだから。ただ、彼女は三度の異変にかなり御立腹らしい。

ましてその三つともに関与している馬鹿がいたら、殺しても構わぬと抜かした危険な思想の持ち主だ。

つまり異変反対派、人間陣営の仙人様だそうだ。

右手に巻いた包帯が、封印されし闇の力を抑えるための物じゃない事をただただ祈る。

そして三人目、伊吹萃香。

パースの狂ったツノ頭に酒臭い瓢箪と、まさしく妖怪めいた風体で博麗神社に現れた。

会うなり酒を吞ますわ気圧されそうになるわの要注意人物だ。

ここへ何をしにきたのか、その目的はまだ掴めていない。

そして四人目……哀れな被害者、巻き込まれただけの一般人。要するに私だ。

朝から変な夢を見た思ったら、こんなとんでもない現場に居合わせられて……早くお家に帰りたい。

以上の四人を、よく覚えていて欲しい。

私はこれからどんな苦楽に満ちた人生を送ろうとも、この瞬間から始まった一連の騒動を忘れないだろうから。

それは良き思い出であったという懐古の意味ではなく、何度も死に目にあつたつていう後ろ向きな理由でだ。

これから起こる出来事は、決して何かの記録にも残らないし、誰も知らない。

でも私の人生で激動に満ちた数年間の中で、一際波瀾万丈な数日間を過ごしたのだ。

その一部始終を、私は一生忘れない。

事の発端は伊吹萃香がいきなり発した言葉だった。

「ならば私が異変を起こしてやろう！」

私の、無茶苦茶だけどそれでも好きだった日常が、支柱を抜いた積み木みたいにガラガラと音を立てて崩れていく。

前代未聞の異変が幻想郷を襲うまであと——少し。

腕砲折

とある所に、一人の女がいた。

その女はもうホントーにどうしようもない奴で、博打は好きだしお酒は呑むし、煙草は一生やめられないし。

挙句返せぬ借金もした。

債務の果てに各地を彷徨い、行く先々ではお祭り騒ぎ。

吸血鬼が住む悪魔の館へ。

冥界にある亡霊の楼閣へ。

月光届かぬ不死の屋敷へ。

全くもって恐ろしい、波乱に満ちた人生だ。

行きが怖けりや帰りも怖い、絶倒必死のこの命。

凹凸だらけの道のりは酔いも醒めよう問題だらけ。

その女がいる所では人妖問わずどんちゃん騒ぎ。

自ら起こした騒動で、いつも彷徨う今際の瀬戸際。

女は即ち、ろくでなし。

雨にも負けて風にも負けて、人騒がせな問題児。

だがそんな彼女にも、胸に一つ哲学がある。

『無意味に生きるくらいなら価値の有る死を』

これから始まるのは、女がこの命題を証明する物語。

誰も知られることのない秘密のストーリー。

とある秋の日の昼下がりに。往来を歩む人々は確かな肌寒さを感じて、少し遠くで待っている冬の存在を思い出し始めた。

ここは寺子屋。

貴子は一冊の教科書をペラペラとめくっていた。

表題は『人間と妖怪』——妖怪について書かれている書物で、言わば妖怪学の入門書である。

妖怪学とは、里の子供達が妖怪に襲われぬようにと慧音が創設した授業だ。

その教師として貴子は雇われた。

妖怪退治屋が人里に入り浸ることは世間的にあまり良しとされていないが、夏に起きた騒動がきっかけでお目溢しを受けている。

また素手で妖怪をぶん殴るなどの噂から、野蛮な印象が強い貴子の授業を受けさせたがらない者も多かった。

だが子供達の笑顔が絶えないと慧音が広めてなんとかやり続けていた。

それは人里が相次ぐ異変で妖怪に対する危機感を感じていたからでもある。

授業では貴子の経験をベースに、妖怪の特性や対処法など様々な事を教えていた。

寺子屋などに通った事のない貴子の教え方は、授業というよりも語り部さんに近かった。

何よりも児童たちを興奮させたのは異変にまつわる話である。

紅魔館で美鈴から修行を受け、一本拳で瓶を貫通できようになったこと。

冥界で三途の川を渡り閻魔や死神と出会い、果てに亡霊の桜を咲かせたこと。

向日葵畑で風見幽香に襲われ、すんでの所で雷に助けられたこと。嘘のような話の一つ一つが生徒を惹きつけ妖怪に対する興味を持たせた。

恐れるものとして機械的に教わっていた妖怪の、人間じみた日常。吸血鬼が紅茶を冷まさないと飲めないことや、冥界の剣士が意外と

天然なこと。

まるで数式が喋り出したように、少年たちの頭にあった妖怪という概念が命を宿し始めた。

それらが良いか悪いかなど貴子に分かることはない。

ただ妖怪学の発案者たる慧音はその傾向を良いものだと述べていた。

あまり教科書を使わない貴子であったが、最近起きた『とある一件』

をキツカケに妖怪について今一度学び直そうと考えたのだ。

とある一件とは、博麗神社での騒動である。

大妖怪、伊吹萃香があろうことか博麗霊夢を前にして異変を起こすと宣戦布告したのだ。

聞く者皆が驚天動地の大暴挙。

その動機は、妖怪の立場にあった。

曰く、萃香は世間一般の妖怪への扱いが不服らしい。

異変というのも結局は、人間から恐れられるためだけの行為。

人間ありきで存在しながらえているという情けない現状。

本来あるべき姿は、妖怪が人間を生かし、気分次第でいつでも殺すことができるという力関係だ。

人間に依存した生き方など妖怪にあつてはならない。

それをひっくり返してやると萃香は言い捨てて行った。

あの場にいた者は全員、方向性は違えど確かな危機感を抱いた。

そこで貴子は妖怪というものについて知りたいと思ったのだ。

きつかけは単なる興味心からであつたが、ごく当然のように溢れている妖怪の事を、妖怪退治屋の自分でさえ何一つ知らないと気づいたのだ。

『人間と妖怪』という本を、文字なんてろくすっぽ読めないのに貴子は熱中して読み込んだ。

ある時には慧音に文中で出てきた言葉の意味を聞いたりもした。

慧音から「生徒達に見せたいくらいだ」と半分呆れられるほど毎日、時間をかけてゆっくり読み続けた。

その光景を見た貴子を知る人物は皆、頭か心の病気を疑った。

妹紅は本気で永遠亭への受診を勧めてきた。

己が本を読むだけで何故そこまで騒がれなければならんのだと、貴子は少し不愉快に思った。

妖怪について学ぶことは貴子にとって、未知なる発見の連続だった。

例えば貴子の経験則として、闇妖怪に出会った時は近くの石と石とを力チ合わせて打ち鳴らせという物があつた。そうすると闇妖怪は逃げていくのだと。

理屈や論法など知らず、ただただそういう物だと理解してきた。しかし本を読む事で、その理由を学ぶことができた。

闇妖怪が石の音を嫌うのは、火打ち石を恐れているからだ。

あるいは、鬼が豆を嫌うのは……。

頭の悪い貴子が学問に熱中するなど、周りの者からすれば正しく異変であつた。

それほどまでに貴子は愚か者と思われていた。

実際愚かなのだから仕方がない。

ともあれ学びに打ち込んだこの頃は、なんと酒を絶っていた。

意識していたわけではなく、ただ家で読み物に耽っていたら、もう夜が更けていてそのまま眠ってしまうのだ。

本に夢中で酒を飲む暇がなかった。

なんと『らしい』理由で意図せず休肝日を作ってしまった。

その事に貴子が気づいたのは、体に異変を感じたからだ。

それもいい方向でおかしかつた。要するに朝の目覚めが辛くなくなった。

酒を毎晩呑んでいた頃は、アルコール無しでは眠れないと思つていた。翌日強烈な酔いで布団から出られないのもセットであつた。

だが今の自分にはそれが無い。

むしろ清々しい気分毎朝を迎えている。

なるほど、酒を止めるとこんなに健康になれるのか。

貴子はそう思い随分と嬉しくなつた。

しかしこのウワバミ女、そこで禁酒を続けようとはならない。

ある日の晩、寺子屋での仕事を終え家に帰るなり貴子は何やら棚を漁り始めた。

「何を探しているの？」

当然のように家に居座っている風見幽香が、ただならぬ様子の貴子

に向かつて聞いた。

「これまた当然のように貴子は答えた。」

「最近呑んでなかったから、久々に飲もうと思つて」

一般論だと、せつかく禁酒の効果が出始めたのならそれをモチベーションに続けようとなるものだろうが、この女はそんな事微塵も考え
ていなかった。

むしろ、せつかくなら元気なうちに呑んじまえという最低の発想に
行きついてしまったのだ。

クズの論理である。

幸か不幸か大して物の入っていない棚だから、目的のものはすぐに
見つかった。

「つと、これこれ。安い割に美味しいんだよな」

手に握られているのは残り半分くらいの日本酒瓶。

何処にでもある銘柄だが貴子は好んでそれを呑んだ。

縁の欠けたぐい呑みにそろそろと酒を注ぐ。

酒瓶を机上に置き、楽しみに掌を擦つた。

「さあ呑むぞ、今呑むぞう」

酒のアテなんて高尚なものを買う財力はないので、基本素酒であ
る。

妙に年寄りめいた口上を述べながら貴子の手がぐい呑みに向けら
れた。

それを掴もうとしたところで——幽香が先に呑み干した。

「つな！」

「……辛口。安物ね」

「テメエこのやろう！呑みたいなら自分のを使えよ！」

『自分の』が指しているのは幽香専用の食器類だ。

異変が終わつた後、気づいたら家に置かれていた。

どれも花柄のモチーフが入っていて妙に小洒落ている。

幽香はますます貴子の家に侵食していた。

「まだまだあるんだから、人のを奪るなよ」

「そうね、まだこんなにあるじゃない」

そういうと幽香は酒瓶を徐に掴む。

貴子の嫌な予感もひとしお、幽香は注ぎ口から直接ゴクリゴクリと呑み下した。

あまり行儀が良いとは言えない、いわゆるラツパ飲みだ。

静止する間も無くみるみるうちに瓶は空になってしまった。

品行を大事にする幽香がする事とは思えない所業もそうだが、貴子が激昂したのは何より酒を飲み干された事だ。

「おいこら幽香、てめえ何考えてんだっ！」

「……なにもかんがえてないわ」

幽香の少し戯けた返事に、貴子の脳血管を迸る熱血は少しずつ冷めていった。

今度は逆に、とある疑惑の念が大きくなっていった。

「お前、酔っ払ったのか？」

ポツリと貴子は零した。

それも言ってしまうえば仕方のない事だ。

幽香は肝臓が五個あるのかと思うくらい酒に強い。

どれだけ強い酒をいくら摂ろうが、まるで素面のようにケロリとしている。

肝の強さにかけて、幽香は伊達じゃない。

しかし、今はどうだ。

たかだか瓶半分程度の酒で呂律が失われてしまった。

貴子ですらせいぜいほろ酔う程度の度数なのに、だ。

幽香の奇妙な泥酔はいささか不可解であった。

「すこし、眠るわ」

幽香は弛緩した口を何とか動かしてそう言い残し、フラフラの足取りで寝室へと向かった。

地に足をつける事すらままならず、戸棚に頭をぶつけそうになっている。

貴子は幽香に肩を貸して、怪我せぬように導いた。

「お前がこんな酔っ払うなんてどうかしてるぞ」

貴子の問いかけに、幽香は黙然として答えない。

ただ顔を仄かに紅潮させてぼーっとしている。
ますます貴子は不安になった。

「あの酒に何か盛られたのか……？」

自然とそう考えたが、それを確かめるには一滴の酒も残っていない
かった。

静かな夜に、幽香の寝息が少しばかり聞こえるのみ。

途端に、貴子は体の震えを抑えられなくなった。

異様な夜だった。

はたして恐ろしいぞ……私も寝ちまうか？

悪酔いしただけかも知れないし……しかし、萃香だ。

異変を起こすなんて大層なことを言いやがった。

この胸を刺す嫌な予感なんだ。

何か……音もなく大津波が押し寄せてきているような。

貴子が思慮に耽っていると、急に家の戸がバンバンと叩かれた。

夜中とは思えぬ騒音に、おどろおどろしい雰囲気相まって肩が飛

び跳ねた。

「……誰だ」

貴子は外のものにバレぬようそう呟いた。

こんな怪物屋敷に乗り込む馬鹿は、只者じゃない。

罪悪感すら吹き飛んで、居留守を使おうと思った。

できればそのまま何処かへ消えて欲しかった。

しかし戸を叩く音は無作法にいつまでも続いた。

鬼でもやってきたのか、貴子はひどく恐ろしく思った。

しかしもし悪人ならあんなボロボロの戸、蹴つ飛ばして入ってくる

のではないか。

その仮説に縋るしかなく、貴子は扉の前が善人であることを心の底
から祈った。

玄関に立ち、壊れそうなくらい叩かれる戸の前で右拳を握った。

左手で取っ手を掴み勢いよく開け殴りかかった。

「っ！」

戸を開けた途端、口に違和感。

目にも留まらぬ速さで口元を押さえつけられていた。

鼻は抑えられなかったので、ひとまず大きく一呼吸。

そこにいたのは華扇であった。

「……………」

華扇は口に人差し指を当て、喋るなどというジェスチャーをした。

貴子はゆっくりと頷き、握っていた拳を開いた。

口から手が離れていき、それから華扇は一枚の紙を取り出した。

そこにはえらく達筆な字でこう書いてあった。

『会話は全て萃香に聴かれている』

萃香という文字に貴子は驚き、声にならぬよう口元を押さえ付けた。

華扇は紙を裏返す。

『博麗神社についてこい』

状況を飲み込めない貴子は、もはや従うしかなかった。

常々賑やかな人里の往来だが、その日は少し様子が違った。あちら

こちらから怒鳴り合うような諍いの声が聞こえてくる。

流血事件も多数勃発していた。

何が起きているのか貴子には理解できなかったが、少なくとも異常事態であるということは嫌というほどわかった。

何が起きているのかなんて後からいくらでも分かる。

今はとにかく、この状況を解決しなければならぬ。

妖怪退治屋としての経験がそう告げていた。

博麗神社も同じく並々ならぬ様子であった。

平たくいうと、殴り合いの喧嘩があちこちで起きていた。

宴でもやっていたのだろう。

酒の空き瓶やつまみの入った重箱などが散乱している。

しかしそれよりも目に入ったのは、血を流しながら殴り合う霊夢と

魔理沙であった。

取っ組み合いになりながら、言葉とも取れない叫びを発している。その空気感が何より恐ろしく思えた。

これは異常事態だ。

霊夢と魔理沙が殴り合うのはおかしい。

アイツらがやりあうとすればそれは『弹幕ごっこ』になるからだ。それに表情がおかしい。

頭に血が昇って冷静じゃなくなっている。

あんな風に殴り合ってたら、洒落にならない怪我するぞ！それに周りの奴らもなんだ？

止めも入らずゲタゲタ笑って……いつもこんななのか？そんなわけあるか！

酒に吞まれるどころの話じゃないぞ。

「おいお前らー！」

「ああ!？」

「何よアンター！」

少女に似つかわしくない気迫で凄まれる。

さて腕つぶしで止めたってしようがないぞ、どうする。

つい止めに入っちゃったが、よく考えたら煮えたぎる鍋に身を投じただけじゃないのか？

言葉が通じそうな雰囲気じゃないし、これはかなりまずいのではないだろうか。

辛くも私の予想は的中し、人中をぶん殴られるハメになってしまった。

「ぐああっ！」

年端もいかぬ女の子にぶん殴られて突っ伏す。

打ちどころが悪かったのか、鼻血が滴り落ちた。

周りの者達は愉快そうに笑う。

霊夢達はまたしても殴り合いを始めた。

「霊夢」

「ああ!？」

「良い加減にしなさい」

華扇が霊夢の前に立って、軽くデコピンをした。それだけの一撃で霊夢は気絶した。

同じように魔理沙も昏倒する。

どうやら気付かぬうちに一撃入れられていたらしい。

それだけじゃない。

その場にいた全員が静かに倒れていた。

一体何をされたのかはわからないが、ともかくこの華扇という女はやばい。

私が気絶していないのが唯一の救いか。

「貴子」

「いててて……これは一体どういう事だ」

「とりあえず落ち着いて話をしましょう」

華扇は落ち着き払って、地面に突っ伏していた私の手を取りゆつくりと起き上がらせてくれた。

服についた土埃を一通り手で払ってそれから華扇の目を見る。

「霊夢と魔理沙が殴り合うなんざおかしいぞ。拳での決闘はご法度だろ? しかもこいつらだけじゃない。里全体が血気立ってる。一体何をされた?」

「簡単な話よ」

華扇は地面に落ちていた空の酒瓶を一本手に取って、それを私に見せた。

「酒になにか細工をされたのでしよう。暴れた者は皆、かなり酔っていた」

「酒だあ?」

「心当たりは?」

心当たりなら、ある。

しかもそれはほぼ確信に近い。

「幽香が、酔っ払った……」

「おそらく風見幽香は強大な力で酒に仕込まれた毒を押さえ込んだ。

もし幽香が暴れていたら幻想郷は滅んでいたもの」

「けど……里中が暴れ出すなんて、一体何を仕込まれたんだ!？」

「人間を凶暴にさせる事ができるとすれば、それは鬼の妖気。これがおそらく萃香の言っていた異変なのよ」

「……あんの野郎、汚い真似しやがって」

「え?」

「テメエの手を下さずに勝手に傷つけさせあうつてののか? くそっ! 私はそういうのが一番ムカつくんだよ!」

私の幼稚な激昂をしばらく聞き、それから華扇は静かに頷いてゆつくりと語り始めた。

「萃香は言うまでもなく大妖怪よ」

「ああ、そうだろうな……」

幽香が眠らされちまつたんだから、それはもうとんでもない奴だ。

しかも大勢の人間に一気に危害を加えるなんて、悪質さも残虐さもタガが外れてる。

「しかしそれと同時に、妖怪である」

「……どういうことだ?」

「里で妖怪学なるものを教えている貴方ならわかると思うけど、妖怪とはどこまでいっても人間に依存した存在です。そして不器用なですよ」

「……そうだな。吸血鬼は絶対に血を吸わなきゃいけない。ろくろ首は首を伸ばさなきゃいけない。そこに意味なんてない。そういう存在だからそうする、それだけだ」

全部最近知ったことだが、知識を証明する材料としての経験は多数ある。

生まれてから今まで、数え切れないくらい妖怪と出会ってきたから分かる。

妖怪達の存在意義は、宿命とも言い換えられるほど人間に依存している。

恐れから生まれ、恐れられるために生きる。

闇への恐怖が闇妖怪になるように。

そして闇妖怪は闇を生み出し人を脅かすことのみを目的として存在する。

「萃香とてその理から外れる事はできない。妖怪として決着をつけようとするはずよ」

「妖怪としての決着？」

私がそう聞いた瞬間——ヒュンツと鋭い音が鳴り、近くに生えていた御神木に一本の矢が突き刺さった。

バチ当たりな矢には一通の手紙が括られていた。

私は恐る恐るそれを手に取り開いた。

『宵三つ、この場所にて待つ』

ぶつきらぼうだが達筆な文字からは萃香の性格が読み取れるような気がした。

こんなもん、誘き出し以外のなんでもない。

勢いよく紙を破こうとする手を華扇が止めた。

「成程、鬼は鬼なりに考えるものなのね」

「崇高すぎて人間様にはわからん」

「貴子、おそらくこの手紙に書いてある事は本当よ」

「だからなんだよ。嘘も真も一緒だろ。どうしようもないんだから」

「そもいかないわ。だってこれは貴方に向けられたものだから」

「……私？」

「現状を整理すれば分かる話よ」

現状なんて、そりやもう整理するまでもなく最悪に決まってる。

幽香含めて誰も彼もが酔っ払っちまって、挙句暴力沙汰が殺到してるんだから。

しかもそれを起こした野郎は鬼ときてる。

希望があるなら是非教えてほしいくらいだ。

ともかくなにより夜がいけない。

私を含む圧倒的多数の人間は月光の下だと、鬼はおろか妖怪一つに勝てやしないんだから。

闇雲に動くよりかはこのまま朝が来るまでここで大人しくしてるのが得策だと私には思える。

「ふむ、貴方は朝まで待つのが正解だと思うのね」

「なっ！なんでわかった！」

「顔にそう書いてあるわ」

「そう易々と心を読むな……しかし実際、朝にならなきゃ何もできないだろ」

「そうね。けどこの異変は今夜で決着するわ。勝敗どちらにしてもね」

「……どういふことだ」

華扇は包帯に覆われた左手から一本指を立てて、滔々と語り始めた。

「現状を整理するわ。まず一つ目。この異変を解決するのは、貴方しかない」

「……はあ!？」

待て待て待て待て、いや待ってくれなきゃついていけない。

この異変を解決するのは私だ？

異変を起こす事はあつても解決なんて出来るわけないだろ！

そういうのは霊夢の……いや、霊夢は酔っちまってるのか。

なら魔理沙……そうか魔理沙もだ。

というか、そうなつてくるとこの場にいる奴は全員使えないじゃないか。

しかし……。

「美鈴とか、幽々子とか……この場に居なくとも強い奴らはいらだろ！」

「そうね。貴方より強い者を数えた方が早いでしょう。でも駄目なのよ。確かに美鈴や幽々子は酔ってははいないわ」

「なら……」

「でも、風見幽香を見たでしょう？酔わずとも動けなくなってるのよ。それに、美鈴達には動けない理由がある」

「理由?？」

「美鈴は咲夜、幽々子は妖夢。その他の者も、皆人質を取られているのよ」

「人質だつて……?」

「ええ、それを踏まえてここからが二つ目の問題よ」

私は華扇のペースに飲み込まれ、何も言えず固唾を飲みおろした。

「もし今夜中に異変が解決できなければ、幻想郷中の人が死ぬわ」

「……はあ!?!」

おい待てよ、話が飛躍しすぎてるだろ!

何でそんな大問題にまで発展してるんだよ!

「簡単な話よ。どんな実力者として、酒を飲んだ者はみな酔わされているわね。そんな芸当を可能な者がもし本気で殺しにかかったら?」

「……まさか」

「そうよ。今晚に酒を飲んだ者は皆死ぬでしょう。そして残念な事に、今酔っていないのは私と……貴方だけなのよ」

私はその一行を聞き、理解し、それから神経が吹っ飛びそうになるのを恐怖で抑えた。

それから一つ、違和感とも呼べないお粗末な質問を華扇に投げつけた。

「酒を呑んでいないとは言いが……私が呑んでないのはほんの偶然だぞ。口の真ん前まで酒を持ってきてきたんだから」

「大方、幽香にそれを横取りされたんでしよう」

「なつ……なんでわかった」

「萃香は陰湿な妖怪なの。風見幽香が酒を飲み干すところまで読み切ってるわ」

「……なんて野郎だ」

今回ばかりは……本気でやばい奴が敵なんじゃないだろうか。

一人残らず酔わせちまうなんて……。

そして、酔っていないのは私と華扇だけ……っていう事は。

ようやく理解したこの異変の恐ろしさを、口に出すのも慄きながら呟いた。

「つまり、幻想郷中の奴らが……人質か」

「そうなるわね」

幽香並みの大妖怪を酔わせちまうんだから、萃香が本気を出せば全

員殺す事だつてできるだろう。

今それを解決できるのは、酒を飲んでいない者。

そしてそれは私と華扇だけ。

美鈴や幽々子……あるいは永琳だつて、人質を取られてるんだ。

咲夜にしろ妖夢にしろ鈴仙にしろ……皆漏れなく酔わされちまつた。

くそ……妖怪のくせに何から何まで周到すぎる。

何が目的なんだ。

幻想郷の全員が……人質。

「……なあ萃香、聞こえてるんだろ？お前……一体何が目的なんだよ！なあ！皆まで巻き込んでこんな目に合わせて！お前は一体何がしたいんだよ！」

私の激昂は情けなく不穏な夜空に溶けていった。

華扇が私の肩に手を添え、それから力強く言った。

「私が代わりに答えましょう。萃香の目的は一つよ」

返事をするのすら今は苛立つて、私は仕草で先を促した。

「こんな大それた異変を起こしてまで萃香が求めたもの。それは、強き人間との純然たる殺し合い」

「……だとしたら何で私が残された。強い奴は他にいるだろ！」

「おそらく萃香は貴方の事を気に入っている。それでいて、貴方のことが認められないのよ」

「……どっちも意味が分からん」

「これは貴方には分からないでしょうけど、貴方はどこことなく百年前の人間によく似ている」

「百年前の人間だ？」

私がそういうと、華扇はふと今の状況に似つかわしくない柔らかい笑みを浮かべた。

その顔はまるで遠い思い出を懐かしむような表情だった。

「酒飲みで、粗暴で、金もないのに博打好きで、学もないのに偉そうで、素手で妖怪を殴り飛ばし、大股で街を歩き、日々を退廃的に生きてるんだもの」

華扇は優しく笑って。

「本当に、貴方って良い人間だわ」

「いや全部貶してたぞ」

「ともかく貴方のその生き方は萃香……いや、古い妖怪なら皆思う所があるでしょう」

「なんだそれ……そんなの私が知ったことかよ。私は今を生きる若乙女だぞ」

「うふふ……昔、貴方によく似た者がいたわ。その人もよくそんな事を言ってた。私は花もたじろぐ乙女ってね」

こんな絶望感の中で、それでも華扇は笑った。

静かな涙すら流しそうになって。

「萃香も懐かしかったんでしようね。昔からあの子はよく人間と殴り合ってたから」

「……いや知らないって」

「それで思い出していくにつれて、多分現状が嫌になっちゃったのよ」

「こんな素晴らしい世の中にか」

「ええ、それも貴方のせいなのよ」

「……何で私が!？」

「どんな大妖怪だろうと貴方は馴れ馴れしく踏み込んで馴染んでしまふ。人間の身にありながらも」

「いやそれには深い訳が……」

「きっかけは何だって良いのよ。妖怪と人間が仲良くやってるのが萃香は気に入らなかつた。あの子に昔を思い出させたのも今を憂いさせたのも、貴方が居たからなのよ」

……いや私関係ないだろ。

レミリア達と知り合ったのだって、別に私の意思じゃない。

借金のカタに売られただけだ。

そりゃ何の巡り合わせか仲良くなったけど。

そんなの私の勝手だ。

私の生き方で不服を感じるのは自由だけど、皆を巻き込んで……なんて大それた事しやがる。

「いや待て……となると萃香がこんな事しかしたのは、私が色んな妖怪らと仲良くしてたからってか？」

「ええ、霊夢や魔理沙とはまた違って、貴方は妖怪と生活を共にしてるんだもの」

「となるとこの異変の原因って……」

「実行犯は萃香だけど、元を辿れば貴方かもね」

……なんだと？

ちよいとまいっちんぐだ。

どうしてこうも私と関わった奴らつてのはオイタが過ぎちまうんだ？

私がそうやれって指示したか？

幻想郷中の人間が直接命の危機に瀕する程の凶悪な大異変。

残忍な事をしでかす大馬鹿野郎。

面識もないそいつを駆り立てたのがもし……もしも私なら。

そんなの腹切ったって詫びられない。

ああ、みんなに合わせる面がない……。

「恐らく萃香は、妖怪を代表して、人間代表の貴方と殺し合いたいのよ。貴方が萃香と戦えば、人間達は解放されるかも知らない。でも貴方は死ぬでしょう」

「望みがなさすぎる……」

「貴方が勝てば全て収まるわ」

「……良いか華扇、お前なら分かるだろ。相手は鬼だぞ？並の妖怪じゃない、鬼って奴だ。雑魚妖怪の時すら逃げる方法しか教えられない私がどうして鬼に勝てるんだ？」

「そうね、これは萃香の意地悪でしょう」

「ふざける……これも何もせんぶ意地悪だろうが」

華扇は深刻そうな声色で私に告げた。

「もし貴方が逃げだせば、貴方は生き残るわ。その代わりに幻想郷中の命は助からないけど」

「……私だけ確実に助かる道があるってか」

「ええ、どちらを選ぶのも貴方の自由よ。逃げ出して皆の屍の上に生

きるか、挑んで皆の為に死ぬか」

「そりゃ随分な二択だ。全く……萃香はとことん優しい野郎だ」
「え？」

大きい瞳を丸々とさせながら私を見つめる華扇。

やさぐれた女が一人その瞳に反射して映った。

「私はずっと思ってたんだ。こんな日がくれば良いって。みんなのお陰で生きてこれたこんな私だから、みんなの為に死ねたら良いなって」

「一体どういうこと？」

「好きな言葉がある。無意味に生きるくらいなら価値の有る死を……ってさ。私はこれからの数時間だけを生きる。それから皆の為に死ぬ。こんな据え膳、食わないなんて手はないよな」

「……随分と自分の命を軽く見てるのね」

「違うよ。命の重みは嫌なほど知ってる。だから幻想郷の全員の命なんて捨てられない」

「……人間らしからぬ覚悟ね」

「もし萃香に立ち向かったって、殴り合いにすらならないだろうな」

「それは貴方次第よ」

「私次第じゃないさ。決まってる事だ」

そうだ。

この世に偶然なんてないのかも知れない。

全部筋書きは決まってる、そこに私達の意志なんて無いのだろう。

神の悪戯か悪魔の慈悲か。

皆に苦勞をかけて生きてきたこんな情けない私に、とっておきの死に場所が設けられた。

多分今日死ぬために、私は今まで生きてきた。

くだらない人生だったけど……良い人生だったな。

全部決まってる事だ。

だけど……それでも望みを言っただけなら……。

この期に及んで我儘が許されるのなら……。

「華扇……」

「なに？」

「死にたく、ないっ……」

私は拙い口元でもう一度繰り返した。

「生きたいっ……！」

ああ……なんてこつたらうな。

私はとことん情けない奴だ。

とつとと覚悟を決めちまえば良いのに、こんな所で。

これ以上ない最高の死に場所で何を足踏みしてるんだ。

私の中に居る、やたら冷めてて全部諦め切ったどうしようもない部分
分がさらさらと戒名を探す。

諦観が私の全てだったのに、どうやらここまで弱くなってしまった
そうだ。

ああ、馬鹿らしいっいたらありやしない。

私って奴は唯一心に決めていた覚悟さえろくすっぽ守れない腑抜
けた間抜けになっちまったらしい。

うじうじ悩む情けない人間よりかは、物言わぬ人形の方がマシだろ
うな。

誰がなんと言おうと死ぬことが私の生きる意味だ。

それはもうわかってる。

だのにどうして、ここまで未練がましく躊躇して、死に場所すら選
り好みしているんだ。

右も左も聞かない岐路に立って、今更何が死にたくないだろう
か。

なあ、私よ。

お前は今まで自分が生きるために、いやそうでなくとも多くの命を
殺してきた。

数えきれない尸の山に立っているんだぞ。

なぜ今更生きたいと願う。

死を嫌う。

一度死んだ身で、何を恐れることがある。

生きるだけで迷惑者のお前が皆の足場になれる僥倖を断る理由な

どないだろうが。

……違う。

違わないけど、大間違いだ馬鹿野郎っ……。

皆と会えなくなるのが怖いんだろう。

私は今の生活を、それはもう随分と気に入ってしまったらしい。

そして失う恐怖を知ってしまった。

紅魔館も白玉楼も永遠亭も、あの世もこの世も全部……全部が私にとってかけがえのないものなんだ。

幽香だつてそうさ。

どれだけ嫌われようが、石ころぶつけられようが、私はこの命が好きなんだ。

幽香と飯を食つて、寺子屋で下らないこと教えて、夜はちびちび酒を呑む。

そうやってみんなと生きる未来を失ってしまうのが、私は何より恐ろしい。

こんな気持ち、知らなかった。

未練だ。

覚悟なんて未だ練りきねていない。

皆の尸の上に私がいるんじゃない。

皆の思いやりや優しさが、私そのものなんだ。

どれだけ最高の死に場所でも死ぬ意味でも、私自身を否定するような真似、できっこない……。

「貴子……」

不意に華扇の声が包み込むように響いた。

それから華扇は何も言わず、私の目を拭った。

「その涙の意味は、問わないでおきます」

……どうやら私は、泣いてるらしかった。

気がついてしまうともう止めどなく、嗚咽はいつまでも続きそうだった。

月だけが明るい嫌な夜だった。

「貴方の口から死にたくないと聞けて、ようやく安心したわ」

「嫌味か？」

「正味よ。もし貴方がこの期に及んで死んでくるなんて言うんだったら、正直失望してたもの」

「……何でだよ」

死のうが生きようが私の勝手だろ。

今回は……気まぐれで死にたくなかったただけだ。

「馬鹿者！」

「いでっ！」

私のほっぺに手のひらサイズの紅葉が咲いた。

「目は醒めた？」

「つてめえ何しやがる！」

「どうせ、今回は気まぐれで死にたくなかったただけだ〜とか思ってたんでしよう！」

「そ、そんなこと……」

なんだってこういう手合いは心をズバリと読み当ててきやがるんだ！

なに考えたって私の自由だろうが！

「どう考えたって私の自由ねえ……どうやら紅葉が足りないようね！」

「だからそう易々と心中を……ついた！」

このアマ……地獄であつたら覚えとけよ。

ぶちのめしてやつからな。

「私をぶちのめせるのなら、萃香もぶちのめせるわ」

「……お前は私と脳みその共有でもしてるのか？」

「思考が顔に出過ぎなのよ」

「……ちよつと待つとけ」

私は神社の中にある霊夢の住まいへと走った。
とあるものを取りにいったのだ。

「すまん、待たせた」

「いえいえ……って、その顔は何のつもりですか」

「顔を見られてたら話にすらならんからな」

「だからって……わざわざそんな事までしなくても」

「ばーかばーか。」

「……どうかしましたか？私の方をジロジロ見て」

「どうやら効果ありみたいだ」

良かった、これで集中して話ができる。

いや普通に考えて読心術を持つてるような奴はいないんだがな

……何故か私の心は読みやすいらしい。

たぶん平仮名ばつかで書かれてんだろうな。

しかし予想外に効果的面だ。

わざわざひよつとこのお面を被っただけの事はある。

「さて……心境は悟られなくなっただけとはいえ、悟りつばなしの死期がどうにもなつちやいない」

「そうね。現状のままなら絶対死ぬわ。しかし貴子、貴方は運が良い」
「幸運なんて生まれて初めて言われたよ。鬼に目つけられてこの世界と引き換えに死ななきゃならない人間はそりやラツキーだろうけどな」

「……さっきまでのテンションはどうしたのよ」

「いや、嫌だつてことを認めたら気分が楽になつてな」

「もういつそさつさと死んで来なさい」

「どのみち死ぬさ」

「良い根性してるわね……まあ良いわ。ここからが本題よ。私としても世界を救おうとする勇氣ある人間を黙って死なせたくはない。そこで貴方に最大限の力を与えることにしたわ」

「……よくわからん」

「簡単な話よ。鬼と対抗できる力を貴方に与えるわ」

「……なんだつて!?!」

鬼とタメはれるようなパワーだと。

そんなのがあつたら死なずに済むのでは？

「……期待に満ちた視線を裏切りたくはないのだけど、この力には欠点があるわ」

「だと思ったよよくそつたれ！」

「欠点は一つ。この力は……あまりにも強すぎる」

「……それって良いことじゃないのか？」

「もし貴方がこの力を使って何かを殴れば、強すぎる力によって殴った対象はもちろん、貴方の腕も消し飛ぶでしょう」

「……ああ!？」

「隻腕になっちゃうのか!？」

「まだこの右手には働いて欲しいんだけど。」

「それに連発はできない。貴方の体に宿すのならば、一撃が限界よ。しかしたったの一撃、萃香に当てればギャフンと言わせられるわ」

「それが……勝ち筋ってのか？」

「そしてこの一撃は初撃になるでしょう。一般人がそうそう鬼に攻撃を当てられるわけがないのだから」

「そんなの、博打じゃねえか!」

「だから五分五分なのよ」

「……鬼相手に、五割で勝てるのか？」

「ええ」

「真っ直ぐに領く華扇。」

「多分、本当のことを言ってるんだろう。」

「五割で死ぬ。」

「ずいぶん上等だ。」

「博打に生きた私が、博打に死ぬるなんて。」

「よし……覚悟はできた」

「……貴方はやはり、歪んでる」

「あ?」

「死ぬと言われて死ぬる人だから言わせて欲しい。どうか、生きて帰ってきて」

「もちろんだこのやろう!」

「やけくそになりつつある私の前に、華扇は何かが並々注がれたコップを置いた。」

「匂いでわかった。」

「これは酒だ。」

「呑みなさい」

「……何だこれ」

「飲めば鬼とも張り合える、文字通りのおにころしよ」

「本当にこんなのが効くのか？」

「試せばわかるわ」

そういうと華扇は指先にそのおにころしとやらを着け、私の口元へ運んだ。

お面を剥がれ、有無を言わず私はそれを舐めさせられた。

つまり華扇の指をだ。

「……無駄に良い酒だ」

「試しにその辺の木でも殴つてきなさい」

「……殴れつつつてもなあ」

体に全く変化らしきものはない。

口の中に華扇の指の感触が残っているだけだ。

私は立ち上がり、境内の端へ歩いた。

そこに生えていた群樹から一本選び、左手で狙いを定めた。

「効果を発動させる時には、心の中でこう唱えなさい。『スマツシュ
！』と」

厳かな雰囲気の花扇には似合わないアメリカな言葉。

私はやっぱり半信半疑で唱えた。

「……スマツシュ」

——山からまるごと一列木が消えた。

私の左手は健在だ。

「まじか……なんだこりゃ！」

「一滴でこの威力とは、貴方の体は随分適性が高い。さあグイツと飲んで、鬼退治！」

「こりゃあ……恐ろしい事になってきたな。五分五分なものも領ける」

私はもはや恐怖と仲直りして、勢いよくおにころしを飲み干した。

体の奥底が煮えたぎるように熱くなる。

静かな境内、灯籠で映る影が妖しく揺らめいた。

一世一代の鬼退治が、始まる音がした――。

シケモク

もし明日死ぬとしたら、アンタは何がしたい？

昨日の私にそう聞いてやりたい。

多分私は、酒だタバコだなんて吐かすだろうけど。

あまり実感は無いが、私はこれから死線を潜るらしい。

その隙間とはかく狭いもんで、意地の悪いハードルは地面ストレスに設置されてる。

心臓がドクンと高鳴る。

これが恋とやらなら随分と微笑ましかったが、残念なことに燃料は殺意ってやつだ。

どうにもそのガソリンは燃費が悪いらしく、えてして環境にも悪い。

だが、この先世界の果てまで突っ走ろうともガス欠なんて起こらないだろう。

燃料は限界を超えて注がれているのだから。

人を本気でぶん殴ったことなら、数え切れないぐらいある。

本気でブチギレた事だって何度もある。

だが、ここまで血管が沸るのは今回が初めてだ。

「ぶっ殺してやらあつー！」

私にだって、傷つけられたくないもんくらい沢山ある。

それを全部傷付けられようもんなら、この地球のどこにしようつぶっ飛ばしにいつてやる。

鬼も悪魔も同罪だ。

これから戦う私の数分間は、誰にも知られることは無い。

私は私で、世界のためだとか友人のためだとか、そんな大層な理由なんてない。

私自身の怒りがために、鬼だろうが何だろうがぶん殴ってやるのだ。

下駄履きの勇足は、石畳をカンカンと鳴らして進んだ。

月光が照らす草丈の低い平野。

萃香の元へは、あつという間に着いた。

私は一人でやってきた。

華扇は、神社で眠っているものたちが起きて暴れ出さないように見張っておくそうだ。

それでいい。

着いてきてなど欲しくない。

むしろ一人で、私だけで戦いたい。

萃香は、広い野原の中心に胡座をかきながら、ガブガブと大盃を傾けていた。

私がやってきたのを元から知っていたのか、それとも今知ったのか。

振り返って私を見つめ、それから高笑いを上げた。

「やっぱり来たか！アンタなら来ると思ってたよ！」

「お前をぶん殴りに来た」

「はははっ、そうでなきや困る。アンタがここで逃げ出しちまうような腰抜けだったら、私はこの腐った世界をぶっ潰さなきやならないんだから」

私は握り込んだ指が爪を立ててめり込んでいくのを感じた。

「鬼如きが随分大それた事をするもんだな」

「妖怪様に恐れをなさなきや、長生きはできないね」

「死ぬことは名誉だ」

「なら、アンタを誉高くしてやるよ。御託はいいだろ？かかってきなよ」

萃香は威圧感を出しながら立ち上がり、私にむかって指を曲げた。

私は一歩ずつ、ゆつくりと萃香に近づき、拳を振ればぶん殴れる位置までやってきた。

背丈の小さなこの鬼の、憎たらしい顔が一層よく見える。

「恐れもしないのかい。とことん舐められたもんだよ妖怪も」

「ここまで来たら、いつそ正々堂々ケリをつけたくなってきた。良い

か馬鹿妖怪、この一撃をよく見とけ」

私はわざと右拳を大きく振りかぶり、大きな声でこう叫んだ。

「スマアーツシユー！」

萃香はその見え見えの拳を避けてから、少しだけ距離を取り、激変した辺りの光景に少し目を取られた。

空気が揺れて、草木や石ころがふつとび、その風圧が遠くにある山を削ったのだから。

「こりや驚いたね……なんだいその馬鹿力は。そんなもん振り回してたら、アンタもタダじゃ済まないだろ」

ニヤつく萃香の物言いに返事することすら私はできなかった。

想像を絶する痛みと痺れが体全身を襲ってきたのだ。

「ぐああああつー！」

「黙ってりや一縷の望みもあつたものを、愚かな事をするもんだ」

「正々堂々お前をぶつ飛ばさなきゃ、まるで意味がない！」

「とことんアンタ、馬鹿なんだねえ」

「いいかこのクソ妖怪！よく聞け！私は華扇から、お前をぶちのめせるだけの力をもらった！もし舐めてかかって一撃でもかすればお前もただですまないぞ！」

「……そうかい。なら私もアンタに見せとかないとね」

そういうと萃香は私と同じように大きく振りかぶり、やや曇り気味の空に向けて拳を突き出す。

天高く突き上げた拳から強烈な衝撃波が飛んできて、私は耐えきれず吹っ飛ばされた。

思わず天を仰ぐ形になる。

それから、青ざめた。

「くっ、雲が……消えたっ!？」

拳の風圧で、空にかかっていた雲は一つ残らず姿を消した。

月光が妖しく煌めく。

「鬼が本気になったら、どうなるか分かったかい……?これから私は本気でアンタを殺す。一撃でも擦れば、アンタはチリも残らず消し飛ばよ」

「それでいい……それがいい」

「あ？」

私は立ち上がり、猿叫のように声を張った。

「かかってこいやあつ！」

萃香はニタリと笑い、今度は私に向かって先程の攻撃を打ってくる。

私も同じく、さっきの威力のまま拳を放った。

威力は空で相殺され、爆音だけが鳴り響いた。

右腕から、勢いよく血飛沫が飛ぶ。

あの爆撃を馬鹿みたいに乱発したんだから、こうなるに決まっている。

むしろここまでよく持った方だ。

……さて、どうする。

妖怪退治における鉄則。

それは先手必勝、見敵必殺だ。

私はその両方に失敗している。

しかし、そうでなくては意味がなかったのだ。

真つ向から打ち勝たなきやダメなんだ。

人間の私が勝たないと、この異変を解決する意味がない。

これは妖怪側からの、人間への挑戦状なんだから。

それを不意打ちで勝ってどうなる。

同じようなことが起きるだけだろう。

だから、真正面から。

正々堂々勝たなくちゃだめなんだ。

私の勝利条件は、渾身の一撃を萃香に見舞うこと。

一発でいい。

たった一撃で勝負は決する。

私が負ける場合にせよ、だ。

となるならば、この戦いにおける最大の目標は何か。

それは萃香との間合いを限界まで近づける事だ。

近づいてさえ仕舞えば、勝機はある。

萃香との距離は現在二十メートル。
さあどうする。

幸いなことに萃香の恐ろしさはその力にある。
反応反射の速さが並外れているわけではない。

ならばっ………！

「どうした、かかってこないのかい」

嫌味な発言になど耳を貸してはいけない。

クレバーに戦うことを失念すれば、死以外の結末はない。

私は全力で走った。

萃香を中心に円を描くように。

まずは相手の正面から外れなくては。

「何をするつもりか知らないけど、そんな鈍い動きじゃ止まってすら
見えないね」

「そう思うなら避けるこったな」

「何を避けるんだい………つぐあ!?!」

萃香は大きくのけぞった。

頭に強い衝撃を感じたのだ。

「痛いじゃないか………」一体何を………」

「考えてる暇はないぞ」

「つぐー」

またも顔を顰める萃香。

「どうやら、貴子は何かを打ち出して遠距離から攻撃しているらしい。」

耳を澄まし貴子の居場所を把握。

「またも打ち出されたそれを右手で受け止めた。」

「これは………豆か!?!」

「本当に鬼に豆が効くなんてなあ………勉強はするもんだ」

萃香は数秒推察した。

「それから、おそらく貴子は件の馬鹿力で豆を手から打ち出している
と察した。」

なるほど、それなら確かに反動も少なく少しずつ攻撃できる。

しかし……気づかれるのが早かった。

貴子はまた素早く移動し、それから豆弾を指で弾いて打ち出そうとした。

照準を合わそうと萃香を見る。

その右目が潰された。

「ぐあぁっ!!」

「アンタにできることなんて私にもできるのさ。石ころ如きで苦しんでちや先が思いやられるよ」

暗闇に覆われた右目。

壮絶な痛みが脳天に響いた。

「遠くからチマチマなんざつまらないだろ？そもそも私に撃ち合いで勝とうとするのは間違ってるね」

心底退屈そうに呟く萃香の右手には手のひらいっぱい石ころが握られていた。

鬼が打ち出しているのだ。

一発の威力がライフルの比ではない。

それをもし手のひらいっぱい打ち出されたら……。

ショットガンなど、ガキのオモチャに思えるだろう。

「死んでくれるなよっ!」

萃香は大きく振りかぶって、貴子へ発弾した。

空気を切り裂きながら凶器と化した石たちが貴子の体へとめり込んでいく。

ピストルで滅多撃ちにされたようなものだ。

貴子は思わず地面に伏せた。

「……なんだい、もう死んじまったのかい」

呟く萃香。

貴子は微動だにしない。

「おいおい……まさか本当に死んじやったのか!?!」

もしこのまま貴子が立ち上がらなかつたら、幻想郷に明日はない。

だが、いかに頑丈と言えど人間の肉体だ。

鬼の攻撃をまともに喰らって立ち上がれる訳がない。

立ち上がれば、そんなもの、人間ではない。
そして貴子は、人間を辞めた。

「……つぐあぁー！」

ドス黒い血を吐きながら、しかし貴子は立ち上がった。

萃香は大きく笑い、貴子に向かって歩み始めた。

「そうじゃなくっちゃ！それでこそ私が気に入った人間だよ！」

「はあっ……はあっ……」

貴子は血まみれの頭を萃香に向けて、およそ人間のものとは思えない鋭き眼光で睨みつけた。

私が鬼なら、コイツはまるで修羅のようだ。

慄きを伴いながら萃香は思った。

「てめえ……いいかつ！この……クソ野郎っ！」

「喋るので精一杯じゃないか。弱き人間よ、死を前に何を吠える」

「人間はなあ……大事なものを守る時、何よりも強くなるんだ！」

「へえ、そりや初耳だよ。でもね、弱い奴は何も守れない。守りたい物を守る奴が強い、それだけのことさ」

「だとしたら私はお前に勝てる！」

「はあ？」

「背負ってるもんが違うんだよ……ぐっ……」

萃香はやれやれと言う顔をして、貴子に近づいた。

両手を腰の後ろで組み、顔突き出すようにして。

「全く……馬鹿だね。最初からアンタに勝ち目なんかないっての」

「あ?!？」

「一発殴ってみなよ」

「デメエ……なにを」

「いいから。殴りゃわかるよ」

顎をひけらかすように顔突き出す萃香。

貴子は、不審に思ったが、殴らざるを得なかった。

殴れば、勝ちなのだから。

「スマーツシュッ！」

鋼鉄の山すら打ち砕く怒りの拳。

それは紛れもなく萃香の顔に直撃した。

轟音も鳴り響いた。

「なっ……」

「アンタは私に勝てない。例え一発当てたとしても、そんな攻撃私にや通用しないのさ」

萃香は全くなんともないように、拳を顔面で受け止めていた。

「最初っから、アンタの負けは決まっていた。だからどういう風に戦うかだけを楽しみにしてた。でも多分アンタは期待外れだね。殴り合いですらできないんだから」

「そんな……馬鹿なことが……」

貴子は自身を支えていた何かが全て抜け去り、受け身も取らずに地に倒れた。

天を仰ぐ。

「もういいだろう。理不尽に殺されるのが人間の運命さ」

拳をゆっくりと握り締めながら貴子の方へ萃香は歩く。

「ここまで来たことには敬意を払うよ。そのまま名誉に死ぬといい」

貴子に跨り、マウントポジションをとる。

少し名残惜しそうに己の拳と貴子の顔を視線で往復する。

それから思い出したように言った。

「そうだ。知り合いの天狗に繕って明日の新聞にはアンタのことを載せてやるよ。異変解決の英雄ってね」

萃香の発言にすらまるで反応を示さない。

貴子は茫然自失としたまま虚な目をしている。

脳内には絶望が広がっていた。

それも仕方がない。

もう、全て終わりなのだから。

もうすぐ死ぬのだから。

……どうして今まで私は生きていたのだろうか。

ここで死ぬるなら、それもいいのだろうか。

頑張った。

死力を尽くした。

最初っから鬼に勝てるわけなど無かったんだ。

例え運良く一撃当たっていたとしても、それすら効かないんだから。

どうしたって勝ち目なんてなかった。

これが……鬼か。

妖怪退治屋らしい最後だ。

いい人生だった。

皆が無事なら、それでいい。

無意味に生きるより、マシだ。

右目は潰れちまったのか……。

遠近感すらよく掴めないや。

ああ、死ぬ前だからかな。

世界がやたらゆっくりに見えるや。

顔面に向かって萃香が拳を下ろしてきてる。

多分あれを喰らったら、死ぬんだよな。

でも身動きなんか取れないし。

反撃なんか出来っこないし。

逃げ場はないか。

……待て！

この状況！

勝機はあるぞ！

何故なら、萃香と私の間合いは限界まで近づいているのだから！

「じゃあね」

悲しげな萃香。

拳は振り下ろされる。

私は最後の馬鹿力で身を振った。

顔面直撃コースだった拳は、私の左肩を貫いた。

勢いは私の体に伝わる。

そのまま体が回転する。

「スマアアアッシュユ!!!」

「つな！」

吹き飛ぶ萃香。

顔面には殴打痕。

「はぁあつ……」

地面にぶつ倒れたまま、大きな吐息を吐き出す。

簡単な話だった。

私一人の力では、どうしようもない。
ならば。

二人分ならどうか。

萃香の力はそのまま私の拳に乗った。

元から山を吹き飛ばすだけの力。

そこに天を穿つ鬼の力が掛け算された。

その威力、地球をも砕く。

「あ、頭がっ……あがっ」

悶える萃香。

それもそうだろう。

殴った側の私だって、ただで済むわけがない。

あの威力、顔面に喰らってなぜまだ死なぬのか。

萃香の一撃で私の左肩は吹き飛んだ。

そして右腕も、もうどこにも残ってはいない。

あの一撃によって消え去った。

私はなんとか、一撃を喰らわすことに成功した。

「こ……この野郎、なんてことをつ……」

「……全部、失っちゃったか」

「その一撃になんの意味があるっ！例えぶちかましたとしても、アンタの負けに変わりはないんだよ!？」

怒号を飛ばす萃香。

怒りよりも、驚きの方が勝っているような表情だった。

「いや、アンタの負けだね。私の負けでもある」

「あ!？」

「……今日は月が綺麗だ」

「一体何を……っ!?!」

萃香は貴子の視線に釣られ空を見た。

そこで恐ろしい物を目にした。

空から流星群のように降りかかる大量の落石。

「アンタ……なんのつもりだっ!?!」

「上に乗っかられる寸前……石も豆も引つくるめて全部空にぶん投げといた。遙か天空まで到達し勢いが死んだ後……それらは全てここに振り落ちる」

「そんなことしたら……アンタが死ぬだろ!」

貴子は萃香の激昂に黙して応えない。

全てを悟ったように空を見つめている。

萃香も、下顎をぶん殴られたせいで立ち上がれない。

上空から降り落ちてくる落石群。

あれを食らえば、いくら妖怪の自分とて無事には済まないだろう。

しかし、動けない。

足が言うことを聞かない。

「ぐっ……動け、このっ!」

足はもはや死んでいる。

腕を使って這いつくばろうにも、それを貴子が許さなかった。

「なんだっ!?!体が動かないっ!」

「逃げんなよっ……!」

いつの間にくくりつけたのか。

萃香の足に手綱が結ばれていた。

貴子はそれを歯で食いしばり萃香の動きを止めた。

「貴子おっ!」

鬼の力を持って踏ん張っているのに、両腕を失った人間一人に食い止められる。

どこにそんな力が眠っていたのか。

貴子は尋常でない力を発揮した。

「やめろおおおっ!!!」

「ふんぐうつ!!」

最後まで萃香に食らいついた貴子。

その執念が実ったか。

天空から、鉄の豪雨が降り注いだ。

「ぎああああああ!!」

萃香の絶叫。

地面にぼたりと倒れる。

しばし降り注ぐ怒りの雨を、萃香はその身に堪能した。

「……………」

それは貴子も同じことである。

苦しみはむしろ、貴子の方が強い。

もつとも、気絶している貴子にとっては関係のないことだが。

まぐれもない萃香の敗北だ。

鬼が人間に身動きを封じられた。

しかし、貴子にとっても敗北と言える結末だった。

石ころの雨が止み、静寂と月光が降りしきった。

「…………ふっ」

萃香が血混じりの咳を吐く。

全身に穴が空いている。

立ち上がる足はまるで枯れ枝のように頼りなかった。

「…………はははっ…………あっはっはっはっはっ!」

大声で高らかに笑う。

皮肉を込めた笑みじゃない、本心からの笑いだった。

「まさか人間一人にここまでやられるとはね…………やっぱアンタは最

高だ!」

震える足で地に伏せた貴子に向かって歩み出す。

「私を殺すことは不可能だったにしても…………ここまでやれば大健闘

じゃあないか!」

歩み、貴子の顔面を見つめる。

右目をつぶされ、両腕を失い、満身創痍の人間がそこにいた。

しかし、ある違和感があった。

「……妙に綺麗な顔だね」

貴子は原型をとどめたままであった。

鬼の自分すら苦しみ悶えたあの流星群を喰らったのであれば、人間などひき肉になっていてもおかしくないのに。

「まるで石ころ一つ喰らっていないような……」

「あら、勘が良いじゃない。雑魚妖怪にしては」

「っ!？」

その場から大きくのけぞる。

両足の膝から血が噴き出してきた。

声の主人は自分でも貴子でもなかった。

もつと凶悪で暴力的なヤツ。

傘をさしながら萃香の方へ近づいてくる

「……風見イイ!」

「気安く名を呼ぶな」

「テメエ何しに来やがった!」

「貴方なんかには用はないわ。まあ、かかってくるなら……殺すわよ?」

幽香の眼差しは本気だった。

お互いフルコンディションで殴り合ったとしても、幽香は恐ろしいヤツだ。

こんな状態でやりあえるヤツじゃない。

しかし、どんな状態であろうと、鬼が敵前逃亡などするわけがない。

「上等だあオラァ!」

飛びかかる萃香。

右拳が振りかざされる。

それを幽香は、よもやノーガードで受け止めた。

「……痛くも痒くもないわ。こんなナヨナヨした拳」
見えすいた挑発だ。

しかし鬼にはそれが許せない。

怒りのボルテージが上昇していく。

「……げほっげほっ!」

大きな咳。

萃香の拳が止まる。

さりげなく構えられていた幽香の蹴りも同様に。

「さて……ゆうか。手を……だすなっ！」

今にも生き絶えそうな貴子の声だ。

「これは私の喧嘩だ……私がケリをつける！」

地に這いつくばりながら、血を吐きながら。

貴子はそれでも言い切った。

片方が潰れた状態でありながら、貴子の目はまだ死んでいなかった。

幽香は何も言わず、貴子の胸ぐらを掴み、それから立ち上がらせた。

「……ありがとよ」

幽香は何も言わない。

萃香と睨み合う貴子。

両腕を失って、もはや攻撃の術など失ったように思える。

「いごよ……」

それでもなお、魂が死んでいない。

もはや何度死んでもおかしくない肉体を立ち上がらせ、真っ直ぐに敵を見つめている。

ようやく覚悟が決まりきった。

萃香も貴子も、長い息を吐いた。

それは次の一撃がお互い最後であることを示唆していた。

「死ねええええええっ！」

「うおおおおおおおっ！」

萃香の鉄拳。

あろうことか、貴子はそれを。

頭突きで返した。

轟音。

衝撃波。

互いの動きが止まる。

「……っぐー！」

貴子の頭から血飛沫が飛ぶ。

もはや黒く変色した血だ。

萃香はニヤリと笑う。

その右腕が砕け散った。

「つなー！」

「……あばよ」

右足をもう一步踏み込む。

拳一つすら入らない間合い。

天を見上げるように頭を振りかぶり。

萃香の人中に、渾身の頭突きを叩き込んだ。

「つがああつー！」

骨が砕けるような音。

萃香が吹っ飛んで地面に伏せた。

貴子は立ったまま、血まみれの顔面で萃香を優しく睨んだ。

「なんで……人間如きに……」

それを最後に萃香はピクリとも動かなくなった。

それと同時に貴子もぶつ倒れた。

幻想郷を賭けた大異変

——そして妖怪と人間と決闘

勝者——人間 貴子

目覚めるとそこは見慣れぬ天井であった。

ぼんやりとした室内灯が萃香の寝ているベッドを照らしていた。

「……ここは」

「永遠亭よ」

隣に腰掛けていた、白衣を纏う銀髪の女がそう答えた。

「永遠亭……？」

「まあ、病院みたいなものよ。私は永琳。天才薬師よ」

「……なんで私がこんなところに」

「さあ。どこぞの馬鹿に聞きなさいよ……あの馬鹿、またタバコ吸い

に行ったわね」

舌打ちを打つ永琳。

体を起こそうとすると激痛が走る。

しかし全身に正確な手当てがなされていた。

「あんまり動かない方が良いわよ。妖怪といえど、あそこまで傷んでいたら回復は遅いでしょうから」

「……貴子はどこにいる」

「さあ、庭にでもいるんじゃないかしら」

永琳に相槌すら打たず、萃香はボロボロの肉体で廊下を進んだ。

どこに行けど貴子はいない。

廊下にいるウサギどもが怯えたような顔でこちらを見ているが、そんなものどうでもいい。

あの人間に合わなくては……。

ドンツキを曲がった所に貴子はいた。

庭に降りるための縁側に腰掛けて。

萃香を一瞥したあと、また真正面を見返した。

「……よお。もう動いても良いのか」

「アンタ……なんのつもりだい」

「あ？」

「なんで私をここに連れてきた」

「……煙草、火をつけてくれないか？」

風が吹く。

貴子の着ている服の両袖がバサバサとたなびいた。

「腕がないと煙草も吸えん」

「吸わなかったらいいじゃないか」

「右ポケットに入ってる」

「……つたく」

こつちの話を全く聞かない貴子にため息をつきながら、右ポケットを弄る。

くしゃやくしゃになった箱を引っ張り出して、それを一本啜えさせてやる。

マッチが見当たらなかったので、指で火をつけてやった。

「……ふう」

両腕がないのに器用に煙を吸引する貴子。

なんだか真面目に話すのがちゃんちやらおかしく感じて、自分も一本加えた。

二人の吐き出した煙が混ざる。

安い煙草だ。

煙が辛い。

なんでこんなもん吸うんだか。

「……私は妖怪退治屋だ」

「あ？急になんだい」

「退治するまでが私の仕事だ」

「ああ、そうかい」

「殺し屋じゃないんだよ。退治までが私の管轄なんだ」

「……だから私を生かしたってのか？」

「困ってるヤツを救うのが私の仕事だからな」

格好つけるでもなく、心底真面目そうに答える貴子。

萃香はなんだか、馬鹿馬鹿しく感じて、それから笑った。

「たえそれが誰にも知られなくてもかい？」

「ああ」

「酔狂なこったね」

「それで良いんだよ。私たち人間は」

萃香には貴子の言うことが理解できなかった。

皮肉じゃなく本心から気になった。

「……なぜ無意味に生きるんだい。この世界にや、なんの使命もなくだらだらと過ごしているような連中ばかりじゃないか。そんな凡夫、救って何になる」

「……無意味で良いんだよ」

「無意味は無価値と同意義だよ」

貴子は煙を器用に吐いて、短くなったタバコをぶつと吐き出した。

「どうだろうな。意味もなく生きる日々が、かけがえのないものなん

だよ。人間にとつてはな」

「だから短い人生を浪費するのかい？」

「意味とか使命とか、そんな面倒なことを考えるのは頭の良いやつとすこぶる馬鹿なヤツだけでいいんだよ。私ら凡人は今日と明日で精一杯さ」

「それが幸せだったのかい？そんなつまらぬ人生が」

「一本の煙草と酒、そこにほんの少しのアテがあつて一体何が不満なんだよ」

貴子は視線で煙草を示した。

萃香は何も言わずもう一本啜えさせてやる。

「そんな風に生きたから、妖怪の現状は腐ってるよ」

「そうか？」

「そうだろう。人間の恐れは形を変えた。本質的な部分がずれちやつたんだ」

「……私の知る妖怪たちは皆イキイキしてたよ。一生懸命だった」

「そう生きるしかなかったのさ」

「いや、違うな」

「え？」

貴子は目一杯煙を吐いて、それからにかつと笑った。

「みんな楽しんでんのさ。今は今なりに、精一杯なんだ。明日一日をどう楽しく過ごすか。それでいいだろう」

「……そりゃ強い妖怪達の話だろ！木端妖怪たちは明日にすら怯えるよ！明日を迎えられるかどうかすら分からないんだから！」

「なら妖怪代表のお前に言っとくよ」

「あ？」

「暇ならいつでもかかってこい。人間は馬鹿なもんでな。妖怪退治屋なんていうふざけた奴らがわんさか居る。お前ら妖怪殴るのが私らの仕事だ。お互い持ちつ持たれつでいこう」

貴子はそれだけ言って、立ち上がった。

「待ちなよ！そんなこと言ったら、妖怪どもがアンタに押し寄せるよ！」

「それがアンタの望みだろう。安心しろよ、人間は意外としぶといからな。そんなかわり、妖怪退治屋以外の奴に手エ出してみろ。そんなきや戦争だ」

廊下を進む貴子。

萃香はそれを食い止めるだけの言葉が思い浮かばなかった。

人間と妖怪。

その軋轢を、奴が一身に受け止められるものか。

しかし、もし受け止められるのならば、これほどウマイ話もあるまい。

妖怪は人間を襲えるし、向こうも仕事が増えて万々歳だろう。もちろんそれは命があればの話だが。

……明日一日を楽しく過ごす。

それだけの繰り返し。

ずいぶんと享樂的な物言いではないか。

多分、それが貴子の生き方なのだろう。

どれだけ死線を潜ろうと、命が危ぶまれようと。

心の中にはいつでも死んでやるって言う諦めにも似た覚悟がある。

それとは別に、今を精一杯楽しんでやるって言う覚悟がある。

「まいったねこりゃ……貴子。あんた本当に、ろくでなしだよ」

そう呟きながら、貴子が置き忘れたたばこをポケットに詰め込み、病室に戻るのであった。

「貴子！煙草はダメっていつてるでしょ！」

「だあ！吸ってないってんだよ！」

「嘘おっしやい！匂いでバレバレよ！」

「それはあれだよ。ほら、隣でずっとアイツが……」

「アイツって誰よ！」

「そこにいるじゃないか」

「え？」

貴子の視線の先には萃香がいた。

部屋に戻ってきたと思ったら急に話を振られて、萃香はしどろもど

ろになった。

「そんな言い訳通じないわよ！」

「馬鹿野郎、両手失ってる私が煙草なんて吸えるか。そいつのポケットの中見てみるよ」

「全く見苦しいわね……これだからヤニカスは」

「うるせえ」

「ちよつと失礼するわね。あの馬鹿が嘘ばっかつくもんだから」

永琳が萃香のポケットに手をつ突っ込む。

そこには貴子が忘れた煙草が入っていた。

「あら？」

「ほら！言っただろ！」

「……ごめんなさいね、ウチは禁煙なのよ」

「おい、私の時と対応が違うぞ！ちゃんとぶん殴れよ！」

「うるさいわね！貴方はブラックリスト入りなのよ！」

吠える貴子に耳も貸さず、永琳は萃香に注意した。

「病人が煙草なんて吸っちゃだめでしょう」

「いや、これは」

「言い訳なんて見苦しいぞ萃香！罪を認めろ！」

「アンタは黙ってなさい！」

怒鳴られた貴子がしゅんとする。

「ともかくこれは没収させてもらうわね」

「え、ああうん」

「待て永琳！それはちよつと残酷すぎやしないか!？」

「……ところでこのタバコの銘柄、貴方がよく吸っているわよね」

「……そりゃ人気だからな」

「この箱の中、あと二本よ」

「嘘だろ!? さつき買ったばっかだぞ!?!……あつ」

「へえ、さつき買ったのね……」

「ちよつ、待ってくれ！ちがっちがぎやあああああ！」

とんでもない威力で頭突きを喰らう貴子。

成程、あの頭突きはここから学んだのかと、萃香は妙に納得した。

その時、病室のドアが勢いよく開いた。

蒼い髪の聡明そうな人間が、涙目で息を切らしながら貴子に駆けよった。

「貴子！無事か!？」

「あ、慧音」

「お前……何をしでかしたんだ!？」

「これは……労働災害だよ」

「りよ、両腕を失ってるじゃないか!？」

「まあ名譽の負傷って奴だな」

「それに何だその顔！オデコが酷く腫れてるぞ!？」

「これはどこぞの馬鹿医者に聞いてくれ」

「慧音さん慧音さん、貴子ったらまた煙草を吸ってました」

ピクリと慧音の方が跳ねる。

気配が変わった。

ついでに貴子の顔色が青色に変わった。

こちら側からは慧音の背中しか見えないが、よほど恐ろしい表情をしているらしい。

「よし、元氣そうで何よりだ貴子。いつものいっところか」

「ちよつ、まて！私は病人だぞぎやああああ!？」

先ほどよりも強い音が鳴る。

アレ、貴子の頭蓋骨、砕けたんじゃないだろうか。

「つぶーあつはつはつは!？」

「……どうした萃香、何がおかしい」

「いや、喧嘩してる時はあんなに芯のある奴だったのになあ……こうも情けない奴だとは……あははっ!？」

貴子が不満そうに萃香を睨む。

両腕が健在だったら胸ぐらを掴み上げていた所だろう。

これがコイツのいう楽しい日々ってやつか。

随分と傷まみれの生活だ。

「さて、貴子……今回ばかりはちよつと洒落にならないわよ」
「何だよ急に」

「両腕が無いんだもの。なんでこんなになったのかは聞かないけれど」

「大体わかるだろう」

「そうね。貴方の馬鹿さ加減がよく分かるわ」

「うるせえ」

「ともかく、その腕は何かするから、しばらく安静にきなさい」

「……ええ！何とかなるのか!？」

「ええ。私を誰だと思ってるのよ」

「えいりーん！」

「うるさい。まあそれでもすぐには行かないわね。腕を直したとしても、そこからリハビリが必要だし」

「ま、気長にやろう」

「……へえ、珍しい。文句一つ言わないのね」

「私を誰だと思ってるんだよ」

「馬鹿な妖怪退治屋だけど」

「そりやもつともだ。馬鹿な妖怪を退治するんだからな」

「……ともかく数ヶ月は入院しなさい。私は自分の部屋に戻るわ。そ

この萃香さんと仲良くね」

「へいへい」

立ち上がり部屋から出ようとする永琳。

慧音もそれに伴って去っていった。

部屋から一步出たところで、永琳の足が止まる。

何かを思い出したように貴子の方へ振り返った。

「そうそう、これあげるわ」

そう言っポケットから何かを取り出し貴子に投げた。

両腕がないのでそれを持ち上げることができないが、正体を確認することは可能だった。

「はあ……貴子」

「んだよ」

「……お疲れ様」

去っていく永琳。

ベッドの上に投げつけられたそれを、両手のない貴子に代わって萃香が持ち上げる。

それを見て大笑いする萃香。

対照的に貴子はバツの悪そうな顔をしている。

「ったく。嫌味なやつだ」

「アンタ、よっぽど気に入られてるんだねえ」

「だとしたら殺してくれ」

「はははっ！ やっぱり私もアンタを気に入ったよ！」

「……やめてくれ。これ以上は懲り懲りだ」

永琳からもらった『それ』に火をつけ貴子に啜えさせてやる。

心底嫌そうな顔をして、目一杯煙を吐き出した。

幻想郷は今日も平和である。

ろくでなし

——食器と治療はあらいもの
件の大異変から数週間が経った。

萃香も貴子も、未だ永遠亭に入院中である。

幻想郷中を巻き込んだ大異変であったが、その顛末を知る者は非常に限られている。

そもそも異変が起こったことすら、世間には知られていない。

それは何も世の中が無情だからなどではなく、無為に妖怪への不安を煽らぬよう貴子が希望したからだ。

近年相次ぐ異変の最中で、よもやあれほど大規模かつ悪質な異変が起きたとなれば混乱は必須だろう。

もしそうなれば暴動や恐慌といった、ある意味異変よりも解決困難な問題が起こりうるかもしれない。

だから貴子は情報の浸透を嫌った。

それにともない、各勢力から情報統制が行われた。

元より今回のことを知っている者は異変の当事者である萃香と貴子、そして解決に助力した華扇の三人である。

天下の博麗霊夢ですら知らない大異変。

解決こそされたが、その傷跡は深い。

「貴子さーん。ご飯の時間ですよ〜」

永遠亭で働く兎ナースの鈴仙が、貴子の朝食を持って病室にやってきた。

五体満足の萃香はともかく、貴子は両腕を失っている。

腕が無いと言うのは本当に不便なもので、食事を取ることすら誰かの力を借りねばならない。

そんなこんなで毎食誰かのお世話になっているという始末だ。

「貴子さーん、起きてくださーい」

鈴仙が呼びかけるが、貴子は未だ夢の中であった。

「……起きないと大変なことになりますよ〜」

呟く鈴仙に全く気付かないようで、小さいいびきをかきながら寝返りを打つ貴子。

悪戯っぽく笑って、物音を立てぬよう枕元に置かれた煙草の箱を手取る。

「……………はー」

それで目覚めるのだから、始末の悪い女である。

悪夢から目覚めたような顔をして冷や汗を垂らす。

「おはようございます。良いお目覚めですね」

「……………どこがだ」

「天気良好、お出かけ日和ですよ」

「……………毎朝顔を洗う両腕すら無いってのに、いったいどこへ出掛けるんだよ」

通常より低い声で毒づく。

悪意こそなければ辛辣だ。

隣で寝ている萃香の耳には少し痛かった。

「はいはい、ご飯にしましょうね」

「ああ、ありがとう……………ところでだな鈴仙。その……………老人みたいな扱いはやめてくれないか?」

「へ?」

「なんかこう、毎日目覚めが辛くなるんだよ……………」

「まさか貴子さん……………それは俗に言う、年寄り扱いすんな! ってヤツですか?」

「実際年寄りじゃないんだから良いだろうが!」

「はいはい」

介護士のように小慣れた、あるいは保育士がじやりん子を宥めるような声色で鈴仙は相槌を打った。

「両手がないんだから、実際ご老人より手がかかりますよ」

「これは事故だ。しようがないだろ」

「貴子さんが言うとなんだか軽薄です」

「こんのクソ兔、ぶん殴ってやろうか」

「殴る腕が無いでしょう」

「治ったら覚えとけよ」

「その台詞、怪我するたびに言ってます」

「分かっているなら何度も言わせないでくれよ……」

不機嫌そうな貴子を相手にもしないように、鈴仙は匙を突き出した。

こうなってしまうと抵抗するわけにもいかず、素直に口を開くしかない。

いい歳こいて人にご飯を食べさせてもらうことが、何より貴子を辱めた。

「お味はどうですか？」

「うん、うまいよ。特にこの味噌汁が」

「……それはインスタントです」

ぬるりと気まずい空気が通り抜けた。

鈴仙が料理下手なのではない。

貴子が馬鹿舌なだけである。

「経過は順調かしら？」

「あ、師匠！この通りバッチグーです！」

「どの通りだよ」

「悪態つけるなら大丈夫よ。食欲も大丈夫そうね。外傷は酷かったけど……まあ貴方なら慣れっこでしょ」

無責任にそう言い放つ永琳。

実際貴子は、週に一度はズタボロの状態で永遠亭に運ばれてくる。

両腕が無くなるほどの大怪我こそ珍しいが、傷身がデフォルトみたいな女だ。

「さて……あれだけ酷かった傷口も大方塞がってきたし、そろそろ本格的な治療に入りましょうか」

「やっとかよ」

「跡形もない両腕はともかく、細かい傷も多いわ。右目だって潰れてるし、所々の骨折も多数。よくそれで元気してるわね」

「何でもいいからさっさと治してくれ。一人じゃ飯も食えない便所もいけない、こんな生活不便でならん」

やれやれといった顔で論う貴子に、永琳はすこし冷たい顔をして反論した。

「……貴方が患者である以上、どんな傷や病だろうと治してあげるわ。でもね、貴方それに甘えてるんじゃないかしら？」

「あ？」

「どんな大怪我でも治る。そう高を括って無茶苦茶しすぎよ。貴方は生きてされいれば……いえ、たとえ死んでしまってもどうにかなる。そう思い込んでいるような気がするの」

矢のような鋭い指摘に貴子は何も言い返せなかった。

言われてみれば、たしかに思い当たる節があったからだ。

もともと一度死んでいる身。

さらにはどんな傷すら治してしまう薬師がついている。

もしかするとその環境に胡座をかいて、自分の命を粗末に扱っていたかもしれない。

……しかし、それは死ぬ前からずっとそうだった。

今も昔も変わってない。

「ともかく命は大事にすることね。貴方が死んだら大勢の人が悲しむわよ」

「……養生するよ」

「そうしなさい。……さてと、まずは両腕以外の部分をどうにかしましょうか」

そう言いながら永琳は注射器やら薬やらを取り出した。

あつというまに病室は手術室へと様を変える。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、今回の治療は結構痛いわよ」

「……麻酔多めで頼む」

「断るわ」

「あ!？」

「別に意地悪で言ってるんじゃないわよ。ただ麻酔を打ったところで大して変わらないの」

「だ、だとしても」

「それにこの治療は継続的に行うわ。毎日麻酔なんか打ってたらその

方が体に悪いわよ」

「……や、優しくしてくれ」

「ええ、善処するわ」

そう言いながら、永琳は貴子の体をベッドに括り付けた。

両足と胴体を固定され、身動きが取れなくなる。

右手に持つ注射器がキラんと光った。

まるで鋭利な切先のように。

「まずは右目ねー。痛かったら手上げなさい」

「いや、その上げる手がつぎやああああああ！」

……その日から毎日、昼の永遠亭にはけたたましい叫び声が続いたと言う。

皆詳しくは語らないが、天才の弟子鈴仙は後にこう語った。

「治療なのか拷問なのか分かりませんでしたよ。あんな光景、二度と見たくないですね……ただ、師匠は心なしか楽しんでた気がします」

……永遠亭の闇は深い。

——優しさの果てに

「貴子、元気か？」

「ああ慧音か……元気だったらこんな所いないだろ」

「ははは、それもそうだ。お前は相変わらずだな」

やれやれといった顔をしながら人里の教師、上白沢慧音はベッドの脇にある椅子に腰掛けた。

手には果物やら新聞やらが抱えられている。

「全く……両腕を失くして。妖怪退治屋というのは本当に危険な職業なのだな」

「ああ。なのに稼ぎはちつともないんだ。本当にやな仕事だよ」

「どうだ、これを機に教師に専念というのは」

「出来るもんならそうしたいよ。けどそうもいかない」

「何故だ？」

「困ったことにこれから仕事が増えるんだよ」

「……それはどうということだ」

慧音が真剣な表情を見せる。

妖怪退治屋の仕事が増えるということは、それだけ妖怪が暴れると
いうことだ。

貴子の発言は里の平穏を願う彼女にとって聞き捨てならないもの
だった。

「そんな物騒な話じゃない。ただ妖怪退治の方に力を入れるってだけ
さ。もちろん教師も続けるけど」

「……何があった」

「え？」

「両腕を失くしているのに、これから妖怪退治を頑張るなんておかし
いだろう」

「別に……気まぐれだよ」

「隠すな！何かあったんだろう!?!」

「まあ……そんな大袈裟な話じゃないさ。慧音なら知ってるだろう？
外れ街ってやつを」

特段取り乱す様子もなく淡々と話す貴子につられ、慧音は鶏冠に
登った血を下した。

落ち着きを取り戻し冷静に話を続ける。

「ああ、お前の出身もそこだと言っていたな」

「そこに住んでる連中、毎日誰かが殺されてるって知ってたか？」

「……そんな話、聞いたことがないぞ」

「人里に大手を振って歩けるような連中じゃないからな。私も含めて
だけど。……けどな、私らは死ぬ事なんてなんとも思っていないん
だよ」

「なぜそんな事を言う!」

命を軽んじる発言に怒る慧音もごもごともである。

死生観について二人は度々食い違いが、今回の場合は特に慧音の逆
鱗を逆撫でした。

両腕を失うような無茶をして、それでもなお反省していないように
思えたのだ。

「怒らないで聞いてくれ。別に妖怪退治屋がみな好んでやってる訳

じやないって話だよ。私みたいな根っからダメな奴は他に生きるアテがないし、それに毎日汗水流して働きたくなんてないから、ダラダラと殺生を続けてるんだ。命を惜しまないのだから、言わば本人の意思みたいなものさ」

けどな、と貴子は続ける。

「本人の意思じやない奴も多い。望まぬ境遇のせいで毎日妖怪殴つてる奴だって少なくないんだよ。親が里で罪を犯したり、ソイツ自身が貧乏だったり。そいつが人を殺したって訳じやないのに、あんな貧相な街で暮らさざるを得ないなんて……可哀想だろう」

貴子の言い分は、善悪はさておき真実だった。

外れ街には貴子を含め妖怪退治を生業とする者が多く住んでいる。実際に妖怪を倒す実戦派だけでなく、退治用の凶器を作る鍛冶屋だったり、傷を治す闇医者だったりが多いのがより集まって街を形成しているのだ。

色々な人間がいるし、性格やらは十人十色だ。

ただ全員がみな、何か事情を抱えていた。

犯罪者の子供もいる。

借金まみれの奴もいる。

実際貴子も借金地獄だった。

しかし彼女は少し事情が違う。

貴子は外れ街に住むヤクザから金を借りていた。

本当に悲惨なのは、人里の者から金を借りている連中だ。

外れ街は貧窮した者の街である。

全員稼ぎも少なく、市場が賑わうわけでもない。

故に逆立ちしたって借金など返せない。

返済しようと思つたらそれこそ貴子のように、身売りするしかないのだ。

また、外れ街には二種類の人間がいた。

一つ目は外れ街で育つた人間だ。

貴子もそつちである。

もう一つは、昔人里に住んでいたが、追い出されて外れ街にやつて

きた連中だ。

どちらにせよ、外れ街の者が人里に入る事は叶わない。連中が入ってきたら人里から袋叩きに遭うからだ。

それには一昔前の『とある事件』が起因する。

まだ貴子が幼かった頃、人里と外れ街の関係は最悪だった。しかも夕チの悪いことに、関係悪化の非は外れ町側にあった。

連中は夜の人里に忍び込み、悪行三昧を働いたのだ。

窃盗に強姦、誘拐。果ては殺人まで。

それらの事件は、外れ街と人里との溝を絶対的なものにしてしまった。

だから、人里ではこう言われる。

外れ街の連中を絶対に中に入れるな、と。

そう言った点において、貴子は圧倒的なマイノリティなのだ。

外れ街出身の貴子が何故追い出されないかというのは、さまざまかつ複雑な事情がある。

中でも大きな点は、貴子と共に風見幽香が行動していることだろう。

貴子本人は自覚していないが、風見幽香の影響力は凄まじいものがある。

もし貴子がそれを悪用すれば、里の法を変えてしまうことだって不可能ではないかもしれない。

本人だって無意識だが薄々感じている。

自分の持つている市民権は、風見幽香によるものだ。

それも、無理矢理奪ったようなものだ。

外れ街出身の者が中にいるなど里民、中でも昔を知る者からすれば業腹どころではない。

実際、里にやってきて間もない頃は騒ぎだった。

道を歩けば石ころをぶつけられる。

家から出ることすら叶わなかった。

だがそれらの差別にも、大きな転換期は何度かあった。

人里の郷土史にも名を残すであろう、件の飢餓と疫病。

それら二つの解決に尽力した人間こそが貴子であると、里の英雄である慧音が根回ししたのだ。

また、細かい所で貴子は評判を上げている。

里の長者の息子を妖怪から守ったであつたり、花火大会の開催に大きく関わつたり。

特に効果を発揮したのは、歪みのない子供たちの意見であつた。

寺子屋で本人なりに真面目に教師をやっている貴子は、生徒からの評判も悪くない。

子供たちは貴子の話を家で愉快そうにするのだ。

それらが噛み合い、歪んだ世論は少なからず変わった。

差別も無くなりつつある。

しかし、今でも根深い悔恨を残しているのも事実である。

特に老人たちは貴子の事を疎ましく思っている。

それも、昔の事件が尾を引いているからだ。

若い衆もその例に漏れることはない。

貴子への差別こそ薄まれど、外れ街という集落自体への差別は、もはや揺るがすことができないものになっていた。

それらによつて、最も辛い思いをしているのは誰であろうか。

人里強襲事件の被害者もそうだろう。

昔の事とはいえ、今もなお爪痕は残っている。

だが悪事を働いた連中は、みな首を刎ねられている。

それに外れ街の皆がそう言った人種ではない。

むしろ、なんてことをするんだと憤る者の方が多数派であつた。

外れ街の者たちとて悪に染まりたいわけなのではない。

しかし現実は無情だ。

もはやお互いの想いは届かない。

話し合えば溶けゆく怨恨も、もう二度と癒えることはない。

そうした事情は、貴子の心の中で少なからず苦悩する部分であつた。

部落への差別によつて辛い思いをしているのは……。

あえていうのならば、それは外れ街に住まざるを得なかつた連中だ

ろう。

親が犯罪者。

例の事件の実行犯の息子だ。

借金まみれの者。

親が遺した賠償を死ぬまで払い続けるのだ。

他にも大勢、こうした境遇の者がいる。

不幸の世襲制とでも言うのだろうか。

望んでもいない、本当は人里に入り幸せに暮らしたいのに、そうできな

きない。そしてあろう事か、妖怪退治屋という死ぬための職業を選ぶしかなくなるのだ。

「私はな、慧音。外れ街なんて場所、住みたくない奴は住んじやダメだと思う。今日を生きるのに命をかけてる奴らだ。悪い奴なんていない。なのに……人里に入れないなんて、不条理だろ」

「それが……どうして妖怪退治に力を入れることになる」

「思ったんだ。私が人里に入れたのは、幽香が居たからだ。強い奴には皆逆らえない。それが多分差別の原因なんだよ。みんな、弱いんだ。そして怖いんだ。知らない奴を近寄せたくないんだらう」

「集団というのは、絆が深まるほど排他的になつてしまうからな。特に人里は……そういつた傾向は否めない」

貴子は重々しくうなづいた。

排他的ということについては、身をもって知っているからだ。

「だからさ、私は外れ街にとつての幽香にならうと思う」

「……どうということだ」

「妖怪退治屋としての名を上げる。差別を無くせるよう呼びかけもする。それで皆に知ってもらおうよ。外れ街の連中のことをさ。私が妖怪退治屋として頑張れば、それだけ発言力だつてあがる。そして言うんだ。外れ街は良いところだつて。そうすればもしかしたら、外れ街の連中を人里に入れてやれるかも知れない」

それは、絵に描いた餅といつてしまえばそれまでの淡い幻想であつた。

貴子はともかく伶俐な慧音ならば実現不可能に近いことぐらい即座に分かったことだろう。

しかし慧音は黙って俯いた。

貴子はどうしようもない人間だ。

でも、自分も一度救われた事がある。

そしてそれは自分だけじゃない。

多くの者が、貴子に救われている。

そしてあろう事か貴子は、一つの街を丸ごと救おうとしている。

貴子は本当に優しい人間であると、慧音は思った。

困っている者を放っておくことなど、絶対にできない。

人を助ける能力なんてあるわけじゃないのに、それなのに。

貴子は弱い人間だ。

自分の弱さに苦悩することだって沢山あるのに。

なのに全部助けてやろうと思えるほど、優しい人間なのだ。

そんな貴子だから、本当になし得てしまうのかもしれない。

街一つの救出を。

「私にもぜひ協力させてくれ！大それたことだが……お前になら本当に変えられると思えるんだ！」

「ああ、ありがとう」

勢い余って涙を零していた慧音。

何も考えていないような生き方の貴子が、まさかこんな考えを持っているとは。

慧音は自分にできることをしようと思った。

それは、恩返しでもあった。

固く握手を結ぶ。

両腕のない貴子だったがそこには確かに、心と心の握手があった。

慧音が「まずは体を治さないと」と言い残して帰ったあと。病室には、萃香と貴子の二人つきりとなった。

「アンタ、随分と御立派なんだねえ。よくもまあ妖怪の前で妖怪退治を頑張るだなんて吐かせたもんだよ。両腕も無くなってんのにさ」

「……お前と同じだよ。自分と同じような奴らが不幸な目に遭って
る。それを助けてやりたいってだけだ」

「へえ……だから名を上げると」

「ああ、幽香のように暴力じゃなく、もっと穏便な力で自分の意見を通
す」

「そりや殊勝なことだ。じゃあさ、一つだけ教えとくれよ」

「何だよ」

「どうして私を退治したって事は公にしないんだい？」

先程までヘラヘラと茶化すような声色だったのが、すつと低くな
る。

その表情からは、意志が読み取れない。

「天下の大妖怪を退治したって言えば、もうそれで有名人だ。鬼を退
治するってのはそういう事なんだよ」

「……それもそうだな。気づかなかったよ。でも今更言ったって嘘つ
き呼ばわりされちゃうからな。あーあ、惜しいことをした」

「……なら、これでどうだい」

そういうと、萃香は自分の角をベキツと折って貴子の足元に投げ
た。

「なっ！お前角をつ……」

「また直ぐに生えるから良いよ。それより、ほら。それを見せれば嘘
つき呼ばわりはされないだろう？」

問い詰める萃香。

疑問に思うと言うよりも、何かに気づいた上で揚げ足を取るような
口調だ。

「……ま、考えとくよ」

そう言つて貴子はゴロンと寝転がった。

まるでこれ以上萃香と話すのを嫌がるように。

意地悪とはそっぽを向かれてしまふとつまらぬモノで、興を削がれ
た萃香は暇つぶしに中庭へと出向いた。

縁側に腰掛け、綺麗に整えられた枯山水を見る。

遠くで鹿威しがカポンと小気味の良い音を立てた。

それから萃香は、足音を立てずに近づいてくる存在に気がついた。「お医者様が何の用だ」

「あら、もうバレちゃったの」

「気配を残して足音だけ消すなんて、逆に難しいだろうに」

「さあ、分からないわね。貴方だって呼吸を難しいと思った事はないでしょう？」

「この屋敷にいるとたまに息苦しさを覚えるけどね」

「貴方……なんだか貴子に似てきたわね」

永琳が訝しげな顔をする。

しかし萃香は思わぬ講評に破顔してしまった。

「私があの子にかい!? あっはっは！こりや傑作だよ！」

「それとも元から似てたのかしらね」

「どこが似てるもんか。私と貴子じゃまるで大違いさ。それも全く、格が違うよ」

「あら、負けたのにそんな事言えるの？」

「いやいや、そうじゃない」

萃香はすこしニヒルな微笑みを浮かべて空につぶやいた。

「私は……貴子ほど強くないよ」

「……どうしてかしら？」

「私なら鬼退治なんて功績、たとえ嘘でも人に広めるだろうからね」

貴子の望みについても、貴子と萃香の関係性についても特段何かを聞かされたわけではない。

しかし永琳はやはり天才、たった一言で萃香の言わんとすることを理解した。

「己の夢に絶好の手柄を広めなかった……と。確かに貴子らしいと言えはそうかも知らないけど、どうしてそれが強さに繋がるの？」

「喧嘩が強いとか、そういう次元じゃないのさ。そもそもアイツは人間を救う為に頑張ると言った。それも真実だろうね」

「しかし今回の手柄は立ってない」と

「ああそうだ。ほんと呆れた奴だよ……アイツは分かってたんだろかね。妖怪の頂点たる鬼が人間に負けたとあらば、下の妖怪らは混乱し

不安になると」

「妖怪にも上下があるの？」

「ああ、結局私らも人間と変わらないもんでね。強い奴に従わなきゃおまんまも食えないのさ」

「そして強者が堕ちたら……仇討ちか暴動か。何も起きないわけはない……と」

「ああ。そうだったら打撃を受けるのは我々妖怪陣営さ。だから貴子は情報を伏せたんだ。人間を救うなんて吐かしておいてね。アイツはとんでもない奴だよ」

民衆の要らぬ混乱を招かぬよう情報を制限すると言うのは良くある手法だ。

しかしそれは集団を重んじる人間だからこそであり、まして妖怪にも集団性があるなど教科書には載っていない。

そしてそのトップが如何に大事であるかも世間は理解しない。

「結局のところ、貴子は人間を守った」

「ええ、そうね」

「でもそれだけじゃない。アイツは……妖怪を守ったんだ」

萃香は自嘲するようにそう言った。

永琳も言葉こそなけれど納得したようだった。

貴子は決して萃香のことなど口にはしない。

たとえそれを口にすれば人間を救う事ができたとしても、数多の妖怪を見捨てる事など絶対にしない。

しがない妖怪退治屋は、妖怪すらも守ってしまうのだ。

ずいぶん矛盾した話だと萃香は小さく笑った。

それを見て永琳はふと思いついたように問いかけた。

「貴方も守られたの？」

「こんな所に連れてこられてる時点でそうだろうね。ここに私を連れてきたのはアイツだろう？……いや、両腕が無いアイツには無理か……となると風見か？」

「いいえ、貴子よ」

「ああ？貴子がどうやって私をここまで運ぶんだよ」

呆れたような笑いを吐き捨て永琳は返した。

「知らなかったのね。貴方を縄で括って、その縄を食いしばって引きずってきたのよ」

「……そんな馬鹿な」

「ええ、貴子は筋金入りの馬鹿なもの」

溜息を吐くように笑って、それにつられて萃香も笑った。

——要介護の妖怪退治屋

柔らかい日差しが差し込む昼下がり。

永遠亭には貴子が一人。

一体なんの偶然であろうか。

鈴仙は里に薬を売りに。

永琳は輝夜を連れて何処かへ外出に。

暇そうなてゐですら、今日は部下のうさぎ達を引き連れてどこかへ出かけた。

ほぼ全快の萃香は永遠亭を抜け出してしまった。

貴子もそうすればよかったのだろうが、迷いの竹林は少なからず妖怪もいる。

普段ならまだしも、両腕のない貴子には手に余る。

腕がないのに手に余るとはこれ如何にと言いたくなるがとにかく

貴子は永遠亭から出られない。

そんなわけで完全な一人つきり。

貴子も最初こそ静かでせいせいすると思っていたが、その幻想もすぐに覚めた。

何せ三体満足であって、何をするにも不便でならない。

ベッドから起き上がり、外に向かおうとする。

ここで躓く。

ドアノブが捻れないのだ。

まさか蹴破っていくわけにもいかぬので、不恰好ながら脚を使ってなんとか開けた。

どの部屋も和風で入り口には障子のくせに、なぜか病室だけはドア

ノブ付きなのだから、永遠亭は間が悪い。

苦戦しながらも部屋を脱出し、大して広くもない永遠亭を歩く。もう何度も厄介になつて勝手知つたる永遠亭を、それでも歩く。他にやる事がないのだ。

いつもなら睫毛なりなんなりを抜いてそれで文字でも書いてただらう。

腕がないのだから、そんなつまらないことも出来ないのだ。

そう考えるとずいぶんといろいろこの両腕には働いてもらつていたのだなど、貴子は少ししんみりした。

縁側に坐り、寂しく秋の空を眺める。

少し肌寒い。

いつも静かだが、一人だと一層静かなところだ。

音がなさすぎて耳中の血管が脈打つ音すら聞こえてくる。

さてタバコでも吸おうと思つて、それから気づいた。

人がいないと吸えない。

喫煙者には日陰に隠れて誰にも副流煙を当てぬという心がけが必要だが、貴子については別だ。

一人じゃ満足に紫煙も吹かせない。

さてどうしようかと考える。

まず鈴仙が胸ポケットに入れた煙草の箱をどうやって出せば良いのだ。

もどかしくてしようがない。

それを紛らわす嗜好品が今は原因になっている。

これでは本末転倒ではないか。

それは貴子も重々承知している。

しかしそんなことでやめられるなら、この世に喫煙者はいないだらう。

そして、中毒者の執念とは恐ろしいものだ。

臆面も体裁もかなぐり捨てて、つまり何をしてでもタバコを吸う。

貴子はまず上着を脱いだ。

もとより腕も通さず羽織つていただけだから、これはすんなりと行

けた。

それから、足でその上着を持ち上げた。

指先に力を込め、何度も何度も上着を振る。

ぼろっとポケットから箱は出てきた。

しかしここでまた別の問題が起きた。

貴子はソフト党なのだが、タバコをわざわざ買ってきてくれるのは人里に行く機会のある鈴仙で、彼女は箱入りを買うのだ。

おそらく今回もボックスを買ってきてくれるだろう。

それどころではない、ともかく今は箱の蓋を開けなくてはならない。

貴子はタバコの箱を啜えた。

そのまま蓋の部分を柱の角に当てる。

振り向き、見事に箱は空いた。

そのまま何本か床に落とす。

ここまで来るともはや恐怖すら覚える。

貴子は床に顔を近づけ、飴玉探しのように器用に床から一本啜えた。

口元にタバコがあると、それだけで落ち着く。

何も成分は摂取していないのにも関わらずだ。

つまりタバコは貴子にとって嗜好品を超え、心理的な支柱なのだ。

しかし、吸うことに意識を取られすぎて簡単な事を見落としてしまった。

火がつけられない。

マッチを擦れない。

こんな下らない見落としで、ここまでの苦労は全部水泡に帰すのか。

絶望の予感がする。これから心の奥底まで深い曇天に満たされるであろうと言う予感。それはある意味、絶望よりも恐ろしい。

その時、誰かが貴子のポケットを無作法に、しかし繊細に弄った。

マッチに火がつけられ、貴子の口元へと運ばれる。

貴子は煙を吸い込み、勢いよく吐き出した。

それから現れた人物に仰天した。

「ありがとう……つて幽香!？」

「さっきの動き、面白かったわよ」

「お前なあ、見てたんなら助けてくれよ」

「そもそも吸わなかったら良いじゃない」

「これくらいしかやる事が無いんだよ」

風見幽香は貴子の全身をざっと見て、それから鼻で笑った。

「……見れば見るほど無惨ね」

「まあ名誉の負傷だな」

「そんな事を言ってるから無様な姿になるのよ」

「この傷は無様ななんかじゃないんだよ」

「様が有るなら、酷い有様つてどこかしら?」

「……ていうか、何しにきたんだよ」

「あのヤブ医者がちゃんと仕事をしてるのか監視しにきたのよ。案の定職務放棄してるじゃない」

「ちやんと今日の分の治療は済んでるよ」

「だったら安静にしてなさい。芋虫みたいに這って動くのは趣味かしら?」

「外傷は大概塞がったからな。しかし参った。傷跡は消えてくれないらしい」

そう言いながら貴子は脚を幽香に見せた。

そこには火傷痕のようなアザが、大きく残っていた。

別に永琳の腕が悪いわけではない。

これは無茶をする貴子への戒めのようなものとしてわざと残したのだ。

実際、容易に隠せるところ以外に傷跡は残っていない。

「貴方みたいな虫ケラには満身創痍くらいが似合ってるわよ」

「よせよせ照れる」

「それで、ヤブ医者どもはどこに行ったのかしら?」

「みんな出かけちゃった。日暮れまでは誰も帰ってこないだろうな」

「そう……それじゃ、私たちも行くわよ」

「あ？何処にだよ」

「どこって、家に帰るのよ」

「あのなあ……そりゃ帰れるなら帰りたいが、完治まではここを離れられないんだよ」

「日暮れまでにここへ戻って来れば良いのよ」

「……珍しく小狡いことを言うんだな」

「さあさつさと下履きを履いてきなさい」

「……まあお前と一緒にならまさか誰にも襲われんだろうしな。こつそりちよこつと帰るか」

そう言つて貴子はタバコの吸い殻をぷつと吐き捨て、下駄を履きに玄関へと向かった。

火種のついた吸い殻を、幽香は何も言わず足で消した。

馬鹿二人、阿吽の呼吸をくだらぬことに費やすのであった。

久しぶりに人里に入る。

貴子は久方ぶりの喧騒を身体中で楽しんだ。

が、しばらくすると辺りが妙に静まった事に気づいた。

何処からか囁くような声が聞こえる。

(おい……あの二人はどっか行つたんじゃ無かつたのか、特に人間の方。死んでなかつたのか)

どうやら里の民は思わぬ貴子の帰宅にたじろいでいる様子だった。

貴子はそんな下声など慣れっこなのでシカトして家に向かい下駄を鳴らす。

幽香もそれに続いた。

貴子と違うのは、ひそひそと論っていた者を一撃殴つたことだけだ。

これだから悪名は絶えない。

さて久しぶりの我が家。

建て付けの悪い戸を軋ませながら開けると、もう随分の間留守にしていたにもかかわらず優しく出迎えてくれる、なにか『空気』のよう

なものがあつた。

入院中には決して感じられぬ雰囲気。

物の位置とか、壁の模様とか、全部が無意識に懐かしかった。

「まだ、ただいまとは言えないな」

そう言いながら居間に座り込む。

不意に違和感。

何故か、妙に居心地が良くない。

まるで他所の家が上がっているような。

もつというつと、幽香の家にいる気分。

「お茶でも淹れるわね」

いつになく親切な幽香。

その原動力が優しさであるはずなどない。

貴子には両腕がないのだから。

「はいどうぞ」

「……うちにティーカップなんざあつたか？」

「今ここにありと云う事実だけでは不満？」

「いや、気になつただけだが……」

そう言いつつも貴子は、目の前に差し出されたティーカップに見覚えがあつてしよつがなかつた。

どうにも向日葵畑にある幽香の家に置いてあつたような気がするのだ。

「……さつさと飲みなさい。冷めるわよ」

「わざとなのか？ここにきて意地悪発動か？」

「飲まないなら殺すわよ」

「命の重みを知れ」

言い放つ貴子だが、幽香に逆らえるわけもなく犬のように顔をカッブへと近づけて飲むハメになつた。

優しくない悪魔にほとほと嫌気がさした。

「その両腕はいつになったら治るのよ」

「そんなの私が知りたいよ」

「いつそ百本くらいつけてもらつたらどうかしら？」

「栗みたいで持て余すだろ」

「いい考えだと思っただけけど」

「だとしたらアホグラミー賞モノだ」

こんな軽妙なやり取りも随分と久しぶりだ。

いつになく弾む会話が一層空気を親密にさせた。

「あのヤブ医者、腕くらいさっさと治せないのかしら」

「口の怪我じゃあるまいに、治るだけで儲けものだろ」

「私ならすぐ治せるわよ」

「なら治してくれよ」

「はい」

幽香は特段ホラを吹くような素振りも見せず、ただ一度指を弾き鳴らした。

その瞬間、部屋に花びらが舞い散る。

それから強烈な閃光。

貴子は目を瞬いた。

「うわっ！」

数秒で光は収まり、貴子はゆっくりと目を開けた。

そこには静かにカップを傾ける幽香がいた。

「いきなりなんだよ！びっくりするだろ！」

貴子は怒鳴りながら幽香を指さした。

「……え？」

目を疑うには眼前の光景はリアルで、なにより疑いたくもなかった。

確かに自分の体から、腕が二本生えている。

「な、治ってる……」

「だから言ったでしょう。すぐ治せるって」

「けど、なんで……」

信じられぬのも無理はない。

永琳が天才であることはお得意様の貴子が良く知っている。

その天才がコツコツ治していた両腕を、こうも気楽に治されてはおかしいだろう。

「簡単な話よ」

「え？」

「貴方に私の治癒力を分けてあげたのよ。感謝なさい」

「……どう言うことだ」

「どこまでも鈍いわね。要するに私のおかげということよ」

「要約しすぎだ……けど、ありがとう」

「ええ、感謝なさい。まあ弱虫一匹で鬼を倒したんだから。今回は褒めておいてあげるわ」

「辛勝とすら言えない粗末な戦いだっただけだな」

話を聞き納得した貴子は、何度も確かめるように両腕を握っては開く。

不意に幽香が欠伸をした。

「ふあああ……疲れたわ」

「眠いのか？眠いなら寝ろよ」

悠々自適に規則正しく生活している幽香が昼から眠気に襲われることなどあり得ない。

今回は貴子の両腕を治すのに自身の治癒力を分け与えたため、すこし疲労が溜まったのだ。

「少し眠るわ」

「ああ、おやすみ」

「何を言っているの？」

「え？」

「少し眠るわよ」

そう言つて幽香は貴子の襟を掴む。

怪力にされるがまま、貴子は布団へと連れ込まれた。

「幽香？子供ならともかく、布団一枚で大人二人つてのは狭いぞ？」

「……………」

返事がない。

見ると、すでに幽香は眠っていた。

その日の幽香は、貴子から見ても少し変だった。

妙に優しいし、やたらと甘えたような行動を取るし。

狭い布団の中で貴子は何故だろうかと考えて、それから眠りに落ちた。

「貴子！いるのはわかってるのよ！出てきなさい！」

軋みのひどい戸を乱暴に叩く音。

目覚めた貴子は寝ぼけた頭で誰だろうかと考えた。

外を見ると日が暮れている。

「入るわよ！」

この声は……永琳！

そうだ、自分は今病室から抜け出している身なのだ。

「貴子っ……て、何してるの？」

永琳の目には、寒くもない日に一枚の布団で寝ている貴子と幽香が映った。

「ごめんなさい……邪魔したわね」

「違う！これは成り行きだ！」

「成り行きでそんなこと……貴方って人はっ！」

「ちがーう！」

声を張り上げているにも関わらず、幽香は未だに眠りこけていた。

夜眠れなくならないかが心配である。

「というか、腕治ってるじゃない！」

「ん？そうだ、幽香が治してくれたんだよ」

貴子の発言に、永琳は顔を青ざめた。

「何してるの！いつそれは生えたのよ！」

「いつって……昼くらいだけど」

「……やられたわ」

あまりの剣幕に貴子は不安が抑えられなかった。

一体今度は何に巻き込まれたというのだろうか。

「何から説明すれば良いか……試しにこれを持ってみなさい」

そう言いながら永琳は貴子にタバコの箱を投げ渡した。

何のことかはわからないがとりあえず優しく受け止めるようにそ

れを掴む。

いや、掴もうとした。

その時、一瞬にしてその箱は握りつぶされた。

「ああ!?何だこれ!」

「その腕……どうせ幽香の治癒力で治したんでしょう」

「そ、そうだけど……」

「そのせいで、幽香並の怪力が貴方にも出たのよ」

「な、なんだと!」

突飛な発言に思えたが、動かぬ証拠をたった今体験したのだから疑いようななどない。

この両腕には幽香の力が宿っている……。

鬼退治で馬鹿力を体験している貴子にとってそれは不安要素でしかなかった。

「生えてすぐなら簡単に取れたんだけど……これだけ時間がたってしまえばもう完全に同化しているわ。その腕はもう貴方のものなのよ。完治して良かったわね」

嫌味たっぷり吐き捨てられて、貴子は泣きたい思いになった。

情けなく懇願する。

「痛みは我慢するからこの腕切り落としても元の腕に戻してくれ!」

「無理よ」

「なんでだ!」

「たとえば腕を切り落としても、生えてくるのはその腕よ。もう貴方は元の腕には戻れないの」

「そ、そんな……」

永琳の発言は貴子にとって死刑宣告にも思えた。

何せ一生、自分は風見幽香の呪縛から逃れられないことがたった今決定したのだから。

「幽香にしてやられたわね。貴方に腕を生やして、勘づかれないよう同化するまで眠りにつく。計算の上だったのよ」

「そんな馬鹿な……」

頭を掻きむしる手が、今後の未来を真っ暗にしているのだから皮肉な話である。

風見幽香はやはり悪魔なのであった。
与えられたものには代償がつきものなのである。

——とかくに恐ろしき

例えばの話だが、目の前に母親と恋人が溺れていて、どちらかしか助けられない場合どちらを助けるべきか。

人によつて答えは別れるだろうが、私は多分どちらも助けない。

何故なら命の選択をできるほど賢くないし、多分どっちを助けても後悔は耐えぬだろうから。

それに仮に私が溺れていて、誰かを犠牲にしてまで助けられたとしても私は一生己を恨んでしまうだろう。

だから私はどちらも助けない。

あるいは、こう考える。

その場に三人いて二人しか助からないと。

もしそうなら、私は死を選ぶ。

これはどちらを選ぶかという問題の論点を、誰が死ぬべきかにすり替えただけだが、私の命で救われる命があるなら、これ以上の喜びはない。

「馬鹿者！」

問題は、心の中でそう思っただけでぶん殴ってくる胡散臭い、あるいは説教くさい仙人様とやらが私の目の前に座っていることだ。

華扇は私の家へ乗り込んできたかと思うと、いきなり姑のようにネチネチ説教を始めた。

「どうせ貴方ならそう答えると思いましたよ。期待通り……いや、不安通りです」

「異変はばっちり解決した。何が不満なんだよ」

「逞しい両腕まで手に入れられて良かったですね」

両腕を失ったことを突くように華扇は嫌味っぽくそう言った。

露骨に言われては流石の私も黙っていられない。

「あの馬鹿力で殴れっつのはお前がけしかけたんだぞ」

「私は初劇を当てると忠告したはずです。それなのに貴方は不意打ちすらしなかった!」

「卑劣に勝つても意味がないだろうが!それに一撃ぶち当てても効かなかったぞ!」

「そんなはずはありません。その時貴方は恐らく何度も無駄撃ちをしてたのでしよう」

「……確かにしてたけど」

「大方乱射で威力が落ちていた。萃香は心理戦も強いのです。おそらく弱っていた貴方の心を折るために、一撃をあえて受け止めた。ダメージは少なからず入っていたはずです」

「なんだそれ」

「要するに痩せ我慢してたんですよ。貴方が正々堂々を望んだように、萃香は完膚なき勝利を望んだ」

「……嫌な野郎だ」

私は苛立ちを机にぶつけようとしたが、両腕は幽香のせいで怪力乱心を宿しているので抑え込んだ。

机の代わりに私の足がダメージを受けたが。

その様子を見ていた華扇が訝しげな顔をする。

「貴方はどうしてそこまで自分を傷つけるのですか」

「天秤にかけてるだけだ。価値を比べて」

「非常に歪んでます」

「何がだよ」

「貴方はもつと自分を大切にすべきです」

「違うな、自分は粗末に扱うべきだ。大切なモノを守れなくなる」

「それが詭弁である事くらい貴方ならわかるでしょう」

「詭弁も方便だ」

「詭弁は詭弁です。そう、貴方は少し破滅を望みすぎる」

「その言い方は何処ぞの閻魔か?」

「私のオリジナルです」

「嘘つけ」

「うるさい！」

バシンと頭を殴られる。

道理も筋も通っていないとことん理不尽な仕打ちだ。

これには流石の私もカチンときた。

「叩くなよ！」

「ええ怒りなさい！泣きなさい！笑いなさい！」

「あ!？」

「貴方は生きること、まるで特別なことのように考えすぎている！」

華扇の弁舌は一層加速し、口先から火が出そうな勢いだった。

「自分の生を誰かの礎にしなくてはならないという妄執に囚われ、しかし世間との折り合いをつけられぬ自分に絶望している！だから死という安直な道に誘惑されるのです！」

「何だよ急に！死にたいヤツに生きろってのが一番無責任なんだぞ！」

「そりゃあそうでしょう！生きることは義務ですから！義務を放棄することの方がよっぽど無責任でしょう！」

「義務だあ!?!幸せに生きる権利を寄越してから義務でも責任でも好きにしやがれ！」

「明日を幸せに生きたくとも生きられなかった人が大勢いる！だから我々は日々感謝し、生きなくてはならないのです！」

「だから私が死んで可哀想なそいつに素敵な明日をプレゼントしてやるって言うてんだよ。それが私のポリシーだ」

「そのポリシーが間違っていると云っているのです！良いですか？助けるということは自分を無碍に扱うことではないのです！」

「粗末にでもしなきゃ守れないもんが多すぎるだろ」

「違う！いい加減貴方はこう考えるべきです！川に母と恋人、両方が溺れていてそのどちらかしか救えないのならば、そんなもん知るか！両方助けて自分も生きると！」

「そんなの無茶苦茶だろうが！」

「無茶苦茶で結構！強者の論理で大いに結構！貴方は救うべき命の勘定をいつも間違えている。命に貴賤などない！それは、貴方の命とて

同様です！」

「だあ！簡単にいうなよ！それができないこつちの苦労も知らないで！」

「誰かを助けると言うことは華麗で美しいことではありません。もつと地道で目立たぬ陰気なものなのです！」

「だから、さつきから何が言いたいんだよ！」

華扇は机の上に置いてあつたお茶を軽く口に含んで、抜刀するように鋭く言い放つた。

「貴方は、修羅の道を選んだのです」

「何がだ」

「因縁の業火に焼かれるでしょう。助けると言うことはそういうことでもあります」

「あ？」

「人間も妖怪も助けると言うことは、双方から敵視される事の裏返し。重い責任からは逃げられません。そこまでして……貴方は何処を指しているのですか？」

「……私が何処を指しているか、だと？」

「ええ。明るみにこそ出なくても貴方は既に四面楚歌です。味方も敵もない。そこには無限地獄がただ待っている」

「……そんな小難しい事は考えてない。私はただ、自分が世話になつた奴らに恩返ししたかっただけだ。妖怪だとか人間だとか、そんなじゃない。それともう一つ」

それはあまりにも単純で愚かしく、そして貴子らしい答えであつた。

とどのつまりは……。

「何も考えてなかった……ただひたすら、怒りが私を支配してたような気がした。ムカついたから殴つた。それだけだ」

無責任を通り越した、無思慮な答えを聴き華扇は眉間に走る痛みに悶えた。

今に限つた話ではない、昔から貴子はどれほど冷静ぶつていようが、その場の感情や勢いに任せて見切り発車を決め込む癖がある。

その悪癖のツケはもう何度も身を焦がしているはずなのに。
どうしてこうも命を危ぶむ事に躊躇が無いのか。

「いつか、死にますよ」

「まあ……そうだろうな。多分、そう遠くない未来に」

「死んだら元も子もないでしょう！この世は兎角に命があればこそです！」

「……その理屈はわかる。しかしな、それがそうでもないんだよ」

「何がですか？」

「人生つてのは文字通り、生きてかなきゃならないものだ。普通、死が途中経過にあるわけがない。死ぬことは結末でしかない」

何を言い出すか分からない貴子の飄々とした語りに、華扇は無言で先を促した。

「しかしどういう因果か……生きていると何度か、ここで死ななきやいつ死ぬんだって言う時がある。自分の命が最も燃え盛るその瞬間が」

「そんなモノはないと思いますが」

「いや、確かにあるんだ。けど普通は……毎日平和に、安穩に暮らしている人間にはそれを感じ取れない。でもそれでいい。気づかなくていい」

自嘲するように笑った貴子の目は、ひたすらに真っ直ぐであった。その瞳の真意を問うてみねば、貴子の言わんとする事は分からない。

「生き死にの日々を過ごしてたら分かる。自分が死ぬべき時、命の使い所が。信念を貫くための一瞬を感じ取れるんだ」

「貴方には、あったのですか。その瞬間が」

「何度もあった。例えば紅魔館の連中が異変を起こした時。色々あってフランって言う吸血鬼が暴走した。その瞬間に感じたんだよ。『ここで死ぬ』って」

「……どうして、貴方はそう感じたんですか」

貴子は思案するような表情を浮かべた。

心中に答えはあるのだが、右脳に感覚としてあるそれを左脳へ伝え

言語化することが難しい。

それほどまでに独特の感覚が貴子にあった。

「詳しい理由は分からないが、多分子供が……いや、フランは私よりだいぶ年上なんだけど、そう言うんじゃない子供が苦しんでいるのが嫌だった。あの場面、博麗の巫女やらなんやらで大騒ぎだったんだ。あのまま行つて……平和に済んだだろうか。恐らくは無理、それどころか死人が出てもおかしくなかった。誰にせよ子供にそんな思いはさせたくなかった」

「……それは矛盾してますよ」

「え？」

「死人が出そうだから貴方は頑張った、それはわかります。でも、その結果……貴方は一度死んだっ！」

「……それもそうだな。けどまあ、思えばあそこで死んだ事が結構な転換期。私の運命を変えた気がする」

「それは結果論であつて……」

「結果論で十分だ。あの世で色んな奴らに会えたんだから。癖のある奴らばかりだったけど……いい奴らだと私は思う」

「どうでしょうね、少なくとも私は苦手ですけど」

「まあ要するに死んだ事に後悔はなかったって事だ」

「そうですか……やっぱり結果論な気がしますけど」

「幽々子を助けて助けられて、私は生き返った訳だが……再生してすぐさま命の危機に会った。幽香に出会っちゃった」

「そうですね……正直なぜ貴方が殺されなかったのか」

「そこからはもう色々……本当に色々あつて、鬼退治をするに至った。その一連に一片の悔いもない。私は死へと飛び込むことが必要だったと思ってる」

「そうですか……」

「とまあ、長々語つたがつまりはそう言う事だ」

「ええ、全く納得行きません」

「なんでだよ！」

「当たり前でしょうが！まるで詭弁、死ぬことを正当化する事など許

されるわけがないでしょう！なぜ貴方は普通に生きられないのですか!?!」

貴子は緩慢にタバコへ火をつけて、溜息のような笑いをこぼした。「真つ当な奴なら、普通に生きてるだけで価値があるだろうな。だが……私みたいな怠惰で不健全な人間は、生きてるだけじゃ何の意味もないんだよ」

「そんなことは……」

「そんな事ある。私たちが価値を持って生きるには……もうそれは、命を賭けるしかない。生きていて一度あるかないかのたった一瞬を見逃さず、その一瞬で命を燃やし切る。その炎こそが私たちの生きる意味なんだ」

華扇からすれば、貴子の言い分は詭弁でしか無かった。

だがそれを問い詰めることはできなかった。

何故なら貴子が、涙を流していたから。

「どうして……いつもこうなんだろうな」

喉から苦しみが漏れ出してくる。

「私は静かに生きたい……死にたくなんてない。なのに……なのにつ！真つ当に生きられないんだっ……!」

「貴方はどうしてそこまでして……」

「何が私に死ねって言ってるみたいだ……お前みたいな奴は死んでやっとな一人前だと」

「貴子……」

嗚咽、歔歔、悲涙。

貴子は悲しかった。

己が生因果が。

普通に生きられない、歪んだ運命の歯車が。

語りにつられて心の歯止めが効かなくなった。

「ちくしょうっ……ちくしょうっ!」

華扇は静かに頷いた。

「貴子、貴方は確かにダメダメな人間です。本当にろくでもない。でも……真つ当に生きてきた」

「……え？」

「破滅的な論理とはいえ、事実として多くの者を救ってきた。見捨てるのが容易だったのにもかかわらず。貴方は確かにろくでなしです。しかし……ひとでなしにならなかつた。信念を貫いてきた。その生き様が真つ当でなくて何ですか！」

気がつけば華扇も泣いていた。

理由もわからぬ涙がとめどなく溢れた。

貴子の境遇が何より辛く、そして苦しく。

「平の道を持たぬ、何と業の深い人間か……」

「ろくでもない人生だよっ！くそっ！」

貴子を取り巻く奇妙な運命。

その始まりは借金返済。

何度も何度も死にかけて。

面倒ごとに首突っ込んで。

悪魔が地獄で見せ物にして笑っているのかもしれない。

ろくでなしのこの女を。

あるいは、ろくでもないこの世界は望んでいるのかもしれない。

信念の業火に身を焦がす、真つ直ぐなこの女を。

つくづくろくでなしだが、ひとでなしにはなれない。

しかしそれが人間だろう。

輝く一瞬も、ちよつと一息つく毎日も、全部ひっくるめて生きる意味なのだ。

だから貴子はこれからも命を張りつづけるし、たばこを吸い続ける。

ほんの一息こそが命なのだ。

だから我々はひといきと書いて、人生と読むのだ。

ろくでもないこの世界で、人は生き続けるのだ。

それが人間なのだから。

ろくでなし東方 了